ガイドブック

サンクト・ペテルブルグ

歴史

建築

美術館

地図

ホテル

レストラン

1020枚
のカラーイラスト

読者の好奇心を満たし、最も面白いものを逃さない—これは、観光ガイドブックというジャンルの創始者カール・ベッケル（1801－1859）時代からの全てのガイドブックの課題だ。

サンクト・ペテルブルグは科学・産業が発達した世界の大都市の一つであり、同時に数多くの歴史的建築物やモニュメント像が立ち並ぶ巨大な芸術遺産でもある。

本書の序章

地理・歴史情報を基に町の全体像を紹介しています。

ペテルブルグ市内

本書で最も多くページ数を割いているのは、ペテルブルグ市内の観光名所です。ペテルブルグの各地区を順番に追い、特にネフスキー大通りについて詳しく紹介しています。本書には大博物館（エルミタージュ、ロシア美術館）の館内地図も付いています。

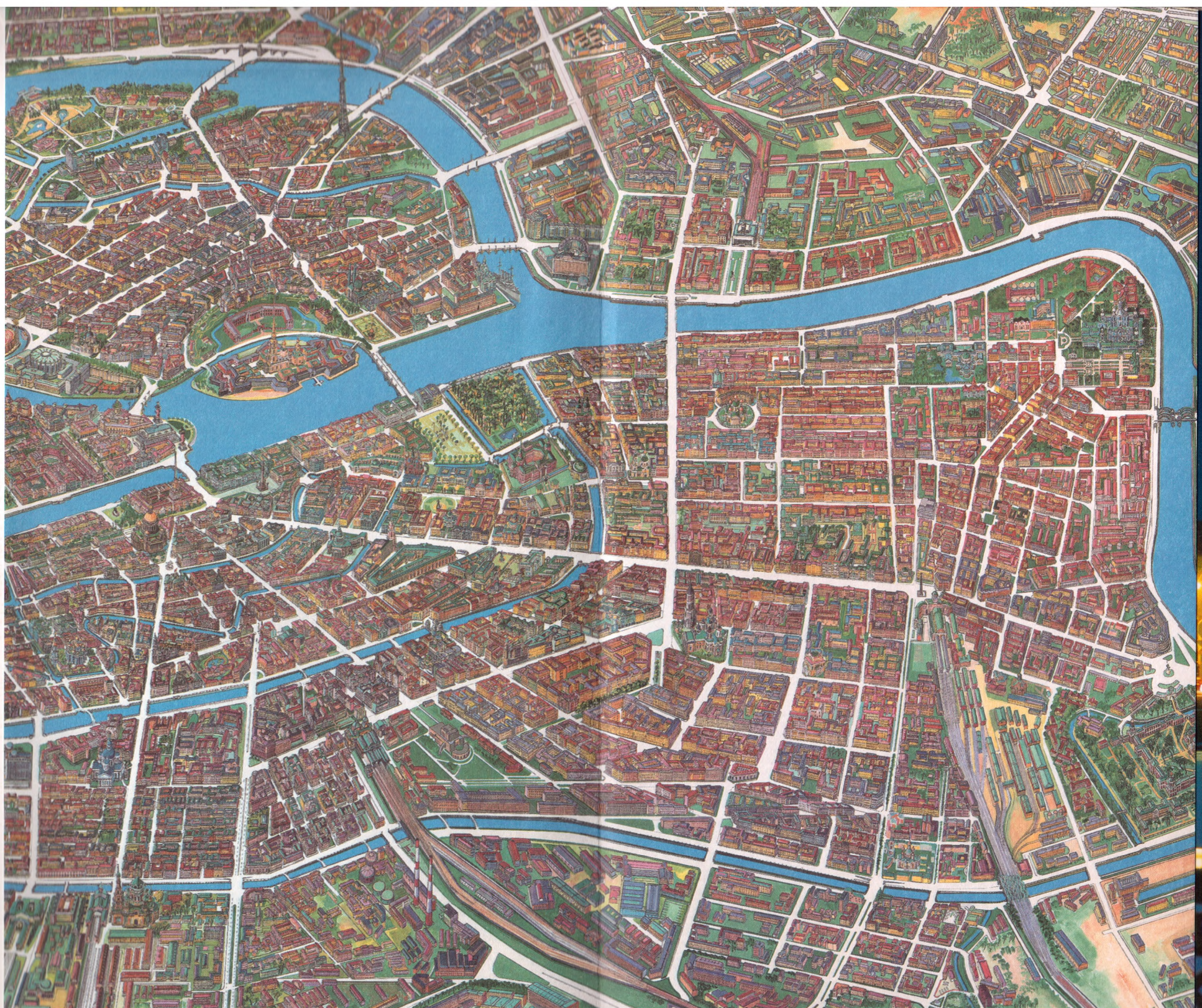
ペテルブルグ郊外

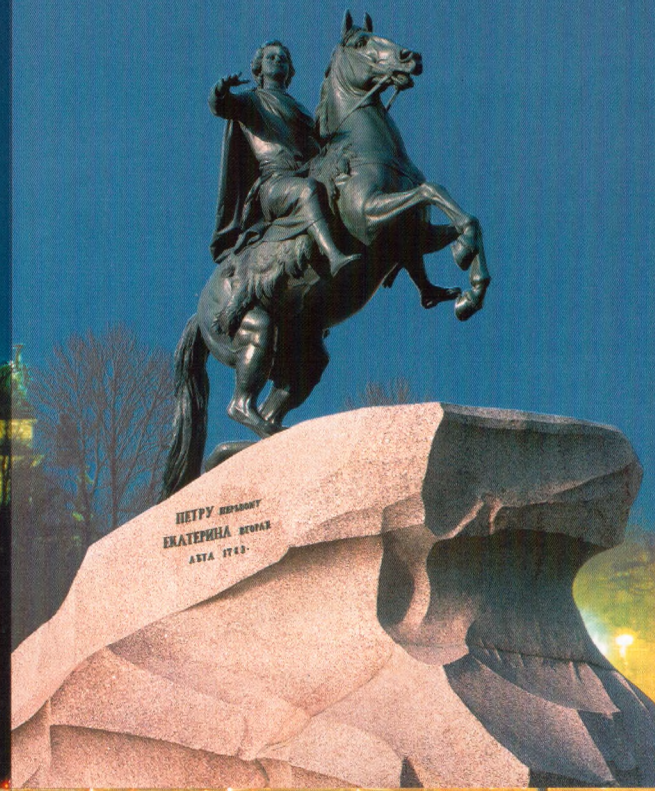
有名な皇帝の郊外離宮、ペテルゴフ、ツァールスコエ・セロー、パヴロフスク、ガッチナ、オラニエンバウムも別に章を設け、豊富な写真、イラスト、地図と共に紹介してあります。

ルーシ時代の古都市

ペテルブルグはロシアの至宝たる古都市への正面玄関です。ペテルブルグからわずか数時間のところに北ヨーロッパの古代文化の中心地（ラドガ、ノヴゴロド、プスコーフ）があり、これに特別な章を設けてあります。

巻末

役に立つおすすめ情報（お食事処、ホテル、観光名所までの行き方等）が記載されています。

サンクト・ペテルブルグ

ガイドブック

サンクト・ペテルブルグ
ПЕТРУ первому
ЕКАТЕРИНА вторая
ガイドブック
Яркий город (ヤルキー・ゴーラド)
サンクト・ペテルブルグ, 2006

発行人：V.A.スースロフ
執筆：T.E. ロバノワ
翻訳：河上ひとみ

製版：A.V.ロバノフ

責任編集者：N.A.モローゾワ

翻訳：河上ひとみ

写真：V.A. アンフェロフ, C.A. アレクセーエフ, V.M. バラノフスキー
L.B. ボグダーノフ, S.A. ボゴミャーコ, V.V. ヴァゾーフスキー
V.A. ラヴィドフ, P.S. デミードフ, V.Y. デニーソフ, V.F. ドロホフ
A.A. ザハルチェンコ, A.I. カシニツキーS.A. ザハルチェンコ
V.P. メーリニコフ, A.S. ペトロシャン, N.N. ラフマーノフ
V.I. サーヴィク, E.F. シニャーヴェル, G.P. スカチコフ
O.V. トルブスキー, V.S. テレベーニン, L.G. ヘイフェツ
G.S. シャブロフスキー

アクソノメトリック図制作：A.V. スミルノフ, M.P. フョードロフ

市内・郊外地図制作：A.V. ロバノフ

表紙デザイン：A.V. ロジオノフ

校正：L.V. デニソワ

色彩修正：L.M. ボグダーノワ, I.V. ゼゼゴワ, T.V. チェルヌィシェンコ

テクニカル・ディレクター：P.N. クラコフスキー

© T.E. ロバノワ, 本文, 2006, サンクト・ペテルブルグ
© 河上ひとみ, 翻訳

© V.A. アンフェロフ, C.A. アレクセーエフ, V.M. バラノフスキー
L.B. ボグダーノフ, S.A. ボゴミャーコ, V.V. ヴァゾーフスキー
V.A. ラヴィドフ, P.S. デミードフ, V.Y. デニーソフ, V.F. ドロホフ
A.A. ザハルチェンコ, A.I. カシニツキーS.A. ザハルチェンコ
V.P. メーリニコフ, A.S. ペトロシャン, N.N. ラフマーノフ
V.I. サーヴィク, E.F. シニャーヴェル, G.P.スカチコフ
O.V. トルブスキー, V.S. テレベーニン, L.G. ヘイフェツ
G.S. シャブロフスキー, 写真, 2006

© A.V.ロバノフ, デザイン・製版, 2006, サンクト・ペテルブルグ

© A.V.ロバノフ, 市内地図・郊外図, 2006

© A.V.ロジオノフ, 表紙デザイン, 2006

© A.V.スミルノフ, 市内, ミハイル宮殿（ロシア美術館）,
エカチェリーナ宮殿（ツァールスコエ・セロー）の
アクソノメトリック図, 2006, サンクト・ペテルブルグ

© M.P.フョードロフ, 国立エルミタージュ,
イサーク聖堂建物のアクソノメトリック図,
2006, サンクト・ペテルブルグ

© 出版社　Яркий Город（ヤルキー・ゴーラド）
サンクト・ペテルブルグ, 2006

本書記載の情報（電話番号、住所等）は本書出版当時のものです。
当社はその後の内容の変更に責任が持てないことを、あらかじめお断りしておきます。

ISBN 5-9663-0031-3

表紙写真：

P. 12-13
フョードル・アレクセーエフの絵
「海軍省と宮殿川岸通りの様子」
の細部
1810年代（国立ロシア美術館所蔵）

P. 26-27
銀行橋から見る
グリボエードフ運河岸の眺め

P. 162-163
ペテルゴフ. 大滝（カスカード）の上
から見る噴水並木の眺め

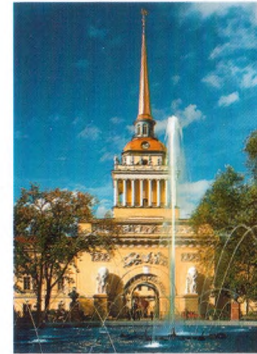
P. 224-225
モスクワ・クレムリン

P. 284-285
カザン聖堂の列柱から見る
ネフスキー大通りと
グリボエードフ運河の眺め

本書におけるロシア語の日本語表記は、原則的に綴りに即したカタカナ表記と
していますが、読みやすさを重視し、部分的に発音に即しているところもあります。

目次

サンクト・ペテルブルグの見所

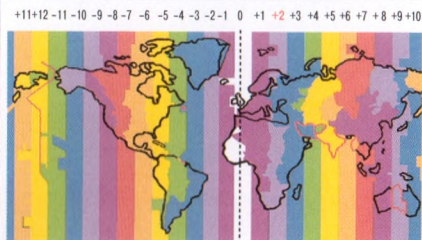
エルミタージュ ◆ ネフスキー大通り ◆ カザン聖堂

海軍省 ◆ ペトロパヴロフスカヤ要塞

イサーク聖堂 ◆ スパース・ナ・クラヴィー

郊外の宮殿・公園アンサンブル

地理的位置と気候

+11 +12 -11 -10 -9 -8 -7 -6 -5 -4 -3 -2 -1 0 +1 +2 +3 +4 +5 +6 +7 +8 +9 +10

タイムゾーン

ペテルブルグはネヴァ川沿岸の低地にある

領土の大部分は海抜
3―4mから30mまでの平地だ。
最も高地にある地区は、南・南西の辺境地区：
ドゥデルゴフ（海抜176m）とプルコヴォ地区（海抜75m）、
北部：パルゴヴォ（海抜60m）、東部：コルトゥシ（海抜50m）
領土のかなりの部分（デルタの島、沿海地帯、
ネヴァ川の左岸からフォンタンカまで）
で洪水の危険性が確認されている。

1824年のサンクト・ペテルブルグの洪水

ネヴァ川

恐らくヨーロッパで最も新しく、川幅の広い水量豊かな川。ネヴァ川の歴史は8000年前に始まる。現在のバルト海の海岸線が後退した時、リトリノヴォエ海は、巨大な氷河湖ラドガ湖とつながった海峡を残した。海峡はしだいに浅くなり、全長70kmの川になった。
19世紀末ネヴァ川のデルタ（三角州）には49の河川と運河、約15の支流、101の島があったと記録されている。支流を埋め立てた結果、1975年までに島数は42になった。
最も大きい島は、上から、ヴァシーリー島（10.9k㎡）、ペトログラツキー島（6.2k㎡）、デカブリスト島（3.8k㎡）。
現在、ペテルブルグ市の境には45の川、分流、支流と約40の運河（これらの河川を全て足した長さは300km）、また約100の貯水池（湖、池、人工貯水池）がある。市内を流れるネヴァ川の長さは28km。

East Siberian Sea
Chuckchee Sea
Bering Sea
Sea of Okhotsk

ラドガ湖
フィンランド湾
レニングラード州
フィンランド
エストニア
プスコフ州
ノヴゴロド州
サンクト・ペテルブルグ
自動車道の番号
E－国際道
M－連邦道

地理的状況と気候

ペテルブルグ領土：606.8㎞²（1993年）。サンクト・ペテルブルグ管轄下の領土を含めると1400㎞²。ゼレナゴルスク、コルピノ、クロンシュタット、ロモノーソフ、パヴロフスク、ペトロドヴァレッツ、プーシキン、セストロレツクと17のニュータウンを含む17地区に分けられる。

人口

市内　4,436,700人（1992年）
市内及びペテルブルグ管轄下の領土全体の人口
5,003,800人（1897年－1,265,000人、
1937年－3,015,000人、1959年－3,003,000人）

気候

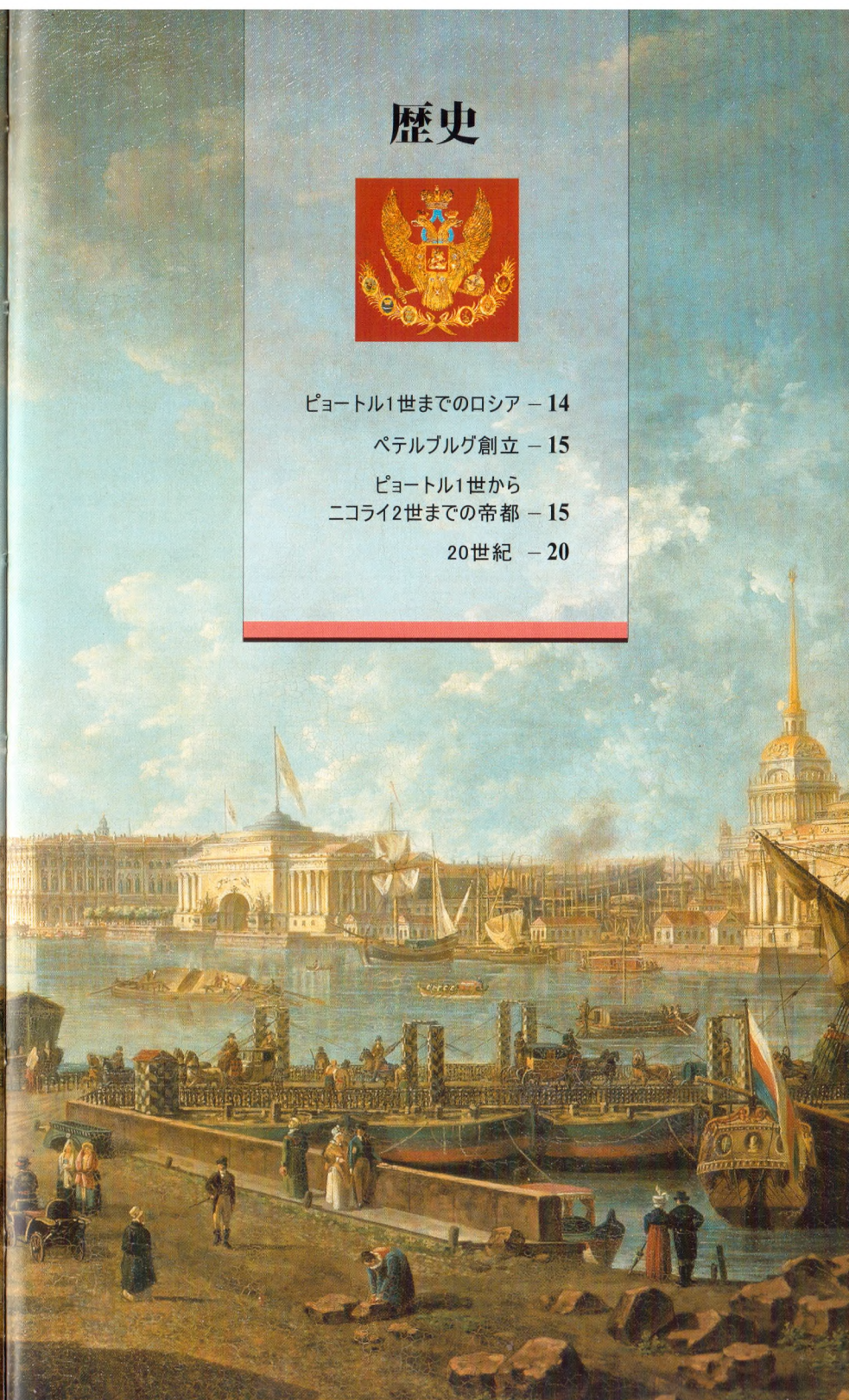
大陸性気候の特徴を持つ海洋性気候。天気は年間を通して不安定。市内の中央地区は郊外より平均気温が高い（平均0.6℃）。微気候。

冬は適度におだやかで長く続く。適度に寒く曇りがちな天気で、よく雪が降る。最も寒い月（1月・2月）の平均気温は-7.8℃。通常11月下旬から4月中旬まで雪で覆われている。

夏は適度に暖かい。7月の平均気温は17.8℃。年間の相対湿度は約80%。よく雨が降る。

レニングラード州

ロシア連邦を構成する89の連邦構成主体の一つ。
1927年成立。
面積859,000㎞²。
サンクト・ペテルブルグ市を含む人口は約550万人。
27都市を含む16の行政区に区分される。

歴史

- 862 リューリクをノヴゴロドに招致
- 988–989 キリスト教受容 ウラジーミル1世時代
- **1000**
- 1223 モンゴル軍の侵攻とカルカの戦いにおけるロシア軍の敗北
- 1236–1263 アレクサンドル・ネフスキー公の治世
- **1200**
- 1240・1242 スウェーデン軍とリヴォニア騎士団との戦争におけるアレクサンドル・ネフスキーの勝利
- 1325–1340 イヴァン1世(ダニーロヴィチ・カリター)の治世 ウラジーミルからモスクワへの遷都(1326)
- 1380 クリコヴォの戦い
- **1400**
- 1462–1505 イヴァン3世の治世：モスクワ公国にヤロスラーヴリ、ノヴゴロド、ロストフ、ヴャトカを併合. 中央集権国家の形成(モスクワ「第三のローマ」)
- 1533–1584 イヴァン雷帝(ロシア初のツァーリ)の治世(1547〜)
- 1584–1598 リューリク王朝最後の皇帝フョードル(ツァーリ)1世の治世 シビル汗国の併合
- **1600**
- 1600 年代–1611 動乱時代 偽ドミートリーの治世(1605－1606) ヴァシーリー・シュイスキーの治世(1606－1610) ポーランドの侵攻(1610－1612)
- 1612–1613 ミーニンとポジャルスキーの国民義勇軍モスクワ解放 ミハイル・ロマノフ即位(1613)
- 1649 アレクセイ・ミハイロヴィチ皇帝(ツァーリ) 農奴制導入
- 1682 ピョートルと兄イヴァン(イオアン)の戴冠式
- 1697–1698 ピョートル1世の大使節団
- **1703** サンクト・ペテルブルグ創立
- 1709 対スウェーデン戦 ポルタヴァの戦いにおける勝利
- 1721 大北方戦争の終結. ピョートル1世の皇帝宣言
- 1725 ピョートル大帝の死 妻エカチェリーナ1世の即位
- **1730**

ピョートル1世までのロシア

国家としてのロシアの歴史は約1200年である。伝承によると、862年にバルト海東沿岸の居住民がヴァリャーグ人を招致し、後にヴァリャーグ人は古代ルーシ(ロシア)国家を創設し、リューリク王朝の礎を築き、約700年間ルーシを統治した。修道僧ラヴレンチー編纂の「過ぎし年月の物語」によると、「6370年(862年)三人の兄弟がその氏族とともに選ばれ、彼らは全ルーシを率いてやってきた。長兄のリューリクはノヴゴロドに、次のシネウスはベラ・オゼラ(白湖)に、三番目のトルーヴォルはイズボールスクに居を定めた」と伝えている。イパーチエフとラドジヴィロの年代記は、リューリクは「最初にラドガに町を創り」、翌年「イリメリ(イリメニ湖)まで来て、ヴォルホフ(川)に町を創り(それを)ノヴゴロドと呼んだ」と確認している。10世紀にルーシの首都はノヴゴロドからキエフに移ったが、北西ルーシに対する権力は依然としてノヴゴロドが握り、北の近隣諸国との国境を管轄していた。

東バルト海沿岸と北西ルーシの地図
17世紀末

1223年、年代記の言葉を借りると「知られざる敵」が封建争いで分裂したルーシに侵攻した。その時までにアジアの大部分を征服していたモンゴル軍が、チンギス汗の下に集結しヨーロッパへ向かっていたのだ。ルーシのほとんどの町はこの襲撃を受け、建物を燃やされ、貴重な文化遺産を失ったが、戦火はノヴゴロドまでは及ばなかった。他の都市がモンゴルの隷属下にあった時代でも、北のノヴゴロドの地では文化の発展が続き、要塞や修道院が建設された。スウェーデン人やドイツ人が北の領地をめぐって戦争を仕掛けてきたこともあったが、首尾よくこれを防いだ。

16世紀イヴァン雷帝はノヴゴロドの「自由の民(ノヴゴロドは市の代表者による民主制を採っていた)」を弾圧した。ノヴゴロドの地位が弱まると、それまでノヴゴロドが勢力を持っていた北ルーシの防備も弱まった。その結果、リヴォニアの戦い(1558－1583)と17世紀初頭のスウェーデンの内政干渉の過程でロシアはバルト海への出口を失った。しかしスウェーデン支配時代のノヴゴロドの地図を見ると、スウェーデンの城塞は数でも大きさでもロシアの要塞に劣っているのがよくわかる。従って、東バルト海沿岸ルーシの奪還は時間の問題だった。

北方戦争(1700－1721)

1682年に偉大な改革者ピョートル1世が即位したことは、ロシア史の新しい時代を意味していた。1697年にスウェーデン王となったのは、曽祖父カール9世(1550－1611)時代の領地を広げるという野心に燃えた若き国王カール12世(1682－1718)で、その宣戦布告は「バルト海への出口」奪還の口実を探していたピョートル1世にとってはまさに好都合だった。大使節団(1697－1698)の際、ピョートルは近隣のヨーロッパ諸国(ポーランド、デンマーク、ザクセン・ポーランド)と対スウェーデン北方同盟を結ぶことに成功する。1700年ピョートルはスウェーデンに対し高らかに宣戦布告し、長期にわたる戦いに突入する。しかし同年11月ナルヴァの戦いでロシア軍は大敗北を喫する。だがこの敗戦によってピョートルの情熱が失われることはなかった。ピョートルは急速に軍の改革を行い、1702年にはネヴァ川水源(ラドガ湖)の要塞をスウェーデン軍から奪還し、フィンランド湾へ軍を進めた。

ピョートル1世

「1714年9月9日、占領したスウェーデン大艦隊を連れてのサンクト・ピーテルブルフ凱旋」
P. ピカルタの原画による版画　1714年

ペテルブルグ創立(1703年5月16日)

1703年4月、大元帥ボリス・ペトローヴィチ・シェレメーチェフ(1652－1719)率いるロシア軍はネヴァ川に沿って南へ進軍し始めた。1703年5月1日、ネヴァ川とオフタ川の合流点にあったスウェーデン要塞ニエンシャンツが降伏する。5月7日、コサック船を配置していたロシア軍は、大ネヴァ川河口付近で「バルト海への出口」の守備についていたスウェーデンの大艦隊を撃滅し、フリゲート艦を2艦占拠する。この直後、ピョートル1世は軍会議を召集した。そこではニエンシャンツ要塞の強化ではなく、ネヴァ川下流に新しい要塞を築く決議が採択される。要塞建設地にはあまり大きくないザヤチー(兎)島が選ばれた。この要塞「ガラドーク」(小さい町)は皇帝にちなんで「サンクト・ピーテルブルフ(ピョートルの町)」と名づけられる。1713年、ヨーロッパでペテルブルグを「世界の8不思議」と呼ぶ本が出版された。1714年、石積み職人をペテルブルグに移住させるため、ピョートル1世は新しい首都以外の場所での石造建設を一時的に禁止するという有名な勅令を出す。

この古い版画(1720年)にはドイツ語で「ロシア海軍大勝利と花火」と書かれている

ルイ・カラヴァック「ポルタヴァの戦い」1717–1718年(国立エルミタージュ所蔵)
ポルタヴァの戦い(1709年)での大勝利はその後のペテルブルグの運命を決定づけた。スウェーデン軍を壊滅させたピョートル1世は、しばらくはスウェーデンの報復はないことを確認し、スウェーデンから勝ち取った地に政府機関・宗務院施設を移し、このペテルブルグの町をロシアの首都にした。

ピョートル1世の時代

ピョートル1世の治世は30年に渡る。これはピョートルより年上の同時代人ルイ14世(1643－1715, フランス国王)の半分でしかない。ロシア史だけでなく、ヨーロッパ史全体におけるピョートルの果たした役割は、「太陽王」ルイ14世よりむしろカール大帝(742－814；768即位)の役割と比較できる。

カール大帝が当時後進国だった北ヨーロッパの国(スウェーデン)を封建国家に引き入れたように、ピョートル1世は同じくヨーロッパの近代化から遅れ、バルト海から太平洋まで広がっている広大な自国を世界史の表舞台に登場させた。サンクト・ペテルブルグ建設はピョートルの改革の象徴になった。ヨーロッパは、バルト海の東、ネヴァ川デルタの沼地で、難攻不落の城砦、豪華な宮殿、造船所、工場を持つ巨大な町が如何に発展していくか、驚異の目で見守っていた。1720年代初めにヨハン・バティスト・ホーマンによってニュルンベルグで発行された地図(下)は、ヨーロッパがピョートルをいかに高く評価していたかということを示している。ペテルブルグ建設は彼の最大の偉業だった。

ピョートルは後継者を残さないまま、1725年に亡くなる。彼の死後、帝位に上ったのは彼より2年長生きした皇后エカチェリーナ1世、その後即位したのは、ピョートル1世の孫で、ペトロパヴロフスカヤ要塞で死んだ皇太子アレクセイの息子ピョートル2世(1715－1730；1727即位)だ。若い皇帝に対する影響力を利用して、古いロシア貴族がピョートル大帝の改革を元に戻そうとし、しばらくの間宮廷はモスクワへ移された。が、その企てはアンナ女帝の時代に阻止された。

ニュルンベルグで発行されたサンクト・ペテルブルグ地図　1720年代

1720
- 1727-1730 ピョートル2世の治世

1730
- 1730-1740 アンナ・イヴァーノヴナ（旧表記イオアンナヴナ）の治世
- 1735-1739 ロシア・トルコ戦争

1740
- 1741-1743 ロシア・スウェーデン戦争とフィンランド併合
- 1741-1761 エリザヴェータ・ペトローヴナの治世

1750
- 1755 モスクワ大学創立
- 1757 芸術アカデミー創立
- 1757-1762 7年戦争参戦、ロシア軍によるベルリン占領（1760）

1760
- 1762 ピョートル3世の治世
- 1762-1796 エカチェリーナ2世の治世
- 1764 教会財産の世俗化（国有化）
- 1765 農民をシベリア強制労働に送る地主権利に関する勅令
- 1768 ウクライナ（ドニエプル川）右岸の蜂起

1770
- 1773-1775 プガチョフの反乱
- 1775 ザポロージエ・コサック自治の廃止

1780
- 1783 クリミア併合

1790
- 1794 コシューシコ率いるポーランド、ベラルーシ、リトアニア蜂起
- 1795 第3次ポーランド分割（第1次1772年、第2次1793年）

女帝の世紀

1725年のエカチェリーナ1世の即位は歴史家が「女帝の世紀」と名付けた時代の始まりとなった。ピョートル2世の短い治世後、アンナ女帝の治世が10年続き、それから赤ん坊イヴァン・アントーノヴィチ（1740－1764;在位40－41）を経て20年後にエリザヴェータ・ペトローヴナの治世となった。エリザヴェータ女帝の死後、帝位についたピョートル3世は、即位のわずか数ヵ月後、エカチェリーナ2世という名で30年以上ロシアを治めることになる妻によって退位させられた。「女帝の世紀（女性が支配した）」という響きは美しいが、この時代の舞台裏では様々な陰謀が巡らされていた。ピョートル1世の死後、直系の男性後継者がいなくなり、国家運営は派閥をつくって諍いあう貴族グループの手に渡った。彼らは、自分達に有利な候補者（女性）を帝位に就かせ、勢力を握った。代表的人物は、エカチェリーナ1世時代に絶大な権力を持っていたメンシコフ、アンナ女帝時代のビロン、エリザヴェータ時代の宰相ベストゥージェフ・リューミン、シュヴァーロフ、ラズムモフスキー、エカチェリーナ2世時代のポチョムキン、オルローフ、ベズボロートコだ。彼らの共通した重要な課題は、ロシアに動乱時代の混乱を繰り返させないこと、皇位継承争いの問題を避け、帝位をゆるぎないものにすることだった。これを反映しているのが次のエピソードだ。未亡人となったエカチェリーナ2世は寵臣グリゴーリー・オルローフとの結婚許可を申請した。その時彼女が得た国会からの回答は次のようなものだった。「女帝は好きなようにふるまえるが、オルローフ夫人は決してロシアの女帝にはなれない」

エカチェリーナ1世

エリザヴェータ・ペトローヴナ女帝（在位1741-1761/62）とエカチェリーナ2世大帝（1762-1796）

この二人の女帝の治世は半世紀以上、18世紀末まで続いた。

エリザヴェータ1世
（1709－1761/62）はピョートル大帝とその二人目の妃エカチェリーナ・スカヴロンスカヤ（後のエカチェリーナ1世）の娘である。エリザヴェータはピョートルが最初の妃と離婚する前に生まれており、1712年ピョートルとエカチェリーナが正式な結婚式をあげるまで、庶出子として扱われていた。

エリザヴェータ女帝

この出生の影は即位するまでエリザヴェータにつきまとい、若い時ルイ15世（後に「我々がいなくなった後は洪水となれ」「野となれ山となれ」という冷笑的な格言を残す）との婚約が解消されたこともある。

即位後、エリザヴェータはロシアの宮殿をヴェルサイユにひけをとらない宮殿にした。フランス語が堪能だった彼女はフランス語を宮廷公用語とし、科学・芸術を庇護し、モスクワ大学と芸術アカデミーを創立し、天才的なロモノーソフを重用した。エリザヴェータの時代、ペテルブルグの多くの木造建築物は取り壊され、石造の建物がそびえたつようになった。

アンナ・イヴァーノヴナ女帝

また、エリザヴェータはラストレッリの創造力を買い、それを発揮できる場所を提供した。ラストレッリの手によってペテルブルグは壮大な宮殿や寺院が立ち並ぶ驚くべき町になっていった。彼が建てた冬宮、ツァールスコエ・セローのアンサンブル、スモーリヌィ聖堂は2世紀半たった現在でも優れた建築物として名を連ねている。

20年間のエリザヴェータ時代は、大方の予想に反して、ロシアの近衛兵がかつて無いほどの輝きを得たピョートル時代の業績を失わなかっただけでなく、それをより強固なものとし、ロシア史における最も晴れがましい時代だった。エリザヴェータ即位後、ピョートル1世時代に失った領地奪還を目論んだスウェーデンとの戦争は、1743年のロシアへの新領土割譲でもって、アボにおいて平和的終結を迎えた。エリザヴェータ時代に権勢を誇った宰相ベストゥージェフ・リューミンは、偉大なピョートル1世でさえも完全には達成できなかったことを成し遂げた。つまり、あらゆる国がロシアとの同盟を目指すようになったのだ。エリザヴェータはエカチェリーナ2世が断言したように、浪費で国を破産させたのでは決してなく、強大な繁栄国家を残したのだ。

建都50周年に製版されたサンクト・ペテルブルグ地図 1753年

ピョートル3世

エリザヴェータ女帝の死後、1761年冬から1762年にロシア帝位に就いたのは1742年に後継者と定められたエリザヴェータの甥でホルシュタイン・ゴットルプ公爵の息子カール・ペーター・ウルリヒ（1728－1762）だ。彼はピョートル・フョードロヴィチという名でロシア正教の洗礼を受け、エリザヴェータ女帝の意向で、後にエカチェリーナ2世となる（ドイツの）アンハルト＝ツェルプスト公の娘、ゾフィー・アウグスタ・アンハルト＝ツェルプスト・ベルンブルグスカヤと結婚する。

「元老院広場ピョートル1世像除幕式」版画. 1782年

ピョートル3世は1762年6月妻が起こしたクーデターによって退位させられる。

ピョートル3世にかわって帝位に就いたエカチェリーナ2世（1729－1796）はエリザヴェータによって掲げられた政治方針の旗を下げることはできなかった。ロシアの国民的詩人プーシキンによって「スカートをはき、王冠をかぶったタルチュフ」（タルチュフはモリエールの喜劇「タルチュフ」の主人公で、偽善的宗教家）と評されたエカチェリーナ2世は、二面性のある人物だった。自らを「啓蒙女帝」と宣言し、ヴォルテールと書簡を交わし、新しい自由と個人思想を持った君主だったが、退役准将ラフマニノフが1791年にヴォルテールの作品を出版した時、「ヴォルテールの友人」であるエカチェリーナ2世はすぐにその印刷所を閉鎖するよう命じた。また、エリザヴェータによって廃止された公開死刑を復活させ、政敵に対する残虐さで悪名を高めた。エカチェリーナ2世はドイツ的（正確で計画的）にエリザヴェータ時代の政策を続けた。亡きエリザヴェータの浪費を非難しながらも、自身はひけを取らず豪奢な生活を送っていたようだ。1778年パリのグリムに宛てた手紙によると「ポスト（復活祭前の大斎期・精進期）までわずか2週間となりました。そうこうしているうちに、こちらでは11の仮面舞踏会が行われます。ここには昼食会、晩餐会は数に入っていませんが…」

近衛連隊の軍服を着たエカチェリーナ2世

「首都サンクト・ペテルブルグ設計図」版画 1792年

エカチェリーナはトルコと2度の戦争（1768－1774, 1787－1791）を行った。そこで活躍したのがウシャーコフ、スヴォーロフ、クトゥーゾフで、戦争の結果、ロシアはクリミアを手に入れた。エカチェリーナ2世によってロシアに併合された領土は20世紀、様々な理由で失われてしまった。女帝と、その後継者の対外政策における先見の明の無さが見てとれる。「女帝の世紀」がロシア専制主義を延命し、19世紀の政治経済の遅れをもたらしたのは疑いない。

歴史

- 1790
- 1796–1801 パーヴェル1世の治世
- 1799 スヴォーロフのイタリア・スウェーデン進軍 反ナポレオン同盟
- 1800
- 1801–1825 アレクサンドル1世の治世
- 1801 東グルジアの無血併合（トルコよりグルジア獲得）
- 1804– 1813 ロシア・イラン戦争
- 1805–1807 ロシア、反ナポレオン同盟に参加 アウステルリッツの戦い（1805）における ロシア・オーストリア軍の敗北
- 1808–1809 ロシア・スウェーデン戦争 フィンランドの併合
- 1810
- 1812（6月 —10月） ナポレオン軍侵攻 ボロディノの戦い（8月26日） ナポレオン軍モスクワ入城 モスクワより退却
- 1812 オスマン帝国皇帝と条約締結（ブカレスト条約） ロシア、トルコより ベッサラビアを獲得
- 1813–1814 海外遠征とロシア軍パリ入城
- 1817 カフカス戦争開始
- 1819–1820 国内政策の引き締め プーシキン流刑 チュグーエフ（ウクライナ）とセミョーノフ連隊の反乱
- 1820
- 1825
- 1825–1855 ニコライ1世の治世
- 1825 サンクト・ペテルブルグにおけるデカブリストの反乱
- 1826 第三局設立（秘密警察）
- 1826–1828 第2次ロシア・イラン戦争 アルメニア併合
- 1837 ロシア初の鉄道開通（サンクト・ペテルブルグ ーツァールスコエ・セロー間）
- 1850
- 1853–1856 クリミア戦争
- 1855–1881 アレクサンドル2世の治世
- 1861 農奴解放令
- 1867 アメリカへアラスカ売却
- 1870
- 1873–1877 産業危機
- 1881–1894 アレクサンドル3世の治世
- 1891 シベリア鉄道起工
- 1891–1892 ヨーロッパ・ロシアの飢饉
- 1893 ウォッカの国家専売導入 産業振興の始まり

パーヴェル1世（在位1796–1801）

パーヴェル1世の即位と共に、エカチェリーナ2世が息子に帝位を譲りたくなかった理由が明らかになった。新皇帝の常軌を逸した性格、過度の癇癪は次の一連の性急な改革をもたらした。

軍改革：パーヴェルは親衛隊の権利を侵し、7人の元帥と300人以上の戦功のある将官を解雇し、事実上軍隊を荒廃させた。内政の改革：検閲制度を強化し、革命を連想させる「市民」「父姓」「社会」という言葉を禁止した。対外政策の改革：長年の同盟国イギリスとの関係が悪化した。その上、パーヴェル1世はドイツから妻マリヤ・フョードロヴナ妃の甥であるヴュルテンベルグ家の王子を養子にするために呼び寄せ、息子アレクサンドルの帝位継承権を剥奪して、彼を帝位に就けようとし、息子アレクセイには要塞に幽閉すると脅した。これによりパーヴェル1世廃位の陰謀は避けられなくなった。

1801年3月11日ミハイル城塞で劇的な結末が訪れた。パーヴェルの養育係パーレン伯とズーボフ公率いる近衛士官達がパーヴェルを寝室で絞殺したのだ。ジェルメナ・ド・スタリはこれを辛辣に評している。「留まるところを知らぬロシアの絶対的専制主義もやはり留めを打たれた。それも縄一本で」

アレクサンドル・ベヌア
「パーヴェル1世時代のミハイル城塞前のパレード」
1907年（国立ロシア美術館所蔵）

パーヴェル1世

アレクサンドル1世（在位1801–1825）

祖母エカチェリーナ2世の寵愛を受けて養育されたアレクサンドル1世（1777–1825）は、複雑な人物として歴史に名を残した。即位宣言でアレクサンドル1世は「法、そしてエカチェリーナ2世の御心に従って統治し、彼女（エカチェリーナ2世）の賢明な意向に基づいて進む」と宣誓した。アレクサンドル1世は外国への出国制限を解き、検閲と秘密捜査局を廃止し、地主に農民を解放させ、農民には人が住みついていない土地を与える許可を出した。また、政治犯を釈放し、賭け事を禁止した。アレクサンドル1世の時代、ロシアはかつてないほどの国威を誇った。彼の都市計画政策によって、ペテルブルグに一連の素晴らしい建築アンサンブルが生まれ、町の外観が一新された。

アレクサンドル1世は新しいタイプの君主だった。素晴らしく教養があり、申し分なく育ちの良い上品な人で、非の打ち所のないマナーと非の打ち所のないセンス、そして大臣たちが経済・軍事政策を指揮するのを邪魔しない賢さを持っていた。対トルコ、スウェーデン戦の勝利の結果、ロシアはフィンランド、ポーランド、グルジア、アゼルバイジャン、ベッサラビアを併合した。ナポレオン戦争の勝利とロシア軍のパリ入城は皇帝アレクサンドル1世の人物像に大きな輝きを与えた。しかし、こういった対外政策の華やかさとは裏腹に、国内政策には暗いイメージがつきまとった。アレクサンドル1世は、ナポレオンに「このような文官になら自分の領地の一部を譲ったであろう」と言わしめたスペランスキーを罷免し、憲法の採択を最終的に拒否し、一連の自由主義の法律を廃止した。輝かしいアレクサンドル1世の時代に、恐怖の「アラクチェーエフ独裁体制」（屯田制の創始者で、1815–25年の実質的な国家の長であり、軍局の議長だったA. A. アラクチェーエフの名にちなんでつけられた）が横行した。1820年にセミョーノフ連隊の反乱がおこる。ピョートル1世によって創立された最も古い近衛連隊が未曾有の体罰に対して蜂起したのだ。蜂起者達に対する厳しい制裁は、君主が自発的に自分の権利を拒否するという進歩的な社会への希望をことごとく吹き飛ばした。こうして社会に立憲制への移行計画をもった秘密結社が現れるようになった。

アレクサンドル1世

ニコライ1世（在位1825–1855）

パーヴェル1世の3男、ニコライ1世（1796–1855）の即位は近衛連隊の一部が新皇帝に忠誠の誓いを拒否した1825年12月14日の事件で特徴づけられる。デカブリストの乱と同様、歴史に残るこの蜂起は容赦なく鎮圧され、ロシアに以後30年間にわたる、文化・科学・産業の退廃、政治的亡命をもたらす体制が定められた。

ロシアの国民的詩人プーシキンはニコライの性格について次のように述べている。「彼の中には陸軍准尉たちから与えられたものが多く、ピョートル大帝から与えられたものはない」ニコライはよく棒を使って体罰を行ったので、国民はニコライに「棒の人」というあだ名をつけた。これを裏付けているのは軍務省でのシニカルな決議だ。「ロシアには、ありがたいことに、死刑はない。兵士に1万2000本の棒を与えればいいのだ」著名な詩人で、熱烈な君主制主義者であるフョードル・チュッチェフは、ニコライ1世について次のように書いている。

「（ニコライ1世は）神に仕えているのでも、ロシアに仕えているのでもない。自分の心配事だけに仕えているのだ」ニコライ1世の治世は、社会の崩壊、官僚主義の形成とクリミア戦争におけるロシアの大敗北の時代だった。プロイセン国王の娘との間に7人の子供がいたニコライは、多くの皇帝の子孫に高い位を与えたり、様々な口実でペテルブルグの宮殿を贈ったりする伝統を続けた。これはエカテリーナ2世によってはじめられたものだったが、当然破産をもたらすことになる。

ニコライ1世

鉄道建設はニコライ1世の産業政策の重要な位置を占めていた
（図はペテルブルグのニコライ鉄道駅，1850年代）

アレクサンドル2世（在位1855–1881）とアレクサンドル3世（在位1881–1894）

1861年の農奴制廃止で半官紙によって「解放者」と名づけられた皇帝アレクサンドル2世（1818–1881）は決して自由主義者というわけではなかった。皇后マリヤ・フョードロヴナが残した田舎風の家庭中心主義が支配していた父ニコライ1世時代の宮中の雰囲気は、徹底した改革世界観の形成に繋がらなかったアレクサンドル2世の改革は、こせこせしていて、中途半端で、有名なロシア・テロリズムの横行を少なからず促進させたことが特徴だ。自分のおじ、プロイセン国王（1871からドイツ皇帝ヴィルヘルム1世）に敬意を抱いていたアレクサンドル2世は対ドイツ政策を少し強化した。これに続いて起こったのが、国を疲弊させたバルカン、カフカス、中央アジア、極東侵略戦争と1863年から1864年にかけてのポーランド蜂起（革命）の参加者に対する容赦ない制裁だ。1860年までにアレクサンドル2世の改革はロシア経済全般の崩壊をもたらした。この時までに出現したテロ組織の中で最も残酷だったのは「土地と意志」で、この組織は1881年3月1日にアレクサンドル2世暗殺を決行した。

アレクサンドル2世の8人の子供の次男であった皇帝アレクサンドル3世（1845–1894）は素朴で愚かな「玉座に上ったロシアの男」の役を誠実に演じた。外交政策では意図的にロシア・ドイツ関係を悪化させた。ペテルブルグにおける「ロシア様式」の復興、ロシア民話や古代の歴史を素材とした絵画（スーリコフ、ヴァスネツォーフ、ビリービン）の繁栄は彼に負うところが大きい。暗殺を恐れたアレクサンドル3世は主にガッチナに住んでいたが、テロリストの手にかけられることはなかった。資料によると死因はアルコール依存による腎炎だった。

アレクサンドル2世

アレクサンドル3世

1894–1917
ニコライ2世の治世

1896
ホドゥィンカの悲劇
ニコライ2世戴冠式中、多くの見物客が亡くなる

1897
第一回ロシア国勢調査

1900

1900–1903 産業危機
ストライキ
運動の高揚
学生騒動

1904–1905
日露戦争における
ロシアの敗北

1905
第一ロシア革命開始
（1月9日血の日曜日事件、
12月デカブリストが多くの町を占領する
武装蜂起（デカブリストの乱））
宮廷にラスプーチン台頭

1906
ストルイピンの改革
（農民の農場分離に関する法令）
第一ドゥーマ国会召集

1907
「国会交代」
ニコライ2世による解散
2月 第二国会召集、解散
第三国会召集

1910

1911
ストルイピン
殺害

1912
レナ川の銃殺事件
レフトルストイの怒りをまねき、
ロシア全国でストライキ

1914
ドイツがロシアに宣戦布告
（第一次世界大戦）
ペテルブルグを
ペトログラードと改称

1916
ブルシロフの突破（5月20日）
A.V.ブルシロフ指揮のもと南西戦線
で攻撃開始
ラスプーチン暗殺

1917

1917
2月革命
3月2日　ニコライ2世退位・臨時政府樹立
10月24－26日
ペトログラードで武装蜂起（十月革命）

ニコライ2世(在位1894–1917)

ニコライ2世

ロシア最後の専制君主ニコライ2世（1868－1918）の治世は世界史上最も過酷な時代にあたる。これは、古い思想の破滅の時代、とめどない産業発展の時代であり、この産業発展は社会的世界観や社会制度の発展の先を進んでいた。まさにこのような時代にあって、人文分野の理論家達は、民族を「歴史的民族」と「非歴史的民族」、人種を「上の人種」と「下の人種」にわけるという一連の抽象的イデオロギーを提示したのである。こうした一連の思想は、ハンス・ギュンターのような山師的学者が飛びつくところとなり、多くの新たな指導者たちの想像力を掻きたてた。この動乱時代のニコライ2世の重要な思い違いは、ロマノフ家一族の中で育まれた、ツァーリ（皇帝）は「ロシアの統治者」である（1897年の国勢調査の「職業」欄にニコライ自身によって書かれた言葉）という信念であり、無制限の専制君主制はロマノフ家の「家族的事柄」であり、ロシア国民は「遺伝的に」君主に献身的であるという信念であった。ロシア国家の基礎は「正教、専制君主制、国民」であるという曽祖父ニコライ1世時代のユートピアテーゼはニコライ2世の周辺であまりにも無条件に受け入れられていた。

政情がとりわけ悪化したのは、ニコライ2世が日露戦争（1905）の敗北から何も学ばず、ロシア軍が酷い状態にあるということが明らかになった第一次世界大戦時だ。ドイツ出身の皇后、グリゴーリー・ラスプーチンの影響、個人的なことだけを大事にし、国家の大事には興味の無いニコライ2世の穏和さ（カラムジンによると君主には欠陥のある性格だった）全てが世論を刺激した。

ロマノフ家300周年祭

1913年のロマノフ家300周年式典は1713年、1813年時にも見られなかった絢爛豪華さで執り行われた。祝典はロマノフ王朝の揺ぎ無さを宣言し、国民に王朝の功績を思い出させ、国民を団結させるはずだった。ロマノフ家はロシア最古の家柄ではなく、慎ましい系図を持ち、政権を握ったのはロシア動乱時代になってからのことだった。リューリク王朝最後から二人目の皇帝イヴァン4世雷帝（1530－1584）の死後、実質上ルーシを統治したのは新皇帝フョードルの妃の兄ボリス・ゴドゥノフだ。ゴドゥノフはイヴァン4世の末息子ドミートリー殺害に関して疑いの目で見られていた。ゴドゥノフの死後、すぐにこれを利用したのはロシアの長年の敵国レチ・ポスポリタ（Rzeczpospolita ポーランド・リトアニア共和国）だ。ポーランドはグリゴーリー・オトレピエフを皇太子に仕立てあげ（偽ドミートリー，1605年殺害）、皇太子は奇跡的に助かったとしてロシアに侵入した。1610年ポーランド王ジギムンド3世は直接干渉に踏み切り、ポーランド軍がモスクワを占領した。第三のローマと宣言したばかりのモスクワ国家は滅亡の危機に瀕していた。1612年ポジャルスキーとミーニン指揮下の国民義勇軍がポーランド軍をモスクワから追い出し、1613年ゼムスキー国民サボール会議はイヴァン雷帝の最初の妻の近親である若きミハイル・ロマノフをツァーリ皇帝に選出した。ミハイル・ロマノフは1645年まで統治し、その後帝位に就いたのは息子のアレクセイ・ミハイロヴィチ（1629－1676）－ピョートル大帝の父である。

ピョートル大帝はロマノフ父方（男性）家系最後（15歳で亡くなった皇太子アレクセイの息子ピョートル2世を数に入れなければ）のツァーリ皇帝となった。ロマノフ王家の母方の系図は1761年エリザヴェータ・ペトローヴナの死と共に中断したが、ピョートル1世の「皇帝自らが後継者を決める」勅令（1722年）のおかげで公的な王朝の交代は起こらなかったが、ヨーロッパ王家の年代記では、ピョートル3世以降のロマノフ家は公にホルシュテイン・ゴットルプ家と呼ばれていた。この事実に照らして1913年のロマノフ家300周年祭は緊張している社会によって懐疑的に迎え入れられ、望ましい成果をあげられなかった。最後のロマノフ人達によって創られた「罪の無いお芝居の世界」（マリー・アントワネットに関するツヴェイグの言葉）、その中で彼らは現状から遠ざかろうとしていた。お芝居の世界はこの先もロシアの政治活動の中で続く可能性はあった。しかしながら彼らは歴史の表舞台から去った「専制主義」の理想から離れることを望まず、根気強く、社会の力で強制的な破壊へと向かった。

ロマノフ王朝300周年祭の日
アレクサンドル公園のニコライ2世の公民館

1905年革命と第一次世界大戦の始まり（1914–1918）

1900年代初頭、財務大臣ウィッテは改革で兌換ルーブルを導入した。ウィッテ自身の言葉によると、この改革に「思慮深い全ロシア」が反対した。第一にロシアの遅れた経済を食べさせている原料の輸出者達に弱いルーブルが必要だった。第二に、先見の明のある経済学者たちは10ルーブル金貨（額面以上の価値がある）が流通からなくなることを予言していた。総じてひどい経済危機が起こり、政党が現れた。ロシアが日露戦争で屈辱的な敗北を喫した時、政権への不信は限界に達した。1905年の革命は十分に検討されていない改革の答えとなった。血の日曜日事件（1905年1月9日）後、日露戦争、経済危機をもたらしたウィッテ自身「このような犠牲、惨禍はただではすまない。もし政府が国民の考えの流れを掌握していなかったら、我々は皆死ぬだろう。あるいは最後に勝利するのはロシアの…コミューン（貧しい人々）である」

1905年10月17日ニコライ2世はようやく公民の自由を認め、国会（ドゥーマ）開設の勅令に署名した。ニコライ2世は自身の日記に「神よ、我々を助けたまえ。ロシアを鎮めたまえ！」と書いている。詔書（マニフェスト）は既に時期遅く、兵士・水兵が参加した武装蜂起はハリコフ、クロンシュタットからチタ、クラスノヤルスクまでロシア全土を占領した。これに対する容赦ない鎮圧は社会民主党に何万人もの新しい党員を引き入れ、軍の破綻をもたらすことになった。その結果1914－1915年第一次世界大戦の全戦線でロシア軍は敗北した。

1914年8月2日
第一次世界大戦の宣戦布告日の宮殿広場

ヴァレンチン・セロフ.
「兵隊さんたち、勇ましい皆、あんたがたの名誉はどこだい？」（コサックによるデモ解散）
1905年（国立ロシア美術館所蔵）

1917年

第一次世界大戦時のロシアの同盟国はロシア経済の最終的破壊のために全力を注いだ。例えば英国は開戦時に売っていた2倍の価格でロシアに武器を売るようになった。1916年12月皇帝は無理やり食糧徴発に関する決議を採択させた。この決議は、無人化し、飢餓で衰弱した村々を憤慨させた。ペトログラードも同様に飢えており、1917年情勢は警察にも抑えきれなくなった。2月25－26日全社会労働者ストが行われ、2月27日約7万のペトログラード守備隊の兵士がストライキ側にまわり、ほとんどの町を占領した。

数日後の3月2日、ニコライ2世は退位宣言書に署名する。同時期ペトログラード会議（ソヴィエト）は新臨時政府の閣僚を承認した。戦時下、臨時政府はいかなる問題も解決することができなかった。そのためチューリッヒから帰国したレーニンがプロレタリアートのテーゼ（四月テーゼ）「国民に平和とパンと完全な自由を」を発表した時、国民は彼の党を支持した。このボリシェヴィキ指導者のテーゼは簡単で皆にわかりやすかった。臨時政府のデマゴーグ的な「勝つまで（戦う）」というテーゼは、政府の無能さを背景に、戦線からの悪い知らせのどよめきの下、無意味に響いた。

7月4日ペトログラードで町の人口の4分の1、50万人の人が参加した反政府デモが起こった。労働・農民議員から成るペトログラード議会に政権を移す要求をしたデモは射撃された。この発砲事件の流血、それとそれに続く8月末のコルニロフ将軍のペテルブルグに軍事独裁政権を設置しようとする陰謀は、ボリシェヴィキの思う壺だった。全てボリシェヴィキのシナリオ通りに革命が発展するように進んだ。10月26日ボリシェヴィキは裏切った軍を臨時政府が置かれていた冬宮襲撃に立ち上がらせた。その後プロレタリアート独裁が不可避となった。

巡洋艦「オーロラ」1917年

1917年10月冬宮襲撃

1918
「赤軍」創設
首都をペテルブルグからモスクワに移す

1919
白軍のペトログラードへの弾圧

1921–1923
クロンシュタットで蜂起;
160人の科学者・文化活動家の追放(シベリア流刑)
通りの大規模な改名

1924
レーニン死去
ペトログラードをレニングラードと改称

1926
セルゲイ・キーロフ
レニングラード党組織の長になる

1929–1932
弾圧の始まり
「科学アカデミー会員の事件」(1929)
「反宗教的5か年計画」(1932)

1934
キーロフの暗殺と(スターリン)
大粛清の開始

1939
ソ連・フィンランド戦争

1941
ナチス(ヒトラー)軍のソ連攻撃、
レニングラード封鎖の始まり

1942
英雄的防衛と
ソ連軍のレニングラード封鎖を解く試み
飢餓と寒さで10万人のレニングラード人が死亡

1943
レニングラード封鎖の決壊

1945
大祖国戦争(対独戦争)の勝利、
レニングラードで勝利兵との面会

1953
スターリンの死去

1955
レニングラード地下鉄1番線の開通

1965
レニングラード市「英雄市」称号授与

1979
フィンランド湾にダム建設開始

1983
最初の町の祝日以後毎年祝われる

1986
通りの名前を旧称に戻す運動の開始

1989
市内・郊外の歴史地区をユネスコの文化遺産に登録

1991
町の名称を歴史的名称サンクト・ペテルブルグに戻す

1992
宗教団体による寺院の返還

ペトログラードーレニングラード(1918–1941)

1917年10月のボリシェヴィズムの勝利は多くの犠牲を伴った。1917年レーニンとその支持者の素晴らしい策略は、18世紀末のフランス革命と同様、空想的(ユートピア)経済戦略を基盤にしていた。そのためボリシェヴィキは革命後すぐだけではなく、数年あとになっても、国の情勢を正常化させ、経済的荒廃を克服し、無政府主義を法律の枠内に入れることができなかった。同時に、無政府主義のいかなる企てもレーニンの計画に従って、押しつぶされるはずだった。フランス共和国が最初独裁政治になり、それからナポレオン帝国になったように、ソ連でも最初は「プロレタリアートの独裁政治」、それから「スターリン帝国」になる運命を背負わされていた。「全ての理論は灰色だ…生の黄金の樹こそが緑なのだ」(ゲーテ)

過酷な1918年～1919年にペテルブルグでは新しい映画スタジオ(レンフィルム)が創設され、ネフスキー大通りにドム・クニーギが開店し、出版社「全世界文学」が創立された。大祖国戦争開始前までに1924年レニングラードと改名された町は、ヨッフェ、パヴロフ、プロコフィエフ、ショスタコーヴィチ、コジンツェフやトラウベルグが働き、創造活動に励む、世界における文化と科学の中心の一つになり、新しい科学大学、住宅群、地下鉄や橋がつくられた。

1920年代宮殿川岸通りでの祝賀パレード

戦争と封鎖(1941–1945)

海軍のレニングラード攻防 1943年8月

1941年9月29日のドイツ軍の指令書
「フューレル(ヒトラー)はレニングラード市を地上から抹殺する決心をした。我々はこの町の保存に興味が無い。たとえこの町の人口の一部でも。堅く封鎖された町を全口径の大砲による射撃、絶え間ない空爆によって一掃することをすすめる…」

ネフスキー大通りの市民と攻防者たち
レニングラード封鎖が解かれた日(1944年1月27日)

1941年6月22日ヒトラーの飛行部隊がソ連の町々の爆撃を始めた直後、文化遺産の宝庫であるレニングラードは驚くべき速さで何百万もの芸術品を背後への疎開を始めた。何百もの輸送列車が町からレンブラント、ルーベンス、ブリュロフ、レーピンの絵を運び出した。庭園彫刻は地中に埋められ、建築の傑作や市のモニュメントはカモフラージュのために偽装されたネットで覆われた。敵軍に渡すためではなく、防衛のために準備したのだ。町を防衛した何十万もの市民と兵士の命を奪った900日封鎖はレニングラード市民の前代未聞の偉業として、そして人間の精神の優れた力の証拠として、歴史に名を留めている。

ピスカリョフ墓地の記念像
封鎖で亡くなった人たちを葬っている場所

戦争時の碑文
(ネフスキー大通り14)
市民に砲撃中ここにいてはいけないと予告している

廃墟からの復興

アレクサンドル・ネフスキー勲章

長年にわたる絶え間ない銃撃や砲撃による廃墟からのレニングラードの復興の偉業は、18世紀初めの建設の偉業と再び比較できるだろう。1944年封鎖が完全に解かれた時、町に火災や砲弾によって損傷を受けていない有名な記念碑は一つもなかった。郊外の宮殿、公園アンサンブルは廃墟となっていた。が、1949年までに町の産業は戦前までのレベルに達し、町の施設は完全にガス化が導入された。大修復後、次々に宮殿や美術館が開館していき、1955年にはレニングラード地下鉄一番線が開通した。1950年代半ばまでに、わずか10年で、レニングラードは再び世界建築文化の至宝の一つになっていた。

ヴァシーリー島ストレルカ上の勝利の花火

勝利パレード モスクワ, 赤の広場
1945年6月24日

ネフスキー大通りを行進する大祖国戦争の歴戦のつわもの

レニングラードーペテルブルグ(1990年代)

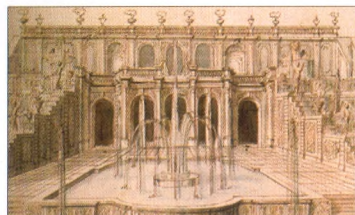
ソ連共産党中央委員会が1970年代の経済政策の悲惨な結果に直面していた1980年代半ば、改革者達が強固なポジションを占めていた。ゴルバチョフによって宣言された中央委員会の新路線は「ペレストロイカ(再構築)」と「グラスノスチ(情報公開)」で、これは1970年代のソ連共産党中央委員会にとって経済においてスタンダードなスローガンに基づいていた。ソ連経済学者達の一連の発表は、経済復興は下(低い立場)からの変化によって起こるというイリュージョン(幻覚)を生み出し、それによって企業の指導者を選挙で決めるようになり、二つの基金(生産発展基金と賃金基金)を統合した。しかし局面は好転しなかった。逆に生産開発の中止、賃金の値上げ(生産費用を賃金の値上げ分に回した)、それに伴って深刻なインフレが起こった。1980年代末までにソ連は沸き立ち、1990年代初頭までに完全に崩壊した。ロシア全国、ペテルブルグにも選挙運動が波及した。1991年に再び歴史的名称サンクト・ペテルブルグを得たレニングラードは、1990年代中ば18-19世紀の自由主義思想家(アダムスミス,ベンサム他)のプログラムを用い、これを実践しようと試みた。これは先進国では実現不可能だとみなされていたにも関わらずである。ペテルブルグではこれは自分達のニュアンスを持っていた。歴史的建造物や記念像が相次いで壊された。町の名称を旧称に戻したが、それは文化や科学の発展に何の影響も及ぼさなかった。その上、世界のマスコミは、新しいペテルブルグとして18世紀の宮殿の前に立っている物乞いの子供の姿を報道した。そのため1990年代末までにプラグマティズム(実利主義)は次第に政治的理想主義を凌駕するようになっていった。その結果、300周年(2003年)に向けてサンクト・ペテルブルグは完全に一新した姿を見せた。

建築年表

ピョートル1世 1672-1725 / エカチェリーナ1世 1684-1727 / ピョートル2世 1715-1730 / アンナ・イヴァーノヴナ（イオアンナヴナ）1693-1740 / イヴァン6世 1740-1764 / エリザヴェータ・ペトローヴナ 1709-1761/62 / ピョートル3世 1728-1762 / エカチェリーナ2世 1729-1796

1682 1725 1727 1730 1740 1741 1761 1762

1703 ペテルブルグ（ペトロパヴロフスカヤ）要塞の建設
1705-1710 ペテルゴフ・オラニエンバウムに郊外離宮建設
1710年代 夏の庭園・ピョートル1世の夏の宮殿
1712-1733 ペトロパヴロフスキー（聖ペテロと聖パヴロ）聖堂
1717-1722 アレクサンドル・ネフスキー修道院 ブラゴヴェーシェンスカヤ教会

1718-1734 クンストカメラ
1734 ネフスキー大通り拡張令
1735 ペテルゴフの噴水「サムソン」

ニコロ・ミケッティ「グロット（岩窟）入口から見る大滝の絵」1720年

1741-1754 アーニチコフ宮殿
1745-1755 ペテルゴフ大宮殿の拡張
1748-1769 スモーリヌィ修道院の建設
1749-1757 ヴォロンツォーフ宮殿
1752-1754 ストロガノフ宮殿
1752-1756 ツァールスコエ・セロー新アンサンブル建設
1753-1762 ニコライ聖堂
1754-1762 冬宮

1762-1774 オラニエンバウムに私別荘建設
1764-1775 小エルミタージュ
1764-1788 芸術アカデミー建物
1765-1784 新オランダ島アンサンブル
1766-1781 ガッチナ宮殿
1768-1782 元老院広場ピョートル1世像
1768-1785 大理石宮殿
1771-1784 夏の庭園の鉄柵
1777–1790年代 パヴロフスクに郊外離宮建設
1783-1789 タヴリーダ宮殿
1783-1790年代 ツァールスコエ・セロー キャメロンギャラリー

アレクセイ・ズーボフ「ヴァシーリー島」1710年代 細部

ミハイル・マハーエフ「ネヴァ川上流からのパノラマ」1753年

ジャン・レバー「宮殿川岸通り」1778年 ジャン・バティスト・プレンス原画による

パーヴェル1世 1754-1801 / アレクサンドル1世 1777-1825 / ニコライ1世 1796-1855 / アレクサンドル2世 1818-1881 / アレクサンドル3世 1845-1894 / ニコライ2世 1868-1918

1797 1801 1825 1855 1881 1894 1917

1797-1801 ミハイル城塞

1801-1811 新カザン聖堂の再興
1803-1805 陛下の書斎
1805-1811 新取引所建設
1806-1808 スモーリヌィ大学建物
1806-1811 鉱山大学
1806-1823 海軍省新建物建設
1818-1826 エラーギン宮殿
1818 新イサーク聖堂建設着工
1819-1825 ミハイル宮殿
1819-1827 参謀本部

1828-1834 アレクサンドル劇場アンサンブル
1829-1834 元老院・宗務院建物
1830-1834 アレクサンドルの記念柱
1839-1844 マリヤ宮殿
1839-1851 新エルミタージュ
1840年代 1850年代 ニコライ橋、（現シュミット中尉）アーニチコフ橋
1844-1851 ニコライ（現モスクワ）駅
1855 夏の庭園 I.T.クルィモフ像

1855-1857 バルチースキー（バルト海）駅
1857-1860 ワルシャワ駅
1858 イサーク聖堂建設終了
1859 イサーク広場ニコライ像
1860 マリインスキー劇場
1861 中央郵便局
1873 リチェイヌィ大通り裁判所周辺の建物
1873 アレクサンドル劇場前エカチェリーナ像
1878 アレクサンドル（現リチェイヌィ）橋

1883-1907 キリスト復活教会（スパース・ナ・クラヴィー）
1886-1889 宮廷聖歌隊合唱団建物
1893 レールモントフ大通りのユダヤ教会
1890年代 シュティグリーツ男爵博物館建物

1890年代-1903 トロイツキー（三位一体）橋
1902-1903 エリセーエフ兄弟の商館
1902-1904 「ジンゲル社」邸
1902-1904 ヴィテプスク駅
1907-1914 シベリア商業銀行
1911 ピョートル大帝橋（大オフチンスキー橋）
1911-1912 ヴァヴェリベルグ銀行
1912 アゾフ＝ドン銀行
1912 ホテル「アストリア」
1913 フィンランド橋
1916 宮殿橋

グリゴーリー・チェルニェツォーフ「ニコライ1世出席の宮殿広場パレード」1839年

1900年代のネフスキー大通り

ペテルブルグ
観光名所

ペトロパヴロフスカヤ（聖ペテロと聖パウロ）要塞

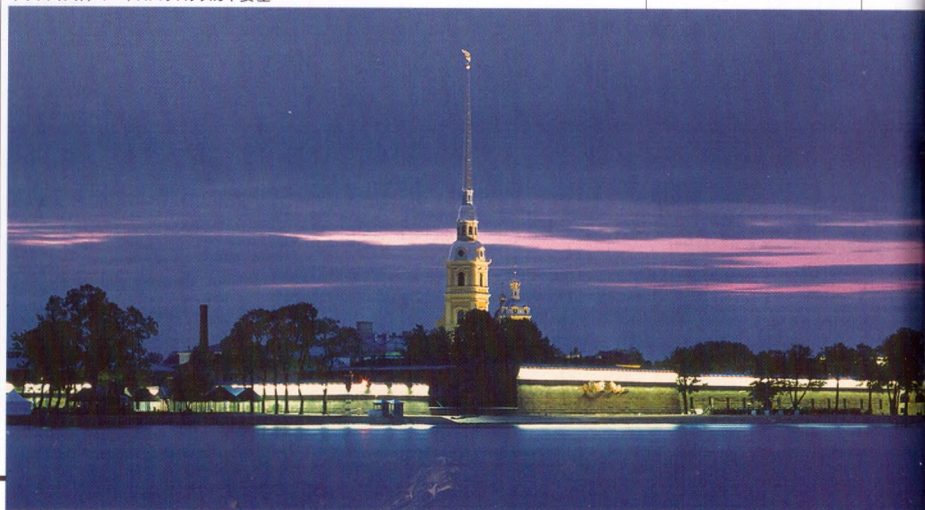
1–f8, p. 321

最初に「サンクト・ペテルブルグ」と呼ばれていたペトロパヴロフスカヤ要塞は、サンクト・ペテルブルグの歴史的シンボルの一つである。約10ヘクタールの小島に200年以上ロシア帝国の首都となる町の礎が置かれた。

ピョートル1世の日記には「豪華な式典と共に、使徒聖アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌィの聖骸の入った箱が埋められ、その上に最初の石が置かれた」と書かれ、起工日として1703年5月16日が記入されている。要塞の最初の設計図はピョートル自身によって作られたが、これは島の輪郭をたどった現実困難なものだった。最終的な設計案を作成したのは、1701年ロシアに来た技術部隊将官ジョゼフ・ガスパール・ド・ランベールだとされている。

1705年ピョートルは要塞を石造にするように命じ、その全責任者として、経験豊かな、築城専門家ドメニコ・トレジーニを抜擢する（トレジーニは1703年コトリン島の要塞建設のためにロシアに来た）。1706年に始まった建設作業は1733年に完了する。要塞は難航不落の防御施設として建てられたが、その戦闘能力を発揮することはなく、その存在事実だけで敵を威嚇した。

1712年、要塞の敷地内で壮大なペトロパヴロフスキー（聖ペテロと聖パウロ）聖堂の建設が始まった。

ピョートル門
双頭の鷲の紋章

トランペットを吹くマーキュリー

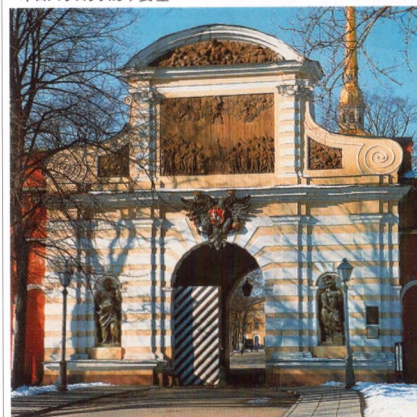
アレクセイ・ズーボフの絵（1711年）のペテルブルグ上空を飛ぶマーキュリーの図は、芸術・商業庇護者によって、新聞「公報」の挿絵に用いられた。

ピョートル門

初期のピョートル凱旋門は木造で、トレジーニによって1707-1708年に建設された。その時ドイツ職人コンラード・オスネルによって木のレリーフ（浮彫）装飾が施された。約10年後、トレジーニが門を石で再建した時、優れたフランスの彫像家、ニコラ・ピノによって制作された寓意的な彫像がオスネルの作品に加わった。

門の彫刻のうち6体は、現在その姿を残していないが、現存するものは非常に印象的だ。1722年に門に設置された巨大な鉛の双頭の鷲（重さ約1.5t）はフランソワ・ヴァッスーの設計によって鋳造され、アレクサンドル・ザハーロフによって絵が描き込まれた。

ネヴァ川川岸のペトロパヴロフスカヤ要塞

ペトロパヴロフスカヤ要塞

ピョートル門

ペテルブルグ様式

ピョートル・バロック

ピョートル時代、ロシア芸術は懸命に新しい世界観とロシアに広まった改革の精神を反映する新しい様式を模索していた。ペテルブルグの戦勝と共にできあがった様式は、最初のうちはヨーロッパの片田舎風の垢抜けないものだった。しかしそれはたちまちすぐれた建築家たちによって独自のものに作り変えられた。この時に現れたのがドメニコ・トレジーニを筆頭とする、ヨハン・ブラウンシュヴェイグ等の建築家だ。彼らはペテルブルグで輝かしい作品をつくり、世界芸術の歴史に名を残した。

ポルタヴァの戦い（1709年）後、ピョートルはイタリアやフランスから著名な職人をロシアに招き始めた。1715に年宮廷建築家ジャン・バティスト・レブロン（1679－1719）と老熟の建築家バルトロメオ・カルロ・ラストレッリ伯爵（B.=F.ラストレッリの父）、1718年に有名な建築家カルロ・フォンターナの弟子であるニコロ・ミケッティとの間で契約が結ばれた。彼らは新ロシア建築・彫刻に豪華さと輝きを与え、従来のものとは全く異なる芸術を作り上げた。このピョートル様式を誰より素晴らしく、鮮やかに表現したのは、アレクセイ・ズーボフだ。彼の作った版画彫刻はこの時代の重要な資料の一つである。

バルトロメオ・カルロ・ラストレッリ
「ピョートル1世」
1723-1729
（国立エルミタージュ所蔵）

ペトロパヴロフスカヤ（聖ペテロと聖パウロ）要塞

ピョートル1世
南東（君主）
稜堡の建設を担当

アレクサンドル・メンシコフ
北東（メンシコフ）
稜堡の建設を担当

ガヴリール・ゴロヴキン
北（ゴロヴキン）
稜堡の建設を担当

ニキータ・ゾートフ
北西（ゾートフ）
稜堡の建設を担当

ユーリー・トルベツコイ
南西（トルベツコイ）
稜堡の建設を担当

18世紀初頭、ペテルブルグ要塞は「ルイ14世が作ったフランスのダンケルクに優るとも劣らない」として「一般商業用語辞典」（パリ,1723年）の中で取り上げられていた。しかし、多くの要塞と違い、ペトロパヴロフスカヤ要塞は創立者ピョートル大帝の建築記念物だ。

歴史情報

ピョートル1世とその最初の妻エウドキヤ・フョードロヴナの息子である皇太子アレクセイ（1690－1718）は、後のピョートル2世を産むシャルロッテ・クリスティーナと結婚した。ピョートル1世に対する謀反を企てたアレクセイはペトロパヴロフスカヤ要塞に投獄され、最高裁判所によって反逆の罪で死刑判決が宣告されたが、実刑を受ける前に要塞内で死亡した。

トルベツコイ稜堡の監房

稜堡

稜堡とは要塞の突角部のことで、17世紀ヨーロッパで火気の攻防に備えて発達した。稜堡の銃眼（要塞にある銃を置く穴）は襲撃者に猛烈な射撃を浴びせることを可能にし、要塞を実質上、難攻不落にした。ペトロパヴロフスカヤ要塞は高さ6mの厚い壁がある6つの稜堡を持つ。その内部に広々とした監獄が作られた。この監獄はピョートル時代に既に囚人収容に使われていた。

「ピョートル1世」

ピョートル1世のブロンズ像制作の際、彫刻家ミハイル・シェミャーキンは、有名な歴史に残る手本であるバルトロメオ・カルロ・ラストレッリ作の皇帝（ピョートル）の蝋仮面（デスマスク）に基づいた（1725年；p. 77）。ブロンズのピョートル1世像は1990年代初期、シェミャーキンによって国立ペテルブルグ歴史博物館に寄贈された。

ニコライ・ゲ
「ペテルゴフでアレクセイを尋問するピョートル1世」
1871年（トレチヤコフ美術館, モスクワ）

造幣局鷲の紋章

1724年モスクワからペテルブルグに移された造幣局は、当初、トルベツコイ稜堡とナルィシュキン稜堡の中にあった。ここで貨幣や記念メダル、ラストレッリが設計した計画図が鋳造された。鋳造用の原型は、アンドレイ・ナルトフによって設計されたピョートル1世の旋盤工場で作られた。

ペテルブルグ
創立記念メダル
18世紀（造幣局）

半月堡（ラヴェリン）

ラヴェリン（ラテン語.RAVELERE「仕切り」）は要塞の外に建てられた、要塞を援護する壁で、鋭角の壁（>）が外に突き出した形をしている。半月堡は最も攻撃を受けやすい要塞の門を守るために建てられた。キルシュテンシュテインの計画では、ペトロパヴロフスカヤ要塞に二つの半月堡が予定されていた。が、その時建設されたのは、東の冠塞だけだった（同じ目的の建築物だが、二つの「角」があった）。1731－1740年ミーニフ男爵の努力によって、ペトロパヴロフスカヤ要塞に半月堡が現れた。2つの半月堡には女帝アンナ・イヴァーノヴナ（旧表記：イオアンナヴナ）の父と祖父の名、アレクセイ（西）とイオアン（東）がつけられた。

舟小屋

ピョートル1世の命令によって1720年に要塞に移された舟小屋の建物は、1765年建造された（建築家アレクサンドル・ヴィスト）。現在オリジナルは中央海軍博物館（P.41）にあり、舟小屋の中には正確な模型が置かれている。

左の側堡とオリリオン（仏語. orillon「耳」）
ゴロヴキン稜堡

要塞設計図
ブルハルド・クリストフ・ミーニフ作成.1730年
（ロシア国立海軍艦隊公文書保管所）

冠塞（クロンヴェルク）

ⓘ 1–f7, p. 323

ペトロパヴロフスカヤ要塞の北からベリョーザヴィ島にかけてある溝は、守りとしては弱かった。そこで1705年、要塞の反対側の岸に追加の防衛施設、王冠の形をしたクロンヴェルク（独語.Kronwerk「冠塞」）を建設した。外形にそって水路を掘り、それを水で満たした。

イオアン橋

19世紀中頃までこの橋は要塞と町をつなぐ唯一の橋だった。要塞への東側進入路がイオアンの半月堡によって守られた1730年代、この名を授かった。橋は何度も再建と修復を繰り返した。

冠塞
ペトロパヴロフスキー（聖ペテロと聖パウロの）聖堂
納骨所
メンシコフ稜堡
ピョートル門
イオアン橋
イオアン門
イオアン半月堡
君主稜堡
ネヴァ門
ネヴァ川
ナルィシュキン稜堡
トルベツコイ稜堡
ボタルド
アレクセイ半月堡
ゾートフ稜堡
造幣局
船小屋
ゴロヴキン稜堡

信号用大砲

空砲で正午を告げる信号用大砲が要塞内に最初に現れたのは、1873年になってからのことだ。それまでは、フランスの天文学者デリーリ（1736）のイニシアチブで、正午になるとクンストカメラの天文台から信号を送り、海軍省の壁から「ドン」という大砲の音を出していた。

ナルィシュキン稜堡

要塞の南稜堡は、要塞稜堡の建設の責任者だった6人の高官の一人、キリル・ナルィシュキンにちなんで名づけられた。1733年アンナ女帝の命により、ナルィシュキン稜堡にロシア帝国の旗（祝祭日）、要塞の旗（平日）を掲げるための旗塔が建てられた。ピョートル時代、要塞旗は君主稜堡（南東）に立てられていた。

ボタルド

1730年代につくられ、フランス語でbatardeau（一時的なダム）と呼ばれたボタルドはかつて要塞と半月堡の間の二つの防護壕の水量確保のために用いられていた。ボタルドにはネヴァ川の水をひき入れる水門が取り付けられており、門を擁護するための塔があった。その後、壕は不要になって埋め立てられ、門は花崗岩で埋められた。ボタルドは要塞の特徴を示す名所のひとつになった。

ペトロパヴロフスキー
(聖ペテロと聖パウロ)聖堂

ジャン・マルクナッチエ
「甲冑姿の
ピョートル1世
肖像画」
1717 年

ペトロパヴロフスキー教会は1712年ドメニコ・トレジーニの設計によって建てられた。トレジーニはアルプス地方や北欧寺院建築の特徴をもつ形式を完全に再現した。聖堂(3つの身廊を持つバシリカ会堂)の設計、内装、使徒聖ペテロと聖パウロへの称賛、全てが、カトリック及びプロテスタントの伝統に則っていた。建設は遅々として進まず、ピョートル1世の逝去時(1725年)までに建てられたのは壁と「銅で覆われ、さらに金箔が施された木造の尖塔を除いて全て石造りの(O.デ・ラ・モトレー、1726年)」鐘楼だけだった。後に聖堂はペテルブルグの多くの建物同様、火災に遭い、何度も修復された。

フリューゲル(風向計)

1719年聖堂の尖塔に銅に金箔が施された十字架が設置され、その上で、銅製の天使像が軸の周りを回っている。

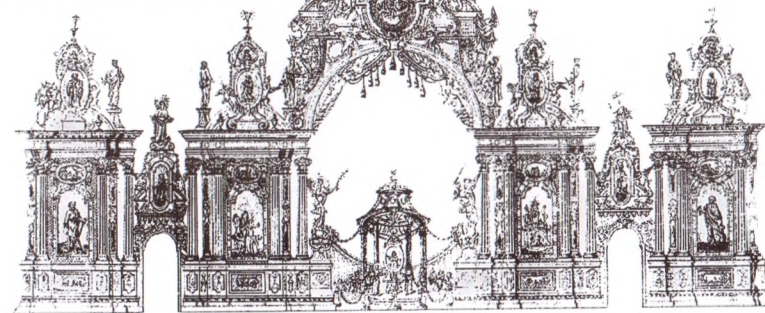
天使像は1770年代、1780年代(A.リナルディの設計)、1850年代の修復時に取り替えられた。現在のフリューゲルは高さ約6mで重さ500kgだ。

鐘楼

トレジーニは聖堂に高い尖塔を頂いた多段式の鐘楼(高さ約106m)を加えた。鐘楼の上に時刻を告げる時計が設置されたが、1756年の落雷で発生した火災で焼失してしまった。火災後尖塔は再建されたが、建物の外装部分はその時には復元されなかった。鐘楼の上にはオランダ人職人オールトクラッスによって製作された新しいチャイム時計が設置された。

1857-1858年技師ドミートリー・ジュラフスキーは、その時までに傾きかけていた初期の木造尖塔を耐久性にすぐれた高さ約50mの金属尖塔に取り替えた。この修復後、鐘楼の高さは120mを越えた。

イコノスタス

透かし彫りの木製イコノスタス(聖障画)は1720年代モスクワで制作された。その後ペテルブルグに運ばれて、組み立てられ、金箔が施された。設計の著者はイヴァン・サルードヌイかドメニコ・トレジーニかと言われているが、2人の共同制作であるとも言える。このイコノスタスは豪華で細部まで細かく装飾が施されたバロック様式の建築物であるが、透かし模様によって向こうの至聖所が見えるという点では、恐らく正教会で唯一のものであろう。

イコノスタスの輪郭

イコン画「アレクサンドル・ネフスキー」

イコン画「玉座の生神女」

イコン画「玉座のキリスト」

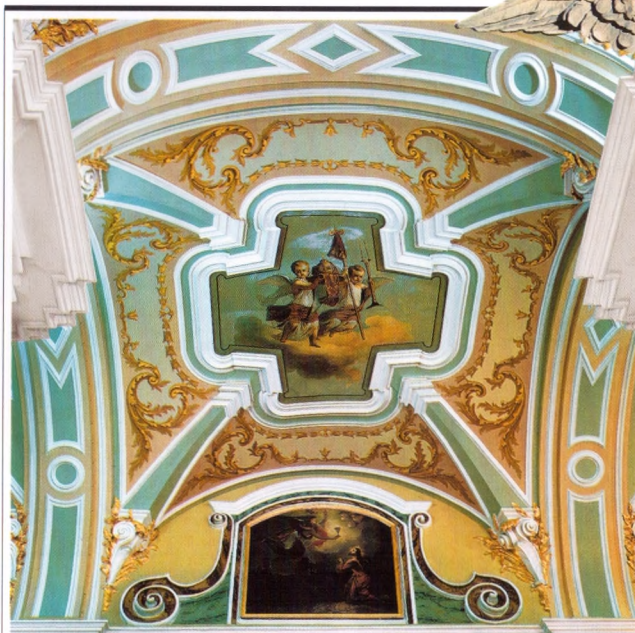
イコン画「キリストの復活」

イコノスタスのイコン画

「これらのイコンはアンドレイ・メルクーリエフを中心としたイコン画家たちによって書かれた。その内容は特別にモスクワのイコン画を複写したものが使われた」(18世紀半ばの資料より)

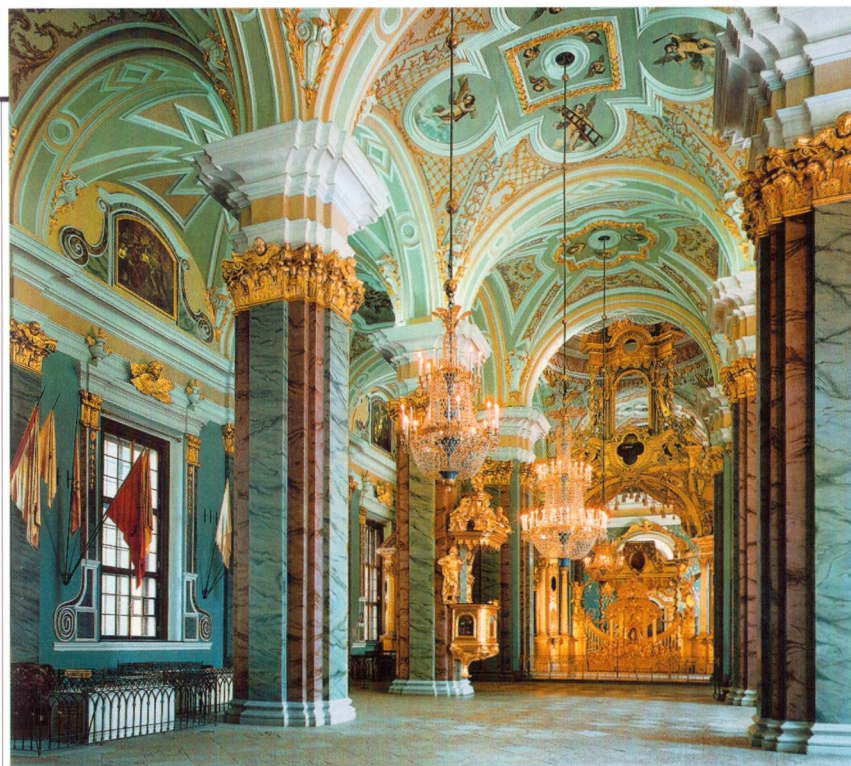
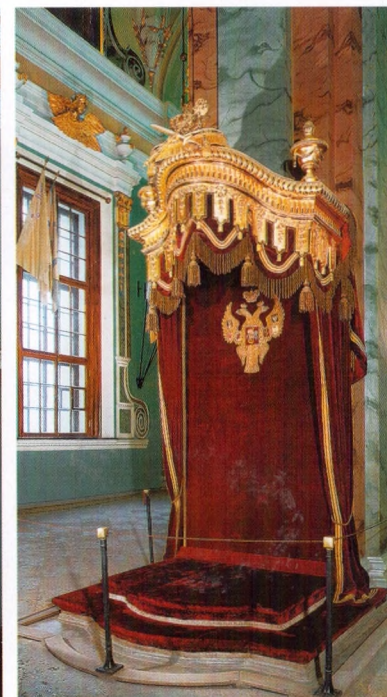
イコンは伝統的に木の板にテンペラで描かれた。染料として金粉と高価な洋紅、群青、紺碧(瑠璃色)等が用いられた。ここから生まれる永遠の輝きと色彩の豊かさは、ペトロパヴロフスキー聖堂のイコンをピョートル時代以前のルーシのイコンに近づかせている。しかし、大部分の構図の基本は西ヨーロッパのモデルから借用された。

ペトロパヴロフスキー（聖ペテロと聖パウロ）聖堂

聖堂ファサード窓上のキューピッド像

北の身廊（ネイブ）の天井画

聖堂の内装は主にモスクワの武器庫の画家によって描き込まれた。全ての浮彫・彫刻装飾作業はロシアに招聘されたヨーロッパの職人達によって行われた（ピョートル時代以前、ロシアで彫刻は発達していなかった）。聖堂の窓の上に18点の絵が置かれている（画家A.マトヴェーエフ, G.グゼリ他）。その主題は丸天井の装飾画と同様、磔前のキリストの最後の1週間である「受難週間」である。受難週間の高まるドラマ性によってキリストの復活を華々しく見せている。イコノスタスの中央イコン画の碑文は次のように書かれてある。「Тако подобаше пострадати Христу и внити во славу свою（キリストは苦しみを受け、復活する）」聖堂の柱の一つに1732年金箔の説教壇（職人N.クラスコプ）が設置され、同時期アンナ女帝のためにトレジーニの設計によって皇帝の席が設けられた。

イコノスタスの中心部

ペトロパヴロフスキー聖堂のイコノスタス、皇帝門の細部

中央身廊（ネイブ）

主教の説教壇

皇帝の席

ペトロパヴロフスキー（聖ペテロと聖パウロ）聖堂

ピョートル1世とエカチェリーナ1世の棺

ニコライ2世とその家族、側近の埋葬所

皇帝納骨所

ペトロパヴロフスキー聖堂は建設開始後、モスクワ・クレムリンのアルハンゲリスク聖堂にかわって、納骨所になった。ピョートル1世の命令でペトロパヴロフスキー聖堂に最初に埋葬されたのは若くして亡くなった子供達で、1725年ピョートル自身も葬られた。

カザンの生神女（聖母マリア）モザイク画
大公納骨所ファサードの3つのイコン画の1つ

その後、歴代の皇帝の納骨所となった。1860年代アレクサンドル2世の命令でこの時までに聖堂にあった墓標は全て、金箔が施された十字架と鷲の紋章がついたカララ産の白大理石の墓標に変えられた。他のと違う石棺（碧玉とばら輝石）は1906年アレクサンドル2世とその妻の埋葬の際、設置された。エカテリーナの宝座のきわめて簡素な墓標には最後の埋葬者ニコライ2世と皇后、子供たちと近臣の名が刻まれている。ロマノフ最後の皇帝一家の葬儀は1998年に行われた。これは皇帝一家がエカテリンブルグで銃殺（1918年）されてから80年後のことだった。

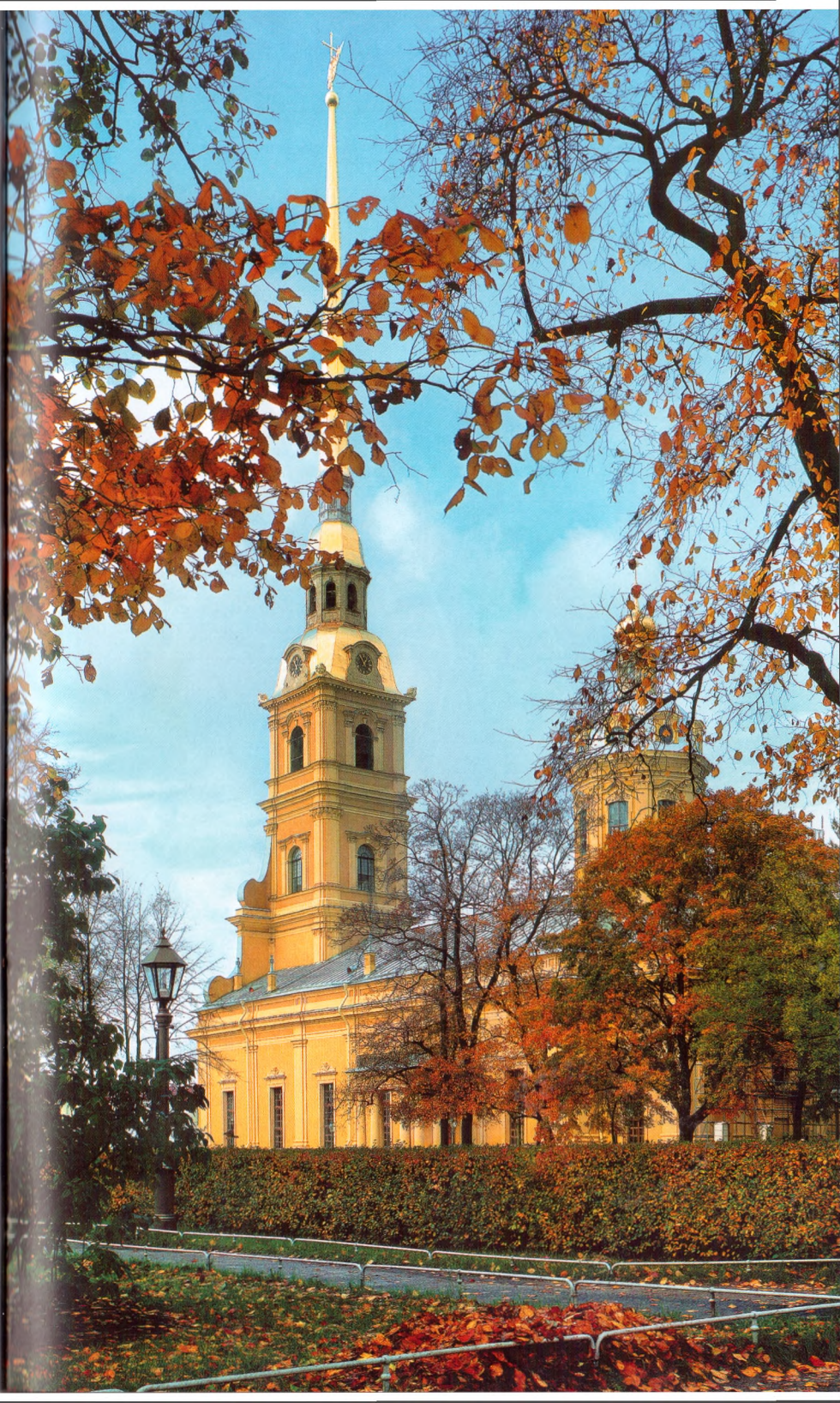
大公納骨所

大公納骨所

1896-1908年建築家ダヴィド・グリムとレオンチー・ベヌアの設計によって建てられる。このアレクサンドル・ネフスキーをまつった至聖所のある重厚な建物は、ルイ13世時代の建物を模して造られ、ロマノフ家ではない人々の墓所に定められていた。革命後、納骨所内の全ての墓は運び出され、この建物は博物館の保管所、展示会場として使われるようになった。この建物に隣接している造幣局の展示室では、18-19世紀の貨幣製造の歴史を紹介している。

ニコライ2世，皇后アレクサンドラと子供たち 1913年

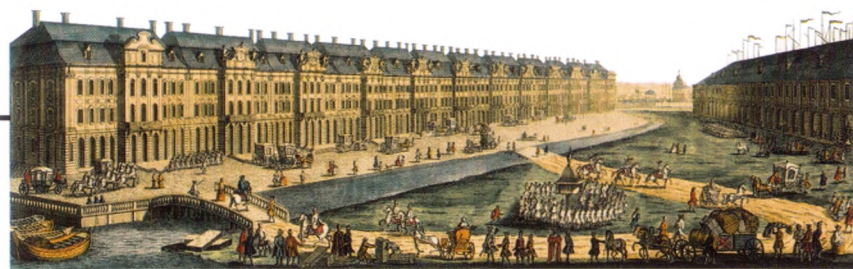
ヴァシーリー島

ⓘ 4

サンクト・ペテルブルグで最も大きい島（面積1000ヘクタール以上）。ヴァシーリー島はその鋭い先端でネヴァ川を大ネヴァ川（南西）と小ネヴァ川（北西）に分ける。1716年フランス人建築家ジャン＝バティスト・レブロン（1679-1719）は、ピョートルにヴァシーリー島を中心とした都市設計案を見せた。これは、当時、理想的な町のプランだった。公共の建物に囲まれ、広大な庭園と広場、噴水や記念碑があり、ロシアだけでなく西ヨーロッパでも先端をいく街頭照明システムがあった。しかし採用されたのは、もっと地味でコストの低いトレジーニの設計案だった。ピョートルは彼にアムステルダムの町をモデルにするよう熱心にすすめた。島はブロックごとに罫線がひかれ、運河で分けられ、運河に沿って一列に石造の家が建てられた。また、島の東端に貿易港が建てられ、その中に石造のアーケード式商店街と取引所が建てられた。ヴァシーリー島を「新しいアムステルダム」にするというピョートルの計画は実現しなかった。性急に造られたため、運河の水は流れず、たまった水によって建物が腐りはじめた。他にも諸事情により、運河の溝は次々と埋めたてられ、18世紀末までには2、3の運河を残すのみとなった。当時のピョートルの設計を想起させるのは、島の3つの主要な幹線道路バリショイ（大）、スレードヌィ（中）、マールィ（小）大通りと交わる何本もの厳密な幾何学配置の通り（リーニヤと呼ばれる）だ。

スモレンスク墓地
クセーニヤ・ブラジェンナヤ
礼拝堂

小ネヴァ川
Малая Нева
フィンランド湾
Финский залив
ホテル
「プリバルチースカヤ」
フェリーターミナル
「海の駅」
フィンランド湾
Финский залив

12省の建物
中央海軍博物館
ロストラの灯台柱
取引所橋
БИРЖЕВОЙ МОСТ
ネヴァ川
НЕВА
宮殿橋
ДВОРЦОВЫЙ МОСТ
ロストラの灯台柱
クンストカメラ
科学アカデミーの建物
ЛЕЙТЕНАНТА ШМИДТА
メンシコフ宮殿
芸術アカデミー

エフィーム・ヴヌーコフ
「12省とヴァシーリー島の
ガスチーヌィ・ドヴォール
（百貨店）」1753年
マハーエフの下絵による版画

ヴァシーリー島の埠頭

ピョートル時代、町の港のひとつとして形成され始めた。これは現在ペテルブルグの主要なフェリー・ターミナルの一つである。

L. ミロポリスキー
ミハイル・ロモノーソフの肖像画
1787年

ヴァシーリー島のストレルカ

ⓘ 2-e3

ヴァシーリー島のストレルカ（岬）は町の発展と共にペテルブルグの主要な飾りの一つとなった。建築家トマ・ド・トモンは19世紀初めその建築学的見地から有利な位置を利用し、取引所のアンサンブルのための土台にした。

聖エカチェリーナルーテル派教会

ユーリー・フェリテンの設計によって1768-1771年に建てられたドーリア式柱廊玄関の小さい教会。その建設にはヴァシーリー島の多くのルーテル派共同体の資金が使われた。

科学と博物館の中心

ヴァシーリー島がペテルブルグ最大の科学の中心地になったのは、1718年のロシア初の自然科学博物館クンストカメラの創立がきっかけだった。それからヴァシーリー島の壮麗な建物の一つに科学アカデミーが置かれた。1730年代に国で最初の若い将校のための教育施設として、ヴァシーリー島のメンシコフ宮殿が移譲された。1740年代、ヴァシーリー島に芸術アカデミーのクラスが設立され、1770年代に鉱山大学、19世紀にペテルブルグ大学等が建てられた。20世紀初めまでにヴァシーリー島の南部は巨大な科学都市になり、ほとんど全ての著名なロシアの学者達がここで研究に従事していた。

歴史情報

伝説によると、アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌィは紀元1世紀、当時未開の地スキタイで布教活動を行っていたことで、ロシアで特に尊敬されている。使徒アンドレイは異教徒達によって、斜めの十字架（×印）に磔にされた。この十字架の形（×）はピョートル1世によって1699年に設立されたロシア海軍の艦隊の旗印になった。だいたい同じとき、アンドレイ（ペルヴォズヴァンヌィ）勲章も創設された。使徒アンドレイの聖骸の一部は黄金の箱に入れられ、ピョートル1世によってペトロパヴロフスカヤ要塞の下に埋められている。

アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌィ聖堂

ヴァシーリー島の主要な正教寺院。1732年設立。1764-1780年石造りの建物に改築された（建築家A. ヴィスト、A. イヴァーノフ）。2003年、聖堂に使徒アンドレイの聖骸が納められた。

ヴァシーリー島のストレルカ（岬）

ヴァシーリー島 ストレルカ

ヴァシーリー島

海の女神像のついたロストラ（船首）

ヴァシーリー島ストレルカ（岬）の再建プランはアレクサンドル1世の命令で建築家アンドレヤン・ザハーロフによって作成された。これによってペテルブルグ開発は新段階を迎えた。このとき建築家達の重要な課題は、大規模な建築アンサンブルの設計だった。1805–1810年ストレルカのアンサンブル建設作業は建築家トマ・ド・トモンに任された。彼は巨大な取引所の建物を造った。これは広大な港広場の中心（取引所広場）になった。ここに埠頭を建設するために、島の東端の埋め立て作業が行われた。その後、波止場はネヴァ川の方向に100mせり出した形で完成した。こうしてネヴァ川を挟んで宮殿川岸通り、海軍省川岸通り、ペトロパヴロフスカヤ要塞のパノラマが広がるアンサンブルが出来上がった。その時トマ・ド・トモンはネヴァ川への下り階段のそばに、船首の形をした飾りがついている円柱の灯台を2体造った。

「ロストラ灯台柱の台座の彫像」4体あり、ヴォルガ、ドニエプル、ヴォルホフ、ネヴァ川の4本の川を象徴している

ロストラの灯台柱

取引所（中央海軍博物館）

ⓘ 2-e3, p. 323

1917年までペテルブルグの取引所はヨーロッパで最大の貿易・金融の中心地のひとつだった。そこでは数多くの取引が交わされた。取引所広場のアンサンブルはロシアの経済力と商船隊を具現化していた。1939年取引所の建物に、海軍省から世界最大級の博物館の一つである中央海軍博物館が移された。博物館はピョートル1世によって設立された海軍省内の展示室が基になっている。現在博物館には70万点を超える展示物（5万7千点以上の造形芸術品を含み、アイヴァゾフスキー、アレクサンドル・ブリュロフ、カラヴァック、ハッケルト、コンジの油絵もある）が所蔵されている。コレクション全体が16世紀以降の海軍事業の歴史を物語っている。

取引所

ロストラの灯台柱

ⓘ 2-e3

このタイプの建物の歴史は初期ローマ時代にさかのぼる。338年オクタヴィアヌス（アウグストゥス）はアンティウムの海戦でアントニウス・クレオパトラ連合艦隊を破った際、その艦隊のロストラ（ラテン語．rostrum「くちばし，船首」）を6体切り取り、戦利品として持ち帰り、ローマの演説台に飾った。それ以後ローマでは敵船の船首を戦利品として持ち帰る伝統が生まれた。この伝統はポエニ戦争の間もローマ市民によって続けられ、古典主義時代にヨーロッパ中で復興した。ストレルカのロストラ灯台柱以前に建てられたもので有名なのは、リナルディによってツァールスコエ・セローに建てられたチェスマの記念柱（p.197）だ。しかし、高さ32メートルのロストラ柱は、大きさ、建築、豊かな彫刻、装飾、全てにおいて優っている。

倉庫と税関

ⓘ 2-e3

ストレルカのアンサンブルを形成している建築物は全て取引所と同様、最初は行政港の建物として設計された。その中に倉庫と税関がある（1820年代 –1832年，建築家 I. ルキーニ）。1829年、南倉庫の中はロシア産業博覧会の展示会場だったが、1894年からここは科学アカデミー動物学博物館（p.332）になった。1725年に創立された科学アカデミー自体も、1728年にヴァシーリー島に移され、ストレルカに建てられたアンナ女帝の母プラスコヴィヤ・サルティコヴナの宮殿内に置かれた。1783年エカチェリーナ2世の命でジャコモ・クヴァレンギがアカデミー専用の建物を造る。1917年以降、北倉庫にはアカデミー地質学博物館が置かれ、税関の建物は科学アカデミーロシア文学大学（プーシキンの家（p.324）膨大な資料が保管されている）になった。

取引所建物，海軍博物館の中央ホール

税関前の埠頭

大学川岸通り

ⓘ 2–b5,e4

冬宮から見るクンストカメラ

大学川岸通りはストレルカ(岬)からメンデレーエフ・リーニヤまで恐らくトマ・ド・トモンによって設計されたと考えられ、1805-1810年、技師ゲラルドとこの仕事を請け負った実業家C.スハーノフの指揮のもと、花崗岩が敷き詰められた。

その次の区間芸術アカデミーまでは、少し後になって1831-1834年に整備された。川岸沿いの建築物は全て18世紀に特徴的なピョートル・バロック様式で建てられた。ここに4つの有名な記念建築物、クンストカメラ(1718-1734)、12省の建物(1722-1742)、ピョートル2世の宮殿(1710年代-1727)、そしてメンシコフ宮殿(p.44)がある。

ピョートルのクンストカメラの展示室

大学川岸通り

クンストカメラ

ⓘ 2-e3, p. 322

1710年代にピョートル1世によって創設されたロシア初の博物館は、ドイツの偉大な学者ゴットフリート・ライプニッツの立てた構想に基づいて組織された。ピョートル1世によって集められたコレクションは分類され、博物館の展示品の基礎になった。「クンストカメラ」(独語. Kunstkammer「芸術の資料室」)という名が定着した建物は、1718年に起工され、1734年に完成した。その初期の設計案は、ゲオルギー・マッタルノヴィ(いくつかの資料によると、アンドレアス・シュリュッテルの参加のもと)によって練られたが、建設の過程で、ゲルベル、キアヴェリ、ゼムツォフによって弱冠変更された。塔、丸屋根(クーポラ)が上にある建物中央部は解剖室、ロシア最初の天文台用に定められた。ここに直径3m以上の「ゴットルプの地球儀」と呼ばれる地球儀(1664年,ドイツ)が設置された。

この地球儀はピョートル1世の長女で、後の姉アンナ女帝への求婚のために、ホルシュタイン公カール・フリードリヒによってピョートル1世に贈られたものだ。

クンストカメラ建物上の太陽系のモデル

シュミット中尉橋から見る芸術アカデミー

ボルゲーゼ像(大滝, ペテルゴフ)
紀元前1世紀の古代彫刻の複製
(本物はルーブル美術館所蔵)

「12省」

ⓘ 2-d3,4

正面がネヴァ川に面している長い建物(383m)は、1717年ピョートル1世によって10省と元老院、宗務院の建物に定められた。1722－1742年、ドメニコ・トレジーニの設計によって、何人もの建築家が参加して建てられた。1819年、この建物にアレクサンドル1世によって創立されたペテルブルグ大学が移された。1830年代、建物のほとんど全ての部屋(「ピョートルの間」以外)は改造され、中央部に正面階段が造られた。 ペテルブルグ大学と関係する優れた学者としてチェーブィシェフ、メチニコフ、チミリャゼフ、メンデレーエフなどの名前が挙げられる。

芸術アカデミー

ⓘ 2-b5, p. 318

1757年初代長官となったイヴァン・シュヴァーロフのイニシアチブで創立された。アカデミークラスとマスタークラスはその時、ピョートル1世の教育係だったゴロヴキン伯爵と公爵ドルゴルーキーのヴァシーリー島屋敷の中にあった。1764－1788年、アカデミー建築クラスの教授ジャン＝バティストとアレクサンドル・ココリノフの設計によって、その場所に重量感はあるが、コンパクトで機能的な新しい建物が造られた。二人は設計の中に、理想的な照度の広々としたアトリエを実現し、さらに設計の中に中庭も加えた。

アカデミー前の埠頭を飾っているのは、3500年前(アメンホテプ3世の時代　紀元前1455-1419年)エジプトの閃長石で彫刻された2つの巨大なスフィンクス像だ。彫像は1820年代の発掘作業中、発見され、ニコライ1世の命で購入された。

芸術アカデミー前のスフィンクス像のある埠頭

芸術アカデミー複製品ホール

歴史情報

芸術アカデミー博物館はロシアで最も古い芸術博物館の一つだ。これはここに個人コレクションを寄贈したイヴァン・シュヴァーロフによって創立され、若き画家・彫刻家の育成を目的としている。アカデミーの教育は、世界芸術の優れたモデル(特に古代・古典)の研究に基礎を置いている。そのため、アカデミーはイタリア、英国、フランス、ドイツの博物館から彫刻傑作の複製品を注文した。それらは当初まずアトリエで複製の見本として用いられた。アカデミーのアトリエで、ペテルブルグの宮殿や郊外の公園のための彫像が制作された。アカデミーで購入され、保存された複製品は貴重だ。それらは全て18－19世紀にオリジナルから直接複製されていたが、記念物の保護に関連した禁止令のため、20世紀にはすでに不可能となった。

このスフィンクス像は、トンの設計によって川岸通りが拡張、整備された1832-1834年に設置された。

2–c4, p. 318

メンシコフ宮殿

1710–1720年代、建築家ジョヴァンニ・マリオ・フォンターナとゴットフリード・ヨハン・シェーデリは、メンシコフ伯爵のために、ヴァシーリー島のネヴァ川岸に当時としては大きい4階建ての宮殿を建てる。これはペテルブルグのメンシコフの数多くの邸宅の中で最も素晴らしく、また唯一保存されているものだ。宮殿は、ピョートル1世から与えられた広大な領地の中心に建てられた。宮殿の起工は1710年だ。

メンシコフの紋章

ポルタヴァの戦いにおける勝利の後、ペテルブルグで初めての石造建築物の建設が始まった。当時の設計図や有名なズーボフの版画によると、宮殿の正面玄関前の大ネヴァ川の川岸に、石造の埠頭が建てられていた。宮殿の後ろは広大な庭園が小ネヴァ川の川岸近くまで広がっていた。同時代人の証言によると、庭園は左右対称に造られ、彫像や噴水で飾られていた。正面玄関上部の装飾部(かつて彫像で飾られていた)と正面入口の柱廊玄関をのぞくと、ファサードを平行に分断する屋根裏と、小さい窓のあるこの宮殿は、典型的なピョートル・バロックである。ジョヴァンニ・マリオ・フォンターナが設計したのは、一連のホールとコリント・トスカーナ式の円柱のあるメイン・ロビーだ。宮殿の拡張とその後の整備に加わったのはドメニコ・トレジーニ、ジャン＝バティスト・ルブロン、バルトロメオ・カルロ・ラストレッリ(1717–1719)らだ。ピョートル時代、この宮殿は国家の官邸として使われた。ここでピョートル1世は大使のレセプション、宴会、舞踏会を催したり、会議を行ったりした。

1730年に即位したピョートル1世の姪のアンナ女帝は、1731年にこの宮殿を自らが創立した陸軍貴族学校に移譲する。後に陸軍幼年学校と改名された学校は、貴族の子息のためのロシアで初めての教育施設になった(1917年まで宮殿内にあった)。建物の老朽化により宮殿の内装が再建築され、宮殿の西と東の両側に隣接する建物が建てられた。いくつかの改築を経ているが、今日の宮殿の外観は初期のものに近い。1967年宮殿は国立エルミタージュに移譲された。

歴史情報

アレクサンドル・ダニーロヴィチ・メンシコフ(1673–1729)はピョートル1世の偉業を支えた盟友だった。

北方戦争の時、司令官としての才能と勇敢さを発揮し、目覚ましい昇進を遂げた。1702年伯爵の称号を受け、1707年最高位の公爵の称号を受けた。1703年インゲルマンランド(サンクト・ペテルブルグ県の)知事に任命される。1725年ピョートル1世の死後、その寡婦エカチェリーナ1世を帝位につかせ、実質的に政治の実権を握る。1727年エカチェリーナ1世の死後、失寵し、全ての称号、財産を失った。(ペトロパヴロフスカヤ要塞で亡くなった)アレクセイ皇太子の息子ピョートル2世によって東シベリアへ流刑され、そこでまもなく亡くなった。

マリヤ・リトフチェンコ＝アニクーシナ「メンシコフ宮殿 南庭のメンシコフの胸像」2002年

アレクセイ・ズーボフ「ヴァシーリー島とメンシコフ宮殿」版画. 1710年代

宮殿教会の燭台

建物の設計は明るさ、シンプルさが特徴だ。1階の丸天井の数部屋は白黒の陶器のタイルが敷き詰められている。正面階段は、祝典用アンフィラーダ(続き部屋)、メンシコフとその妻の私室が置かれている二階へ続いている。

2階の大広間

地階の部屋(衛兵詰所)

肖像画の間

正面階段

画家未詳「民族の類型」17世紀 オランダ派

中国風客間

くるみ材の書斎

宮殿の住居部と仕事部屋は、木、革、同じ絵は一枚もないオランダ製タイル、絵が描かれてある中国の絹で飾られていた。壁の絵や調度品は主にオランダ製で、食器は中国・イタリア製だ。ピョートル1世はオランダの建築・インテリアにいたく感銘を受け、メンシコフはピョートル1世が気に入るように多少豪華さを付け加えて、ほとんど文字通り宮殿内に、オランダ風のインテリアを再現した。この内装は、画家ロギール・ヴァン・デル・ヴァイデンやピーテル・デ・ホフの絵の中に見ることができる。

1階の応接間

絵画の間

中国風通し間

ヨハン・ゴットフリード・タナーウエル
「マリヤ・メンシコヴァの肖像画」
1720年代

海の書斎

ネヴァ川左岸.
中心部の広場

2—e5, 2

ネフスキー川の南部水域の南境に沿って、ペトロパヴロフスカヤ要塞、ヴァシーリー島ストレルカ（岬）の向かいに、壮大な冬宮、海軍省、イサーク聖堂、元老院、宗務院の建物が次々に現れる。これら全ての建築物の歴史は、1710年、ネヴァ川左岸の開発がヴァシーリー島の開発速度を追い越し始めたときに遡る。19世紀前半、著名なヨーロッパのアンサンブルはいろいろな理由ですたれ、ペテルブルグは、ある一人の旅行者の評によると、ヨーロッパ建築の都になった。当時ネヴァ川左岸中央部は最終的に、今日我々が見るのと同じ外観に形成されていた。その左岸はロシア建築の顔、ロシアのゆるぎなさ、豊かさ、力の象徴になった。

青銅の騎士（ピョートル1世像）

海軍省周辺

ペテルブルグの大陸部の開発は海軍省の建築と共に始まった。当時、海軍省は運河に囲まれた、稜堡タイプの要塞施設で、造船所でもあった。ネヴァ川に面した海軍省の周りにしだいに町の公的部分（官庁）のアンサンブルができあがった。海軍省前から主要な幹線道路が敷かれた。最初に敷かれたのはネフスキー大通りだ。

イサーク聖堂

19世紀初めにヨーロッパの全ての都は、ローマ（ヴァチカン市国）のサン・ピエトロ大聖堂にひけをとらない壮大な大聖堂を持つ欲求にとらわれていた。サンクト・ペテルブルグでそういう意図で造られたのが、イサーク聖堂だ。ピョートル1世によって海軍省の東に建てられた小さな木造教会の後に建てられた。

イサーク聖堂の展望台からの眺め

冬宮周辺

世界で最も大きい宮殿の一つは、町の創立（1750年）後わずか25年で建設された。冬宮周辺にすぐに壮大な建築風景が形成され始め、それは1830年までに完成する。

左岸中央から見るネヴァ川のパノラマ

「ピョートル大工」像のある海軍省川岸通り

宮殿広場

町の中央広場は冬宮と参謀本部のユニークな建築「対立」によって世界的に評価の高い作品となっている。橋・通り・大通り・川岸を通して、宮殿広場は町の中心部の全アンサンブルとつながっている。

ミリオンナヤ通り

冬宮小運河とミリオンナヤ通り

18世紀初めに出来たネヴァ川とモイカ川間の小さい運河は、冬宮の小運河（カナフカ）と呼ばれた。小運河の岸、エルミタージュ劇場の場所に、かつてペテルブルグで最初の皇帝宮廷ピョートル1世の冬宮があった。小運河は宮殿広場とマルス広場をつなぐミリオンナヤ通りと交差している。ミリオンナヤは今ではペテルブルグの最も古い、絵のように美しい横道の一つだ。

冬の小運河

宮殿川岸通りと海軍省川岸通り

海軍省と冬宮そばの川岸通り. 1853年(?)

宮殿・海軍省川岸通りは、フォンタンカ川とデカブリスト広場（旧元老院広場）間のネヴァ川左岸の一つのアンサンブルを形成している。1704年ピョートル1世はここに海軍省を建て、ネヴァ川の上流、フォンタンカ川の河口に夏の庭園を建てた。1712年、海軍省と夏の庭園の間の中心に皇帝の宮殿、その東西に宮廷の重臣の屋敷を一列に建てた。1750年代、ラストレッリは海軍省の東に大規模なバロック様式の建物、冬宮を建てた。この宮殿により、ペテルブルグはヨーロッパの美しい都の一つになる。エカチェリーナ2世は川岸通りに沿って、一列に隣接した小エルミタージュ、旧エルミタージュ、エルミタージュ劇場（ピョートルの冬宮）宮殿アンサンブルをネヴァ川の上流へ拡張した。当時夏の庭園の川岸地区には大理石宮殿があり、海軍省の西にピョートル1世の青銅の騎士像があった。二本の川岸通りは著しく拡張され、花崗岩が敷き詰められていた。アンサンブル史の次の重要な段階は19世紀初期、2人の優れた建築家の名前と関係がある。ロッシとザハーロフは海軍省と元老院の建物改築の立役者である。同世紀の中頃までに建築されたイサーク聖堂の巨大なクーポラの絵を完成させた。

宮殿船着場の獅子像（1832年）

宮殿川岸通り

長さ約1.4km（宮殿橋から夏の庭園まで）重要記念物：冬の宮殿、ウラジーミル宮殿（学者の家）、大理石宮殿、夏の庭園。18世紀半ばまでに川岸通りは木製の杭で強化されていたが、2ヘクタールの新しい冬宮（約22,500㎡の広場のある）の建設着工とともに宮殿前にある川岸通りはラストレッリの設計によって広げられ、花崗岩で舗装された。1760年代エカチェリーナ2世は川岸通り全てを花崗岩で舗装する決定を下す。

エルミタージュのアンサンブル*(p. 54)*

ネヴァ川に面した4つの建物。その中で最もすばらしいのは冬宮だ。

ウラジーミル宮殿

ⓘ *2-h3*

ペテルブルグにある旧貴族の邸宅（19世紀までに約30あった）の一つで、アレクサンドル3世の弟ウラジーミル・アレクサンドロヴィチ大公のために、フランス大使官邸があった場所に建てられた。建物のファサードはフィレンツェのスフォルツォ宮殿に似せ

ウラジーミル宮殿

てつくられた。ここでは、あらゆる建築様式の豪華なインテリアを見ることができる。歴史的に古いファサードと豪華な様式の異なる内装、このようなコントラストは19世紀後半のペテルブルグ貴族邸宅の特徴だ。

大理石宮殿

大理石宮殿*(p. 128)*

エカチェリーナ女帝の命によってグリゴーリー・オルローフのために建てられた。南のファサードはマルス広場、ミリオンナヤ通りに面している。

夏の庭園*(p. 130)*

ピョートル1世によって1704年につくられる。1760年代、宮殿川岸通りの整備の際、ネヴァ川方向からの庭園の古い柵はユーリー・フェリテンによって設計された新しい柵に取り替えられた。

宮殿橋

ⓘ *2e-3*

長さ250mの跳ね橋。橋が上がった時の高さは27m。1900年の初期の設計はフランスの会社「バチニオーリ」に依頼されたが、会社側が提示した金額が高すぎたため、実現しなかった。1911年長い討議の末、A.プシェニツキーの設計案が承認され、コローメンスコエ工場協会と契約が結ばれた。建設開始は1912年で開通したのは1916年、第一次世界大戦の時だった。

宮殿橋

多くの非難にもかかわらず、橋はネヴァ川の水上に広がり、ほとんど完璧なフォルムを持っている。

海軍省川岸通り

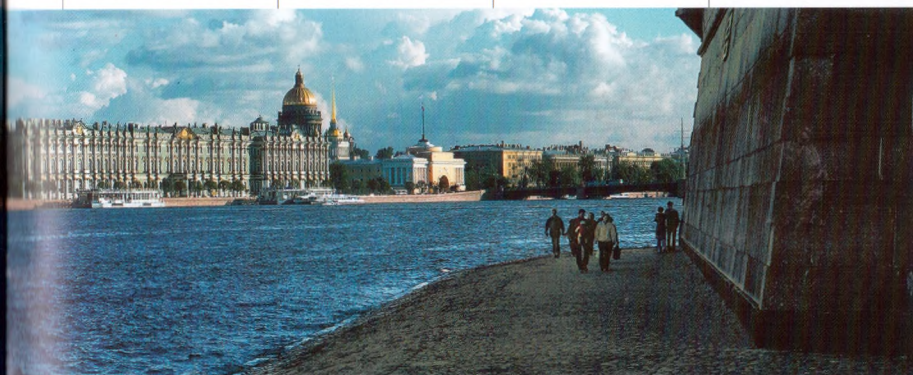
ペテルブルグで最も短い川岸通り（約0.5km）。宮殿橋の西、海軍省の建物に沿って、元老院広場（英国川岸通り）まで延びている。この通りはいくつかの彫刻で飾られた花崗岩の埠頭で有名だ。19世紀前半、海軍省前に広大な港があり、非常に絵画的な場所だった（p.50上図参照）。

海軍省*(p. 82)*

ピョートル1世によって建てられる。類似した形で何度も修復されたが、修復を重ねることにより素晴らしくなった。

デカブリスト広場*(p. 96)*

ペテルブルグで最も古い広場。最初のイサーク聖堂を囲む広場として、ピョートル1世時代にできた。

宮殿広場

パレード広場は、ローマ皇帝時代（紀元前1世紀）から国家儀式、凱旋式典などに使われていた。（初期の役割は人を集めるための場所だった）歴史上最も有名なパレード広場は、古代ローマの「マルス広場」である。これと同じようなものがパリとペテルブルグにもある。17－19世紀の絶対王政の時代が、パレード広場の最盛期で、当時ヨーロッパ全ての都にあった。

19世紀初めまでロシア帝国のパレード広場は衛兵交代、皇帝の外出（馬に乗った廷臣を伴った）に使われていたが、その中でも特に重要だったのが閲兵式とパレードだった。 広場は国家のゆるぎなさを賛美する儀式の格好のステージだった。

アレクサンドル1世は1812年の勝利（対ナポレオン戦争）後、宮殿広場をパレード広場にすることに決めた。それまで広場には、冬宮のほかにザハーロフによって改築された西ファサードがあった。皇帝は1818-1820年代に自らの最良作品、参謀本部を建てたロッシを広場建設作業に引き入れた。ロッシはその期待を裏切らず、世界で最も完成度の高い広場を造り上げた。

広場の形成

宮殿広場の南の輪郭を丸くするという考えはユーリー・フェリテンが考案した。1780年代エカチェリーナ2世の命によって、冬宮の南の建築物の整備の問題を解決した。フェリテンは、当時、冬宮前に広がっていたモイカ川沿いの屋敷群を円弧状のファサードでで閉じた。1820年代カルロ・ロッシは参謀本部を建て、フェリテンのアイディアを完成させた。1834年冬宮の正面入口と参謀本部の間の凱旋門を結ぶ直線上に、モンフェランによって素晴らしい記念碑が建てられた。このアレクサンドルの記念柱の設置で広場の形成に終止符が打たれる。

海軍省本部

(p. 82)

この建物はロシア海軍の最高機関、海軍省本部のために建てられた。ペテルブルグ中心部の全て広場（宮殿、イサーク、元老院）は海軍省を取り巻いていた草地に建てられた。しかし当初、草地の中の巨大な建物だった海軍省は周りに大きな建物が建設されるにつれ、しだいにその存在が小さくなっていった。

冬宮から見るアレクサンドル庭園方向の宮殿広場の眺め

参謀本部

(p. 78)

参謀本部建設時、ロッシの前に立ちふさがった問題は、皇帝の居城である冬宮とのバランス、冬宮の優越を保つことだった。

近衛連隊本部

ⓘ *2-g4*

1837-1843年アレクサンドル・ブリュロフの設計でパーヴェル1世の屋内練兵場の建物内につくられた。ピョートル時代にはここに有名な機械技師アンドレイ・ナルトフが住んでいた屋敷があった。

新エルミタージュの男像柱 *(p. 55)*

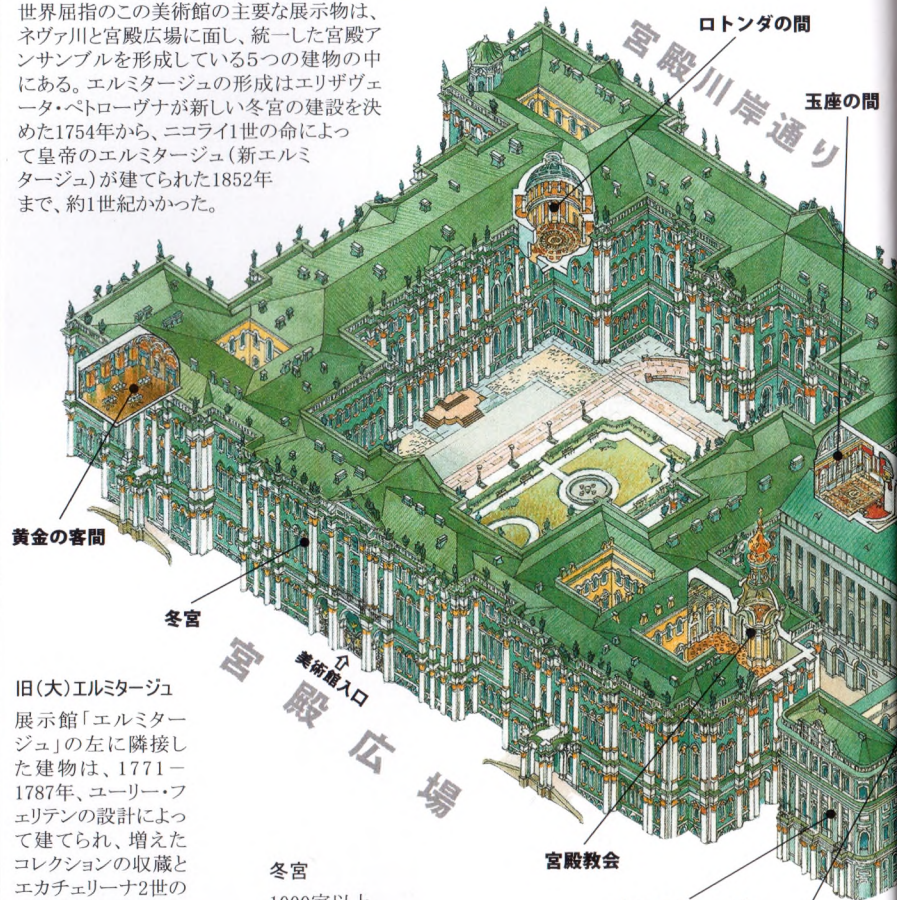
10体の巨大な像（高さ5m）は1844-1849年アレクサンドル・テレベニョフによって制作された。古代ギリシャ・ローマ時代以来の彫像家となった彼は、原料として、大胆にも花崗岩を使用する。モデルにはシチリアのゼウス神殿の大理石の男像柱（紀元前480年）を使ったが、テレベニョフはそこから独創的で大胆な作品をつくり上げた。彼の男性柱像は力強く、重い天井を支えている若者達だ。この姿に同時代の人たちは自分たちの姿をよみとった。

新エルミタージュの男性像のある柱廊玄関

グリゴーリー・チェルニェツォーフ「宮殿広場でのアレクサンドル記念柱の完成式典パレード」1834年（国立ロシア美術館所蔵）

i 2–g4, p. 318

国立エルミタージュ美術館

世界屈指のこの美術館の主要な展示物は、ネヴァ川と宮殿広場に面し、統一した宮殿アンサンブルを形成している5つの建物の中にある。エルミタージュの形成はエリザヴェータ・ペトローヴナが新しい冬宮の建設を決めた1754年から、ニコライ1世の命によって皇帝のエルミタージュ（新エルミタージュ）が建てられた1852年まで、約1世紀かかった。

旧（大）エルミタージュ

展示館「エルミタージュ」の左に隣接した建物は、1771－1787年、ユーリー・フェリテンの設計によって建てられ、増えたコレクションの収蔵とエカチェリーナ2世の図書室用に定められた。19世紀半ば、窓がネヴァ川に面している正面アンフィラーダ（続き部屋）のインテリアはアンドレイ・シュタケンシュナイダーによって再建された。

冬宮

1000室以上、
総面積約46,000m²の、
世界有数のスケールの大きい宮殿。
冬宮は1754－62年、B.F.ラストレッリの設計によって、女帝エリザヴェータ・ペトローヴナのために建てられた。中庭のある、閉じられた正方形の形をした巨大な3階建ての建物は、明るさと設計の合理性で際立っており、空間建築の分野で古典主義の素晴らしい成果を先取りしている。4隅の翼廊（四角い部屋）は初期、ここに定められたホールの用途の重要さを強調している（玉座の間、正面階段、教会、帝室劇場）。平らな屋根を飾っているのは、何度も修復を重ねた典型的なバロック様式の彫刻だ。

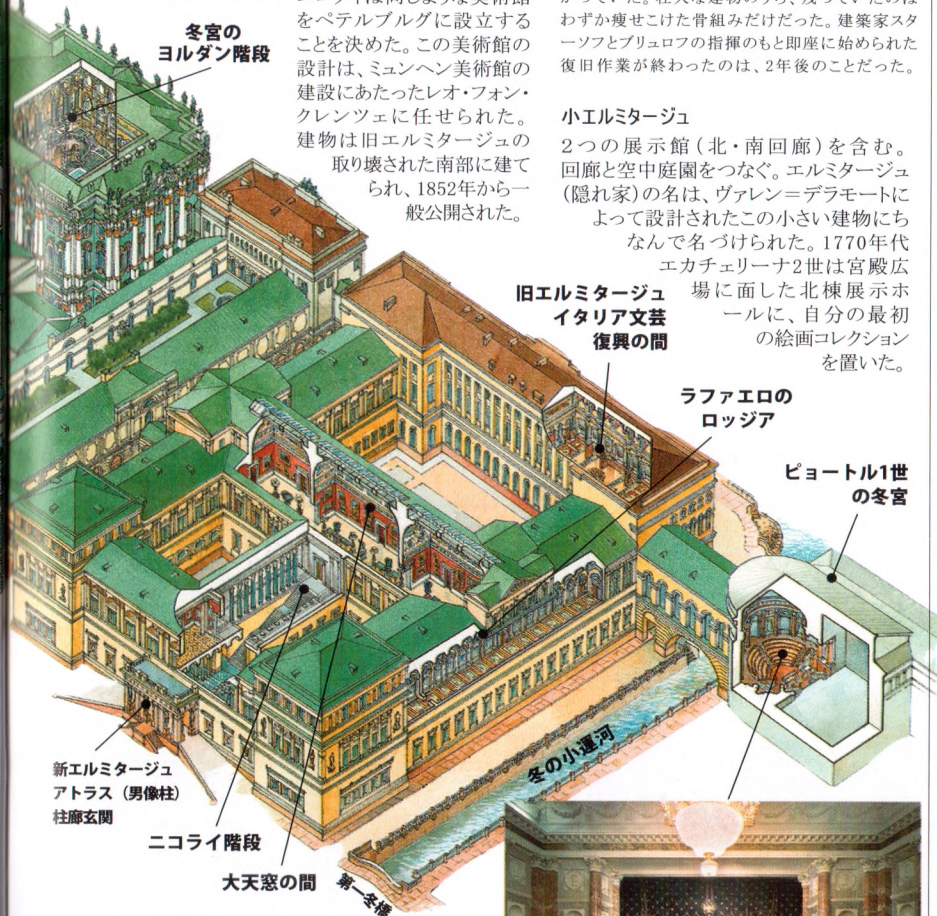
宮殿広場から見た
冬の宮殿

宮殿教会の
クーポラ

宮殿教会

冬宮の南東の翼廊に建てられた。ラストレッリの装飾が保存されているいくつかのインテリアの一つだ。

新エルミタージュ

1838年ニコライ1世はドイツに滞在中、ミュンヘンの誇りである有名なピナコーク美術館を訪れた。ロシアに戻ったニコライは同じような美術館をペテルブルグに設立することを決めた。この美術館の設計は、ミュンヘン美術館の建設にあたったレオ・フォン・クレンツェに任せられた。建物は旧エルミタージュの取り壊された南部に建てられ、1852年から一般公開された。

冬宮の大火災

発生したのは1837年12月で、火は一晩中燃えていた。幸い、隣の建物に燃え移るのを防ぎ、宮殿から高価な調度品の大部分を広場に運び出すことができた。翌朝、市民の前にはひどい光景が広がっていた。壮大な建物のうち、残っていたのはわずか痩せこけた骨組みだけだった。建築家スターソフとブリュロフの指揮のもと即座に始められた復旧作業が終わったのは、2年後のことだった。

小エルミタージュ

2つの展示館（北・南回廊）を含む。回廊と空中庭園をつなぐ。エルミタージュ（隠れ家）の名は、ヴァレン＝デラモートによって設計されたこの小さい建物にちなんで名づけられた。1770年代エカチェリーナ2世は宮殿広場に面した北棟展示ホールに、自分の最初の絵画コレクションを置いた。

エルミタージュ劇場

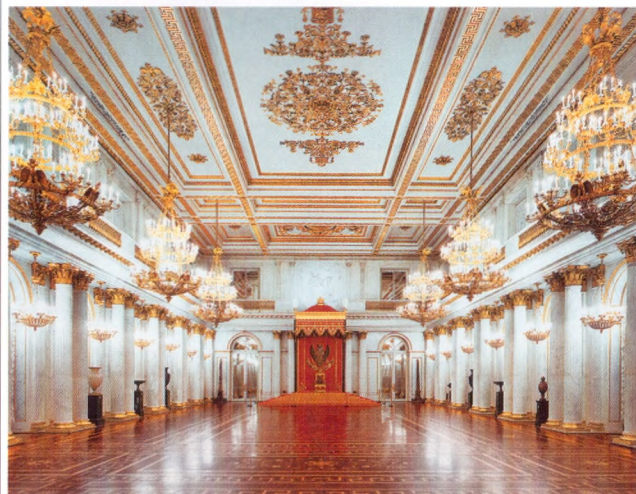
i p. 327

アーチ型の通路で宮殿アンサンブルとつながっている劇場の建物はジャコモ・クヴァレンギによってエカチェリーナ2世の命で1786年に建てられた。円形劇場の外観の劇場ホールは、彫像、レリーフがふんだんに取り入れられたローマ様式で装飾されている。

エルミタージュ劇場

エルミタージュ
冬宮の公用インテリア

ヨルダン階段の装飾の一部

ゲオルギウスの間（大玉座の間）（198ホール）

正面アンフィラーダ

ラストレッリは冬宮の4つのリザリート（翼廊）を設計した時、リザリート（コーナー）内にそれぞれ中央階段、玉座の間、宮殿教会、劇場を置くことにした。このような建設は17世紀から18世紀初頭にかけてのルイ15世の時代に生まれた慣例に起源をもつ。そのとき形成された国務用に公用ホールを使うというシステムは、発達した宮殿の儀式にみごとに合致していた。このシステムは少し変えられて、18世紀エリザヴェータ女帝時代に採用された。冬宮の公用の部屋には2階部分（仏語.bel-etage）が用いられ、そこへは「ヨルダンの階段（別称：大使の階段）を通っていった。玉座の間にたどり着くまで、高官の客、外国大使、様々な代表団はアンフィラーダ（続き部屋）を通って行かなければならなかった。その部屋の一部は皇帝の偉業、ロシアの戦勝を讃えてつくられた。

1762年までにラストレッリが建築できたのは主要な広間だけだった。彼が去った後、エカチェリーナ2世の要望で内装作業にあたったのは、ヴァレン＝デラモート、クヴァレンギ、チェヴァキンスキーとフェリテンだ。北南リザリート（翼廊）にあった玉座の間は女帝の命令で東の翼部に移された。そこにはクヴァレンギの設計によって特別な棟が増築された。これはラストレッリが考案した、調和のとれた設計を乱し、宮中に二つの公用アンフィラーダをもたらした。そのうちの一つ（東、または大アンフィラーダ）は大玉座の間、宮殿教会に続き、もう一つ（ネヴァ側アンフィラーダ）はロトンダの間とかつて玉座の間だった客間に続いている。1833年東アンフィラーダにオーギュスト・モンフェランがピョートル1世をたたえる小さい玉座の間をつくった。

1837年の大火災後、主要公用ホールと二つの公用アンフィラーダはヴァシーリー・スターソフの指導で再建された。彼は今日西ヨーロッパの銀製品が展示されている紋章の間のみ設計し直した。また、火災に強い資材を使って内部構造が大幅に変えられた。

ピョートル大帝（小玉座）の間（194ホール）

紋章の間（195ホール）

ヨルダン階段

ペテルブルグ様式

ラストレッリ・バロック

「バロック」（仏語.baroque「奇妙な」）という用語が建築様式の定義として使われはじめたのは19世紀以降のことだ。哲学者達はこの「バロック様式」の根本にあるのは「気まぐれでかわりやすい、人生のはかなさ、限りない宇宙における人間の孤独である」であると考えた。中世の「夢のような人生を」というテーゼはバロック時代になると「世界は劇場である」という解釈になり、芸術の表現手段として人々に興奮と驚きを与えるバロックが受け入れられた。（「バロックは驚愕の芸術だ」）

P.＝K. コンラード
バルトロメオ・フランチェスコ・ラストレッリの肖像画
1750年代－1760年代
（国立エルミタージュ所蔵）

建築におけるバロックはルネッサンス時代に復興した古代ギリシャ・ローマ時代の厳格なスタイルを破壊し、新しい、情熱的で装飾豊かな空間をつくりだした。代表的なのが、凹凸のある装飾が施された天井、巨大な窓、数え切れないほどの鏡、空がどこまでも広がるような天井画、立ち並ぶ円柱、大きさ・形の異なるニッチなどにその特徴を見ることができる。バルトロメオ・フランチェスコ・ラストレッリ（1700年頃-1771年）はバロックを見事に花咲かせる才能を持っていた。その名声は生存中すでに、外国にまで知れわたっていた。

ラストレッリはイタリアで生まれた。1716年、有名な彫刻家である父バルトロメオ・カルロがピョートル1世に招聘され、父と共にロシアに来た。1725年父のすすめにより海外留学生活を送り、1730年に戻ると、すぐにアンナ女帝の宮殿建築の作業に参加した。エリザヴェータ女帝即位後、ラストレッリは最初は一時失寵状態だったが、すぐにまた宮廷建築家になり、ツァールスコエ・セローのエカチェリーナ宮殿、ペテルブルグの冬宮、スモーリヌイ修道院などの一連の壮大なアンサンブルを建設する。それらは18世紀半ばのペテルブルグ建築様式を定義し、「エリザヴェータ時代のバロック」あるいは建築家に敬意を表して「ラストレッリ・バロック」と呼ばれた。ラストレッリが創り出した建築物がそのまま一つの時代をあらわしていたとも言える。

エリザヴェータ・ペトローヴナの死後、エカチェリーナ2世は1000ルーブルの年給をつけてラストレッリを退職に追いやった。その後、年老いた建築家がロシアの地を踏むことはなかった。

エカチェリーナ宮殿
（ツァールスコエ・セロー, p.194）
「琥珀の間」
の装飾の一部

皇帝アレクサンドル1世

大元帥クトゥーゾフ

バグラチオン将軍

エルモーロフ将軍

1812年祖国戦争ギャラリー

ここでは対ナポレオン戦争に参戦した英雄達を讃え、その肖像画が飾られている。このギャラリーは1826年、カルロ・ロッシの設計で「紋章の間」と「大玉座の間」の間にある6部屋のアンフィラーダ(続き部屋)の中につくられた。アレクサンドル1世はこのギャラリーを肖像画室にすることを思いつき、対ナポレオン戦争に参加した300人以上の司令官、将官の肖像画制作を傑出した肖像画家ジョルジュ・ドゥに依頼した。アレクサンドル1世の死後、ギャラリーにフランツ・クリューゲルによる馬上のアレクサンドル1世の肖像画(1830年代)がかけられた。皇帝は1808年ナポレオンから贈られた名馬「エクリプス」に跨った姿で描かれている。1814年パリに入城した際もこの馬に乗ってい

1812年祖国戦争ギャラリー(197ホール)

公用ホールと住居部の客間

冬宮の西(海軍省側)と南アンフィラーダ(宮殿広場側)のインテリアは19世紀のものだ。当初(ラストレッリの設計では)このアンフィラーダの両側に位置するリザリート(翼廊)に玉座の間と三階建ての劇場があった。エカチェリーナ2世の命で玉座の間はクヴァレンギによって東アンフィラーダに増築された棟に移された。クヴァレンギは冬の小運河の奥に劇場用の別の建物を建てた。そしてその場所には帝位継承者たちの住居が設けられた。1837年の火災後、アレクサンドル・ブリュロフはアンフィラーダを再建した。またニコライ1世の希望で、南アンフィラーダの中にニコライ1世と皇后のために新しい階段(10月階段)を境とする公用室、私室を建設した。その時代のブリュロフのインテリアが今なお残っているのは、アレクサンドルの間、白の間、孔雀石の客間、黄金の客間、そしてかつて戦争画ギャラリーが置かれていた5室(ファリコネの間他)だ。アレクサンドル2世は皇太子時代、西アンフィラーダと南西リザリートを割り当てられていたのだが、そこに1850年代アレクサンドル2世妃マリヤ・アレクサンドロヴナの客間が建設された。その作業を担当したアンドレイ・シュタケンシュナイダーとガラルド・ボッセーは、ここに「第二のロココ様式」の小客間と緑の食堂、「ロシア様式」の黄金の客間などの一際豪華な数室をつくった。1890年代には宮殿の北東リザリートに皇太子ニコライ1世の住居部(図書室、白の食堂)がつくられた。

黄金のグリフォン
(289ホール)

孔雀石の間(189ホール)

マリヤ・アレクサンドロヴナ妃の小客間(306ホール)

黄金の客間(289ホール)

マリヤ・アレクサンドロヴナ妃の緑の食堂(188ホール)

ニコライ2世の図書室(178ホール)

エルミタージュ展示物

国立エルミタージュは世界屈指の絵画コレクション(約3万点)を誇り、紀元前2万5000年から今日に至るまでの歴史的価値の高い芸術品を数多く展示している。

四輪箱馬車
元帥の間(193ホール)に展示されている。ピョートル1世が1717年にパリを訪問した際に注文し、1720年代にロシアに届いた。

イランと近東の芸術
イスラム教以前の中世の芸術。十字軍の時代ここからヨーロッパに次々とオリエント文明の文化が押し寄せた。

ビザンティン芸術
展示物はそれほど多くないが、3ホールにまたがり東ローマ帝国の、イコン画、彫金の牙細工を展示している。

13-19世紀の西欧絵画
エルミタージュで最大の展示部門。有名な絵画が展示され、興味深い。ここではジョルジョーネ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエロ、レンブラント、ルーベンス、ヴァン・ダイク、ハリス、クラナッハ、ヴェラスケス、ゲインスボロ他、全ヨーロッパ派の巨匠の傑作が展示されている。

トーマス・ゲインスボロ「青衣の貴婦人」1770年代 イギリス

ニコライ・プッサン「タンクレッドとエルミニア」1630－1631年 フランス

古代エジプトと近西アジア芸術
東ロビーを通り抜けた1階の2ホールにまたがっている。ここでは紀元前4000～2000年のナイル川やチグリス・ユーフラテス川地帯に形成された古代国家の貴重な記念物が展示されている。

古代ギリシャ・ローマ芸術
11万3000点を超える古代ギリシャ、エトルリア、ローマおよび黒海北沿岸のローマの植民地の芸術品を展示している。

カメオ「プトレマイオスと妃アルシノエ」紀元前3世紀 アレクサンドリア

骨壷 紀元前4世紀 エトルリア

クロード・モネ「庭の貴婦人」1867年 フランス

レオナルド・ダ・ヴィンチ「ベヌアの聖母」1478－1480年 イタリア

15－17世紀の西欧武器
「騎士の間」として有名な243ホールでは帝室コレクション(世界最大、1万5000点)の西欧武器を展示している。

ロギール・ファン・デル・ウェイデン「聖母を描く聖ルカ」15世紀 オランダ

東欧、シベリア、中央アジア、コーカサス他の古代文化
上記の地において近代文明の礎ができるまでの古代の歴史を紹介している。

宝物ギャラリー
展示品の中核をなしているのはピョートル1世の貴重なコレクションとスキタイ人の塚(墳墓)から発掘されたユニークなコレクションだ。ここでは歴代皇帝への贈り物も展示されている。ムガール帝国の伝説的な宝物庫からの品もある。

アントニオ・カノーヴァ「三美神」1813年 フランス

17－18世紀フランス芸術（245ホール）

17世紀オランダ絵画（245ホール）

騎士の間（243ホール）

冬宮とそれに隣接する建物群を合わせた2階の全部屋数は、ヨーロッパ諸国の有名な宮殿と競うことができる。

小エルタージュ、大（旧）エルミタージュと新エルミタージュは順番に1760年代、1780年代、1840年代に建てられたが、違う時代の建物であるというのは、外観からしかわからない。3つの建物の内部は通路、回廊で冬宮とつながっている。1世紀かけて、150ホールのにも上る調和のとれたインテリア・アンサンブルができあがった。これらは一部をのぞいて、非常に豪華な内装が施されている。これらのホールには西ヨーロッパとロシアの絵画、彫刻、美術工芸品の傑作が展示されるようになった。

全宮殿を国立エルミタージュに移譲した（1912年）後、美術館の展示は建物間の境を考えずに編成された。2階には19の部門を配置した。その中でもっとも広くとりあげているのが、イタリア、フランス、ロシア芸術部門である。騎士の間、イタリアの間、マヨルカの間、スネイデルスの間など、展示されてあるコレクションにちなんだ名前がつけられているホールもある。最も強い印象を与えるのは、14－18世紀のフランス芸術部門のホールだろう。1830年代から1840年初めにアレクサンドル・ブリュロフによって内装が施されたこれらの部屋にはニコライ1世の公用室がおかれていた。この中で特筆すべきは、1841年の皇太子アレクサンドル（後のアレクサンドル2世）の結婚に際して贈られた白の間だ。現在ここにはギュベール・ロベールの絵が展示されている。

木いちごの間：ヨーロッパ製陶器（305ホール）

白の間：フランス芸術部門（289ホール）

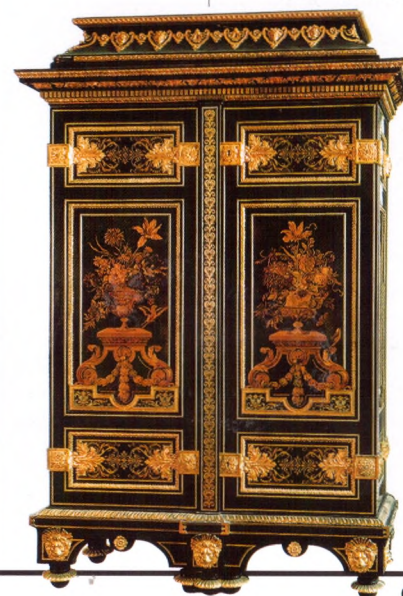
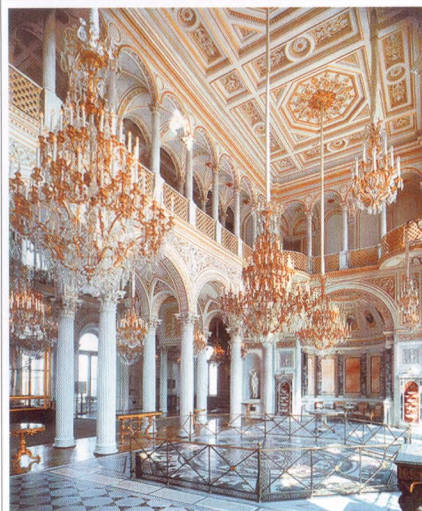
パーヴェル1世のマルタ騎士団長家具セット（172ホール）

ファリコネの間（285ホール）

ブール様式のたんす（18世紀後半, A=S. ブール工房, パリ）

エルミタージュ 2階展示ホール

パヴィリオンの間（204ホール）

時計「孔雀」

エカチェリーナ女帝の時代、小エルミタージュの南棟は「favourite（お気に入り）」と呼ばれていた。というのもそこには寵臣グリゴーリー・オルローフ、後には彼にかわってポチョムキンがペテルブルグ滞在中住んでいたからだ。南棟の内装の絢爛豪華さについては言い伝えがあるほどだ。北棟（ラモートフ・パヴィリオン）にはエカチェリーナ自身が住んでいた。ここにはいくつかの小さい部屋があり、そこに1850年代シュタケンシュナイダーがパヴィリオンの間という訪問者に最も愛されるホールを建築した。建築家はホールを円形のギャラリーと小さい噴水のあるムーア式庭園に似せてつくった。また、ここには英国時計技師コックスのユニークな音楽時計「孔雀」が設置された。これは1788年ポチョムキンがキングストン公妃から購入し、女帝に贈ったものだ。小エルミタージュの細長い回廊には、中世美術とオランダ絵画がおかれている。短い二本の回廊は小エルミタージュを旧エルミタージュ（大エルミタージュ）、または新エルミタージュとつないでいる。大エルミタージュはフェリテンによって1771-1787年に建てられ、その後アンドレイ・シュタケンシュナイダーが改装した。ここで注目に値するのはイタリアの間と呼ばれるホールで、そこではレオナルド・ダ・ヴィンチの作品が展示されている。

新エルミタージュのインテリアはレオ・フォン・クレンツェの設計で装飾され、天窓から彩光するガラス張りの天井の「天窓の間」をはじめ、どの部屋も十分な明るさを誇る。これらのホールの大きさは冬宮の公用ホールに匹敵するものだ。ここでは展示品群の中でもとりわけ大型の、バロック時代のイタリア、スペイン画家の絵が展示されている。

2階ホールの展示室を締めくくるのは、ラファエロのロッジアだ。これは細い回廊で、東面が冬の小運河とエルミタージュ劇場に向いている。ロッジアはエカチェリーナ2世の希望により1780年代にクヴァレンギによってヴァチカンにあるラファエロのロッジアを復元したものだ。この壁画の正確な模写はエカチェリーナ2世の依頼で、画家フリストフォル・ウンテルベルゲルによってイタリアで制作された。

イタリア・ルネッサンス（文芸復興）の間（214ホール）

古代絵画ギャラリー（241ホール）

大天窓の間（238ホール）

ラファエロのロッジア（227ホール）

ラファエロの間（229ホール）

エルミタージュコレクション

**エルミタージュの絵画コレクションは
人類が成しえた偉業というべき何千もの傑作を誇る。**

イコン画「聖ゲオルギウス」15世紀
ノヴゴロド派

シモーネ・マルティーニ
「本をもつ聖母」1340-1344年

レオナルド・ダ・ヴィンチ
「リッタの聖母」 1490-1491年

1796年エルミタージュの目録には3396点の絵画があった。オランダ、フランドル、フィレンツェ、ヴェネツィア絵画を含む豊富なコレクションは、ゴツコフスキー、ブリューリ、クローザ、ウォルポル、ボドゥエン、シュアゼーリ公爵らのヨーロッパ・コレクションだった。その中にはラファエロ、ジョルジョーネ、ロット、ティエポロ、ティツィアーノ、ヴェロネーゼ、クラナッハ、レンブラント、ルーベンスの値のつけられないほど価値が高い作品があった。

グゴー・ヴァン・デル・グス 「生誕崇拝」
1473-1475年 3部作の一部

ラファエロ（ラファエロ・サンティ）
「聖家族」 1506年頃

ルーカス・クラナッハ 「林檎の木の下の聖母子」
1510年代（?）

レンブラント・ハルメンス・ヴァン・レイン 「ダナエ」1636年

ピーテル・パウロ・ルーベンス 「水と大地の融合」1618年頃

19世紀初頭エルミタージュにルーベンスの「大地と水の融合」（1800年頃）が加わり、それに続いてジョゼフィーヌ・ボアルネ、銀行家クーズヴェルト（1814年）、ヴィルヘルム2世（1850年）らのコレクションも購入された。この中にはルーベンス、テニールス、ポッテル、ヴェラスケス、リベラの新しい傑作があった。20世紀最大の購入となったのがレオナルド・ダ・ヴィンチの「花を持つ聖母（ベヌアの聖母）」（1914年）でこれは1865年にエルミタージュ所蔵となったもう一つのダ・ヴィンチの作品「リッタの聖母」とともに貴重なコレクションだ。

ジョヴァンニ・バッティスタ・ティエポロ
「将軍の凱旋」1725年頃

ヤコブ・ヨールダンス
「豆の王様」 1638年頃

フランス・スネイデルス
「果物店」 1620年代（?）

ウィレム・クラス・ヘーダ
「蟹のある朝食」 1648年

エルミタージュ
コレクション

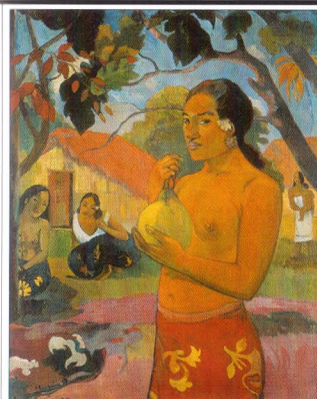
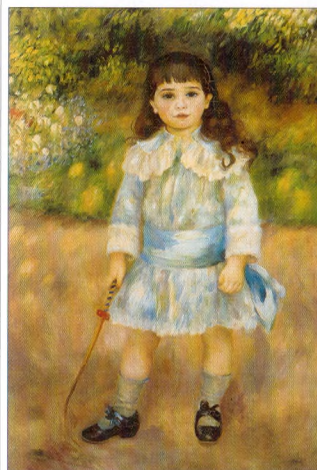
ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ「リュートを弾く若者」1595年頃

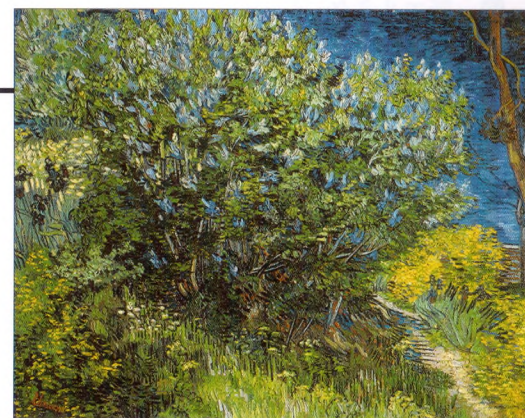
ジョシュア・レイノルズ
「ヴィーナスとアムール」1788年

もし様々な方法でエルミタージュに入った個人コレクションがなかったら、ここには古い西欧絵画の傑作だけでなく、1960年代のブームまで関心を持つ人が少なかった印象派も後期印象派の作品もなかっただろう。これらのコレクションの大部分はモスクワの有名な学問・芸術のパトロン、S.I.シューキンとM.A.モローゾフによって集められたものだった。1930年代に国有化されたコレクションは、エルミタージュとA.S.プーシキン美術館に分割して所蔵されている。また、商人エリセーエフが所有していたロダンの彫刻もエルミタージュ所蔵となった。

アントニオ・カナレット「フランス大使のヴェネツィア到着」1720年代

ジャック・ルイ・ダヴィッド「サッフォーとフォアン」1809年

コンスタン・トロイオン「市場へ向かう」1859年

ポール・ゴーギャン「果物を持つ女」1893年

ピエール・オーギュスト・ルノアール
「鞭を持つ子供」1885年

ヴァシーリー・カンジンスキー「冬」1910年代（?）

ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ「ライラックの茂み」1889年

アンリ・マティス「ダンス」1909-1910年

オーギュスト・ロダン
「永遠の春」
1884年以降

新エルミタージュ 1階展示ホール

ユピテルの間（245ホール）

「ユピテル像」ローマ 1世紀

新エルミタージュの展示は18室にまたがっている。これらのホールはレオ・フォン・クレンツェによって古代ギリシャ・ローマ作品を納めるために特別に設計された。ホール自体が芸術品で、空間をうまく利用し、美しい外装や浮き彫り、装飾画は目を見張るばかりだ。その中の一つ（128ホール）には巨大な装飾瓶（直径4.5m）が設置されている。これは1829-1843年コルィヴァニの研磨工場（アルタイ）の職人達によって一枚岩の碧玉からつくられたものだ。

コルィヴァニの装飾瓶（128ホール）

タヴリーダのヴィーナス
大理石複製
オリジナルは紀元前2世紀

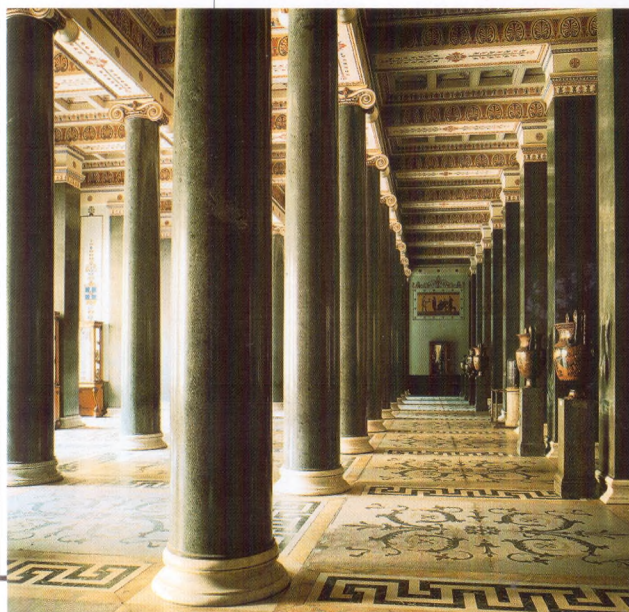
1718年ローマでの発掘で発見される。資料によると、彫像はピョートル1世によって購入され、当初は夏の庭園に設置されていた。それからタヴリーダ宮殿に移り、1850年に帝室エルミタージュにもたらされた。

タヴリーダのヴィーナスの間（245ホール）

ロシア語のアンティーチノスチ（ラテン語.antiqus「古代の」，古典古代芸術品）とは、通常、地中海の偉大な文明の遺産、古代ギリシャ、ローマ及びその植民地の記念物をさす。エルミタージュにはこの古典古代の芸術品が10万点以上も保管されている。

古代彫刻の最初の大きいコレクションがペテルブルグに入ったのは1787年、エカチェリーナ2世が英国銀行ライド・ブラウン社長のコレクションを購入した時だ。1862年帝室エルミタージュにカンパナ侯爵のコレクションが入ってきた。エトルリアの芸術品、高さ62.2cmの「花瓶の女王」他の素晴らしい陶器製品などだ。後にエルミタージュ・コレクション形成に大きく貢献したのは北黒海沿岸での発掘だ。

神話の1シーンが描かれた
デメテルとコラのギドリヤ
「花瓶の女王」

ギドリヤ（水入れ容器）は紀元前4世紀南イタリアで制作された。上部のレリーフはアペニン半島における豊穣の女神デメテルとその娘コラ（ペルセフォネ）信仰をたたえている。

二十列柱の間（130ホール）

エルミタージュ 冬宮 1階展示ホール

エジプト芸術ホール（100ホール）

古代エジプトコレクションの基礎がおかれたのは1825年、科学アカデミーがカスティリオーネのコレクションを購入した時だ。それは1860年代帝室エルミタージュに移された。

国王の執務官 「イビの石版」紀元前14世紀

古代エジプト芸術部門は冬宮の東翼（100ホール）にある。暗く、どっしりした半円を描く天井の展示室は、古代エジプト文化の雰囲気を醸し出している。エジプトは古来より死者信仰の地で、幾世紀にもわたり、数多くの職人が埋葬作業に携わってきた。人の彫像が作られるようになったのも、人の姿を不滅なものにしようとしたエジプトで始まった慣習だ。

神官像
紀元前15世紀末

アメネムハット3世像,
紀元前1850年－1800年

「ヴァラフシャ壁画の断片」ソグジアナ 7－8世紀

冬宮の西アンフィラーダには豊富な考古学展示が設けられている。そこでは紀元前2万年以降の中央・北ユーラシア大陸における古代の共同生活の様子、道具などを展示している。ここで特別の位置をしめるのはアルタイ、ステップ、コーカサスの権力者の墓から出土した宝物だ。またスキタイ、サルマト、フン族の芸術品も展示している。

リトアリアの容器
裕福な村長の墓から出土した。約5000年前、北コーカサスに局地的に発生したマイコプと呼ばれる文化のものとされる。

5号パジルク墓出土 埋蔵品の展示（26ホール）

5号パジルク墓出土 葬儀用木製馬車

5号パジルク墳墓出土
毛織絨毯と葬式2輪馬車
パジルク墳墓群（アルタイ）は20世紀半ばから世界に名を知られるようになった。初めて発見したのはソ連の考古学者達だ。これは紀元前5－3世紀アルタイ騎馬民族の墓だ。この永久凍土の地で、学者達は今なお、氷漬けの古代の品々の発掘と研究を続けている。

牡鹿の黄金装飾板
宝物ギャラリーの誇りは北黒海沿岸のスキタイ墳墓出土の黄金細工で、その中で最古のものは牡鹿の装飾板(31.7cm)だ。これは紀元前7-6世紀初めスキタイ族の首長の胸元や盾を飾っていた。

杯
世界的に有名な葬式用の杯。スキタイ墳墓紀元前4世紀出土。ケルチ(クリ＝オバ)近郊で発見された。ギリシャ職人が制作したとされる。

皇帝の埋葬用マスク
紀元3世紀パンティカペー(現在のケルチ)を治めていた王(リスクポリード3世?)が入った石棺が発見された。埋葬用マスクは古代の年代記に出てくる、東遊牧民のボスポルの最後の統治者の出身地であるタシュティク文明(南シベリア,紀元前2-1世紀)を想起させる。埋葬された人の首には黄金の首飾りがつけられていた。遺体のそばにタンガ(遊牧民が家畜につけた印)の形をした、一族の印の入った馬具が発見された。

戦いの光景の金櫛
有名なゾロハ墳墓の出土品。紀元前5-4世紀初頭、ギリシャの職人によって制作された。恐らくスキタイ神話の戦闘シーンを使ったものだろう。スキタイ人の櫛は男性の身づくろいのためのものだ。スキタイの戦士は髪を長く伸ばし、その髪をこういった櫛で頭の上でとめていたと多くの資料に記録されている。

耳飾
紀元前4世紀にギリシャ職人によって作られた黄金イヤリングの片方。豊作のシンボルが溢れる複雑な構造からは古代社会で装飾品は宗教的魔よけの役割を果たしていたことがわかる。

腕輪
ピョートル1世のシベリアコレクションの一つで、スキタイ＝サルマド動物様式の傑作だ。枠に色の異なる石が交互にはめ込まれている。このようなはめ込み細工は、後に中世ヨーロッパのゴシック様式、ロンバルド様式の基となる。

帯留め
透かし彫りの留金は紀元前6世紀に制作され、ピョートル1世のシベリアコレクションの一つとして、エルミタージュに入ってきた。騎乗の猪狩りの様子が描かれている。透かし彫り装飾に天らん石が巧みに編みこまれている。

水差し
10世紀又は11世紀にエジプトで制作された。水晶製。5世紀後に、トルコの職人によって金縁をつけられ、宝石で飾られた。

冠
ノヴォロシースク近くのホフラチ憤土で発見された。紀元1世紀のもので、サルマト人の巫女の冠だとされる。冠を飾っているのは石英の女神(タピチ?アルチムパサ?)の半像で、上部はスキタイ・サルマト様式の特徴的な構図で、生命の木とそれにかしずく動物達が描かれている。

香油入
金と銀製の容器はバラ香水、香油入れの物で、16世紀にインドの職人によって制作された。真珠、ダイヤモンド、ルビー、エメラルドがはめ込まれており、タージ・マハールを建てたムガール帝国皇帝シャー・ジャハーンのためにつくられた。1739年ペルシア人が宝物庫から略奪した。

ピョートル1世の冬宮

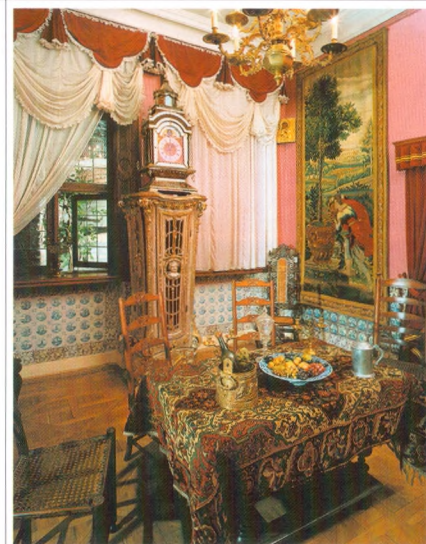
2–h3

ピョートル大帝の冬宮は、ペテルブルグで最初の皇帝の住まいで、宮殿川岸通りアンサンブルのおこりとなった。

宮殿は1708年に建てられ、当初は「冬の小さい木造の小屋」と呼ばれていた(ここで1712年ピョートル1世とマルタ・スカヴロンスカヤ、後のエカチェリーナ1世の結婚の儀が行われたことから1710年代初めには「結婚小屋」と呼ばれた)。ペテルブルグの発展に伴い、宮殿は拡張された。1716-1720年の増築はゲオルグ・ヨハン、1720年代初めのはドミニコ・トレジーニの設計による。

比較的最近まで当時の宮殿の姿については古い記述や版画でしか知ることができなかった。ここにはピョートル1世と家族の住居部と仕事部屋のほかに、祝典の間、教会、温室があった。1725年1月28日から29日にかけての夜、ピョートルはここで亡くなった。その後彼の遺体をおさめた棺は、公葬のために宮殿の1室に置かれた。

宮殿はエカチェリーナ2世の即位まで、最初に建てられたままの姿で立っていた。エカチェリーナ2世の時代、ここに宮廷付カンパンスキー

ピョートル1世の旋盤工場

劇場がおかれた。1783-1789年に建物はジャコモ・クヴァレンギの設計で、冬宮から移された宮廷劇場用に再建される(エルミタージュ劇場p.55)。この際クヴァレンギは前にあった建築物をすっかり壊してしまったと長年考えられていたが、建物の半地下と一階の部屋が保存されていることが解明された。

1970年代-1990年代の大修復作業でピョートル時代宮殿の、彫刻で飾られたギャラリー、舗装された中庭、ピョートル1世の「小テント」の存在が明らかになった。修復作業後、そこは展示室となった。ここで最も面白いのはピョートル1世の蝋人形だ。これはピョートル1世の死後すぐ、エカチェリーナ1世の命令でラストレッリが制作したものだ。蝋人形をつくるために、ピョートル自身の体の一部と髪の毛が使われた。

食堂

「ピョートル1世の4輪馬車」
ルイ・カラヴァック画 1720年代

ピョートル1世の蝋人形 1725年

参謀本部

2–g5

参謀本部は1819-1827年に建てられ、世界で最もスケールの大きい建築作品の一つになった。これは紛れもなく19世紀ペテルブルグの名建築家カルロ・ロッシの最高傑作である。長さ500mを超える建物は宮殿広場、モイカ川、ネフスキー大通りに面している。ロッシは建築物の中にエカチェリーナ2世の時代にフェリテンの設計で建てられた住居棟を加え、いくつかの中庭を作り、主要ホールをクーポラで覆った。参謀本部の中央にある凱旋門は建物の重さを軽減するために、ふきぬけのある丸天井で支えている。凱旋門の3つめのアーチは、宮殿広場に対して平行ではなく、バリシャヤ・マルスカーヤ通りに向いて屈曲した形で、宮殿広場とネフスキー大通りをつないでいる。

建物は軍務省、参謀本部、財務省、外務省を置く場所として定められた。現在ここの大部分は軍事関係官庁が占めているが、「参謀本部」という名前は、昔ここにあった「参謀本部」の名残である。東翼部の一部は、エルミタージュに移譲された。1999年エルミタージュはここに2つの展示室を開設した。多くを占めるのは「双頭の鷲の紋章のもとに:アンピール様式芸術」という名前の展示で、もう一つは20世紀初めのフランス画家の作品を展示している。後に、ロシア外務省200周年にあわせてもう一つの展示室が開設された。

凱旋門を飾る戦士と甲冑

参謀本部中央部, 凱旋門

モイカ側から見た参謀本部

彫刻

参謀本部の彫刻はロッシの全建物の彫刻と同様、建築家自身によって詳細まで考えられた。ロッシは1827年まで仕事の内容や量を決定し、その後、数名の彫刻家がこの仕事に参加するために応募してきた。ロッシは、その才能をよく知っていたピメノフとデムート＝マリノフスキーに白羽の矢を立てた。その彫刻ではローマ戦争の象徴である翼のあるニンフとローマの甲冑姿の戦士が描かれている。凱旋門の重要な装飾は手に双頭の鷲のついた錫杖を掲げた、羽のある勝利の女神（別の説では、栄誉の女神）が御する戦車だ。その左右に6頭の馬のくつわを引いているローマ兜の戦士達が立っている。銅板で制作された幾つもの像が並び立つ構図は、下から見ると軽快で美しく、その姿は旗の中の炎を想い起こさせる。

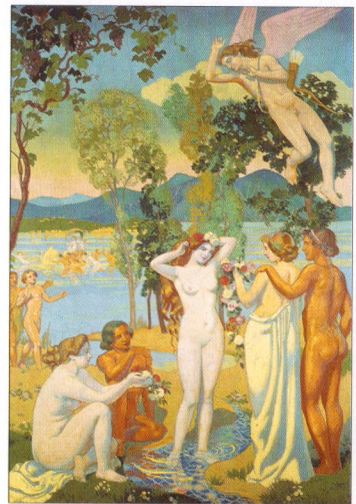
インテリア

参謀本部内部の保管状態は他には例を見ないものだ。事実、数回にわたる改築や粗末な復元によって失われていないカルロ・ロッシのオリジナルのインテリアとヴィギーとスコッティの装飾画を見ることができるのはここだけだ。ロッシによって、外務大臣カルロ・ネッセリローデ伯爵の私住居用につくられた参謀本部の東翼の部屋は、1990年代エルミタージュに移管された。

今日9つの部屋からなるアンフィラーダに、ロシア・フランスのアンピール様式を展示している。いくつかのホールは、フランス・パネル画家モーリス・ドニとピエール・ボナール（ナビ派）のモダニズム様式の装飾パネル展示室に割り当てられている。これらの作品は、20世紀初頭ロシアの大コレクター、芸術パトロンである、シューキンとモローゾフの邸宅に飾られていたものだ。

舞踏の間

大客間

「エジプト製食器セット」銀製 1800年代

モーリス・ドニ 連作「プシュケの物語」1908–1909年

宮殿広場
アレクサンドルの記念柱

ほとんどのヨーロッパの君主制を揺るがしたナポレオンとの戦いの勝利は、ロシアの特別な使命の証として受け入れられ、ロシア軍の勝利を讃えて記念碑が建てられるようになった。ニコライ1世の希望で1829－1834年に建てられたアレクサンドルの記念柱は、その中で最も有名である。勝利者アレクサンドル1世の名と偉業を後世に残す記念碑をつくる作業は、当時イサーク聖堂を建設したオーギュスト・モンフェランに任せられた。記念碑の土台は高さ25.6m、断面積10.5mの巨大な一枚岩の花崗岩だ。柱用の暗赤色（ダークレッド）のフィンランド産の花崗岩の塊は未加工のまま、特別に建造された船で広場に運ばれ、そこで仕上げ作業が施された。その台座の下に表面が平らになるように松の杭が1250本打ち込まれた。重さ約650t（700t以上という説もある）の一枚岩を設置するために、高さ約47mの足場が組まれた。当時このような巨大な物を立ち上げる経験はなかった（ちなみにヴァチカン市国の有名な花崗岩のオベリスクは約350tである）。柱を立てる作業は1832年8月30日に定められた。約2000人の兵士が一枚岩を起こすロープを引いた。それから、集まった人々の歓喜に満ちた叫び声の中、慎重に柱を土台の中心に下げた。同時代人の証言によると、その時ニコライ1世は建築家にこう言ったとか。「モンフェラン、汝はこの建設で自分の名を不滅のものにした」

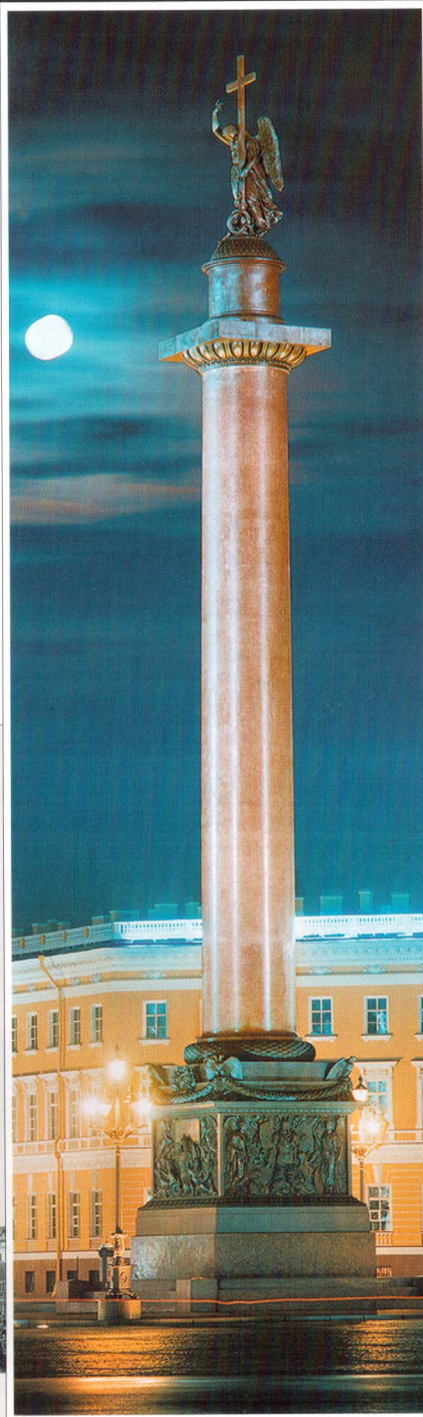
頂を飾る大天使ミカエル像から土台までの柱全体の高さは47.5mだ。台座を装飾しているのは古代の甲冑、平和・勝利・裁判・富の寓意像を描いたブロンズ浅浮彫だ（彫刻家イヴァン・レッペ，ピョートル・スヴィンツォフ）。

歴史情報

アレクサンドルの記念柱建設以前に、ヨーロッパには既にこのような巨大な円柱が三つ、存在していた。

一つ目は、紀元前1世紀と年代上定められている、カリグラ帝の命でエジプトからローマに運ばれた高さ35.5m（台座を入れると約42m）のヘリオポリスの花崗岩オベリスク（1585年ローマ法王シクストゥス5世の命でサン・ピエトロ大聖堂広場に設置された）、二つ目はローマにあるトラヤヌス帝の大理石記念柱（紀元114年頃,建築家アポロドール・ダマスキー,高さ約38m）、三つ目はアウステルリッツの戦いでナポレオン軍が獲得した戦利品の大砲を溶かして造られた、パリのヴァンドーム広場のブロンズの記念柱（1806－1810年設置、建築家J.=B.レペール,J.ゴンドゥエン;高さ43.5m）だ。ピョートル1世もまた、北方戦争におけるロシア勝利を称える記念柱をつくるつもりだった（その実現しなかった柱の模型は、冬宮のロトンダの間にある）。

アレクサンドル柱は上記3つの柱を凌駕している。後にロンドンのトラファルガー広場に同じような記念柱がつくられたが、一枚岩ではなく、27の花崗岩のブロックでつくられていた（1829－1841,建築家C.バリー,全体の高さ56m,像5m,彫刻家E.=X.バイリー）。

「アレクサンドル柱立ち上げ作業」
モンフェランの下絵によるリトグラフ 1830年代

「アレクサンドル記念柱上の十字架を持つ天使」
（1830年代，彫刻家 B. オルロフスキー）
ブロンズ部の高さは6m以上。
十字架で蛇を仕留めている天使の顔は、アレクサンドル1世の顔に似せて作られた。

歴史情報

アレクサンドル1世とナポレオン

18世紀末のフランスを特徴付けるのは、革命と1589年からフランスを統治していたブルボン王朝の滅亡である。1793年、パリの国民公会でルイ16世の処刑判決が下され、しばらくして、彼の未亡人、マリー・アントワネットが斬首された。衝撃を受けたヨーロッパの君主たちは、民主制の波が自国に押し寄せないよう対仏同盟を結成した。国内侵略の脅威という状況下、フランス共和国軍を指揮していたナポレオン・ボナパルトは強大な権力を一手に集めることが出来た。1799年（ブリュメール18日）ボナパルトはカエサルの例にならって、クーデターを起こし、武力で総裁政府を打倒、統領政府を樹立した。そして1804年、自らをフランス皇帝と宣言した。

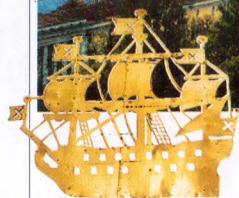
1812年6月12日ナポレオン軍はネマン川（ベラルーシ）を越え、ロシアに侵入した。そうして「祖国戦争」としてロシア史に名を残す戦争が始まった。ロシアの諸都市の防衛とゲリラ活動はナポレオン軍を疲弊させ、ボロディノの戦い（8月26日）によって自らが無敵であるとするナポレオンの信念は打ち砕かれた。そして住民がいなくなったモスクワでの完全に孤立した1ヶ月は、完全にフランス軍の戦意を喪失させた。「ナポレオン軍を破ったのはロシアの冬だ」という有名な言い伝えがあるが、ナポレオン軍のロシアからの退却は1812年10月上旬に始まった。実際、ナポレオンはロシア軍の1000年もの実践経験、1799年のスヴォーロフ大元帥のイタリア遠征時の戦いぶりに現れたロシア軍の強さを考慮に入れていなかった。ナポレオンは、軍事に疎く外交経験の乏しいアレクサンドルが、陣頭指揮をとらず、天才司令官クトゥーゾフ元帥にそのロシア軍の全権を委ねるとは予期していなかったのだ。結果はナポレオンの完全な敗北となり、アレクサンドル1世率いるロシア軍はパリ入城を果たした。

稀代の司令官ナポレオンは、その後イギリスの捕虜となり、セント・ヘレナ島で死亡した（1821年）。

フランツ・クリューゲル
「皇帝アレクサンドル1世の肖像画」
1837年

フランソワ・ジェラール
「戴冠式の衣装をつけた皇帝ナポレオン1世」
1810年と1812年の間

海軍省(アドミラルテイストヴァ)

アドミラルテイストヴァ
(オランダ語.ADMIRAAL, アラビア語.アミル・アル・バフル「海の支配者」)
は各国における海軍の最高機関であり、ロシアではピョートル1世によって創立された。

海軍省軍艦 1710年代

アレクサンドル庭園

18世紀のプーシキン時代に広く知られていたペテルブルグ初の並木道(別称:海軍省並木道)があった場所に設けられた。リトグラフ(石版画)によると、マースレニッツァ(春到来を祝う祭り)やにぎやかな国民のお祭りの日、貴族や平民達を集め、ここでに芝居小屋、ブランコ、氷の山がつくられたようだ。1870年代アレクサンドル2世は並木道の一部を

アレクサンドル庭園
探検家プルジェヴァリスキー像

自分の名がついた公共庭園にする案に喜んで賛同した。皇帝は自ら1874年のオープニングセレモニーに参加し、ここに二本の樫の木を植えたとされる。19世紀末、庭園には住民の善意の寄付でつくられた「啓蒙思想家」達の像が設置された。この像はロシアの科学・文化の優れた功績を後世に伝えている。

1704年ピョートル1世によって建てられた海軍省は、その後何度も再建された。これは18世紀末まで稜堡タイプの要塞施設だった。Пの形をした要塞稜堡の中に造船所があり、そこに1717年創立した海軍省が置かれた。

最初の海軍省長官に任命されたのは、海軍大将フョードル・アプラクシンだ(彼の家は冬宮の場所にあった)。約100年間海軍省本部はロシアの最重要な造船工場であったが、19世紀初めにはその機能は失われていた。そこでその場所にロシア艦隊管理局の建物を造る決議がなされた。1800年代初め、アレクサンドル1世にアンドレイ・ザハーロフの設計案が提示される。この設計案は旧海軍省の輪郭を再現し、かつ、それにアンピール様式の豪華さと風格を加わえていた。長さ500mの中央棟を持つ巨大なコンプレックス(複合体)の建設は、1806－1823年(1812年祖国戦争時に一時中断)にかけて行われた。

海軍省の長く伸びた棟はネヴァ川に面している。その正面は玄関、通り抜けできるアーチ、そして彫刻で装飾されている。ネヴァ川側に当初広場と小さい船着場があった(p.50図参照)。1870－1888年船着場は埋め立てられ、広場には陰鬱な色合いの大公宮殿など他の建物が建てられ、ネヴァ川からの海軍省の眺めは遮られてしまった。現在海軍省の主要な装飾である尖塔のついた高い塔はアレクサンドル庭園の方向からしか見ることができない。この、内部への通用門となっているアーチのある塔は、どこか古代ロシア建築の伝統的なヤールス(段状の建物)を彷彿させる。その違いはロシア古典主義に特徴的な明るい黄(クリーム)色の彩色と柱廊玄関、レリーフ、彫刻の豊富さだ。1860年代建物は再建され、その後彫刻装飾の一部は失われた。それにも関わらず、これは今日でも彫刻と建築の調和のとれた輝かしい作品だ。海軍省は18世紀初頭からネフスキー大通りの北端にある。その後の町の開発の際、海軍省周辺の建物は、周りのパノラマの中でも主導的な役割を残すよう、計画された。これは建物をペテルブルグの中心の主要な目印にしている。

海軍省の東パヴィリオン

宮殿前埠頭の獅子像 1832年

海軍省の彫刻

巨匠シェドリヌィ、ピメノフ、テレベネフによって制作された。黄金の塔のアーチのフリーズ(帯状装飾)はロシア艦隊復興を象徴した、素晴らしいレリーフで装飾されている。海神ネプチューンはピョートル1世に海の支配者の印である三叉の矛を渡している(彫刻家,I.テレベニョフ)。塔の2段目には科学と詩を擬人化した26体の彫像が塔の周囲を取り囲んでいる。アーチ通用門の両側に「地球儀を運んでいる海のニンフ達(彫刻家,F.シェドリン)」がある。いくつも描かれているのがトランペットや旗を持つ天使像だ。

尖塔のある海軍省アーチ

ⓘ 2–e,f7

ニコライ1世像

このニコライ像を近衛兵の軍服姿で描くというアイディアはオーギュスト・モンフェランがクロットに言ったものだとされている。バロック様式の土台はモンフェランによって、花崗岩、希少な斑岩、大理石から制作された。ブロンズのレリーフと4体の彫像(信念、叡智、公平、力、建築家R.サレマン)は皇帝の偉業とその徳を賛美している。

イサーク広場のアンサンブルがやっと完成したのは20世紀初頭のことだ。イサーク広場自体はペテルブルグで最も古い広場の一つで、ピョートル時代の海軍省の一部に面していた。1727年イサーク広場前からネヴァ川にかかる最初の橋がかけられた。これはネヴァ川左岸とヴァシーリー島をつなぐ浮き橋だった。1818年モンフェランの設計による新イサーク聖堂(p.90)の建設開始後から、広場は聖堂を挟んで二つに分けられた。ネヴァ川方向の広場は元老院聖堂広場と呼ばれるようになった。イサーク聖堂とモイカ川間にある広場は、建築当時の地図には「新イサーク」とあったが、その後単に「イサーク広場」と呼ばれるようになった。

18世紀広場の周りやその近辺に金持ち高官の住居が立ち並んでいた。その中で最も有名なのが宰相アレクサンドル・ベズボロートコ(1747–1799)の屋敷だ(後に建て直された)。ベズボロートコはエカチェリーナ2世時代の優れた政治家で、莫大な資産を持っていた。彼についてフランス外交官セギュール伯爵は次のように述べている。「彼は太った体に、スマートな知性を隠している」ベズボロートコはトルストイの小説「戦争と平和」の老侯爵ベズーホフのモデルとなった。イサーク広場に建てられた18世紀建築物の中で現存しているのは1760年代に建てられたレフ・ナルィシュキンの旧屋敷(9番)だけだ。ここにはデニ・ディドロやジェルメナ・ド・スターリがペテルブルグに来た時に滞在していた。

イサーク聖堂の北面は元老院広場に向いている。元老院広場の西側には1807年にジャコモ・クヴァレンギの設計で建てられた近衛兵の馬術練習場があった。イサーク聖堂の東面は、1817–1820年オーギュスト・モンフェランによってアレクサンドル・ロバノフ=ロストフスキー公のために建てられた三角形の建物に向いている。ロバノフ=ロストフスキー公は帝室ヨットクラブ会長で、アレクサンドル1世の侍従官だった人物だ。

19世紀半ばからイサーク広場の全ての建物のスタイルは、荘厳で巨大なイサーク聖堂にあわせて、重厚な構えになっていった。その最たるものがマリヤ宮殿(p.86)、1844–1853年建築家ニコライ・エフィーモフによって建てられた二つの国有財産省の建物、そしてドイツ大使館とホテル「アストリア」だ。ドイツ大使館の建物(11番)は1911–1912年、新しいドイツ建築の創始者で、産業建築デザインのリーダーであるピョートル・ベレンスの設計で建てられた。灰色の花崗岩で外装が施された建物はベレンスの最高傑作の一つになった。このベレンスの建物は新ドイツ帝国の威力をロシアに誇示するはずだったが、20世紀ドイツが果たした不吉な役割の前触れとなった。

1856–1859年、広場の中心にアレクサンドル1世の命でニコライ2世の騎馬像が建てられた。これはこの広場で最もダイナミックな作品である。騎馬像を作る決定は1855年に採択され、制作は巨匠オーギュスト・モンフェランとピョートル・クロットに任せられた。クロットはニコライ1世を後足で立つ馬に跨る近衛兵の姿でデザインした。精錬の際に綿密な計算が行われ、2つの小さな支点(後足)のみで立つ像が完成した。

ホテル「アストリア」と「アングレテーレ」

ⓘ 2-f7

「アストリア」と呼ばれるホテルは1912年厳かにオープンした。このホテルのオーナーは、ロンドンの株式会社「パレス・ホテル」で、建設を担当したのはフョードル・リドヴァルだ。20世紀初頭のロシア建築のコンフォルミズム(快適主義)の顕著な見本となった「アストリア」の建物はその芸術価値に対して、物議を醸し出した。しかし、ホテルの支配人にとって大切なのは、豪華なインテリアとその時代の最先端を行く工学設備だった。とりわけ有名だったのはフランス料理レストランと冬の庭園で、これは必要な時1000人収容できる一つの大ホールになった。そこでヒットラーはレニングラード占領を祝して大パーティーを開く予定だった。

1910年初頭、アストリアの建物の北にこじんまりした別館「アングレテーレ」が増築された。1925年12月、ここで詩人セルゲイ・エセーニンが殺されたことで有名になった。

ホテル「アストリア」の外観

マリヤ(マリインスキー)宮殿

2–f7

イサーク広場の南境にある宮殿は、ニコライ1世の娘マリヤ大公妃のために建てられた。建設は1838年12月ロイヒテンベルク公との婚約の儀の後、すぐに始まった。

ニコライは宮廷建築家アンドレイ・シュタケンシュナイダーに設計を任せた。建築費用として200万ルーブルを超える額が与えられた。1840年秋までに、以前ここにあったチェルヌイショーフ伯爵の宮殿の土台の上に、本棟が建てられた。屋敷全体の建設は1845年までに完了した。「芸術のための芸術」信奉者フランス詩人テオフィーリ・ゴチエは「シュタケンシュナイダーは卓越したセンスを見せつけた」と残している。アンサンブルには、本棟のほかに、勤務棟、翼部、温室、馬術練習場等が含まれる。宮殿広場になったモイカにかかる青い橋は幅97mまで拡張され、ペテルブルグで一番幅の広い橋になった。

1884年7月14日アレクサンドル3世は法令にサインした。それに則って、マリヤ宮殿は国会の建物と宣告され、その後ここでいろいろな社会・政治活動が始まった。1905年、ニコライ2世はこの建物を第一国会に譲った。まもなく宮殿内部はひどい状態になった。

二月革命の日、マリヤ宮殿に労働者や農民出身の議員達が押し寄せた。これを「もじゃもじゃ髪で、だらしなく上着やルバーシュカを着た群衆」と描写したのは立憲民主党の党首ウラジーミル・ナボコフだ。十月革命後、ここには様々な国家施設がおかれ、1945年から市の代表機関となった(現在では市の立法議会となっている)。

1990年代宮殿内に、シュタケンシュナイダーによって装飾されたビザンティン様式の宮殿教会を含む全ての有名なインテリアが復元された。

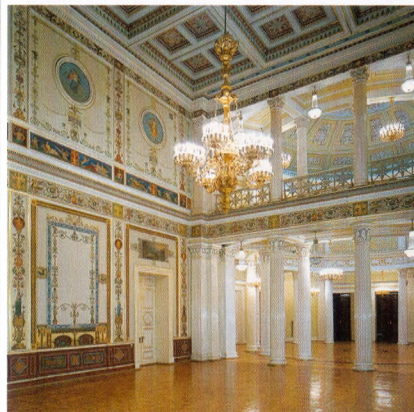
宮殿教会

正面玄関そばの燭台

歴史情報

ニコライ1世の長女、マリヤ・ニコラエヴナ(1819-1876)とジョゼフィーヌ・ボアルネ(ナポレオン妃)の孫、ロイヒテンベルク公マクシミリアン夫妻は19世紀半ば、マリヤ宮殿をペテルブルグ社交界の中心の一つにした。1837年軍の外交任務でロシアを訪れたマクシミリアン公はニコライ1世に好印象を与えた。皇帝の娘との結婚後、ペテルブルグに残り、近衛連隊名誉隊長に任命され、科学アカデミーの名誉会員に選出され、後に芸術アカデミーの長官になった。マクシミリアンはミュンヘンに画廊を所有していた。そこには彼の父によって集められたラファエロ、ヴァン・ダイク、ヴェラスケス、ムリーリョの絵があった。彼はその一部をマリヤ宮殿に運び入れた。中には彼に受け継がれた皇后ジョゼフィーヌの宝石類、ナポレオンとウジェーヌ・ボアルネの武器コレクション等があった。作品の一部、グロとジェラールの絵、古代エジプトコレクションは国有化の後、エルミタージュ所蔵となった。マクシミリアン公の死から2年後、マリヤは身分の低いグリゴーリー・ストロガノフと再婚する。

楕円の間

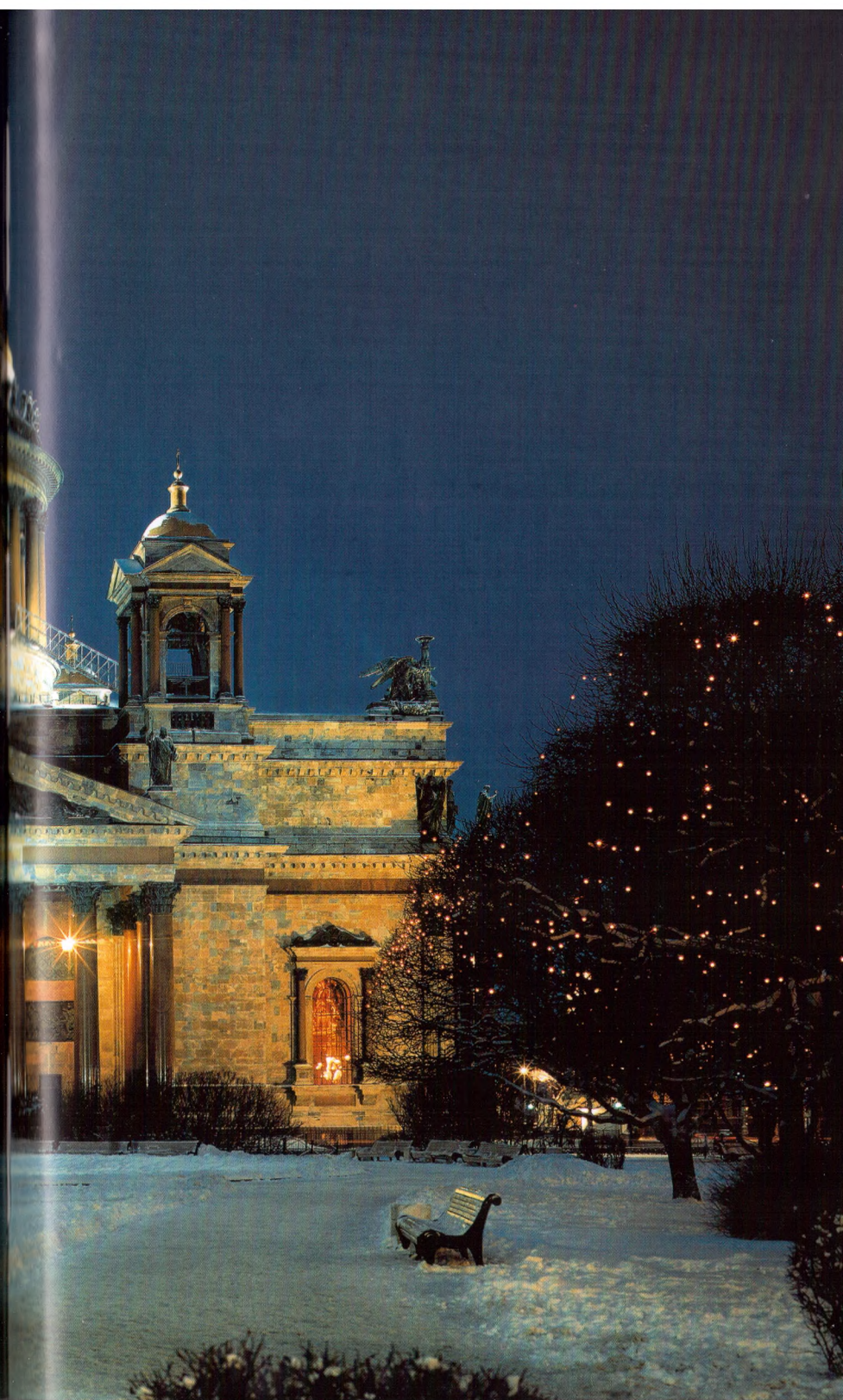
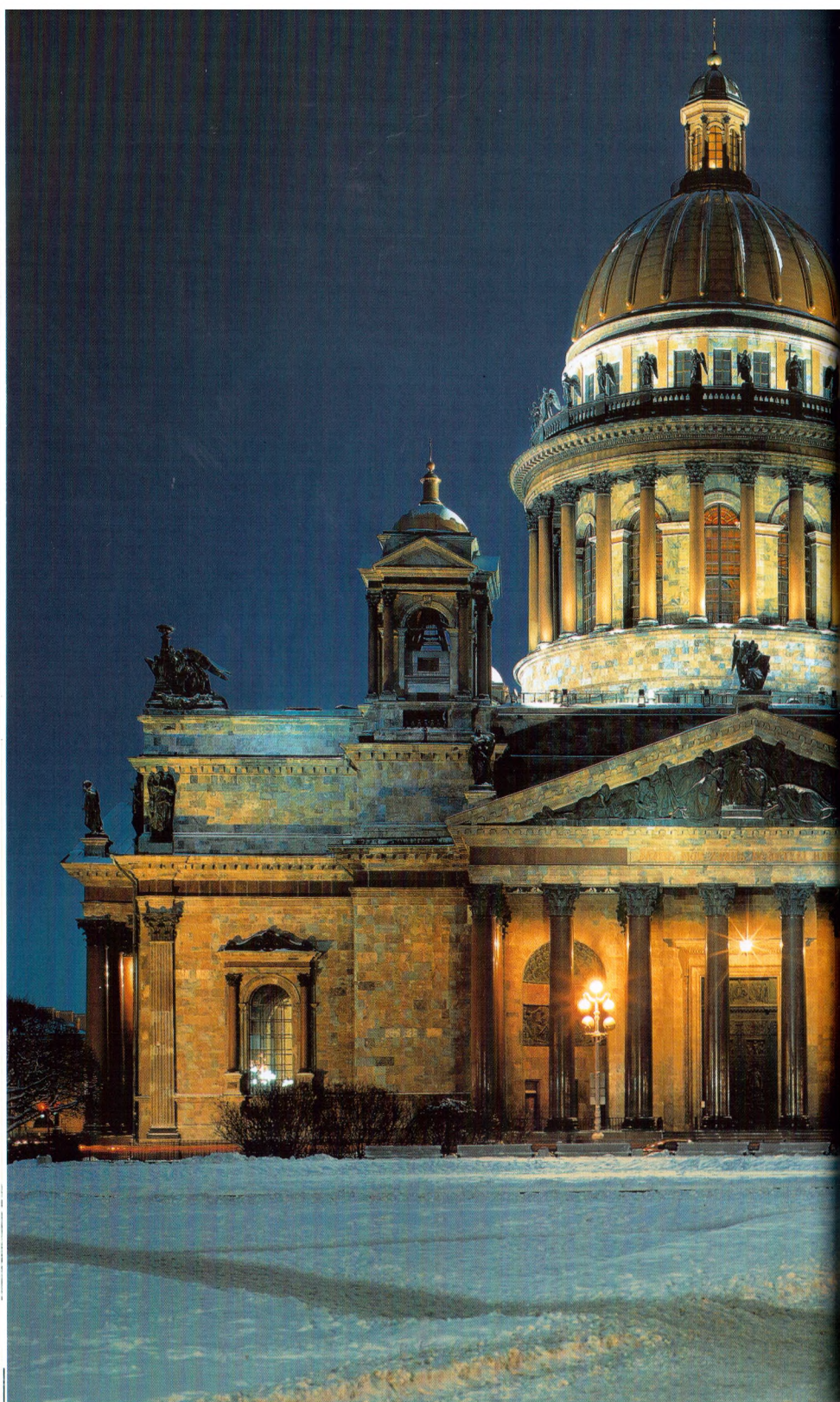
白の間

「ロトンダ」の間

歴史情報

有名な作家の父、ウラジーミル・ナボコフの回想によると、マリヤ宮殿は法制審議会に譲られると共に、「官僚主義者の殿堂」になった。「素晴らしいホールに…ビロードの絨毯がしかれ…金箔が施された家具が置かれ…、すらりとした従僕が音もなく動いていた…。大部分を占める高齢の高官の堂々たる姿、勲章や大綬…抑えた会話、全てが卑しい日常生活から隔絶した、近寄りがたい雰囲気をつくり出していた」この雰囲気を素晴らしく伝えているのがイリヤ・レーピンの絵(下図)だ。議会にいたのは政治家だけではない。優れた学者V.=I.ヴェルナツキー、A.=A.シャフマートフ、A.S.ラッポ=ダニレフスキー、P.=P.セミョーノフ・チャン・シャンスキー、法律家A.=F.コーニ、技術将校 E.=I. トートレベンなどがも出席していた。

1901年5月10日法制審議会会議

イサーク聖堂

2–e6, p. 320

イサーク聖堂（1818-1858）（正面外観はp. 88－89参照）は世界でも最大級の寺院建築物の一つだ（高さ101.5m、土台の面積1ヘクタール以上、クーポラの直径約25m）。当時最も難しい建築プロジェクトの実現は、多くの点においてロシアの工学建築技術と芸術的応用技術の発展を促進した。聖堂の成聖式は1858年、皇帝アレクサンドル2世臨席のもと、行われた。儀式後、近衛隊参加の豪華な式典があった。

祭壇後方のステンドグラス「キリストの復活」
これはドイツ人画家ヘンリヒ・フォン・ゲッスのスケッチがもとになっている。1841年当時ヨーロッパ随一だったミュンヘンの王立工場で注文された。ガラス部分の総面積は28㎡だ。

聖堂の窓

歴史情報

モンフェランがペテルブルグにやってくる（1816年）まで、現在のイサーク聖堂の場所には3番目の聖堂イサーキー・ダルマツキーが建っていた。最初のイサーク聖堂は木造教会（1710年）で、そこでピョートル1世とエカチェリーナ1世が結婚式を挙げた。2番目のイサーク聖堂はマッタルノヴィによって1717年建設された石造りの聖堂だったが、1730年の火災で焼失した。3番目は1768年にリナルドが建て、1790年ブレンナによって完成した。場所によって大理石を使ったり、煉瓦を使ったりした建物は体裁が悪く、再建の提案をするほどだった。

彫刻

建物内外の装飾作業は、建物の骨組み建設が終わった1841年に始まった。彫刻模型作りに参加したのは、イヴァン・ヴィターリ、ピョートル・クロット、ニコライ・ピメノフ、フランソワ・レメール、アレクサンドル・ロガノフスキー等で、彼らは一連の調和のとれたアンサンブルを作り出した。樫の木でつくられた巨大な扉を装飾するブロンズ家のレリーフ設計の際、ヴィターリはルネッサンスの傑作、ロレンツォ・ギベルティ（1381頃-1455）のフィレンツェの洗礼堂を手本にした。聖堂の彫刻作業のために全部で1000tのブロンズが使われた。その際ボリス・ヤコビーによって1838年に開発された電鋳法（電気メッキ）が世界で初めて用いられた。

クーポラのバルコニー手すりの天使像（高さ4.38m）
ジョゼフ・ヘルマンの設計による 1842-1844年

北の柱廊玄関「キリストの復活」
フィリップ・レメールの設計で1841-1844年に制作された。
（フリーズ（帯状装飾）の碑文：
「神よ、汝の力でツァーリを喜ばせよ」）

中央イコノスタス（聖障画）
三段の中央イコノスタスは巨大な大理石の壁で寺院内部を至聖所とわけている。（仕切りの向こうに至聖所がある）イコノスタスは12本の一枚岩のように見える柱で装飾されている。これらは実は高価な細工用の石（2本はアフガニスタンの天らん石、10本は孔雀石）がはめ込まれたブロンズ製の円柱だ。それぞれの柱の上には金箔が施されたコリント式柱頭がある。一段目と二段目のモザイク画のイコンはティモレオン・カール、フォン・ネッフ、フョードル・ブリュロフによって制作された。三段目のイコンはセミョン・ジヴァゴの絵をもとに油絵具でかかれている。

油絵画とモザイク
聖堂の絵画制作には、ロシア古典主義派の巨匠カール・ブリュロフ、フョードル・ブルーニ、ヴァシーリー・シェブーエフをはじめ多くの画家が招聘された。絵は油絵でキャンバスに描かれ、聖堂の丸天井、壁、装飾列柱に固定された。ペテルブルグの気候は温度が低く、湿度が高いため、絵の保存が危ぶまれたが、モンフェランに一つのアイディアが思い浮かんだ。彼は壁にはめこまれた絵（パネル）をモザイク画にかえることを提案し、ニコライ1世もこれを支持した。モザイク技術を学ぶため、芸術アカデミーの卒業生がローマに派遣され、モザイク制作工房が設立され、1851年ペテルブルグに移された。このときから1914年にいたるまで、油絵をモザイクにかえる作業が計画的に行われた（まだ完了していない）。ロシアのモザイク工達はこれらの年月で、12,000色以上の色ガラスを作り上げた。1862年聖堂のモザイク画の何点かはロンドン万国博覧会に出品され、高い評価を得た。ロシアにおける色ガラス製造技術は世界のどこよりも高いと認められたのだ。

オーギュスト・モンフェラン

アントニオ・フォレッティ
「オーギュスト・モンフェラン胸像」
1857年

オーギュスト・リカル・ド・モンフェラン（1786－1858）はフランスのパリ郊外で生まれた。1806年王立建築学校に入学するが、まもなくしてナポレオン軍に徴集される。戦争活動に参加したことで、レジョンドヌール勲章を授けられる。ナポレオンの勲章を持っていたにもかかわらず、勇敢にも、パリに入城したアレクサンドル1世に自分が作成した設計図ファイルをわたした。

有名なシャルル・ペルシエ、ピエール・フォンテンの工房での修行を終えた若き建築家は、1816年、ヨーロッパ建築家のメッカであるペテルブルグにやってくる。ペテルブルグ建設委員会の委員長ベタンクールとの謁見後、まもなくしてイサーク聖堂の再建作業に推薦された。

ロシアでモンフェランは最も大胆で難しいプロジェクトを実現する機会を得る。そして彼はその世紀を代表する建築家になった。モンフェランは建築だけではなく、建築工学エンジニアとしての才能も兼ね備えていた。彼によって創り出された多くの記念物はペテルブルグに皇帝の首都というイメージを与えた。イサーク聖堂の建設で、モンフェランには四等文官の位、銀貨40,000ルーブル、ダイヤモンドがちりばめられた金メダル（アンドレイ大綬）が与えられる。

また、アレクサンドルの記念柱の建設において、三等文官の位、銀貨100,000ルーブルが与えられた。モンフェランが手がけた中で、あまり知られていないものには、ロバノフ＝ロストフスキーの家（1817-1820）、エカテリンゴフの遊園地（1823年）、バリシャヤ・マルスカーヤ通りの工場主パーヴェル・デミードフの屋敷（43と45番）、ニージュヌィ・ノヴゴロドのスパースキー聖堂などがある。

イサーク聖堂建設には40,000人が参加した。この数字はこれだけの人を率いたモンフェラン個人のスケールの大きさを反映している。1818年からモンフェランはモイカ川岸通り（86－88番）に住み、1858年6月28日そこで亡くなった。イサーク聖堂で追悼祈祷が行われ、教会葬儀はネフスキー大通りの聖エカテリーナ・カトリック教会で行われた。モンフェランの未亡人はアレサンドル2世に夫をイサーク聖堂内に埋葬されることを願い出たが、許可されなかった。未亡人は夫の遺体をパリに運んだ。その後まもなくして、建築家の墓の行方はわからなくなった。

ニコライ1世像（p.84）の台座の一部

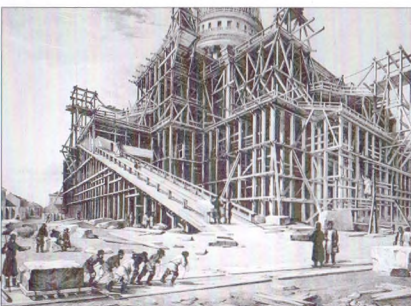
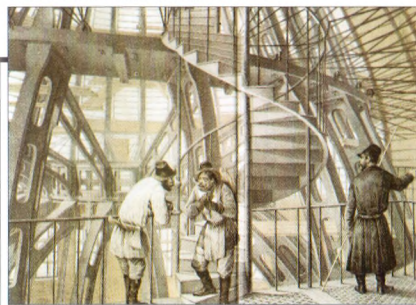
イサーク聖堂建設

設計をめぐる討論

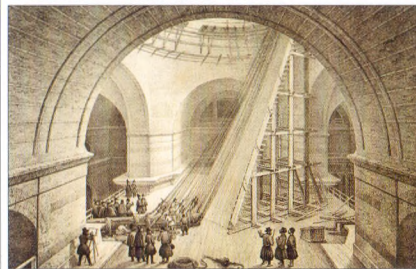
聖堂建設の最初の問題は、設計図の承認後、すぐに起こった。この設計図はモンフェランが作成した数多くの図面からアレクサンドル1世が選んだものだ（モンフェランは自分の弟子、ペルシエにあてて「設計の前に注文主の好みを知っておかないといけないと思って、多種多様のスケッチを描いたよ」と書いている）。1819年芸術アカデミーにペテルブルグ建設・水道工事委員会のモジュイのサイン入り意見書が提出された。それには「モンフェランの見積もりは間違っている。構造上、建設後、聖堂は遅かれ早かれドームの重さで崩れてしまうだろう」ということが論証してあった。

「ネヴァ川川岸、柱の陸揚げ作業」
O.モンフェランの下絵による版画 1845年

1820年芸術アカデミーはこれが重大な指摘であると認め、意見書の内容を検討した。討論は何年も行われ、最終的に「モンフェランの設計図による聖堂の再建は不可能である」という判決が下った。激怒したアレクサンドル1世は必要な修正を加えるように命じた。モンフェランもこの作業への参加を許された。自尊心を傷つけられた建築家は、一人で設計図を練り上げ、審議に出した。新設計図は、2つだった柱廊玄関を4つにし、中央クーポラの支えを強化するために聖堂内部に4つの装飾列柱を入れ、ピラミッドのような安定性を得ることに成功した。委員会からのクレームはこれ以上なく、設計図は認証され、足場の建設が計画通り始まった。

「切り出した大理石の運搬作業」
O.モンフェランの下絵による版画 1845年

「クーポラの内部構造」
O.モンフェランの下絵による版画 1845年

土台

ペテルブルグは沼沢地にあり、土壌が不安定だった。そのため建築家達は建物の下に厚い土台を据えなければならなかった。そのためにある技術が用いられた。まず、深い土台穴が掘られ、そこから地下水がくみ出された。それから土壌に長さ6m以上、直径約30cmの松の杭が馬力を利用したメカニズムで打ち込まれた。杭は直径と同じ間隔をあけて、打ち込まれた。杭の打ち込み作業は、杭と杭の間の土が固まらないうちに続けられた。一つの作業班は一日5本以上打ちこむことはできなかった。聖堂の土台には約25,000本の杭（以前の建物の土台を固めるためのものも含む）が使われた。

クーポラドラム部の柱の引き上げ作業
O.モンフェランの下絵による版画 1845年

聖堂の構造

聖堂の入口には高さ17m、直径1.8m、重さ114tの柱が48本も並び、聖堂を支えている。これらは2年という記録的な速さで建てられた。柱廊玄関の建設後、煉瓦の壁（厚さ2.5～5m）の建設が始まり、それらは厚さ約5cm大理石のプレートで塗装された。同時に天井がつくられた。天井の重要な特性は「二層」だということだ。積み上げられた煉瓦の骨組みに金属の覆いをし、その上にレンガを積み上げ、そのレンガの上にモザイク画、彫刻が固定された。聖堂のドーム屋根の内側は「三層」で、内側から順に、球状カバー、円錐カバー、放物線状のカバー（直径25m以上）から成っている。最初の二つ（球状カバーと円錐カバー）は、巨大な鋳鉄骨組みからできていて、それらの空間はセラミックの中空シリンダーで埋め尽くされている。ドーム屋根の外側は金箔が施されている。これは世界で一番大きい「黄金」のクーポラだ。

孔雀石

イサーク聖堂の
イコノスタスの一部

18-19世紀サンクト・ペテルブルグには町の建設用にあらゆる地下資源、鉱石が運び込まれた。そうして鉱石の少ない貧弱な町は、研磨された石が輝く巨大な博物館になった。中でも最も石を多く使ったのが、イサーク聖堂だ。インテリア装飾に400kgの金、何トンもの高価な鉱石、碧玉、アフガニスタンの天らん石、斑岩石が使われたが、その筆頭にあげられるのが孔雀石だ。

ロシア人にとってダイヤモンドやサファイアの花瓶がイメージしにくいように、西欧の人にとって孔雀石の柱というのはイメージできないようだ（これが神の玉座でないなら、許しがたい贅沢、イオアン・ボゴスロフ「発見」より）。孔雀石の鉱床は17世紀にウラルで発見され（当時そこは銅の産地だった）、このような膨大な消費を可能にした。もし資料を信じるなら、イサーク聖堂の装飾に16トンもの孔雀石が使われた。19世紀ウラル鉱山では年間80トンの孔雀石が産出されていた。1835年には重さ250トンの巨大な孔雀石の塊が発見された。こういった無尽蔵な発掘のためウラル鉱山は2年で掘りつくされてしまう。孔雀石鉱山はアフリカ、オーストラリア南部やアメリカでも発見されたが、世界市場で今でも価値が高いとされているのはウラル産の孔雀石だ。模様の美しさ、深い緑色の色調、その色調の豊富さで際立っている。

ウラルの職人達は孔雀石製品をつくる際、様々な技術を使っていた。彼らはロシア・モザイクと呼ばれる製法を発明した。孔雀石を薄く切り、平板を作る。その平板を並べると組み合わせによって、きれいな模様ができる。それを金属や大理石にはり、入念に磨く。この技術で作られたのがイサーク聖堂の孔雀石の柱と付け柱、冬宮の孔雀石の間（p.58）の装飾だ。

「冬宮の孔雀石のロトンダ」
1827-1834年
デミードフの注文による
P.=F. トマール工房, パリ

エカテリーナ宝座のイコノスタス

クーポラの彫刻と絵画

左図は金箔が施された天使像を頂く巨大な4段式イコノスタスの中心部である。その上に巨大な絵、フョードル・ブルーニ作の「最後の審判」(250㎡)がある。

右上図は中央クーポラである。天井の「聖母マリアの栄誉」はカルロ・ブリュロフによって多くの人物が描かれた構成となっている。4つのパンダンティーフ(球面三角状の部分)には福音書の人々を描いたモザイク画がある(原画はピョートル・ヴィターリ)。クーポラのドラム部には12の幅広い窓がある。窓と窓の間は付け柱で装飾が施されている。12本の付け柱の下には12人使徒の像(高さ5m,彫刻家I.ヴィターリ)がある。

右図はエカチェリーナ宝座のイコノスタスを頂くニコライ・ピメノフの彫刻作品「キリストの復活」だ。

イコノスタスが見える中央身廊(ネイブ)

デカブリスト広場（元老院広場）

2—e6

ピョートル1世像（青銅の騎士）

元老院広場は明るく、面白い建築アンサンブルだ。その歴史は建築家マッタルノヴィがここに最初のイサーク聖堂を建てた1717年に始まる。広場の名を有名にしたのは、ここで起きた二つの出来事だ。一つは1782年、ロシアで初めての記念碑である、誉れ高いピョートル1世の騎馬像の除幕式、もう一つは1825年国を揺るがしたデカブリストの蜂起である。

青銅の騎士像

2-d5

エカチェリーナ2世は1730年に火災で焼失したイサーク聖堂の場所に、偉大なピョートル1世像をつくるという壮大なプロジェクトを考えていた。1765年エカチェリーナ2世はパリのロシア大使、ドミートリー・ゴリツィンにそのプロジェクトを実現できる才能のある彫刻家を探すよう命じた。推薦された候補者の中からエカチェリーナ2世が選んだのは、エチエン・モーリス・ファリコネ（1716-1791）だった。ファリコネは当時、ルイ15世様式のエレガントな装飾で有名なセーヴル陶器工房の指導者だった。1768年デニ・ディドロのすすめでファリコネはロシアに向かった。彼の描いた記念像のスケッチはエカチェリーナ2世に承認された。

ファリコネは最初に二本足で立つ騎馬像を制作したレオナルド・ダ・ヴィンチのアイディアを使った。しかし、当時そのような技術的に難しい設計の実現は不可能だった。ちなみに1640年マドリードで彫刻家ピエトロ・ダッカがフェリペ4世の騎馬像を制作したが、このときに設計を行ったのは、あの偉大なガリレオ・ガリレイだった。しかし、ファリコネは苦労の末、ピョートル1世の情熱とダイナミックさを包括した最も素晴らしい騎馬像を完成させる。騎馬像はペテルブルグ郊外から運ばれた巨大な花崗岩の塊の上に据え付けられた。設置作業は1781年ファリコネからかわったユーリー・フェリテンによって行われた（ファリコネは度重なる鋳造失敗に絶望し、ロシアを去った）。記念碑の除幕式はおびただしい人出の中、1782年8月に行われた。

元老院と宗務院の建物

2-d6

ロシア帝国の最高裁判所である元老院が元老院広場に移されたのは1764年だ。元老院は広場の南端にある旧宰相ベストゥージェフ・リューミン邸に置かれた。1830年代カルロ・ロッシは宰相の宮殿を再建した。南に棟を増築し、二つの棟を厚いアーチでつないだ。アーチをくぐると、18世紀初めにここに敷かれ、海軍省とガレー船建造所をつないでいたガレールナヤ通りに続いている。北棟には元老院、南棟にはロシア正教会の最高機関である宗務院が置かれた。この再建築作業はロッシ最後の仕事となり、ロシア建築の黄金時代は幕を閉じた。

元老院・宗務院の建物

「ニコライ1世臨席の近衛兵馬術練習場での礼拝式」1849年

近衛兵馬術練習場
ファサード設計図

コノグヴァルデイスキー・マネーシュ（近衛兵馬術練習場）

2-e6, p. 319

近衛兵の都、サンクト・ペテルブルグのマネーシュ（仏語.manege「演習、馬術の教練用建物」）はよくある建物の一つだ。その中で最も大きいものがコノグヴァルデイスキー（近衛兵）馬術練習場である。これは海軍省大通りの端にあり、海軍省運河のあった場所にできたコノグヴァルデイスキー並木道の由来になった。建物は1804-1807年、ジャコモ・クヴァレンギによって建てられた。柱廊玄関には、1810年イタリアの彫刻家パオロ・トリスコルニに注文された馬の調教師が立っている。建物上部にはダヴィド・イエンセン作のレリーフがあったが、1930年代に打ち壊された。

カール・コリマン 「1825年12月14日元老院広場」 水彩画 1820年代末

歴史情報

1825年12月14日の元老院広場での事件は次のような状況の中で起こった。子供のいないアレクサンドル1世の死後、帝位に就くのは下の弟のコンスタンチン大公のはずだった。が、ポーランド・ロシア総督のコンスタンチンは身分の低い女性と結婚しており、予想されたとおり、弟ニコライのために帝位継承権を放棄した。コンスタンチンの帝位継承放棄の宣言書を準備している間、秘密結社（北方結社）のメンバー達が元老院広場前に近衛連隊を連れ出した。彼らは新皇帝ニコライ1世への忠誠を拒否し、農奴制廃止とコンスタンチン即位を掲げて蜂起した。
北方結社は独立とアメリカ合衆国成立を求めた北アメリカでの戦争成功の影響の下、編成された。北方結社の指導者の一人、コンドラチー・ルィレーエフはロシア・アメリカ社の事務局長だった。結社の本部は1824年からモイカ（72番）に置かれ、そこで結社の会議が行われていた。北方結社のメンバーの大部分はロシアの名門家の子息だった。彼らは自由平等を唱ったアメリカの独立宣言の内容を知り、決起した。デカブリストの乱はその日のうちに鎮圧された。ニコライ自身による尋問は半年にもわたった。1826年夏デカブリストの指導者5人はクロンヴェルクの土塁で公開絞首刑に処された。

ネヴァ川 НЕВА

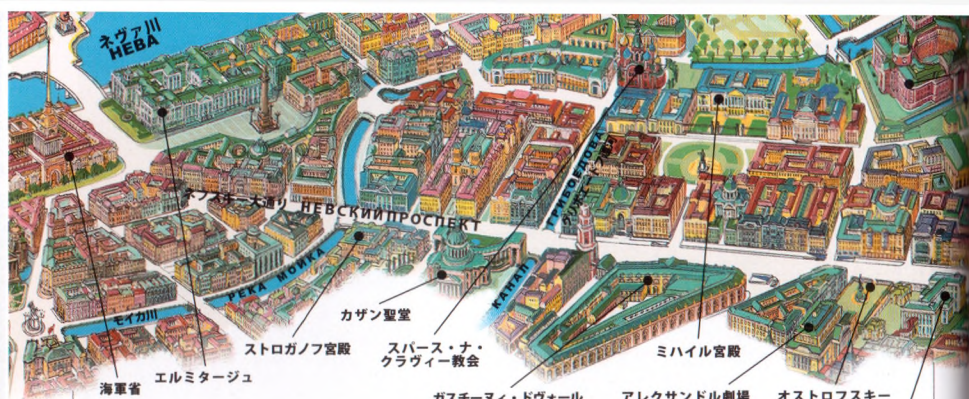
ネフスキー大通り НЕВСКИЙ ПРОСПЕКТ

РЕКА МОЙКА モイカ川

海軍省　エルミタージュ　ストロガノフ宮殿　カザン聖堂　スパース・ナ・クラヴィー教会　ガスチーヌィ・ドヴォール　ミハイル宮殿　アレクサンドル劇場　オストロフスキー広場　アーニチコフ宮殿

2–g5,m7

ネフスキー大通り

РЕКА ФОНТАНКА　アーニチコフ橋 АНИЧКОВ МОСТ　ベロセリスキー＝ベロゼルスキー宮殿　リチェイヌイ大通り ЛИТЕЙНЫЙ ПР.　マヤコフスキー通り УЛ. МАЯКОВСКОГО　マラート通り УЛ. МАРАТА　ヴァスターニヤ（蜂起）通り УЛ. ВОССТАНИЯ　リーゴフスキー大通り ЛИГОВСКИЙ ПР.　ヴァスターニヤ（蜂起）広場　モスクワ駅

1712–1715年海軍省からアレクサンドル・ネフスキー修道院まで、両側から通りを造るために森林を伐り開く作業が始まった。その際、計算違いのため、通りは現在のモスクワ駅前で（直線ではなく）歪んだ形でつながってしまった。これが世界で名高い道の一つ、ネフスキー大通り（長さ4.5km）の起こりだった。

1721年侍従ベルフゴリツは日記に次のように記している。「ネフスキーと呼ばれている長く幅広い舗装された並木道を通った。道はスウェーデン人捕虜の手で数年かけて敷かれ…長くてきちんと整備された道は、並外れて美しい……」。ピョートル1世の命令で町に来る人は玉石で税を払わなければならなかった。この石でネフスキー大通りや他の通り（当時はまだ数が少なかった）を舗装した。

1730年代ペテルブルグ都市建設委員会は、当時町の南境だったフォンタンカ川までのネヴァ川左岸地区に、海軍省を基点にネフスキー、海軍省（ガローハヴァヤ）、ヴォズネセンスキーの三本の放射線状の道を敷設することを立案した。その計画ではネヴァ川とフォンタンカの間の中心部は海軍省に合流する4つの線分で分けられる。ネフスキー大通りは歴史的に重要な場所で、その建設作業にはペテルブルグの優れた建築家が参加した。まもなくしてこの大通りはネヴァ川岸沿いの建物と競い合うアンサンブルになった。

イヴァン・アイヴァゾフスキー「第九の波」（国立ロシア美術館所蔵）（p.116）

またゴーゴリは次のように書いている。「ネフスキーに出ると、お祭りの匂いがする」ペテルブルグの主要通り（ネフスキー）は実に180年以上にわたり、最も美しく、最もにぎやかな町のプロムナード（散歩道）の役割を続けている。このような「意義」は18世紀にここにヨーロッパ全土から商人、劇場興行主、レストラン経営者を呼び寄せた。

博物館

ネフスキー大通りとその周辺の有名な博物館の大部分は、ロシア有数の美術館である国立ロシア美術館（p.116）の分館である。1831年A.S.プーシキン（p.324）が決闘後に亡くなった部屋を公開したモイカ川岸通り12のプーシキンの家博物館はこれに属さない。

A.S.プーシキン博物館（モイカ12 Мойка, 12）（p.324）

ストロガノフ宮殿（国立ロシア美術館分館）19世紀（p.102）

ピョートル・クロット「馬の調教師」アーニチコフ橋（p.135）

橋

ネフスキー大通りに3本の水流（モイカ川、グリボエードフ運河、フォンタンカ川）が交差している。それらの上にかけられた橋（カザン橋以外）はネフスキー大通りの道幅とほとんど等しい。モイカ川とグリボエードフ運河にかかっているこの2本の橋（ポリツェイスキー橋とカザン橋）のように目立たない橋もあるが、フォンタンカ川にかかるアーニチコフ橋は町の伝説的な観光名所の一つだ。

旧「ジンゲル社」邸　p.103

商業の中心（ショッピング・センター）

ネフスキー大通りは18世紀にペテルブルグ最大の商業の中心地になった。現在ここには有名なショッピング・センター、ガスチーヌィ・ドヴォール（Гостиный Двор）、パッサージュ（Пассаж）、DLT (ДЛТ)、書店ドム・クニーギ（Дом книги）が集中している。

庭園と小公園（スクウェア）

カザン聖堂前の小公園、ミハイル宮殿前の小公園、夏の庭園、マルス広場、クレノーヴァヤ並木道、オストロフスキー広場の小公園等、これらは全てかつてネフスキー大通り沿い、またはネフスキー大通りの北にあった緑地帯の名残だ。町の開発と共に緑は少なくなり、いくつかの庭園は永久に失われた。

夏の庭園（p.130）

寺院

ネフスキー大通りにある4つの現行寺院は、使徒パウロ・ルーテル派教会（ネフスキー大通り22–24,p.102）、正教カザン聖堂（p.104）、聖エカテリーナ・カトリック教会（ネフスキー大通り34,p.106）と聖エカテリーナ・グレゴリウス教会（ネフスキー大通り40–42,p.107）で、これらは全て18世紀に建立された。

スパース・ナ・クラヴィー教会（p.108）

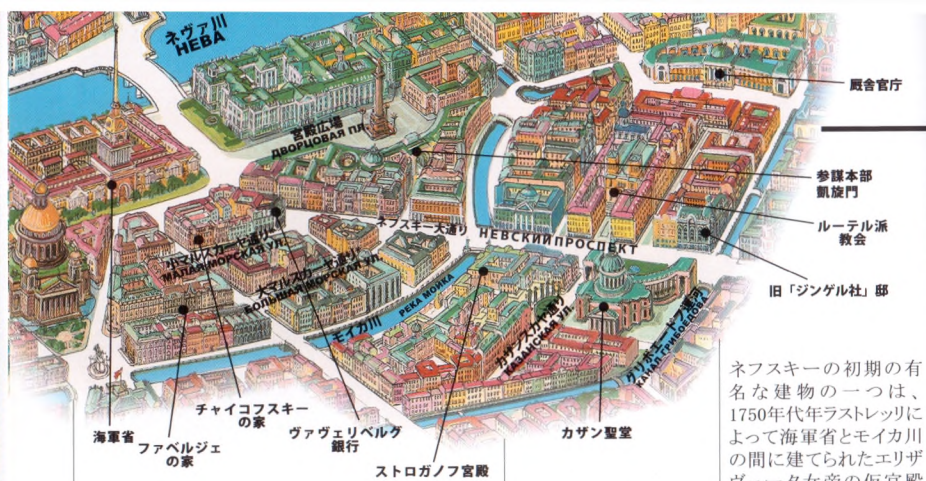
モスクワ駅

ⓘ 3-d7 p. 289

ペテルブルグで最も古い駅である。ペテルブルグ・モスクワ間をつなぐロシア初の長距離鉄道（主要）駅として19世紀半ばに建てられた。

記念像

最初の記念像がネフスキーに現れたのは1830年代、カザン聖堂前に2人の司令官クトゥーゾフとバルクライ・ド・トーリの像が設置された時だ。それからオストロフスキー広場（当時の名称は劇場広場）の中央にエカチェリーナ2世像が建てられた。現在彫刻家達は大掛かりなものより小さいジャンルの記念碑を好み、半官的な町を軽減しようとしているのかもしれない。

オストロフスキー広場そば（p.132, 133）

海軍省からモイカ川までネフスキー大通りは当初の幅を保っているが、モイカ川から先は1730年に拡張され、より広くなっている。この拡張工事後、ネフスキー大通りは恐らく当時ヨーロッパで一番幅広い通りになった。後にこの通りに沿って、ストロガノフ宮殿、アーニチコフ宮殿やカザン聖堂のような巨大な建物が建てられた。

道の拡張はアンナ女帝治世の大火事と関係がある。当時町の木造建築街（ブロック）は度重なる火災に遭い、海軍省から現在のカザン広場まで建物が焼失した。1737年の火災後、ペテルブルグは5つの行政区に分けられ、それぞれの通りに公式な名称が与えられた。それと同時にサドーヴァヤ通りとヴォズネセンスカヤ通りの敷設が始まった。

モイカ川からグリボエードフ運河までのほとんど全部の偶数番号側（通りの片側は偶数番号の建物が並ぶ）はかつてプロテスタント地帯だった。2つのルーテル派寺院（オランダ教会の家と聖ピョートル聖堂）が直接ネフスキー大通りに面しており、2つの寺院がバリシャヤ・カニューシェンナヤ（大厩舎）通りとマーラヤ・カニューシェンナヤ（小厩舎）通りの奥にあった。この2本の通りはピョートル1世によって創立され、それほど遠くない所にあるカニューシェンヌイ（厩舎）宮殿にちなんで名づけられた。反対側の奇数のブロックは様々な時代の建物が途切れなく続くファサードで、その中にストロガノフ宮殿や1813–1816年にヴァシーリー・スターソフによって建てられたカザン聖堂聖職者の館（ネフスキー大通り25）のような有名な建物がある。このブロックは広いカザン広場で終わる。

18世紀の地図を見ると、海軍省からモイカ川までのネフスキー大通りとその近辺の建設は、1710年代に海軍省の草地周辺にできた住居用街区（ブロック）から始まったことがわかる。ネフスキー大通りはレブロンの全体設計案では、町の中心には含まれていなかった。後にレブロンの設計図は断念され、ネフスキー大通りをネヴァ川左岸の主要幹線道路とするペテルブルグの新開発が始まった。

参謀本部の凱旋門

カニューシェンヌイ（厩舎）宮殿そばのモイカ川岸 19世紀初頭

ネフスキーの初期の有名な建物の一つは、1750年代年ラストレッリによって海軍省とモイカ川の間に建てられたエリザヴェータ女帝の仮宮殿だ。新しいペテルブルグ全体設計図制作を指揮した建築家アレクセイ・クヴァーソフ（1718–1772）の設計によって、1760年代にネフスキー両側の「切れ目のないファサード」に、石造りの建物と、町で最も古いまっすぐな2本の通り、マーラヤ・マルスカーヤ（小海）通りとバリシャヤ・マルスカーヤ（大海）通りが建設された。

ヴァヴェリベルグ銀行
ネフスキー大通り7/9

1800年代からネフスキー大通りとマーラヤ・マルスカーヤ通りの角にベルニコフ兄弟の屋敷が立っていた。この建物の一部はイギリス人ロビーのレストランに貸し出されていた。1910年代初頭、建築家マリアム・ペレチャトコーヴィチは銀行家ヴァヴェリベルグの注文でここにイタリア宮殿（パラッツォ）に似せた建物を建てた。これはこの周辺ブロックで最初の銀行の建物でも唯一の銀行の建物でもなかった。この建物は現在も外観や自然石の輪郭からすぐにわかる。そば（小マルスカーヤ通り2）には20世紀初め財務省が置かれていた。

ネフスキー大通り 海軍省からグリボエードフ運河まで

ファベルジェの家

チャイコフスキーの家
マーラヤ・マルスカーヤ通り13

マーラヤ・マルスカーヤ通りのバロック様式のカルトゥーシュ（渦巻装飾）とプッチ（羽のある少年像）で飾られた建物の部屋を借りていたのがピョートル・イリイチ・チャイコフスキーだ。1893年彼はこの家で（公式な説によるとコレラで）永眠する。しかしセルゲイ・ディアギレフの書くところによると、ペテルブルグでは自殺の噂が流れていた。偉大な作曲家との告別時、沿道は葬列の人で一杯になった。

バリシャヤ・マルスカーヤ（大海）通り
2–d8, g6

1892年に出版されたペテルブルグの観光案内書「アリマナフ」はバリシャヤ・マルスカーヤ（大海）通りについてこう書いている。「これは美しく、豪華で、着飾った通りで、清潔で豪華な店が立ち並び、我々の名門貴族や金持ち貴族が住んでいる場所だ。バリシャヤ・マルスカーヤ通りの店はより豪華な商品を売り物にしていて、その店で資金不足の買い物客はほとんど何もすることができない」。こういった高級店で最も有名だったのはファベルジェの家（大マルスカーヤ通り24）で、ゴシック様式風で赤い花崗岩の上貼りが貼られた建物（1902年、建築家シュミット）だ。

ネフスキー大通りを挟んで18番と15番の家が向かい合って立っている。ヴァシーリー・スターソフによって1810年代に再建された18番宅にはヴォリファとベランジェーの洋菓子屋があった。ピョートル時代、この場所に海軍将校コルネリウス・クリュイス（1657–1727）の家があり、いくつかの証言によると、そこに居酒屋とワイン倉庫があった。

ネフスキー大通り18番

15番の家は、エカチェリーナ2世時代の陸軍大将警察本署長ニコライ・チチェリンのために建てられた。1850年代から旧チチェリンの家はモスクワとペテルブルグの多くの有名店舗オーナー、エリセーエフ兄弟の所有となる。二つの建物の東面は、1806–1808年建築家ウィリアム・ゲステの設計によって建てられた緑の橋（ペテルブルグ初の金属橋）がかかったモイカ川に向いている。

歴史情報

宝石の都

ロシア宮殿の財力はペテルブルグにヨーロッパの宝石職人を引き寄せ、町を急速に世界有数の宝石の都にした。ペテルブルグの宝飾芸術の最盛期は、有名なスウェーデン人イェレミヤ・ポジエとルイ・ダヴィド・デュヴァリがペテルブルグで働き始めたエリザヴェータ・ペトローヴナ女帝時代にあたる。その時既に贅沢品、宮殿建設、それに付随する調度品の出費は、恐らく国家予算の4分の1を占めており、ペテルブルグに来た外国人は宮廷内の高価な貴金属装飾の豊富さに驚嘆の声をあげた。同時代人の回想によると、「ほとんど全ての貴人はダイヤモンド尽くしだった。ボタン、留め金（バックル）、サーベルの柄、肩章、よく帽子が数列のダイヤモンドで散りばめられていた」。貴族達のとどまるところを知らぬ奢侈への欲望をみかねたエカチェリーナ2世は、これを抑制する法令を発布したが、19世紀ロシア帝室の支出は何度もヨーロッパ王室の支出を上回った。

「宝石花のブーケ」 ポジエ作 1740年代 （国立エルミタージュ所蔵）

18世紀、民衆にミリオンシク（百万長者）と呼ばれた宮廷宝石職人達は、冬宮近くのミリオンナヤという名の通りに住んでいた。1762年ポジエはミリオンナヤの自身の工房で、エカチェリーナ2世の戴冠式のために、有名な皇帝王冠の一つ、大女帝王冠を作ったとされている。まもなくして（1764年）ポジエはロシアを去るが、その後彼に代わったのが、ピョートル・カルンマルク、ヨハン・ガス、ヨハン・シャルフ、ジャン＝ジャック・デューク等の優れた宝石職人達だ。その中で特に成功をおさめたのは、エリザヴェータ時代に創立されたデュヴァリの工房だ。彼らによって築き上げられた伝統は、1世紀後の1842年、父親が創立した会社を率いた最後の有名な宮廷宝飾職人カール・ファベルジェに受け継がれる。世界的な名誉をこの会社にもたらしたのは、皇帝一家のために作られた精緻を凝らしたイースター・エッグ（復活祭の卵）（p.264）だ。

18世紀半ば以降、帝室の全ての宝物は冬宮のダイヤモンドの間に保管された。1914年第一次世界大戦開始と共に宝物はモスクワに移され、クレムリンにある武器庫（p.264）の宝物庫に入れられた。

「皇帝王冠の複製」 ファベルジェ工房制作 1900年代 （国立エルミタージュ所蔵）

＊ 名称の省略の都合で、場所により、ロシア語の意味に則り、バリショイ/バリシャヤを「大」、マールイ/マーラヤを「小」と表記します。

ネフスキー大通り
海軍省からグリボエードフ運河まで

2–g5,i6

ストロガノフ宮殿

ストロガノフ宮殿

2-h6 p. 320

ネフスキー大通り17

ネフスキー大通りの最も古い建物の一つだが、驚くべきことに、様々な時代の建築物と一つのアンサンブルを形成している。宮殿は1750年代にバルトロメオ・フランチェスコ・ラストレッリの設計によってエリザヴェータ女帝時代の有名な高官セルゲイ・ストロガノフ（1707-1756）のために建てられた。ストロガノフ伯爵家の創始者達はピョートル時代以前、イェルマークのシベリア遠征を組織し、シベリアとウラル（ここに自分の軍隊と警察を持っていた）の産業開発に大きな役割を果たした豪商だった。18世紀ストロガノフ家はピョートル1世によって貴族に叙せられ、1917年までロシアの最も裕福な一族に名を連ねていた。宮殿の初代当主アレクサンドル・ストロガノフ（1733-1811）（公爵，芸術アカデミー長，有名な蒐集家）の後継ぎの息子は、ネフスキーの宮殿を芸術の宝庫にした。1917年以降ストロガノフ邸のコレクションの一部はエルミタージュに譲られ、一部は1930年代初頭ベルリンのオークション「ストロガノフ宮殿」にかけられた。

メンテルスの家

メルテンスの家

ネフスキー大通り21

20世紀初頭1841年に設立され、19世紀末まで毛皮貿易で一財産を築いた家族企業メルテンスはネフスキー大通りの21番の家を自邸として購入した。1911-1912年建築家マリアン・リャレーヴィチと彫刻家ヴァシーリー・クズネツォーフは、ここに古典主義芸術と最新技術が融合した傑作を建てた。この重厚な灰色の建物の正面はガラス張りになっている。

マーラヤ・カニューシェンナヤ（小厩舎）通り

2-h, i5

カニューシェンナヤ（厩舎）広場とネフスキー大通りをつなぐために敷かれたこの二つの通りは、エリザヴェータ女帝時代の地図に既に書き込まれていた。この二本の通りの間に教会がある。教会の歴史はアンナ女帝時代、1703年にロシアでの職務についたウェストファリア出身副宰相アンドレイ・オステルマンがネフスキー大通りに教会建設を許可した1727年に遡る。1730年に建てられ、「大通りの新教教会」として有名になった教会は、ネフスキー大通りでカザン聖堂に次いで2番目に大きい寺院になった。1830年代それまで高いクーポラのあった教会は、アレクサンドル・ブリュロフの設計によってロマネスク様式に再建される。エカチェリーナ2世時代、マーラヤ・カニューシェンナヤ通りは袋小路になる。当時そこにはフィンランド・スウェーデン改革派の共同体があった。共同体分裂後、スウェーデン人は自分の寺院（1769年、建築家Y.フェリテン、小カニューシェンナヤ通り1/3）を建立する。後にフィンランド人も自身の教会（大カニューシェンナヤ通り6A、1805年建築家G.パウリソン）を建てる。現在、マーラヤ・カニューシェンナヤ通りは町の少ない歩行者専用道の一つだ。

マーラヤ・カニューシェンナヤ通り

「マーラヤ・カニューシェンナヤ通りの時計付き温度計パヴィリオン」1914年
建築家N. ランセレ
彫刻家V. クズネツォーフ

聖ペテロ・ルーテル派教会
（ネフスキー大通り22-24）

カザン聖堂(p. 104)

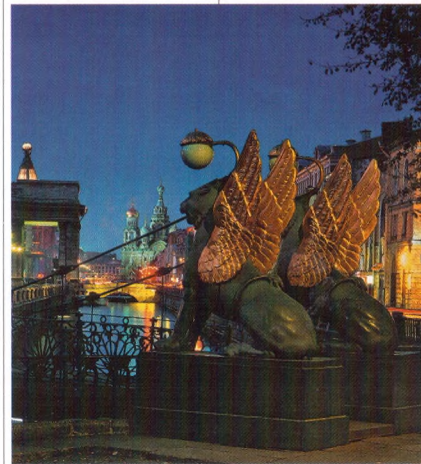
グリボエードフ運河

現在のガスチーヌィ・ドヴォールの近くに水源のあるグルハヤ川の場所にできた。1740年偉大な司令官の父、軍技師イラリオン・マトヴェーヴィチ・ゴレニシェフ・クトゥーゾフは女帝エリザヴェータ・ペトローヴナに「首都の住人を洪水のもたらすひどい被害から予防するための運河建設に関する」計画書（案）を見せた。計画案承認後、グルハヤ川はネフスキー大通りと交わっているモイカ川とまっすぐな運河で連結され、カニューシェンノエ（厩舎）官丁から名をとって、カニューシェンヌィ（厩舎）運河と名づけられた。エカチェリーナ2世時代の1764-1790年、河床が掘り下げられ、平らにされ（全長5km）、川岸は花崗岩が敷き詰められ、グルハヤ川はエカチェリーナ運河と名づけられた（1923年からグリボエードフ運河と改称）。かつての厩舎運河と天然川の境には、羽のある黄金のグリフォン像で有名なつり橋「銀行橋（1826年技師ゲオルグ・トレッテル、彫刻家パーヴェル・ソコロフ）」がある。この橋の前にはロシア初の発券銀行の建物（1790年、建築家D.クヴァレンギ）がある。ここは現在経済・金融大学になっている。

「ジンゲル社」邸

「ジンゲル社」邸

ネフスキー大通り28

カザン聖堂の向かい、ネフスキー大通りとグリボエードフ運河の角の一画は、19世紀末、有名な会社によって購入された。その古い家が建っていた場所に、パーヴェル・シュゾールは垂直に伸びたクーポラを頂き、彫刻装飾が施された風采の立派な建物を建てた（当時流行していたA.オベールとA.アダムソンのモデルによる）。この建物はブルジョワ建築ロマン主義後の折衷主義の鮮やかな見本である。ブルジョワ建築ロマン主義はロココ様式に劣らず「気に入るための芸術」という定義にあっている。この流派を代表するシュゾールは、豊富なバロックの渦巻装飾、高い屋根、装飾塔といった建築の装飾過剰を好んだ。彼は1880年代に同様のスタイルで、そばの川岸に立っている信用銀行（右図）を建てた。

信用銀行の建物
（グリボエードフ運河13）

銀行橋のグリフォン

2–i6

カザン聖堂

カザン聖堂はネフスキー大通りにある唯一の現行の正教聖堂だ。クトゥーゾフ元帥の納骨所がある。1837年から聖堂の前にクトゥーゾフとバルクライ・ド・トーリの銅像が立っている。（彫刻家B.オルローフ）

聖ウラジーミル公

聖堂の北入口の壁がん（ニッチ）の4体のブロンズ像の一つ。そのうち2体（聖人の列に加わったウラジーミル公とA.ネフスキー公像）はS.ピメノフ、洗礼者聖イオアンはI.マルトス、聖アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌィはヴァシーリー＝デムート・マリノフスキーがそれぞれ制作した。

ロシア古典主義の紛れも無い傑作であるカザン聖堂は、ロシアの巨大な寺院の一つである。建物の高さは71.6m、内部東西の長さは72.5m、クーポラの高さは17.1mだ。プロのカメラマンのお気に入りの被写体である柱廊は、ほとんど2世紀にわたり、ネフスキー大通りの素晴らしい飾りである。聖堂は上から見るとカトリックの十字架の形をしている。独特な空間・音響処理が施された聖堂内部は、常時調和と静寂が支配しており、宗教的な祝日の時だけ、教会の歌が静寂を破る。内装の支柱となっているのは、クーポラの構造を支えている幅広い装飾列柱と56本の赤い研磨された花崗岩の二列の装飾列柱（台座とブロンズの柱頭を入れた柱の高さは10.7m）だ。広い後陣（教会堂で内陣部が半円形に張り出した部分）のあるアルターリ（至聖所）の部分は、コンスタンチン・トンの設計（1836年）でビザンティン様式で制作されたイコノスタスで分けられている。1812年にフランス人が奪ったロシアの銀を取り戻して鋳造されたイコノスタスは、革命後没収され、今では訪れる人の寄付で少しずつ復元されている。

カザン聖堂西の柱廊

歴史情報

偉大な司令官ミハイル・イラリオーノヴィチ・ゴレニシェフ・クトゥーゾフ公は1813年ポーランドの町ブンツラウ（Boltstawiec）で亡くなった。彼の遺体はペテルブルグに運ばれ、最高の敬意を表してカザン聖堂に埋葬された。墓のそばには戦利品のフランスの軍旗とロシア軍が奪った様々な町の鍵が置かれている。

司令官クトゥーゾフ元帥の墓

1733年8月「アンナ女帝陛下の名前入りの法令によって、ネフスキー大通りのモイカの緑橋を渡った先の右側に教会を建てるよう命じられた」。9月6日アンナ女帝自ら聖堂基礎の最初の石を置いた。

聖堂は生神女マリア誕生の名で成聖式が行われた。ここには、ピョートル1世の命で1708年ペテルブルグに運ばれたカザンの生神女マリアのイコン画が置かれていた。

1790年代パーヴェル1世は古い教会の場所に新しい聖堂を建てることを決め、1800年アンドレイ・ヴォロニーヒン（1760-1814）の設計図を承認した。彼を建設指揮者に推薦したのはストロガノフ伯爵だった。聖堂の最初の礎石は1801年8月アレクサンドル1世によって置かれた。

ヴォロニーヒンはローマのサン・ピエトロ大聖堂を基に設計した。サン・ピエトロ大聖堂は、巨大なクーポラのバシリカ会堂で、壮大な弧状の柱廊が広場を形成している。1990年まで世界最大のキリスト教聖堂だった（十字架を含む高さ132.5m）。カザン聖堂はより慎ましく建てられ、サン・ピエトロ大聖堂の半分の大きさしかない。縦溝や彫装飾のある建物の外側は、石灰岩から成っており、イヴァン・マルトス、ステパン・ピメノフ、イヴァン・プロコフィエフ、フョードル・ゴルデーエフ、ジャン・ドミニク・ラシェット、ヴァシーリー・デムート＝マリノフスキー作の数多くのレリーフ、彫刻で覆われている。装飾作業は急ピッチで進められ、巨大な扉門制作のために1760年代ニキータ・デミドフの注文で、有名なロレンツォ・ギベルティの傑作、フィレンツェの洗礼堂（ドゥオモ、花の聖母教会のサン・ジョヴァンニ洗礼堂「天国への扉」）の黄金の扉からとられた型が使われた。彫刻装飾はもっと豊富になるはずだったが、作業は1812年戦争によって中断し、以降、再開されなかった。建築家たちの設計を思い起こさせるのは、列柱のそばの何もない台座のみだ。

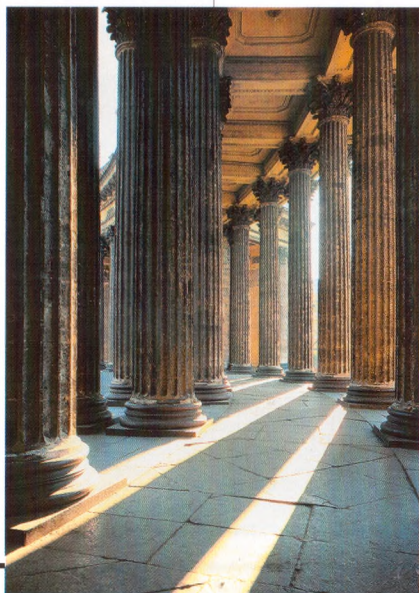
聖堂の壁は、クトゥーゾフが1801年戦地に赴く前、聖堂の聖像前で祈りを捧げたのを見守り、また聖堂はアレクサンドル1世以降全ての皇帝を記憶に留めている。

1990年代聖堂は再び教会として機能するようになり、府主教が祝祭日に礼拝を行う主教聖堂の地位を得た。

歴史情報

カザン聖堂の名前の由来となった生神女（聖母）マリアのイコンは、16世紀にカザンで発見された伝説的なイコンの貴重な写しの一つだ。原画の行方はわからないが、カザン聖堂に保管されている写しは17世紀末皇后プラスコヴィヤ（旧姓サルティコヴァ、ピョートル1世の兄イヴァン5世の妻でアンナ女帝の母）の依頼で制作された（または上から色を塗って新しくした）。ポーランド侵攻とミーニンとポジャルスキーの義勇軍によるモスクワ解放（1612年）の時代から、カザンの生神女マリア画はロシア軍の、1649年からはロマノフ王家の守り神だとされている。

至聖所と祭壇後方のイコン「聖生神女昇天」1836年 画家カール・ブリュロフ

至聖所後陣の内装（イコノスタス修復前の外観）

ネフスキー大通り グリボエードフ運河からサドーヴァヤ通りまで

サドーヴァヤ通りから海軍省方向のネフスキー大通りのパノラマ

ネフスキー大通りのグリボエードフ運河からサドーヴァヤ通りまでの奇数側の地区が町の商業の中心になったのは、現在のガスチーヌィ・ドヴォールの場所に市場の広場があった18世紀半ばだ。

エリザヴェータ女帝の命令でその場所に1750年代バルトロメオ・フランチェスコ・ラストレッリが石造りの百貨店街の建設を始め、それはエカチェリーナ2世時代、ヴァレン＝デラモートによって完成された。その建設後、ここで商業用の建物が次々建設された。わずか10年でガスチーヌィ・ドヴォールの西にセレブリャンヌィエ・リャーディ(百貨店)、小ガスチーヌィ・ドヴォール(1780年代、建築家D.クヴァレンギ)、ペリンヌィエ・リーニヤ(柱廊が保存されている。1800年代、建築家L.ルスカ)、サドーヴァヤ通りにアプラクシン・ドヴォール(マーケット街)が建てられた。19世紀半ば、ネフスキー大通りの反対側まで商業地帯を広げたパッサージュ(百貨店)が建てられた。

産業革命時代のネフスキー大通りのエネルギッシュな技術設備は、19世紀末までにネフスキーをヨーロッパ有数の整備された幹線道路にし、明るく輝いているショーウィンドーに、何千、何万もの人々を引き寄せた。ネフスキー大通りに沿って、高級な石や彫刻で装飾されたファサードが競い合う新しい高級店や銀行が急速に建てられた。

ガスチーヌィ・ドヴォール
ネフスキー大通り35

「回」の形をした巨大なショッピング・センターは中央の池のある中庭を囲んで、4つの通りに面している。この建物は1750年代末、ネフスキー大通りの北側に建設された。エカチェリーナ2世の即位とともに、建物を設計したラストレッリは罷免され、かわってジャン＝バティスト・ヴァレン＝デラモートがその地位についた。ヴァレン＝デラモートは設計自体は変えなかったが、ネフスキー側の、当時唯一の石造ファサードをバロック装飾にすることをやめた。1780年ガスチーヌィ・ドヴォールの木造部分(三面)は火事で全焼し、その後1785年までに完全に石造の建物に再建された。

ガスチーヌィ・ドヴォール

市議会
ネフスキー大通り31–33

パーヴェル1世は自分の改革の過程で、ピョートル1世が成しえなかったこと、つまり、ヨーロッパの市議会をまねて、各層の代表者から成る市議会制の復興を決めた。ピョートル1世は1699年から市議会を設立したが、貴族の強い反発に遭い、1720年にはその改革を断念した。2回目の試みは1770年代にエカチェリーナ2世によってなされたが、彼女によって設立された市議会は名ばかりのもので、貴族会議と変わらなかった。

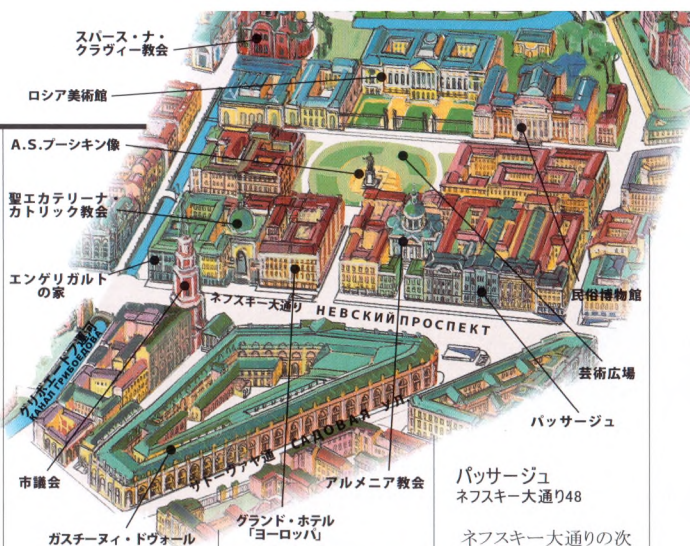
パーヴェル1世は再びその改革を試み、ペテルブルグに「ラトガウス(市議会)」(ウェールズ語. rhaith「秩序」, 古代ロシア語「列」, デンマーク語「(国政の)舵を取る」)を設立した。そのために小ガスチーヌィ・ドヴォールとペリンヌィエ通りの間の区画を割り当てた。1799–1804年建築家ジャコモ・フェラーリがラトガウスの建物を建設する。19世紀半ばと20世紀初頭に建物は二度にわたって改築されたが、改築はネフスキー大通りの観光名所の一つである時計塔までは及ばなかった。

エンゲリガルトの家
ネフスキー大通り30

ネフスキー大通りの北側(偶数の並び)、グリボエードフ運河からサドーヴァヤ通りまでの建設はエンゲリガルトの家(現サンクト・ペテルブルグ・フィルハーモニー小ホール)から始まった。これはネフスキー大通りの最も古い建物の一つで、18世紀半ば、ラストレッリの設計によって建てられた。1802年からここの1階の貸しホールで、当時創立されたヨーロッパ初のフィルハーモニー音楽協会のコンサートが行われていた。このこけら落としは1802年春、ヨーゼフ・ハイドンのオラトリオ「天地創造」の初演で行われた。

1828年この建物の所有者になったのはヴァシーリー・エンゲリガルトで、彼の注文によって1829－1830年に建築家ポール・ジャコーが改築した。エンゲリガルトの家は仮面舞踏会で有名になり、そこには時々ニコライ1世も足を運んでいた。ミハイル・ユーリエヴィチ・レールモントフはそこを支配していた風俗を戯曲「仮面舞踏会」に生き生きと描写している。

聖エカテリーナ・カトリック(ポーランド)教会
ネフスキー大通り32–34

古い木造教会の場所に建てられた教会はジャン＝バティスト・ヴァレン＝デラモート(1760年代)が設計し、アントニオ・リナルディが建設した。建物の優雅なバロック装飾、建物の正面入口は高いアーチ型玄関で装飾され、この建築家の技量を発揮している。1782年10月18日に成聖式が行われた。この教会にはペテルブルグに住んでいた全てのカトリック信者が足を運んでいた。ここにはポーランド最後の国王スタニスラフ2世アウグスト・ポニャトフスキー(1732–1798)が埋葬されている。

聖エカテリーナ・カトリック教会

聖エカテリーナ・アルメニア(グレゴリウス)教会
ネフスキー大通り40–42

1770年エカチェリーナ2世はペテルブルグ・アルメニア共同体長イヴァン・ラザレフの請願にこたえて、アルメニア教会建設用にガスチーヌィ・ドヴォールの向かい、ネフスキー大通り北側の一画を与えた。1771–1779年ユーリー・フェリテンの設計によって、そこにローマ古典主義的なブラマンテの作品「ローマのテンピエット(小神殿)」を彷彿させるエレガントな教会が建てられた。1780年2月18日教会は聖エカテリーナの名前で成聖式が執り行われた。政府代表者としてグリゴーリー・ポチョムキンが出席した。

聖エカテリーナ・グレゴリウス教会

パッサージュ
ネフスキー大通り48

ネフスキー大通りの次の区画、サドーヴァヤ通りの角の辺りに、1840年代建築家ルドルフ・ジェリャゼーヴィチの設計で新しいタイプの商業用建物が建てられ、「パッサージュ」と名づけられた。2つの斜面のあるガラス屋根で覆われた長さ180mもの通路の両側に店が並んでいる。

市議会の建物と時計塔 1900年代

小カニューシェンヌィ橋から見るスパース・ナ・クラヴィー教会 ➡

スパース・ナ・クラヴィー教会（キリスト復活教会）

2–j4, p. 320

聖堂の西ファサードのモザイク画「キリストの磔」
アルフレード・パルランドの下絵による

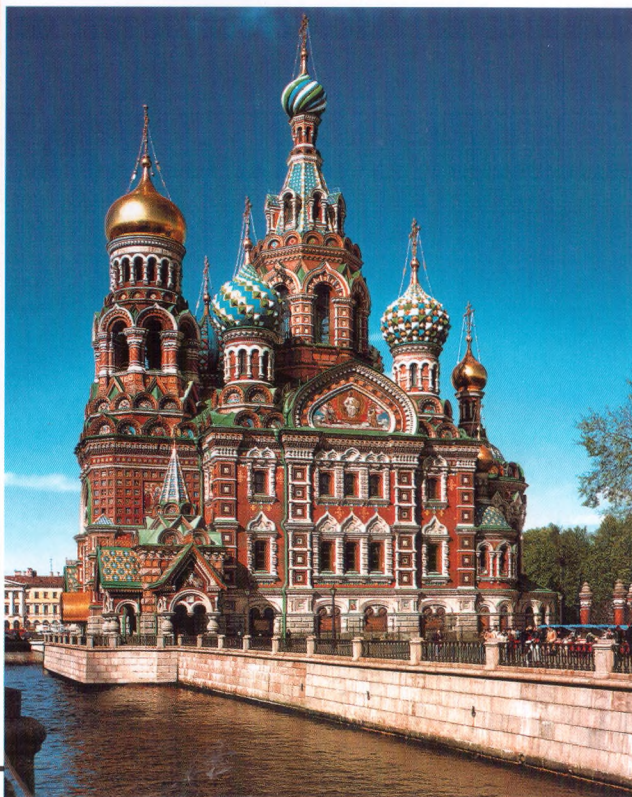
1881年3月、テロリストによるアレクサンドル殺害のニュースがロシアを震撼させた。悲劇は冬宮のすぐそばのエカチェリーナ運河（現在のグリボエードフ運河）川岸で起こり、2年後その場所に、ペテルブルグ有数の記念碑となる記念教会が建てられた。

建築家アルフレード・パルランドは17世紀の純ロシア風寺院に似た建物をというアレクサンドル3世の希望で、複雑な構造と装飾要素に満ちたミハイル・ロマノフ（1596-1645）皇帝時代のモスクワやヤロスラーヴリ建築法を彷彿させる建築物を作り上げた。広く使われたのが、壁のモザイク象嵌（はめ込み細工）（総面積400㎡以上）と赤レンガの壁から細部の装飾を浮き出せて見える伝統的な白色塗料だ。

建物の起工式は1883年11月6日に行われた。1894年天井の建設が終わり、1895年に9つのたまねぎ型の冠頂が造られた。モスクワのポーストニコフ工場で製造された5つのクーポラのための屋根は、精巧なエナメルで覆われた（面積1000㎡）。1899年、鐘楼に、フィンランドで鋳造された鐘が設置された。一番大きい鐘は1100プード（プードはロシアの古い重量単位で、1プード1,638t、17.6t）である。成聖式は建設が始まって25年後の1907年に行われた。この建設に500万ルーブルが使われたが、その中の10分の1は善意の寄付によるものだ。

歴史情報

アレクサンドル2世に仕えた小姓、アナーキスト（無政府主義者）ピョートル・クロポトキン公の回想によると、皇帝は言うまでもなく非凡な人物で、勇敢でいかなる場合でも冷静沈着だった。1881年3月1日の彼の暗殺は実に7回目の企てだった。マルス広場での衛兵交代式から冬宮に戻っているとき、皇帝の馬車はエカチェリーナ運河を曲がった。その車輪の下に一つ目の爆弾が投げ込まれ、護送隊のコサック兵と近くを通っていた子供が死んだ。二つ目の爆弾はアレクサンドル2世が馬車から出てきた時、炸裂した。皇帝は数時間後、冬宮で亡くなった。

「アレクサンドル2世の肖像画」
ニコライ・ラヴロフ　1872年（?）

聖堂入口

スパース・ナ・クラヴィー教会は高さ81m（十字架はのぞく。初期十字架の高さは6mだったが、現在は4.5mの中央十字架を頂いている）の重量感のある建物で設計上複雑な構成になっている。教会は運河に突き出た人工プラットホーム（土台）の上に立っている。プラットホームはアレクサンドル2世が殺害された川岸通りの場所を含んでいる。パルランドはペテルブルグの建築史上初めて土台に杭を打たず、コンクリートを用いた。水が入ってこないように、コンクリートの周囲は二層、三層の粘土壁で覆われた。

教会の暖房のために地下にボイラーと配管暖房装置が設置され、ここで暖められた空気は壁の中の管を通して教会内に送り込まれた。メイン・クーポラの空間は、さらに鉄製の暖房装置（銅穴から蒸気を送る）によって暖められた。

建物の全てのクーポラは窓が無く、光は小さめの窓からしか内部に差し込まないため、パルランドは1500の電球をつける複雑な照明システムを想定していた。

ミハイル庭園の鉄柵

ペテルブルグ様式

ロシア様式

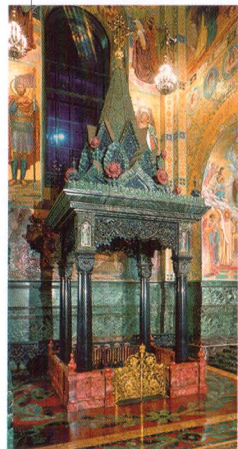
「折衷主義（エクレチカ）」（ギリシャ語．eklecticos「選ばれた」）という用語は約1世紀前、流行した。19世紀後半のヨーロッパ建築の共通した特徴を表すには、恐らくこの言葉が一番適しているだろう。この頃までに建築学教育や建築技術が発展し、アカデミー派の地位は低下した。それによって建築家達はエキゾチックな設計でも制限なく表現できるようになった。どのヨーロッパ諸国においても、エキゾチックな設計の中に、伝統と関係のある一定の「好み」があった。

ロシア様式の褒賞「ひしゃく」1909年「ファベルジェ」工房 サンクト・ペテルブルグ 銀製

ロシアでは愛国主義の高まりと共に、古代ロシアの芸術遺産とフォークロアに対する再評価が始まった。これは音楽（リムスキー=コルサコフ、ボロディン）、文学（アレクセイ・トルストイ、エルショフ）、絵画（ヴァスネツォーフ、スーリコフ、ビリービン）、美術工芸品（アブラムツェフ・サークル、タラシュキ）、そしてもちろん建築分野でも起こった。古代ロシアの伝統復興のきっかけになったのは、不思議なことに、イギリスのラファエロ前派（19世紀中葉の英国画家グループ）のヨーロッパ人にローマ時代以前（ケルト）のフォークロア文化を開く運動（ウィリアム・モリス）である。ロシアにおいて民衆芸術を正式な芸術文化にまで押し上げた立役者となったのは、間違いなくアレクサンドル・セルゲーヴィチ・プーシキンだろう。彼はロシア民話を天才にふさわしい、独創的な詩に作り変えた（「死んだ王女と7人の勇士の話」、「ルスランとリュドミラ」他）。ロシア文化活動家たちは自身の過去を振り返り、そこに芸術的至宝があることに驚嘆した。ロシアの文化は西ヨーロッパ文化に引けを取らないばかりでなく、多くの点で優れていたのだ。「イーゴリ軍記」、オストロミール福音書（ノヴゴロド城主オストロミールの用命で作られた現存する最古の福音書）の小品、ノヴゴロドとウラジーミルの寺院やフレスコ画、アンドレイ・ルブリョフのイコン画、もっと古くは、ほとんど研究されてないスキタイ・サルマト世界の至宝「チュード湖」の古代文明等である。ロシア中で自国文化への回帰運動が流行した。時折それは非常に奇妙なものを生み出したが、挿絵芸術の繁栄、ロシア美術館創立とロシア美術館付属の民族部門の設立、言語学（ロシア語）への関心の高まり、考古学研究やロシア国内の辺境地帯の学術探検など、重要な成果もあげた。スパース・ナ・クラヴィーはまさにこの流れを受けて建てられたものだ。

「17世紀のロシア皇帝衣装を身につけたニコライ1世とアレクサンドラ皇后」
1903年
衣装はサンクト・ペテルブルグ創立200周年舞踏会のために作られた。

スパース・ナ・クラヴィー教会（キリスト復活教会）

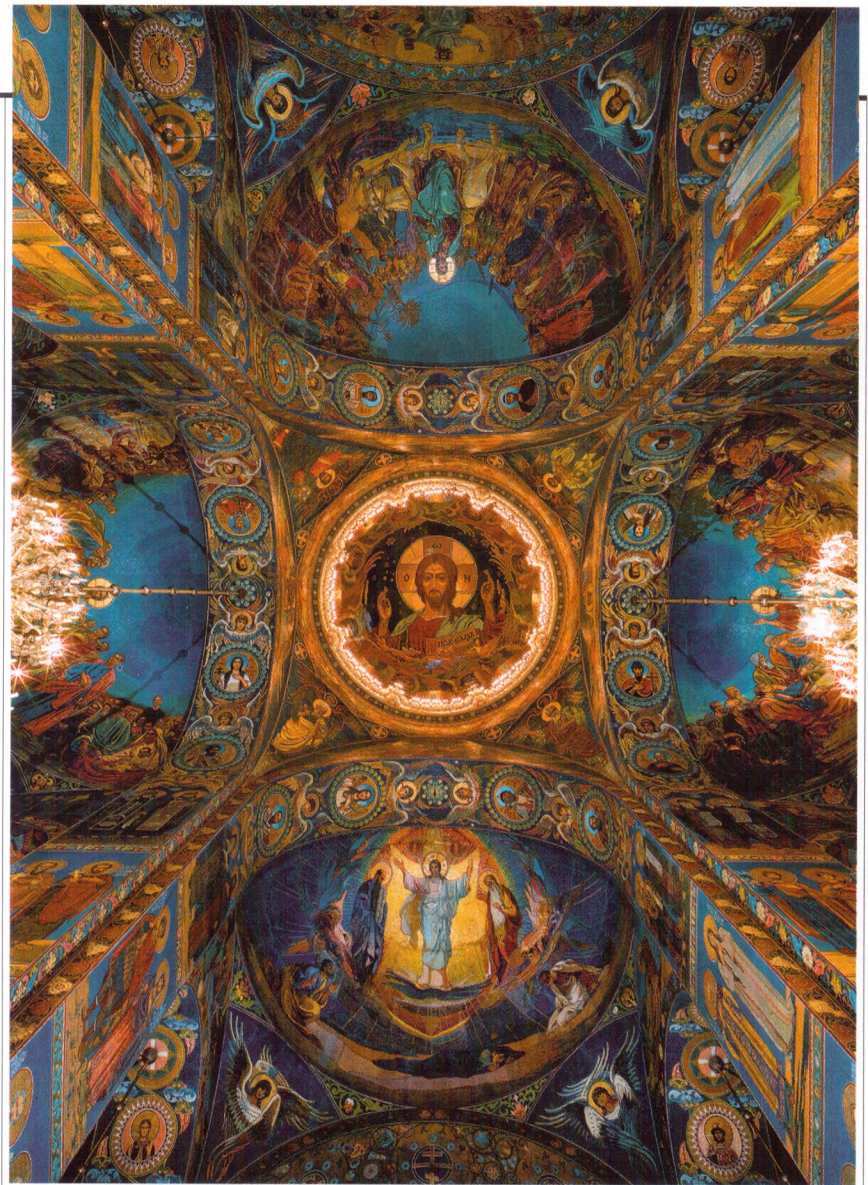
教会インテリアにおけるモザイクの総面積は6500㎡にも及ぶ。

アレクサンドル2世殺害場所の天蓋

殺害場所の上の高価な多角形の天蓋はパルランドの絵をもとに制作された。天蓋を支えている柱及び天蓋自体は、ブハラの瑠璃をはめこんだ碧玉で制作された。天蓋の内部はフィレンツェのモザイク画の技法で、ラピス・ラズリで作られ、星の役割を果たしているシベリアの宝石やトパーズ（黄石）が嵌め込まれた。100以上のトパーズが天蓋を飾っている。

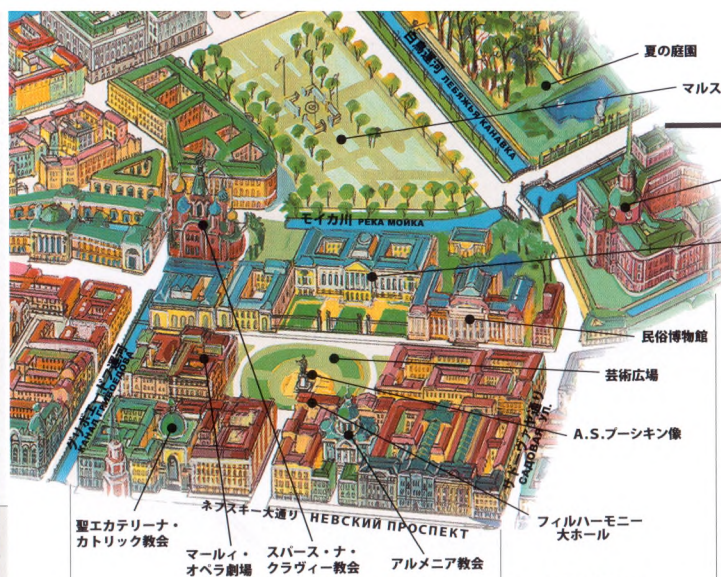
天蓋と教会内装

「聖アレクサンドル・ネフスキー」のイコン画

イコノスタスの北聖像入れのモザイクのイコン画は、ミハイル・ネステロフの下絵をもとに制作された。イコノスタスの他のイコン画の下絵は、ネステロフに劣らぬ名画家達、ヴィクトル・ヴァスネツォーフ（「聖母子」「救世主」）、ニコライ・ブルーニ（「最後の晩餐」）、ニコライ・ハルラーモフ（「聖体機密」）他によってなされた。

イコノスタスの中心部

中央丸天井のモザイク画

教会の内装の準備作業（資源の加工等）はロシアとイタリアの様々な工房で同時に行われた。床に用いられた様々な色の大理石一式（650㎡）と同じように、イコノスタス用の大理石部分は、1900年代、パルランドの下絵をもとにジェノヴァで制作された。1894年から1906年まで20年間、エカテリンブルグでばら輝石の透かし彫り聖像入れ制作に従事したのはエカテリンブルグとコルシヴァンス研磨工場だ。天門（祭壇中央入口の扉）は1900年モスクワで制作された。教会の装飾に、希少価値の高いイタリアのカラー大理石、ウラルとアルタイ産の碧玉、斑岩、ばら輝石など約20種類の希少な細工用鉱石が使われた。

1895年3月教会建設委員会は、教会のモザイク制作請負工場を決め、フローロフ・ペテルブルグ工房に白羽の矢を立てた。この工房のモザイクは着色ガラスが軽量なこと、高品質であることで群を抜いていた。モザイクの下絵制作に参加したのはミハイル・ネステロフ、ヴィクトル・ヴァスネツォーフ、アンドレイ・リャブーシュキン、ニコライ・ハルラーモフ（彼はモザイクの下絵の大部分である42枚の下絵を描いた）、他にもヴァシーリー・ベリャーエフ、ニコライ・ブルーニン等が参加した。

1830年代初頭、ネフスキー大通りの北、カトリック教会とアルメニア教会の間の地区に、ネフスキー大通りと建設して間もないミハイル宮殿（p.116）の新しい広場をつなぐ、短いが、幅広い通りが敷かれた。ネフスキー大通り、宮殿、広場、この通りも全て製作者はカルロ・ロッシだが、彼の「全建築作業からの」解任（1830年代）後、ニコライ1世は残りの作業を建築家ポール・ジャコとアレクサンドル・ブリュロフに委任した。

ミハイル宮殿の北

ミハイル宮殿の敷地の北にマルス広場（p.124）が隣接している。マルス広場はネヴァ川に面し、地形的にネヴァ左岸の中央アンサンブルの一部である。1820年代ロッシによってなされた再建後、マルス広場はネフスキー大通りとつながった。ネフスキーからこの広場まで数本の美しい通りが通っている。旅行者は普通グリボエードフ運河の右岸を通り、スパース・ナ・クラヴィー教会からミハイル庭園の並木道を通るコースを好むようだ。ミハイル城塞（p.126）と夏の庭園の間の（p.130）モイカ川岸の並木道は、非常に美しいアンサンブルを形成している。

A.S. プーシキン像

芸術広場の小公園（スクウェア）

19世紀広場の中心にきれいな小庭園（約1.5ヘクタール）が設けられた。1940年代この庭園はスクウェアになり、1957年にA.S.プーシキン像（彫刻家M.アニクーシン）が設置された。これは恐らくこの作家の像で最良のものであろう。

ミハイル宮殿
p. 318

現在はロシア美術館（1895年開館）として有名なミハイル宮殿は、ペテルブルグの地図における広場出現の重要な「立役者」である。宮殿は1819年、参謀本部（p.78）とほとんど同時に建てられ、アレクサンドル1世時代の輝かしい記念物の一つになった。

ロッシのパヴィリオン

フィルハーモニー（ペテルブルグ交響楽団）大ホール
p. 317
ミハイロフスカヤ（ミハイル）通り2

1834–1839年、ロッシの設計で、ポール・ジャコによって建てられた。当初はペテルブルグの貴族会議用の建物に定められていた。ジャコの一番の功績は1500人収容のコンサートホールを設計したことだ。ホールは音響効果が素晴らしく、今までヨーロッパ有数のコンサートホールに数えられている。1840年代「エンゲリガルトの家」からこのホールにペテルブルグフィルハーモニー協会が移ってきた。その名声は、フランツ・リストの言葉によると、当時「あらゆる作曲家、演奏家がこの会場で演奏するのを名誉に思っていた」。この舞台に立ったのはリストだけではなく、ベルリオーズ、ワーグナー、シューマン、シュトラウス達、そしてボロディン、グリンカ、ムソルグスキー、リムスキー・コルサコフ、チャイコフスキー、ショスタコーヴィチの初演もここで行われた。1932年以降、フィルハーモニー交響楽団の主席指揮を務めていたのは、20世紀の大指揮者の一人、エフゲーニー・ムラヴィンスキー（1903－1988年）だ。

グランドホテル「ヨーロッパ」
p. 296

1873-1875年古いフランスホテル「クローン」があったところに、ネオ・バロック様式で建てられた（建築家L.フォンターナ）。その時「グランドホテル」という名前をつけられたこのホテルは、ヨハン・シュトラウス、クロード・ドビュッシーが泊まったことで知られている。今日ホテルのファサードは、それぞれ異なる様式で装飾されている。南北（ネフスキー大通りと芸術広場に面している）は古典主義で、東正面（ミハイル通り）は初期のバロック装飾を残している。

ホテル「ヨーロッパ」

ロシア民俗博物館
p. 322

当初ロシア美術館の別館として創立されたが、1934年独立した美術館になった。世界有数の民俗コレクションを誇り、独特の展示品（主に19世紀末から20世紀初頭の）はロシア帝国の民俗文化を紹介している。博物館の学術探検で集められた巨大な写真資料コレクション（約15万点の写真とネガ）からは国の辺境地帯にいた古代の住居、古代の農家や民族の生活様式の特徴がうかがえる。

ロシア民俗博物館

博物館の中央（大理石）ホール

イタリヤンスカヤ（イタリア）通り
① 2-j5,m6

グリボエードフ運河からフォンタンカ川までネフスキー大通りと並行して走っている。この通りに18世紀から19世紀初期にかけての古い住居が保存され、ここに居心地の良い数々のレストランが20世紀初頭の伝統を守りながら、ひっそりと「隠れている」。その当時イタリヤンスカヤ通りの穴蔵酒場の一つ（芸術広場5）に当時のペテルブルグのモダニズム・ボヘミアン（放浪者型の俳優・音楽家・画家などの総称）の中心、有名な「野良犬」があった。

イタリヤンスカヤ通り沿いのパッサージュの入口のそばに19世紀末から劇場ホールが存在している。20世紀初頭に若干拡張されたこの建物に、20世紀ロシアのアヴァンギャルド劇場のさきがけとなるヴェーラ・コミサルジェフスカヤの新劇場が創立された。この劇場は長くは続かず、アメリカ公演失敗後、1909年に閉鎖した。現在、この場所にはこの女優の名前を冠するドラマ劇場（p.317）がある。

マーリィ・オペラ・バレエ劇場（ミハイル）
p. 317

この劇場は1831-1833年アレクサンドル・ブリュロフによって建てられ、ファサードはロッシの設計によって装飾された。1859-1860年当時のペテルブルグの劇場建築の第一人者であったアルベルト・カヴォスが再建した。劇場は宮廷の資金で維持されており、ロシア革命まで主にフランスバレエ劇団が上演していた。

芸術広場の小公園（スクウェア）から見るイタリヤンスカヤ通り

2–j5, p. 318

ミハイル宮殿 国立ロシア美術館

ミハイル宮殿の内部作業にあたったのは彫刻家のヴァシーリー・デムート＝マリノフスキーとステパン・ピメノフ、画家のジョヴァンニとピエトロ・スコッティ、アントニオ・ヴィギー、バルナバ・メディチ、フリードリヒ・ブリュロー、塑像家のニキータとセルゲイ・サエギン、彫刻家のヴァシーリー・ザハーロフとヴァシーリー・ボブコフ他多数。下絵を作成したのはロッシ自身で、シャンデリアや扉の取っ手の細部まで詳細に渡って描いた。残念ながら宮殿に残っている1820代の内装はわずかである（下図）。その中には非の打ち所ない構成の上流社会の客間「白の間」や、現在18世紀末の肖像画が展示されている洗練された美しさの旧寝室がある。

「ロシア・アンピール様式」のミハイル宮殿（1819-1825）は、終焉を迎えようとしていた古典主義の宮殿建築の優れた見本の一つだ。アレクサンドル1世の弟ミハイル大公（1798－1849）のために、フレデリカ・シャルロッタ・マリヤ・ヴュルテンベルスカヤ（ロシア名エレーナ・パヴロヴナ）公女との結婚後の住居として建てられた。設計は、当時エラーギン宮殿（p.153）の建設で名声を高めたカルロ・ロッシに依頼された。

ミハイル宮殿はロッシの最盛期の作品である。建設の過程で彼は10ヘクタール以上の広場にある全ての建築風景を改造した。宮殿アンサンブルは、かつてエカチェリーナ1世の所領だったモイカ側の古い公園のあった区画を含んでいた。ロッシはその区画を柵で囲い、ここに橋の架かった美しい池をいくつかつくり、モイカ川への下り階段にエレガントなパヴィリオン・埠頭（「ロッシのパヴィリオン」p.114）を建設した。ロッシは建物の側面の翼廊を正面（北面）前の広場へ突き出すようにした。こうして立派な柵で隔てられたクロドネール（仏語. cour d'honneur「名誉ある中庭」）が形成された。ロッシは広場をネフスキー大通りと結び、ここからミハイル宮殿の中央柱廊玄関が見えるようになった。

1894年宮殿は一年後に創立されたアレクサンドル3世の名を冠するロシア美術館に移譲された。現在美術館のホールには世界の芸術遺産の中でも特に貴重なロシア絵画・建築の傑作が展示されている。

白の間

旧寝室

イヴァン・ヴィターリ 「ヴィーナス」1852年

2階の展示ホール

建物がロシア美術館に譲られた後、建築家ヴァシーリー・スヴィニインは1900年代に豪華な宮殿内装部をほとんど全て展示室用に改装したが、これは芸術愛好家達の多くの非難を巻き起こした。

ロシア・アンピール

ベヌア・シャルル・ミトゥアール「カルロ・ロッシの肖像画」1820年代（ロシア美術館所蔵）

アンピール様式（仏語.Empire「帝国」、ラテン語.Imperium「権力」）はナポレオンが自らを皇帝と宣言した時代にフランスで起こった様式である。これは、ちょうど古典主義の中に最終的に思想的（イデオロギー）危機がはっきり現れた時代にあたる。すなわち、古い説（古典主義）擁護者はあいかわらず「人間は積極的に世界に影響を与え、世界を改善することができる。そしてそれをしなければならない」と考えていたが、センチメンタリスト達（ルソー「自然へ帰れ」）は原点、簡単さの回帰を要求していた。アンピール時代、古典主義の枠内の全ての哲学的討議は終わりを迎えていた。

アンピール様式も古典主義同様、ギリシャ・ローマの柱式システムを基にしているが、そのイデオロギー（思想）は共和制の自由ではなく、軍事力と国家繁栄であるという確信に基づいていた。アンピールはナポレオン帝国の軍国主義の様式である。アンピール様式の典型的なものは、凱旋門や凱旋柱、名誉の戦闘用2輪馬車、武器や旗である。この様式を象徴するものは、ゼウス、ユピテルの象徴である双頭の鷲の像である。これはローマ軍時代の軍人達が軍旗を鷲の絵で飾っていたことから生まれた。

18世紀と19世紀の狭間にパリで本物の産業に変わったアンピール様式の美術工芸品は、ペテルブルグのあらゆる宮殿で見ることができる。「アンピール様式の芸術的な家具は、常にロシア人に買われてロシアに運ばれたため、パリではこの様式の評価が低く、まだ十分に理解されていない」（ポクロフツォフ,1900年）。このロシアでアンピールは自らの第2の故郷を見つけたのだ。アンピール様式の最たる表現者だったのはカルロ・ロッシ（1775－1849年）である。天才職人で疲れ知らずの働き者、その上稀有の才能に恵まれた彼は、壮大な都市アンサンブルだけでなく、素晴らしいインテリアや小物まで手がけた。ロッシはアンピール様式の創始者ペルシエとフォンテン（パリのカルーゼル凱旋門の設計者）の弟子だったヴィンチェンツォ・ブレンナのもとで基礎を習った。その後1802－1804年フィレンツェ・アカデミーで学び、モスクワ、パヴロフスク、ガッチナで働いた。彼の手がけた作品には全て、この巨匠のサインが入れられた。

「ミハイル宮殿の主寝室のテーブル」1825年 カルロ・ロッシの下絵による

ロシア美術館の展示物

1898年に厳かに開館式典が行われたロシア美術館は、世界有数の絵画美術館である。展示物の数は37万点に迫る。ミハイル宮殿のコレクションはテーマ別ではなく、年代別に展示されている。ここでテーマがあるのは、民俗展示品だけだ。美術館のコレクションの一部は、ロシア美術館の分館であるストロガノフ宮殿（p.102）、大理石宮殿（p.128）、ミハイル城塞（p.126）でも展示されている。

ヴァレンチン・セローフ
「エウロペの誘拐」 1910年代（？）

20世紀の芸術

コレクションは20世紀初頭の有名な団体「芸術世界」のバクスト、ベヌア、ビリービン、ゴロヴィン、レーリフ、セローフ、ソモフ他の傑作だ。また、ここではシャガール、カンジンスキー、マレーヴィチの初期の作品、ペトロフ＝ヴォドキンとセレブリャコフの大作、全ての流派のロシア・アヴァンギャルドの作品がある。また、ソ連芸術ではフィロノフ、グラバリ、サリヤン、ピメノフの傑作も展示されている。

カジミール・マレーヴィチ
「女性の肖像画」 1910年代

バルトロメオ・カルロ・ラストレッリ
「アンナ女帝と黒人の従僕」
1741年

ベヌア棟

ロシア美術館の西の2階建ての棟。これは1910年代レオンチー・ベヌアとセルゲイ・オフシャニコフの設計によって建てられ、近代芸術の展示用の建物となった。建築家達は、ロッシの統一されたアンサンブルを損ねないよう、建物を古典主義様式で装飾した。現在ベヌア棟2階では20世紀のロシア絵画が展示されている。

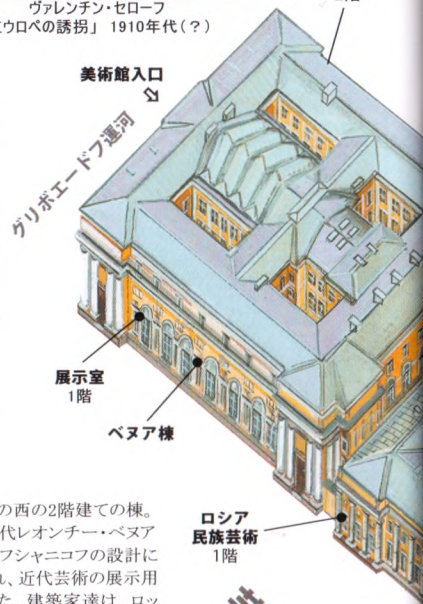
黄金の装飾品（女性用）
12世紀前期
（キエフ・ルーシ）

彫刻

館内のほとんど全てのホールを装飾している。最も有名なのは「黒人の男の子の従僕」を連れたアンナ女帝のブロンズ像だろう。バルトロメオ・カルロ・ラストレッリ（1741年）の素晴らしい作品だ。

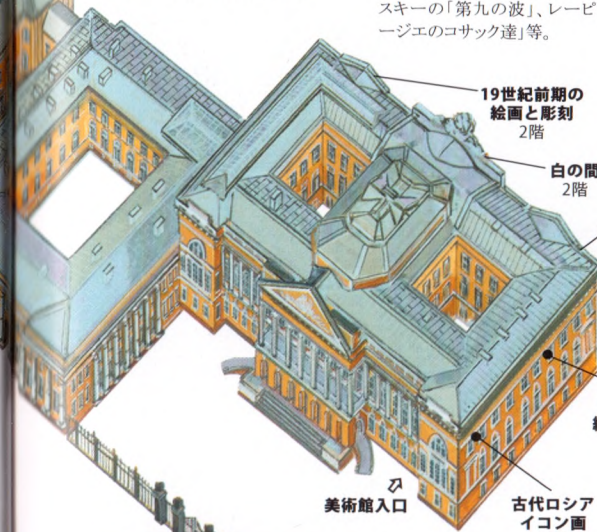
ロシア民族芸術

西翼部1階ではロシア国内の職人による民族芸術作品を数多く展示している。

「女性の民俗衣装」
19－20世紀初期（リャザン）

ウラジーミル・ボロヴィコフスキー
「副宰相アレクサンドル・クラーキン公の肖像画」 1799年

ヴァシーリー・スーリコフ 「マースレニッツァの雪山の占領」 1891年

18世紀の芸術

展示品はロシア人画家が18世紀初頭のヨーロッパ絵画の模倣から始まり（マトヴェーエフ、ニキーチン他）世紀末にいかにして頂点までに達したか（レヴィツキー、ボロヴィコフスキー他）を紹介している。

19世紀の芸術

19世紀における世界レベルの巨匠の数でロシアに比肩するのは、おそらくフランスだけだろう。ロシア美術館ではこの時代のおなじみの傑作を数点展示している。ブリュロフの「ポンペイ最後の日」、アイヴァゾフスキーの「第九の波」、レーピンの「ザポロージエのコサック達」等。

コンスタンチン・マコフスキー
「妻ユーリヤの肖像画」 1881年

イコン

展示は、ビザンティン派の画家によって制作された10-11世紀のイコンから始まる。後にロシア・イコン派は独自の発展の道を見つけ、アンドレイ・ルブリョフ（1360年頃 － 1430年頃）の時、その芸術性は頂点を迎える。このホールの見どころはノヴゴロド派のイコン画だ。

イコン画「聖フロル、聖ヤコブ、聖ラウル」
15世紀後期（ノヴゴロド派）

イコン画「旧約聖書の三位一体」一部
16世紀中葉
（ノヴゴロド派）

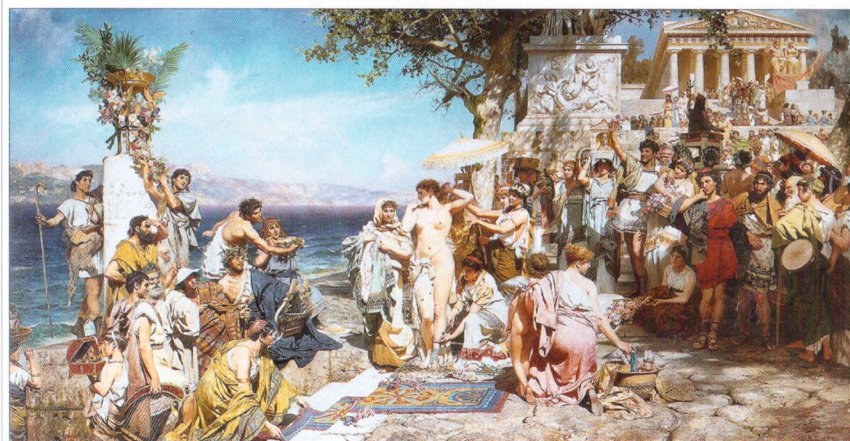
イコン画「大天使ガブリエル」
(「黄金の髪の天使」) 12世紀

最初にロシア美術館所蔵となった約5千点の作品は、後になって何度も増えたコレクションの最低基準を決めた。当時、美術館の運営者が自らに課した課題は、一つの建物の中に「できるだけ多くのロシア芸術遺産の秀作、傑作を集めること」だった。美術館に最初に入ってきたのは、芸術アカデミーの古代キリスト美術館の同名コレクションだった。これはイコン画の貴重なコレクションの基となり、有名なノヴゴロド派のイコン画を展示している。

イコン画「聖ゲオルギウス」
14世紀末ー15世紀初期

ロシア美術館は1856年にモスクワに創立されたトレチヤコフ美術館と常に比較される運命にあった。ロシア美術館を支えたのは、18ー19世紀ペテルブルグに住んで、活動していた芸術アカデミーの教授や卒業生であるロセンコ、レヴィツキー、ボロヴィコフスキー、カール・ブリュロフ、キプレンスキー、イヴァン・ヴィターリ、ピョートル・クロット、アレクサンドル・イヴァーノフ、ブルーニ、クインジ、アイヴァゾフスキー、レーピン、セローフだ。彼らの優れた作品はあやうくペテルブルグに埋もれてしまうところだったが、後にロシア美術館に収蔵されるようになった。

イヴァン・ビシュニャコフ
「サラ・エレノール・フェルモールの肖像画」1749年

カール・ブリュロフ
「ポンペイ最後の日」 1830ー1833年

ゲンリヒ・セミラツキー
「エレシウスのポセイドン祭のフリナ」 1889年

イヴァン・アイヴァゾフスキー
「第九の波」 1850年

19世紀後半のロシア画派は、一連の優れた名匠を輩出した。代表的なのはイヴァン・アイヴァゾフスキー、イリヤ・レーピン、ヴァシーリー・ポレノフ、ミハイル・ネステロフ、ヴァレンチン・セローフ、ヴィクトル・ヴァスネツォーフ、ヴァン・クラムスコイ、イヴァン・シーシキン他多数。彼らは全て古典主義絵画の抽象性と風俗画の大げさな修飾から脱することができた。

イリヤ・レーピン
「ザポロージエのコサック達がトルコのスルタンに手紙を書く」 1880－1891年

ミハイル・ネステロフ
「大剃髪式（修道女となるための剃髪）」 1898年

ヴァレンチン・セローフ
「ユスーポフ公妃の肖像画」 1902年

ニコライ・レーリフ
「海の向こうから来たお客」 1902年

マルク・シャガール
「散歩」 1917年

パーヴェル・フィロノフ
「マースレニッツァ」 1913－1914年

コンスタンチン・ソモフ
「コロンビーナ」 1915年

クジマ・ペトロフ＝ヴォドキン
「聖母マリア」 1914－1915年

19世紀末から20世紀初めはロシア芸術がようやく世界的評価を得たロシア芸術史の黄金期である。画家達の中でその名誉がロシア国外にまで広まったのは、ロッシ、ニコライ・レーリフ、ミハイル・ブルーベリ、ヴァシーリー・カンジンスキー、カジミール・マレーヴィチ、マルク・シャガール、アレクサンドル・ベヌア、レオン・バクスト、パーヴェル・フィロノフ、クジマ・ペトロフ＝ヴォドキンだ。

カジミール・マレーヴィチ
「農民」 1909年

マルス広場

マルス広場（中心はパヴロフスク連隊兵舎のファサード）1817－1819年
建築家ヴァシーリー・スターソフ

ピョートル1世とエカチェリーナ1世の夏の宮殿建築の際、現在のマルス広場の場所にあった沼から始まっていたモイカ川の河床は、フォンタンカ川まで伸ばされた。沼地は干拓され、その場所に祝日の娯楽や花火のための広大な広場「ツァリーツィン（女帝の）草地」、別称「娯楽草地」が設けられた。

その後パーヴェル1世は近衛連隊の演習のためにこの草地を使用し、ここに二つの勝利のモニュメント、ルミャンツェフスキー・オベリスク（1799年、建築家V.ブレンナ、現在芸術アカデミーの小公園に設置）と大元帥アレクサンドル・ヴァシーリエヴィチ・スヴォーロフ像（1801年、彫刻家M.コズロフスキー）を建てた。スヴォーロフ像は、軍神マルスの姿で作られた。

19世紀マルス広場はパヴロフスク近衛連隊の演習や衛兵の交代、パレード、伝統的祝祭日の国民の野外行事のために使われた。1820年代カルロ・ロッシの設計によってマルス広場は設計し直され、その際広場の北の部分は橋の手前にある小広場になった。トロイツキー橋は当時広場前の艀船でネヴァ川左岸とペテルブルグの島をつないでいた。

1917年の革命事件（2月革命）後、マルス広場で革命犠牲者の埋葬式が執り行われた。その際1917－1919年レフ・ルドネフの設計で「革命の闘士」の像が建てられた。

1920年、建築家イヴァン・フォーミンは広場を何もない広々としたスクウェアにした。マルス広場の西側からスパース・ナ・クラヴィー教会の鮮やかなクーポラが見える。

「マルス広場のスヴォーロフ像」
建築家ミハイル・コズロフスキー
1801年

ニコライ2世時代の
マルス広場のパレード
1903年5月

19世紀半ば
マルス広場の
マースレニッツァのお祭り

グリゴーリー・チェルニェツォーフ「1831年10月6日ツァリーツィン（女帝）草地でのパレード」1837年

ミハイル城塞

フォンタンカ川から見るミハイル城塞

ピョートル1世像

1800年城塞の南ファサード前のコンネタービレ広場にピョートル1世の騎馬像が設置された。そのスケッチはラストレッリ(父)がロシア到着してまもない1716年に制作したものだ。設計は皇帝の気に入り、彫刻家は実物大の模型を作った。しかしエリザヴェータ女帝の命令でブロンズ鋳造に着手したのは20年後のことで、それからモニュメントはパーヴェル1世が像を広場に移すまで長い間ふさわしい場所を見つけることができなかった。

モイカ川を水源とするフォンタンカ川岸に佇む壮大な城塞は1796－1800年に建てられた。エリザヴェータ・ペトローヴナ女帝の夏の宮殿があったその場所で、1754年帝位の後継者パーヴェルが生まれた。即位(1796年)後パーヴェル1世は冬宮に住むことを望まず、ここに新しい自分の居城を建てるべく老朽化した木造の城を取り壊した。設計は皇帝自身のスケッチをもとにヴィンチェンツォ・ブレンナ(1747－1820年)に任せられた。巨大なアンピール様式の建物は四方を水で取り囲まれ、その領内には宮殿の衛兵が立っている上げ橋をわたらないと入ることが出来なかった。衛兵詰所は正面広場の宮殿に隣接する南境にあった。そこでは宮殿の馬術練習場と宮殿の厩舎が建てられていた。広場の中心にはピョートル1世の騎馬像が設置されていた。建物は、東翼部に置かれた高い尖塔と十字架が頂にある宮殿教会「大天使ミカエル」(ロシア語でミハイル)にちなんで、ミハイル城塞と名づけられた。

南ファサードのパーヴェル1世の組文字

コンネタービレ広場
19世紀初頭

「パーヴェル1世像」
ミハイル・ゴレヴォイ
2000年代

歴史情報

城塞の南ファサードの大理石が上張りされたフリーズ(壁の帯状装飾)(右図)上の聖書からの引用文に人々は足を止める。「Дому твоему подобаетъ святыня Господня въ долготу дней(汝の家は神によって長く光に照らされているだろう)」

しかしミハイル城塞がパーヴェル1世の居城だったのは、わずか40日間だけだ。

1801年彼は宮殿の寝室で絞殺された。陰謀の首謀者とされているのは副宰相パーニン、海軍将官リバースとペテルブルグ総督パーレン伯爵だ。このパーニンが皇太子アレクサンドルに摂政職設立をすすめたとみなされている。しかし、アレクサンドル自身は1797年に書いている。「父は全てを改革したがっている。全てが頭のてっぺんから足の爪先まで変わってしまった。これは無秩序を増加させるだけだ。私の不幸な祖国は筆舌に尽くし難い状況にある。農民は怒り、商人は窮屈な思いをさせられ、自由と個人の幸福はなくなってしまった…」。スウェーデン外交官ステディングが1802年スウェーデン国王グスタフ4世に充てた公用文書からも同様に、「陰謀は現在の皇帝(アレクサンドル1世)の了承を得て計画された」とある。ステディングはまた「陰謀は(デンマークで行われている摂政政治のように)パーヴェル1世をを最高統治者にしたまま、実権だけを取り上げるためのものだった・・・」と書いている。しかしパーヴェル1世は断固として摂政政治設立に関する書類にサインするのを拒否した。

上空から見た城塞

南ファサードの正面乗入口

正面階段

宮廷の陰謀を恐れたパーヴェル1世は家族と共に、ミハイル城塞に移り住んだ。建物はまだ最後まで出来上がっておらず、壁も乾いていなかったが、この防護された壁と環境が隠れ家の役割を果たしてくれることを願ったのだ。しかし同年3月11日、理由は現在までも明らかにされてないが、陰謀者たちは何の障害にも遭うことなく、パーヴェル1世の部屋まで辿り着き、締殺した。翌朝、彼の息子、皇太子アレクサンドルが新皇帝として宣言された。

アレクサンドル1世は自分を即位させた不吉な思い出がある城塞を、官吏の住居として下げ渡した。宮殿を飾った彫刻や絵にはルーベルスとティエポロの傑作、アントニオ・ヴィギー、カルロとピエトロ・スコッティによる天井装飾作品、何千もの装飾美術工芸品があったが、それらは別の宮殿に運び出されたり、オークションで売られたりした。1820年城塞は工兵学校に譲られ、1823年公式にインジェニェール(技師)と改名された。ここでは有名な技術部隊将官トトレベン、セーチェノフ(ロシアの生理学の創始者)や作家ドストエフスキーが勉強していた。

2–i2, p. 320

大理石宮殿

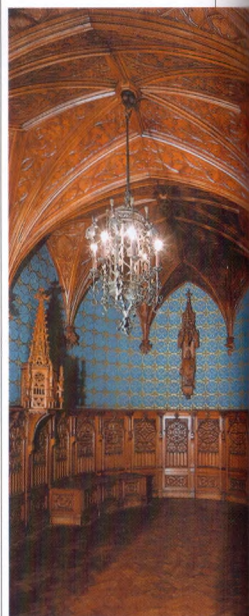
大理石宮殿は、エカチェリーナ2世の依頼で、寵臣グリゴーリー・オルローフへの贈り物として建てられた。エカチェリーナ2世はグリゴーリー・オルローフについて「当代随一の美しい男性」と書いている。その時代の最大のプロジェクトはロマン派イタリア・ロココ様式の巨匠アントニオ・リナルディ（1709－1794年）に任せられた。彼はバロック様式と古典主義様式を初めて融合させたジャン・レメルシエ（1575頃－1654年）の手法を手本として用いた。宮殿の起工式は1768年に行われ、建設は1785年に完了した。宮殿はペテルブルグの他の漆喰塗りの建築物の中で一際目を引く大理石の外装にちなんで名づけられた。

革命後、様々なソ連の施設が何の配慮もなく使用したため、その内装はほとんど台無しになってしまった。現在大理石宮殿には、ロシア美術館の展示室の一部が置かれている。ロシア美術館は、既に数年、大理石宮殿の修復を計画的に行っている。

リナルディが設計したインテリアで現在まで保存されているのは、大理石の間と正面階段のみだ。この二つは大きさでも、金箔の輝きでも優れているわけではないが、いくぶん重厚なルネッサンスの建築様式で、忘れがたい印象を残す。大理石の間もほとんど同じ様式で装飾され、その装飾には何十種類もの貴重な天然石が使われている。壁を装飾しているのは、黄色のイタリア産大理石とポエニ戦争の一場面が描かれたミハイル・コズロフスキー制作の天藍石の浅浮彫だ。

大理石宮殿の中庭

ゴシック様式のアパルタメント

19世紀末ゴシック様式で装飾された。依頼主は1888年に城主となったコンスタンチン・コンスタンチーノヴィチ大公だ。

大理石宮殿の小公園（スクウェア）

1788年に作られたスクウェアには、その8年前まで赤の運河があった。南側とネヴァ川側には花崗岩の柱の上に立つ鉄柵で区切られている。これは有名な夏の庭園のネヴァ川沿いの鉄柵と同じ様式である。1994年スクウェアの真ん中に、パオロ・トルベツキー制作のアレクサンドル3世像（1900年代）が設置された。記念像は当初ズナメンスカヤ広場に設置されていたが、革命後取り外され、長い間ミハイル城塞の中庭にあった。これは20世紀初頭を代表するきわめて貴重な彫像の見本である。

大理石宮殿の天井装飾の一つ

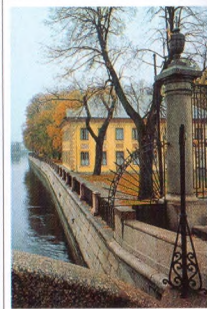
大理石の間

2–k2,3, p. 318

夏の庭園

夏の庭園のネヴァ側鉄柵

ピョートル1世の夏の宮殿

1710－1714年夏の庭園の角に2階の石造りの宮殿が建てられた。唯一見られるファサードの装飾は、琥珀の間(p.194)の有名な作者であるアンドレアス・シュリュッテルによって制作された29の浅浮彫の装飾壁である。宮殿内の部屋(16室)は、木彫り、オランダ製タイル、天井画で飾られている。

パヴィリオン、彫刻のある整形式庭園はヨーロッパで「フランス式庭園」と名づけられたが、スタンダールが指摘しているように、フランス人はこの様式をイタリア人から借用したのだ。1704年ペテルブルグに最初の庭園を建設したピョートル1世は、当時まだフランスに行ったことがなかったが、大使節団の時代(1697－1698年)、滞在したポーランドで、アウグスト2世のフランス式庭園を見て、そのアイディアを拝借したのだろう。夏の庭園の開発はネヴァ川左岸、ネヴァ川の水がフォンタンカ川(当時「エーリク」という名前だった)に流れ込むところからはじまった。夏の庭園の周りには、白鳥運河、モイカ川が引かれ、夏の庭園は四方を川で囲まれた11ヘクタールの島になった。ピョートル1世は庭園に約50の噴水システムを建設した。噴水の水は、フォンタンカ(エーリク)川岸に建てられた給水塔のポンプによって送り込まれた。そのため、この川はフォンタン(噴水)川と名づけられていたが、その後、ただフォンタンカと呼ばれるようになった。1705－1706年ピョートル1世の夏の住居の建設作業を行ったのは、画家イヴァン・マトヴェーエフだ。1710年代その作業はオランダ人ヤン・ローゼンに任せられたが、彼の設計は、一番最初に夏の庭園を描写した(右下図)アレクセイ・ズーボフの有名な版画にもとづいていた。

幾世紀もかけて木々が茂った現在の外観で、夏の庭園の中にピョートル1世が作ったものはほとんど残っていない。1777年の洪水で壊されたピョートルの噴水システムも、昔のパヴィリオンも、温室も花も残っていない。しかし基本的な並木道の配置と彫刻群はピョートル時代の遺産だ。

庭園の大部分の大理石彫刻はピョートル1世が信頼をおいた人々によってイタリアで買い付けられてきたものだ。その中の一人、ユーリー・コログリーヴォフは有名なヴィーナス像(p.71)の購入に成功した。当時アンティークの持ち出しを禁じていたローマからこの像を運ぶために、ピョートル1世は彫像とレーヴェリ(エストニア共和国の首都タリンの旧名)で奪取した聖ブリギッタの聖骸(ミイラ)を交換しなくてはならな

アレクセイ・ズーボフ「夏の庭園」版画 1717年

夏の庭園の中央並木道

クルィロフ像

偉大な寓話作家イヴァン・アンドレーヴィチ・クルィロフ(1769－1844年)のブロンズ像は、1856年庭園に設置された。彼は自分の作品の登場人物が描かれた台座の上に重々しく座っている(彫刻家P.クロット)。

かった。1725年頃までには夏の庭園の彫刻の数はおよそ200に達していた。後に一部は別の宮殿や公園に運ばれ、一部は天災で失われ、現在ここの彫刻や胸像の数は半分になっている。これはバラッタ、ボナッツァ、ゾルゾーニ、タルシア、グロペッリ、タリヤピエトラ、カルタリ、クヴェッリムス他の優れたバロックの巨匠の作品だ。最も有名なのは、「ニスタットの講和(北方戦争終結)」(右下図)の寓意像だ。これは皇帝の注文でピエトロ・バラッタによって制作され、1726年ピョートル1世の死後、ペテルブルグに運ばれた。勝利と平和(あるいは富)を具象化した二人の女神は、スウェーデンを寓意した獅子を踏みつけている。

1760年代末夏の庭園が面していたネヴァ川川岸通りが拡張され、花崗岩が敷き詰められた。その後、ここに、間違いなくこのジャンルの最高傑作となる新しい鉄柵(1784年,建築家Y.フェリテン)が建てられた。これは高さ4mの36本の花崗岩柱の間をトルコの職人によって鋳造された鉄柵が飾る壮大な建築物である。1820年代庭園にティーハウスとコーヒーハウス(建築家L.シャルレマン、K.ロッシ)が現れた。コーヒーハウスを建設したロッシはピョートル1世時代にマッタルノヴィとニコロ・ミケッティの設計によって建てられたパヴィリオン「グロット(岩窟)」を再建した。

ピエトロ・バラッタ 1720年代「ニスタットの講和の寓意像」

ネフスキー大通り
サドーヴァヤ通りからフォンタンカまで

 2–k6, m7

ヴァシーリー・サドーヴニコフ 「アレクサンドル劇場」（ネフスキー大通りのパノラマの一部） 版画 1830年

サドーヴァヤ通りからフォンタンカまでのネフスキー大通りの奇数側区の広大なアンサンブルの歴史は女帝エリザヴェータ・ペトローヴナが統治していた1741年8月まで遡る。女帝は「建築家ゼムツォフの立てたプロジェクトに基づいてアーニチコフ橋のそばに石と木造建築物を建てるように命令した」。建物正面ではなく、側面翼がネフスキー大通りに面しているアーニチコフ宮殿の配置は奇妙に思われるが、この建物は最初からフォンタンカ川に向けて造られた。1830年頃アーニチコフ領地の一部が、現在アレクサンドル・オストロフスキードラマ劇場（1823－1886年）という名の劇場広場に割り当てられた。

ネフスキー大通りの反対（偶数）側には、エカチェリーナ2世時代に開発された小サドーヴァヤ、カラヴァンナヤという2つの通りによって3つに分けられた区があるが、そこには19世紀から20世紀を代表する建物が立ち並んでいる。18世紀中葉ここには多くの伝説を生んだ人物イヴァン・シュヴァーロフの屋敷があった。シュヴァーロフは優れた政治家で、モスクワ大学と芸術アカデミーの創立者という肩書きを持つが、ハンサムで好事家でもあり、彼の邸宅には「拷問室」のある秘密の官房があった。屋敷はエリザヴェータ・ペトローヴナ女帝の夏の大宮殿の庭園に隣接していた。この庭園は屋敷の改造を繰り返すうちに失われてしまった。その存在を現在推し量ることができるのは、ミハイル城塞（p.126）前のスクウェアだけだ。19世紀から20世紀初頭にかけて、この地区の残りを占めていたのは、隙間なく続く建物とマネーシュ広場のある区域だ。

「エカチェリーナ2世像」
ミハイル・ミケーシン 1873年

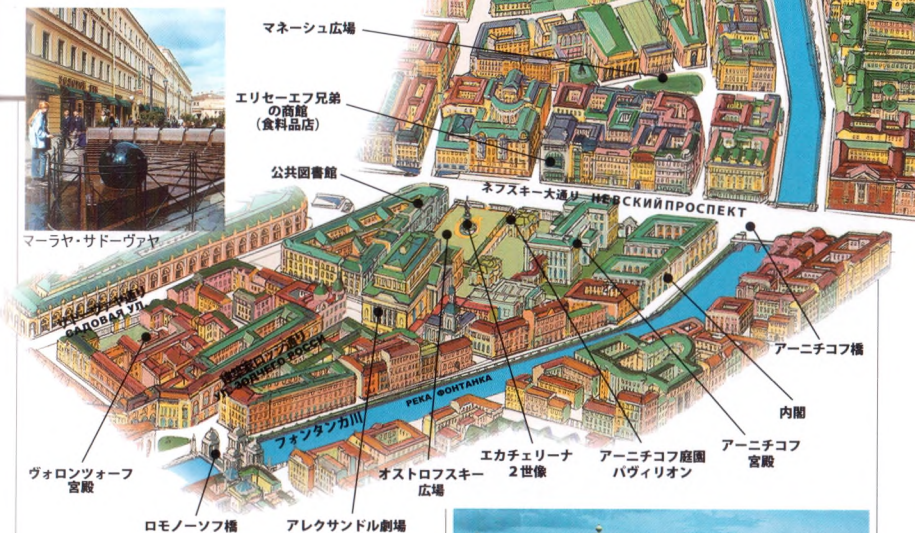
サドーヴァヤ通り
① 2-k6

ネフスキー大通りと西の町はずれを結ぶペテルブルグで最も長い通りの一つ（5km）。通りはピョートル・エロプキンの設計によって敷かれた。彼は与えられた課題をネフスキー大通りからフォンタンカの河口がはじまる郊外のペテルゴフ街道まで直線を引くということで簡単に解決した。1820年代カルロ・ロッシの設計によって通りは少し角をつけて北へ伸ばされ、ネフスキー大通りとネヴァ川とつないだ。

アレクサンドル劇場

サドーヴァヤ通りにはガスチーヌイ・ドヴォールの向かいに巨大な鉄柵で通りから隔てられているヴォロンツォーフ宮殿がある。この宮殿は1749－1757年ラストレッリによって、宰相ミハイル・ヴォロンツォーフ（1714－1767年）（エリザヴェータ女帝の従姉妹アンナ・スカヴロンスカヤの夫）のために建てられた。1798年パーヴェル1世は旧宰相の宮殿をマルタ騎士団に譲った。また、マルタ騎士団のために1798－1800年クヴァレンギの設計によって、東ファサードが宮殿に隣接する聖イオアンナ・イェルサレム・カトリック教会が建てられた。

イタリヤンスカヤ（イタリア）通り
① 2-k6

サドーヴァヤ通りの北の区域はイタリア通りと交差している。この通りにシュヴァーロフ宮殿（1753年－1755年，建築家S. チェヴァキンスキー）の一部が面している。1つのブロックをおいて、イタリア通りは、こじんまりとした三角形のマネーシュ広場と交差している。この広場は1990年に歩行者専用になった小サドーヴァヤ通りによってネフスキー大通りと結ばれている。ここに1999年興味深い銅像「優しい犬」（彫刻家V. シヴァーコフ）、2001年に「写真家像」（彫刻家B. ペトロフ）の彫刻が設置された。だいたい同じ頃、花崗岩の噴水が建てられ、軒下の一つに猫の銅像が設置された。

ヴォロンツォーフ宮殿

マーラヤ・サドーヴァヤ

オストロフスキー広場とアレクサンドル劇場
① 2-k6, p. 316

1743年エリザヴェータ女帝はアーニチコフ橋のそばの新邸宅に庭を造るために口頭でイギリス人ルイス・キンダー・テイパースの農民屋敷の庭師を自分の宮殿に連れてくるよう命令した。1820年代末この庭園は、建築家カルロ・ロッシによって建築されたヨーロッパ最大のドラマ劇場の一つ（1400席）であるアレクサンドル劇場に譲られた（劇場のこけら落としはニコライ1世と皇后アレクサンドラ・フョードロヴナ出席のもと、1832年8月31日に行われた）。ロッシは1818年から1828年までの10年間設計に携わり、すでにある建築物群に3つの建物（本劇場と、現在建築家の名前で呼ばれる通り「建築家ロッシ通り」を形成している二つの巨大な勤務棟）を加えた。作業は長年にわたって続き、ニコライ1世を喜ばせるために造られたアンサンブルによって、名建築家ロッシの作品とは思われないものになった。

建築家ロッシ通り

ネフスキー大通りの眺め
（左の建物は旧エリセーエフ兄弟の商館）

国立公共図書館
 2-k7

世界最大の図書館の一つでエカチェリーナ2世によって創立された。ザルッスキー兄弟の有名な本のコレクション（約30万冊）が図書館設立の基になっている。

国立公共図書館
（ロッシ棟）

その中には女帝の命令によりポーランド分割（1793年）後、ペテルブルグに運び込まれた。アレクサンドル1世はここに帝室の蔵書の一部を寄贈した。その中には有名なヴォルテールの蔵書、ピョートル・ドゥブロンスキーによって集められた古文書、9-15世紀ヨーロッパの挿絵入り本があった。当初図書館はアーニチコフ庭園のパヴィリオンの一つの中にあったが、1796年エカチェリーナ2世の命令でネフスキー大通りとサドーヴァヤ通りの角に図書館専用の建物の建設が始まり（建築家E. ソコロフ）、1801年に完成した。1820年代カルロ・ロッシは本のコレクションが増大したことにより、本棟に半柱と啓蒙思想家像で装飾された新しい棟を建て増した。

ネフスキー大通り
サドーヴァヤ通りからフォンタンカまで

2–k6, m7

内閣回廊とアーニチコフ橋が見えるネフスキー大通りのパノラマ

アーニチコフ庭園
鉄柵の双頭の鷲

アーニチコフ宮殿
(p. 320)

1741年のエリザヴェータ女帝即位までペテルブルグの東境はフォンタンカ川で、アーニチコフ橋のそばに衛兵が立っていた。そのフォンタンカの向こうからは郊外の集落が始まっていた。同年、女帝は橋のそばのサドーヴァヤ通りまで広がっている壮大な区域を購入した。ここに石造の宮殿を建設するための設計を任されたのはミハイル・ゼムツォフ(1688–1743)だ。まもなくしてゼムツォフは亡くなり、その後を建築家バルトロメオ・フランチェスコ・ラストレッリが引き継いだ。彼は数箇所加筆したが、もとの設計は変えなかった。1751年宮殿のキリスト復活教会が完成し、成聖式が行われた1754年までに建物内装作業が完了した。ファサードが多くの装飾彫刻や塑像で飾られた高い宮殿は、ペテルブルグで最も豪華な建築物になり、1757年エリザヴェータ女帝はこれを自分の愛人(貴賎相婚の夫,一説によると結婚していたともされる)アレクセイ・グレゴーリエヴィチ・ラズモフスキー(1709–1771)に贈った。ラズモフスキーの死後、この屋敷はエカチェリーナ2世によって買い上げられた。エカチェリーナ2世は、1776年、アーニチコフ邸とその庭園をグリゴーリー・ポチョムキンに下賜した。当時のアーニチコフ宮殿の目録によると、「大きい第1棟の1階には20室、2階の住居部には教会、広間と14室、3階には5室あり、全部で40室・・・その棟には二つの大きな厨房があった」とある。同資料によると隣接しているヴォロンツォーフ屋敷から分けられた全アンサンブルには「イタリア邸」(宮殿劇場)、石造の温室(ガスチーヌィ・ドヴォール側)、厩舎棟などの14以上の建築物があったと記録されている。この目録は18世紀の典型的なペテルブルグ屋敷の複雑な領地経営構造がイメージできて興味深い。18世紀の建造物のうち、宮殿以外は一つも保存されていない。宮殿自体も再建が繰り返され、今日それをエリザヴェータ時代のものに分類するのは難しい。内部の部屋の大部分は19世紀、そして1930年代に根本的な改造が行われ、S=M.キーロフの決定で児童団体に移譲された(ピオネール会館)。

アーニチコフ宮殿
18世紀半ば宮殿の前にはパルテール(装飾平庭)が設けられ、港があった。フォンタンカとネフスキー大通りからその庭園と港を分けたのは高くて幅広い塀で、塀の上には鷲の紋章を装飾した柱廊で囲われた屋根付の遊歩廊が設置されていた。宮殿の側翼廊上のクーポラは玉ねぎ頭の円屋根で、屋根の周りにはバロック様式の装飾瓶があった。

アーニチコフ庭園のパヴィリオン

内閣

タヴリーダ宮殿(p.141)整備のための資金を必要としていたポチョムキンは、まもなくしてアーニチコフ屋敷を売り払った。再びそれを買い上げたのがエカチェリーナ2世で、彼女は屋敷自体を新しい目的で使うことに決めた。1794年建築家エゴール・ソコロフは宮殿を皇帝官房(内閣)に改造し、1796–1801年ネフスキー大通りとサドーヴァヤ大通りの角に、帝室公共図書館の建物が建築された。1802年フォンタンカ沿いの「内閣屋敷」の南部はアレクサンドル1世によってペテルブルグ商人達に下賜され、彼らのためにジャコモ・クヴァレンギはマーケット回廊(内閣回廊)を建てた。これはイオニア半柱で装飾された素晴らしく美しい建物だった。まもなくしてアーニチコフ屋敷は再び皇帝の所有となり、アレクサンドル1世は1809年6月28日に次のように述べた。「内閣がある宮殿の本棟は、妹である大公妃エカチェリーナ・パーヴロヴナに結婚祝いとして与える」。内閣宮殿はクヴァレンギによって設計された回廊内に移される。その隣に1809－1810年ルイージ・ルスカは新しい棟を増築した。

アーニチコフ庭園のパヴィリオン

1816年エカチェリーナ・パーヴロヴナ大公妃が再婚し、ロシアを去った後、アーニチコフ宮殿は彼女の弟ニコライ大公に贈られた。建築家カルロ・ロッシは宮殿の改築と同時に全屋敷の再建も委任された。その時アーニチコフ庭園の一部は金箔の鷲を装飾した柵で囲まれていた。西側の柵はニッチに戦士像(彫刻家C.ピメノフ)のある二つの新しいパヴィリオン(ロッシのパヴィリオン)をつないでいた。

アーニチコフ橋とベロセリスキー=ベロゼルスキー宮殿 (p. 320)

アーニチコフ庭園のパヴィリオン

アーニチコフ橋

フォンタンカ川に架かった最初の橋は木造の跳ね橋(1715年)で、ネフスキー大通りと川が交差する場所に建てられ、この建設を指揮したアーニチコフ中佐の名で呼ばれた。後に、フォンタンカ川に7本の同じ種類の石橋が架かっていた1780年代も含めて、橋は何度も再建された。橋はネフスキー大通りより狭かったため、町の中心がフォンタンカ左岸のはずれに移った時、橋は再建された。1841年優れた彫刻家で鋳造工でもあるピョートル・クロット(1805－1867)作の4組の馬像で装飾された新しいアーニチコフ橋(技師I.ブタツ)の開通式が行われた。その馬「調教師(馬を引く人)」は古代ギリシャ神話のカストールと解釈される。彼はディオスクローイ(大神ゼウスの子:双子)の弟で馬術の達人で、彼の姿は多くの彫刻家にインスピレーションを与えた。パリのシャンゼリゼ通りにあるフランス彫刻家ギオーム・クストゥー(1740年代)作の「調教師」(オリジナルはルーブル美術館所蔵)が広く知られている。同じ題材で近衛連隊馬術練習場の「調教師」の作者であるトリスコルニーも描いている。(p.97参照)

アーニチコフ橋
「馬の調教師」

2–k2, m7

20世紀初頭のフォンタンカ

フォンタンカ（長さ6.7km）はネヴァ川三角州の支流で、ネヴァ川から出て、ネヴァ川に注ぐ。フォンタンカはその河床とネヴァ川の間に幅広い陸地を形成する（かつてわずかに水の上に出ていた）。1710年代に夏の庭園の噴水（フォンタン）設備にちなんで「フォンタンカ」と呼ばれるようになった。ロシア国家古代法令保管所（モスクワ）にピョートル1世によってペテルブルグ警視総監ジヴィエールのために作られた貴重な名簿が保存されている。その書類によると、フォンタンカ川沿い地区は皇帝一家か古い名門貴族（ロモダノフスキー、ナルィシュキン、ドルゴルーキー、ノヴォシリツェフ家等）出身者にのみ与えられたようだ。

18世紀フォンタンカ川岸に多くの宮殿・公園アンサンブルが現れた。その中に、有名なミハイル城塞、シェレメーチェフ宮殿、アーニチコフ宮殿、ヴォロンツォーフ宮殿の他にニコライ・ユスーポフ公の屋敷（フォンタンカ115,1790年代, 建築家ジャコモ・クヴァレンギ）やガヴリール・デルジャーヴィンの屋敷（フォンタンカ118,1790年代,建築家N.リヴォフ）が現存している。サンクト・ペテルブルグの発展と共にフォンタンカは町の境界線になった。1780-1789年その川岸は全て花崗岩の歩道になった。19世紀チェルヌィショーフ橋より西の川岸通りでは単調で薄暗い雰囲気の賃貸住宅と行政の建物の建設が始まった。

シェレメーチェフ宮殿

宮殿

18世紀にエカチェリーナ1世、その後、娘であるエリザヴェータ女帝（ミハイル城塞p.126参照）の所有となった屋敷に隣接していたフォンタンカの西の川岸の一角に、目立たない2階建てのシュヴァーロフ（ナルィシュキン）宮殿がある。1790年代ここに富豪貴族ヴォロンツォーフの邸宅が建てられた。1799年その屋敷を購入したのは、ドミートリー・ナルィシュキンの妻であり、アレクサンドル1世の愛人だったマリヤ・ナルィシュキナ（スヴャトポロク＝チェトヴェルチンスカヤ）だ。1820年代宮殿は著しく拡張された。現在の装飾（建築家B.シモン、N.エフィーモフ）になったのは1840年代で、目前に迫ったソフィヤ・ナルィシュキナとピョートル・シュヴァーロフの結婚に際して宮殿の改築が行われ、これは1859年まで続いた。その後宮殿はシュヴァーロフ宮殿と呼ばれるようになった。フォンタンカ川をはさんでほとんど向かいにはさらに有名な邸宅、シェレメーチェフ宮殿（フォンタンカ34）がある。宮殿はピョートル1世が大元帥ボリス・ペトローヴィチ・シェレメーチェフ伯爵（1652-1719）に贈った一角に建てられた。

シュヴァーロフ宮殿の客間の一つ

シュヴァーロフ宮殿（右）

シェレメーチェフ伯爵は1702－1703年の戦役の有名な指揮官で、彼の戦功によりネヴァ川のデルタはロシア領になった。1740年代-1750年代木造の家が立っていた場所に、2段階に分けて石造りの建物（建築家S.チェヴァキンスキー参加）が建てられた。この建物はフォンタンカとリチェイヌィ大通りの間の、現存していない広大な整形式公園の中心にあった。この公園は、多くのパヴィリオンで装飾され、リチェイヌィ大通りへの出口は美しい門で飾られていた。フォンタンカに面している正面ファサード前の宮殿の豪華な鉄柵で隔てられた場所には船着場があった。鉄柵は1837-1840年頃あった（I.コルシーニの設計による）。

フォンタンカ川とネフスキー大通りの角の家（ネフスキー41）の再建は1840年に行われた（ネフスキー大通り41）。1797年からベロセリスキー＝ベロゼルスキー公の所領の一画に建てられた古い建物の場所に建築家アンドレイ・シュタケンシュナイダー（p.135図参照）はエリザヴェータ・バロック様式の宮殿を建てた（p.135図参照）。1884年宮殿はアレクサンドル3世の弟セルゲイ・アレクサンドロヴィチ大公に、ヘッセン・ダルムシュタット公女エリザヴェータ・フョードロヴナ（後に皇后となるアレクサンドラ・フョードロヴナの妹）との結婚に際して贈られた。

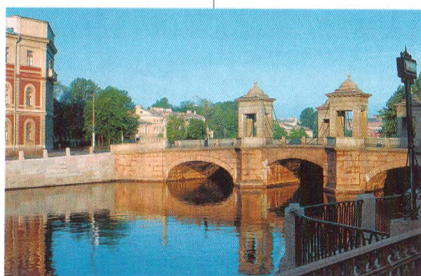
聖パンテレイモン教会

フォンタンカにかかるパンテレイモン橋

寺院

フォンタンカ川岸で最も古い寺院は旧塩工場のブロックにあるパンテレイモン教会（ソリャノイ横丁17,1735-1739年, 建築家I.コロボフ）と少し南にある聖シメオンとアンナ教会（マハヴァーヤ通り46,1731-1734年,建築家M.ゼムツォフ）だ。二つともこじんまりしており、一つの後陣と六つの柱のバシリカで、クーポラと鐘楼があり、ピョートル・バロック様式で装飾された。これらはアンナ女帝時代を彷彿させる。

橋

現在フォンタンカには14の様々な橋が架かり、その大部分は18-19世紀に造られた。初めての石造橋となったのはプラチェーチヌィ橋（1769年）、少し後の1780年代にフォンタンカ川に7本の同じタイプの跳ね橋がかけられた。その中で現存するのはロモノーソフ橋（旧称チェルヌィショーフ橋）、古カリンキン橋だ。19世紀の橋の中で最も面白いのは前述のアーニチコフ橋、パンテレイモン橋（L.イリイヌィによって1911年再建）とスフィンクス像のあるエジプト橋（1820年代,彫刻家P.ソコロフ）だ。

コロムナのカリンキン橋（1770年代）

旧塩工場

夏の庭園の向かい、フォンタンカ川の左岸に18世紀ピョートル1世によって設立された小型民間船用パルチクリャル造船所があった。船は「お金が無い、あらゆる階級の人に」分配された。造船所にワイン製造所と塩工場があった。1879-1881年塩工場の敷地に宮廷銀行家アレクサンドル・シュティーグリツ男爵の息子によって創立された絵画専門学校の建物ができた（ソリャルノイ横丁13,建築家G.クラカウ,R.ゲジケ）。1885-1896年に学校内に博物館の建物（ソリャルノイ横丁15,建築家M.メスマヘル）（p.318）が建設されたが、博物館閉館（1927年）と共にその膨大なコレクションは解体された。博物館建物のガラス張りのドームはパンテレイモン橋（左図, 中央）そばのフォンタンカ右岸からよく見える。

エジプト橋のスフィンクス

ネフスキー大通り
フォンタンカ川から蜂起広場まで

ⓘ 3–a,d6

18世紀後半の大砲鋳造工場

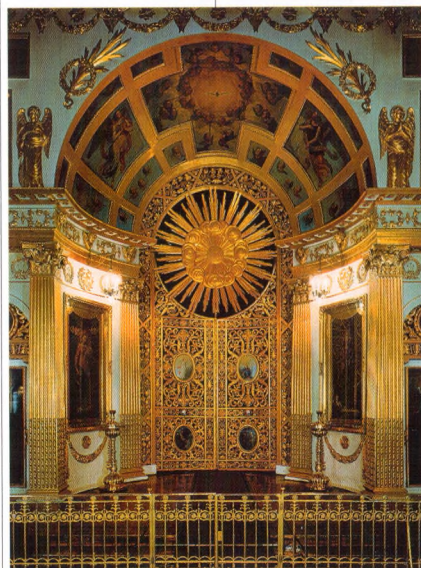
1917年までフォンタンカ川から現在の蜂起広場までのネフスキー大通りを境に二つの古い区域、リチェイヌィ部(北)とモスクワ部(南)があった。18世紀の記念建築物のうちこの近辺で現存するものは少なく、その中で一番有名なのは、旧宮廷街区付属ウラジーミル聖堂だ。

街区の基礎を置いたのはアンナ女帝で、彼女は1730年代の火災後、サンクト・ペテルブルグ建設委員会を設立した。委員会はペテルブルグ開発の総合計画書を作り、その責任者となったのがピョートル・エロプキン(1698頃-1740)だ。女帝はまもなく委員会によって準備された計画書を承認した。その中ではネフスキー大通りの南側のフォンタンカ右岸区域を宮廷の使用人のための居住区としている。初めてそこに移住した一族の名前がついた小さな通りや路地が残っているが、そういった通りの一つにドストエフスキーの家記念博物館(クズネーチヌィ横丁5/2,p.325)がある。1875年頃からここにはペテルブルグ商人が居を構えるようになり、初期の「映画館」や高級ホテル、レストランがオープンした。

リチェイヌィ部(及び町で最古のリチェイヌィ大通り)はリチェイナ・プーシェチヌィ(大砲鋳造)施設(1711-1851)から名前を授かった。1830年以降リチェイヌィ部で集中的に建設が始まり、巨大な行政建物の中心になった。1870年代ここからヴィーボルグ方面に二つ目の常時橋、アレクサンドル橋がネヴァ川にかけられた(現在のリチェイヌィ橋,技師A.ストルーヴェ, 建築家K.ラハウ)。橋は世界初の電灯のついた橋となった。リチェイヌィ橋の後すぐにネフスキー大通りにも街灯が設置された。まず、モイカからフォンタンカまで(1882年)、その後フォンタンカから蜂起広場(当時ズナメンスカヤ広場)までだ。

プレオブラジェンスキー聖堂

ⓘ 3-b2

聖堂の名称は、18世紀初め皇帝の親族や側近の屋敷そばのリチェイヌィ部に分宿していた伝説的なプレオブラジェンスキー近衛連隊に関係がある。ピョートル1世の所産であるプレオブラジェンスキー連隊は、1687年ピョートルによってモスクワ近郊のプレオブラジェンスカヤ村で組織され、ロシア近衛連隊の中でも特に優れていた。ピョートル自身プレオブラジェンスキー連隊長だった。1740年10月17日、アンナ女帝がこの世を去り、1歳に満たないアントン・ウルリック・ブラウンシュヴァイグ・ヴォルフェンビュッテル公の息子イヴァン(イオアン)6世が即位したことに対し、近衛連隊は不満をぶちまけた。1741年11月25日ピョートル大帝の娘エリザヴェータ・ペトローヴナは既に計画してあった通りイヴァン・アントーノヴィチ(イヴァン6世)の更迭を求めてプレオブラジェンスキー連隊の中隊本部に来た。幼い皇帝とその母アンナ・レオポリドヴナは捕らえられ、エリザヴェータが帝位についた。1743-1754年エリザヴェータ女帝の命で、プレオブラジェンスキー本部があった場所にキリスト変容連隊教会が建設された。最初の聖堂はミハイル・ゼムツォフの設計によって造られた。1825年その聖堂は火災にあって焼け、その後1827-1829年ヴァシーリー・スターソフの設計によって再建された。スターソフは古い壁を最大限に利用し、建物の全般的な設計を残した。その時聖堂の周りに1828年ロシア・トルコ戦争の戦利品であるトルコの大砲が埋め込まれた柱のある鉄柵が造られた。

プレオブラジェンスキー聖堂の鉄柵

プレオブラジェンスキー聖堂

プレオブラジェンスキー聖堂のイコノスタス

ウラジーミル聖堂

ウラジーミル聖堂

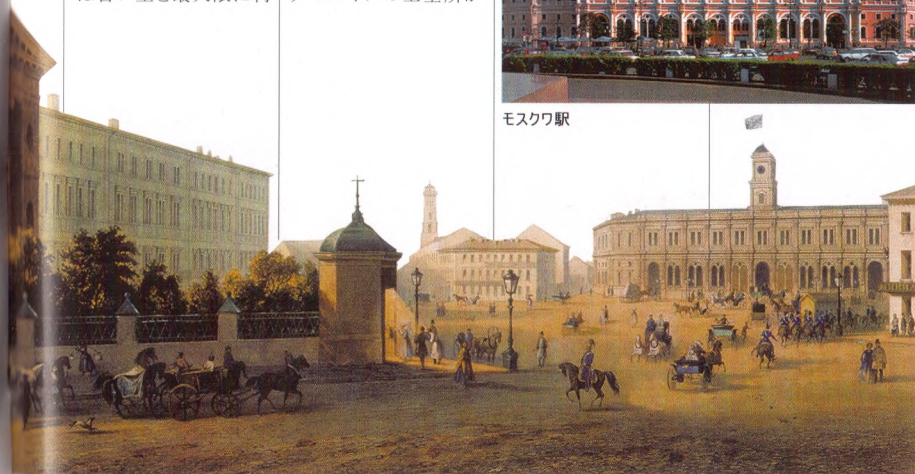
ⓘ 3-a7

1737年宮廷街区にリチェイヌィ大通りの眺めを遮ることになる商用広場を建設する計画があった。1761-1769年未詳建築家の設計によって、街区付属ウラジーミル生神女イコン教会が建設された。聖堂内部は二階建てになっている。下の階には聖イオアン・ダマスキンの至聖所があり、上の階にはウラジーミル生神女マリアの至聖所がある。後者はラストレッリの設計で制作され、1810年代アーニチコフ宮殿教会からここに運ばれた風変わりなイコノスタスで有名だ。建物には18世紀オリジナルの天井だけでなく、壁や丸天井の色彩も保存されている。ウラジーミル聖堂の信徒だったのはデリヴィグ、ネクラーソフ、ガルシン、ドストエフスキーだ。

モスクワ駅

ⓘ 3-d7

蜂起広場から放射線状にネヴァ川とサンクト・ペテルブルグ南郊外へと続く幹線道路が広がっている。19世紀半ばこの幹線道路の一つに沿ってペテルブルグ・モスクワを結ぶ鉄道が敷設された。その際(1844年と1851年の間)コンスタンチン・トンの設計によって広場に駅の建物が建てられた。

モスクワ駅

ジョゼフ・シャルルマン 「蜂起(ズナメンスカヤ)広場」19世紀半ば

ネヴァ川東岸のアンサンブル

i 3

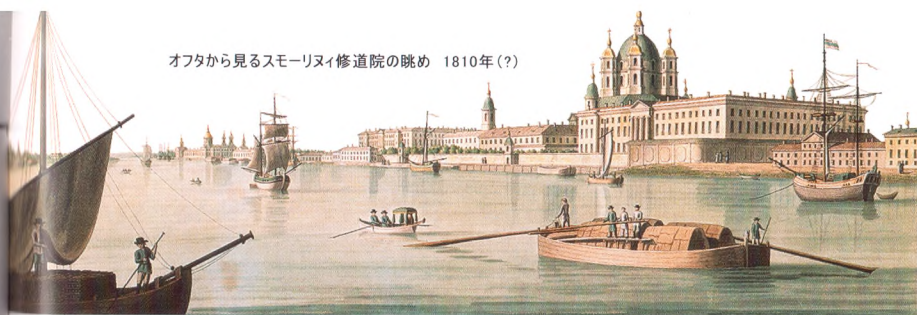
キーキン邸

ペテルブルグの北東部にはネヴァ川両岸沿いにいくつかの歴史的名所がある。川は南から西に曲がる際、急カーブを形成している。東の左岸にアレクサンドル・ネフスカヤ部とロジュデストヴェンスカヤ部(現在中央行政区の東ブロック)、右岸にオフタとヴィーボルスカヤ・ストラナーがある。

オフタはオフタ川にちなんで名づけられた。オフタ川とネヴァ川が合流する岬に1632年スウェーデンがニエンシャンツ要塞を建てた。中世のランドスクローナ要塞の後に造られたこの要塞は1年しか持ちこたえられず、1300年、ノヴゴロド人によって破壊された。1703年ピョートル1世はニエンシャンツ要塞を取り壊す命令を出し、その場所に造船所と火薬工場を創立した。

18世紀半ば北の右岸はヴィーボルスカヤ・ストラナーと呼ばれるようになり、ピョートル1世によって発見された鉱泉で有名だ。この地域にはクーシェレフ家(1816年以降クーシェレフ=ベズボロートコ所有)の壮大な屋敷があり、そこの屋敷(ダーチャ,ポリュストロフスカヤ川岸通り40)が残っている。しかし右岸区域は革命まで左岸の発展を超えることができなかった。左岸区域は18世紀に特に優れたアンサンブルを形成し、壮大な歴史的建造物地帯の核になった。

アレクサンドル・ネフスキー大修道院

オフタから見るスモーリヌィ修道院の眺め　1810年(?)

モスクワ街区

ピョートル1世時代ネヴァ川左岸の北東に、ペテルブルグ遷都後すぐにモスクワからペテルブルグに移された数多くの皇帝の親族のために、広大なモスクワ街区が建設された。ピョートルがよくこの街区に寄り、ここにあったペテルブルグ初の劇場に通っていたのは有名だ。ここで今日ピョートル時代を推察することができるのは皇太子アレクセイの陰謀の共犯者として処刑された顧問官キーキンの石造りのパラーティ(邸宅)のみだ。1718-1734年、キーキン邸にピョートルのクンストカメラが置かれていた。

スモーリヌィ

スヴォーロフ博物館

ⓘ *3-f2, p. 321*

博物館は1901年アレクサンドル・ゴーゲンとゲルマン・グリムの設計によって、城塞塔に似せて建てられた。建設用地として、タヴリーダ庭園の向かいの土地が与えられた。そこには、プレオブラジェンスキー連隊の射撃場があり、参謀本部アカデミーがあった。博物館の開館式は、ニコライ2世出席のもと1904年に行われた。

A.V.スヴォーロフ博物館

タヴリーダ宮殿

ⓘ *3-f1*

1790年ネヴァ川岸を飾った宮殿。エカチェリーナ2世の有名な寵臣タヴリーダ公爵グリゴーリー・ポチョムキン(1739?-1791)のために造られた。ド・セギュール伯爵は宮殿の持ち主について書いている。「宮廷で公民分野でも戦争分野でもこの大臣より優れていて、野性味のある人はいない、この人ほど勤勉で大胆で優柔不断な司令官はいない」30ヘクタールの庭園のある屋敷をポチョムキン公のために建てたのはイヴァン・スターロフだ。この宮殿にネヴァ川から長さ200m、幅25mの運河が引かれた。1799年パーヴェル1世はこの忌まわしい寵臣の宮殿を近衛連隊の兵営に下賜した。近衛連隊達は2年で実質上庭園を荒廃させ、ペテルブルグで美しさを誇っていた内装を台無しにした。20世紀初め宮殿は国会議事堂として使用されたが、その後何度も修復された。

タヴリーダ宮殿

修道院

ネヴァ川左岸の東に二つの古くて大きい修道院がある。1710年代初めピョートル1世によって建設が始められたアレクサンドル・ネフスキー修道院(p.142)とその30年後にエリザヴェータ女帝によって創立されたスモーリヌィ修道院(p.144)だ。スモーリヌィ修道院はパーヴェル1世の時代に廃止され、貴族の子女のための女学校となった。この学校のために特別な建物が建てられ、そこは現在サンクト・ペテルブルグ市役所になっている。

ピョートル大帝橋(別称大オフチンスキー橋　長さ336m)1908-1911年　技師G. クリヴォシェイン, V. アプィシュコフ

3–h10

アレクサンドル・ネフスキー大修道院

ラーヴラ大修道院Лавра(ギリシャ語. laura「通り」)は特別な地位のある正教男子修道院だ。ロシアには1917年までに4つの大修道院(1598年キエフ・ペチョールスカヤ(洞窟)修道院、1744年トロイツァ・セルギエフ大修道院、1797年アレクサンドル・ネフスキー大修道院、1833年ポチャエフスカ・ウスペンスキー大修道院)があり、これらは宗務院直属である。

トロイツキー聖堂の内装

1710年7月ピョートル1世は、フーチンスキー男子修道院長フェオドシー、アレクサンドル・メンシコフ、フョードル・アプラクシン、ゴロヴキン伯爵とイヴァン・ムーシン＝プーシキンを伴い、小さい川(現在の修道院川)がネヴァ川に注ぐ沿岸一帯を視察した。かつてこの場所で、ネヴァ川河畔の戦い(1240年)があったとされている。2年後ここに木造教会が建てられ、1713年3月25日「生神女処女告知」という名で成聖式が行われた。同じ時、ドメニコ・トレジーニはペテルブルグ初の男子修道院の設計を依頼され、それは1716年皇帝に承認された。1723年ピョートルは「ウラジーミル聖堂にある聖アレクサンドル・ネフスキーの聖骸をこの『アレクサンドル・ネフスキー』修道院に移す」ように命令した。1724年8月30日トレジーニによって石造の建物に再建されたアレクサンドル・ネフスキー教会の成聖式が行われ、厳かに聖骸の納められた聖廟が設置された。1797年12月18日(31日)ピョートル1世の命でモナスティーリ(修道院)はラーヴラ(大修道院)の地位を与えられた。

トロイツキー(三位一体)聖堂

現行修道院
住所：アレクサンドル・ネフスキー広場
4月～9月　9:30～19:00
10月～3月　夜明けから日沈まで。木曜閉館。

トロイツキー(三位一体)聖堂

最も規模の大きい修道院の建物(高さ60m以上)。1776-1790年イヴァン・スターロフ(1745-1808)によってエリザヴェータ時代に第一修道院教会があった場所に建てられた。

聖堂は幾分どっしりして、十字架を頂くクーポラが印象的な二つの鐘楼を持つ建物だ。スターロフと彫刻家フェドート・シュービン(1740-1805)の共同制作による装飾内装で有名だ。内部装飾に一層美しさを添えているのは豊富な模様がある丸天井と白柱と付け柱とコントラストを成している金箔のコリント様式の柱頭だ。瑪瑙パネルで装飾された白大理石のイコノスタスには、グリゴーリー・ウグリューモフ(1764-1823)やイヴァン・アキーモフ(1754-1814)といった優れた画家のオリジナルのイコン画が保存されている。この聖堂の壁にはかつて、エカチェリーナ2世によって修道院に寄付されたルーベンスの「十字架降下」、ヴェロネーゼ、ヴァン・ダイク、メングスの絵がかけられていた(これらは全て革命後没収された)。

建設終了後すぐに聖堂に聖アレクサンドル・ネフスキーの聖廟が移された(現在南の宝座にある)。

大墓地(著名人の墓)

3-h10, p. 319

1710年代、最初の修道院墓地となったのはあまり大きくないラザレフ墓地で、木造の生神女受胎告知教会の納骨所から名前を

受けた。納骨所にはピョートル1世の盟友ロモダノフスキー公、シェレメーチェフ伯爵、ドルゴルーコフ公他が葬られている。

M.V.ロモノーソフの墓

F.M.ドストエフスキーの墓

P.I. チャイコフスキーの墓

ブラゴヴェーシェンスカヤ教会

その頃隣にロシア貴族の墓地の建設が始まった。墓地に優れた科学・文化活動家が葬られるようになったのは18世紀のことで、国家全体の意義があると認められるようになった。ここにはロモノーソフ、有名なペテルブルグの建築家スターロフ、ヴォロニーヒン、ザハーロフ、トマ・ド・トモン、クヴァレンギ、ロッシが埋葬されている。

ヴラゴヴェーシェンスカヤ教会納骨所

1720年創立。ニコライ1世治世前のロマノフ家近親の納骨所とされていた。そばに皇帝の近臣や親族(ラヴモフスキー家、シュヴァーロフ家、東回廊の聖器所にユスーポフ家他)の納骨所がある。敬意を表して大元帥アレクサンドル・ヴァシーリー・スヴォーロフも埋葬されている。

チーフヴィン大墓地

19世紀創立。ロシア芸術に優れた功績を残した人の埋葬地として特別に建てられた。200以上ある墓の中にカラムジン、チャイコフスキー、グリンカ、ムソルグスキー、ドストエフスキー、シーシキン、クロット、ニコライ・レーリフの墓がある。

3–j1, p. 320

スモーリヌィ
修道院の建築模型
（芸術アカデミー
博物館所蔵）

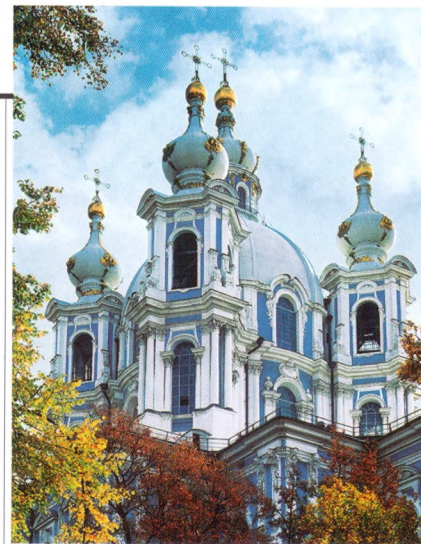
スモーリヌィ（復活）修道院の名前の由来となったスモリャノイ（松脂）工場は、ピョートル1世によって、17世紀にスウェーデン要塞ニエンシャンツがあったネヴァ川対岸のスパースコエ・セロー（救世主村）の場所に建てられた。ピョートル時代スモリャノイ（松脂）工場の西はフォンタンカまで皇帝の子どもや近親者の家が立ち並んでおり、その中の一つで彼の末娘エリザヴェータは子供時代を過ごした。1744年、エリザヴェータ女帝は自分の「スモリャノイ宮殿」があった場所に女子復活修道院を創立する。言い伝えによると、晩年そこに隠遁するつもりだったと言われている。修道院アンサンブルの設計図を女帝に見せたのはバルトロメオ・フランチェスコ・ラストレッリだ。芸術アカデミー博物館に保存された模型から判断すると、修道院のアンサンブルに巨大な鐘楼（高さ140m）が加えられることになっていたようだが、諸事情で建てられなかった。

スモーリヌィ聖堂

修道院（キリスト復活）主教会は1748年に建てられ、エリザヴェータ時代の最も高い建物（93.7m）になった。ラストレッリはウクライナ・バロックの記念建築物をもとに設計した。ほとんど平らな屋根の上に立つ中央の円屋根を4つの玉ねぎ形屋根を頂く細い塔が取り囲んでいる（図参照）。モデルとなった聖堂から判断すると、女帝は5つのクーポラがあり、かつダイナミックで、絵のような美しさを損なわない寺院を造るよう命令した。建設作業は7年戦争（1756-1763年）で中断し、1764年エカチェリーナ2世によって完全に中止される。ヴァシーリー・スターソフの指揮で建設が再開されたのは、ニコライ1世が聖堂を亡くなった母皇太后マリヤ・フョードロヴナのために捧げることにした1830年になってからのことだ。スターソフは屋根を完成させ、内装を施した。

スモーリヌィ大学

1750年代から1760年代、聖堂の建設と同時に、修道院の敷地を取り囲む2階建ての修道院棟が建てられた。四隅に4つの小さい教会が建てられた。修道院棟には僧房、礼拝室、また、エカチェリーナ2世によって1764年に創立された貴族子女学校があった。1765年女帝は修道院内に民間の子女の学校も創立し、そのためにアンサンブルの北にユーリー・フェリテンの設計によってアレクサンドル大学（1770年代）が建てられた。パーヴェル1世の命令でスモーリヌィ修道院は1797年に廃止され、修道院棟は全て彼の妃マリヤ・フョードロヴナが設立したスモーリヌィ大学に譲られる。

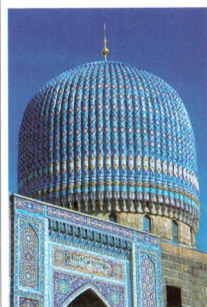
1806–1808年ジャコモ・クヴァレンギは大学のために修道院の柵の南に柱廊玄関のある端正な棟を建てた（スモーリヌィ, p.141図参照）。

スモーリヌィ聖堂のクーポラ

ドミートリー・レヴィツキー「スモーリヌィ女学校のエカチェリーナ・フルシェヴァヤとエカチェリーナ・ホヴァンスカヤ」1773年（国立ロシア美術館所蔵）

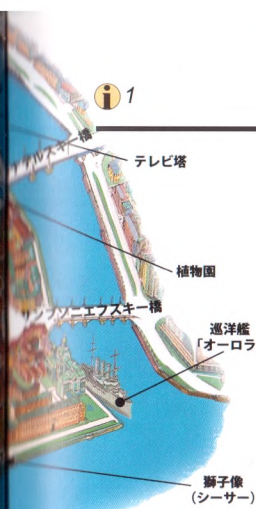
ペトログラーツカヤ（1914年まで旧称ペテルブルスカヤ）・ストラナーは7つの島から成り、その中の一つ、天然の水流にとり囲まれた小島に1703年5月13日聖三位一体の日、ピョートル1世はペトロパヴロフスカヤ（聖ペトロと聖パウロ）要塞を起工した。同時期、要塞のそばのベリョーザヴィ島（現在のペトログラーツキー島）の南端に、トロイツキー（三位一体）教会が建てられ、その周りはしだいに新しい町の最初の行政の中心になっていった。しかし、1725年頃にはネヴァ川は自分の破壊力を見せつけており、デルタ（三角州）の島々に巨大な建物を建築するのは、やっかいで高くつく仕事だということが明らかになった。ペテルブルグの中心は大陸部のネヴァ川左岸に急速に移り始めた。積極的に開発が続けられたのは島の西部、ヴァシーリー島の川岸通りの貿易港の近くだけだった。他の区域は町郊外の集落（主に木造建築）になり、町の再建プランには入っていなかった。

20世紀初めは整備が行き届いた一流の地域だったが、町の中心だったり、町の僻地だったりというペトログラーツカヤ・ストラナーの不均等な開発は、ここをペテルブルグ最古の建物（ピョートル1世の小屋）からペテルブルグモダニズムと構成主義の傑作まで立て並ぶ地とした。町の中心に近く、かつ孤立した場所にあるという地理条件から、この地区は建築実験の草地になった。1960年代初めここに、町の建造物で最も高いテレビ塔（310m）のある市内テレビ放送局が建てられた。

20世紀初めのペトログラーツカヤ・ストラナー

ペトログラーツキー島と大陸のネヴァ川左岸をむすぶ1896-1903年のトロイツキー（三位一体）橋の建設は、ペトログラーツカヤ・ストラナーの開発を促進し、まもなくしてペトログラーツカヤ・ストラナーはペテルブルグで最も一流のブルジョア地区になった。1903年町の創立200周年記念に出版されたペテルブルグのガイドブックには熱狂的に次のように書かれてあった。「町のこの部分は…中心がネヴァ川左岸に移されてその意義を失った…。しかし今や町はピョートル大帝が基礎をおいた時に戻ったかのようだ。短期間でペテルブルスカヤ・ストラナーには建物が並び、街灯が輝き、道路が舗装された・・・」

回教寺院のモスク

「ニコライ2世の国民の家」1913年

取引所橋

ウラジーミル公聖堂

トゥーチコフ橋脚の近くの広場のそばに1741-1780年代ウラジーミル公聖堂が建てられた。これはペトログラーツカヤ・ストラナー西端で唯一めだつ建物だ。

イオアン（イオアノフスキー）修道院

1900年代ビザンティン様式で建設（建築家N.ニコノフ）。

トゥーチコフ橋

1759年ペテルブルグ島（現在の兎島）とヴァシーリー島をつないだ橋の名は、建設請負人アヴラアム・トゥーチコフにちなんで名づけられた。（女帝エリザヴェータ・ペトローヴァナはペテルブルグの橋の建設促進のために商人に架橋を請け負わせ、後に通行人から通行料金をとって出費を埋め合わせた）後に橋は石造で再建され、跳ね橋になった。

イオアン修道院

アレクサンドル公園

クロンヴェルク（冠塞）の近くに、ピョートル時代から古い商用広場（1711年に開設されたスィートヌィ市場の前に）があった。ここには19世紀半ばにアレクサンドル公園と呼ばれる広大な公園が設けられた。公園の西部に1865年ロシア初の常設動物園が開園した。1890年代アレクサンドル公園の中心にガラスのクーポラがあるユニークなニコライ2世の国民の家（現存しない）が建てられた。1896年の有名なニージュヌィ・ノヴゴロドの定期市で展示されたパヴィリオンの一つの金属の骨組みが基になっている。この建物は市民の保養娯楽センターとして建てられた（実際の目的は国民の飲酒を止めさせることだった）。国民の家の周りに一般向けペテルブルグ文化センターの一つができ、その中に1911年オペラホールが開設され、そこでシャリャーピンやソービノフが出演した（現在はプラネタリウムやミュージックホールのあるコンプレックスになっている）。当時ペトログラーツキー島は乗馬から早期の映画上演まで可能な限りの娯楽を提供していた。

ウラジーミル公聖堂

植物園

ⓘ 1-h1. p 322

アプチェーカルスキー島にピョートル1世時代に創立された植物園が1911-1915年現代風に作り変えられた。ここに温室のある新棟（建築家A.ジトリフ）が建てられた。現在約8000種の植物が展示してあるユニークな博物館となっている。

動物園の白くま

植物園の温室の池

トロイツキー（三位一体）広場とピョートル川岸通り

ⓘ *1–h8,i7*

トロイツキー（三位一体）橋

トロイツキー（三位一体）広場

18世紀初頭ペトロパヴロフスカヤ（聖ペトロと聖パヴロ）要塞に前方をふさがれたペトログラーツキー島の南岸に最初の町の広場が建設された。その様子はピョートル・ピカルトの絵による版画でよく知られている（右上図）。ここで最初に建設されたのは行政の建物（官庁）、商業施設、寺院（広場の名前の由来となった三位一体教会）、そして東部ネヴァ川沿いの皇帝や近親の住宅、当時のホテル、民宿や居酒屋などだ。今日広場の波乱万丈な歴史の面影を残しているのは、後にペトロフスカヤ（ピョートルの）という名前が付けられた川岸通りに建てられたピョートル1世の木造の小屋だ。

「ピョートル川岸通りの中国の獅子像（シーサー）」20世紀初頭

トロイツキー（三位一体）橋

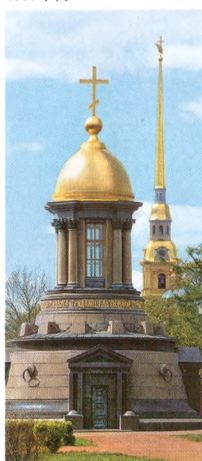
ⓘ *1-h9*

1903年夏ペテルブルグでトロイツキー橋の開通式が行われた。この橋はペテルブルグで最も長く（長さ582m）、町の創立200周年に合わせて建設された。ペテルブルグに342本ある橋の中でトロイツキー橋は特別な位置を占めている。その軸は有名なプルコヴォ子午線（グリニッジ子午線の国際承認までロシアでは0度だとみなされていた）上にある。

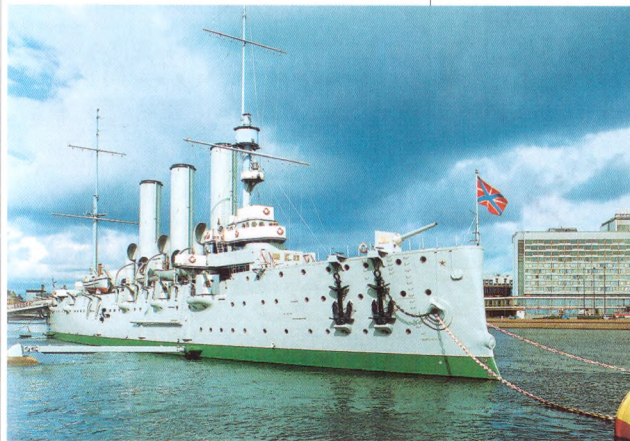
橋の建設の歴史は1892年まで遡る。当時アレクサンドル3世はフランスと軍事同盟を結び、それを記念して両国1本ずつ橋が起工された。パリの橋はセーヌ川にかかる最初の単一径間の橋「アレクサンドル3世橋」で、ペテルブルグのはパリの橋の5倍の長さの「トロイツキー橋」である。トロイツキー橋の設計デザインを決める国際コンペが催され、フランス人技師、有名なエッフェル塔の作者グスタフ・エッフェルの作品が選ばれた。が、諸事情によってアレクサンドル3世の死後、ニコライ2世が即位した（1894年）後の1896年になって二度目のコンクールが行われた。そこには橋の栈橋の技師グリゴーリー・クリヴォシェイン参加していた。橋の開通式は1897年フランス大統領フェリックス・フォル出席のもと行われた。橋を飾ったのは船嘴飾りをつけたアレクサンドル3世と皇后マリヤ・フョードロヴナの頭文字入りオベリスクで、パリの橋にたてられたのと全く同じものだった。

初期の橋のスパンは上がらず、軸が90度旋回していた。1965-1967年橋は長さ43mの跳ね橋に再建された。

「ペトロパヴロフスカヤ要塞と三位一体広場」
1714年 P.ピカルトの下絵による版画

トロイツキー橋そばの小礼拝堂
1990年代

ピョートル1世の小屋

ⓘ *1-j7 p. 318*

ある資料によると、「5月24日…ツァーリは木（丸太）を切るように命じ、宮殿を建て始めた。5月26日…建設作業は終わった。清めの儀式の後宮殿に入り、この島を『ペトロフスカヤ（聖ペトロ）島』、宮殿を『ペテルゴフ』と名づける」とある。もしこの資料を信じるなら、最初の「ペテルゴフ」は1703年に建てられた総面積わずか60㎡のこの木造小屋だったということになる。建物の歴史的意義を意識していたピョートル1世は、1723年小屋の周りに石造の覆いを造るように命じた。

ピョートル1世の小屋の客間

ピョートル1世の小屋

ⓘ *1-j7*

建物は市議会でロシアの偉大な改革者の名を不朽にし、後世に伝えるために「町にピョートル1世像がなければならない」という案が出された後、1908年に建てられた（建築家A.ドミートルエフ）。そのようなピョートルの記念建築物が作者達の考えによると、何百もの青年男女が知性という光で輝くことができる「国民学校の家」になったのだ。現在この建物に海軍学校が置かれている。

海軍学校

二本マスト装甲甲板1等巡洋艦「オーロラ号」

ⓘ *1-j7*

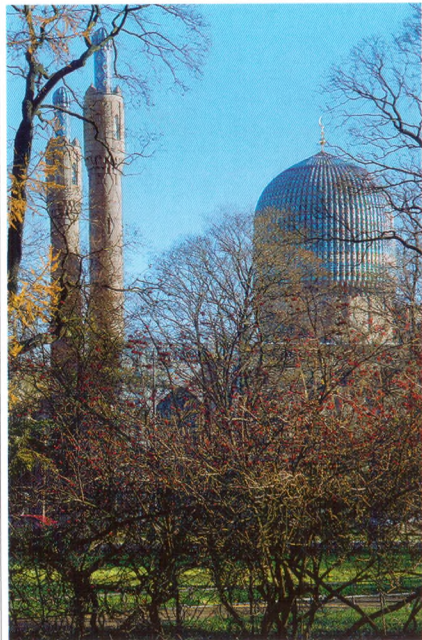
19世紀末のロシア造船物の貴重な記念物で、その建設と設備にかかった費用はスパース・ナ・クラヴィー教会のそれを数倍上回る。これはロシア艦隊の強力な軍艦の一つになった。

巡洋艦オーロラ号は1897-1900年ペテルブルグ新海軍省の造船所で建造された。この名がつけられたのは1903年実戦が始まる時だった。1905年5月対馬会戦に参加し、そこで大損害を受けながらも敵から逃げ切り、マニラへ向かった。そこでロシアの船は武装解除し日露戦争の終結までそこに留まった。1906年「オーロラ号」はバルト海に戻る。1917年巡洋艦の乗組員はボリシェヴィキ側にまわり、1917年10月25日（11月7日）巡洋艦からの号砲が冬宮占領の合図となった。

巡洋艦「オーロラ」

カーメンナオストロフスキー（石島）大通り

1—e1,h8

トロイツキー（三位一体）橋の建設後、ロシア・ブルジョワジーは精力的に新しいペトログラーツカヤ・ストラナーを開発した。ペテルブルスキー島に10年間で当時最高のペテルブルグの建築家の設計による建物が数多く建てられた。開発は有名なペテルブルグの島々、エラーギン島、カーメンヌイ（石）島、クレストーフスキー島まで広がり、そこでは古い郊外のアンサンブルと隣り合い、当時流行していたあらゆるスタイルの優雅な邸宅が建てられるようになった。

アレクサンドル公園から見るモスク

「ストレグーシー号」像

アレクサンドル公園

1-f6

1844-1845年クロンヴェルク（冠塞）に隣接する敷地に設けられた。1904年三位一体広場と境をなす公園の東部が整備され、装飾が施された。19世紀末ここに医療センターが建てられた。このために1902-1906年ロベルト・マリツェルの設計で整形医学大学が建てられた。この建物のファサードはK.ペトロフ＝ヴォドキン（図p.329参照）の素描をもとにつくられたマジョリカ焼のイコン画で装飾が施されていることで有名だ。

クシェシンスカヤ邸

少し後になってそばの小公園にペテルブルグでは珍しいモダニズム様式の記念物「ステレグーシー」像が設置された（1911年，彫刻家K.イゼンベルグ，建築家A.ゴーゲン，鋳造工B.ガヴリロフ）。「ステレグーシー」はロシアの水雷艇の名前だ。1904年2月26日ポート・アルトゥールでこの水雷艇の乗組員は日本の水雷艇4隻と不利な状況で応戦したが、受けた破損がもとで沈没した。

回教寺院（モスク）

1-h6, p. 328

回教寺院は1910-1912年サマルカンドの有名なグル・エミール廟（1404年）のタメルランの納骨所をモデルに建てられた（建築家C.クリチンスキー、N.ヴァシーリエフ、A.ゴーゲン）世界最北のモスクである。その建設は政治的礼節さを示唆していた。アレクサンドル3世の時代、中央アジアのほとんどの領地（アフガニスタン国境まで）がロシアに併合されたことによって、共に石島通りにブハル汗国のエミール（領主・君主の尊称）の住居が建てられ、ムスリム共同体は影響力を増加していった。ルーテル共同体、カトリック共同体、ユダヤ共同体がそれぞれ固有の教会を持つことに対してムスリム共同体も威厳を保つ必要があった。

クシェシンスカヤ邸

1-h7, p. 321

クロンヴェルスキー（冠塞）大通り1

Кронверкский проспект, 1

「町のヴィラ（別荘）」という当時流行りの邸宅は1904-1906年帝室バレエ団バレリーナ、マチルダ・クシェシンスカヤのために建てられた（建築家A.ゴーゲン）。ペテルブルグ・モダニズムの代表的な建物である。

リドヴァーリの家

リドヴァーリの家

石島大通り1-3

Каменноостровский, 1-3

モダニズム様式のペテルブルグの部屋数の多い家の素晴らしい手本である。1899-1904年ペテルブルグ建築の指導者の一人フョードル・リドヴァーリによって建てられた。建物には石島大通りの周りに集められたいくつかの棟から成るコンプレックスを含む。

オーストリア広場

オーストリア広場

1-g5

広場はV.シャウブの設計で1901-1906年に作られる。石島大通りと平和通りの小さい交差路を取り巻くほとんど同じタイプの5階の建物が並ぶ小さいアンサンブルだ。

って建てられた。煉瓦造りのファサードは洗練されたマジョリカ焼やテラコッタのはめこまれた装飾が美しく、建物の暗い外観にやや変化をつけている。

「塔のある家」

石島大通りとバリショイ大通り75の角

Угол Каменноостровс-кого и Большого пр., 75

1913-1915年A.ベログルードの設計で絵画的な美しさのネオ・ロマンス様式で建てられる。

「塔のある家」

「煉瓦様式」の家

石島大通り24

Каменноостровский, 24

「煉瓦様式」はオランダ人建築家ヘンドリック・ベルラーグ（1856-1934）によって実用化された伝統的な様式名である。貸家の建設の際ペテルブルグで広く用いられた。石島大通りの家は1896-1897年レオンチー・ベヌア（大公の納骨堂製作者）によ

「煉瓦様式」の家

石島大通り61
1906-1907年 建築家 F.リドヴァーリ

ペテルブルグ様式

多様なモダニズム

スパース・ナ・クラヴィーの
モザイク装飾細部
1890年代 – 1900年代

ペテルブルグ・モダニズム（仏語.moderne 最新の）はあまりしゃれていない、リチェイナヤ・ストラナー、ペトログラーツカヤ・ストラナーやセンナヤ広場近辺などでよく見られる。モダニズムはその建築の中に階層の特徴を見ることができる。ペテルブルグ・モダニズムはいくらかの例外を除いて、保守的なペテルブルグ貴族や裕福なブルジョワジーには受け入れられず、中流実業家知識人のスタイルになった。モダニズムはロシア風インテリア、絵画や版画の発展に大きな役割を果たした。その分野ではベヌア、バクスト、ビリービン、ゴロヴィンや他の巨匠達のお陰で至る所で指導的地位を獲得した。抗議的な性格を持ち、サロン的貴族文化に反抗した新しい運動は19世紀半ば頃グレート・ブリテン島で起こった（モーリス,ロセッティ他）。大陸で受け入れられたこの運動は、さまざまな形で各国に広がっていった。アール・ヌーヴォー：Art Nouveau（英語圏の国々とフランス）、ユーゲントシュティール：Jugendsti（ドイツ）、Stile Floreale（イタリア）他。

モダニズム最初の建築基礎を作り上げたのは、ヴィオーレ・レ・デューク（1814-1879）で「偽善的な歴史の借用」からの建築脱却を提唱していた。新スタイルの首謀者ガウディ、オルタ、マキントッシュらは20年間で古い建築派の基礎を揺るがし、支柱・梁システムを基礎とする革新的な空間芸術を創り出した。しかし新しい原則は、建築家と依頼主に限られた者にしか与えられない並外れた才能と想像力を要求した。そのためヨーロッパ地方における大量の建設においては、主にアメリカ人建築家リチャードソン（1838-1886）のアイディアが人気だった。彼の建築思想というのは、ロマンス派建築の「力強さとシンプルさ」と古代建築の「明白さ（わかりやすさ）」を兼ね備えていた。この二つは「国民ロマン派」（北のモダン）と呼ばれる思想の基盤になった。ペテルブルグにおける特徴は、平らな煉瓦あるいは漆のファサード、多量の（少量の）マジョリカあるいは「流動的な」レリーフ装飾、北ゴシック様式のペディメントだ。

ノヴィツキー工場棟の階段
（サドーヴァヤ通り23）
1900年代
建築家V.シャウブ

カーメンヌィ・オーストロフ（石島, 106ヘクタール）はペテルブルグの北郊外の古い保養地帯（クレストーフスキー島とエラーギン島も含む）にある最も有名な島だ。カーメンナオストロフスキー（石島）大通りの名称の由来となった石島は、18世紀初頭ピョートル1世によって宰相ゴロヴキン伯爵に贈られた。ゴロヴキンがその島に建てた屋敷についての情報はピョートルの回想録に記されている。エリザヴェータ時代に島の持ち主になったのはベストゥージェフ＝リューミンで、彼は対岸の大ネフカ川岸（新村・古村）に住んでいたウクライナ人の領地から農民達を連れてきて、この地を完全に整備し直した。

預言者イオアン（ヨハネ）誕生教会

ベストゥージェフの木造宮殿の周りに大規模な整形式庭園（左右対称の庭園）が設けられ、温室、エルミタージュ・パヴィリオン、動物小屋等が建てられた。1760年代エカチェリーナ2世はこの島を息子パーヴェルに贈り、1776–1781年彼のためにベストゥージェフ宮殿があった場所に壮大な宮殿が建てられた。アレクサンドル1世の治世、島は新しい段階を迎える。石島公園はトマ・ド・トモンの設計によって風景画のように再建され、その中に高官貴族の別荘街ができた。

20世紀初め島の絵画的公園はほとんど全て失われてしまった。しかし島にはいくつもの建物が建てられ、以前と変わらず一流のペテルブルグ近郊地だった。島に点々と存在する優雅な邸宅が昔の様子を現在まで伝えている。

仏教寺院の装飾の一部

仏教寺院

預言者イオアン（ヨハネ）誕生教会
p. 329

かつて石島に美しいアンサンブルを形成した建物の中で保存状態が良い数少ない建物の一つ。教会はエカチェリーナ2世の命でユーリー・フェリテンと、ジャコモ・クヴァレンギによって1776–1785年に建立される。中央の巨大な宮殿とのアンサンブルは、皇太子パーヴェルのものだった。宮殿の近くに退役水兵のための傷痍軍人センター（収容所）があり、その近くに1778年ユーリー・フェリテンの設計でこの英国ゴシック様式の小さい正教教会が建てられた。

仏教寺院
p. 328

仏教寺院建設の許可と資金をニコライ2世から受けたのは1909年、その後、建設委員会の指揮のもと、建設が始まった。委員会のメンバーは民俗博物館のアカデミー会員ラドロフとオリデンブルグ、ウフトムスキー公、東洋学者コトヴィチとルドネフ、画家ニコライ・レーリフ他。最初の建設案はN.ベレゾフスキーによって立てられ、その構想をもとに建築家G.バラノフスキーによって建てられた。建設完了は1915年。ペテルブルグの仏教寺院建設は政治的策略の一つで、極東をめぐるロシアと英国との勢力争いに関連していた。

エラーギン島アンサンブル
p. 320

エラーギン島屋敷（1818–1822）はカルロ・ロッシの最初の大プロジェクトになった。中2階のある2階建ての宮殿（「洗練さの手本」）は古い建物の土台の上に建てられ、高い台座のように仕上げられた。そこに遊歩道（散歩できる回廊）が設置された。二つの入口の前の幅広い階段には、鉄の獅子像と装飾植木鉢がある。内装作業に参加したのは、ロッシの信頼厚いスコッティ、ヴィギ、メディチ、ピメノフとデムート＝マリノフスキーだ。残念なことに宮殿は戦火に遭って焼失してしまった。現在の装飾の大部分は、修復家達の骨身を惜しまない労力の結果だ。

エラーギン宮殿

エラーギン宮殿の青の客間

今日素晴らしい古い公園が唯一現存する島（面積94ヘクタール）の最初の所有者となったのは、副宰相シャフィーロフ男爵だ。ピョートルは彼にこの島を世襲領地として下賜した。1723年シャフィーロフは官金横領の罪で起訴され、島は元老院検事総長・ヤグジンスキーに贈られた。1770年代島はエカチェリーナ2世時代の宮廷人事長官イヴァン・エラーギン（1725–1794）の所領となり、彼は精力的に島の整備に励んだ。彼の所領時代、島の沿岸は洪水を防ぐために土塁で囲まれ、東端に宮殿が建てられた。土塁は現在まで保存されている。エラーギン死後、島はオルローフ伯爵に移ったが、彼はこれを1817年35万ルーブルで皇帝内閣に売り渡した。アレクサンドル1世は島に自分の母、未亡人となった皇太后マリヤ・フョードロヴナの屋敷を造ることを決め、カルロ・ロッシに建設作業を委任した。ロッシのエラーギン公園整備を補助したのは、造園師ジョゼフ・ブッシュで、彼はここに島の5分の1の面積を占める池システムを設置した。宮殿のアンサンブルにはエラーギン宮殿のほかに給仕（食堂）棟、音楽パヴィリオン、厩舎棟、温室、営倉、島の東岬の花崗岩船着場わきのパヴィリオンがある。

カール・ベッグロフ
「エラーギン宮殿」1825年

海軍省地区はペテルブルグで最も古い地区の一つで、地理的にフォンタンカ川、ネヴァ川、ガローハヴァヤ通りに囲まれ、いろいろな階層や人種が住んでいる独特の雰囲気をもつ地域だ。この地区を通っている重要な幹線道路は、サドーヴァヤ通り、ヴォズネセンスキー大通りと英国大通りだ。海軍省地区にはまた、古いコロムナ街区、いくつかの有名なアンサンブルであるセンナヤ広場、新オランダ島、劇場広場、ニコライ聖堂がある。

英国川岸通り

ペテルブルグの貧民街を連想させる。この地区は庶民的風習と安い住居で有名で、18世紀から20世紀初頭まで全てと言ってもいいほど多くのペテルブルグの知識人がここにアパートを借りていた。この地区にはロッシ、プーシキン、レールモントフ、ドストエフスキー、ブローク、ストラヴィンスキー、レーピンが住んでいた。

トロイツキー（イズマイロフスキー）聖堂

p.328

フォンタンカ左岸に立っている聖堂は、かつてピョートル1世によって創立されたイズマイロフスキー連隊街の中心だった。木造連隊教会のアルターリ（至聖所）は、1828–1835年にヴァシーリー・スターソフの設計によって建てられた鮮やかな青のクーポラと高い柱廊のある建物に移された。

トロイツキー（イズマイロフスキー）聖堂

英国川岸通り

夏の庭園からガレー船造船所（フィンランド湾岸）までのネヴァ川の左岸は当初二本の川岸通り（上の川岸通り・下の川岸通り）に分けられていた。下の川岸通りの区画は当初、ガレー船造船所で働く外国人造船工に与えられていたが、後にここにはイギリス人事業家が住むようになり、この通りの名の由来となった英国大使館が建てられた。

ヴォズネセンスキー大通り

2-f8,10

海軍省から放射線状に伸びる三本の大通りのうち一番最後に造られた。大通りは他の県から連れてこられたペテルブルグの建築家達の村に沿って敷設された。1728–1729年グルハヤ川、あるいはクリヴシ川（現在のグリボエードフ運河）岸に木造のヴォズネセンスキー（昇天）教会が建てられた。この教会は1769年までに石造りに再建された。（A.リナルディの設計）1936年に取り壊されたこの教会がヴォズネセンスキー大通りの名称の由来となった。

コロムナ街区

ペテルブルグの左岸西部の土地を獲得したのは、ここにモイカ川の下流に製粉所と製材所があった18世紀だ。19世紀に名づけられたコロムナという名前自体、

「英国川岸通り」
リトグラフ　19世紀中葉

新オランダ島

新オランダ島

2-b8

倉庫と乾燥室として用いられている小島はピョートル時代「新オランダ島」と呼ばれた。エカチェリーナ2世の命で1765–1780年島に新しい倉庫室のあるコンプレックス（建築家J.-B.バレン＝デラモートとS.チェヴァキンスキー）が建てられた。建築家達は壮大なギリシャ・ローマ時代の廃墟を模してつくった。

劇場広場

2-c9

広場建設開始は18世紀半ば。1753年エリザヴェータ・ペトローヴナ女帝に見せた設計案では海軍省地区の西に整備予定地として罫線を引かれた領地があった。1753–1762年ここに最初の重要な建造物、ニコライ聖堂（p.159）が建てられ、その南には（少し後に）ロシア初の石造ボリショイ（大）劇場が建てられる。後に劇場と聖堂の間に高級賃貸住宅のブロックが生じる。19世紀末までに大劇場の場所に重厚で品の良い（ドイツ・スタイルの）音楽院の建物（1891–1896,建築家V.ニコーリ）が建てられた。この時までに劇場広場は大分前から「フランス」スタイルの美しいマリインスキー劇場（p.156）によって名声を得ていた。

聖イシドールスカヤ（イシドール）教会

モイカ川岸通り

モイカ川岸通りは海軍省地区で最も特権階級層が多く住む地域だ。19世紀に川の中流に貴族宮殿があり、隣接して貴族の屋敷が並んでいた。

モイカ94番の住宅地にピョートル・シュヴァーロフ、後にユスーポフの所有となった宮殿があり、108番はグリゴーリー・ポチョムキンのダーチャ（別荘）だった。1720年代、その少し下流にピョートル2世が住んでいたドルゴルーキー公の屋敷があった（モイカ120）。モイカと新海軍省運河の合流点に1790年代ルイージ・ルスキの設計で、ボーブリンスキー公の宮殿が建てられた（ガレールナヤ通り60）。19世紀にはモイカにアレクセイ・アレクセーヴィチ大公の宮殿（モイカ122）、ニコライ・ニコラエヴィチ大公の宮殿（ニコライ宮殿,労働広場4）、クセーニヤ・アレクサンドロヴナ公妃の宮殿（モイカ106）が建てられた。

20世紀初めの劇場広場

ⓘ 2–c9, p. 316

劇場広場
マリインスキー劇場

1840年代からここにあったサーカスの小さい木造劇場の代わりとして建てられたマリインスキー劇場は、舞台芸術の都ペテルブルグに世界的栄誉をもたらした。ここで偉大な振付師プティパが働き、伝説的なバレエダンサー、パヴロワ、タマーラ・カルサーヴィナ、ミハイル・フォーキン、ニジンスキーが出演していた。1895年オペラ歌手シャリャーピンがデビューを飾り、1922年までこの劇場で歌っていた。舞台装飾作業に参加したのは、20世紀の優れた舞台芸術家、レリーフ、バクスト、ゴロヴィン、コロヴィン、ベヌア、スデイキンだ。

広場の歴史は1775年、エカチェリーナ2世の命でニコライ聖堂近くの空き地にアントニオ・リナルディの設計でペテルブルグに初めての石造の劇場が起工されたときに始まる。劇場のこけら落としはその10年後に行われた。その舞台で外国公演を上演していた劇場はボリショイ(大)劇場と呼ばれ、1886年まであった。その後建物は音楽協会に譲られ、1891–1896年サンクト・ペテルブルグ音楽院のために再建された。劇場広場に名誉をもたらしたのは建築家アリベルト・カヴォスによって1年で建てられ、1860年10月14日にオープニングセレモニーが行われたマリインスキー劇場だ(グリンカのオペラ「皇帝に捧げし命」の初演で幕をあげた)。ロシアオペラ上演のために定められた新しい劇場は、祖国芸術を守ろうという世論の影響下で創立された。グリンカの「ルスランとリュドミラ」、ムソルグスキーの「ボリス・ゴドゥノフ」と「ホヴァーンシチナ」、ボロディンの「イーゴリ公」、リムスキー・コルサコフの「見えざる町キテージの物語」他、大成功に次ぐ大成功は、皆の予想をはるかに上回るものだった。1890年代建物はヴィクトル・シュレッテルの設計によって大急ぎで再建された。シュレッテルは建物を拡張し、木造建築を金属に換え、ファサードと内装を一新した。5階の劇場ホール(1625席)も、優れた画家アレクサンドル・ゴロヴィンによって制作された劇場の幕も、現在までほとんど変えられずに保存されている。内装は帝室劇場としての地位にふさわしい、バロックの豪華さと荘厳さで際立っている。

ヴァレンチン・セローフ
シルフィードを踊るアンナ・パヴロワ　1909年

オペラ「スペードの女王」の1シーン

マリインスキー劇場の

レオン・バクスト　N.チェレプニンのバレエ
「ナルシス」のコスチュームの下絵　1911年

ペテルブルグ様式

マリウス・イヴァーノヴィチ・プティパ

マリウス・プティパ 1890年

19世紀後期はロシアバレエ史上において偉大なバレエマスター、マリウス・プティパ(ロシア語読み：ペチパ)(1818–1910)に敬意を表して「プティパの時代」と呼ばれている。プティパはロシアバレエの創始者で、ロシアで56のバレエ作品の振り付けをした。プティパはパリ・オペラ座の舞台で彼を見い出した帝室劇場幹部に招待され、1847年ロシアに来た。ペテルブルグでプティパは帝室劇場のバレエ劇団を監督し、1869年「ファラオの娘」(プーナ)の振り付けで絶賛される。その後マリインスキー劇場のバレエマスターと呼ばれ、1869年から主席バレエマスターになる。マリインスキー劇場の舞台で彼は自分の才能を完全に発揮させた。彼はディヴェルティスマン(余興として踊られる小作品)とコールド・バレエに対する認識をバレエ劇の二次的要素にする改革から始めた。一糸乱れぬコールド・バレエは、プティパの演出のもと調和の取れたオーケストラのように動き、ディヴェルティスマンは、現在これ無しには有名な「くるみ割り人形」も「白鳥の湖」も想像できないほど、輝かしい小品になった。チャイコフスキーとのユニークな友好は特別な意味を持っており、彼の死後、プティパはモスクワのボリショイ劇場で失敗したバレエ「白鳥の湖」を新しい振り付け(演出)で復活させる。プティパはミハイル・フォーキンを援助し、彼にマリインスキーの舞台を提供し、「ショパニアーナ」や「瀕死の白鳥」のような傑作をつくるチャンスを与えた。

オペラ「イーゴリ公」の1シーン

2–d8, p. 320

ユスーポフ宮殿

ZY
（ジナイーダ・ユスーポヴァ公妃）
の頭文字入りカルトゥーシュ
（渦巻）装飾

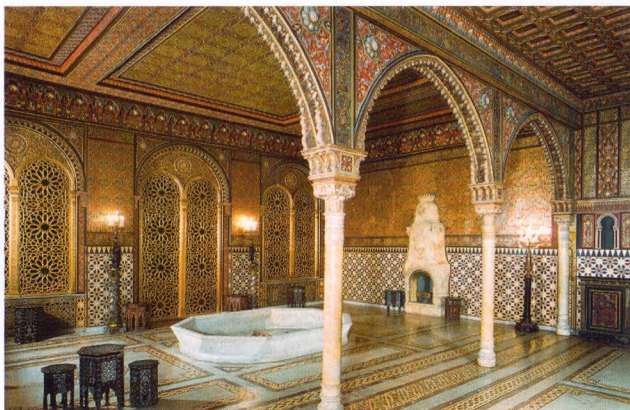
ユスーポフ宮殿の外観

ユスーポフ宮殿（モイカ94）は19世紀ヨーロッパで最も優雅な邸宅の一つだ。宮殿はエリザヴェータ女帝時代の有名な高官ピョートル・シュヴァーロフの所有だった18世紀半ばからその名が知られるようになる。ここの中庭で1754年皇太子パーヴェル・ペトローヴィチの誕生が祝われた。1830年シュヴァーロフ家は屋敷をグリゴーリー・ポチョムキンの姪、タチヤーナ・ユスーポヴァ公妃に売り渡し、その後宮殿は著しく拡張され、完全に改装された。後にユスーポフ家の新しい家主はそれぞれ内装に手を加え、19世紀の上流社会の記録には、ユスーポフ宮殿の豪華な舞踏会やレセプション、数え切れないほど膨大なユスーポフ家の財宝についての報告が残っている。宮殿の最後の持ち主となったのは伯爵スマロコフ＝エリストン、彼の妻ジナイーダ・ユスーポヴァ公妃（p.122参照）とその息子、ニコライ2世の姪イリーナ大公妃と結婚したフェリックスだ。彼らの名前は悲劇的な結末で終わる宮廷の陰謀の事件に関連してよく知られている。ニコライ2世退位の3ヶ月前の1916年12月16日の夜から17日にかけて、ユスーポフ宮殿でグリゴーリー・ラスプーチンが殺害された。1918年宮殿は徴発され、貴重な品々は全て国有化され、後にエルミタージュに移管された。

宮殿劇場

歴史情報

ラスプーチンが宮廷に現れたのは1905年、その数年後にはロシア政界で最も影響力のある人物になっていた。ロシアを襲った災難の原因はラスプーチン一人だけにあったとは言いにくいが、革命直前に彼が君主制の権威失墜に大きく関わっていたことは確かだ。ジナイーダ・ユスーポヴァは一人で皇后アレクサンドラ・フョードロヴナにラスプーチンを宮廷から追放する請願書を持って進言したが、むげにはねつけられた。このことを侮辱に感じたフェリックス・ユスーポフは、ドミートリー・パヴロヴィチ大公と共謀し、ラスプーチンを亡き者にする計画を立てる。この企みはだいぶ前から宮廷内で何度も推敲を重ねられ、あとは実行を待つのみだった。家族の留守中に彼はラスプーチンを自邸へ夕食に招き、そこで何人かの参加者も加わってドラマが繰り広げられた。

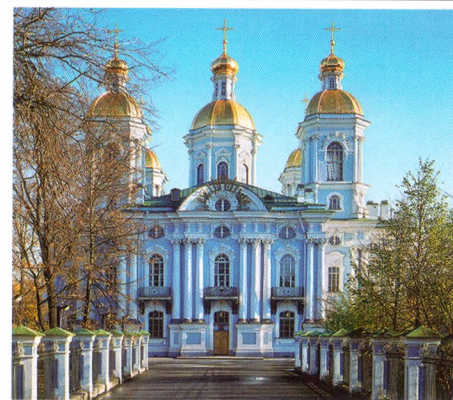
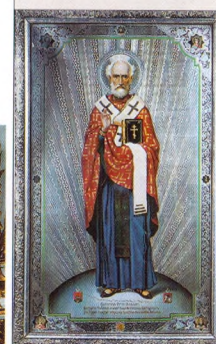
プレツィオーズの間

フェリックス・ユスーポフ住居部分　モーリタニアの客間

展示「ラスプーチン殺害」

2–d10, p. 328

ニコライ聖堂

ニコライ神現聖堂はエリザヴェータ女帝の命令で1753年に建てられた。これはラストレッリの才能ある弟子サッヴァ・チェヴァキンスキー（1713–1780）の傑作の一つだ。海軍省長官でもあった（1750年〜）海軍大将ミハイル・ゴリツィン公（1681–1764）の監督下、聖堂の建設のために海軍連隊の連兵用広場が割り当てられた。チェヴァキンスキーはラストレッリ・バロック様式の手法とピョートル時代以前の伝統建築を融合させ、間隔をあけて配置された同じ高さの5つの丸屋根を頂く美しく調和のとれた建物を創り上げた。聖堂の壁には、ペテルブルグ屈指の18世紀イコン画の貴重なコレクションが保存されている。ニコライ聖堂はソ連時代、そしてレニングラード封鎖中も勤行をやめなかったロシアで数少ない教会の一つである。

ニコライ聖堂の正面入口

ニコライ聖堂の上の教会のアルターリ（至聖所）

歴史情報

イコン画「聖ニコライ」
20世紀初頭

海軍省（参議会）が聖堂建築に参加し、聖堂は1808年までその管理課にあったこと、そして教会の一階のアルターリ（至聖所）に旅行者と航海者の庇護者聖ニコライ・ミルリキイスキーをまつっていたことによって、ニコライ聖堂はロシア水夫の重要な聖堂になった。建設の完成と上の教会（神現）の成聖式は1762年、エカチェリーナ2世の即位後に執り行われた。エカチェリーナ2世はロシア海軍の重要な大勝利を祝って、聖堂に金箔が施された数点のイコン画を寄付した。1900年聖堂は主教区庁から海軍庁へ管轄が移り、正式名称「海のニコライ神現聖堂」を得た。1905年聖堂の北の庭園に対馬会戦で沈んだ英雄、戦艦「アレクサンドル3世」の記念碑が設置された（建築家Y.フィロテイ，彫刻家A.オベール）。

「ナルヴァ門」リトグラフ 1830年代

南の関所は1769-1833年ペテルブルグの南境防備のために造られた。オブヴォードヌィ運河の南町は、海軍省区、キーロフ区、モスクワ区、フルンゼンスキー区という行政区に分けられる。18世紀ここにペテルブルグとモスクワ（モスクワ街道、またはツァールスコエ・セロー街道）、ペテルブルグとエストニア国境のナルヴァ（ペテルゴフ街道）をつなぐ駅馬車道が敷かれた。街道に沿ってまず郊外屋敷が建設され、人々が移住した（エカテリンゴフ、オブーホヴォ、クプチノ、アフタヴァ、ウリヤンカ他）。そして産業革命の時代、産業地帯が広がった。

現存している歴史的記念碑は、まずこれらの地区の戦略的な意義と関係があり、ここはペテルブルグに入る南の関所であった（ここからナルヴァ関所、モスクワ関所という名前が生まれた）。実際、北方戦争（1700-1721）後、南からのペテルブルグへの接近を決めたのはファシストだけだった。ファシストは1941-1942年キーロフ土塁からプルコヴォ国境にかけて南の防御を固めていた。

ナルヴァ門

ローマの凱旋門の形を再現した最初の木造門は、ジャコモ・クヴァレンギによって1814年の夏パリから戻るロシア軍を迎えるための一時的な建造物としてペテルゴフ街道に建てられた。後にアレクサンドル1世はこの門を常置門にかえる決議を下した。1827-1834年この設計を実現したのはヴァシーリー・スターソフで、彼はここに石とブロンズから成る記念建造物を造った。門の装飾作業に参加したのは彫刻家ヴァシーリー・デムート＝マリノフスキー、ステパン・ピメノフ、ピョートル・クロット（戦車の馬）、ミハイル・クルィロフとニコライ・トカレフ（コーニスの冠をつけた守護神）だ。コリント式柱頭を頂く円柱間のニッチに戦士像が設置され、その上に有名な近衛連隊のリストがある。側面上部に1812-1814年に名を上げた会戦が列挙してある。

ナルヴァ門

モスクワ門

モスクワ凱旋門は、自分の治世初期に戦勝したことを称えようとしたニコライ1世の命でヴァシーリー・スターソフによって、1836-1838年建設された。これはベルリンの中心にあるブランデンブルグ門（1788-1791, 建築家K.ラングハンス）を模範として建てられた。ドーリア式の力強い柱のポーチ（柱廊）はところどころリチェイヌィ工場の鉄で鋳造され、重さ各816トンの9つのブロックからなる。上部の碑文には「勝利をもたらしたロシア軍にペルシア、トルコの戦功と1826年、1827年、1829年、1830年、1831年のポーランド鎮圧を記念して」と書かれてある。門の装飾を施したのはボリス・オルロフスキーだ。1878年トルコの圧制からバルカン半島を解放したロシア軍はモスクワ門のそばで迎えられた。モスクワ大道（街道）はその頃一時的にザバルカンスキー（バルカンの彼方の）道と改名された。

ロシア軍をモスクワ門で迎える 1878年

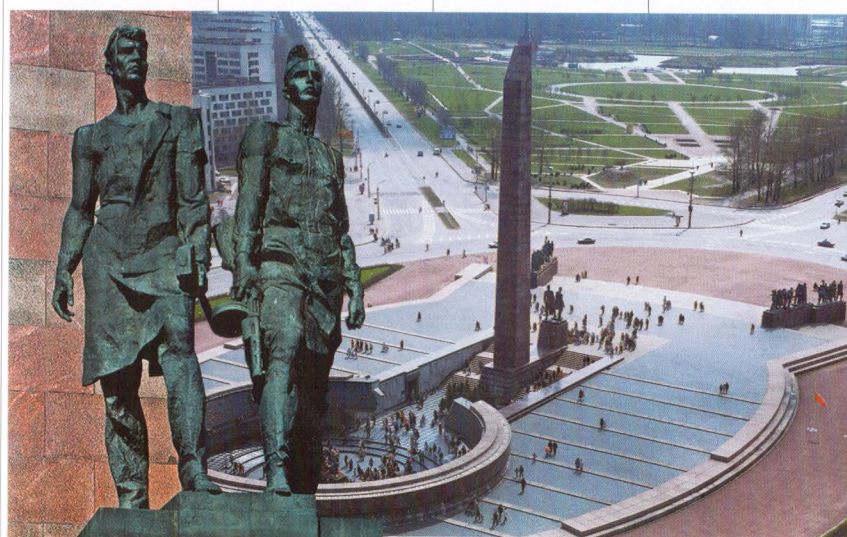
チェスマ教会（洗礼者イオアン誕生）

バロック（四弁構造と丸窓）、ゴシック（尖塔窓、幾つもの細長い尖塔）と古代ロシア（5つの丸屋根、対称的な赤白彩色）の建築を融合した極めて珍しい建築例だ。教会は1777-1780年エカチェリーナ2世の旅行中に滞在した宮殿の中にユーリー・フェリテンの設計によって建てられ、もう一つのチェスマの会戦の記念碑になった。旅のチェスマ宮殿自体（ガステッロ通り15）はフェリテンによって少し早く（1774-1777）建てられ、ペテルブルグからツァールスコエ・セローへ行く道中の女帝の休憩所として定められた。宮殿は当初「ケケリキ」（フィンランド語のケケレケクシネン「カエルの沼」より。宮殿が建てられた場所の名前）と呼ばれていた。

チェスマ教会

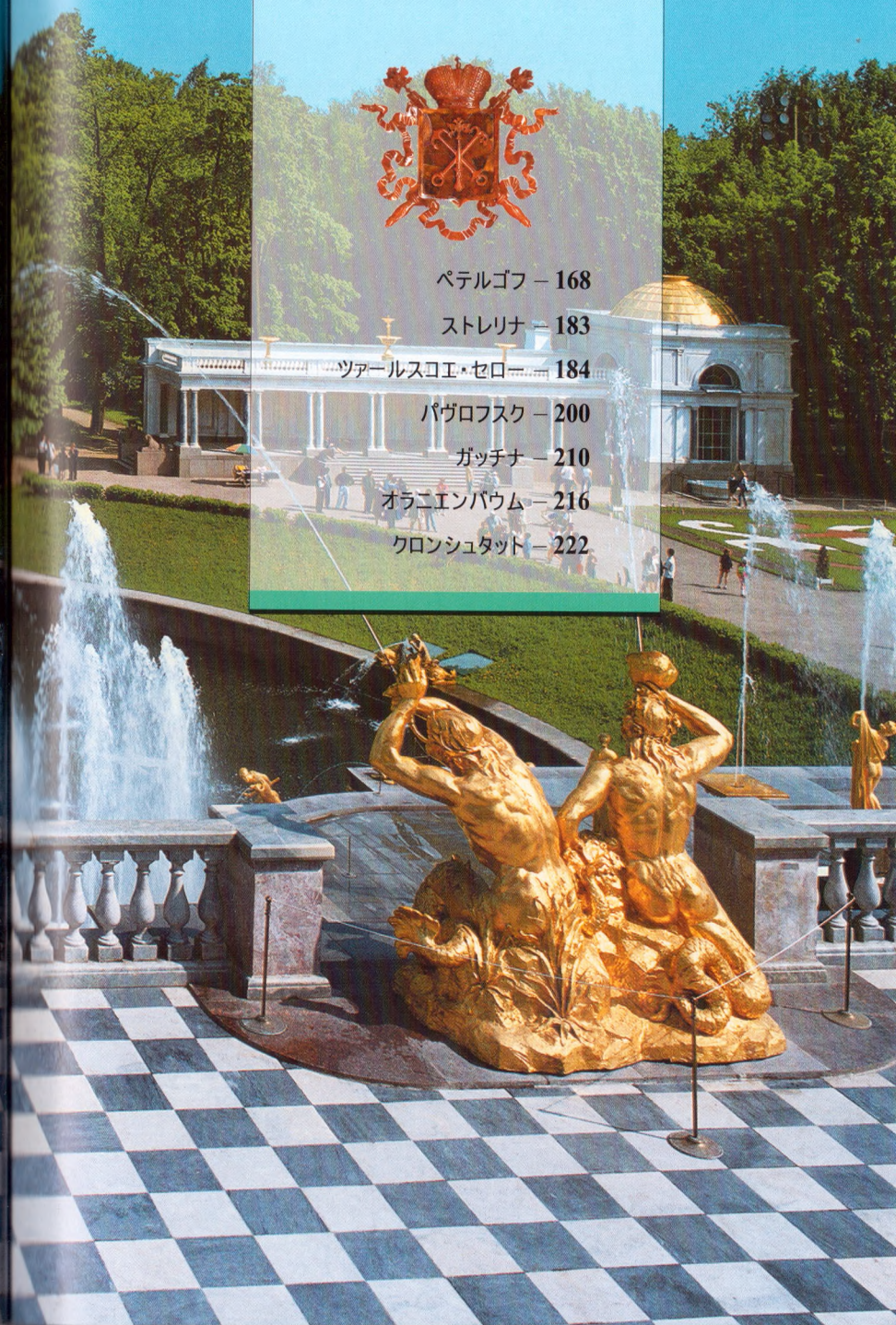
レニングラード防衛英雄メモリアル

p.321

18世紀からモスクワとキエフからペテルブルグへ通じる道の合流点にある広場の偉大なメモリアルは、モスクワ大通りの最後のロシアの戦勝記念碑となった。この広場で1945年、前線から戻ってきた近衛兵団を迎えた。モニュメントの起工は1957年だが、建築が始まったのは1974年で戦勝30周年にあわせて1975年に完成した。メモリアル（記念碑）の設計をしたのは建築家V.カメンスキー、C.スペランスキーと彫刻家M.アニクーシンだ。内部には町の防衛者とレニングラード封鎖を記念したホールが造られた。

レニングラード防衛英雄メモリアル

ペテルブルグ近郊

縮尺 1:650 000
1 cm 6,5 km

サンクト・ペテルブルグ郊外地図

クロンシュタット

町の博物館 ◷11:00～17:00; 休館日：月
図 Ⓜスターラヤ・ジェレーヴニャ駅（Старая Деревня）からバスで、あるいはⓂチョールナヤ・レーチカ（Черная Речка）からマルシュルートカ（路線乗合タクシー）で。トゥーチコフ橋そばの船着場からディーゼル船でも可能。所要時間約1時間。

オラニエンバウム

◷11:00～17:00; 休館日：火，毎月最終月曜日
現在博物館では大修復作業が行われているため、各建物の開館時間は要確認 ✆422-3753
図 バルト駅（Балтийский вокзал）（Ⓜ バルチースカヤ Балтийская）から郊外電車で「オラニエンバウム」（Ораниенбаум）まで。または Ⓜ プロスペクト・ヴィチェラーノフ（Проспект Ветеранов）からバス（343番）で。所要時間約1時間。

ストレリナ

ピョートル1世の宮殿 ◷10:30～18:45;
休館日：月，毎月最終火曜日
コンスタンチン宮殿（議会宮殿）：見学はガイドツアーのみ。（チケット売場での予約受付 ◷10:00～18:00;休館日：水）
✆438-5360
図 バルト駅（Балтийский вокзал）（Ⓜバルチースカヤ Балтийская）から郊外電車で「ストレリナ」（Стрельна）まで。Ⓜ「アフタヴァ」（Автово）からバス（404-K）で。所要時間約30分。

オラニエンバウム

宮殿 ◷10:30～17:00; 休館日：月，毎月最終火曜日（各建物の開館時刻についてはp.326参照）
図 バルト駅（Балтийский вокзал）（Ⓜ バルチースカヤ Балтийская）から郊外電車で「新ペテルゴフ」（Новый Петергоф）まで（その先はアンサンブルまで348, 350, 352, 356番のバスで）。バルト駅前発の高速バス、または冬宮前の船着場からディーゼル船（高速艇）でも可能。所要時間約45分。

ガッチナ

宮殿 ◷10:00～17:00; 休館日：月，毎月最初の火曜日
✆8(81371)134-92
図 バルト駅（Балтийский вокзал）（Ⓜ バルチースカヤ Балтийская）または鉄道駅「クプチノ」（Купчино）（Ⓜ クプチノ Купчино）から郊外電車で「ガッチナ・バルチースカヤ」（Гатчина, Балтийская）まで。あるいは勝利広場（Ⓜ モスコフスカヤ Московская）からバスまたはマルシュルートカ（18番）で。所要時間約1時間。

ツァールスコエ・セロー

宮殿 ◷10:00～17:00; 休館日：火，毎月最初の月曜日 ✆466-6669
図 ヴィテプスク駅（Витебский вокзал）（Ⓜ プーシキンスカヤ Пушкинская）あるいは鉄道駅「クプチノ」（Купчино）（Ⓜ クプチノ Купчино）から郊外電車で「ジェーツコエ・セロー」（Детское Село）まで。あるいはⓂモスコフスカヤ（Московская）からバス（287番）で。所要時間約25分。

パヴロフスク

宮殿 ◷ 10:00～17:00; 休館日：金，毎月最初の月曜日 ✆ 470-2156
図 ヴィテプスク駅（Витебский вокзал）（Ⓜ プーシキンスカヤ Пушкинская）または鉄道駅「クプチノ」（Купчино）（Ⓜ クプチノ Купчино）から郊外電車で。またはⓂ ズヴョーズナヤ（Звездная）からバス（479番）で「パヴロフスク駅」（Павловский вокзал）まで。所要時間約40分。

p. 164

フィンランド湾方向から見るペテルゴフ・アンサンブルのパノラマ

ピョートル1世の旅行日誌には、「1705年9月13日皇帝の帆船『ムンケ号』がフィンランド湾の南岸に錨を下ろした。そこにはペテルゴフと呼ばれる小さい農村があった」と書かれてある。これがペテルブルグ近郊で最も有名な皇帝住居に関する最初の言及だとされている。ペテルゴフの集中的な開発は、ピョートル1世がルイ15世の宮廷を訪問し、その郊外の数々の宮殿や公園に魅了された1717年以降に始まった。ピョートルは、ロシアにもヴェルサイユ宮殿に劣らない驚異的な建築物が必要であると判断した。その後1714年に始められたペテルゴフの再建工事のスピードは上がり、新たな作業が加わった。10年後、ここには既に、上の宮殿、モン・プレジール宮、マルリー宮殿が建てられ、下の公園の庭園アンサンブルが形成され、ユニークな噴水群が始動していた。フランス大使がルイ15世に宛てた書簡によると、邸宅の建設スピードは「驚愕させ、感嘆させる」とある。ピョートルがわずか10年の間に18世紀ヨーロッパで最も豪華な宮殿と噴水のアンサンブルの最高傑作をつくりあげたことは、彼の戦勝より印象づけた。

ペテルゴフの紋章

ペテルゴフ
総面積1000ヘクタールの公園群、5つの宮殿、10の噴水アンサンブル、数多くの絵画・彫刻・美術工芸からなる。ペテルゴフは常にペテルブルグ近郊の最も重要なアンサンブルであり、ヨーロッパ君主達が国の存亡や凋落を恐れ危ぶんでいた時でさえもその意義と輝きを失わなかった。

ペテルゴフ・アンサンブルの装飾が最終的に完成したのは、18世紀中頃エリザヴェータ女帝の時代にあたる。この時作業を率いていたのはバルトロメオ・フランチェスコ・ラストレッリである。1740年代、ラストレッリはピョートル時代の上の宮殿をヨーロッパの名だたる宮殿にひけをとらない皇帝宮殿にし、上の庭園を幾何学的に造園し、馬車の乗入口に豪華なバロック様式の門を建てた。

噴水「サムソン」 19四半世紀のペテルゴフ

大滝アンサンブルのネヴァのアレゴリー像

ラッパを吹くトリトン像

大滝「カスケード」

18世紀最大の噴水アンサンブル(3つの大滝と75の噴水を含む)である。高さ16mのプラットホーム(高台)に立つ大宮殿前の正面階段として装飾が施された。大滝の奥にはグロット(洞窟)が隠されている。これは18世紀人気のあった建造物で、洞窟に似せて造られた。大滝階段の段に流れている水は運河とフィンランド湾を結ぶ広い人工池「コフシュ(ひしゃく)」に流れ落ちる。ピョートル1世はコフシュの中心に20mの高さまで水を噴き上げる最も強力な噴水アンサンブルを設置した。

大滝「カスケード」の歴史は、1716年に遡る。フランスからロシアに到着したジャン＝バティスト・アレクサンドル・レブロン(1679-1719)は、ピョートル1世によって建築将官に任命される。レブロンはバルトロメオ・カルロ・ラストレッリ、ニコロ・ミケッチと共同で大滝とグロット(洞窟)の建設を担当する。

大滝の完成式典は、礼砲が鳴り響き、花火があがる中、ピョートル1世出席のもと1723年8月1日に盛大に執り行われた。アンナ女帝時代の1735年、中央噴水にポルタヴァの戦いのアレゴリー像が設置された(「獅子の口を引き裂くサムソン像」)。この像のモデルはピョートルの存命中にラストレッリが制作した。

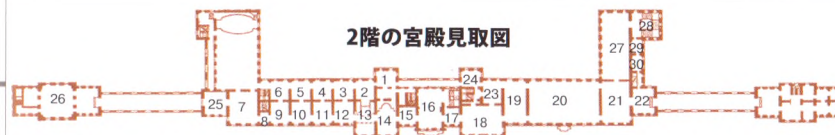
大滝内部のグロット(岩窟)

噴水「獅子の口を引き裂くサムソン」

大滝アンサンブルの「メデューサの首を持つペルセウス」

ゴットフリード・ネーレル「ピョートル1世の肖像画」
18世紀初頭

ペテルゴフの給水システム

当初ピョートル1世は、ペテルゴフに大滝と数基の噴水だけを造り、その水は上の庭園の人工池から供給する予定だった。が、1720年8月ペテルゴフから12km離れたところにあるロプシャ丘で豊富な水脈が発見された。1721年1月ピョートルはロプシャ〜ペテルゴフ間の運河設計に着手する。作業を率いたのはオランダとフランスに留学経験のある水力学者・技師ヴァシーリー・トゥヴォルコフだ。同年8月ロプシャ水路を水が「自然流動」で（土地の高さの違いで、上から下に）流れ、その後、ペテルゴフで集中的な噴水網拡張工事が始まり、新たに10基の噴水が設置された。ペテルゴフの水路は今でも活動しており、暖かいシーズンは無制限にペテルゴフの噴水に水がもたらされる。これは、最初から高価な給水システムを使って水を運んでいたヴェルサイユとの大きな違いだ。

大宮殿教会

大宮殿の紋章棟

大宮殿

1740年代エリザヴェータ女帝はラストレッリにピョートル時代の上の宮殿の拡張と改装工事を委任した。ラストレッリは細心の注意を払って古い建物を残し、それを新しい宮殿の核にして、上に3階部分を建て増し、建物両脇に2つの翼部を増築した。彼はそこから2つの対称的な1階の回廊を引き、その端に2つの棟（紋章棟と教会棟）を造った。ピョートル・バロックの面影を残していた宮殿は、広大な下の公園に君臨する巨大で荘厳な建物に変わった。

上の庭園
噴水「ネプチューン」
龍の滝（チェスの山）
大宮殿
噴水「トリトン」
大滝
噴水「くじら」
噴水「ピラミッド」
ローマの噴水
白樺並木路
噴水「サムソン」
獅子の滝
いたずらの噴水「きのこ」「樫の木」
噴水「アダム」
噴水「イブ」
マルリー並木路
下の公園
噴水「太陽」
宮殿「モン・プレジール」
モン・プレジール並木路
マリバンスカヤ並木路
パヴィリオン「エルミタージュ」
噴水並木路
海の運河
フィンランド湾
大滝「黄金の丘」
メナジェール噴水
マルリーの池
ヴィーナスの庭園
宮殿「マルリー」
防風堤

2階の宮殿見取図

1— ピョートル1世の書斎（樫の書斎）
2— 王冠の間
3— 第1予備室
4— 第2予備室
5— 第3予備室
6— 第4予備室
7— 青の大客間
8— 小さい通し間
9— 騎士の間
10— 軍旗の間
11— 書斎
12— 化粧室
13— ソファの間
14— しゃこの客間
15— 東の中国風書斎
16— 肖像画の間
17— 西の中国風書斎
18— 白の食堂
19— 謁見の間
20— 玉座の間
21— チェスマの間
22— 青の応接室
23— 通し間（サンデルス）
24— 食器の間
25— 秘書室
26— 教会
27— 舞踏の間
28— 正面階段
29–30 通しの間

噴水「ダナオスの娘」

彫刻

ペテルゴフは、いくつかの例外を除いて、ほとんど全ての彫刻に金箔が施されている世界で唯一のアンサンブルである。ピョートル大帝の時代、ペテルゴフの彫刻制作に携わったのは、レブロン、ミケッチとラストレッリ父で、彼らのスケッチをもとにイギリス、オランダ、ロシアで彫像が鋳造され、ペテルゴフで金箔が施された。1801年老朽化したバロック様式の鉛像は新しい銅像にかえられたが、一部は昔の像の型を使っている。

モン・プレジール庭園

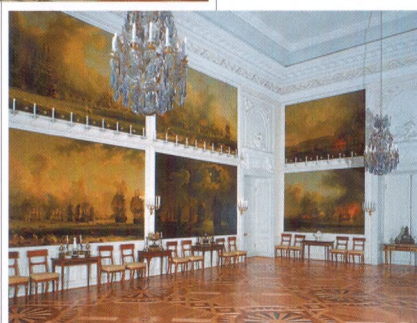
公園

ペテルゴフの公園は二つの主要なアンサンブルを含む。それは、上の庭園と下の公園だ。後者は大まかに、中心部（大滝、噴水並木道、そばを同じ小さい噴水がふき出している運河）、マルリー公園と「モン・プレジール」公園に分けられる。大宮殿に隣接している部分はイタリアのテラス式（段丘）公園をモデルに造られた。フィンランド湾に近い2つの公園（マルリーとモン・プレジール）はフランス式庭園だ。モン・プレジール宮殿のパルテール（装飾平庭）はオランダ様式でつくられた。19世紀に下の公園の東に、広大な風景式公園アレクサンドリアが隣接していた。

モン・プレジール庭園の鐘噴水「バッカス」

アブラハム・ストールク「町の船着場」1690年代

舞踏の間

ピョートル時代の上の宮殿改築の際、ラストレッリはエリザヴェータ・ペトローヴナ女帝の意向に従い、古い内装全てを残すようにつとめた。増築された中央棟（「肖像画の間」他）におかれた古い内装の部屋を見ると、後にいかに拡張されたかがよくわかる。ラストレッリは改築された宮殿の公用アンフィラーダ（続き部屋：控えの間、舞踏の間、玉座の間、謁見の間他）の装飾を施した。中央棟と東翼の部屋に女帝の私室が置かれていた。

チェスマの間

フィリップ・ハッケルト
「チェスマの戦い」1770年代

正面階段

正面階段

正面階段はラストレッリによって西翼に配置された。廷臣や女帝の客人はここからアンフィラーダを通って玉座の間までの儀式的な行進を始めた。階段には、金箔が施されたカリアティード（女像柱）とエリザヴェータ女帝の頭文字を支えているプッチ（羽のある少年像）が張り出している。洗練されたテンペラ画が飾られた壁は、1751年に制作された。天井画の主題「春」（1751年，画家B.タルシア）はエリザヴェータの偉業のアレゴリーである。それに加わるのが、素晴らしい金箔のカルトゥーシュ（渦巻装飾）、花輪模様、花瓶やアレゴリー彫刻である。

舞踏の間（明るい回廊）

ラストレッリは宮殿の公用アンフィラーダに豪華な上下二段窓の回廊ホールを入れた。このペテルゴフ宮殿の舞踏の間は西の翼廊（そで）全てにまたがっている（総面積270㎡）。天井画「パルナッソス」（1751年，画家B.タルシア）はエリザヴェータ女帝を芸術と科学の庇護者として称えている。

チェスマの間

この部屋はラストレッリによって公用アンフィラーダに続く控えの間として装飾された。1770年代エカチェリーナ2世はここをチェスマの会戦（1770年）を称える部屋にすることを決めた。その後ユーリー・フェリテンによって改装されたホールの壁を装飾したのは、ハッケルト作の12枚の油絵だ。それらは有名なエーゲ海のロシア艦隊の遠征を順番に描いている。アレクセイ・オルローフ指揮下のロシア艦隊は1770年6月25日から25日、チェスマ（トルコ）の会戦でトルコ艦隊を大撃破する。その時、エカチェリーナ2世の有名な寵臣グリゴーリー・オルローフの弟アレクセイ・オルローフは、女帝からチェスマ公の称号を授かる。

玉座の間

謁見の間

玉座の間

玉座の間（総面積300㎡以上）はラストレッリによって公用アンフィラーダの中で一番重要な場所として造られた。1777－1778年フェリテンは前任者の寄木細工の床だけを残し、その根本的な改築に乗り出した。玉座の間には、メンシコフの注文で製作されたピョートル1世の玉座がある。玉座の上にオランダ人画家ヴィギリウス・エリクセン制作のエカチェリーナ2世の肖像画（1762年）（p.17図参照）がひときわ目立っている。セミョーノフ連隊長の軍服を身に纏った女帝は、アンドレイ大綬をつけ、愛馬ブリリアントに重々しく跨っている。画家はロシア皇帝として即位後、近衛連隊長としてペテルゴフに来た凱旋時の女帝を描いた。ここにはブフゴリツの描いたピョートル1世、エカチェリーナ1世、アンナ女帝とエリザヴェータ女帝の肖像画もある。

謁見の間

エリザヴェータ時代に国家の小さいレセプション用の部屋として使われ、私室への通路の前にあった。謁見の間にはラストレッリが手がけた18世紀半ばの装飾が残っている。本物と偽物の窓と鏡は彫刻が施された金枠に縁取られている。トルクアート・タッソーの叙事詩「解放されたエルサレム」が描かれた天井画は、ラストレッリ推薦のイタリア人画家パオロ・バラリーニによって制作された。騎士リナルドがアルミダに自殺しないで自分の妻になるよう、頼んでいるシーンを描いている。

肖像画の間

青の大客間のエリザヴェータ・ペトローヴナ女帝の頭文字の組文字

青の大客間

白の食堂

青の大客間

18世紀半ばの資料によると、この部屋は食堂の間という名だった。ラストレッリの設計によって制作された内装は、金箔が施された彫刻、飾り幕や天井の装飾画（画家L.ドリーツキー）からなる。それらにはエリザヴェータ女帝の頭文字が組み込まれている。南東の角には大きいタイル張りの暖炉がある。客間では19世紀半ばの優れたフランスのブロンズ工であるフェルディナンド・バルビディエン作の棚が展示されている。

白の食堂

プライベートな意味合いを持つ正面部屋のアンフィラーダに置かれ、初期、ラストレッリによって内装が施された。1774-1775年フェリテンの設計によって、バロックから古典主義への移行時の様式で制作された浮彫の塑像が豊富な金箔装飾に取って代わった。テーブルの上はクリーム色の「女王」の食器セットが置かれてある。これはエカチェリーナ2世によって、1768年英国陶工ジョサイア・ウェッジウッドに注文され、彼の有名な工場「エトルリア」で作られた。

寝室

寝室

宮殿の中央（ピョートル）部にある。1770年インテリアはフェリテンの設計で改装された。部屋には当時流行していた「トルコ」の長椅子がある。これは伝承によるとロシア・トルコ戦争時、ポチョムキンがエカチェリーナ2世にトルコから送ったものだ。部屋の壁には18世紀の中国製絹が張られている。

中国風書斎

中央棟のこじんまりした2対の部屋は、1766-1769年ジャン＝バティスト・ヴァレン＝デラモートの設計により中国様式で改装された。壁の装飾のために古い黒い漆塗りの中国屏風が1双使われている。扉上部や窓の絵は、タイルがはめ込まれた装飾暖炉、高価な樹種アマランサス（高級家具材）、白檀、黒檀、レモン、オレンジの木の寄木細工の床と同様、ロシア人の職人が制作した。

西の中国風書斎

東の中国風書斎

西の中国風書斎内の中国の置物

大宮殿と上の庭園のパノラマ

噴水「ネプチューン」

30体以上の彫刻群からなる「ネプチューン」は、1650年代から1660年代にニュルンベルグで制作され、1780年代に皇太子パーヴェルによってガッチナ宮殿の装飾のために購入された。が、ペテルゴフに設置するように決められ、1738年から装飾池の噴水を飾っていたラストレッリ父作の「ネプチューンの4輪荷馬車」の場所に置かれた。

上の庭園は、ペテルゴフの他庭園の建設後、1724年に造られた。その時ここには既に、レブロンの設計で造られた中央装飾プール（庭園の5つの人工池で最大）とそれを挟んで対称的に造られた「長方形の池（54×45m）」と呼ばれる2つの池があった。ピョートル時代、上の庭園では一列に果物の木や実のなる潅木を植え、そこでの収穫物は皇帝の食卓にのぼっていた。1733-1739年アンナ女帝の命令で、ペテルゴフの噴水再建作業と同時に上の庭園を宮殿の入口前のパルテール（装飾平庭）にする作業が始まった。作業は建築家ゼムツォフ、ブランク、ダヴィドフ、彫刻家ラストレッリによって遂行された。時を同じくして、そこに、ピョートル時代に造られた池に沿って一直線上に2つの丸い池（メジェウームヌィとドゥボヴィー）がつくられた。職人レクレール、サウレムとイヴァーノフは、上の庭園の全ての池に噴水システムをとりつけた。噴水は2世紀に渡って再三取り替えられた彫刻で飾られている（ラストレッリ父のモデルで鋳造された「いるか」は除く）。1754-1760年建築家ラストレッリは庭園を拡張し、それを透かし編みの門のある精巧な鉄柵で囲んだ。鉄柵は、ラストレッリによって建てられた装いを凝らした両脇の紋章棟と教会棟とアンサンブルを形成している。

噴水「ネプチューン」

上の庭園

下の公園並木路と大滝

噴水「ピラミッド」

噴水「太陽」

噴水は、檻のある庭園メナージェレイヌィ（仏語. menagerie「動物園，獣の檻」）の池に設置された。ここではピョートル1世時代、白鳥や珍しい水鳥が飼われていた。エカチェリーナ2世時代、池は皇帝の水浴場になり、現在の様相になった。（Y.フェリテン設計）

噴水「ピラミッド」

8メートルの「小さい滝の水のピラミッド」は1721年から有名だ。ピョートル1世はヴェルサイユ宮殿の噴水「オベリスク」をモデルにこの噴水をつくった。細かい505本の水流は「ピラミッド」を独特な作品にし、それについて次のように記されている。「同じように大きく美しい噴水はない…どこにもだ」（侍従ベルフゴリツの日記，1721-1725年）

いたずらの噴水

かつてイタリアの公園でこれを見たスタンダールも驚いたという、突然足の下からピュッと吹き出して訪問者に水を浴びせかける噴水。異なる時代にペテルゴフに現れた。これは数多くのペテルゴフの余興の一つになり、客人や廷臣を楽しませた。

いたずらの噴水
「小さな樫の木」

噴水「太陽」

マルリー公園

下の公園西部のアンサンブル「マルリー」(マルリー公園)は、フランス革命時に破壊されたパリ郊外の有名な離宮の公園にちなんで名づけられた。ピョートル1世は実際、1717年にマルリー宮を訪れている。そこでスケッチした絵をペテルゴフのアンサンブル建設の際に用いた。ペテルゴフのマルリーの重要な飾りは大理石の滝「黄金の丘」で、この頂上からフィンランド湾とマルリーのアンサンブルが一望できる。

1720−1723年、アンサンブルの中心に池に囲まれた優美で上品な宮殿が建てられた。池ではかつて魚が養殖され、池の周りには、フィンランド湾からの風を防ぐ土塁や果樹園が設けられていた。簡素な二階建てのマルリー宮殿はピョートル1世のペテルブルグでのお気に入りの宮殿だった。ここには彼の図書室とギャラリーが保存されている。フィンランド湾に近いマルリー公園の東部には1721−1725年、マルリー宮殿と同じタイプのパヴィリオン「エルミタージュ」が建てられた。

滝「黄金の丘」

1721年ミケッチによってルネッサンス時代の「イタリア」階段をモデルに造られた「黄金の丘」(別称マルリーの滝)は約1世紀かけて建築・手直し作業が行われていた。一番上の段を装飾しているのはトリトン、バッカスとネプチューンの彫刻を頂く小さい壁で、その台座はバルトロメオ・カルロ・ラストレッリのモデルをもとに造られた口から水流をふき出す黄金の人面装飾だ。階段に沿って12対の大理石の彫像が設置された。一部は18世紀のオリジナルで、一部はその後にできた複製だ。「黄金」の滝を造ったのはミハイル・ゼムツォフで、彼は1730年代、各段に金箔の施された銅板をはった。

マルリー宮殿のインテリア

宮殿の1階と2階に8つずつ部屋がある。宮殿を設計したのは恐らくジャン＝バティスト・レブロンだが、実際に建設したのは、資料によると、ヨハン・ブラウンシュテインだ。インテリアは全て節約主義(装飾が少ない)で合理的だが、エレガントに装飾された。様々な色の石の床、樫の木のパネルによる壁がこの部屋を美しく見せている。雰囲気を加えているのは、ピョートル1世個人コレクションの17世紀から18世紀のオランダ、フランドル、イタリア巨匠の絵画だ。

「マルリー宮殿」の前室

「黄金の丘」

ペテルゴフ 下の公園

「龍の滝」上部のドラゴン像

龍の滝(チェスの丘)

パヴィリオン「エルミタージュ」

水を湛えた溝に囲まれ、溝に橋がかかっているエルミタージュは、宮殿建築物というよりはむしろペテルゴフの数多くの余興の一つだ。エルミタージュのバルコニーと窓の柵は、ピョートル1世の命令で、自身が指揮した旗艦「インゲルマンランド」を装飾していたものから複製がとられた。上の階全てにまたがるパヴィリオンの主要ホールは、四方を高くて幅広い窓ではりめぐらされており、その窓からフィンランド湾の景色が一望できる。主要ホールは船長室を思わせる。ここには持ち上げ式テーブルが設置され、大きな鐘の合図で、下階の厨房から上の階に食事が持ち上げられた。1759年エリザヴェータ女帝の治世にパヴィリオンの間の壁は17－18世紀の西ヨーロッパ画家の絵、イヴァン・ニキーチン作の「ポルタヴァの戦い」(1727年)の模写で飾られた。

パヴィリオン「エルミタージュ」

エルミタージュのパヴィリオンの間

龍の滝(チェスの丘)

ロプシャ丘で水脈が発見されたことにより、この滝の設置が可能になった。その後ピョートル1世は下の公園の東部にあるブラウンシュテインの小さい洞窟に小さい滝を造ることを決めた。1721年この建造物を造ったのはミケッチだが、ピョートルの存命中に滝は完成せず、龍や階段のチェス板の模様が入ったのは18世紀中ば近くになってのことだ。

獅子の滝

ペテルブルグの噴水で最も後期にできたものの一つ。Πの形をしているイオニア式柱の構造で、二段構えの噴水の中央に立てられた優雅な滝(噴水)は、1799−1800年アンドレイ・ヴォロニーヒンの設計によって造られた。噴水の下に座っている2体の見張りの獅子像にちなんでこの名がつけられた。

獅子の滝

ペテルゴフ 下の公園

下の公園の東部(モン・プレジール部)にはモン・プレジール、メナジェール、中国風、温室、ピラミッド、パルテールの6つの庭園がある。これらの庭は全て並木道で繋がれ、それぞれの庭園の中央に噴水が設置された。

モン・プレジール庭園

「モン・プレジール」宮殿の回廊

モン・プレジール

モン・プレジール宮殿(仏語. mon plaisir「私のよろこび」)はピョートル1世の日記録によると、ペテルゴフで最初に造られた。この優美な1階建ての宮殿は、海の運河の東のフィンランド湾岸に建てられ、ペテルゴフの下の公園東部の中心になった。宮殿の場所を選んだのはピョートル自身だ。宮殿の中央棟「テント」はブラウンシュテインの設計で1714-1716年に建てられた。1718年までに回廊のある左右翼部が造られた。回廊は小さいパヴィリオン「リュストガウズ」(独語. Lust Haus「幸せの家」)で閉じられている。施設の中には噴水「東」のある小さい庭がある。この東に別棟、来賓用棟、浴場棟、舞踏会棟がある。庭の西に温室があり、その場所に1748年バルトロメオ・フランチェスコ・ラストレッリがエリザヴェータ女帝のための別棟を建てた。後にエカチェリーナ棟と名づけられたこの棟は、1762年6月27日ここからエカチェリーナ・アレクセーヴナ(後のエカチェリーナ2世)が夫ピョートル3世を退位させ、自分が帝位に就くためにペテルブルグに向かった場所として有名だ。

主棟のインテリア

宮殿の中央の部屋は公用ホールで、このホールの左右に3部屋ずつ隣接している。東は漆(中国風)の書斎、厨房、食器の間で、西は秘書室、寝室、海の書斎だ。インテリアの特徴は、高級木材パネルの外装、バルトロメオ・カルロ・ラストレッリによってなされた趣向を凝らした彫刻装飾とピリマンのスケッチをもとにモスクワ・クレムリンの武器庫の画家達によって製作された見事なテンペラ画だ。それらはピョートルのコレクションである17−18世紀の絵画と見事に調和している。

「モン・プレジール」宮殿の公用ホール

モン・プレジール庭園から見るエカチェリーナ棟(前方は噴水「東」)

モン・プレジール庭園

「モン・プレジール」宮に5つの噴水があるパルテール(装飾平庭)庭園が隣接している。その噴水の中央にあるのが25本の水流の「束」だ。噴水「束」の周りに4つの鐘噴水(水が表面を鐘の形を作りながら流れ落ちている)アポロン、山羊を連れたファウヌス、バッカス、プシュケーの姿の金箔像がある。5つの噴水群から成る作品はピョートル1世時代に現われ、ピョートルの素描とニコロ・ミケッチの設計図をもとに制作された。後に噴水はペテルブルグの他の噴水同様に、何度も一新された。1817年ピョートル時代の彫像は芸術アカデミーの石膏型から鋳造したブロンズ製に取り替えられた。最後の大修復作業の過程で、モン・プレジール庭園は13世紀の設計図をもとに修復された。

エカチェリーナ棟のインテリア

1780年代、エカチェリーナ棟内部の部屋は、統治時代ずっとここに住んでいたエカチェリーナ2世の希望で建築家ジャコモ・クヴァレンギによって改装された。これらの古典主義のインテリアは、絵画的なロココ様式のモン・プレジールのアンサンブルとはあまり調和しなかった。ここで一番大きいホールは黄色の間だ。現在この中では帝室陶磁器工房で製作されたグーリエフの食器セットが展示されている。D.A.グーリエフ伯爵が工場主で、工場が最も繁栄した時代のものだ。

エカチェリーナ棟の黄色の間

ヤコブ・トレンヴリート
「朝食」17世紀末−18世紀初
オランダ

かつてメンシコフのモンクラージュ(「私の勇気」)宮殿があり、その後、アンナ女帝の狩猟用地があった無人の地に、19世紀、下の公園を3つの門のある石壁で分ける新しい公園が設けられた。この領地はニコライ1世のプライベートな別荘地になり、彼はこれを1829年妻である皇后アレクサンドラ・フョードロヴナ(1798–1860年)に贈った。そうして、アレクサンドリアに、英語風にコテージ(cottage)と呼ばれる英国ゴシック様式の家が建てられた。これはあまり大きくない20室の建物だった。コテージの周りに115ヘクタールの広大な公園が設けられた。

アレクサンドリアにおける全ての建築作業を取りしきったのは、当時ヨーロッパで絶大な人気を博していたネオ・ゴシックの擁護者、スコットランドの老建築家アダム・メネラス(1740年末または1750年末–1831年)だ。1826年メネラスは皇帝に公園建設のために2000本の大木、9000本の小木、3000本の低木(灌木)を購入し、植えたと報告した。1828年までにアレクサンドリアには30種、3万以上の植物があった。これらの労働の結果、フィンランド湾岸はリヴィエラに似、かつロシアの特徴をもったものになった。

公園は一連の建物(武器庫、白の塔等)で飾られた。ここにベルリンの建築家K.シケールによって設計され、「ゴシック・カペラ(礼拝堂)」と呼ばれた聖アレクサンドル・ネフスキー教会が建てられた。1832年礼拝堂のためにヴァシーリー＝デムート・マリノフスキーのモデルをもとに銅板から天使像、使徒、福音伝道者、聖母子等43体の彫像がつくられた。ペテルブルグのガラス工場でステンドグラス等用のガラスが製作された。

宮殿「コテージ」
ニコライ1世時代の宮廷の華やかな生活について、アストリフ・ド・キュスチン侯爵は次のように書いている。ヨーロッパのどの宮廷も宝石の豊富さ、華やかさの豊富さ、多様さと礼服の豪華さ、荘厳さと調和さで(ここの生活と)比べることはできない」しかし快適なコテージの部屋では、皇帝一家は宮廷生活と対比をなす完全に慎ましい生活を送っていた。宮殿の内装を飾っているのは、高級木材のエレガントな家具と帝室御用達陶磁器工房とガラス工場で製造された食器(コラールとエトルリアの食器セットとゴシック様式の皿等)だ。

「コテージ」宮殿の客間

女帝の書斎

小書斎

i p. 164

ストレリナの屋敷は18世紀初めに創立される。その時大北方戦争の結末が混沌としている中で、町中や近郊の全ての屋敷は、食料補給等、特に実用的な役割を果たしていた。ストレリナに関する最初の言及はピョートル1世の1706年に遠征日誌に書かれてあり、「皇帝はメンシコフにストレリナの村に旅の木造の家を建てることを命じた」とある。ポルタヴァの会戦(1709年)後、初めてピョートル1世は「では、サンクト・ペテルブルグ建設基礎の石を置こう！」と宣言し、ストレリナで新しい皇帝宮殿の基礎工事が始まった。

初期、1716年春にペテルブルグに到着したバルトロメオ・カルロ・ラストレッリの指揮で、フィンランド湾とストレルカ川の間の高さ12mの自然段丘が平らにされた。フィンランド湾に面している段丘の斜面に段をつけ(3段)、フィンランド湾岸のぬかるんだ低地の灌漑作業が行われ、フィンランド湾方向に3本の運河が掘削された。数ヵ月後ロシアにレブロンが到着した。彼は1717年初めに宮殿と公園の設計図を国外の(ロシアの)ピョートル1世に送ったところ、承認され、建設に採用された。1719年にレブロンが急死した時、彼に代わったのがニコライ・ミケッチで、自分の「住居部建築」設計図を準備していた。しかしこの時までにストレリナの興味を失い、ペテルゴフ建設に全力を傾けていたピョートル1世は、建設を凍結させた。建設が再開したのはエリザヴェータ、それからエカチェリーナ2世の治世だ。

1797年パーヴェル1世は未完のストレリナを息子コンスタンチンに譲り、彼の死後、領地は彼の子孫の世襲領地となり、コンスタンチンと呼ばれた。その建設に有名な建築家(ヴォロニーヒン,ルスカ)が呼ばれたが、アンサンブルは最後まで完成しなかった。何度も火災に遭い、再建を繰り返した宮殿はしだいに18世紀の素晴らしい外観を失った。かつての姿についてはマハーエフの版画でのみ推察することができる。2003年までに終わった修復作業後、コンスタンチン宮殿は議会宮殿になった。

ストレリナの紋章

2003年までに廃墟から復興し、完全に修復されたコンスタンチン宮殿は、議会宮殿という名でロシア大統領府の管轄下におかれている。

会談用白の間

客間

ツァールスコエ・セロー

p. 165

正門から見るエカチェリーナ宮殿正面

ツァールスコエ・セローのアンサンブルの成立は、三人の女帝、エカチェリーナ1世、エリザヴェータ・ペトローヴナ、エカチェリーナ2世の名前と関係がある。

最初の宮殿がサールスカヤ(ツァールスコエ・セローの旧称)村にできたのは、1710年にピョートル1世がこの領地をエカチェリーナ妃に贈ってすぐの18四半世紀のことだ。同世紀中頃、母エカチェリーナから慎ましい領地を受け継いだエリザヴェータはこれを公用の郊外宮殿にすることを決める。初期の作業はクヴァソフ、ゼムツォフとチェヴァキンスキーに任せられたが、実際の建設作業が行われたのはバルトロメオ・フランチェスコ・ラストレッリが率いた1752年だ。ラストレッリによって建てられた新しい巨大な宮殿は、母の記念に昔の名前(ツァールスコエ・セロー「皇帝の村」)を残し、エリザヴェータ時代の象徴となり、ペテルブルグ郊外のどの宮殿もかなわない、豪華で、巨大な宮殿になった。宮殿の南東ファサード前にラストレッリは17世紀初めに設置された幾何学式庭園を再建した。その中に二つの小宮、エルミタージュとグロット(岩窟)を入れた。宮殿の南西にはアンドレイ・ナルトフによって、ロシア初の建築的な装飾カターリヌィエ・ゴールキ(そり山)(1753–1757)が建てられた。

エリザヴェータ・ペトローヴナ女帝の頭文字のあるツァールスコエ・セローの紋章

ツァールスコエ・セローは18世紀から19世紀にかけて、ペテルゴフと主要な郊外の皇帝住居のステータスをわけた。ラストレッリによって建てられた素晴らしいアンサンブルは領地を18世紀建築の珠玉の名品にした。ロシアにとってツァールスコエ・セローはアレクサンドル・プーシキンという名前とも密接に結びついている。プーシキンは1811年12歳の時、ここに創立されたリツェイ(高等貴族学校)に編入した。

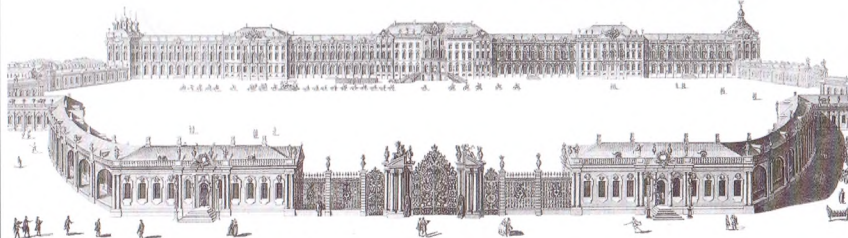
アンサンブル史の次の段階は偉大な古典主義者チャールズ・キャメロン、ユーリー・フェリテンとジャコモ・クヴァレンギの名に関係がある。ツァールスコエ・セローを公用住居として使うことを決めたエカチェリーナ2世の注文で、彼らは宮殿公園の敷地を増やし、それを新しく古典主義様式の建築物で飾った。その時ここにエキゾチックな中国村と特に装飾の無い、簡素なアレクサンドル宮殿ができた。

フランス式庭園の方向から見る宮殿

エカチェリーナ宮殿の黄金のアンフィラーダ

エカチェリーナ宮殿

宮殿の基盤の長さ300mのシンプルな棟は、表面に豪華な彫刻が施されており、見る者を驚嘆させる。装飾効果をあげるためにラストレッリは白と青の漆喰と金箔を用いた。宮殿の北西ファサードは半円の棟で囲まれた中庭に面し、南東ファサードは鏡の池のある幾何学式庭園に面している。

エフゲーニー・ランセーレ
「ツァールスコエ・セローのエリザヴェータ・ペトローヴナ女帝」1905年
(国立トレチヤコフ美術館, モスクワ)

N. チェルナコフ, E. ヴヌーコフ, P. アルテミエフ
「エカチェリーナ宮殿の中庭」
1761年 ミハイル・マハーエフの下絵による版画

エリザヴェータ・ペトローヴナ時代の宮殿

「高貴な男女の顔は宮殿のアパルタメントを満たし、装飾品と宝石で輝いている。アパルタメントの美しさとその豊富さは驚くほどだ。素晴らしい光景を非常に美しく、豪華な装いの4人の貴婦人が遮った…。突然…暗闇に1200本の蝋燭の灯がともった。灯が鏡に映り、広間がより一層明るくなった。80人の音楽家のオーケストラが演奏を始めた。最初のメヌエットの時、ドアを開ける音にぶい音が聞こえていた。何か壮大なものが起きる前触れだ。扉がすばやく開け放たれ、我々は輝かしい玉座に座している女帝陛下を眼にした。玉座から離れ、女帝は大広間に入った。近親にとり囲まれて…。舞踏会は宮廷財務長官が晩餐の準備ができた旨を女帝に報告しに来た11時まで続いた。皆、非常に優雅に装飾が施され、900本の蝋燭に照らされた広間に移った。そこでは数百人分の食器の装飾、テーブルが人目をひいた。ホールの二階桟敷で声楽と楽器のコンサートが始まった」(フランス外交官デ・ラ・メッセリエール伯爵「エリザヴェータ・ペトローヴナの宮廷の舞踏会について」1757年)

エカチェリーナ宮殿ファサード細部

古い(フランス式)庭園

エカチェリーナ1世の時代に設けられた(ここから「古い」という名前がついた)。ラストレッリはこれを再建し彫刻で飾った。彫刻の一部は夏の庭園(p.131)から運んできたものだ。ここでエカチェリーナ2世の時代に建設されたパヴィリオンに新しいものが加えられた。その中の一つが上の浴場(「陛下の風呂場」, 建築家I. ネーロフ, 1777年)等だ。

ピエトロ・バロッタ
「ガラテア像」
18世紀初め

F.=G. パリジエン
「昔のツァールスコエ・セロー庭園とサドーヴァヤ通りの風景」
1760年

ツァールスコエ・セロー

正門の鉄柵の一部

琥珀の間

リツェイ（高等貴族学校）中庭
「プーシキン像」1900年
彫刻家ロベルト・バッハ

宮殿教会
のクーポラ

キャメロン・ギャラリー

琥珀の間

琥珀の書斎用の琥珀装飾板は、ピョートル1世への贈り物としてプロイセンからロシアにもたらされたが、使用されたのはエリザヴェータ治世になってからのことだ。その時ラストレッリは女帝のために、冬宮に琥珀の間を造った。その後、冬宮は取り壊され、琥珀の間は新宮殿建設の間、ツァールスコエ・セローのエカチェリーナ宮殿に移され、大祖国戦争時までそこにあった。

キャメロン・アンサンブル

冷浴場、瑪瑙の間とキャメロンの名がついたギャラリーで形成している。日常生活の性格を持つこれらの建造物は、ローマの公衆浴場を模して造られ、ウラルとアルタイで採掘された色とりどりの鉱物で装飾された。その独特の加工技術は1780年代のロシア職人のものだ。

ツァールスコエ・セロー・リツェイ（高等貴族学校）

1811-1843年、宮殿にアレクサンドル1世によって創立されたリツェイ（男子高等貴族特権学校）があった。この学校は将来の高級官僚の育成を課題としていた。第1回生徒募集に若きアレクサンドル・プーシキン（1799-1837）もいた。彼はここで数年を過ごし、一連の素晴らしい作品にツァールスコエ・セローを取り上げた。

宮殿教会

バルトロメオ・フランチェスコ・ラストレッリは宮殿教会建造の際、17世紀までにあった修道院の食堂建設時の手法を用いた。しかし豊富なバロック装飾は教会に完全に非宗教的な性格を与えている。隆起のある玉ねぎ頭のクーポラ、金箔が施された天使像、装飾花瓶等があるエカチェリーナ宮殿の教会は、建物の中で最も美しく完成した。

時計「平和と富」
職人J.=L. ピエール F.ブーシェの下絵による 1770年、パリ

正面階段

黄金のアンフィラーダ

主棟のアパルタメントの重要な装飾は、豪華な黄金装飾で縁取られた扉（入口）のいくつかの広間（回廊）だ。アンフィラーダ（続き部屋）は、かつてはラストレッリによって宮殿の南側面に造られた正面階段の前から始まっていた。18世紀末エカチェリーナ2世の希望でチャールズ・キャメロンは、正面階段を建物中心（当時中国の間があった場所）に移した。それによって初期のラストレッリの設計を壊してしまった。キャメロンの木造階段は1860-1861年、モニゲッティの設計でバロックの模造様式の大理石製階段にかえられた。

大広間

この約1000m²の巨大な上下二段窓のあるホールはヨーロッパのバロック・インテリアの傑作の一つに数えられる。ホールの巨大な天井画は1752-1754年ヴェネツィアの遠近画の巨匠ヴァレリアーニによって描かれた。

絵画の間

18世紀この比較的小さいホールは外交レセプションや音楽の催しのために使われていた。1757年夏、7年戦争の勝利後、征服したプロイセンの町の旗と鍵が届き、ここで祝典が行われた。ホールの壁にかけられた絵画の主要部分（130枚のうち112枚）はエリザヴェータ女帝の命令で1745年プラハとボヘミアで画家ゲオルグ・グロートによって購入された（1万2千ルーブル）。その中にはヴィット、オスターデ、ダヴィド・テニールス、ド・ゲム、ヤン・フェイト、ナッチエ、クルトゥア（ブルギニオン）、ブランシャール、ルーク・ジャオルジャーノといった一流の絵画があった。中でも特別な位置を占めているのがピョートル1世の注文で書かれたデニ・マルテン弟の「ポルタヴァの戦い」と「レスナヤ村の戦い」だ。

黄金のアンフィラーダ（ラストレッリのアンフィラーダ）

黄金のアンフィラーダの装飾の一部

大広間

絵画の間

騎士の食堂の間

プライベートな主私室

18世紀の「プライベート・ルーム」の概念は、気の置けない近親や友人しか入ることのできない部屋ということだった。エカチェリーナ宮殿内のプライベート・ルームは、正面階段の北にあるエリザヴェータ・ペトローヴナのためのいくつかの食堂、客間、絵画の間と琥珀の間のアンサンブルだ。これらは「内輪の」面会、小会議や「室内」舞踏会のために使われた。宮殿のこの部分はだ円の玄関の間で終わり、その後エカチェリーナ2世によって造られた「私室」への通路が続く。

騎士の食堂の間と白の主食堂

ラストレッリの装飾が残っている2つの対称的なホールである。二つのホールの最も顕著な飾りは大量のタイル張りの暖炉で、エカチェリーナ宮殿の主なホールには全て暖炉があった。騎士の食堂の間の晩餐会用テーブルはE(エリザヴェータ女帝の頭文字)の形になっている。

柱の間

これらも同じように装飾されたホールだ。木いちごの柱の間とそれと対を成す緑の柱の間の装飾ににラストレッリはガラスの付け柱を加え、その下に木いちご色と緑の薄紙(くしゃくしゃのアルミニウムの紙)をはり、ガラスを通して見えるようにした。

木いちごの柱の間

白の主食堂

マリヤ・フォードロヴナ妃の寝室

私室

宮殿の住居部の内装はエカチェリーナ2世の命令でチャールズ・キャメロンによって改装された。彼は教会前のホールの場所にいくつかの離れ部屋を造った。その中に緑の食堂(イヴァン・マルトスの浮彫のある「ポンペイ」様式)、青の客間、中国風青の客間、マリヤ・フォードロヴナ妃の寝室のような傑作がある。これらはエカチェリーナ自身と「子供たち(パーヴェル皇太子とマリヤ・フォードロヴナ妃)」の部屋とされた。1817年スターソフの設計によってアレクサンドル1世の主書斎が造られた。

騎士の食堂の間の暖炉

緑の食堂

青の客間

前室
(下図は張布の刺繍)

ツァールスコエ・セロー
琥珀の間

フリードリヒ・ウィルヘルム1世は同盟の印として、1717年ピョートル1世に琥珀の装飾板セットを贈った。それは琥珀の書斎と呼ばれ、アンドレアス・シュリュッテルの設計でプロイセンのベルリンの宮殿の一つを飾るはずの物だった。ピョートルの返礼は55人の長身のてき弾兵部隊だった。

ロカイユ（貝殻）枠装飾の天井画

琥珀の間はヒットラーがリンツに創立を夢見ていた「アーリア人芸術博物館」の最大の目玉になるはずだった。1944年ケーニヒスベルグで失われた装飾板は20世紀の最も有名な伝説の一つになった。

琥珀の間の黄金装飾の一つと琥珀装飾板の一部

琥珀の装飾板はそのままペテルブルグで放置されていた。1746年エリザヴェータの命令でラストレッリの設計で増やされ（ほとんど3分の1の装飾板が新たにつくられた）旧冬宮の謁見の間のために設置された。1755年新宮の建設が始まったとき、謁見の間の内装はツァールスコエ・セローに移され、そこでラストレッリは琥珀の間として歴史に名を刻む豪華なホールの内装を手がけた。1941年琥珀の間の装飾はナチ党員によって略奪され、ケーニヒスベルグ（現在のカリーニングラード）に運び出された。1944年英国軍の爆撃後、装飾板は消え去り、その後の運命については知られていない。1979年からツァールスコエ・セローの修復家達は琥珀の間の再建作業を行い、作業は2003年晴れやかな式典で終了した。

「フィレンツェ派モザイクの装飾パネル」 18世紀 イタリア

「枝付燭台時計」
1750年頃、パリ

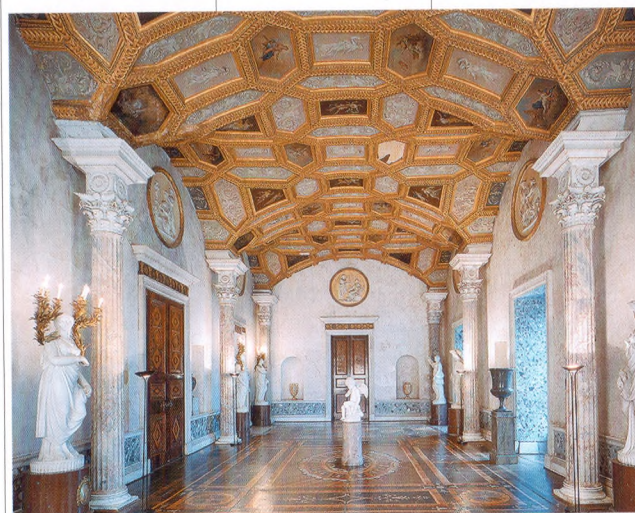
「琥珀枠のフィレンツェ派モザイク画の一つ」

キャメロン・ギャラリーの柱廊玄関

冷浴場の建物

フランス式庭園

1720年代にエカチェリーナ2世のために宮殿前にフランス式庭園（別称：古い庭園）が設けられた。これはフランスの幾何学式様式でつくられ、同時期、庭園の敷地に二つの対称的な「鏡の池」がつくられた。また、ダムシステムで、ヴァンガーザ川の真ん中に、島のある「上の池（大池）」が造られた。18世紀半ばエリザヴェータ・ペトローヴナ女帝の命令で庭園は拡張され、再建され、彫刻で飾られた。ラストレッリの設計によるとここに二つのパヴィリオン、エルミタージュとグロット（岩窟）が建てられ、南西境にカターリヌィエ・ゴールキが造られた。これらの整備建設のためにラストレッリはピョートル時代の有名な機械技師アンドレイ・ナルトフの図面を用いた。エカチェリーナ2世時代、1770年代建築家ネーロフ兄弟はフランス式庭園に、エルミタージュ台所（隠れ台所）、上・下の浴場等の実用的な建物をつくった。

上の浴場

2対の鏡の池の片岸に1777年にイリヤ・ネーロフの設計で造られた上の浴場（「陛下の風呂場」）19世紀まで実際に使われていた。宮殿のミニチュアのような外観の建物には浴場、蒸し風呂の間、釜焚き人の部屋、休むための8面の中央ホールがある。そこの壁画はネロ皇帝の有名な黄金屋敷のフレスコ画を再現している。

キャメロン・ギャラリーと冷浴場

キャメロン・ギャラリーは、キャメロンによって1770年代 −1780年代に造られたこのギャラリー、パヴィリオン（瑪瑙の間）のある冷浴場、公園に通じるブロンズ像で飾られたパンドゥス（傾斜路）のあるアンサンブルである（ブロンズ像は後に古代ギリシャ・ローマモデルのブロンズの照明器具にとりかえられた）。

冷浴場

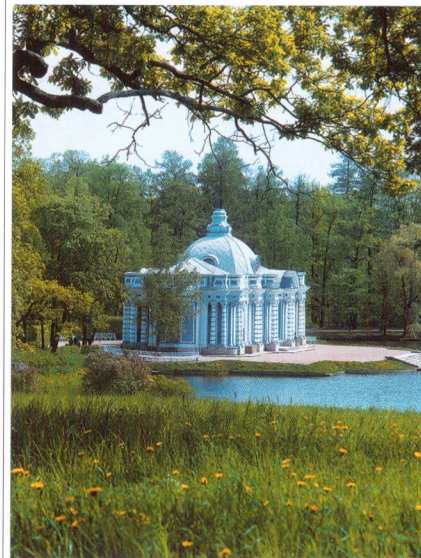
キャメロンによってポンペイ様式とよばれるローマ時代の建築様式で建てられた。建物の下の階には水浴場、浴場、ロシアの蒸し風呂が設置され、上の階にはエカチェリーナ2世のために休養と仕事用に6部屋（瑪瑙の間）が造られた。ギャラリーからこれら部屋には吊り庭園を通って行くことができた。瑪瑙の間の装飾の際、キャメロンは職人達の手で、輝くまで磨かれた加工碧玉を使用した（表面積約200㎡）。部屋の二つの壁はウラゾフと呼ばれる暗赤碧玉で塗装され、18世紀は肉の瑪瑙（肉のような色のため）と呼ばれた。（ここから「瑪瑙の間」という名前がついた）

瑪瑙の間の大ホール

チェスマの記念柱

チェスマの記念柱

アントニオ・リナルディによってエカチェリーナ公園の大池のそばに立てられた柱は、ロシア・トルコ戦争におけるロシアの勝利を称えるツァールスコエ・セローの多くの記念碑の一つだ。記念碑には1770年代に造られた廃墟の塔、モレイスカヤ柱、クリミアの記念柱、カグーリスキーオベリクス、トルコのキオスク、トルコの滝がある。

パヴィリオン「エルミタージュ」

パヴィリオン「グロット（岩窟）」

上の浴場が見えるフランス庭園の一角

ルスカのテラス

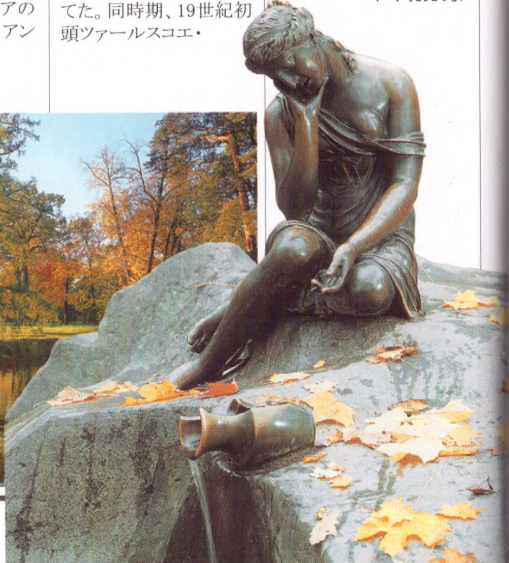
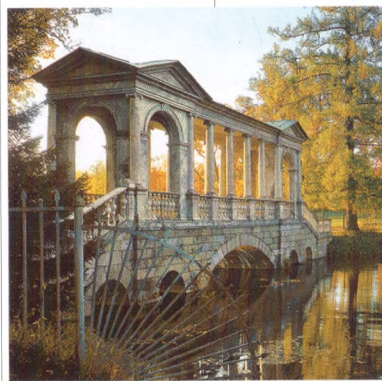
パヴィリオン「トルコ浴場」
(右はチェスマの記念柱)

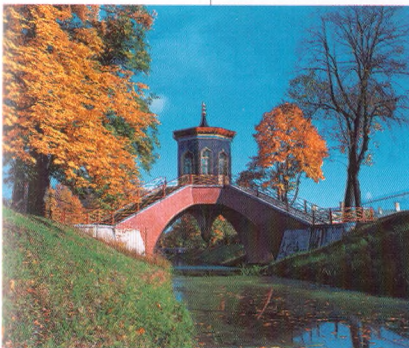
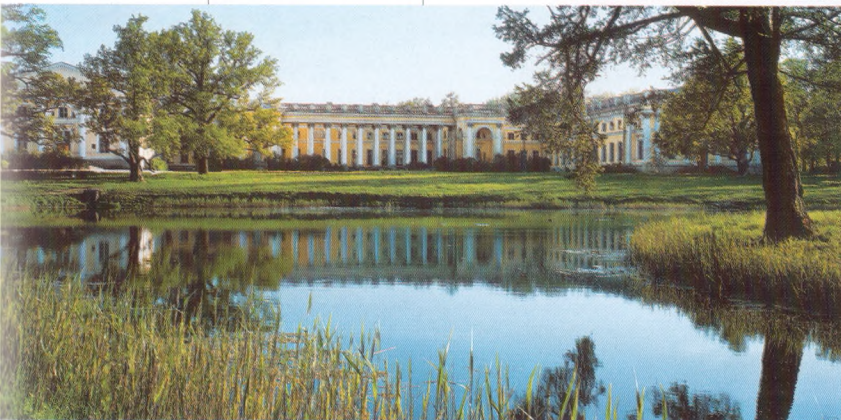
エカチェリーナ公園

公園のほとんど大部分の絵画的な場所は、エカチェリーナ2世時代に造られたものだ。建設を任されたのはジョン・ブッシュと建築家ヴァシーリー・ネーロフ、ヴァシーリーで・ネーロフの息子達イリヤとピョートルが助手を務めた。公園には「パッラージオ」と呼ばれる橋、ロマンティックな廃墟の塔、ロシアの戦勝を称える一連の記念碑が建てられた。

パッラージオ橋(別称:大理石橋)はシベリアの大理石で制作され、アンドレイ・ディ・ピエトロ・パッラージオ(1508-1580)の設計で建てられたことで有名だ。噴水「娘と牛乳つぼ」(1816年,建築家P.ソコロフ)は有名なラ・フォンテーヌの寓話「牛乳しぼり女と牛乳つぼ」を描いている。割れた牛乳つぼの前で悲嘆にくれている娘像は、丘の斜面のそばに湧き出ているツァールスコエ・セロー唯一の天然泉の水の流れを装飾している。公園の西境、並木道に沿って、中国風パヴィリオンと「大きなきまぐれ(カプリーズ)」橋がある。1808-1810年建築家ルイージ・ルスカはラストレッリによってカターリヌィ・ゴールキに設計されたパヴィリオンの場所に巨大なテラス(ルスカのテラス)を建てた。同時期、19世紀初頭ツァールスコエ・セローのエカチェリーナ時代の戦争記念碑に対ナポレオン戦争の勝利を称える「親愛なる我が戦士達によって」門が加えられた。

19世紀半ば、大池の南岬にパヴィリオン「トルコ浴場」(1850-1852,建築家 I.モニゲッティ)が建てられた。パヴィリオンは一連のトルコとの連戦(1828-1829)を終結したアドリアノープルの講和が称えられた。パヴィリオン内部には噴水のある白い大理石の人工池があり、トルコからもたらされた詩が書かれた大理石板が保存されている。

噴水「娘と牛乳つぼ」
(「牛乳売り」)

パッラージオ橋

中国の村

エカチェリーナ2世はツァールスコエ・セローに中国様式の公園パヴィリオンを造るだけでは満足できず、全体的な「中国」アンサンブルをつくることを考えた。1782-1796年建築家キャメロンとヴァシーリー・ネーロフによって宮殿の北、エリザヴェータ時代の幾何学式庭園の場所に造られたアンサンブルは、中国の村と名づけられた。当時ヨーロッパの建築家の中で、実際に中国に滞在したことがあったのは英国人ウィリアム・チャンバース卿だけだった(ロンドンの有名なサマーセット・ハウスと王立植物園キュー・ガーデンズの中国風パゴダの設計者)。そのためツァールスコエ・セローのパヴィリオンと建物全ての設計は、当時あった絵から模写され、中国建築の構造的な特徴は当然無視された。ここからツァールスコエ・セローの「中国風」建物の娯楽性と様式的な芸術性が生まれた。エカチェリーナ2世の死後、中国村の建設作業は中止されたが、1817-1822年建築家ヴァシーリー・スターソフが村を再建し、その後建築物は客人のアパルタメントとして使用されるようになった。1822-1825年ニコライ・カラムジンはここで何巻もある「ロシア国家史」を執筆した。

中国の村

「大きなきまぐれ」橋

アレクサンドル宮殿と公園

1792年に建てられたアレクサンドル(新ツァールスコエ・セロー)宮殿はエカチェリーナ2世によって、彼女の溺愛する孫アレクサンドルの宮殿に定められ、ドイツ辺境伯バデン=バデンスキーの娘、大公妃エリザヴェータ・アレクセーヴナ(1779-1826)との結婚に際して贈られた。ジャコモ・クヴァレンギによって設計された建物の建設は1796年5月に竣工した。アレクサンドル1世がこの屋敷に住むことはほとんどなかったが、後にツァールスコエ・セローで生まれた彼の息子ニコライ1世はこの宮殿を愛し、皇帝の住居としての地位を与えた。ここには建築家メリツェルによってモダニズム様式でつくられた私的なアパルタメント(内部は木製)が保存されている。

アレクサンドル宮殿の
ニコライ2世の客間

アレクサンドル宮殿

p. 165

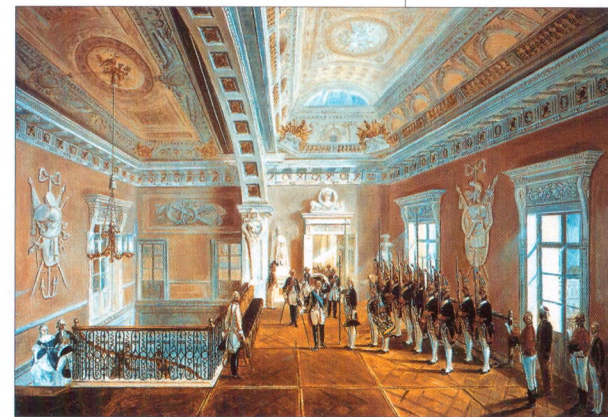
パヴロフスクはツァールスコエ・セローの5キロ南の風光明媚な場所に位置している。そこではかつて野鳥や小動物が多く生息するツァールスコエ・セローの狩猟用地で、皇帝の狩の時には馬の蹄の音、猟犬係の叫び声、猟銃の音、犬の鳴き声が響いていた。

1777年、総面積約535ヘクタールのこれらの土地はエカチェリーナ2世によって初孫アレクサンドルの生誕祝いとして、皇太子パーヴェルに贈られた。新しい屋敷建設作業に融資したエカチェリーナ2世はその屋敷の建築責任者にスコットランド人ジェイムス・キャメロンを任命した。キャメロンはここに、啓蒙時代の息吹が感じられる優美な離宮（ヴィラ）を建てた。素晴らしい公園に囲まれたこの場所は、休息や知的な気晴らしに理想的な場所だった。

1786年以降パヴロフスクの仕事を率いたのは、パーヴェルのヨーロッパ外遊旅行から連れて来られた建築家ヴィンツォ・ブレンナだ。彼は宮殿の公用インテリアの大部分の改装をし、1796年にパーヴェルが即位した時、宮殿の側面にギャラリーとフリーゲリを増築し、そこにいくつかの素晴らしいインテリアを造った。同時にブレンナは優れた劇場装飾家ゴンザーゴと共同でパヴロフスク公園の整備された部分を拡張し、それに当時流行していた神秘性とロマンティック性を与えた。

1796年パヴロフスクは正式に皇帝の居住となったが、パーヴェルの死後（1801年）は寡婦となった皇后マリヤ・フョードロヴナのお気に入りの夏の屋敷になった。

パヴロフスクの紋章

サンクト・ペテルブルグから30km離れたところにあるパヴロフスクの歴史的建物は、全て「同じ様式」であることで有名だ。宮殿と公園を含むパヴロフスクの全建造物は、1770年末から1800年代初までの比較的短い期間につくられ、その後改築が行われることはなかった。

G. シュヴァルツ「パーヴェル1世時代のパヴロフスク宮殿 メイン・ロビーの衛兵交代式」1848年

パヴロフスク宮殿のギリシャの間

パヴロフスク宮殿の正面ファサード

宮殿見取図

1— フランス風客間
2— 舞踏の間
3— 古い客間
4— ビリヤードの間
5— 白の食堂
6— 角の客間
7— 新しい書斎
8— 共用の書斎
9— 木いちごの客間
10— 玄関の間
11— マリヤ・フョードロヴナ妃側近控え室
12— 付け柱の書斎
13— 書斎「灯り」
14— マリヤ・フョードロヴナ妃の化粧室
15— 寝室
16—「テント」
17— エジプト・ロビー

18— 正面階段
19— メイン(上の)・ロビー
20— イタリアの間
21— パーヴェル1世の側近控え室
22— パーヴェル1世の化粧室
23— ロッシの図書室
24— 小書斎
25— パーヴェル1世の図書室
26— 絨毯の間
27— 戦争の間
28— ギリシャの間
29— 平和の間
30— マリヤ・フョードロヴナ妃の図書室
31— マリヤ・フョードロヴナ妃の小客間
32— 主寝室
33— マリヤ・フョードロヴナ妃の化粧室
34— 女官の間
35— 第一通し間
36— 第二通し間
37— 絵画ギャラリー
38— 第三通し間
39— 主食堂(大玉座の間)
40— オーケストラの間
41— 食器部屋
42— 騎士の間
43— 教会
44— 騎馬隊の間
45— 前室

ハンス・キュゲリヘン「家族に囲まれたパーヴェル1世」1799年(?)

パヴロフスク宮殿

チャールズ・キャメロンによって有名なヴィラ・ロトンダを見本に設計された。ヴィラ・ロトンダは1552年アンドレイ・パッラージオによってヴェニス近くのヴィチェンツァ丘の上に建てられた別荘だ。宮殿の基は、柱廊玄関があり、クーポラを頂いたほぼ立方体の主棟だ。パヴロフスク宮殿がルネッサンス時代のヴィラ・ロトンダと違っている部分は、1790年代初めヴィンチェンツェ・ブレンナによって2階に増築された半円形の回廊だ。ブレンナはパッラージオのアイディアより、フランス・アンピール様式の創始者ペルシエやフォンテンによって作り上げられた形式に深く傾倒していた。

パヴロフスク宮殿の公用インテリア

ブレンナによってルイ16世の様式で設計された。特別な魅力をインテリアに与えているのは、部屋の小ささとフランス、ロシアの優れた工房で製造された多くの美術工芸品の傑作だ。

ギリシャの間

両親の記念碑

1787年キャメロンによって建てられたギリシャ様式のあまり大きくない優雅なパヴィリオンは、追悼碑の一種で、パヴロフスクに2つある(もう一つはパーヴェル1世廟)。ここには早期マリヤ・フョードロヴナの妹がまつられていた。皇后の両親(フリードリヒ・エフゲーニー・ヴュルテルンベルク公子夫妻)の死後、パヴィリオンにイヴァン・マルトス作の泣き女の大理石作品が設置された(1807年)。

スラヴャンカ川の谷

スラヴャンカは小さいが、曲がりくねった岸のある絵画的な小川である。これはキャメロン、ブレンナ、ゴンザロ、ヴォロニーヒンによってパヴロフスクにつくられた絵画的コンポジションの素晴らしい基盤になった。スラヴャンカ川にはアーチ形石橋がかかり、植木鉢や彫刻で飾られている。スラヴャンカ川岸にはパヴィリオンが立っている。このような風景は、18世紀末の理想的な公園例だ。

ケンタウロス橋

パヴロフスクの最も有名な建造物の一つ。この建築家の名前は残されていない。ケンタウロス像はアンドレイ・ヴォロニーヒンの設計によって造られ、1805年ここに設置された。

イタリア(大きい石の)階段

宮殿からスラヴャンカ川の谷へ続く64段の記念碑的な階段は、1799年ブレンナの設計で建てられた。この段上を装飾瓶や獅子像の入った手すりが装飾している。

ケンタウロス橋

イタリア階段

パヴロフスク駅
パヴィリオン円形ホール
スラヴャンカ川の谷の公園(赤い谷)
公園「大きい星」
スラヴャンカ川
新シルヴィヤ
ピリ塔
池の谷
ヴィンコンチエフ橋
屋上展望台のアポロン彫像
廟(夫・庇護者の記念碑)
アポロンの列柱
パヴロフク宮殿
友好聖堂
古いシルヴィヤ(12本の小路)
正面芝地
バラ色のパヴィリオン
スラヴャンカ川
パーヴェル1世像
パヴィリオン「酪農屋敷」
公園「白い白樺」
三美神のパヴィリオン
パヴィリオン「檻」
ロッシのパヴィリオン

イタリアの間

キャメロンによって造られた宮殿の初期の内部設計の特徴は、宮殿建築物に必須の公用アンフィラーダ（続き部屋）と祝典用（公用）大広間がないことだった。

宮殿の建築作業が進んでいる間、パーヴェルとマリヤ・フョードロヴナはデュ・ノール（北の）伯爵夫妻という名でヨーロッパ外遊旅行に出た。旅行中2人はルイ16世とマリー・アントワネットの宮廷を訪問した。ヴェルサイユ宮殿とプチ・トリアノン離宮はマリヤ・フョードロヴナ妃に深い感銘を与えた。帰国後、フランス式宮殿に感化されたマリヤ妃は、早期に承認した宮殿の設計を片っ端から修正し、

絵画ギャラリー

彼女とキャメロンの間で意見の衝突が起こった。キャメロンは作業継続を拒否し、作業はヴィンチェンツォ・ブレンナに委任された。ブレンナは紛れもなく才能があり、ルイ16世時代のフランス派を代表する建築家だった。彼はキャメロン様式の特徴である軽快さや洗練さには関心がなく、豊富に形削りされた建築フォーム、あざやかな色彩と金箔を好んだ。公用アンフィラーダを造るためにブレンナは2階の側面左右に回廊を増築した。左回廊を玉座の間とし、同様に増築されたフリーゲリ（翼廊）の中に設置した。中央棟に豪華な公用ホール（ギリシャの間とイタリアの間）を造り、皇帝の住居にふさわしくした。宮殿インテリアの装飾には、優れた画家、彫刻家ゴンザーゴ、メッテンレイテル、プロコフィエフ、マルトス、コズロフスキーが招聘された。公用ホールと客間を飾っているのはフランスとロシアのブロンズ像、有名なヨーロッパ工場で製造された陶器、家具コレクションだ。

「古代（ギリシャ・ローマ）様式のランプ 1780年代

1803年の火災後、パヴロフスク宮殿は全ての部屋が消失してしまった。この復興作業を行ったのはクヴァレンギ、ヴォロニーヒン、トマ・ド・トモンだ。マリヤ・フョードロヴナ妃の希望で、彼らは公用ホールの大部分の装飾を火災前ととりたてて変更せず保存した。新しくなったのは主にマリヤ・フョードロヴナ妃の私室で、それは南翼1階にあった。

イタリアの間

ブレンナによってローマのロトンダ教会スタイルで設計された中央棟のクーポラの下のホールだ。「古代ギリシャ・ローマの大理石」で装飾が施され、

エジプト・ロビー

ギリシャの間

中には「弓を引くエロス」（オリジナルは紀元前4世紀リシップの複製）がある。彫像の大部分がパヴロフスクに入ったのは1798年で、エカチェリーナ2世によって購入された有名なライド＝ブラウンのコレクションからもたらされた。

ギリシャの間

祝賀用舞踏の間に定められていたこのホールをブレンナは端正なギリシャ様式で装飾し、その重要な装飾に人工の緑大理石をはったコリント式柱を使った。ホールにブレンナの設計で制作された有名な工房ボヴェー（フランス）の装飾織物が張られたユニークなセットがある。

絵画ギャラリーと玉座の間

これらはブレンナによって1797-1799年、パーヴェル1世の即位後に造られた。ゴンザーゴによって制作された玉座の間の天井画は、空が見えるクーポラを模している。このバロックの特徴的な手法は視覚的に天井を高く見せる効果を演出している。

エジプト・ロビー

ロビーのインテリアはキャメロンによって1780年代に設計されたが、1802年の大火災後アンドレイ・ヴォロニーヒンによってエジプトスタイルで再建された。周囲に1月から12月までのアレゴリー像が立っており、その上に占星術（ホロスコープ）の画が丸い額縁にかかっている（プロコフィエフの設計による）。

玉座の間

パヴロフスク宮殿

パーヴェル1世の主図書室

時計「スフィンクス」
1790年代

パーヴェル1世と マリヤ・フョードロヴナ妃の 主図書室

両図書室の内装において特別な役割を果たしているのがルイ16世によって夫妻に贈られたフランス製の絨毯とゴブラン織りだ。

マリヤ・フョードロヴナ妃の
主図書室

ブレンナはこの宮殿の建築特徴をたくみに生かして、独特の祝賀用ホールを設計し、中央棟にいくつかの快適な部屋を入れた。これらの部屋は公用だが、私室の性格を持っていた。こういった部屋にあたるのは、パーヴェルとマリヤ・フョードロヴナの主書斎、小さい応接間、主寝室、ブドゥアール(仏語.boudоrie「気まぐれ」控えの間)、勤務用途の部屋だ。特に小さい部屋には華やかな装飾が施された。マリヤ・フョードロヴナ妃の部屋はパーヴェルの部屋と違って、様々な色彩で絵画が描かれた高価な木の寄木細工の床がある。その中にマリヤ・フョードロヴナがパーヴェルとのヨーロッパ旅行から持ち帰った数多くのオブジェ・ダール(仏語. objet d'art「芸術的な小さな装飾物」)があった。

主寝室

主寝室

内装はルイ16世時代の著名なフランスの美術装飾家ジャン・ジュグールの設計でブレンナによって装飾が施された。このスタイルは、端正な古典主義と、優美で豪華なバロック、ロココ様式の融合が特徴だ。

キューピッドの時計
18世紀末

書斎「灯り」

歴史情報

マリヤ・フョードロヴナ(1759−1828)、ヴュルテンベルク公の娘、ロシア名ゾフィー・ドロテア・アウグスタ・ルイーザは、1776年大公パーヴェルと結婚し、パーヴェルが即位(1796年)するとロシア帝国の皇后となった。パーヴェルに10人の子供を生み、そのうちの2人、アレクサンドルとニコライはロシア皇帝になった。数多くの慈善施設の創立者であり、保護者であった彼女は「母女王」としてロシア史に名を残した。1801年パーヴェル1世の死後、アレクサンドル1世はパヴロフスク宮殿を母に残した。

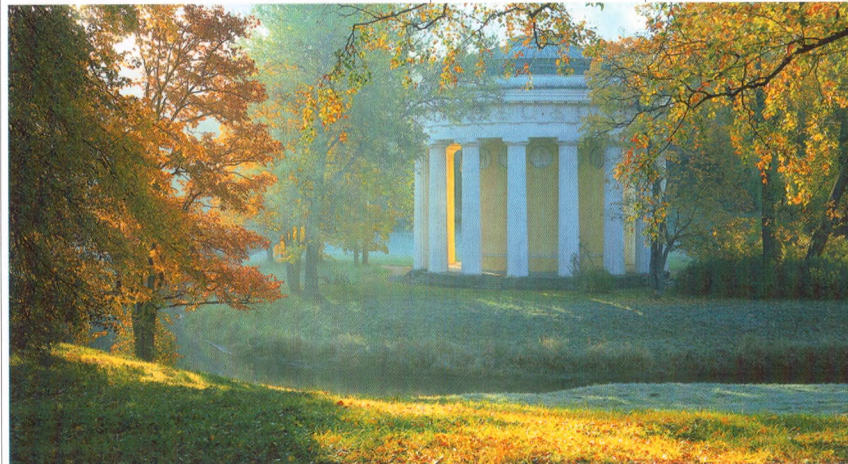
新書斎

アレクサンドル・ロスリン
「大公妃マリヤ・フョードロヴナの肖像画」
1777年

パヴロフスク宮殿の住居部は、西ヨーロッパの宮殿の伝統に従って、1階にある。ピョートル1世時代以前の古代ルーシの宮殿における住居部は、北国の気候の特徴で、上の階にあった。宮殿の1階は共用の部屋とマリヤ・フョードロヴナの個室に分けられる。ここではチャールズ・キャメロンの手がけた装飾が一部保存されている(白の食堂、ビリヤードの間、古い客間、舞踏の間)。2階の豪華な内装の祝賀用ホールと比べると飾り気がないように見える彼の端正なスタイルは、ジャコモ・クヴァレンギ(新「つけ柱の書斎」、化粧室)、アンドレイ・ヴォロニーヒン(「灯りの書斎」、マリヤ・フョードロヴナ妃の寝室、テント)、カルロ・ロッシ(角の客間)が制作した後世の内装の方向づけをした。

パヴィリオン「三美神」

パヴロフスクの公園は、18世紀から20世紀にかけてヨーロッパで流行したランドスケープ・アーキテクチャー(景観造形)の基本的な傾向を反映している。公園の主な建物は宮殿の周りと宮殿の北東のスラヴャンカ川の谷に集中している。このスタイルは1770年代から1780年代キャメロンによって指示された。彼は最も多彩な公園構成のために周辺のランドスケープ(景観)を用いた。

パヴィリオン「酪農屋敷」

1780年代にパヴロフスク宮殿周辺を整備していたキャメロンは、ここにリージェンシー様式(イギリスのアンピール様式)を再現することができなかった。リージェンシー様式信棒者は住居と庭園の境を和らげ、開かれたテラスと「私庭」を流行らせた。建築家ハンフリー・レプトンが建設したエセックス伯領の景観造形庭園が模範となっているこのスタイルで、キャメロンは画家ヴィオリエと共同で、西の宮殿庭園、マリヤ・フョードロヴナ妃の個人的な庭を装飾した。

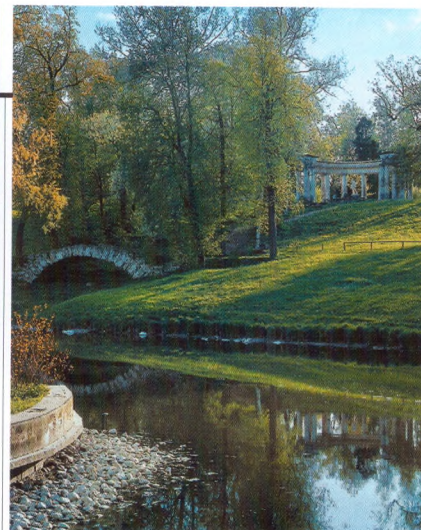
歴史情報

1750年代ランドスケープ・アーキテクチャー(景観造形)の発展に大きな影響を与えたのはジャン・ジャック・ルソーだ。彼の提唱した「自然に帰れ」は建築家や画家に浸透した。景観造形庭園は造園建築に不可欠な要素となった。存在の無常を彷彿させるロマンティックな廃墟、寺院、農場、鳥小屋、それらはルソーの考えでは貴族階級を創造的(建設的)労働に引き入れ、風紀の退廃を矯正できるはずだった。ルソーのユートピア思想はパヴロフスクの新しい庭園・公園の流行となった。

友好聖堂

ピリ塔

その主要な並木道はかつてぶどうの蔓が巻きついた格子があった(このためにブドウが温室で栽培されていた)。同時に建築家はスラヴャンカ川の広い谷を人工湖で飾り、そこに設けた公園に一連のパヴィリオン、友好聖堂、アポロンの列柱、両親の記念碑、大滝、黒い川、三美神のパヴィリオン、酪農屋敷パヴィリオン(スウェーデン農家様式)、檻(鳥の飼育用)を建築した。檻のそばには「遊戯の庭」をつくった。これは緑の蔓が巻かれた星型のボスケット(植木をよく刈り込んである庭園)だ。ボスケット内部はぶらんこ、九柱戯が設置され、そばには刈り込まれた潅木の並木道で造られた迷路があり、何百もの珍種のバラを集めたバラ園があった。1790年代パヴロフスク公園の造園で重要な役割を果たしたのがピエトロ・ゴンザーゴ(1751-1831)だ。優れた劇場画家だった彼はここの「自然素材」の中に自身の大胆な舞台設計プロジェクトを具象化した。ヴィンチェンツォ・ブレンナによる古いシルヴィヤ池の周辺の森林公園、古いシルヴィヤ(12本の小路)の建設も同じ1790年代にあたる。これはブロンズ像、石の階段、廃墟の滝が装飾している公園だ。スターラヤ・シルヴィヤの北東に1800年ブレンナは神秘的な新シルヴィヤを建設した。辺境の森、その外れに1780年キャメロンは皮肉的な名前の「世界の果て」という柱を建てていた。

ここの唯一の建造物は、トマ・ド・トモンの設計で1808年に建てられた霊廟だ。マリヤ・フョードロヴナはそれをパーヴェル1世に捧げ、そのペディメントに「庇護者・夫へ」という碑文を刻むように命令した。ブレンナによって

スラヴャンカ川から見るアポロン列柱

1797年に建てられたピリ塔は、パヴロフスクの最も鮮やかな公園建築物の一つで、外に螺旋階段があり、初期には、円錐の藁葺き屋根がついていた。塔の名前はこの中にピリ水力製粉所があったことに由来する。塔の壁画はピエトロ・ゴンザーゴによって手がけられ、彼はここに多くの窓を描いた。

建物内部の小さい部屋は憩いの場として用いられた。その中には宮殿図書室の一部が保存されている。塔のそばの橋は、製粉所の解体後、アンドレイ・ヴォロニーヒンによって1800年代初めに建てられた。

スターラヤ・シルヴィヤのブロンズ像

ガッチナ

p. 164

ガッチナ宮殿の正面庭
（左はパーヴェル1世像，彫刻家イヴァン・ヴィターリ 1851年）

ガッチナの紋章

ペテルブルグ近郊の古い村落が最もロマンティックな郊外アンサンブルの一つになったのは、1760年代、エカチェリーナ2世がその地をグリゴーリー・オルローフに下賜した時だ。オルローフはジャン・ジャック・ルソーを自邸に招待する際、手紙に次のように書いている。「ペテルブルグから60露里（1露里=1.067km,約64km）離れたところに私の領地があります。空気も健康的で、水も素晴らしく、湖の周りの小さい丘は散歩に適していて、私は思索にふけっています…」。屋敷の建築作業を指揮したのはアントニオ・リナルディだ。英国旅行者ルクソールの言葉によると「オルローフ公の宮殿は郊外の最も美しい場所にあり、建築作業が終わったら、さぞかし素晴らしいものになるだろう。庭園は英国風に尊敬に値する人によって創られ･･･土地の質も屋敷のそばの素晴らしい湖も、その天才的才能を発揮するための力を与えている…」。リナルディの設計で170ヘクタールの広場にロシア初の風景式庭園が設けられた。その中心になったのが、狩猟用の城塞だった。造園時、樫、モミ、楓の木が大量に植えつけられ、植物に乏しかったガッチナを緑豊かにした。

1783年オルローフの死後、ガッチナはエカチェリーナ2世によって皇太子パーヴェルに贈られた。彼は皇帝になり（1796年）、ガッチナに町の称号を与え、帝国の模範都市としての整備を始めた。城塞の役割はガッチナに割り振られた。ガッチナの前に広がる草地は堀と跳ね橋がある練兵場になり、趣向を凝らした詩情あふれるオルローフの城塞はしだいに城塞の性格を帯びていった。

歴史情報

ガッチナ屋敷の初代当主はグリゴーリー・グリゴーリエヴィチ・オルローフ（1734–1783）だ。彼は7年戦争に参戦（1756–1763）、ロシア軍大元帥（1765–1775）、自由経済（協会）初代長官、神聖ローマ帝国公である。グリゴーリー・オルローフは弟のアレクセイ・フョードルと共に1762年6月28日のエカチェリーナ2世即位を掲げたクーデターに参加した。同年4月にエカチェリーナはオルローフの息子を産んだ。その子にはボーブリンスキー伯爵の称号が与えられた。

「グリゴーリー・オルローフの肖像画」
1770年代（？）

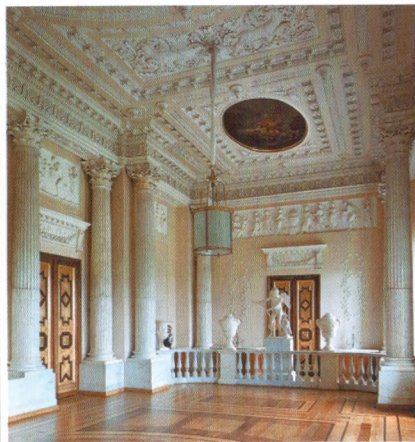
パーヴェル1世の玉座の間

ガッチナ宮殿インテリア

白の間

控えの間

オルローフの狩猟用城塞の建設は1780年に終わり、その後リナルディは室内装飾に取り掛かった。その部屋数は600にものぼり、オルローフ存命中に全ての装飾作業を終わらせることはできないだろうと言われていた。その後、城塞はパーヴェルの所領になる(1783年)が、パーヴェルは既に建てられた部分も設計自体も気に入らなかった。そこで、パーヴェルはヴィンチェンツォ・ブレンナに修復作業を任せ、広く快適だった城塞を皇帝の住居にふさわしく、帝国規模で(豪華に)装飾するように命じた。宮殿内に柱廊回廊や拱廊回廊が建てられ、側面のカレ(正方形)に2階が増設された。公用室のある2階への通路として、中央棟に、控えの間(衛兵の交代式が行われていた)に通じる正面階段が造られた。パーヴェル1世の玉座はオルローフの書斎の場所にあった。そこに帝国の紋章の刺繍が入ったビロードが張られた木製彫刻の玉座が置かれた。ガッチナ宮殿のインテリアの設計に加わったのは、ブレンナの他にバジェーノフ、ヴォロニーヒンで、彼らについてヨハン・ゲオルギーは1790年代末に「彼らの作業は壮麗というより趣味が良い」と書いている。宮殿の大部分は戦争で破壊されてしまい、現在修復作業を終えたのはほんの数室だけだ。ありし日の姿は主にニコライ1世とアレクサンドル2世の注文でガウとプレマッツィが制作した19世紀の水彩画から判断することができる(ガッチナコレクションに保管されている)。

パーヴェル1世の玉座

祝賀用(公用)ホール

オルローフの時代、ガッチナ城塞のホールがどういった様相を呈していたというのは推測するしかない。リナルディの手がけたもので、現存しているのは寄木細工の床、丸天井の側面、一連の部屋の浮彫装飾の跡だけだ。だが、これら全てから判断すると、当時のガッチナ城塞の内装は、同建築家によって建てられたオラニエンバウムの中国風宮殿(p.220)やペテルブルグの大理石宮殿(p.128)の内装に劣らないほど優雅なものだったことがわかる。

1790年代初めブレンナは中央棟の2階に公用ホールから成る小さいアンフィラーダ(続き部屋)をつくり、その両脇の半円の翼部にチェスマの間、武器の間、ギリシャ・ギャラリーを増築した。増築された南の(厩舎)カレ(正方形の建物)には劇場、図書室、武器庫が入れられ、その後、カレは武器庫と呼ばれるようになった。ホールはボニート、ドゥアイエンの天井画、ロベーラの絵、フランス製装飾織物、古代彫刻で飾られた。1799年ガッチナの作業の一部を率いたのはアンドレヤン・ザハーロフだ。彼は、厨房カレを増築し、新しい宮殿教会を建てた。

1850年代建築家ロマン・クジミンは再度、厨房・武器庫カレを再建し、ニコライ1世の最後の個人的なアパルタメントを設けた。彼はまたいくつかの公用ホール、ロビー、大理石階段、劇場、中国ギャラリー、ゴシックギャラリー、教会の装飾を手がけた。

アレクサンドル3世の時代、武器庫カレの中二階部屋と宮殿に電線と電話、水道、下水道設備が敷かれた。

L.プレマッツィ「主寝室」1873年

サリヴァトル・トンチ
「マルタ騎士団長の盛装をした
パーヴェル1世」
1790年代末 一部

歴史情報

ガッチナのコレクションにマルタ騎士団長の衣装を身に纏ったパーヴェル1世の肖像画(1798年から1801年に制作)が保存されている。これは正教の皇帝がカトリック騎士団の団長に選ばれたという短く不思議な歴史の目撃者の一つだ。騎士団の公式成立はローマ法王が「イオアニト騎士団法」に承認した1120年にさかのぼる。初代団長はド・ピュイ。当時騎士団の紋章は赤い地に立つ8つの先端を持つ十字架だった。1291年パレスチナの拠点を失った後、騎士達はロードス島に移ったが、1522年トルコ軍によってマルタ島に追い出された。1789年ナポレオンがマルタ島を占領し、その後騎士団はロシアに最後の安息の地を見つけ、皇帝パーヴェル1世を騎士団長に決めた。しかし英国はロシアを地中海から退却させ、1800年9月マルタ島をフランス軍から取り戻し、それを英国の植民地にした。その後パーヴェルはロンドンと外交的戦争を始めた。歴史家の意見によるとこのことが原因で命を失ったのではないかと言われている。陰謀の進展を急がせ、その陰謀の準備には英国も加担していた。

宮殿見取図

1— 寝室客間
2— チェスマ・ギャラリー
3— 武器ギャラリー
4— 通路
5— 謁見の間(上の軍旗の間)
6— 大理石の食堂
7— パーヴェル1世の玉座の間
8— 白の間
9— 木いちごの客間
10— 主寝室
11— マリヤ・フョードロヴナ妃の書斎
12— 控えの間
13— 化粧室
14— マリヤ・フョードロヴナ妃の玉座の間
15— 通路
16— 緑の角間
17— ギリシャ・ギャラリー
18— ロタリーの間
19— 紋章の下のロトンダ
20— 正面ロビー
21— 劇場
22— 女官控え室
23— 中国ギャラリー
24— 予備室
25— アレクサンドル3世の応接書斎
26— アレクサンドル3世の応接間
27— アジュタンスカヤ
28— 教会
29— 上の光の廊下
30— 熊の階段

パーヴェル1世の玉座の間(旧グリゴーリー・オルローフ書斎)

木いちごの客間

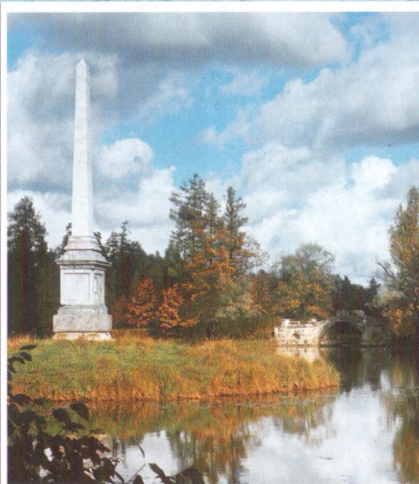
ガッチナ公園

白い湖から見た宮殿の外観

オルローフ公時代のガッチナは、宮殿と公園があるだけの場所ではなく、よく整備された巨大な農場施設だった。厩舎、製粉所、温室があり、エカチェリーナ2世と交わされた書簡によると、そこでは様々な果物やスイカ・メロンが栽培されていた。この地は、北に広がる果てしない狩猟用地でもあった。1770年代リナルディはその公園の真ん中にチェスマのオベリスク（彼の弟の記念に）、鷲の柱、8面の井戸等のいくつかの建築物をつくった。

チェスマのオベリスクとアーチ形橋

パーヴェルはガッチナ領地を与えられ、すぐに風景式庭園を幾何学式（整形式）庭園にかえる再建作業を展開した（私庭、上と下のオランダ庭園、シルヴィヤ、コンデ・シャンティー公の公園の模倣、植物園）。ブレンナはここに一連の建造物を造った。森の温室、海軍門と白樺門、ガッチナの島で一番大きい人工の島（白い島）にヴィーナス・パヴィリオンを建て、白い湖と銀の湖の間にテンプル（鷲のパヴィリオン）を造り、南には装飾瓶や彫像で飾られた手すりの大テラス、船の接岸用アーチの壁を建てた。

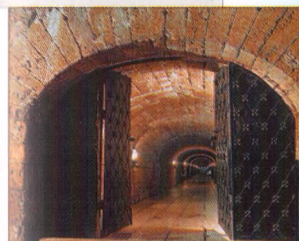
1799年ブレンナが主にミハイル城塞の建設で多忙を極めていた時、ガッチナの作業はアンドレヤン・ザハーロフに任せられ、彼はここにアーチ形橋を造った。同時期、建築家ニコライ・リヴォフはプリオラーツキー宮殿を建てた。パーヴェルはこれをマルタ騎士の居城にしようと考えていた。プリオラーツキー宮殿についてクレチエン・ミュラーは1810年代初頭、次のように書いている。「この高い岸は森で覆われ、幅広い馬車専用道路がある。プリオラーツキー宮殿は、透明な水の中でいかに美しく浮かび上がることか！カトリック大修道院領地は小さいが、それは我々のドイツの修道院とは全く似ていない。これは高い尖塔を頂き、小さい白い家に囲まれたクロワートル（仏語.Cloitre「修道院、回廊」）形式の塔だ」小屋と塔は、土を圧縮したブロックを積み重ねるという特殊な技術で建てられた。

歴史情報

宮殿から銀の湖に通じる地下道はオルローフ伯爵の時代に設けられたが、このような建造物の必要性はなく、宮殿自体、英国のハンプトン・コート宮殿を真似て造られたように、これはむしろ流行に従ったものだった。しかし1770年代に子供の頃から暗殺を恐れていたパーヴェル1世が、その100年後アレクサンドル3世がガッチナに住んでいた時、ガッチナの地下建造物のシステムは拡大され、改良された。研究家が主張するように、アレクサンドル3世の書斎の床には望まれない訪問者のために隠しマンホールがあり、それを開けると水がたまり、切り立った石が見えた。書斎から隠し階段が宮殿の要塞の塔に続いていた。

プリオラーツキー宮殿

地下道

白樺小屋のインテリア

П型正面玄関のある白樺小屋

セメン・シェドリン
「ガッチナの外観」
18世紀末

オラニエンバウム

p. 164

領地の名前は「オレンジの木」(独語. o rangen Baum)と訳される。メンシコフはピョートル1世の例に従ってこのオラニエンバウムに自分の「パラダイス」をつくり、広大なオレンジの木のある温室を建てた。イタリア人建築家ジョヴァンニ・フォンタナはメンシコフのために壮大な大宮殿があり、それにテラス(段丘)公園が隣接する豪華なバロック・アンサンブルを設計した。建設はゴットフリード・シェデリの指揮で1710年代から1720年代にかけて行われた。

1742年エリザヴェータ女帝は自分の後継者は甥のカール・ピョートル・ウルリヒ・ホルシュタイン・ゴットルプであると宣言し、アンハルト・ツェルプスト公女との来るべき結婚(1745年)の贈り物として、彼に郊外の住居としてオラニエンバウムを与えた。アンサンブルのリフォーム担当に、バルトロメオ・フランチェスコ・ラストレッリが任命され、その助手として、当時ウクライナ総督キリル・ラズモフスキーの領地で働いていたアントン・リナルディ(1710頃-1794年)を小ロシア(ウクライナの旧称)から招聘した。エカチェリーナ2世の即位後(1762年)オラニエンバウムはリナルディの力で最後の短い繁栄を体験する。パーヴェル1世の時代、領地は打ち捨てられ融資はほとんど行われなかった。後に領地はパーヴェルの息子ミハイル大公とその直系子孫のものとなる。

大メンシコフ宮殿

オラニエンバウムの紋章

オラニエンバウムはペテルブルグ近郊で唯一ファシスト軍の占領網から免れた邸宅だ。屋敷はクロンシュタット要塞の大砲の射程内にあるフィンランド湾岸の小さい地区にあり、常に守られていた。

大メンシコフ宮殿
日本パヴィリオンの中央ホール

「ラオコーンと息子達」1817年
(古代彫刻の複製)

中国風宮殿の内装

オラニエンバウム 宮殿とパヴィリオン

カターリヌィエ・ゴールキ パヴィリオンのマイセン陶器の水差し

パヴィリオン「カターリヌィエ・ゴールキ」

カターリヌィエ・ゴールキ

エカチェリーナ2世の命令でリナルディにより1762–1774年建てられる。当初これは両側が500m以上の石の柱廊がある長さ500m以上のユニークな建築工学的な建物だった。今日コンプレックスの中で保存されているのは、3階建てのバロックのパヴィリオンである高さ33mの丸い建物だ。パヴィリオン内部はいくつかの趣向を凝らした部屋を含むエレガントな宮殿として、ロココ様式で装飾された。壁や天井は浮彫装飾や繊細で優美な絵が描かれた人工大理石で飾られている。その中の一つ、陶器の書斎の装飾のためにマイセンの工場で有名なヨハン・ヨアヒム・ケンドレル（1706–1775）が制作した陶器セット（1770年代）が注文された。陶器作品の一部はロシア・トルコ戦争におけるロシアの勝利を讃えている。

暖炉上の壁の装飾

円形ホール

陶器の書斎

階段の上の踊り場

ピョートル3世の宮殿

ピョートル3世の宮殿

1756–1762年宮殿はペテルシュタット（ピョートルの要塞）の中心だった。リナルディによって建てられた小さい稜堡要塞とマルティン・ホフマンによって皇太子ピョートル・フョードロヴィチのために造られた要塞の周りに、カーロスチ川岸に沿って造園家ランベルチーはリナルディの設計で滝とテラス（段丘）、彫像や噴水がある「イタリア」風庭園を造った。「全く皇帝らしからぬ（ザグリャジュスカヤ伯爵夫人評）」ピョートル3世は、1762年6月の逮捕の瞬間までこの要塞に住んでいた。当時のアンサンブルのうち現存しているのは、要塞の門とピョートル3世の宮殿だ。シンプルで優美な、装飾の少ない二階建ての建物は、ピョートル1世時代の建築物を彷彿させる。花崗岩の螺旋階段で上がる宮殿の2階にはピョートルの私室部があった。彼の私室部は、玄関の間をのぞくと全部で6室（大広間、食器室、絵画の間、書斎、寝室、小客間）だけだった。ここにはリナルディの優美な装飾、古い家具の一部、17–18世紀の西ヨーロッパ絵画の小さいコレクションが保存されている。

無名画家
「両替屋の老人」
17世紀末 – 18世紀初頭
オランダ

絵画ギャラリーの漆の浮彫装飾パネル細部

中国様式の絵の事務机（1759年）

絵画の間

寝室

中国風宮殿

カターリヌィエ・ゴールキのアンサンブルと同時にリナルディはオラニエンバウムに自身の最もロマンティックな作品、恐らくロシアで唯一のロココ様式の建築物である中国風宮殿を造った。宮殿は、風景式庭園や美しい池に囲まれた私別荘のアンサンブルの中心になった。建物の南ファサードは1852-1853年2階が増設されたが、北ファサードはリナルディが作った当時の姿で残された。中国風宮殿と呼ばれるようになったのは19世紀からで、その時、西翼部の書斎は、当時流行したロココ様式のシヌヮワゼリ（仏語.chinoiserie「中国の」）で装飾された。この中国風書斎は北アンフィラーダの7室の中にある。その中で最も有名なのは、中国風の大書斎とビーズの書斎とミューズの間だ。ビーズの書斎の壁はジャン・ピリマンの下絵で制作され、ビーズが刺繍されたパネルで飾られている。宮殿の装飾は絵画的なパネルと有名なイタリア、フランス画家作の神話、寓話や牧歌的題材の天井画で、それらは清廉さと色調の優しさ、バロックとロココの典型的な儚さ（非現実性）で際立っている。リナルディの素描で制作された宮殿ホールの寄木細工の床（総面積722㎡）は金箔で覆われた壁や天井の浮彫の絵のような多様性で驚かせる。ここで特筆すべきは、鏡（対になっていることから）の丸天井と名づけられた特徴的な凹凸装飾だ。

中国風宮殿

ミューズの間

ビーズの書斎

ダマスク織りの寝室

ダマスク織りの間の天井画「若者を教えるウラノス」
1760年代ドメニコ・マジョット

青の客間

中国風大書斎
「わら製パネルの一部」
18世紀半ば

中国風大書斎

クロンシュタット

p. 164

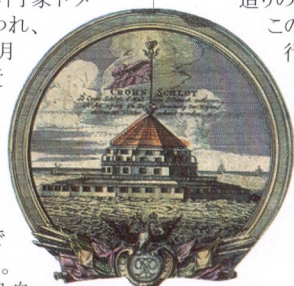
歴史

クロンシュタットの紋章

クロンシュタットの歴史は、ピョートル1世の命令でフィンランド湾の浅瀬にあるコトリン島の南にクロンシュロット(独語 Kron Schlot「王の城塞」)要塞が建てられた1703年秋にさかのぼる。これは、ネヴァ川三角州の入口前で船の運航を止める要塞だった。建設は招聘された築城専門家ドメニコ・トレジーニの指揮で行われ、1704年5月7日完成した。1ヵ月後クロンシュロット城塞に接近したスウェーデン軍は猛烈な砲火を浴び、退却を余儀なくされた。1720年5月ピョートルは命令を出した。「艦隊とこの場所の防護は最も重要である。命ある限り、腹の底まで(最後の力を尽くして)守れ」。この命令後、建設はコトリン島自体に移った。1722-1724年ここに二つの稜堡のある堡塁「ツィターデリ」(後の「皇帝ピョートル1世堡塁」)が造られた。1723年10月ピョートルは自身の図面でコトリン島にクロンシュタット(Kron Stadt「王の町」)と呼ばれる要塞都市を建設した。ピョートルは自分で深度を測定し、要塞建設地を決めた。建設中、ピョートルとアレクサンドル・メンシコフはサンクト・ペテルブルグとコトリン島を定期的に往復し、その間に立ち寄る城としてオラニエンバウム、ペテルゴフ、ストレリナが造られた。

「クロンシュタット」1717年 版画

クロンシュタットの独特の建築物は、1719年に建てられた新造船・修繕船用ドックのある石造りの運河(ピョートル大帝)である。この完成式典は1752年7月30日に行われた。18世紀前半ヨーロッパにはこの運河に優る治水施設はなく、水をくみ出すことができるドックは主力戦艦を1隻しか収容することができなかった。当時存在していた乾ドック(水をくみだすドック)は、風車ポンプを利用して水をくみ出し、水のくみ出しには3ヶ月を要した。巨大なクロンシュタットの運河は、一度に主力戦艦を12隻も入れることができ、排水用池と溜池のシステムを使って数時間で水をくみだし、一晩でいっぱいにした(1774年風車は「火で動く機械」にかえられた。これは当時世界最大の蒸気機械だった)。1783年コトリン島への海軍省の移動に関連して、石造りの要塞の再建が始まった。クリミア戦争(1853-1856)開始までにクロンシュタットはヨーロッパで最強の海の城塞になった。1854年その堅固な外観は、ペテルブルグを通過しようとした英仏艦隊を退却させた。

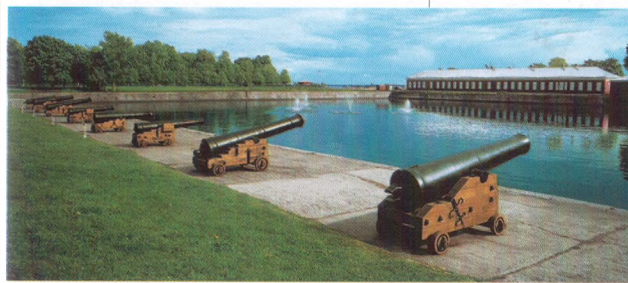
20世紀までに、当時最新技術を誇ったクロンシュタット要塞と堡塁には17の人工島があり、フィンランド湾の北岸と西岸には大砲を設置していた。その中の一部は、当時これと同じものはなかった。すなわちこの強化が1941-1944年町を防衛したのだ。それだけでなくクロンシュタットの大砲は戦闘中、敵に大きな損害を与え、陸軍作戦(オペレーション)を援護した。

ヴァレンチン・セーロフ
「ピョートル1世」1907 年
(国立トレチャコフ美術館所蔵, モスクワ)

海のニコライ聖堂

海のニコライ聖堂

高さ70m、クーポラの直径27mの巨大な聖堂は、1902年から1913年の間にクロンシュタットの最も高い場所に建てられた。この聖堂は、初期、クロンシュタットに分宿している水兵(海軍軍人)の駐留(守護兵の)寺院として用いられた。聖堂の設計者は国民技師大学の校長、V.A.カシャコフで、彼はコンスタンティノープルのソフィア聖堂からモデルをとった。聖堂の西ファサードには重厚な正面玄関があり、内部の空間は2段の拱廊で分けられている。聖堂を装飾しているのはモザイク画と絵画(クジマ・ペトロフ=ヴォードニク参加)だ。床には銅枠の様々な色の大理石の板がはめこまれている。

クロンシュタットの検潮器

オブヴォードヌィ運河にかかる橋の石脚に目盛りがある。目盛りは1825年から1840年のバルト海の平均値を示している(優れた水路学者、海軍中将ミハイル・フランツェヴィチ・レイネクによって設置された)。後にこの目盛りのそばに、海面の高さを測定する機械「フトシュトック(検潮器)」が設置され、目盛りの高さ=0に設定されている。フィンランド湾とつながっている井戸水の表面に、検潮器とつながっている特別なブイ(浮き袋)がある。それはバルト海の海面水位変動を自動的に測定する機械だ。この機械の示度はロシアの高さの水準システムの基盤になっている。

ピョートル大帝運河

北西ロシアとモスクワ

縮尺 1:650 000

1 cm | 6,5 km

北西ロシアとモスクワ

古代史

北ヨーロッパの東部には約紀元前5000年から人が住みついていた（鬼の鼻岬の岩石画、オネガ湖のオレーニー島に人間の行為の痕跡が残されている）。初期の移住民である北ヨーロッパの氷河付近の古代住民について、我々が知っていることは少ない。彼らは昔のヨーロッパ系人種（北東でモンゴロイドとの混血した）で、狩猟や漁生活を営んでいた。また、長いオールで漕ぐ舟を作り、船首は神聖な動物の頭で飾り、集団で銛突き捕鯨猟を行っていた。最初にスキーを使った可能性もある。これらのことから判断すると、彼らは後に移住してきた人たちと同化し、現在の北ヨーロッパ（白海沿岸からグレートブリテン島）人の一部になったと考えられる。

ヨーロッパの北東にスラヴ民族とされる住民が最初に現れたのは、9世紀（他の説では12世紀）だとされる。スラヴの民は北で何世紀も古代文化の残存形を保存していた。いくつかのブイリーナ（古代ロシアの英雄叙事詩）はラドガ湖やオネガ湖沿岸の僻地でつくられた記録によって、知られている。この中にカレリアやイジョーラ川（インゲルマンランド）の歌い手の歌が記録され、それは19世紀にカレリア・フィンランド叙事詩「カレワラ」の集大成の基礎となった。

10世紀初め、フィンランド湾、ドニエプル川からヴォルガ川までの東ヨーロッパの領土（ヴェリーキー・ノヴゴロドとプスコーフ領を含む）は全て、キエフを統治していた一人の公の支配下に入った。12世紀、大公が北東ルーシ（ウラジーミルとスーズダリ）に移住した際、その鬱蒼とした森にモスクワが建てられた。当時ノヴゴロドの文書で「クーチキ」として知られていたこの小さい町が3世紀後にはロシア全ての公国を従属し、世界最大の国家の首都になるとはいかなる文献も予言していなかった。

プスコーフ

鉄道：ヴィテプスク駅からプスコーフ行きの列車が運行（停車駅有）。（列車の番号は駅または中央鉄道切符売り場で要確認, p.289）

バス：長距離バスターミナル(p. 289)からプスコーフ行きのバスが毎日運行。（所要時間約5時間）時刻についての情報は、長距離バスターミナルの案内所で入手することができる。

本書記載の情報は変わることがあります。
最新情報は電話にてお問い合わせください。
Ⓒ 055（無料）、162-3344（有料）

スターラヤ・ラドガ

鉄道：モスクワ駅(p.289)から郊外電車で「ヴォルホフストロイ」（Волховстрой）駅まで（所要時間約2時間）行き、1番バスターミナルからバス（23番）でスターラヤ・ラドガまで。（所要時間約15分）

ヴェリーキー・ノヴゴロド

鉄道：ヴィテプスク駅（p.289）から列車905Aが毎日運行。8:02発～12:47着（所要時間約4時間45分）。

バス：長距離バスターミナル（p.289）からノヴゴロド行きのバスが運行。7:30～21:30（1－2時間おきに運行）（所要時間約3時間30分）

モスクワ

鉄道：モスクワ駅（p.289）から毎日運行：
「赤い矢号Красная стрела」23:55発～7:55着（所要時間8時間）、
「エクスプレスNo.3 экспресс № 3」23:59発～8:00着（所要時間8時間）、
「ニコライ・エクスプレスNo.5 Николаевский экспресс № 5」23:35発～7:15着（所要時間7時間40分）他。

航空便：国内線空港「プルコヴォ1」（p.288）から数便が毎日運行。（所要時間約1時間）

スターラヤ・ラドガ

p. 227

スターラヤ・ラドガはサンクトペテルブルグの東（約120km）にあるヴォルホフ川岸の小さい村落だ。今日スターラヤ・ラドガの偉大さを伝えるものは少ないが、ラドガ要塞の塔、白亜の教会、はるか昔に一族を失った古墳丘は、以前のとおり在りし日の姿を想像させる。最初にラドガについて書かれたのは原初年代記の一つで、そこには862年リューリクによって創立された町として載っている。しかしながら考古学者達は、ヴォルホフ川とラドガ湖が形成する岬に商業移住があったのは、12世紀だと主張している（発見された初期の貨幣で年代を定めている）。13-14世紀ラドガ湖に木を切って作った家、公共の家（商業用）を建て、最初の要塞を建てた住民が現れた。発見された船の残存物はラドガで船舶修理所が活動を始めていたということを証明している。ラドガの発掘は、町とヨーロッパ、スカンジナビア、アラビア諸国とのつながりを明らかにしたが、ここに伝説的なリューリクの町があったという証拠を発見することはできなかった。もう一人の有名な伝説的人物、リューリクの戦友で幼いイーゴリ公の後見人だったオレーグ公の痕跡も、見つからなかった。ノヴゴロド年代記は「彼（オレーグ）の墓はラドガに有り」と証言しており、実際に数多くのラドガの丘の一つはオレーグの墓という名前である。しかし1820年古代ロシア愛好家アダム・チェルノツキー（ドレンガ＝ハドコフスキー）が既に暴かれたその墓の発掘作業を行ったが、彼が見つけたのは支配者の裕福な副葬品ではなく、焼かれた骨、「錠の閂（かんぬき）のようなもの、炭、鉄の投槍」だった。いずれにしても、オレーグがラドガに葬られたという伝説は根強いようだ。それには理由がある。壮大な「ブイリーナ（英雄叙事詩）」のラドガの光景は、最も疑わしい伝説でさえ、信じさせるほど美しい。

ノヴゴロド人がネヴァ川（オレーヒ島）河口に強力なオレーシェク要塞（1323年）を建てたことにより、ラドガの特別な戦略的意義は弱まっていった。1634年ロシア旅行記を書いたドイツ人学者アダム・オレアリーは、この時代、ラドガはヴォルホフ川流域の完全に平和的な都市だったと特徴付けている。オレアリーの記憶に残ったのは「髪を切り、両側に巻き毛を垂らした、長いルバーシュカ（シャツ）の」子供たち、また彼が初めて会ったロシアの音楽家「リュートとバイオリン」奏者、そして、当時まだ歌われていたブイリーナの歌だった。

スターラヤ・ラドガ歴史建築・考古学国立保護博物館
СТАРОЛАДОЖСКИЙ ИСТОРИКО-АРХИТЕКТУРНЫЙ И АРХЕОЛОГИЧЕСКИЙ ЗАПОВЕДНИК
レニングラード州，
ヴォルホフ地区,スターラヤ・ラドガ,
ヴォルホフ大通り19
(Ленинградская область, Волховский район, с. Старая Ладога, Волховский пр., 19)
✆(81263) 49-370
🕓10:00～17:00, 休館日：月

スターラヤ・ラドガの主要観光名所
1- ラドガ要塞と聖ゲオルギウス教会
2- ウスペンスキー修道院 ウスペニエ（昇天）教会
3- マルィシェヴァヤ丘 預言者イオアン誕生教会
4- ニコライ修道院
5- ヴァシーリー・ケサリースキー修道院
- ドミートリー・ソルンスキー教会
- イヴァノフスキー修道院
- 商人ウラジーミル・カリャジンの家（8－13世紀ラドガ考古学博物館）

毎年7月の第2日曜日はラドガ要塞で歴史・フォークロア祭「栄誉の冠」、5月末は子供のフェスティバル「パサード（城下商工地区）の人々」が行われる。

ヴォルホフ川岸から望むラドガ要塞の光景

ゲオルギウス聖堂のフレスコ画「聖ゲオルギウス」12世紀

ゲオルギウス教会とヴォルホフ川の眺め

要塞

ラドガは18世紀までラドガ湖からヴォルホフ川への入口の拠点であり、北西ルーシの長年にわたる敵であるスウェーデン人がヴォルホフ川を通ってノヴゴロドに入るのを防衛していた。

1019年頃ヤロスラーフ賢公はノヴゴロド領の一つになったラドガを妻インギゲルダのスカンジナヴィアの親族に譲り、スカンジナヴィア人がラドガを支配していたことがあったが、1世紀後にはまたロシア人の公が治めていた。同時期（1113年）キエフ公ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ（ウラジーミルの息子）はロシアの防衛線強化のために、ラドガに新しく堅固な石の要塞を建設した。

15－16世紀末、古い要塞の城壁は火器の出現を考慮して再強化され、5つの石の塔がある強力な要塞になった。さらに、要塞の北に木と土で作った稜堡を置き、守りを固めた。これはロシアで初めての稜堡だった。その時代、ラドガとその近郊に7つの修道院、そしてさらにそこから離れた所に4つの寺院があった。多くの寺院があるにも関わらず、この町の人口は600－700人を超えなかった。つまり、ラドガは普通の町ではなく、特別な防衛意義を持った国境警備の町だった。修道院はロシア正教の砦であり、その課題は北西からのカトリックの侵入を防ぐことだった。そして、そのためにたくさんの正教寺院が建てられたのである。北方戦争とペテルブルグ建設後、ラドガは地形的に奥になり、その軍事的意義は失われ、要塞はしだいに衰退していった。

歴史情報

早期ルーシの歴史についてのより重要な資料であるのは、原初年代記（「どこからロシアの地が始まった」）の伝説的なイアフェト起源のスラヴ人の話だ。最も有名な年代記の編者はキエフ・ペチョールスキー（洞窟）修道院の修道僧ネストル（12世紀初）だとみなされている。年代記の原本は失われ、現在伝わっているのは、三種類の写本、ラヴレンチー（1377年）、イパーチイ（15世紀初頭？）、ラドジヴィロフ（15世紀）である。この中には値がつけられない一連のオリジナル資料のテキストが含まれている（「オレーグとギリシャ人の話」（どうやってロシアにギリシャ正教がきたか）」10世紀他）。非常に古い出来事を叙述する際、著者は、中世時代に非常に特徴的なことだが、伝説や信憑性の低い資料を用い、不正確に解釈した。年代記の中で最も論争を呼んでいる部分は「ヴァリャーグ招致の伝説」(p.248)で、その類似物はヨルダーネスの歴史（ゴート史ゲティカ(Getica),6世紀）やザクソン（公）のイギリス王国への招聘(Resgestae Saxonicarum,10世紀.)に見ることができる。多くの歴史家は、年代記制作を依頼したのはヤロスラーフ賢公だと考えている。彼は自分の城内にラテン語、ギリシャ語の中世記録文献をロシア語に訳す官房を置いていた。

ネヴァ河畔の戦いを描いた年代記全書の表紙の細密画
水彩画 16世紀（ロシア国立図書館蔵）

ゲオルギウス教会

ゲオルギウス教会のフレスコ画

ゲオルギウス教会

ロスチスラフ・ムスチスラーヴィチ公とその息子スヴャトスラフ（1150年代-1160年代）がノヴゴロドを統治していた時代、ラドガに当時としては巨大な石造り建築が組織された。その時、短期間でヴォルホフ川とラドガ川沿いに6つの石造りの教会（モンゴルのくびき時代以前、最北の正教会寺院）が建てられた。その一つがゲオルギウス教会で、教会内には早期ギリシャ・ノヴゴロド派の無名画家によって制作された12世紀のフレスコ画が保存されている。残念なことにニーコンの改革の関連による1683-1684年の修復でそれらは部分的に傷められ、白く塗られてしまった。ラドガの石造建築の飛躍は近郊でのスウェーデン軍に対するノヴゴロド人の勝利と関係があるとみなされている。

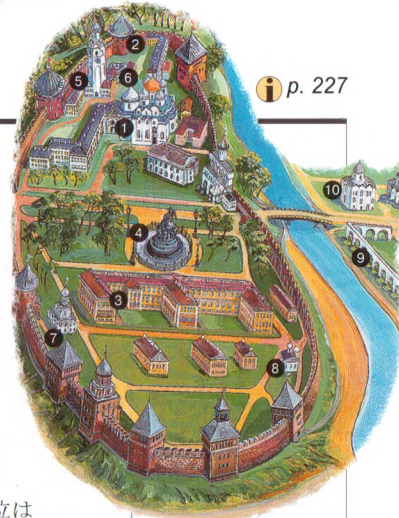
ラドガ要塞

ノヴゴロド

p. 227

「偉大なるノヴゴロド氏」と呼ばれるノヴゴロドは、世界に名を馳せた古代ロシア国家で、15-17世紀まで北ヨーロッパ最大の版図を誇った伝説的な文化の中心であり、独特の中世建築・芸術派の発祥地である。

昔からの論争で、ラドガ、ノヴゴロド、キエフの三都市のどこがルーシの最古の都だったかというものがあるが、やはりノヴゴロドに軍配を揚げたい。ロシア国家史の黎明期、年代記に859年に初めて登場するノヴゴロドは、ルーシの国境警備基地になり、ルーシはここから急速に南と西に勢力を広げていった。これらによって説明されているのはロシアの町のヒエラルキー（位階制）におけるノヴゴロドの特別な立場（ノヴゴロドの特権は「ヤロスラーフの文書」に記録されており、キエフの公位はノヴゴロドを統治する者に継承されたとある）と1478年まで続いた古代の民主制だ。一つの仮説によると、「ノヴゴロド（新しい町）」という名前自体、どこか近くに、アラブの年代記に記述されているスラヴ系のルーシの都「アブ・ルシーア（古い町）」があったという証拠である（イブン・ホルダルベク，9世紀;イブン・ルスト，10世紀初頭他）。9世紀後半のものとされるアル・ルシーアの土と石の要塞施設跡はノヴゴロドから300km離れたリューリク町で発見された。

古代年代記において何が真実で、何が捏造であるかということを判別するのは難しいが、多年のノヴゴロド発掘作業でかなり多くの興味深いことが明らかになった。解明されたのは次のことである。5-6000年前の氷河の後退後、ほとんどすぐにイリメニ湖近くの平野に人が住み着くようになったが、土塁に囲まれた居住区が出来たのは7-8世紀になってからのことである。高速スキーはスカンジナヴィアからルーシに広まったとされていたが、これは逆である。また初期の木製舗装道路はドイツやイギリスより約300年早くノヴゴロドにあった（西ヨーロッパではユトランドのスラヴ人の町に舗装道路があった）。ノヴゴロドの水道も北ヨーロッパで一番古く、11世紀からあった（ちなみに　ロンドンで水道設備ができたのは14世紀末、ドイツでは15世紀だ）。ノヴゴロドで読み書きが広まったのも西ヨーロッパの他の都市よりずいぶん早かったとされている。恐らくそのため中世のヨーロッパでは、ノヴゴロドの地の名前（オストロガルド）自体、「あらゆる恵みがある」（アダム・ブレメンスキー，11世紀）国を連想した。

国立ノヴゴロド
野外文化財統合博物館
НОВГОРОДСКИЙ ГОСУДАРСТВЕННЫЙ ОБЪЕДИНЕННЫЙ МУЗЕЙ-ЗАПОВЕДНИК
ノヴゴロド・ヴェリーキー，クレムリン，11
(Новгород Великий, Кремль, 11)
✆(81263) 49-370
🕓10:00～17:00，休館日：月
✆(81222) 7-3608（管理局），(81222) 7-3770（見学ツアー課）
鉄道駅またはバス停からクレムリンまでバス4，7，9，14，20番で。

ノヴゴロドの主要観光名所
クレムリン
1- ソフィア聖堂
2- ヴラディーチナヤ（グラノヴィータヤ）宮殿
3- 旧役所（国家機関）
4-「ロシア・ミレニアム」記念碑
5- 鐘楼
6- 詩人ガヴリール・デルジャーヴィンの墓
7- ポクロフ生神女教会
8- アンドレイ・ストラチラート教会
ヤロスラーフ屋敷とトルグ
9- ガスチーヌィ・ドヴォール
10- オポーキの預言者イオアン教会
- ジェン・ミロノーシッツア（携香女）教会
- 親衛隊員宿舎
- プロコーピー教会
- ニコライ聖堂
- トルグのパラスケーヴァ・ピャートニッツァ教会
- ウスペーニエ至聖生神女教会
- トルグの聖ゲオルギウス教会

町の寺院
- アントーニー修道院・至聖生神女誕生聖堂
- ナ・ルーチエ・フョードル・ストラチラート教会
- スパース・ナ・イリイネ（イリイン通りの救世主）教会
- 聖ペテロと聖パウロの教会他（約20の寺院）

ノヴゴロド南近郊
交通：7番，7-a番バスで
- ユーリエフ（ユーリー）修道院
- 木造民俗建築博物館「ヴィタスラーヴリッツィ」
- スパース・ナ・ネレージッツェ教会

ノヴゴロド・クレムリンからの商業地区の眺め

ソフィア聖堂

ノヴゴロド クレムリン

ノヴゴロド州内には国家によって保護されている1595の記念碑（連邦の重要文化財 251）がある。そのうち58は1992年ユネスコ世界遺産に登録された。

ノヴゴロド・クレムリン

ノヴゴロド・クレムリン（城塞）

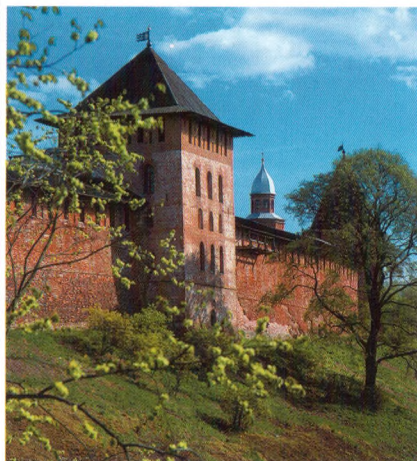
年代記にはノヴゴロドの初代公は伝説的なリューリクだと書かれてある。しかしノヴゴロドの最盛期はヤロスラーフ賢帝（978年頃-1054年,1019年～キエフ大公）の時である。彼はキリスト教受容前の異教時代に生まれたウラジーミルとログネーダの息子である。ヤロスラーフ賢公の治世にノヴゴロドに初めてクレムリン（城塞）が建てられたとされている（1044年）。城塞は当時まだ木製で、1116年に現在の大きさになり、1302年ノヴゴロドの年代記によると「石造りの町ノヴゴロドが建設された」とある。1世紀後の1420年代、ノヴゴロド城塞は完全に石造りになった。1484年、大々的に煉瓦を使って再建され、16世紀「小さい土の町」と呼ばれたもう一つの防壁で補強されたが、これはエカチェリーナ2世の時代に破壊された。ロシアの西国境に新しいペテルブルグ要塞、ナルヴァ要塞が現れると、ノヴゴロドは軍事意義を失った。1720年ピョートル1世は「ノヴゴロド要塞は捨ておけ。そこに戦争はない」というお触れを出した。19世紀までに古代の要塞施設は老朽化し、荒廃した。20世紀初頭その再建の話が持ち上がったが、第一次世界大戦によって実現しなかった。深刻な大修復作業が始まったのは1950年代になってのことだ。

若干傾斜した（大砲の衝撃を和らげるため）城壁は、地元の石灰岩、玉石、煉瓦を石灰のモルタルで積み重ねられた。城壁の厚さは3.6m～6.5mで、高さは8m～15mだ。城壁の上の先のとのこぎり状の部分はロシア人建設家がイタリア人建築家から学んだものだが、イタリアのものと違って、ノヴゴロドのものは（気候条件による昔からの伝統に則って）城壁と塔の上に木製の多角形の屋根がついている。

クレムリンの鐘楼の鐘

ノヴゴロド・クレムリンの塔

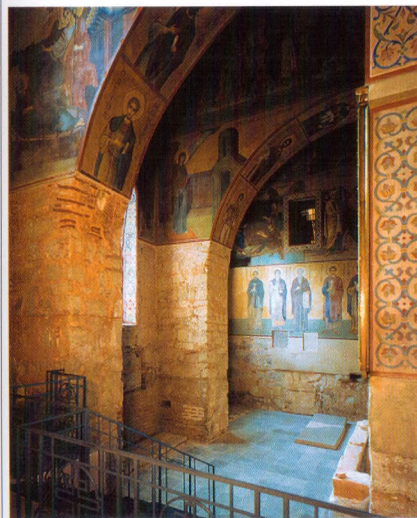
ソフィア聖堂

ルーシの石造寺院の中で最古（1045-1050年）のもので、パリのノートルダム寺院より1世紀早く建てられた。創立者はヤロスラーフ賢帝の息子であるノヴゴロド公ウラジーミルだ。「積み重ねられたのは、主に煉瓦だが、荒っぽい自然の石の列もあった･･･。均等に塗られた外壁は入念に平らにされ、ほとんど磨かれた…。この結果、表面に素晴らしく絵画的な縦筋のある構造ができあがった･･･」（P.ラッポポルト）ビザンティンから借用のこのような石積み建築は、ロシア古代寺院全ての特徴だ。ノヴゴロドのソフィア聖堂は地元産の石灰岩板を多く利用したことで際立っている。1151年大主教ニーフォントは屋根に鉛板をはるように命令した。聖堂の壁には古代のフレスコ画、グラフィティ（落書き：壁にかきつけられた文字、絵）が保存されている。その中で最も初期のものは12世紀のものだ。

ソフィア聖堂

聖堂の西入口を飾っているのはブロンズのシグトゥーナ（マグデブルグ,コルスーニ）門だ（p.236）。

1130年代、このノヴゴロド公の聖堂はノヴゴロド市の主要寺院になった。その中には有名な市民が葬られている。ここには公文書保管所、図書館、国庫があった。

ヴラディーチヌィ宮殿（大主教宮殿）

ノヴゴロド大主教（ヴラディーカ）の住居は昔、クレムリンの北西部にあった。アンサンブルに含まれるのはノヴゴロド最古の公民の建物のクレストヴァヤ（グラノヴィータヤ）宮殿（1433年）、セルギー・ラドネジュスキー教会（1463年）と鐘楼（1436年大主教エフィーモフによって建てられたヴラーディチュヌィー宮殿があった場所に18世紀に建設された）だ。

ノヴゴロドの聖ソフィア聖堂古代の宝座の一つ 11世紀

ソフィア聖堂 南玄関部のフレスコ画「エレーナとコンスタンチン」12世紀

ソフィア聖堂のイコノスタス

シグトゥーナ（マグデブルグ，コルスーニ）門

シグトゥーナ（マグデブルグ,コルスーニ）門扉（1150年代？）

有名なソフィア聖堂の西門と同じ名の門扉の起源には3つの伝説がある。1つ目の説は、1187年スウェーデンのシグトゥーナ要塞を占拠したノヴゴロド人の戦利品だったというもの。2つ目の説は、ゲルベルシュテイン（15世紀）が伝説を引き合いに出して言ったもので、998年にノヴゴロド人がヘルソン（コルスーニ）から運んできたというもの。ヘルソンは一説によるとウラジーミル公が洗礼を受けたとされる地だ。3つ目の説はカラムジンによるもので、彼は門扉のレリーフ（浮彫）に書かれたラテン語の説明文に基づき、門扉はマグデルブルグ市のドイツ職人によって製作されたものだという仮説を述べた。

古風な構成と民俗的なディテール（真ん中分けでおさげの男性の髪型、葉状の盾等）はある地元の芸術派を示している。銘文の一つは神話de Blucichのカトリック司祭アレクサンドルと呼ばれている。リューベック（ドイツ）の司祭でないなら、ブランデンブルグ辺境伯領内のマグデブルグの大主教の管轄下にあったリュティーチ族の司祭である（後者は門に描かれている）。このレリーフをよく見ると、レリーフの一部にはノヴゴロドと同民族である西スラヴ人（ボドリーチ、リュティーチ）の強制的なカトリック化の様子が描かれている。カール大帝の母方はこの西スラヴ人だった。

すなわち、そのポモロ（白海付近）の地に早期ロシア史の多くの謎を解く鍵があるのだ。「フランク王国の年代記」には一般にあまり知られていないことが記されている。デンマーク王ゴッドフレード（ゴッドフリード）は808年スラヴ人の町レリク（Reric）を襲撃し、そこに住んでいた商人を、ユトランド半島のヘデビュにあったとされるSliesthorpに移住させた。9世紀後半ユトランド半島にスカンジナヴィアや神聖ローマ帝国のドイツの田舎町から出てきた移住者が大量に住み着き始める。この地ではローマ・カトリック教会（北の使徒「アンスガール」を代表とした）が積極的に活動していた。これは西スラヴ公達の北東への脱出（カトリック化を拒否）と同時にユトランド半島の貿易中心の衰退をもたらした。西バルトのスラヴ政権の一部は、相変わらず神聖ローマ帝国に属していた。マグデブルグで行われた騎士トーナメント（935年）でマグデブルグ支配下にいたのは、ルス族の王子ヴェレミール、オットン・レデボット（ラテボーラ？）、ルス侯爵、ヴェンツェスラフ、ルーグ公（スラヴ沿岸地方は「ルーシヤ」と呼ばれていた）だ。その時からカトリック・ドイツ人と多神教スラヴ人は互いに反目しあうようになり、状況は悪化した。多神教スラヴ人は東に強力な国家ルーシを建設した時、ルーシ人に自国の文化や言語に慣れさせ、それから長年の敵（ドイツ・カトリック）に対立する形で、東のキリスト教（正教）を受容した（988年）。争いは激しくなり、2国間だけだった争いは、両宗教の本山であるローマとコンスタンティノープルの争いに発展した。これが事実なら、何故有名な門がノヴゴロドにあるのかということを知る一筋の光になる。カトリックの勢力が強くなると、ノヴゴロド人の中にはカトリックの洗礼を受ける者が出てくる可能性があった。正教の地位を確立するために、門扉のレリーフには、カトリックがスラヴ人に対していかに残酷かということを描き、それをスラヴ人に見せる必要があったのだ。

「ロシア・ミレニアム」記念像（1862年）
彫刻家ミハイル・ミケーシンによって制作され、1862年ロシア建国1000年を記念してノヴゴロド・クレムリンの中心に設置された。巨大な地球儀「国家」を取り囲む像は、古代ルーシのほとんど全ての支配者が配置されている。

ノヴゴロド・グラノヴィータヤ（ヴラディーチナヤ）宮殿（右）と鐘楼

福音書写本
（アンドレイチナの福音書）
ノヴゴロド 16世紀

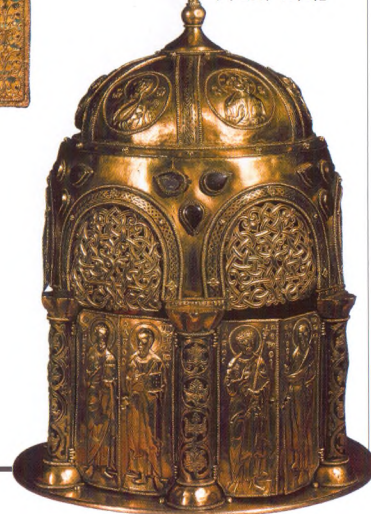
ノヴゴロド・グラノヴィータヤ宮殿の宝

宮殿は1433年大主教エヴフィーミーの命令で建てられた。年代史によると、「外国からの」ドイツ職人とノヴゴロド人が共同で建てたものとされる。1570年イヴァン雷帝はここで宴を催し、その後ノヴゴロドで前代未聞の（若い時から始めた）破壊を続けた。その中の最も劇的なエピソードについて年代記は記述している。「7056年（1548年）夏・・・大公イヴァン・ヴァシーリエヴィチと弟ゲオルギー公は一緒にモスクワから来た・・・。ソフィア聖堂を建立したウラジーミル大公が壁のどこに宝を隠したのかわからなかった。鍵番（聖器管理の聖務者）を問い詰めたが、わからなかった。イヴァン大公は自ら階段をのぼり、壁の右側を壊した。するとそこから金銀財宝が出てきた。それを荷馬車に積んで、モスクワへ帰った」

幸いイヴァン4世はその時ノヴゴロドの宝全ては持ち出さなかった。その中の一部は現在宮殿内で展示されている。展示品の基盤はソフィア聖堂の祭服と聖器物保管室の貴重品とノヴゴロド修道院の貴重品だ。古代の品（11-12世紀）に、職人コスタとブラチラのサインの入ったソフィア聖堂の大シオン（聖体容器，聖パンの入れ物）と呼ばれた貴重な二つの銀製容器がある。博物館ではまた、着色された写本、ノヴゴロド金刺繍工の作品（カラムジンの証言によると、彼らにスカンジナヴィア指導者達が金糸の衣装を注文した）、値がつけられない珍品の数々を展示している。

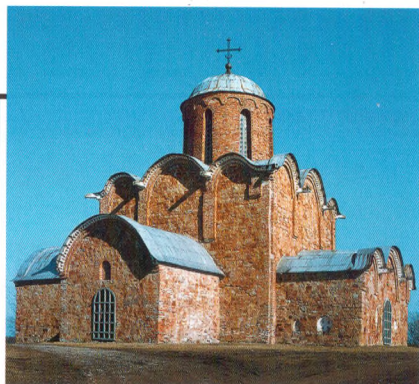
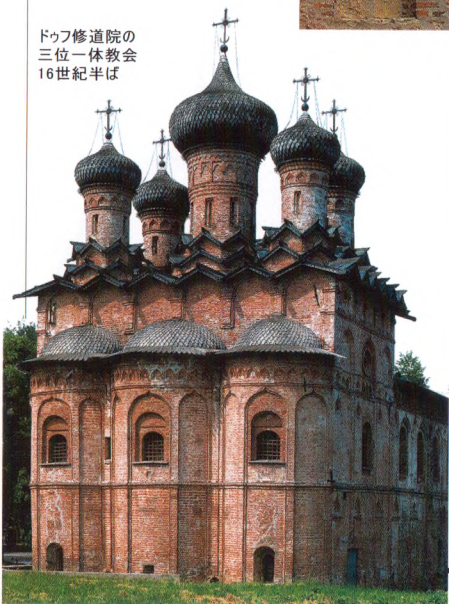
「ソフィア聖堂の宝座の十字架」
ノヴゴロド 1600年

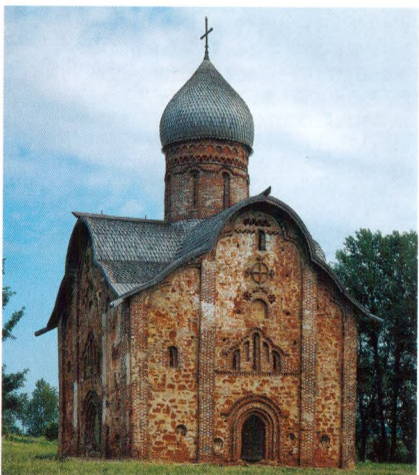
「ソフィア聖堂の銀製クラテル」
ノヴゴロド 職人コスタ
11-12世紀

「ソフィア聖堂大シオン（聖体容器）」
ノヴゴロド 17世紀

ヤロスラーフ邸跡

ノヴゴロドの地形が完全に形成されたのは10-11世紀、町はイリメニ湖の北6kmのヴォルホフ川の両岸に急速に発展していった。ヴォルホフ川の左岸に城塞が建てられ、その対岸、ヴォルホフ川右岸にまもなくして商工地区ができた。この地にヤロスラーフ賢公は自分の屋敷、ヤロスラーフ邸を建てた。

ヤロスラーフ邸が最初に文献に登場するのは1030年だ。「そしてヤロスラーフ大公はヴォルホフ川近くの商工地区に住んだ。ヴォルホフ川は現在石造のニコライ奇跡者教会があるところだ。教会は今でも有名だ」という記述が残っている。言い伝えでは、ヤロスラーフはここに、北ヨーロッパの宮殿よりも優れた宮殿を建てたようだ。伝承を信じるのならば、デンマーク王オーラフ(オーラフの娘インギゲルダはヤロスラーフに嫁いだ)、あるいはデンマーク王クヌーズ2世(カヌート2世)の追跡から逃れた英国鋼鉄王エドモンドの息子達はそこに安息の場所を見つけたらしい。ノヴゴロドがモスクワ・ルーシに併合されると共に、その屋敷はイヴァン3世と彼の後継者の所領となった。

この領地に現存する最古の建物は公(クニャージ)の教会であるニコライ奇跡者教会だ。この教会はウラジーミルの長男ムスチスラフ公によって1113年に建設が始まった。建設は時間がかかり、聖堂の勤行が始まったのは1136年になってのことだ。聖堂の西に六面体の鐘楼がそびえ、それに「ヴェーチェ(民会)の塔」あるいは「グリドニーツェイ(公の親衛隊宿舎)」と呼ばれる多角形の塔の建物(1690年代)が隣接している。これは昔のヴェーチェ(民会)広場に建てられたガスチーヌィ・ドヴォール(アーケード式マーケット)の門の上の塔だ。現在その中にはコヴァレフのスパース＝プレオブラジェーニエ教会の有名なフレスコ画が展示されている。

ドゥフ修道院の三位一体教会 16世紀半ば

コヴァレフのスパース・プレオブラジェーニエ教会　1345年

コジェヴニキの聖ペテロと聖パウロ教会 1406年

教会建築

ノヴゴロドの古代の記念碑の主要部分は、ゼムリャノイ・ゴーラド境のかなり小さい場所に集中している。城塞アンサンブル、ヤロスラーフ邸跡、トルグ(市場)アンサンブルの他に、アントーニー修道院の生神女誕生教会(1117-1119)、ルチエのフョードル・ストラチラート教会(1360-1361)、スパース・ナ・イリイネ(イリイン通りの救世主教会)(1374年,壁画 は1378年フェオファン・グレークによって制作される)、シニーチヤ丘の聖ペテロと聖パウロ教会(1185-1192)、聖ボリスと聖グレーブ教会他があった。1030年ヤロスラーフ賢公は、南のヴォルホフ川上流左岸にゲオルギウス(ユーリエフ)修道院を建て、修道院領地の中心に1119年有名な聖ゲオルギウス聖堂(p.240)を建てた。その近くヴォルホフ川の対岸に、少し後に同様に有名なスパース・ナ・ネレージッツェ(ネレージッツァの救世主教会)(p.240)を建てた。ノヴゴロドの全ての教会は代々受け継がれた技術を持つ地元の石工組合によって建てられたため、同じスタイルで建てられている。寺院は普通4つの柱を持ち、3つの身廊がある。その全てに紛れもなく厳格な美しさが保たれている。

ヤロスラーフ邸(右はニコライ奇跡者聖堂、左はパラスケーヴァ・ピャートニッツァ教会)

イリイン通りの スパース・プレオブラジェーニエ教会(1374年)

ノヴゴロドで古代から崇拝の対象であった教会の一つ。伝承によると、ここに1169年スーズダリ軍から町を護ったノヴゴロドの聖宝「生神女の印」が保存されている。年代記はその事件について次のように記述している。「6667年(1169年)夏、ノヴゴロド人は税金を払いたくなく、別のスーズダリ公アンドレイ(ボゴリュブスキー)に払った。…これを聞き、アンドレイ公はノヴゴロド人に憤怒し、1500人の兵士をノヴゴロドに送った。彼らは白い湖で戦い始めた。アンドレイ軍は多くの人が死んだが、ノヴゴロド側は51人だけだった。それでアンドレイ公はさらに怒り、もっと多くの軍隊を集め、ノヴゴロドへ送った。自分の息子ロマン、多くの軍隊、ムチスラフ公、72人の公とその多くの軍隊を送った…」

パニックになったノヴゴロド人達は非常手段に訴えた。有名な生神女のイコン画を町の壁に運んだところ、奇跡が起き、ノヴゴロド人に有利な状況に変わった。ノヴゴロド博物館に、この話を描写した有名なイコン画「スーズダリ軍とノヴゴロド軍の戦い」(1460年代)が保管されている。

1374年木造の教会は石で再建された。その建築費用は、「教会のある道に住んでいる人」が払い、主教アレクシー自身が成聖式をとりおこなった。

ルチエのフョードル・ストラチラート教会 1360-1361年

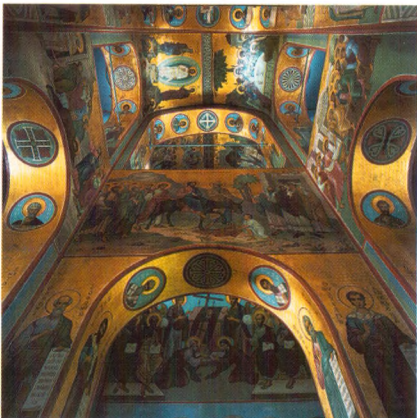
イリイン通りのスパース・プレオブラジェーニエ教会 1374年

ネレージッツァのスパース・プレオブラジェーニエ教会

ネレージッツァの
スパース・プレオブラジェーニエ教会

教会はあまり高くない丘の上にある古代のリューリク邸跡の東にある。そこからヴォルホフ、イリメニ湖、ノヴゴロドが一望できるパノラマが広がっている。教会は、1198年、全ての子供を亡くしたヤロスラーフ・ウラジーミロヴィチ公によって建てられる。この教会に世界的な名声をもたらしたのは壮大なフレスコ画アンサンブルだ（1199年）。第二次世界大戦中ファシスト軍は記念碑を破壊し、その後、修復家達は文字通り粉々の絵画を集めた。復元できたのはごく小さい断片だけだ。フレスコ画は、考古学者たちによって近年屋敷が発見された巨匠オリセイ・グレーチンの作だとみなされている。また、傑出した考古学者であり、ノヴゴロド発掘指揮者であるヤーニンの意見によると、オリセイはムスチスラフ・ロスチスラーヴチ（？-1178）の親戚（妻の兄弟、あるいは妻の姉妹の夫）で、子供の時、ムスチスラフによってビザンテインに連れてこられた。そこでムスチスラフはパレスチナにある州を統治した。オリセイはそこで風景画芸術を学んだと推測することができる。オリセイ・グレーチンの家には広いイコン画のアトリエがあり、そのアトリエからイコン画技術が伝わったとされる。

ユーリエフ（ユーリー）修道院のゲオルギウス聖堂

ユーリエフ（ユーリー）修道院の十字架教会
1761年，1823年

ゲオルギウス聖堂の内装（壁画19世紀末）

もしそうなら、12世紀のノヴゴロドのフレスコ画（ラドガのゲオルギウス教会のフレスコ画を含む）が全て「ギリシャ」様式だった理由を説明することができる。

ユーリエフ（ユーリー）修道院

ノヴゴロドの南のヴォルホフ川左岸に1119年以前に建てられる（一説によると1030年、ヤロスラーフ賢公がキリスト教の洗礼を受け、ゲオルギーという洗礼名を授かった時）。15世紀末までに修道院は広大な領地を持つ裕福な正教の封建領主になる。ノヴゴロドのモスクワ併合後、その領地の大部分は没収された。が、エカチェリーナ2世が教会財産を没収し、国有化した1764年まで、ユーリー修道院には4-5千人の農奴がいたとされる。修道院の中心寺院はゲオルギウス聖堂だ。これは3つの玉ねぎ型頭を頂いた堂々たる建築物だ。聖堂は1119年フセヴォロド・ムスチスラーヴィチ（ムスチスラフの息子）によって建てられた。ノヴゴロドの年代記に建築家の名前は「職人ピョートル」とある。ゲオルギウス聖堂は12世紀ノヴゴロドの記念碑的な公の建築物だった。この聖堂には早期ノヴゴロド・イコン画の傑作である剣を持ったロシア戦士の姿の聖ゲオルギウス（現在トレチヤコフ美術館所蔵）が保存されていた。また、聖堂には12世紀のフレスコ画が断片的に保存されている。大部分はニコライ1世時代の聖堂の修復作業の際、無残にも失われてしまった。修道院の他の建物は18-19世紀のものだ。

ヴィタスラーヴィッツィの「通り」
左はペレードカ村の誕生教会
1531年，
右はマリヤ・ドミートリエヴァ・エキーモヴァの農家

ヴィタスラーヴリッツィ

ヴィタスラーヴリッツィ村は12世紀初頭あるいは11世紀からノヴゴロド領にあったとされる。1187年頃ノヴゴロド人の許可のもと、ノヴゴロド公イズャスラフ・ムスチスラーヴィチ（ムスチスラフの息子）はこの村を弟に与えた。イズャスラフの文書には、ヴィタスラーヴリッツィ村はユーリー修道院の北西にある、この時代までに建てられたパンテレイモーノフ修道院の修道院村として登録されていたと書かれている。

1964年、昔に消え去った村があった風光明媚なミャチーナ湖の岸に、民族建築博物館が創立された。最初にここに運び込まれた寺院はクリツコ村のウスペンスキー教会だ（1595年）。ヴィタスラーヴリッツィで保護された現地の木造建築の他の傑作は、トゥーホラのニコライ教会（17世紀）、ペレドキの誕生教会（1531年）他だ。ヴィタスラーヴリッツィではノヴゴロドにあるほとんど全てのタイプの木造寺院、住居、農家を展示している。

紡ぎ車　18-19世紀
木造民族建築博物館
「ヴィタスラーヴリッツィ」より

ヴィタスラーヴリッツィの民俗アンサンブル

プスコーフのクロムとトロイツキー聖堂

プスコーフ

p. 226

17世紀イコン画のプスコーフの地図

プスコーフは、豊かな歴史を持つ都市国家であり、中世民会共和国の首都で、1348年から政治的に独立した。プスコーフに関する記述が最初に年代記に現れるのは903年のことだ。「プスコーフの町について年代記には誰が、どんな人が建てたのか記述されていない。プスコーフの町はリューリク公とその兄弟達が来る前からあった。…イーゴリはプスコーフのオリガという女性と結婚した」。

イーゴリの妻でスヴャトラフの母、ウラジーミルの祖母オリガ（洗礼名エレーナ，？-969年）はロシア史で最も有名な女性だ。彼女はルーシがキリスト教化し、国家となった時代に生きていた。言い伝えによるとオリガはプスコーフ近くのヴィブツカヤ村で生まれたとされる。

考古学者は今なお誰がプスコーフを建国したか判定していない。その地質を調査したところ、ヴェリーカヤ川とプスコーフ川の合流する岬の文化で急激な変化が1000年で3回あったとされる。まずここには石の墓文化を持つ人々が住んでいた（500年頃？）。それから7世紀頃、粘土・わら・砂・小石などをこねて作った床のある住居を地上に作った人々が移り住み、9-10世紀になって木の丸太小屋を建て、木を敷いて道を舗装し、最初の要塞施設を建てた人々が現れた。10-12世紀プスコーフはキエフ・ルーシの管轄下に置かれていた。キエフ・ルーシの歴史に関係あるのはオリガ公妃の伝説だ。当時プスコーフはノヴゴロドの「郊外の町」とみなされていた。

1499年イヴァン3世大公はプスコーフを息子ヴァシーリーに譲り、ヴァシーリーは1510年プスコーフの民会を廃止し、これ見よがしに民会の鐘を要塞の鐘楼からとりはずした。年代記は、当時「悲しみで泣かなかったのは赤ん坊だけだ」と記している。300のプスコーフの名門一家がモスクワに連れて行かれた。1500以上の屋敷があったザステーニエ（長官ボリスの町）、スレードヌィ・ゴーラドの人々が移住させられた。モスクワの地方長官（ゲルベルシュテインの言葉によると「モスクワの疫病神」）の飽くなき金銭欲、手に負えぬ税金と刑罰は、また次のことをもたらした。カラムジンの筆によると、「不幸な住民達は群れをなして別の地へと去った・・・皆ここからいなくなった・・・」。プスコーフの年代記は悔しそうに結んでいる。「こうしてプスコーフの名誉は消えてしまった」

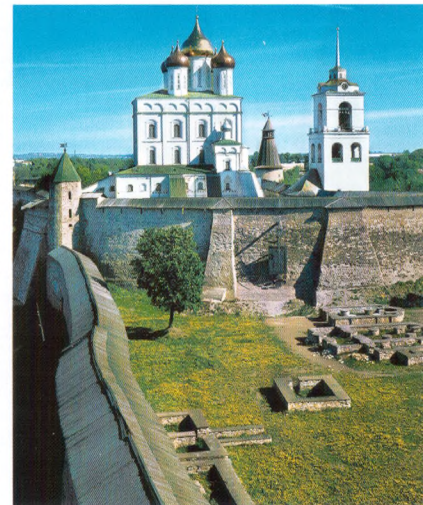
ドヴモントの町

国立プスコーフ
歴史・建築芸術財統合博物館
ПСКОВСКИЙ ГОСУДАРСТВЕННЫЙ ОБЪЕДИНЕННЫЙ ИСТОРИКО-АРХИТЕКТУРНЫЙ И ХУДОЖЕСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ-ЗАПОВЕДНИК
プスコーフ，ネクラーソフ通り7
(Псков, ул. Некрасова, 7)
✆(8112) 16-2517
🕔(11:00～18:00, 休館日：月，毎月最終火曜日
博物館内：
- ポガンキン邸
- 絵画ギャラリー
- ミロージュスキー修道院のスパソ＝プレオブラジェンスキー聖堂
- 役所
- Y.P.スペガリスキーの家博物館と13の分館（N.リムスキー＝コルサコフの屋敷、M.ムソルグスキー他）

プスコーフ・クレムリン
ツーリスト・インフォメーション・センター（役所の建物内）
住所：プスコーフ，クレムリン
Псков, Кремль
✆(8112) 72-2563

プスコーフの主要観光名所
- プスコーフ・クレムリン（クロム）
- イヴァーノフスキー修道院
- スネトゴルスキー修道院
- アレクサンドル・ネフスキー教会
- ザプスコーヴィエの神現祭教会
- ゴールカ丘のヴァシーリー教会
- ウソーハ村のニコラ教会
- パロム村のウスペーニエ教会
- ポロニシ教会他

プスコーフ周辺
- イズボールスク
  ✆(81148) 96-644
- プスコーフ＝ペチョールスキー（洞窟）修道院
  ✆(81148) 21-839
- スヴャトゴルスキー修道院
  ✆(81146) 23-389, 22-665
- モニュメント「氷上の戦い」

イズボールスク、ペチョールスキー（洞窟）修道院行きバスはプスコーフ・クレムリンから出ている

クロム

1581年ポーランド国王ステファン・バトーリーの私設秘書カトリック司祭ピオトロフスキーは日記にこう書いている。「プスコーフに感嘆した。神よ、何と巨大な町だ！まさにパリだ！神よ、ここを征服するのを助けたまえ」「町はかなり長く、北に行くにつれ、狭まっていた。南はヴェリーカヤ川に接し、北にプスコーフ川があり、それは町の中心を流れている。四方に非常に堅固な塔がある・・・」。これはレインゴリド・ゲイデンシュテインが1578-1582年に記したものだ。

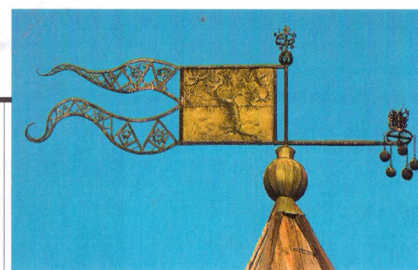
プスコーフ要塞「クロム」の歴史は10世紀にさかのぼる。その時ヴェリーカヤ川とプスコーフ川の間にある細長い岬の水上15-17mの所に最初の石造城壁が建てられた。少し後に木で舗装された通りと最初の石造の教会が現れた。要塞の城壁内部は行政・手工業の中心となり、要塞のそばに商業広場のある広大な商工地区が広がっていた。

12世紀ノヴゴロド主教ニーフォント（？-1156年）の時代、プスコーフに確かに三つの石の教会が建てられた。それは、クロムのトロイツキー（三位一体）聖堂（1137-1140）、パサード（商工地区）のドミートリー・ソルンスキー教会（1143-1146）、ザヴェーリチーのミロージュスキー修道院のスパースキー（救世主）聖堂（1147-1152）だ。同時期にイヴァーノフスキー修道院のイオアン預言者聖堂が建てられた可能性もある（これは通常13世紀のものだとみなされている）。

1240年プスコーフは十字軍に占領された。ノヴゴロド民会の依頼で、アレクサンドル・ネフスキー公（ノヴゴロド貴族の一部との諍い後、1240年冬にノヴゴロドを去っていた）は1万5-7千人の軍勢を引きつれ、プスコーフの地、チュード湖へ軍を進めた。リヴォニア騎士団は「くさび形（▲）」に整列していた。アレクサンドルは真ん中に弱い軍隊を置き、両側に強い軍隊を置いた。ロシア軍の中心を軽く突き破ったリヴォニア騎士団は、強力な左右の部隊に挟まれていた。また、待ち伏せ所に隠れていたノヴゴロド兵が背後から攻撃していた。敵は囲まれ、ロシア人は言った「戦いは偉大だった」。生き残った十字軍兵はチュード湖の氷の上をパニック状態で逃走した。

1266年プスコーフを統治していたのはドヴモント公だ。彼は1266-1269年リヴォニア軍の相次ぐ侵略を撃退し、1299年完全にこれを打ち負かし、大勝を収めた。彼はプスコーフの古代の要塞施設を拡張した（ドヴモントの町）。

北西と西からの脅威が高まってきたため、クロムに隣接する3つの防壁が建てられた。防壁内には次の3つの地区、商業施設のある「長官ボリスの町」（1309）年、「スレードヌィ・ゴーラド（真ん中の町）」、「バリショイ・ゴーラド（大きい町）」（15世紀、16世紀の町境）ができた。町が大きくなるにつれ、バリショイ・ゴーラドはプスコーフ川右岸のザプスコーヴィエまで広がっていった。

バリショイ・ゴーラドの防衛線（壁）の長さは10kmで、防壁は何段にもなり、便利な通路と地下道のある37の塔（そのうち12は現存する）を持っていた。今日まで保存されている塔は全て15－16世紀、地元産の層状石灰岩を積み重ねて建てられた。塔は滑らかな輪郭で、円錐の頂きが切り取られた形をしている。最も注目すべき塔の一つは、1552年に建てられたグレミャーチャヤ塔だ。1510年からプスコーフとその強化を気にかけていたモスクワの命令で、グレミャーチャヤ塔と共に丘の麓に石の「上の柵」（この時代までは木造だった）が建てられた。こじんまりした（高さ20m，直径15m）グラミャーチャヤ塔は、下に広がるザプスコヴィヤの領地、遠くのプスコーフまで監視の目を行き届かせていた。年代記には塔の下に抜け道があったと書かれてある。

ミハイル・ロマノフの即位（1613年）後、クロムは8つの巨大な塔で補強された。このとき、町は国境に近いという有利な状況に関連して、短い経済的発展を遂げる。プスコーフに300の石造の建物、税関、百貨店（アーケード式マーケット）、役所、大砲工場が建てられ、トロイツキー（三位一体）聖堂が再建された。ザヴェリチエ（ヴェリーカヤ川左岸）のドイツ人村にはハンザ同盟の商館が置かれていた。

プスコーフ・クロム（要塞）とトロイツキー（三位一体）聖堂の眺め

ピョートル門の聖門

グレミャーチャヤ塔

ピョートル塔の風信旗

プスコーフのクロム

歴史情報

ドヴモント公の肖像画
「偉大なパナーギヤ（主教が十字架と並べて胸に下げる聖像）」の一部
（「聖生神女の印」の写し）18世紀
ドヴモント（?—1299年）はリトアニアのナリシェナイ公（本名ダウマンティス）で、リトアニア公ミンドヴグの親戚だった。祖国リトアニアでミンドヴグ公に対して陰謀を企て、彼を殺害する。ミンドヴグ公の息子ヴォイシェルグの復讐から逃れ、ドヴモントはプスコーフへ逃げる。そこで彼は正教の洗礼を受け（洗礼名ティモフェイ）、ドミートリー公（アレクサンドル・ネフスキーの息子）の娘と結婚し、プスコーフ公に選ばれた。

16世紀後半、プスコーフを訪れたドイツ人ヨハン・ヴンデレールは、町をローマにたとえた。彼が数えたところ、プスコーフには4万軒もの家があった。これは当時のヨーロッパの大都市と比肩する数だった。

プロロムのポクロフ誕生教会　16世紀

教会建築

15-16世紀プスコーフでは、ノヴゴロドと同様の、商業村の地区代表者による民主制が栄えた。各商業村に一つずつ教会があった。現在それらはプスコーフの景観造形の重要な部分であり、この土地の習慣、世界観を広く反映している。プスコーフの教会の特徴は多機能かつ実用的であることで、壮大なノヴゴロドの寺院や趣向を凝らしたウラジーミル・スーズダリ（後にモスクワ）ルーシのそれとは異なっている。このような合理的な寺院の建設中に、有名なプスコーフ派の建築様式が生まれた。恐らく全ての建築史研究家が記していることだが、プスコーフの教会の創立者達は神・宗教的要素をあまり考慮しなかった。彼らの課題はいかに実用的な寺院を作るかということだった。全ての教会は高い安定性で際立っており、多くの付属建物や広大な地階が設けられた（当時プスコーフの大部分の建物は木造だった。プスコーフ人は頻繁に発生する火災に備え、武器や弾薬を含め価値のあるものは何でも石造の教会に保管した）。また同時にプスコーフの教会群の詩情性については言うまでもない。その独特の優雅さ、粗い壁、全てが優美である。

ゴールカ丘のヴァシーリー教会
1413年以前

ミロージュスキー修道院

修道院は、東はヴェリーカヤ川、南と北はヴェリーカヤ川に流れ込むミロージュカヤ川に囲まれた岬にある。長さ400mの低い柵で囲まれた修道院の総面積は約1.6ヘクタールだ。この場所はかつてプスコーフの地の重要な文化の中心だった。唯一保存された写本「イーゴリ遠征物語」はこの修道院で写されたと言われている。

修道院の主教会であるスパソ＝プレオブラジェンスキー聖堂は、ノヴゴロド大主教ニーフォンの依頼で1150年代（別の説では1140年代）に建てられ、2-3年後に建築作業が終わると、壁画が描き込まれた。聖堂のフレスコ画はほとんど全て保存されている。制作者はビザンティンの画家かロシア人画家だと言われているが、定かではない。壁画の手法、洗練された色調、構図はその土地の伝統ではなく（12世紀半ばにはまだなかった）、ビザンティンの影響を受けている。壁画の注文主ニーフォンは積極的なコンスタンティノープル宗教政策の普及者で、多くのことにおいて、東の正教を模範とした改革をすすめた。そのことから、やはりビザンティンの画家に協力を求めたのではないかと考える。

鐘楼のあるバロムそばのウスペーニエ教会 1521年

彼は周知のとおり、主題のプログラム開発を念入りに行い、キリストのストーリー性のある壁画を制作した。それらはプスコーフ人のキリスト教化に最大限の効果を発揮した。キリスト教の重要な意義と神秘性が描かれた主題の配置は厳格なヒエラルキー（位層制）に従っている。中央の（至宝座）後陣に「деисус デイスス」（中央にキリスト、左右どちらかにマリア、ヨハネ、下に大天使や福音書使徒を配置した絵）が描かれている。玉座のキリストと立っている生神女（聖母マリア）と預言者イオアン（ヨハネ）。彼らの下に聖体機密の台がある。クーポラの下にはキリストの復活、クーポラのドラム部には生神女、天使、使徒、その下には巻物を持った預言者達。パンダンティーフ（ドーム下部の四隅にある球面三角形の部分）には4人の福音伝道者。奉献台（聖体礼儀のパンとぶどう酒を準備する場所）と輔祭（最下級聖職者）のフレスコ画は預言者イオアンの伝記と大天使ミカエルの行伝を讃えている。信徒が立っていた場所の丸天井、壁、柱の上部には旧約・新約聖書の話が描かれている。その中でもキリストの受難週間、磔、嘆きは情感溢れる筆致で描かれてある。フレスコ画はまず、砕いた煉瓦と石灰を混ぜ合わせた表面に黄土で下絵が描かれた。鉱物染料は輸入ものだけが使われ、ビザンティンのアジアの領から天藍石、孔雀石（当時ウラル鉱山はまだ発見されていなかった。そこにはまだロシア人が住んでいなかった）、赤と黄色の染料が持ち込まれた。

城壁を持っていなかったミロージュスキー修道院は、モンゴル軍のプスコーフ襲来時、最初の被害地となった。しかし修道院の衰退は、モンゴルの襲来ではなく、プスコーフのモスクワ併合と関係がある。18世紀末かつての豊かな修道院は、みじめな生活を送っていた。このことを物語っているのが、スパソ＝プレオブラジェンスキー聖堂の古代フレスコ画アンサンブルの保存状態だ（聖堂の維持費がなかった）。16世紀聖堂の壁は、白く塗りつぶされ、漆喰を塗られ、フレスコ画のことは忘れ去られていた。壁の下のフレスコ画が偶然発見されたのは19世紀の修復作業中だ。これらの壁画は後にネレージッツァ通りの救世主教会のフレスコ画が消失した後、ロシアで唯一完全な姿で保存された12世紀のフレスコ画アンサンブルになった。

フレスコ画「大天使ミカエル」　ミロージュスキー聖堂

ミロージュスキー修道院

プスコーフの地 イズボールスク

プスコーフの南西(25km)ゴロジシェンスコエ湖とマリスコエ湖の間の高い丘の上に有名なプスコーフの城塞町だったトルーヴォル町とイズボールスクがある。この二つは10-12世紀ルーシの西の国境警備の町だった。

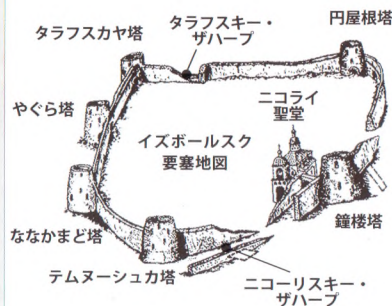
歴史情報

「ヴァリャーグ招致伝説」(リューリヒによって描かれた絵,上図)、これは「過ぎ去りし年月の物語(原初年代記)」(p.230参照)の一部である。ここではフィンランド湾とラドガ湖の岸で互いに反目しあった種族たちが「・・・自分たちに言った:《我々を統治し、正しく裁いてくれる公を探しに行こう》。そして外国のルーシへヴァリャーグを求めて行った。このヴァリャーグの中のあるものは、ルーシといい、あるものはシュヴェーディ(スウェーデン)といい、あるものはノルマーヌィ(ノルマン)、アングルィ(アングロ)といい、他にゴットランドもいた…。ルーシはスラヴに言った。《我らの国は大きくて、豊かだ。しかし、秩序がない。来たりて、公として君臨し、我らを統治せよ》。そして、3人の兄弟がその氏族とともに選ばれ、彼らは全ルーシを率いてやってきた…」(リハーチー編纂)18世紀アンナ女帝時代のドイツ人歴史家達(恐らくゴットリーブ・バイエル,「ノルマン説」の創始者)は年代記の「海の向こう」はスカンジナヴィア半島だと考えていた。が、スカンジナヴィア半島で国家が成立したのは、原初年代記のヴァリャーグ招致伝説の年代よりほとんど1世紀後(ハラルド1世890−945,ノルウェー統一)だとされている。このような説は政治的に使われていた。だが、考古学、言語学、人類学(19世紀末—20世紀前半)の研究が進むにつれ、ノルマン説には、それを裏付ける根拠がないことが明らかになってきた。とはいえ、他に有力な説もなく、リューリクとその兄弟の起源をめぐっての論争は現在も続いている。ノルマン説支持者はトルーヴォルの名をゴート・スカンジナヴィア語の方言に求めてみたが、徒労に終わった。それよりも、ケルト語に起源を求めた方が早いようだ(ケルト語.trywyr「三人の男」)。20世紀初頭優れた言語学者で古代ロシアの大家のシャフマトフが研究していたケルト・スラヴ人の関係は考えられているより、古く、深いものだということがわかる。

イズボールスク

イズボールスクが初めて年代記に記されるのは862年。当時イズボールスクはプスコーフへの敵の侵入を防ぐ役割を果たしていた。その創立について「Степенная книга(17代の家系図,ウラジーミル1世からイヴァン雷帝までのロシア史が書かれた年代記)」(16世紀)は次のように述べている。「当時プスコーフはまだなく、国で初めて建てられた町をイズボールスクと呼んでいた」。伝承によると、イズボールスクはノヴゴロド人スロヴェンの名にちなんで当初スロヴェンスクと呼ばれ、後にスロヴェンの息子イズボルにちなんでイズボールスクと呼ばれるようになった。ヴァリャーグ人招致の美しい伝説によると、「長兄のリューリクはノヴゴロドに、次兄のシネウスはベラオーゼラ(白湖)に、三男(末弟)のトルーヴォルはイズボールスクに居を定めた」とあるが、二つの伝説を裏付ける物的証拠はない。

1240年イズボールスクはリヴォニア騎士団に占領され、その後プスコーフが陥落し、ノヴゴロドに直接の脅威が迫った。老朽化したイズボールスクの要塞施設は早急の再建が必要になった。1303年イズボールスクは年代記にあるように、「新しい場所」、すなわち、「ジェラヴリ(鶴)丘」に建てられた。新要塞は当初石の塔をもつ木造建築だったが、その後石の城塞が増築され(1330年〜)、16世紀初頭まで8回にわたる包囲攻撃をしのいだ。特に長く続いたのが1349年のリヴォニア騎士団による包囲だったが、陥落しないイズボールスクはドイツ人に「鉄の町」と呼ばれた。1368年多くの城壁破壊兵器を製造したリヴォニア騎士団は再びイズボールスク占拠に向かった。プスコーフの年代記によると、ドイツ人は「あらゆる手を尽くした」が、「何もできなかった」とある。14世紀末火器が出現すると、イズボールスクは塔を新たに建て、城壁を増強した。

リヴォニアの戦い(1558−1583)でイズボールスクはプスコーフ国境防衛線の環に入っていた。防衛線の環にはその時までに建てられたペチョールスキー(洞窟)修道院の要塞施設があった。それらは全て、17世紀のポーランド軍侵攻の際も、重要な役割を果たした。北方戦争(1700−1721)の勝利でロシアは国境を南に広げ、その後イズボールスクは戦略的意義を失った。要塞内の警備兵は呼び戻され、要塞建設作業は中止された。

イズボールスク要塞の城壁

現在イズボールスク要塞は印象深い廃墟であり、その中から半壊した塔がそびえている。最も高く(高さは現在も約19m)どっしりしたやぐら塔、唯一の直角三角形の塔であるタラフスカヤ塔、要塞の入口を覆い、擁護していたテムヌーシュカ塔等だ。南には鐘楼がある。これは19世紀まで信号用として使われており、その大音響はプスコーフ中に響き渡ったという。6番目の塔クーコフカ(円屋根)は最も古く、要塞が木造だった時代に建てられた。東の方向、鐘楼のそばにタイニク(隠し通路)がある。勾配のある階段状の回廊は三角形の天井に覆われ、泉の井戸に続いている。包囲された間もそこから水をくみ、要塞内に運んでいたのだ。城塞内部の鐘楼(塔)のそばに15世紀前半に建てられた(鐘楼は19世紀)ニコライ聖堂が立っている。城壁内には他に2つの教会がある。誕生教会(15世紀)と小さいセルギー・ラドネジュスキー誕生教会(18世紀,長く商工地区のなかった場所に建てられた)だ。

トルーヴォルの跡地

トルーヴォルの跡地はイズボールスクの北西700mの岬の高台にあり、そのすそはゴロジシェンスコエ湖、マリスコエ湖に向かって延びている。複合施設は17世紀土塁跡で、木や草が生い茂った廃墟は恐らく北部ルーシの最も古い石造の要塞、現在も使われている古代の墓地だ。多くの古い墓は14−15世紀の巨大な石で覆われている。現存する15世紀の石の十字架の一つは巨大で、人の背よりも高い。これは「トルーヴォルの石」と名づけられた。かつてこの十字架の一つにヴァリャーグ招致伝説の3人の一人、トルーヴォルが眠っていると思われていた。トルーヴォル跡地の古墳の盛土は、忘れがたい印象を残す。その北の南に深いくぼ地がある。自然の守りがない南には、蹄鉄の形をした人工土塁と溝跡が保存されている。長い間跡地には木と土の要塞施設しかなかったとみなされていたが、発掘により11−12世紀の石の城壁、岬に石の塔が発見された。蹄鉄型の土塁の東端にニコライ教会がある。これが建てられたのは、跡地が自分の意義を失った時だった。

イズボールスク要塞の銃穴

プスコーフ＝ペチョールスキー（洞窟）修道院

大鐘楼上の大天使(p.253)

ウスペンスキー・プスコーフ＝ペチョールスキー（洞窟）修道院はサンクト・ペテルブルグの南西340km、プスコーフの西70kmのプスコーフ州の中心地ペチョールィにある。ここのカメネツキー川が流れる深い盆地の砂の斜面で、かつて修道僧が最初の洞窟（ペチョーラ）を発見した。その洞窟の最初の言及は1392年とされる。1470年ここにデルプト（エストニアの町タルトゥの旧名）の聖職者イオナ（?–1489）が住み、彼の提唱で1473年に初めての洞窟昇天教会が建てられた。

半世紀後、昇天教会は再建され、拡張されたが、修道院の施設及び土地はモスクワ・ルーシのものになり、モスクワ大公の代表者ミシューリ・ムーニヒンによって治められた。彼の任務は、修道院をリヴォニアとの国境の守りの拠点にすること、外交的任務を行うことだったが、それに関してムーニヒンは既に経験があった（彼はエジプトのモスクワ大使で、ある説によると、彼のニックネーム、ミシューリ「エジプト人」はここから来たものだとされる）。1520年代ミシューリは自分の資金でここに石造の建物を建てた。

ピョートル塔のある聖門

要塞施設

1558–1565年修道士パフヌーチー（パーヴェル・ザボロトヌィ）を盟友に得たコルニリン修道院長の時、修道院の周りに9つの塔がある堅固な防壁が建てられた（全長約810m）。1581–1582年新しい要塞が難航不落であることは、ステファン・バトーリー軍の包囲によって確認された。ステファンはこの時、次のように書いている。「ペチョールィはまだ無傷だ。ボルネミシーのハンガリー軍もファレネベクのドイツ軍もなすすべがない…。この場所は聖なる場所で、（城壁に開けた穴に）近づいてもその先に行くことができない。ロシア人はわら束を射るように、射撃してくる」。1592年修道院はスウェーデン人の手に落ちるが、一晩だけだった。1611–1616年偽ドミートリー2世パン・リソフスキー（カラムジンによると「騎士のように勇敢だが、彼の仕事は搾取者のようだ」）が占領しようとし、それから総司令官グリゴーリー・ホッケヴィチ率いるポーランド軍が侵攻してきた。1701年修道院は4度もスウェーデン軍に包囲された。

上の柵（高台の要塞堡塁）から見た修道院の眺め

上空から見た聖門の眺め

修道院と大鐘楼のある下のアンサンブルの眺め

上の柵

修道院アンサンブル

3世紀に渡って形成された修道院アンサンブルが世界に誇る美しさであることは疑いない。アンサンブルの特徴は深い盆地にあることだ。修道院の入口は聖門がある通用塔で飾られている。聖門は修道院の上部に通じており、そこにはミハイロフスキー聖堂（19世紀前半）や一つの冠頂のニコライ教会（1565年）がある。ニコライ門は修道院の下部に通じている。そこではさまざまな時代に建てられた美しい5つの空間がある鐘楼（1532年）、ブラゴヴェーシェンスカヤ・トラペズナヤ教会（1541年）、装飾が豊富に施されたリジニツァ（17世紀）などの建築物がある。ウスペンスキー洞窟聖堂と18世紀増築されたポクロフスカヤ教会から修道院墓地である天然洞窟の入口へ行くことができる。

ニコライ・ナドヴラートナヤ教会

ニコライ教会の内装

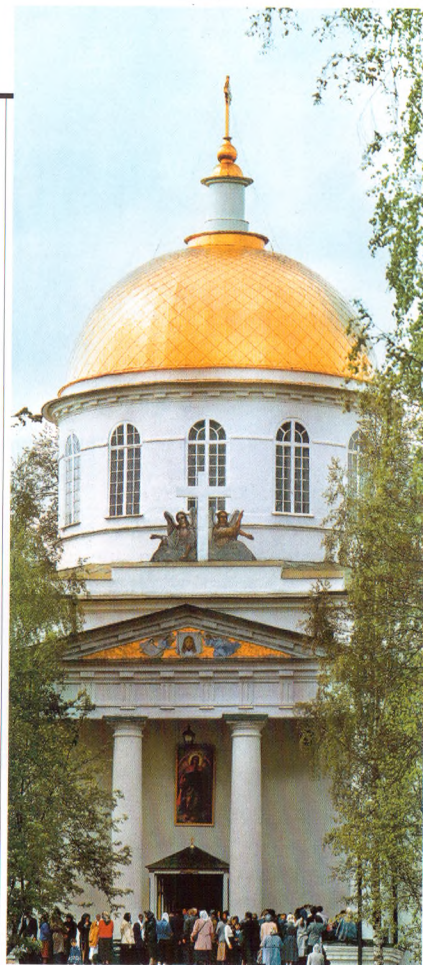
プスコーフ＝ペチョールスキー（洞窟）修道院

ウスペンスキー聖堂

修道院内で最も古い聖堂は地下の洞窟である。これは、初期キリスト教のカタコンベ（墓地）をモデルにした。しかし、その創始者イオナがプスコーフ三位一体聖堂の聖職者達に聖堂の成聖式をしてほしいと頼むと、彼らは建物が伝統的でないことを引き合いにだして、断った。その時イオナはノヴゴロド大主教フェオフィルの認可を求め、彼は聖職者達に成聖式（祝福）を行うように命じた。儀式は1473年8月15日、生神女マリヤ就寝祭（永眠した日）に行われた。この日が修道院設立の日だとされる。ウスペンスキー聖堂の中央部に生神女マリヤのイコン画がある。1759年洞窟聖堂の上にポクロフ（上を覆う）生神女マリヤ寺院、修道院の裁判施設が建てられた。

聖洞窟

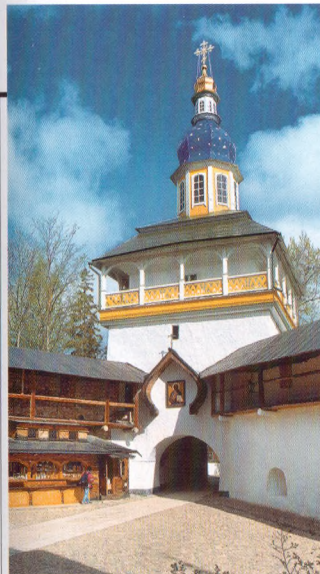
長さ約200mの天然洞窟には7本の通路があり、それらは異なる時代に延ばされ、拡張された。洞窟内の気温は常に約5℃に保たれており、ミイラの自然保存に理想的な微気候をつくりだしている。

洞窟内の埋葬者の正確な数は不明だが、1万人以上だとされている。洞窟の壁には埋葬者の名が書かれた陶器（セラミック）と石灰のプレートがあり、スヴォーロフ家、ルチシェフ家、ナシャキン家、ブトゥルリン家、ムスチスラフ家、プーシキン家、プレシェーエフ家、クトゥーゾフ家、ムソルグスキー家のといったロシアの有名な一家の名前が書かれてある。

ミハイロフスキー聖堂

ウスペンスキー聖堂とポクロフスキー聖堂

ピョートル塔のある聖門

修道院の主（大）鐘楼

大鐘楼

プスコーフ洞窟の大鐘楼はロシアの鐘楼の中でも巨大さを誇る。上の鐘つき堂は17世紀に増築され、信号用鐘として定められていた。プスコーフの鐘は鐘の中の舌ではなく、鐘自体を振り動かして鳴らす。この古代ロシアの鐘の鳴らし方が保存されているのは、現在洞窟修道院だけだ。鐘楼の東側、ウスペンスキー聖堂のある境目、特別な塔の中に16世紀からある時計が設置されている。1586年の目録によると、「その鐘楼に時刻を告げる鐘があった。鐘は時計とつながっており、大鐘の下にある中鐘は1時間ごとに、その下の二つの鐘（ドイツ製）は15分か30分ごとに音を鳴らした」とある。

ミハイロフスキー（ミハイル）聖堂

1812年ナポレオン軍の侵攻の際、古代のプスコーフの防衛線は戦の準備ができていなかった。ポーロツク（ベラルーシの都市）が占領された時点で、プスコーフの占領も時間の問題だった。1812年10月6日プスコーフ洞窟修道院の修道士達は非常手段に訴えた。彼らは修道院から、1581年バトーリーの包囲からプスコーフを救った奇跡のイコン画「生神女昇天」を持ち出し、それを「掲げた」。そして翌日プスコーフの周りで十字行（十字架とのぼりを持った信徒の行列）を行った。すると同日、ポーロツクはフランス軍を撃退した。ロシア軍の司令官ピョートル・ヴィトゲンシュテインはプスコーフ県知事に次のように書いている。「…祈りは聞き届けられた…。ポーロツクの敵は完全に撃破され、前衛部隊によってレーペリへ追いやられた」。

「プスコーフの奇跡的な解放」を記念して修道院に新しい寺院を建設する決定が下された。1815年アレクサンドル1世はプスコーフの県知事シャホフスキー公によって提示されたルイージ・ルスカの設計案を承認した。1820年「教会は外から建てられ、覆われた」。1827年までに内部装飾が施され、大天使ミカエル（ロシア語読み：ミハイル）の名で成聖式が行われた。教会の壁の一つに1812年に亡くなった兵士の名が刻まれた2つのプレートが設置された。また、聖堂には聖骸「聖タチヤナの右手」が保管されている。

修道院イコン画の祝祭日の持ち出し

モスクワ

p. 227

モスクワは世界最大の都市の一つ、最大国家の首都、1000年近い歴史を持ち、力強い近代的なメガロポリス、人口約1000万人、経済金融力のある町だ。

考古学者達はネグリナヤ川とモスクワ川の合流地点、現在クレムリンのあるボロヴィツカヤ丘には常に人が住み続けたとしている。最後の氷河後退時から最初の移住者がモスクワ川岸に住み始めたのは石器時代で、人々がここで生活をしたのは青銅器時代、鉄器時代初期だ。しかしモスクワが初めて年代記に登場するのは1147年、ゲオルギー・ウラジーミロヴィチ(ユーリー・ドルゴルーキー)が自分のスーズダリ公国の東のはずれ「モスコフ(モスクワ)」にノヴゴロド・セヴェルスキー(ノヴゴロド・西)公スヴャトスラフを呼んだ時である。モスクワで2人は会議をし、その後ゲオルギーは年代記によると、お客(スヴャトスラフ)に「昼食」を出した。1156年ユーリーはボロヴィツカヤ丘に約2ヘクタールの広場を囲む小さい木造の要塞を建てた。

モスクワの興隆、モスクワが古代ロシア国家ルーシの主要都市になったのは、アレクサンドル・ネフスキーの孫で、イヴァン・カリターの名で有名なイヴァン1世ダニーロヴィチ(?-1340)公の治世だ。キプチャク汗国内に勢力をもち、汗国の役人を買収した彼は、モスクワをその破滅的な襲来(モンゴルのくびき)から解放し、モスクワ公国の経済力を増大させ大事業を展開した。彼の孫、ドミートリー・ドンスコイ(1350-1389)(モスクワ大公(1359〜)、ウラジーミル大公(1362〜))はイヴァン・カリターによって蓄積されたモスクワの経済力を上手に運用した。1357年ドミートリーは白亜のクレムリンを建てる。自分の首都を強化し、彼は真っ向からキプチャク汗国と対立した。モンゴル軍との2度の武力衝突は2度ともモスクワ軍の勝利に終わり、モンゴル軍に壊滅的敗北をもたらした(ヴォージェの戦い(1378年)、クリコヴォの戦い(1380年))。その後、ドミートリーはキプチャク汗に許可を求めず大公位を息子に譲った。彼の治世、モスクワはセルギー・ラドネジュスキー教会の後ろ盾のもとルーシとモンゴル軍の戦いの砦となり、ルーシの絶対的な政治・宗教の中心になった。

ロシア国家の首都の地位を得るのに決定的な役割を果たしたのは、イヴァン3世(1440-1505)だ。彼はモスクワ周辺のロシア公国を併合した。コンスタンティノープル陥落後、イタリアに避難していたビザンティン皇帝(コンスタンティヌス11世)の姪ソフィヤ・パレオーログを妃に迎えたイヴァン3世は、モスクワは第三のローマであると宣言し、ロシアの紋章に新しい国家の象徴、双頭の鷲が加えられた。

16世紀のロシアの紋章

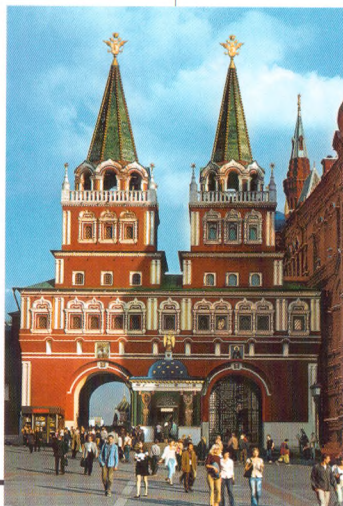
1497年イヴァン3世は国印を承認した。印の表には槍で龍に一撃を加える騎士像が、裏には頭上に王冠を抱いた双頭の鷲が描かれている。騎士は大公(イヴァン3世)を表したものだが、その姿は聖ゲオルギウス像と似ていたため、現在ロシア人は国印に描かれているのは、イヴァン3世ではなく、モスクワの守護聖人ゲオルギウスだと思っている。

モスクワ創立者ユーリー(ギュルギー,ゲオルギー)ドルゴルーキー公像 1954年(彫刻家C.オルローフ, A.アントローポフ, N.シュタム)

フョードル・アレクセーエフ「モスクワ・クレムリンと大石橋」1800年

クレムリンのスパースカヤ塔とヴァシーリー聖堂の眺め

聖ヴァシーリー聖堂

リューリク王朝の末裔イヴァン4世とその息子フョードルの時代の16世紀モスクワの発展は、中世後期のほかの政治的中心地の発展とあまりかわらなかった。常に外国からの襲撃に備え、モスクワはいくつかの要塞の線で囲まれていた。現在観光名所となっているモスクワのクレムリンは当時城塞だった。その壁の向こうにルーシを統治する皇帝（ツァーリ）や大貴族（ボヤール）の屋敷が広がっていた（後者の屋敷は後に国家規模の建築物をたてるために取り壊された）。ここには総主教やモスクワ公国の主要な寺院があった。クレムリンの東にあった旧商工業地区（キタイ・ゴーラド）には大使館の建物、造幣局、税関他重要な市の建物、十分な保存所のある数多くの百貨店がキタイ・ゴーラドの防壁によって守られていた。次の強化ライン（防衛線）はツァーリ・ゴーラド（ベールィ・ゴーラド：現在ブリヴァールノエ・コリツァーの境。エカチェリーナ2世時代、古い城壁の場所に建てられた）を取り囲んでいた。

それからやっと最後のライン、スコロドム、クレムリンの南、モスクワ川の急カーブのザモスクヴァレーチエ村だ。この最後の防衛線（現在のサドーヴァヤ・カリツォー）は長い間モスクワの境だった。動乱時代のドラマチックな事件と1610-1612年のポーランド軍のモスクワ占領はその略奪をもたらしたが、経済的な威力は失墜しなかった。ロマノフの即位（1613年）と共にモスクワは防衛施設を固めるというより、飾られた。建築、イコン画の特徴がかわり、全て上流非宗教的な性格、鮮やかさと多様さ（モスクワの雷文模様）を持つようになった。このような新しいモスクワの芸術観から後にピョートル1世は離れ、ペテルブルグ建設の時にはモスクワ建築家の力を借りなかった。モスクワの町は商人の美意識にあうように整備された。

赤の広場と聖ヴァシーリー聖堂

クレムリン（城塞）は17世紀まで主に木造建築によって囲まれていた。石造りの大部分は、城塞と寺院で、その中で最も有名なのが聖ヴァシーリー聖堂だ（ポクロフスキー聖堂「壕の上の」）。この聖堂は、イヴァン雷帝によって1555-1561年、クレムリン（城塞）とキタイ＝ゴーラドを隔てる壕の端に建てられた（建築家バルマとポースニク）。聖堂には初期、凝った頭を頂いた8つの小教会があった。それらは中央の多角形の尖塔のある聖堂（ポクロフスキー）の周りに集められた。1588年、教会が集まった場所に、ヴァシーリー聖下の宝座が、1世紀後（1670年代）には尖塔のある鐘楼が加えられた。聖堂は広い広場に建てられた。広場は15世紀末イヴァン3世の命令で取り壊されたキタイ・ゴーラドの木造建築物があった場所を含んでいた。広場はマーケット用につくられ、初期はトルグ（市）と呼ばれていた。これが今日、世界最大の広場、赤の広場である。現在の名称になったのは恐らく18世紀初頭だが、何故「赤の」広場なのか、1530年代に広場にあった処刑用高台で流された血の色にちなんでか、それともクレムリンの赤レンガの城壁にちなんでのことか、はっきりしていない。広場が玉石で舗装されたのは19世紀のことだ。1812年のモスクワ大火事後、クレムリンと広場を隔てていた深い壕は埋め立てられ、その後広場は著しく拡張された。1818年広場にミーニンとポジャルスキー像（彫刻家I.マルトス）が設置され、それより少し前に「上の百貨店（現在のグム百貨店）」が再建された。19世紀末、歴史博物館が建てられたことにより、広場は北の眺めが閉ざされ、現在ある姿となった。

ヴォスクレセンスキエ門
17世紀

クレムリンとモスクワ川の眺め

赤の広場

モスクワ クレムリン

モスクワのクレムリンは世界で最も大きい建築アンサンブルの一つで、歴史的・芸術的記念物の宝庫で、ロシア国家の象徴だ。

現在のクレムリンの姿になったのは、1485-1495年大公イヴァン3世の時代だ。彼の治世に有名な格言「モスクワは第3のローマであり、第4のローマはありえない」が生まれ、新しい城壁の建設にイタリア人の建築家アリストテリ・フィオラヴァンティ、アントン・フリャージン、ピエトロ・アントニオ・ソラリ、マルコ・ルッフォ等が加わった。同時にクレムリン敷地の老朽化した簡素な大公寺院の場所に、再建されたウスペンスキー聖堂（1475-1479年）、アルハンゲリスキー聖堂（1505-1508年）、ブラゴヴェーシェンスキー聖堂（1484-1489年）、リゾポロジェーニエ教会（1484-1485年）、カジョンヌィ・ドヴォール（国庫，税務庁）（1484-1485年）が立った。それらはモスクワの優位特権を認め、その権力とゆるぎなさの象徴となった。イヴァン3世の時代、クレムリン内

「鐘の王様」1733-1735年
鋳造イヴァンとミハイル・モトリーン

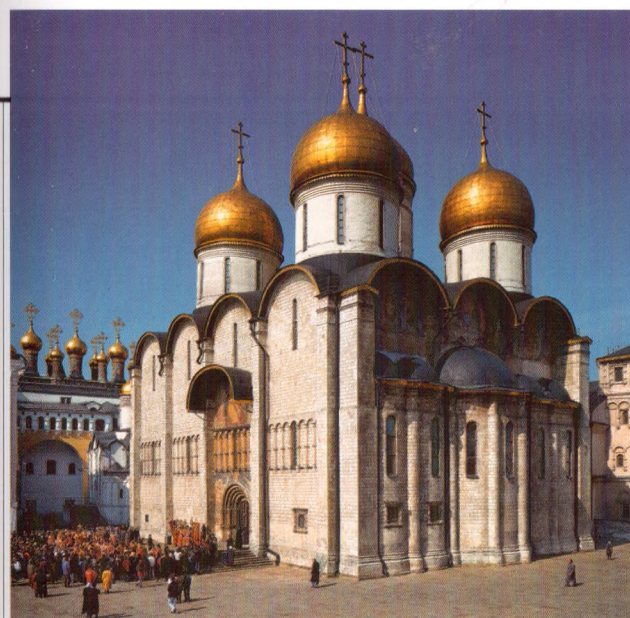
の住居部と行政部の建物のアンサンブルが形成された。クレムリン内に今日あるのは、大クレムリン宮殿（1838-1849年再建）、グラノヴィータヤ宮殿、（1487-1491年）、聖玄関ホール（宮殿の一部15世紀）、黄金の女帝の宮殿（16世紀）、古い地階の上に建てられたテレム宮殿（1635-1636年）だ。17世紀クレムリンの古い建造物は取り壊され、新たに総主教宮殿と12使徒教会（1653－1655年）、ポテーシュヌイ宮殿（1652年;19世紀再建）が建てられた。クレムリンの広場は現在約28ヘクタール、城壁の

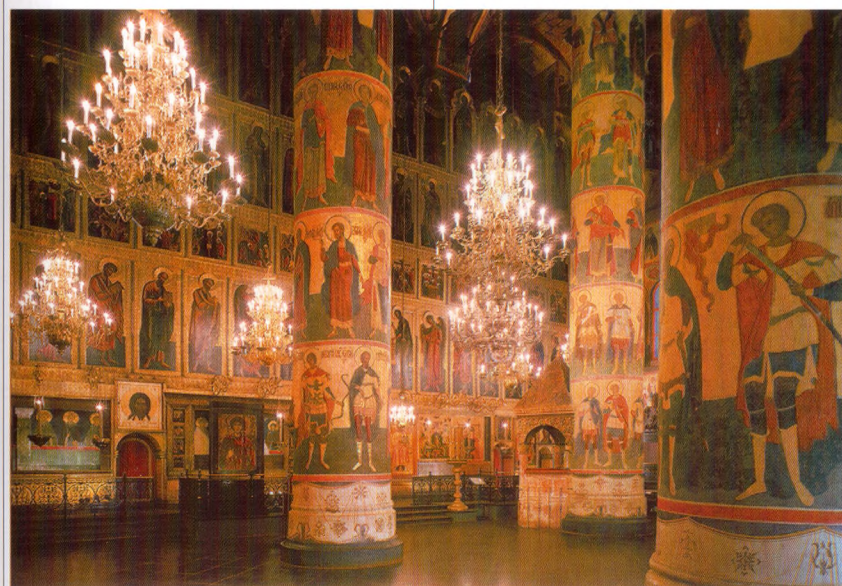
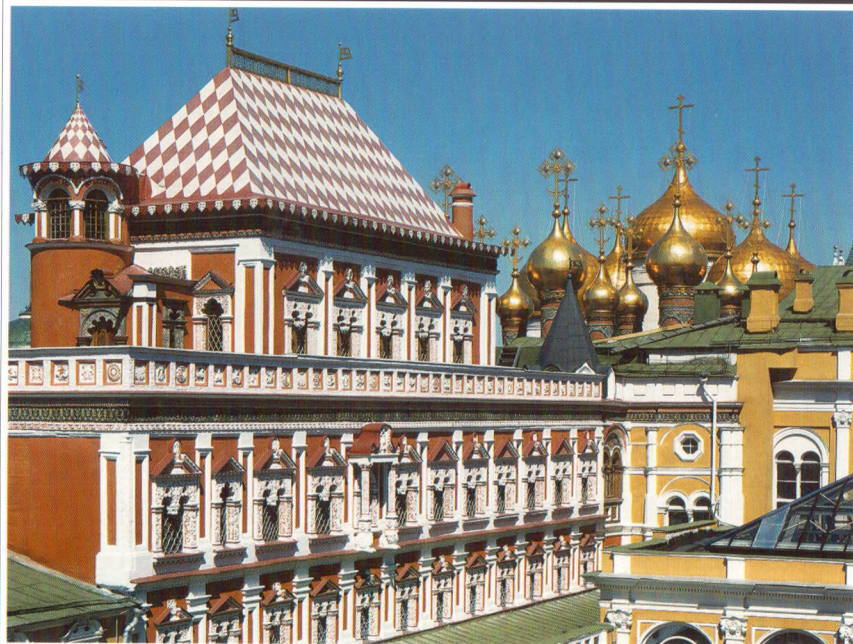
鐘楼「イヴァン大帝」とイオアン・レストヴィチニク教会

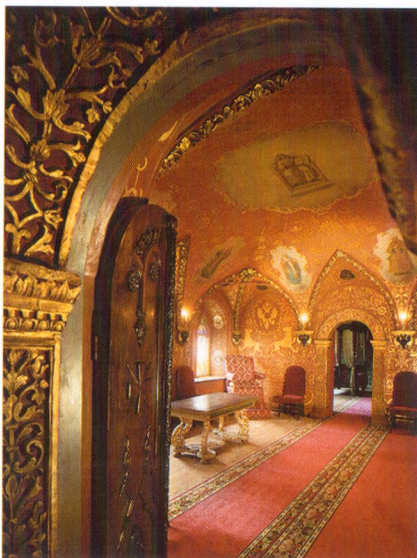
長さは2235m、高さは土地の起伏によって幅があるが、5mから19mだ。防衛施設は20の塔で、そのうち17世紀に建てられた19の塔は、多角形の尖塔を頂いている。その後一番高いスパースカヤ塔の高さはほとんど70mに達した。クレムリン内でスパースカヤ塔は巨大な三層の鐘楼「イヴァン大帝」（81m; 1505-1508年, 1600年増設）の次に高い建物だ。

「大砲の王様」1586年 鋳造アンドレイ・チョホフ

ウスペンスキー聖堂
（右は総主教邸）

ウスペンスキー（昇天）聖堂

生神女昇天教会が初めてクレムリンに現れたのは1327年、イヴァン・カリターの治世だ。1472年モスクワ大公イヴァン3世が滅亡するビザンティンの最後の皇帝の姪ソフィヤ・パレオーローグと結婚した際、新教会の建築が採択された。建設は地元の建築家に依頼されたが、2年後、天井まで積み上げていた建物は崩れてしまった。作業再開のため、イヴァン3世はその傑出した才能で「アリストテレス」と呼ばれていたイタリア技師フィオラヴァンティを招聘した。1475年3月フィオランヴァンティはモスクワに到着し、ここへ他の同胞達への道を開いた。モデルとして彼に推薦されたのは、ウラジーミルのウスペンスキー聖堂（アンドレイ・ボロギュブスキーの注文で12世紀に建てられた5つの円型冠頂がある十字架状クーポラの聖堂）だ。1479年までに建設は完了し、その後1917年までクレムリンのウスペンスキー聖堂はロシア国家の重要な寺院だった。

資料によると1481年職人リオニシー、ティモフェイ、ヤレツとコーニャが聖堂のイコノスタス用の一連のイコン画を制作した。イコノスタス内にその古代の聖像画がある（「聖ゲオルギウス」,12世紀,「スパス・ヤロエ・オコ」14世紀）。同年彼らによって始められた聖堂の装飾作業は1513年から1515年まで続けられ、約1世紀半後、修復された（1642-1643）。

イコノスタスの見えるウスペンスキー聖堂の内装

テレムノイ(テレム)宮殿

ロマノフ王朝の創始者ミハイル・ロマノフのための宮殿は1630年代サボールナヤ広場の東にある古いツァールスキー(皇帝)宮殿の敷地に建てられた(建築家B.オグルツォフ,T.シャルーチン,A.コンスタンチノフ,L.ウシャコフ)。高い屋根があり、「シャーシュカ(西洋碁)」の碁盤の目のように彩色された驚くべき美しい邸宅は、構造上、16世紀の2階建て宮殿に増築したものである。公用階の主要な数ホールの設計にはアンフィラーダ(続き部屋)の原則が適用され、後にこれは皇帝宮殿に必須となった。正面アンフィラーダの部屋はほとんど同じ面積で、正方形で、切れ目のない丸天井で覆われている。戸口は彫刻模様のあるポルタール(П字型正面玄関,中庭入口)で装飾され、壁と天井の表面は一面、題材のある絵で装飾されている。ここにあるタイル張りの暖炉はツァールスコエ・セローと同じものだ。

テレム宮殿の邸宅の一つ

テレムノイ(テレム)教会群

ツァーリ(皇帝)の邸宅の室内教会コンプレックスはいくつかの時代の異なる教会を含む。最初に建てられた教会は聖エカテリーナ教会で、女帝の住居部の重要な教会だ(1627年)。後にヴェルホスパースキー教会(上の救世主教会,別称:黄金の柵のスパス・ネルコトヴォルヌィ教会)、皇帝の宮殿付属教会(1635年,建築家B.オグルツォフ,T.シャルーチン,L.ウシャコフ,A.コンスタンチノフ)が建てられた。それらの上にキリスト磔教会(1679-1681)があり、これはピョートル1世の兄、フョードル・アレクセーヴィチの時代に建てられた。その後オシプ・スタルツェフはこれらの教会を11の同じタイプの円形冠頂のある一つの屋根で連結した(1680年代)。

グラノヴィータヤ宮殿

宮殿は1487-1491年に建てられ、15世紀に建てられたイヴァン3世の国家豪邸のアンサンブルの一つだ。コンプレックス(複合施設)には同一の土台上に建てられたいくつかの建物があり、渡り廊下と翼部で行政の建物とつながっていた。その部屋の中で現存するのは、グラノヴィータヤ宮殿だけだ。グラノヴィータヤ宮殿はイタリア人建築家マルコ・ルッフォ、ピエトロ・アントニオ・ソラリの指揮で建てられ、彼らは正面ファサードを4面体の白い石灰岩で塗装した。建物の1階には家政部があり、2階には皇帝の公用玉座として用いられた祭壇の天蓋とホールがあった。

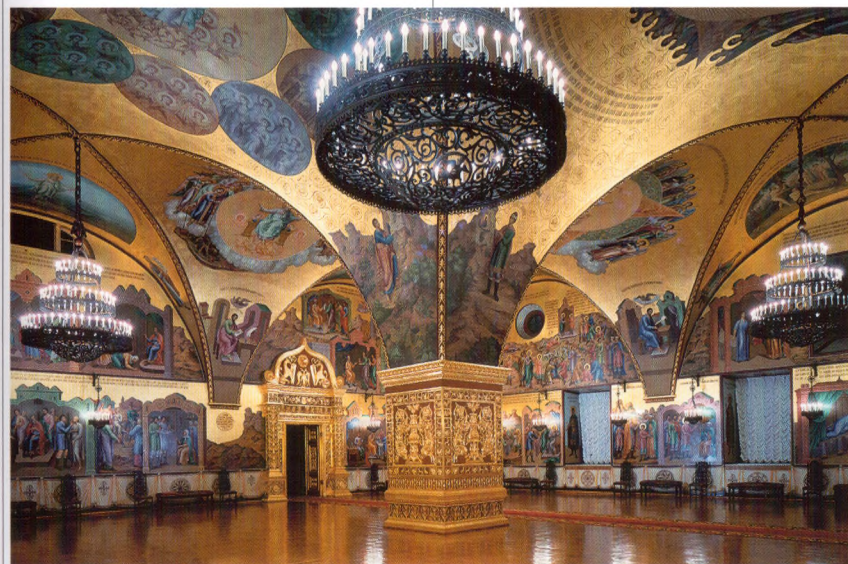
聖天蓋

公用玉座の間は大きな部屋(495㎡,高さ9m)で、中世に特徴的な十字架の丸天井で覆われ、中央の柱で支えられている。玉座の間の壁画が最初に描かれたのは16世紀後期だが、1668年画家シモン・ウシャコフによって改装され、1880年代パレフの画家ベロウーソフ兄弟によって完全に描きかえられた。宮殿入口前にある宝座は細長いホールで、金箔が施されたリブで溝付けされた丸天井で覆われ、どっしりしたポルタール(正面玄関)で装飾され、豊富な彫刻と金箔で覆われている。

ピョートル時代以前のルーシの慣習で、皇帝一家の女性と子供は儀式や式典の参列を禁止されていた。そこで彼らがグラノヴィータヤ宮殿で起きていることが見られるように、宝座の上にのぞき窓のついた隠し部屋が造られた。

聖天蓋から聖堂広場への出口を装飾しているのは彫刻が施された白石の「赤ポーチ」、1698年の悲劇的な事件の無言の目撃者だ。当時怒り狂った銃兵達はここからピョートル1世の親戚や近親を投げ落とした。初期のポーチには金箔の尖塔のついた屋根があったが、それは1737年の大火災で焼失してしまい、その後再建されなかった。

グラノヴィータヤ宮殿の玉座の間

聖人伝を持つ聖戦士の姿をした大天使ミカエル

アルハンゲリスキー聖堂

聖堂は1505-1508年イタリア人建築家アレヴィズ・ノーヴィーによって、1333年、イヴァン・カリターの注文で建てられた寺院のあった場所に建てられた。重厚な6本の柱のある新しい聖堂の建物はこれまでの伝統に従い、高いドラム部の上に5つの冠頂を抱いていたが、どっしりした付け柱と2段のコーニスによる壁の分割は、ザコマーラ(外壁上部の2本の柱の間の円形ひさし部分)の深い「貝殻状」浮彫装飾同様、ロシア建築の新しい様式になった。現存する壁画の一部は16世紀末のもので、一部は1652-1666年のものだ。その時ヴォログダ、コストロマー、ヤロスラーヴリから職人達が呼ばれた。作業を指揮したのは有名なシモン・ウシャコフとステパン・リャザーネツだ。中央イコノスタス(1680年代)には古いモスクワ派イコン画の模範とされる聖堂イコン画「大天使ミカエル」(14世紀末-15世紀初頭,上図)が保存されている。アルハンゲリスキー聖堂は15-17世紀にロシア大公と皇帝の納骨所があったことでも知られている。聖堂内にはイヴァン・カリター、ドミートリー・ドンスコイ、イヴァン3世、イヴァン4世(雷帝)等ロシア史上伝説的な人物が葬られている(全52名)。納骨所としての役割は18世紀ペテルブルグのペトロパヴロフスキー聖堂にとってかわられる(p.32)。

アルハンゲリスキー聖堂の内装

ブラゴヴェーシェンスキー(金色の冠頂のある)聖堂

聖堂は大公用の教会で、14世紀後半の建物の建築を先取りしていた。モスクワ大公の結婚式や子供たちの洗礼が行われた聖堂の壁画は、1405年、3人の優れたイコン画家、アンドレイ・ルブリョフ、プローホル・ゴロジェッツ、フェオファン・グレークによって描かれた。これらの画家は3段イコノスタスのイコン画を描いた。そのイコノスタスは保存され、1484-1489年の再建後、聖堂に移された。三つのクーポラのある石造りの建物は、職人クリフツォフ、ムィーシュキンによって地階に建てられた。2人はウスペンスキー聖堂の建設失敗で知られている。その初期の(非常に優雅な)姿、後(1560年代-1570年代)に増築で拡張された姿は、現在残っている9つのクーポラの建物から容易に推察することができる。1508年、聖堂内部は有名なイコン画家ディオニシーの息子フェオドシーの組合によって描かれた(フレスコ画の一部は保存されている)。後にフレスコ画は何度も新しくされ、部分的に重ね塗りされた。16世紀半ば聖堂の床はロストフ・ヴェリーキー聖堂から運ばれた碧玉のタイルで覆われた。当時聖堂の拡張・装飾作業にあたっていたヴェネツィア職人が制作した有名な「イタリア」彫刻のある正面玄関の設立もほぼ同時期にあたる。

ブラゴヴェーシェンスキー聖堂のイコノスタス

ブラゴヴェーシェンスキー聖堂の正面玄関
(画家シモン・ウシャコフによって1686年までに制作されたフレスコ画)

モスクワ クレムリン

武器庫

「皇帝ミハイル・ロマノフの兜」
1621年
職人ニキータ・ダヴィドフ

「ユーリー・ドルゴルーキーの銀聖餐杯」
12世紀

武器庫の至宝

クレムリンの武器庫の最初の言及は1508年とされる。有名なクレムリンの武器工場は同時に他の工場(厩舎国庫、ツァリーツィナ、ゴスダリョーヴァ、銀の宮殿)と共にモスクワの宮殿の奢侈品を製造していた。イヴァン3世の時代、公国の至宝の保管庫として2階建ての石造りの国庫(1485年)が建てられた。これは18世紀火災で焼失する。動乱時代とポーランド侵攻時代(17世紀初頭)、国庫はほとんどすべて荒廃したが、ミハイル・ロマノフの即位(1613年)後、クレムリンの工場活動は再開され、国家の政治経済成長めざましい17世紀後半には、その高価な製品は、多くの大使からの贈り物と共に急速に皇帝の宝物庫を満たしていった。18世紀初めピョートル1世の命令でモスクワの優れた職人が新首都ペテルブルグに招聘され、1720年、ピョートルはクレムリンの全ての保管所の調査実施とその警備と確保を命令した。1726年それらはマステルスカヤ(工房)と武器庫という名前で統一され、元老院の管轄に置かれた。1754年モスクワ大学初代学長アルガマーコフは、元老院に宝物のための特別なギャラリーを開設し、1週間に1度伝説的な皇帝の王冠・王錫を希望者に公開するよう提案した。1756年建築家ドミートリー・ウフトムスキーの指揮で、博物館として最初の武器庫が建てられた。しかし、それはヴァシーリー・バージェノフによる新しいクレムリン宮殿の建設に関連して、エカチェリーナ2世の命令で取り壊された。博物館用の新しい建物は、かつてボリス・ゴドゥノフの宮殿があったトロイツキエ(三位一体)門のそばに1806-1810年建築家イヴァン・エゴトフによって建設された。ここの7ホールで博物館の常設展が行われていたが、1850年代コンスタンチン・トンによって1851年までに建てられた新しい建物に移された。革命後、博物館に個人コレクション、修道院、寺院、モスクワ・クレムリン総主教宮殿からの宝物が寄贈された。また、ペテルブルグの冬宮にあるダイヤモンドの間のロシア皇帝の宝物も所蔵されるようになった。

「皇帝アレクセイ・ミハイロヴィチの黄金の大皿」
1667年 武器庫の職人
L.コンスタンチノフ, I.ユーリエフ

時計「百合のブーケ」
1899年「ファベルジェ」工房
職人ミハイル・ペルヒン

武器庫のロシア歴代皇帝の王冠

モスクワにおけるクレムリンの城壁を除く中世の石造りの建築は、主に17世紀の建築物だ。これはまず、多くのモスクワの教会が残ったものだ。それらは古代寺院建築の伝統とはあまり関連がない。ノヴゴロド、ウラジーミル、古代ロシア国家の諸都市同様、モスクワでも「公(クニャージ)の聖堂」(いずれも公の資金で建てられた宮廷教会。この建築の特徴は「公の家族のためのバルコニー」二階桟敷だ)というものが君臨していた。公の寺院は建築的現象というより、歴史的現象で、封建的分割と分封公の破壊荒廃と共に消え去った。一番の修道院コンプレックスは、公民の建物と村の教会(後にそれらは「プリハツキー」と呼ばれた)だ。17世紀のモスクワの村寺院は非常に構造が似ていた。それらは小さく、ほとんど立方体の大きさだった。小さい玉ねぎ頭のクーポラは、キリスト教を象徴する装飾物になった(宗教的アトリビュートの一つ、熱い蝋燭の灯を連想する)。それらは「国民にわかりやすい」色彩の豊かさと装飾性を引き立たせている。18世紀のモスクワの建築家は退屈な装飾を恐れたようだ。最初にこのような「国民的な」寺院になったのはクレムリン城壁そばのポクロフスキー聖堂(聖ヴァシーリー聖堂)だ。(p.256)

英国屋敷

英国屋敷

キタイ＝ゴーラド,
ヴァルヴァルカ通り

クレムリン外で唯一の16世紀初頭の民間建築の記念物だ。建物は、プスコーフの衰退後すぐにモスクワに来た商人イヴァン(ユーシカ?)・ボブリーシェフの注文でプスコーフの職人によって建てられた。昔この建物はプスコーフの住居に必須の増築であった木造のテラム(階上の間)を持つはずだった。1556年イヴァン雷帝はこの宮殿を英国の大商人に贈った。

16-17世紀この中に英国貿易代表機関の事務所があった。1649年チャールズ1世の死刑に激昂したロマノフ朝第2代皇帝アレクセイ・ミハイロヴィチの命令で代表機関は解散させられた。

プーチンキの生神女誕生教会

ストラスヌィ・ブリヴァール
そばプーチンスキー横丁

この教会は、モスクワで最後の多角形尖塔のある教会ということで有名だ。教会は1649−1652年に建てられ、冠頂の周りに4つの窓の無い多角形の尖塔、多角形の尖塔のある鐘楼、ポーチがある。16世紀に人気のあった玉ねぎ頭の装飾多角形尖塔の完成は、正教の建築の本質に合致していた。クーポラの下は神の世界と人間の世界をつなぐ空間であるが、この多角形尖塔の冠頂には窓が無く、建物のイデオロギーを破壊していた。プーチンキの誕生教会が完成した年(1652年)、有名な宗教改革者ニーコンはロシア正教を旧派と新派に分裂させ、「5つの冠頂、多角形尖塔の教会は決して造るべからず」と命令した。しかし、このお触れの後も多角形の尖塔の人気は衰

プーチンキの
生神女誕生教会
ストラスヌィ・ブリヴァール
そばプーチンスキー横丁

ベルセネフの聖ニコライ教会

ザモスコヴォレチエ
ベルセネフスカヤ川岸通り

ニーコンの改革の後に建てられた最初のモスクワ寺院の一つ。教会は1650年代商人アヴェルキー・キリーロフの資金で建てられた。彼の有名な邸宅はこの教会と通路で結ばれていた。

ヤキマンカの
イオアン戦士教会

ベルセネフの
聖ニコライ教会

カザン教会

赤の広場

ポーランド侵攻のモスクワ解放(1612年)を記念して、

ポジャルスキー公によって赤の広場に建てられた古い教会があった場所にロマノフ家の資金で1632年に建てられた。

ニキートニキの三位一体教会

キタイ・ゴーラド, ニキートニコフ横丁

キタイ・ゴーラドで恐らく一番有名な教会だ。建物の鮮やかで表現力豊かな装飾は、17世紀後半のモスクワ村の寺院建築様式を先取りしていた。教会は1622年、ヤロスラーヴリからモスクワに移り住んだ商人グリゴーリー・ニキートニコフによって建てられた。木造のニキータ教会のそばのキタイ＝ゴーラドに住み着いた彼は1630年代に自分の家族のための教会を建設した。それが彼の後継者たちによって完成したのは1650年代だった。コンプレックスはまさにこの5つの冠頂の寺院、それに隣接する小さい食堂、一つの冠頂のある二つの別棟(ニキータ・ムーチェニクを祀った南棟はニキーチトニク家血縁の納骨所)、三段の多角形尖塔の鐘楼、二段の回廊とどっしりした尖塔で覆われたポーチから成る。建物のファサードは白石装飾や釉薬をかけたタイルで装飾されている。イコノスタスはモスクワとヤロスラーヴリの職人によって1640年代に制作された。

ヤキマンカのイオアン戦士教会

ザマスクヴォレチエ,
バリシャヤ・ヤキマンカ通り

1709−1713年に建てられた教会は、恐らく古いモスクワ建築の最後の記念物だ。ここではヨーロッパの影響を強く受けて発達した新しいスタイルの特徴が見られる(八面体の鐘楼、巨大なバロックの渦巻装飾等)。設計者は、ペトロパヴロフスキー聖堂(p.32,33)の有名なイコノスタス制作をトレジーニと共に手がけたイヴァン・ザルードヌィとされる。

カザン教会

ボリショイ劇場 1850年代

クトゥーゾフ大通りの凱旋門 1827–1834年

18–19世紀の記念碑

18–19世紀の有名なモスクワの歴史的建築物は、全てサドーヴォエ・カリツォー（環状線）（周囲の長さ約15.6m,16の広場がある）の境に集中している。このモスクワ中心の環状線は、かつてゼムリャノイ・ゴーラド（要塞堡塁）があった場所に1812年以降に敷設された。

18–19世紀のモスクワ建築と同時期のペテルブルグ建築の主な違いは、何より、モスクワの建築家が調和したアンサンブル、既存の建物と新しく建設する建物の建築的相互依存を全く目指さなかったことにある。そのためクレムリン城壁外で、あちらこちらに点在している建築名所は見るが、ペテルブルグが誇りにしているような建築的空間装飾は全く見られない。

18世紀初頭、ピョートル1世によるペテルブルグ以外の場所での石造建物の建設禁止令とモスクワが首都としての地位を失ったことは、モスクワの建築の発展を停滞させたが、18世紀末に新しいブームが始まった（バジェーノフ, カザコフ）。

1812年ロシアを揺さぶったモスクワのナポレオンへの明け渡し。ナポレオンのものとされる言葉に次のようなものがある。「もし余がペテルブルグを手にいれたらロシアの頭脳を手に入れたことだ。モスクワを手に入れるということはロシアの心を手に入れたということだ」。早秋（9月2日）フランス軍は無人のモスクワの町に入った。9月4日の夜、今まではっきりされていない理由で、町の様々なはずれから火が放たれ大火事が発生し、ほとんど全ての古いモスクワの木造、石造建築物が焼失してしまった。10月6日ナポレオン軍はモスクワから退去を始めた。ナポレオン軍はモスクワに滞在した1ヶ月で約7万人の兵士と将校を飢餓とコサック兵との小競り合いで失うという大損害を受けた。火災後、モスクワは復興されたが、大貴族や商人の都としてではなく巨大な商業・産業、科学・芸術の中心として再建され、たちまち劇場、博物館、科学研究所の数で首都ペテルブルグを凌駕するようになり、科学的・知的エリートの都になった。

ヴォロビヨーヴァ丘
M.V.ロモノーソフ記念モスクワ大学 1950年代

噴水「民族友好」国民経済達成博覧会（現全ロシア博覧センター） 1954年

マネーシュ広場

キエフ駅近くの橋 2002年

20世紀のモスクワ

1918年3月11日ソヴィエト政権はモスクワに移り、モスクワは再びロシアの首都となった。この時からモスクワは再整備が行われ、新しい建築法の見本市のような様相を呈するようになった。また、それぞれの時代、義務的に昔の通りや広場の忘れがたい跡を残すべきだともみなされていた。この時恐らく初めてモスクワ開発計画プランが練り上げられ（それまでは計画なく無秩序に建てられていた）、サドーヴォエ・カリツォー（環状線）の境でモスクワの集中的な開発が始まった。

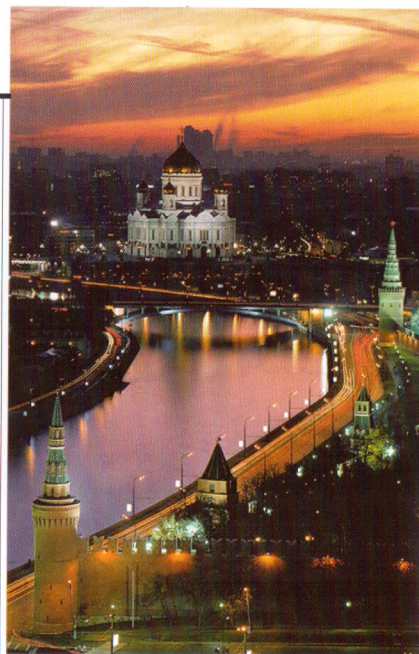
ここで首位をしめていたのは、戦後1940年代末から1950年代にかけて建てられた有名な「スターリン・高層ビル」だ。これは26階から32階の高層ビルで、同じ設計で建てられた。全部で7つあり、一部はサドーヴォエ・カリツォー上に造られ、一部はサドーヴォエ・カリツォー外に造られた（モスクワ大学、レニングラード大通の旧ホテル「ソヴェツカヤ」）。スターリン時代の他の有名な建築物は、オスタンキノの国民経済達成博覧会（ヴェー・デー・エヌ・ハー、ВДНХ）で、この建設のためにソ連時代最高峰の建築家・画家達が参加した（B.シューコ, B.ゲリフレイフ,B.ヨハンソン, A.デイネーカ, M.サリヤン）。

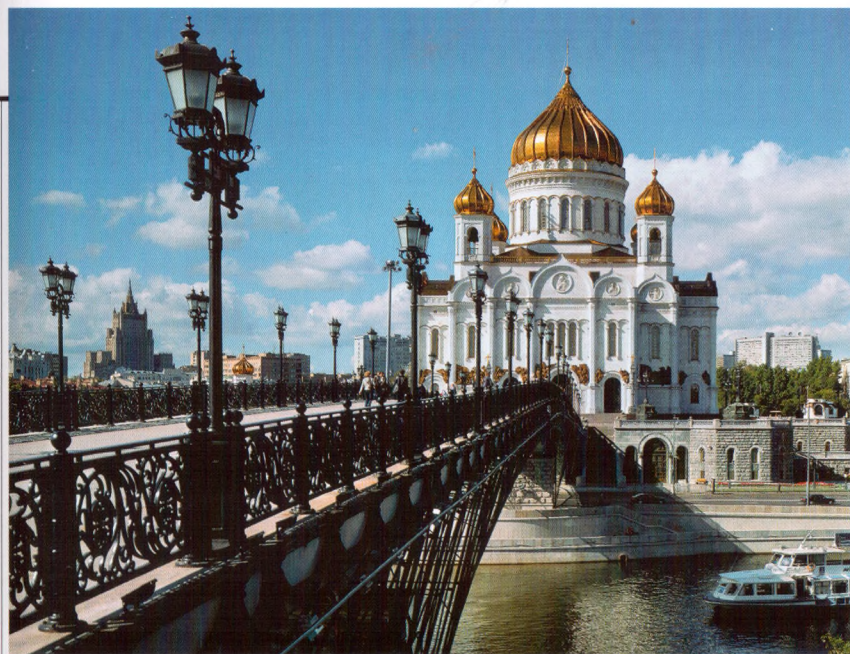
「モスクワ国際音楽の家」クラスノホルムスカヤ川岸通り

新モスクワ

ソヴィエト後期のモスクワ建築は、昔のモスクワ時代の伝統に則っている。鮮やかで重厚感ある建物は芸術的価値ではなく、大きさで驚嘆させる。建築家が多くの細部ディテールを均等にしようとしたことで、アンサンブルは抽象的なアプローチに苦しんでいる。

1990年代最大の建築プロジェクトは、「スパセーニエ(救世主)キリスト教会」として有名な巨大なキリスト誕生教会の建物の再建だった。この教会はもともと1839-1883年コンスタンチン・トンの設計によって建てられた。コンスタンチンは勤勉な建築家だが、よく建築様式の決まりを無視していた。そのため、ペテルブルグでは皇帝ニコライの寵愛を受けていたにも関わらず、歴史的な建造物の建設からは外され、実用的な建物(モスクワ駅,p.139)の建設しか任されなかった。彼によって建てられた教会はモスクワで最も高い聖堂(高さ93m,十字架を入れると102.1m)になり、1812年の祖国戦争で戦死した兵士たちの巨大な記念物になった。その内部装飾にはペテルブルグとモスクワの職人、彫刻家ピョートル・クロット、ニコライ・ラマザーノフ、フョードル・トルストイ、画家ヴァシーリー・ヴェレシャーギン、コンスタンチン・マコフスキー、ヴァシーリー・スーリコフが参加した。建設は1812年12月25日のアレクサンドル1世の宣言と共に始まった。「多くの邪悪な敵、6ヶ月にもわたる包囲からロシアが救われたのは、神の御力のおかげである。神に感謝し、古都モスクワに救世主キリストという名の教会を建てる。この寺院が長く栄えるように…」。

ロシア艦隊300周年記念碑

クレムリンの塔とキリスト救世主聖堂が見えるモスクワ川の眺め

しかし1931年ソ連政権の決定で寺院は破壊され、その場所に新しい生活を象徴する巨大なピラミッドの様相を呈し、レーニン像を頂くソヴィエト宮殿の建設が計画された。が、技術的な理由でこの計画は断念され、教会の場所に有名な「モスクワ」温水プールが設けられた。1990年代のキリスト救世主聖堂の再建はロシアにおける正教の伝統の復活と過去の価値観への回帰を象徴するはずだった。しかしこの決定の妥当性は今でもなお疑念を呼んでいる。教会は大きすぎ、折衷主義(いろいろな様式が混じりあっている)で建築的傑作ではない。教会内部は風景画、モザイク画、彫刻で飾られている。一部は初期のものを復元したものだが、一部は19世紀につくられたものだ。教会の断片と一部は、オリジナル破壊後、ドンスコイ修道院とトレチヤコフ美術館に保管されている。

モスクワ川にかかる歩道橋から見るキリスト救世主教会

近年、モスクワの新しい観光名所になったのは、ロシア艦隊300周年記念像だ(1997,建築家Z.ツェレテリ)。船の道具を積み重ねてつくった巨大なブロンズ像で、ロシア艦隊の創始者であるピョートルは、15-16世紀のマスト帆船に似た船の舵輪の後ろにいる。また、新しいミレニアム(2000年)にクラースヌィエ・ホルムィ(丘)にモスクワ国際音楽の家が建てられた。建物はモスクワにクラシック音楽の演奏家のための近代的なコンサートホールがないという理由で、優れた音楽家ウラジーミル・スピヴァコフのイニシアチブで建設された。音楽の家で最初のコンサートが行われたのは2003年だ。建物はモスクワ川のコスモダミアンスカヤ川岸通りの建築アンサンブルの中心になった。反対側の左岸に古いノヴォスパースキー修道院が立っている川岸の光景が開けている。

誕生(キリスト救世主)教会の内装

モスクワ トレチヤコフ美術館
プーシキン記念国立造形芸術美術館

アンドレイ・ルブリョフ
イコン画「トロイツァ(三位一体)」 1420年代

国立トレチヤコフ美術館
(主な展示物：11世紀から20世紀初頭の芸術)
住所: ラヴルーシンスキー横丁10
(Лаврушинский переулок, 10)
Ⓜ「トレチヤコフスカヤ」(Третьяковская)または「ポリャンカ 」(Полянка)
🕓10:00–19:30 (展示会場への入場は18:30まで), 休館日:月
✆(495)230-7788
(495)951-1362
ガイドツアー問い合わせ:
✆(495)953-5223

トレチヤコフ美術館はモスクワで最大級の美術館で、国民芸術の至宝だ。美術館はモスクワの商人であり、工場主だった創始者パーヴェル・トレチヤコフ(1832-1898)の名前を冠している。美術館の設立はトレチヤコフがコレクションの基盤となった初期の絵画を購入した1856年とされている。

トレチヤコフは後に専門家と相談のもと、近代の画家の秀作(シーシキン、ポレノフ、スーリコフ、レーピン、ペロフ,クラムスコイ、 ヴェレシャーギン他)や古代ロシアの巨匠の作品、イコン画の買い付けを行い、それによって芸術的価値の高い貴重なコレクションが形成された。トレチヤコフはそのコレクションをザモスヴォレーチエ・ラヴルーシンスキー横丁の自邸に置いていたが、後に自邸に美術館を増設し、1881年から一般公開するようにした。1892年トレチヤコフが美術館をモスクワに寄贈したとき、その中には1300点の油絵画があった。トレチヤコフの死後まもなくして、モスクワに遺贈された屋敷と美術館は、ヴィクトル・ヴァスネツォーフによって設計された有名な装飾ファサード(1901年)でつながれた。現在ここではトレチヤコフ美術館の約10万点の収蔵品の中で選りすぐりの作品を展示している。

カール・ブリュロフ「馬に乗る貴婦人」 1832年

ヴィクトル・ヴァスネツォーフ「三勇士」 1898年

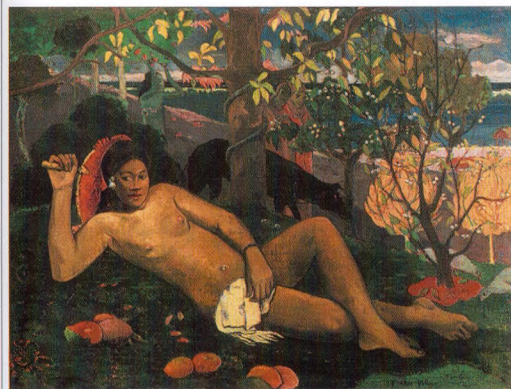
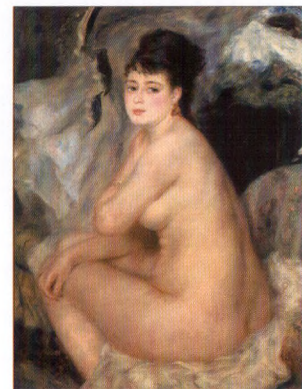
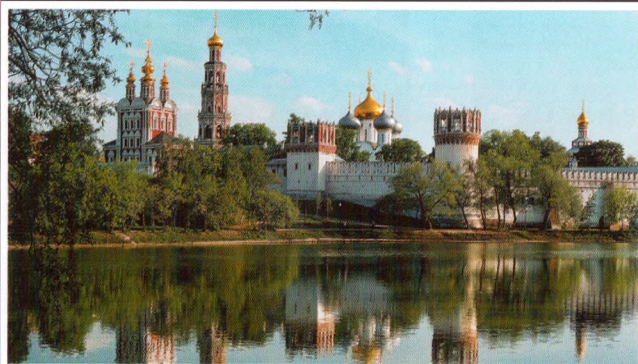
ヴァシーリー・スーリコフ「貴族婦人モロゾヴァ」 1887年

今日モスクワには60の博物館・美術館がある(分館を入れると90を超える)。この数はペテルブルグより若干少ないが、その中にはクレムリンの博物館、歴史博物館、トレチヤコフ美術館、国立プーシキン記念造形芸術美術館などの巨大なものがある。

A.S.プーシキン記念
国立造形芸術美術館
住所:ヴォルホンカ通り12
Ⓜクロポートキンスカヤ(Кропоткинская)
🕓10:00-19:00, 休館日: 月 ✆(495)203-7412

A.S.プーシキン記念造形芸術美術館(クレムリンの南西500mのヴォルホンカにある)は19世紀末、ペテルブルグのロシア美術館と同時に創設され、初期はアレクサンドル3世の名前を冠していた。コレクションの基盤になっているのは、モスクワ大学の建築・古代研究室のコレクションと著名なエジプト学者V.S.ゴレニシェフのエジプトコレクションだ。ロマン・クレインによって古典主義様式で設計された美術館の起工式は1898年に行われ、建設作業は1912年に終了した。今日美術館は世界でも最大規模の収蔵品数を誇る。館内ではボッティチェリ、レンブラント、ルーベンス、ヴァン(ファン)＝ダイク、スネイデルス、クールベの作品が展示されている。印象派・後期印象派のコレクションにはモネ、ルノアール、ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ、マティス、ピカソなどの傑作がある。また、館内の展示室ではヨーロッパやアメリカの博物館のユニークな傑作展も開催している。

レンブラント・ハルメンス・ヴァン・レイン
「老婦人の肖像画」1650年代(?)

ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ「アルルの赤い葡萄畑」 1888年

ポール・ゴーギャン「女王」 1896年

オーギュスト・ルノアール「裸婦像」 1876年

ノヴォジェーヴィチー修道院

20世紀モスクワの面積は、有名な中世の歴史的建築物や屋敷アンサンブルを入れて12倍になった。その中で特別な位置を占めていたのが修道院で、15-16世紀、南と東のモスクワ侵入路に6つ(東から西に時計回りに)建てられた。それらはスパソ=アンドロニコフ修道院、ノヴォスパースキー修道院、シモーノフ修道院、ダニーロフ修道院、ドンスコイ修道院、ノヴォジェーヴィチー修道院だ。これは強力な要塞であり、支配から離れようとするモスクワに対するキプチャク汗国の最初の攻撃を受けた。これらは19世紀まで「警備・修道院」と呼ばれていた。

スパースキー聖堂
スパソ=アンドロニコフ修道院

スパソ=アンドロニコフ修道院

1360年頃ヤウザ川左岸に設立された。ここの初代修道院長になったのは、セルゲイ・ラドネジュスキーの弟子アンドロニクだ。アンドレイ・ルブリョフ(1360年頃-1430年頃)が晩年をすごしたのもこの修道院だ。1420年代ルブリョフはダニール・チェルヌィと共同で修道院の主教会であるスパースキー聖堂(1420-1427)の内装画を手がけた。これはモスクワ建築のもっとも美しい記念物の一つだ。17-18世紀、修道院は塔のある煉瓦の新しい壁で再建された。

ノヴォジェーヴィチー修道院

ロシアで最も裕福な修道院の一つ。1524年ヴァシーリー3世によってスモレンスク併合を記念して建てられる。16-17世紀、皇帝の未亡人が修道女になる尼寺として用いられていた。修道院の敷地にある古代の歴史的建築物は、イコン・スモレンスク生神女聖堂(1524-1525)だ。他の建造物で有名なのは、聖アムヴロシヤ教会(16-18世紀)のあるイリーナ女帝の宮殿と鐘楼(高さ72m;1689-1690)だ。これらの建築物はナルィシュキン・バロックと呼ばれる古典主義の模範だ。

新イェルサレム修道院

1656年総主教ニーコンによって建てられる。彼は皇帝アレクセイ・ミハイロヴィチにイェルサレムの聖地を再現した修道院を建てるよう提案した。ニーコンは建設地としてモスクワ北のイストラ川の風光明媚な島を選び、トロイツェ=セルギエフ大修道院の修道司祭アルセーニー・スハーノフをイェルサレムに派遣した。スハーノフはイェルサレムの図面や設計図だけでなく、聖墳墓教会、ベツレヘム教会のモデルを持ち帰った。その後18世紀中続けられていたアンサンブルの建設が始まった。

新イェルサレム修道院

ノヴォジェーヴィチー修道院の一角

ダニーロフ(ダニール)修道院

モスクワ最古の修道院。1282年アレクサンドル・ネフスキーの息子で、イヴァン・カリターの父であるダニール・アレクサンドロヴィチ公によって創立される。モスクワ周辺の要塞修道院による防御包囲環の最初の修道院になる。その当時の建物は一つも保存されていない。17世紀末修道院は再建され、7つの塔のある煉瓦の城壁と寺院(北の門の上に建てられた)のある建物になった。

シモーノフ(シモン)修道院

モスクワ境の古い修道院の一つ。かつては最強の防御施設を誇った。1370年セルゲイ・ラドネジュスキーの弟子フェオドルによって大貴族ホヴリン(シモンという名で修道士になる)の地に建てられた。1380年修道院の生神女誕生教会にクリコヴォの戦いの英雄、修道士ペレスヴェートとオスリャービャが葬られる。1930年修道院の城壁と6つの教会のうち5つが取り壊された。要塞施設のうち残ったのは南の塔(16世紀有名な建築家フョードル・コーニによって建てられた「砲口」がある)だけだ。

新スパースキー修道院

1462年設立。アンドロニコフ修道院とシモン修道院の間のモスクワ防衛線の環(要塞修道院)になった。1591年のキプチャク汗の襲来の撃退で大きな役割を果たした。17世紀半ば木造の要塞施設は石造にかえられた。アンサンブルにはスパソ=プレオブラジェンスキー聖堂(貴族ロマノフ家の納骨所)、総主教フィラレート宮殿(ミハイル・ロマノフの父;1620年代)がある。修道院の上には1759–1795年に建てられた78mの鐘楼がそびえている(建築家I.ジェレブツォフ)。

ドンスコイ修道院
ナドヴラートナヤ・
チーフヴィンスカヤ教会

ドンスコイ修道院

1591年イヴァン雷帝の息子、フョードル帝によって建てられる。彼はこのような形でキプチャク汗からの「モスクワ解放」を不朽のものとした。修道院の名前はその時ロシア軍を導いたドンの生神女のイコン画と関係がある。1686–1711年修道院は12の塔のある石壁で囲まれる。修道院の北門はチーフヴィンスカヤ教会を頂き、西は鐘楼がある(1730–1753、建築家D.トレジーニ、G.シェーデリ、A.エヴラーシェフ)。

ナプルードノエ
のトリフォン教会

ナプルードノエ(村)の聖トリフォン教会

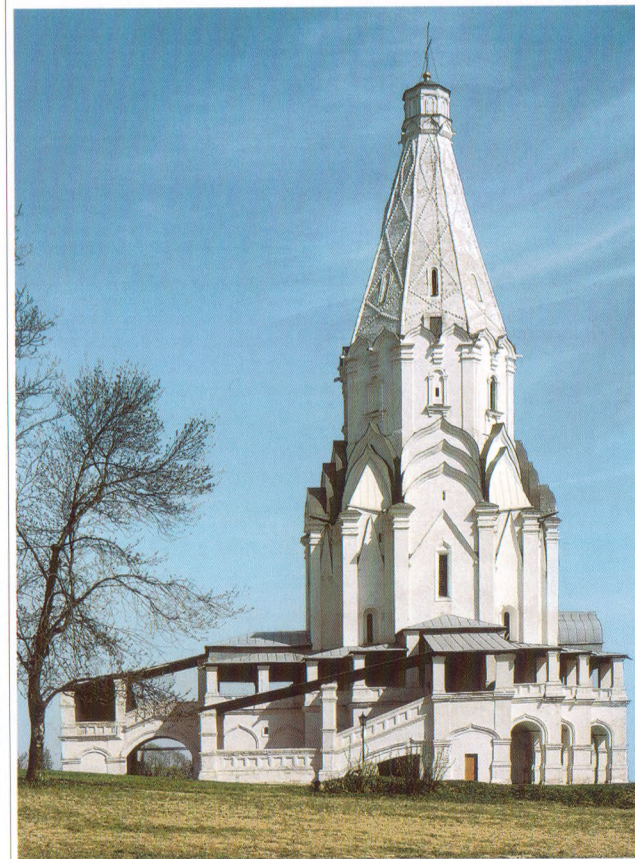
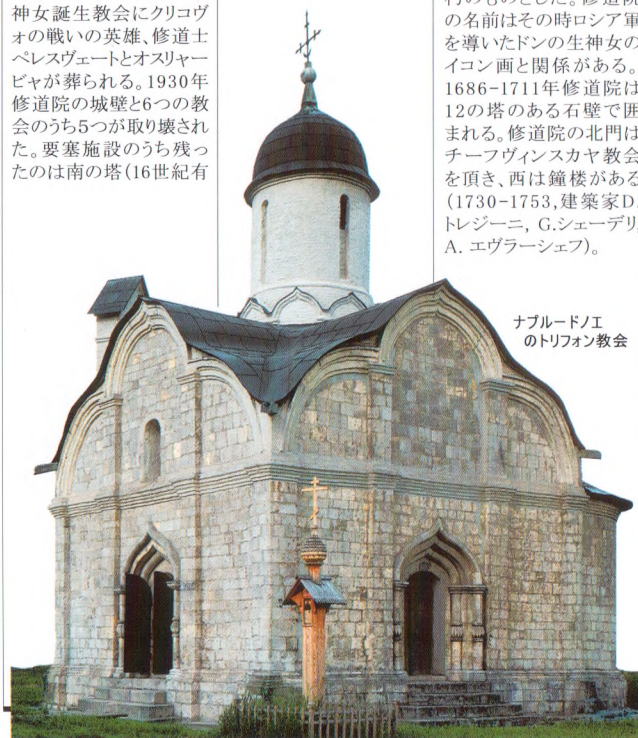
歴史家達の意見によると、この「白亜の詩的な細密画」は、モスクワ・クレムリン外にある最古の石造教会だった。教会は1492年(他の説によると1520年)に建てられ、250年ローマ人に虐殺されたフリギア出身の聖トリフォンをまつった。伝説によると聖トリフォンはイヴァン雷帝の鷹狩管掌だったトリフォン・パトリケーフ公の夢の中に現れ、狩りの際、うっかり放たれた皇帝の好きな白ハヤブサをどこで見つけたら良いか教えた。公は感謝してここに教会を建てた。この伝説はかつてナプルードノエ村で栄えた鷹狩りには関係があるが、寺院建設の日付と矛盾している。かつてイヴァン・カリター所領だったナプルードノエ村は1328年から記録に残り、イヴァン・カリターの遺言にも「町のそばのナプルーディスコエ(ナプルードノエ)村」と記されていた。17世紀からここには宮殿直属ナプルードナヤ村があり、君主ヴォロフ宮殿があった。これは後にイズマイロヴォ村に移された。郊外に多くの野鳥、小動物が生息し、村は豊かな狩猟用地として名を馳せていた。

フィリ

モスクワ南のフィリ村は16世紀から有名だ。17世紀末フィリ村は名門貴族ナルィシュキン家の所領となった。ナルィシュキン家は皇帝アレクセイ・ミハイロヴィチとナターリヤ・ナルィシュキン(ピョートル大帝の母)の結婚によって皇帝一家と縁戚関係になった。ピョートルは若い時よくここに滞在し、叔父を訪問した。1693–1694年この領地にナルィシュキン・バロックの最も有名な記念物であるポクロフ教会(鐘楼を頂き、下階が高い5段の教会)が建てられた。

フィリのポクロフスカヤ教会

コローメンスコエのヴォズネセーニエ教会

八角尖塔を持つルーシ最古の教会(1532年)で、中世建築の傑作である。教会はヴァシーリー3世大公(1479–1533)によって建てられた。伝承によると、1530年、彼の待ちわびた後継者、後のイヴァン4世(雷帝)生誕を記念して建てられたとされる。煉瓦造りで、高い地階の上に立っている建物の高さは約60m(当時としては巨大な建物だった)。建設者の名前は残っていない。教会は15–17世紀公国領、後に皇帝領となるコローメンスコエの主要な装飾物である。コローメンスコエは、後に皇帝領になった。ここには17世紀、ピョートルが子供時代を過ごした有名な木造宮殿が建てられた。これはエカチェリーナ2世の命令で1768年解体される。コローメンスコエの名所の一つは太古の樫(樹齢800年)の林だ。

コローメンスコエのヴォズネセンスカヤ教会

モスクワ郊外の宮殿・公園アンサンブル

モスクワ郊外の宮殿・公園アンサンブルは、ペテルブルグと違い、大部分が大貴族の住居である。モスクワ郊外の皇帝の住居(コローメンスコエ、プレオブラジェンスコエ、イズマイロヴォ)は16-17世紀の歴史的建造物だ。1712年にロシアの首都はモスクワからペテルブルグに移り、皇帝の夏の宮殿も全て新首都の郊外に移った。そのためモスクワの領地にはラストレッリ・バロックの豪華さも壮大な噴水アンサンブルの輝きはないが、クスコヴォ、オスタンキノ、アルハンゲリスコエ、ツァリーツィノの4つの宮殿・公園アンサンブルは紛れも無く18-19世紀ロシア文化の至宝である。

オスタンキノ

クスコヴォ

クスコヴォとオスタンキノ

二つともシェレメーチェフ伯爵家の有名な領地である。

モスクワ南東のクスコヴォ村は、17世紀初頭貴族シェレメーチェフ家の所領だった。1740年代-1770年代ピョートル・ボリーソヴィチ・シェレメーチェフ伯爵は住処を再建し、「数え切れない多くの柵と楽しみのある」広大な宮殿のある娯楽ダーチャ(別荘)を建てた(1769-1775,建築家F.アルグノフ,K.ブランク)。シェレメーチェフ邸での祝日はフォークロアや劇場の出し物、合唱付舟遊びや花火、角笛の音楽が催され、30万人にも及ぶ客人を集めた。クレムリン(城塞)の北、車で20分の距離にあるオスタンキノは16世紀からチェルカッスキー大公家の所領だった。ロシアで最も豊かな花嫁チェルカッスカヤ公妃がピョートル・シェウェメーチェフと結婚した1743年、領地はシェレメーチェフ家の所領となった。オスタンキノは彼らの息子ニコライのお気に入りの場所になった。ニコライはここに妻(農民出身の女優プラスコーヴィヤ・ジェムチュゴヴァヤ)と住んでいた。1792-1798年領地の中心に、皇帝の宮殿に優るとも劣らない、美しい装飾の巨大な木造宮殿を建てた。

ツァリーツィノ

ツァリーツィノ

17世紀、モスクワ南東のこの領地は貴族ストレシュネフ家の所領だったが、1712年から「黒泥」と呼ばれるカンテミール公家の所領となった。1775年領地はエカチェリーナ2世によって購入され、その後ツァリーツィノ(女帝の村)と呼ばれるようになった。女帝のためにここにネオ・ゴシック様式の広大なアンサンブル(1776-1785,建築家V.バジェーノフ;1780年代-97年,建築家M.カザコフ)が建てられたが、完成することはなかった。ある資料によると、建物や建築物にちりばめられたフリーメーソンを象徴する記号、クローバー、五線星型、太陽、惑星がエカチェリーナ2世の逆鱗に触れたようだ。

アルハンゲリスコエ

「三人の皇帝に仕えた」有名な大公ニコライ・ボリーソヴィチ・ユスーポフ侯爵の所領である。国政の職務から退いた彼は、1810年モスクワの北西18kmにある、かつてゴリツィン公の所領だったアルハンゲリスコエ村を購入する。1820年代アルハンゲリスコエは上流社会の中心になり、この場所についてド・ラヴォは次のように書いている。「ここには高官(上流貴族)の娯楽に魅惑を与えるもの全てが集まっている。ピエトロ・ゴンザーゴによって古い幾何学式に設計された公園は大理石の彫像で飾られ、屋敷のホールは風景画と彫刻傑作の博物館になった。ユスーポフの死後(1831年)アルハンゲリスコエ・コレクションの傑作は彼の後継者達によってペテルブルグのモイカ川岸通りの宮殿(p.158)に移された。

アルハンゲリスコエ

オスタンキノ宮殿の内装

トロイツェ＝セルギエフ大修道院

トロイツェ＝セルギエフ(セルギー)修道院は、1337年に建てられ、去る約7世紀間にわたりロシア正教の中心で、カトリックの象徴がバチカンであるように、ロシア正教の象徴となった。

修道院の創立者セルギー・ラドネジュスキー(1321年頃-1391)はモンゴルのくびき時、争いの絶えない諸侯にルーシ統一を呼びかけ、若いモスクワ公ドミートリー(後のドンスコイ公)を支持し、クリコヴォの戦い(1380年)前夜、彼に祝福を与えたことで歴史に名を残している。セルギーは1422年に聖人の列に加わった。

現在修道院アンサンブルにあるのは50以上の建物と建築物で、その中で有名なものはトロイツキー(三位一体)聖堂(1422)、ウスペンスキー聖堂(1559-1585)、ドゥホーフスカヤ教会(1476)、ヴヴェジェンスカヤ教会(1547)、ピャートニツカヤ教会(1547)、ゾーシマとサッヴァーチー教会のある病院(1635-1638)、ツァールスキエ・チェルトーギ(ツァーリ宮殿)(17世紀)、トラペズナヤ(食堂)(1689-1692)だ。エリザヴェータ・ペトローヴナ女帝の時代、ラーヴラ(大修道院)の称号が与えられた(1744年)。アンサンブルにはスモレンスカヤ教会、有名な修道院の鐘楼(高さ87.3m)がある。

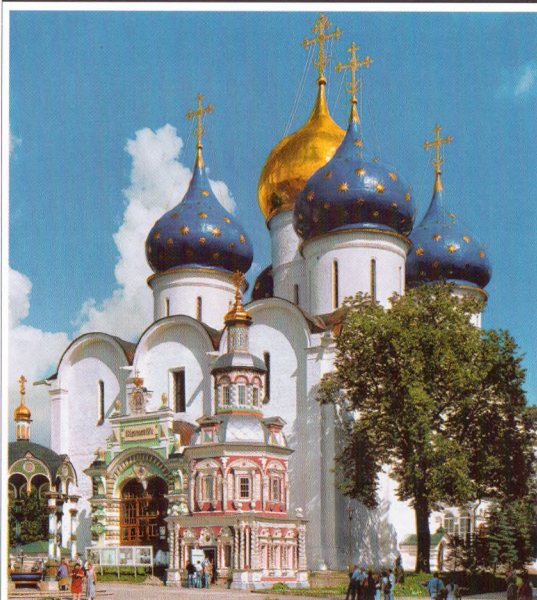
トロイツキー(三位一体)聖堂とニコノフスカヤ教会

トロイツキー聖堂

セルギー・ラドネジュスキーの伝記によると、ヴァルフォロメイ(後のセルギー)はロストフ貴族の出で、モスクワ公の保護下にあった小さい公領地の中心ラドネジュの町に移り住んだ。両親の死後、モスクワの北東およそ70kmの「森」に隠遁したヴァルフォロメイは、現在のモスクワとウラジーミル州のほとんど境にあるこの場所に「小教会」を建てる。聖トロイツァ(三位一体)をまつった有名な修道院の起こりである。

1422年に聖人の列に加えられた後、セルギーの棺の上に、1つの丸冠頂、4つの柱(240㎡)を持つ石造のトロイツキー教会の建設が始まった。新しい聖堂の内装作業に招聘されたのは、有名なダニール・チェルヌィとアンドレイ・ルブリョフだ。彼らによって制作されたフレスコ画は現存していないが、聖堂のイコノスタスには今でも当時のイコン画が40点飾られている。かつてこのイコノスタスのためにルブリョフは世界的に有名なイコン画「トロイツァ(三位一体)」を制作した(図p.272)。

トロイツキー聖堂のイコノスタス

トロイツェ＝セルギエフ大修道院

ウスペンスキー聖堂

十字架の上の天蓋 19世紀

聖堂のスタイルは早期モスクワ派の流れをくんでおり、キール(船の竜骨)のようなザコマーラ(外壁上部の柱の間の円形ひさし部分)が特徴的だ。南に隣接している同じタイプの寺院は、1548年にセルギー・ラドネジュスキーの後継者ニーコンの棺の上に建てられた。

ナドクラデズナヤ小礼拝堂 17世紀末

要塞施設

ギリシャ人修道士パーヴェル・アレップスキーは、父総主教マカーリーを同伴した1654-1656年のロシア旅行中、次のように修道院を描写した。「それ(修道院)はダマスクの要塞のように建てられ、大きさでエメサ(現在のホムス)の城壁に劣らないだろう。鳩のように白い新しい建物の高い壁で囲まれている。その周りに大きい町…池や製粉所が途切れなく続いている」。そして要塞施設については別に、「その難攻不落さと美しさを想像することは不可能だ」

これらの施設は、16世紀モスクワ周囲に要塞修道院環ができた時に建設が始められた。トロイツェ＝セルギエフ修道院は北東から首都への侵入路の重要な警備拠点のひとつになった。修道院の木の柵がある場所に、当時は12の塔のある石造の防壁があった。壁の高さは約6m、厚さ(幅)3mだった。

この建築物を監督していたのはイヴァン雷帝自身で、彼は建設に携わっていた修道院の農奴を人頭税から解放し、修道院に「無税」「無料」で建設用の石をどんな場所からでも運べる権限を与えた。

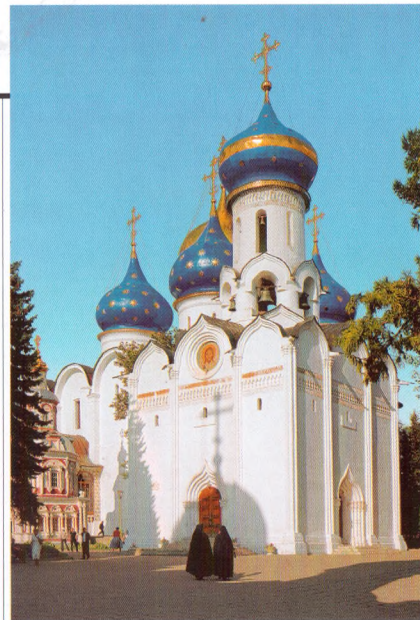
鐘楼 1740-1770年

ピャートニツキー井戸

ドゥホーフスカヤ(ドゥフ)教会

15世紀全般にわたり、修道院には定期的に金銭的、土地、他の寄付が入ってきて、修道院は次第に豊かな封建領主になっていった。同世紀末、モスクワがルーシを統一した時、修道院に正教のプスコーフの建築家が派遣されてきた。1476年、彼らはここにクーポラのドラム部に鐘楼を設置した優美な一つの冠頂の教会「聖ドゥフ降臨教会」を建てた。

ウスペンスキー聖堂

1559年イヴァン雷帝の命令で建てられた。カザン・ハンとアストラハンとの戦における勝利が建立のきっかけになったとされている。教会の成聖式はイヴァン4世(雷帝)の死後1585年に行われた。内装作業が行われたのはその後100年が経過してからだ(1684年)。壁一面を覆う鮮やかなフレスコ画はヤロスラーヴリの職人によって制作された。有名なイコン画家シモン・ウシャコフ作のイコン画があるイコノスタスも同年のものだ。聖堂の円形冠頂は18世紀には玉ねぎ形になり、色鮮やかな装飾が施された。

ドゥホーフスカヤ教会

トラペズナヤ(食堂)宮殿

17世紀のロシア建築の傑作の一つである。1689-1692年に建てられた宮殿は、古代の修道院建築と異なり、一面隙間なく彫刻模様と装飾模様で覆われている。その最も印象的なモチーフは葡萄の蔓だ。この建築においてヴェネツィア建築家の影響が色濃く見られる。

中間の支柱がない天井に覆われた510㎡の食堂ホールは、セルギー教会のインテリアとつながっている。黄金の丸冠頂がある立方体の教会部は建物の東部にそびえている。

トラペズナヤ(食堂)宮殿(手前の小さい建物はミヘーフスカヤ教会, 1734年)

ツーリスト インフォメーション

文明化が進むにつれ、人の移動には多くの手続きが必要になっている。だが、こういった手続きは旅行中の安全を保障するためには不可欠なのだ。

ロシア入国審査、税関手続に関する情報は旅行会社などで入手できるが、情報が古かったり、正しくない可能性がある。公式の情報はOVIR(外国人登録所)、大使館、領事館、税関でしか得ることができない。注意深く、責任もって旅行の書類保管にあたること。そうすると旅行は楽しく、実り多い物になるだろう。

多くの手続きを省いたりしないように。国家移住局はたとえ有名人やVIPであっても、法律に反することは認めない。

身分証明書

ペテルブルグ到着時、ロシア国籍の者は国内パスポートまたは外国旅行パスポートを携帯しなければならない。外国籍の者は3週間以上の期限の残ったパスポートとビザ、万が一の場合に備えて復路の航空チケットまたは鉄道チケットが必要だ。ロシア入国時、外国籍の者はビザの期限によって滞在期間が制限されている。

CIS諸国の者は特別に国家間の取り決めがない限り、外国国籍とみなされる。

ペテルブルグ滞在日数が3日を越える場合はオヴィール(ОВИР,外国人ビザ登録部)での登録が必要だ。

登録には到着日の日付が記載された通行許可証(現在のものは入国カードだが、規則は頻繁に変わるため、空港や駅で現時点での規則と外国人登録の期限を確認すること)が必要だ。

18歳未満の子供の一人旅の場合、身元を証明する書類(国内パスポート及び外国パスポート、または出生証明書)、公証人の証明を受けた両親の同意書またはロシアか国内及び閣外の子供の移動を許可する保護者の同意書が必要だ。

医療・検疫

国境を越えられない病気は、普通は伝染病だけだ。旅行者の医療検査は伝染病の予防、または感染を調べる際にのみ必要だ。しかし、医療制限がある場合もある。

例えば、妊娠女性は出産予定日の4週間前から1週間前までの場合、飛行機に搭乗の際、医者の診断書が必要である(1週間をきった場合、搭乗できない)。診断書は出発日の7日以内のものでなければならない。

持病のある者、現在病気の者も事前に医療検査パスしたという証明書が必要である。飛行中の安全を妨げ、他の乗客の迷惑になる場合、航空会社はその客の搭乗を拒否できる権利がある。

旅行中は必ず海外旅行保険証を携帯しておくこと。

税関

ロシア国境を通過する者は全て通関する。ロシア連邦税関規則集には貨物と通貨の通過に関する規則があり、それを遵守しなければならない。税関申告書記入の際、持ち込まれる全貴重品、通貨の申請を行えば、持ち出す際問題は生じない。全国家の国境警備隊はあらゆる武器、麻薬の持込を一様に禁止している。麻薬持込に対し、法により最高死刑が適用される国もある。事実上、世界の全税関は食物、飲み物、煙草の持込を制限している。それらの持込・持出の規則を事前に知っておく必要がある。

通常、大量の貴重品、品物が外国に持ち出される場合、関税がかけられる。商用目的で貨物の持込を行う際、関税がかけられる。

外貨持込・持出規則

ロシア連邦から10,000米ドル相当額を超えない現金を持ち出す際、税関申告書の提示の必要はない。加えて以前ロシア連邦に持ち込まれ、税関申告書に記載されている額を超えない外貨の持出が可能である(形式TD−6又は形式証明書TS−28)。

10,000米ドル相当額を超える現金の持ち出しに関しては、申告する必要がある。

ロシア連邦に持込が制限されている外貨はない。

個人によるロシア連邦への外貨の持込と持出はロシア連邦中央銀行の規定により、制限されている。しかし、持出又は持込額がルーブル換算で最低労働賃金の500倍を超えない場合を除く。

外貨の米ドル換算はロシア連邦中央銀行が定める、税関申告書の日付のルーブルの対外貨レートに基づき、行われる。

TAX FREE

高額な買い物をし、付加価値税の払い戻しを受ける場合は国境でレシートとパスポートデータが記載された特別用紙を用いた特別請求書及び梱包された品物を提示する必要がある。通常、出国手続きの前に、空港の特定の場所又は税関で払い戻しが受けられるので注意する必要がある。普通、免税を受ける最低購入価格がある。最低購入価格に満たない商品を購入した場合、免税は適用されない。その額に関しては、請求書作成の時に知ることができる。

ペットの飼い主の方へ

ペットと旅行に行く場合、獣医証明書及び許可証を作成する必要がある。又薬(ヨード、過マンガン酸カリ、解熱剤)、道中ペットに与える缶詰、ペットフードが必要である。

動物輸送の規則

航空輸送

ペットを伴う場合、航空券予約時に必ずその旨を伝えなければならない。(航空券に注記される)空港では輸送手続きを行う際、早めに空港に行く必要がある。ペット(猫、犬、鳥)は乗客が購入した特別コンテナで輸送される。又、8キロ以下のペットは客席に乗せることができるが、8キロを超えるペットは貨物室に乗せなければならない。

動物には超過貨物料金が適用される。動物とコンテナの重量は荷物の無料範囲には含まれない。

鉄道輸送

軟席車を除く、全車両で動物輸送を行うことができる。小動物は特別コンテナに入れ、手荷物置き場に乗せなければならない。犬は口輪をし、縄につないでのみ乗せることができる。大型犬は特別コンテナに入れられ、貨物車に載せられる。動物輸送料金は20キログラム相当の荷物料金に匹敵する。

盲導犬は全交通機関で障害者に付き添うことができる。輸送代金は無料である。

総領事館

アイスランド(名誉領事)
テリマン通り24
ул. Тельмана, 24 ☎326-8580

アメリカ合衆国
フルシュタッツカヤ通り15
Фурштатская ул., 15
☎331-2600

イギリス
プロレタルスカヤ・ディカトゥーラ広場5
пл. Пролетарской Диктатуры, 5
☎320-3200, 320-3239(ビザ)

イタリア
劇場広場10
Театральная пл., 10
☎312-3217, 718-8080(ビザ)

インド
ルィレーエフ通り35
ул. Рылеева, 35 ☎272-1988

ウクライナ
ボンチ＝ブルエヴィチ通り1−B
ул. Бонч-Бруевича, 1-в
☎271-1402

オーストラリア(名誉総領事)
イタリヤンスカヤ通り1
Итальянская ул., 1
☎325-7333

オーストリア(名誉総領事)
フルシュタッツカヤ通り43
Фурштатская ул., 43
☎275-0502

オランダ王国
モイカ川岸通り11
наб. реки Мойки, 11
☎334-0200, 334-0228(ビザ)

カナダ
マラジェツコセリスキー大通り32
Малодетскосельский пр., 32
☎325-8448, 320-6515(ビザ)

韓国(名誉総領事)
コノグヴァルデイスキー並木通り4
玄関口3
Конногвардейский бул., 4, подъезд № 3
☎312-6400

ギリシャ
ミハイロフスカヤ通り1/7
Михайловская ул., 1/7
☎329-6407

スイス連邦(名誉総領事)
マラート通り11 ул. Марата, 11
☎325-9006

スウェーデン王国
マーラヤ・カニューシェンナヤ1/3
Малая Конюшенная ул., 1/3
☎329-1430

スペイン王国(名誉領事)
グラフスキー横丁4
Графский пер., 4 ☎325-8470

スロバキア
オルベーラ通り21 2棟
ул. Орбели, 21, корп. 2
☎244-3636, 244-3696(ビザ)

チェコ
トヴェールスカヤ通り5
Тверская ул., 5 ☎271-4612

中国
グリボエードフ運河川岸通り134
наб. канала Грибоедова, 134
☎714-7670

デンマーク
石島 バリシャヤ・アレーヤ13
Большая аллея, 13, Каменный остров
☎703-3900, 703-3902(ビザ)

ドイツ
フルシュタッツカヤ通り39
Фурштатская ул., 39
☎320-2400, 273-4075 (ビザ)

日本
モイカ川岸通り29
наб. реки Мойки, 29
☎314-1434

ノルウェー王国
ネフスキー大通り25
Невский пр., 25 ☎336-6420

ハンガリー
マラート通り15
ул. Марата, 15 ☎312-6458

フィンランド
プレオブラジェンスカヤ広場4
Преображенская пл., 4
☎331-7600

フランス
モイカ川岸通り15
наб. реки Мойки, 15
☎314-1443

ブルガリア
ルィレーエフ通り27
ул. Рылеева, 27 ☎273-7347

ポーランド
第5ソヴェツカヤ通り12
5-я Советская ул., 12
☎336-3140

マルタ共和国(名誉領事)
第8クラスノアルメイスカヤ(赤軍)通り6−A/5
8-я Красноармейская ул., 6-а/5 ☎718-8209

モナコ公国(名誉領事)
英国河岸通り42
Английская наб., 42
☎312-5396

ルクセンブルク大公国(名誉領事)
ネフスキー大通り58
Невский пр., 58 ☎718-3450

外国人ビザ登録部(OVIR),移住局

サンクト・ペテルブルグ及びレニングラード州内務局パスポート・ビザ管理局
ПАСПОРТНО-ВИЗОВОЕ УПРАВЛЕНИЕ ПРИ ГУВД САНКТ-ПЕТЕРБУРГА И ЛЕНИНГРАДСКОЙ ОБЛАСТИ
キーロチナヤ通り4 Кирочная ул., 4
Ⓜチェルヌィシェフスカヤ
(Чернышевская) ☎278-2481

OVIR(オヴィール：外国人登録所)

海軍省地区
ヴェレイスカヤ通り39
Верейская ул., 39
Ⓜ工科大学(Технологический Институт)
☎710-1833

ヴァシーリー島地区
19番線(リーニヤ)12a 19-я линия, 12a Ⓜヴァシーリー島
(Василеостровская)
☎321-7524

ヴィーボルスキー地区
レスノイ大通り20 Лесной пр., 20
Ⓜヴィーボルグスカヤ
(Выборгская) ☎542-2172

カリーニンスキー地区
ミネラリナヤ通り3
Минеральная ул., 3
Ⓜレーニン広場(Пл. Ленина)
☎540-3987

キーロフスキー地区
アフトフスカヤ通り22
Автовская ул., 22
Ⓜアフタヴァ(Автово
☎783-4414

クラスノグヴァルデイスキー地区
ザネフスキー大通り25
Заневский пр., 25
Ⓜノヴォチェルカッスカヤ
(Новочеркасская)
☎528-6767

クラスノセリスキー地区
タムバーソフ通り4
Ул. Тамбасова, 4
Ⓜプロスペクト・ヴェチェラーノフ
(Проспект Ветеранов)
☎730-3721

モスコフスキー地区
ブラガダートナヤ通り34
Благодатная ул., 34
Ⓜエレクトラシーラ
(Электросила)
☎388-1827

ネフスキー地区
セドーヴァ通り86 Ул. Седова, 86
Ⓜロモノーソフスカヤ
(Ломоносовская)
☎262-2070

ペトログラーツキー地区
グロート通り1/3
Ул. Грота, 1/3
Ⓜペトログラーツカヤ
(Петроградская)
☎230-8360

プリモールスキー地区
サヴーシュキン通り83
Ул. Савушкина, 83
Ⓜチョールナヤ・レーチカ
(Черная Речка)
☎430-1509

フルンゼンスキー地区
オブヴォードヌィ運河川岸通り48
Наб. Обводного кан., 48
Ⓜリーゴフスキー・プロスペクト
(Лиговский Проспект)
☎766-1468

中心地区
クルィロフ横丁5 Пер. Крылова, 5
Ⓜガスチーヌィ・ドヴォール
(Гостиный Двор)
☎315-7936

移住管理委員会
КОМИТЕТ МИГРАЦИОННОГО КОНТРОЛЯ
ネフスキー大通り134
Невский пр., 134 ☎271-7551

サンクト・ペテルブルグ及びレニングラード州内務省移住管理局
УПРАВЛЕНИЕ ПО ДЕЛАМ МИГРАЦИИ ГУВД СПб И ЛЕНИНГРАДСКОЙ ОБЛАСТИ
建築家ロッシ通り1/3 No.5玄関口3階 ул. Зодчего Росси, 1/3, подъезд № 5, 3-й эт.
☎310-2747

税関

ロシア連邦北西税関局
СЕВЕРО-ЗАПАДНОЕ ТАМОЖЕННОЕ УПРАВЛЕНИЕ РФ
クトゥーゾフ川岸通り20
наб. Кутузова, 20
☎273-1619, 273-1619

サンクト・ペテルブルグ税関
САНКТ-ПЕТЕРБУРГСКАЯ ТАМОЖНЯ
ヴァシーリー島, 9番線(リーニヤ)10
Васильевский остров, 9-я линия, 10
☎受付: 323-7794, 740-2422

プルコヴォ空港税関：
Пулковская таможня
☎740-2527, 740-2579

芸術品及び骨董品持出規則

ロシア法により、持出許可証明書があれば、製造されて50年未満の芸術品をロシア国外に持ち出すことができる(外国で必ず申請を行うという条件付き)。骨董品に関しては特別規則が適用される。骨董品とは50年以上前に製造された文化財(書籍、原稿、写真を含む歴史財、芸術品)のことを指す。持出許可は国家税関委員会文化財持込及び持出管理部のみで得られる(下記参照)。この際、文化財と書類を管理部に持参しなければならない(上記の電話番号でリストの確認可能)。50〜100年前に製造された絵画の鑑定は国家税関委員会職員により派遣された芸術専門家が特別研究室で行う。持出許可が得られるかどうかは国家的価値による。100年以上前に作成された絵画及びイコンに対しては、例外なく国外持出は禁止されている。

サンクト・ペテルブルグで文化財に関する税関手続きを行える税関機関:

ヴァシーリー島税関:
ヴァシーリー島、バリショイ大通り103
プルコヴォ税関:プルコヴォ2空港

空港, 駅

812-サンクト・ペテルブルグの市外局番

飛行機

空港

空港「プルコヴォ(ПУЛКОВО)」はロシアで有名な空港の一つ。
年間旅客数は1200万人。

プルコヴォ1空港
案内 ☎704-3822
◆国内線及びロシア近隣国専用ターミナル。
サンクト・ペテルブルグの中心から南へ18kmの所にある。
図タクシー、バス、マルシュルートカ

交通機関	運行時間	所要時間(分)	終点(メトロ駅)
マルシュルートカ K-39 a	7:00〜22:00	10-20	モスコフスカヤ "МОСКОВСКАЯ"
マルシュルートカ K-39	7:00〜22:00	30-50	アレクサンドル・ネフスキー広場 "ПЛ. А. НЕВСКОГО"
バス13番	6:00〜24:00	15-20	モスコフスカヤ "МОСКОВСКАЯ"

プルコヴォ2空港
案内 ☎704-3444
◆国際線用ターミナル。
ペテルブルグの中心から南へ17kmの所にある。
図タクシー、バス、マルシュルートカ
（路線乗合タクシー）

交通機関	運行時間	所要時間(分)	終点(メトロ駅)
マルシュルートカ K-13	7:00〜22:00	10-20	モスコフスカヤ "МОСКОВСКАЯ"
マルシュルートカ K-213	7:00〜22:00	30-50	センナヤ広場 "СЕННАЯ"
バス13番	6:00〜24:00	15-20	モスコフスカヤ "МОСКОВСКАЯ"

航空会社 サンクト・ペテルブルグ支店

アエロフロート・ロシア航空（AEROFLOT）
カザンスカヤ通り5
Казанская ул., 5 ☎327-3872

エア・フランス（AIR FRANCE）
バリシャヤ・マルスカーヤ通り35
Большая Морская ул., 35
☎325-8252
空港プルコヴォ2 ☎324-3241

オーストラリア航空（AUSTRIAN AIRLINES）
ネフスキー大通り32
Невский пр., 32
空港プルコヴォ2 ☎324-3244

英国航空（BRITISH AIRLINES）
小厩舎通り1/3 A
Малая Конюшенная ул., 1/3A
☎380-0626
空港プルコヴォ2 ☎346-8146

CSA
バリシャヤ・マルスカーヤ通り36
Большая Морская ул., 36
☎315-5259
空港プルコヴォ2 ☎324-3250

デルタ航空（DELTA AIRLINES）
バリシャヤ・マルスカーヤ通り36
Большая Морская ул., 36
☎311-5820

フィンランド航空（FINNAIR）
カザンスカヤ通り44
Казанская ул., 44
☎326-1870
空港プルコヴォ2 ☎324-3249

KLMオランダ航空
マーラヤ・マルスカーヤ通り23
Малая Морская ул., 23
☎346-6868
空港プルコヴォ2 ☎346-8181

LOT
カラヴァンナヤ通り1
Караванная ул., 1
☎273-5721
空港プルコヴォ2 ☎324-3252

ルフトハンザ（LUFTHANSA）
ネフスキー大通り32
Невский пр., 32
☎320-1000
空港プルコヴォ2 ☎324-3244

MALEV
空港プルコヴォ2 ☎324-3267

スカンジナビア航空(SAS)
ネフスキー大通り25
Невский пр., 25
☎326-2600
空港プルコヴォ2 ☎324-3244

船

フェリー・ターミナル「海の駅」

住所: 海の名誉広場1
пл. Морской Славы, 1
Ⓜプリモールスカヤ（Приморская）
✆322-6052, チケット予約: 322-1616
◆「マルスコイ・ヴァグザール（海の駅）」はヴァシーリー島に港にある総面積18万5000㎡の7階建ての建物で、同時に4隻入港が可能だ。年間旅客数は20万人。
カリーニングラード,タリン,ヘルシンキ,ストックホルム方面また遊覧船が就航。

海港「パッサジールスキー・ポルト（旅客港）」株式会社
ОАО "ПАССАЖИРСКИЙ ПОРТ"
住所: マカーロフ川岸通り（32番の建物の向かい）
наб. Макарова (напротив дома 32).
Ⓜヴァシーリー島（Василеостровская）,
Ⓜスポルチーヴナヤ（Спортивная）✆ 328-2223

河川駅

住所:オブホフスカヤ・オボローナ大通り195
пр. Обуховской Обороны, 195 Ⓜプロレタールスカヤ（Пролетарская）☎262-0239,予約: 262-2474
◆ネヴァ川クルーズ,モスクワ,ヴァラーム島,キジー島遊覧

オクチャーブリスカヤ鉄道案内: ☎055
鉄道チケット予約・配達: ☎067

鉄道とバス

鉄道駅

バルト駅

住所:オブヴォードヌィ運河川岸通り120
наб. Обводного канала, 120

バルチースカヤ（Балтийская）☎055
◆郊外電車:ガッチナ, ルーガ, オラニエンバウム, ペテルゴフ,
カリーシェ,クラスノフローツク方面

ヴィテプスク駅

住所:ザーゴロドヌィ大通り52 Загородный пр., 52
Ⓜプーシキンスカヤ（Пушкинская）☎055
◆長距離列車:ベルリン, ブレスト, ブダペスト, ゴメリ,
ドニエプロペトロフスク, キエフ,
キシニョフ, リヴォフ, ミンスク,
オデッサ, プラハ, スモレンスク, ヘルソン方面
◆郊外電車:プーシキン（ツァールスコエ・セロー）,
パヴロフスク, オレージュ方面

モスクワ駅 ⓘ 3-g7

住所: ネフスキー大通り85 Невский пр., 85
Ⓜ蜂起広場（Площадь Восстания）☎055
◆長距離列車:モスクワ, アドレール, アクモーラ, アルハンゲリスク,
ブリャンスク, ヴォルゴグラード, ヴォログダ,
ヴォルクター, ヴォロネジ, エフパトリア, カザン,
ムールマンスク, ノヴォロシースク, オムスク,
ペトロザヴォーツク, サマーラ, サラトフ,
セヴァストポリ, ハリコフ, チェリャービンスク方面
◆郊外電車:ヴォルホフ, マーラヤ・ヴィシェーラ, ムガー方面

ラドガ駅

住所: ザネフスキー大通り73
Заневский пр., 73
Ⓜラーダジュスカヤ（Ладожская）
☎436-5310, 768-7900（郊外電車案内）
マーラヤ・オフタの新しい駅のコンプレックス。
2003年新設。
50の郊外電車、26の長距離電車の発着駅。
最新設備は快適、安全と高品質のサービスを提供する。
◆長距離列車:アナパ, リヴォフ, モスクワ,
プスコーフ, グロドノ方面
◆郊外電車:ルーガ, ガッチナ, シヴェルスカヤ方面

フィンランド駅

住所: レーニン広場6 пл. Ленина, 6
Ⓜレーニン広場
（Площадь Ленина ☎055
国際線:ヘルシンキ行き特急列車
◆長距離列車:ソルタヴァラ, コストムクシ方面
◆郊外電車:ヴィーボルグ, プリオゼルスク,
プリモールスク, ゼレノゴールスク, ヴィーソツク,
スヴェトゴルスク, フセヴォーロジュスク,
シュリッセルブルグ方面

中央鉄道チケット売場
ЦЕНТРАЛЬНЫЕ ЖЕЛЕЗНОДОРОЖНЫЕ КАССЫ

住所: グリボエードフ運河川岸通り24
наб. канала Грибоедова, 24
Ⓜネフスキー・プロスペクト
（Невский проспект）
(グリボエードフ運河方面出口)
🕓 8:00〜20:00, 日曜日
8:00〜16:00 ☎762-4455
◆ここではペテルブルグに発着する長距離列車全線のチケットが購入できる。

バス

バスターミナル

住所: オブヴォードヌィ運河36
наб. Обводного канала, 36
🕓7:00〜22:00 ☎766-5777
Ⓜリーゴフスキー・プロスペクト（Лиговский Проспект）
☎277-0255 団体旅行客用大型バス、マイクロバスの予約
◆ロシアの各都市、ベラルーシ、エストニア、
フィンランド行きバスの発着ターミナル。

安全と健康

天気

サンクト・ペテルブルグは世界最北の大都市だ（北緯59° 57′ 東経30° 19′）。湿気があり、海洋性気候に近く、夏は適度に暖かいが冬は寒さが長く続く。冬の平均気温は－8℃、夏の平均気温は＋18℃。乾燥した暑い日の気温は25℃から+30℃まで上がる可能性がある。冬は-25℃から-30℃まで著しく下がる。湿度が高い（湿度96%）ため、暑い時も寒い時も過ごしにくい。年間降水量は634mmだ。

服装

ペテルブルグでは一日で10～20℃も気温が急変することがある（例えば4月は3℃～14℃、1月は+2℃～-15℃）。そこで、ペテルブルグに来る人に以下の準備をおすすめする。

11月～3月末：冬シーズン、防寒服一式が必要。暖かい上着（ダウン、毛皮、コート）だけでなく防寒帽子、手袋（またはミトン）、マフラー、靴は防寒・防水加工のもの。

3月～4月、9月～10月：傘またはレインコートが必携（ペテルブルグの雨はすぐに止むが、時折一時的な豪雨に見舞われることがある）。また暖かい服装と防水加工の靴も必要。

5月～8月：暖かく、湿度が高い。気温は+35℃まで上がるので綿の服、オープンな靴（サンダル等）が好ましい。日中気温が急激に下がることもあるので暖かい服装も持参のこと（例えば2004年6月は+14℃の肌寒い日が続いた）。

ペテルブルグは湿地帯に建設された。こういう場所では5月から10月にかけての夕方、蚊が大量に発生する。夕方以降、ネヴァ川岸を散策する場合は虫除けスプレー等の蚊対策が必要。夏場、虫除け薬はペテルブルグの薬局で売り切れていることが多いので、日本から持参した方が良い。

健康

旅行中健康が何より大事なのは言うまでもない。だが突然の風邪、怪我、歯痛や頭痛を予測することはできない。サンクト・ペテルブルグは医療保健に関してヨーロッパ都市と遜色がない町で、救急医療を無料で行っている医療機関がある（身分証明書や保健書の提示が必要ないところもある）。数多くの有料医療センターでも、医療費はヨーロッパ都市と比べて安く、質は高い。

救急医療

無料（応急処置）サービスを受けるには03番をダイヤルするだけでいい。緊急処置が必要な人は誰でもこのサービスを受けることができる。

医療センター及び病院の無料案内は9:00～21:00 ✆718-6575；またはインターネットのサイトで（24時間）www.healthnet.ru

薬局

ペテルブルグには多くの薬局がある（一部は24時間営業）。販売している薬の品数も豊富だが、ペテルブルグの薬局はもっぱら商業主義の販売店なので、そこの販売員に医薬品の相談をするのはおすすめしない。自分に必要な医薬品を知り、医師の処方に従って購入するべきである。類似物に同意しないこと。その店に必要な医薬品がない場合は違う店へ行くこと。

（ペテルブルグ市内の薬品、医療サービス無料案内 ✆325-0900, 712-0903 24時間）

犯罪の危険性

集まる中心部の路上での犯罪が多い。詐欺師集団は通常、普通の人とかわらないかそれよりも良い服装で、狙いをつけた人を尾行、あるいは同行し、その人が警戒心を緩めるのを待っている。また、犯罪者はよく子供を使う（子供なら恐怖心も与えず、不審に思わないからだ）。人通りで札束を見せない。財布をとられやすい場所に入れない。貴重品は自分の身につけ、集中と警戒を怠らない。以上のことを守っている限り、ロシアで事件に巻き込まれる可能性は少ない。というのも、ロシア人は、世界のどの国の人と同様、基本的には誠実で親切だからだ。

万が一犯罪にあった場合はただちに警察に通報するか（02番）、近くの警察の服装をした人に知らせること。

日本人旅行者専用インフォメーション・安全センター

住所：ネフスキー大通り30, オフィス329
電話：+7 (812) 702-1522
FAX：+7 (812) 449-0365
夏シーズン（5月—9月）：平日8:00～18:30
冬シーズン（10月—4月）：平日9:30～18:30
24時間ホットライン（日本語・英語）：
✆+7 (812) 907-5059

公衆トイレ

全ての博物館、レストラン、大型カフェ、映画館に設置してある（これらの場所では無料）。観光施設のそばには有料公衆簡易トイレがある（普通は係員に料金を払う）。

警察

全ての秩序を守り（道路、地下鉄、駅）、交通安全を取り締まる機関。何か困難が発生した場合、警察官に相談することができる。

МЧС 救出作業課

非常事態が起きた際の救助作業を行う。МЧСは頭文字をとった語で、正式名はМинистерство по чрезвычайным ситуациям（非常事態省）という。現在消防課（01、07番）もここに属している。緊急時の救助は無料で、非常救助活動を行っている。✆(380-9119, 545-4745).

歩行者規則

ペテルブルグの歩行者規則はヨーロッパと同じだ。歩行者は歩道、歩行者専用道、広場を歩く。環状道路横断のために横断歩道のほかに、地下道が設けられてある。横断歩道は伝統的な「横断歩道表示」が書かれている。（ロシアでは普通白線だ）

レンタカー

いくつかの会社で車を借りることができる。レンタカー会社の案内は009番まで（有料）

公共交通機関

ペテルブルグの公共の乗り物はバス、トロリーバス、路面電車で、これらは定められた路線を運行している。市営と私営の交通機関がある。🕓6:00～24:00

停留所には乗り物の種類、番号が書かれた標示板がある。時々運行時間・間隔が書かれているが、行き先（от... до...～から～まで）が書かれているのは非常に稀だ。

運賃は乗り物・距離によって定められている。バス、トロリーバス、路面電車は車内で車掌からタロン（切符）を買う。カード（バス専用/バス・トロリーバス/バス・路面電車、あるいは三種共通）を買ってもいいが、これらのカードは市営交通機関でしか使えない。このようなカードはペテルブルグに長く滞在し、市営交通機関をよく利用する（1日に2回以上）人には便利だ。

バス

路面電車

トロリーバス

マルシュルートカ（路線乗合タクシー）

マルシュルートカはペテルブルグでは比較的最近できた私営の交通機関で、一定の路線を運行する14～20人乗りのマイクロバスのことだ。機動性があり、速い。また、路線内なら（車を止めるのが禁止されている場所でなければ）、どこでも止めることができる。目的の場所が近づいたら、運転手に止めてもらいたい場所（停留所、地下鉄、交差点の角等）を言う。

料金は他の交通機関と同様、定められており、運転手に払う。他の市営交通機関より40%高いが、タクシーを利用するよりはるかに安い。🕓7:00～23:00

タクシー

24時間営業。
✆312-0022;
✆700-0000;
✆068他

метро-
ПОЛИТЕН

ペテルブルグの地下鉄は現在58駅、35000台の電車、
1日250万人の乗客、12000人の駅員

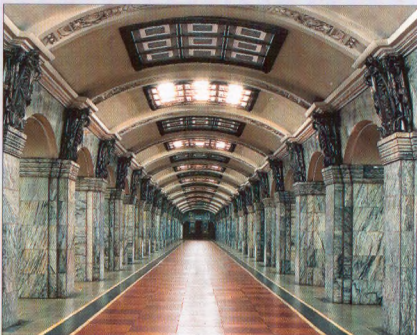
歴史

メトロポリタン（仏語metropolitain「首都の」）は市内鉄道だ。この交通機関は1860年代ロンドンとシカゴで最初のsubway（メトロ）が開通した時、その可能性と有益性を誇示した。

19世紀末ペテルブルグでも地下鉄建設が検討されるようになった。しかし戦争や革命のために、建設の決議が採択されたのは1930年代末になってのことだった。1941年に始められた準備作業は第二次世界大戦で中断され、戦後によりやく再開された。長さ10.8kmのレニングラード・メトロポリタン一番線の開通式が1955年10月15日に行われた。

1番線には8駅（蜂起広場、ウラジーミルスカヤ、プーシキンスカヤ、工科大学、バルチースカヤ、ナルヴスカヤ、キーロフスキー・ザヴォード、アフタヴァ）があり、その内装には約2万2千m²の大理石、1万m²の花崗岩が使われ、ユニークな照明器具、フロアスタンド、ブロンズ、水晶、装飾ガラス製の壁燭架やシャンデリアで飾られた。

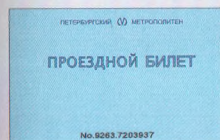
地下鉄駅
「蜂起広場（Площадь Восстания）」
のパヴィリオン

地下プラットホーム「ナルフスカヤ」駅“Нарвская”

地下プラットホーム「キーロフスキー・ザヴォード」駅“Кировский завод”

地下プラットホーム 「アフタヴァ」駅“Автово”

利用方法

運行時間5:45～24:00
（新年12月31日から1月1日にかけては4:00まで）
料金は乗車距離、時間に関係なく一律だ。

ПРОЕЗДНОЙ БИЛЕТ
No.9263.7203937

料金はジェトン（コイン）かマグネットカードで支払う。これらは地下鉄駅構内、改札口前の切符売場で購入できる。改札を通過したら、長くて深いエスカレーターに乗り、地下のプラットホームへ行く。

プラットホームには車内同様、
メトロ路線図がある。

標示板「～駅行き（К поездам до станций）」
と「地上出口（Выход в город）」

エスカレーター（ペテルブルグの地下鉄は世界で一番深い）

電車

「扉が閉まります。ご注意ください」“Осторожно, двери закрываются”

市内サービス

812 – サンクト・ペテルブルグの市外局番

救急車、警察、消防等の緊急連絡の電話は無料

01
火事(МЧС)

02
警察

03
救急車

04
ガス応急事故処理課

275-0810
救出作業課「911」

278-7414
テロ防止課

278-0055
人身事故登録局

003, 712-6510
有料救急車

718-4192
心臓病応急医療機関

09
ペテルブルグ市内の電話案内サービス(ПТС)

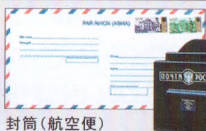
060
時報

063, 064
市内情報

062
案内サービス

005, 008, 050, 089
会社,商品,サービス案内;レストラン案内(無料)

277-0255
ホテル予約

上記サービスは全て24時間行っている

封筒(航空便)

郵便ポスト

ペテルブルグ中央郵便局(中央郵便局通り 9)現在ここは通信博物館でもある。

郵便局

ペテルブルグには通信省下何百もの郵便局があり、有料郵便サービスを行っている。ペテルブルグでその中心にあるのは中央郵便局だ(イサーク聖堂・元老院広場から徒歩2分の中央郵便局通り ул. Почтамтскаяにある)。

1990年代初めからペテルブルグに国際宅配便会社、DHL、FedExもオープンした。こういった会社の郵便サービスは非常に高いが、場合によっては不可欠だ(重要書類送付)。

電話

国際・市外通話用公衆電話の看板

現在携帯電話が普及し、公衆電話の利用は著しく減った。ペテルブルグの公衆電話は全ての地下鉄、博物館、通りに設置されている。市内通話用と市外・国際通話用の二種類の公衆電話がある。テレホンカード専用公衆電話が多い(テレホンカードは地下鉄駅構内、新聞雑誌キオスクで販売している)が、地下鉄にはコインが使用できる公衆電話もある。

公衆電話の使用法は電話本体、あるいはそのそばに記載されている。市外・国際電話をかける場合は、まず8を押し、プーという呼出音を聞いてから、(国際電話の場合は10と国番号を)市外局番・相手の番号をダイヤルする。

一般電話から市外・国際電話をかける場合は後払いになり、後日「ロステレコム Ростелеком」社から請求書が届く。この料金は非常に高い。市外・国際電話用テレホンカードを使ってかけるとその半分、時には10分の1の金額でかけられる。ペテルブルグでは様々な電話会社で時間金額に応じたいろいろなカードが販売されている。市外・国際電話用テレホンカードは携帯電話店「салон связи」か地下鉄構内で購入することができる。カードによって使用環境が異なるので、購入前に条件を確認しておくこと。

IP-電話(インターネット・プロバイダー経由の電話)はトーン発信のできる(*ボタンがある)電話機でないと使えない。最新の電話には*ボタンは必ずついている。カードの使用法はカードの裏に記載されている。手順はそれほど難しくないが、慣れが必要だ(20文字近い暗証番号を押さなければならないため、よく高齢者を怒らせている)。

市外局番と国際電話料金

支払案内(ПТС) ✆069
国際電話(CIS諸国) ✆073
市外電話 :✆077
国際電話(長距離とバルト三国) ✆079

インフォメーション

市内旅行インフォメーションセンター
ГОРОДСКОЙ ТУРИСТСКО-ИНФОРМАЦИОННЫЙ ЦЕНТР
サドーヴァヤ通り14/52
Садовая ул., 14/52
Ⓜガスチーヌィ・ドヴォール
"Гостиный Двор"
🕒10:00〜19:00,
休日: 土日 ✆310-2822

INFO-TRAVEL NET
旅行案内サービス
モスクワ大通り104
Московский пр., 104
Ⓜマスコフスキエ・ヴァロータ
"Московские Ворота"
🕒10:00〜18:00,
休日:土日 ✆703-3863

通訳ガイドサービス

ペテルブルグ通訳ガイド協会
АССОЦИАЦИЯ ГИДОВ-ПЕРЕВОДЧИКОВ САНКТ-ПЕТЕРБУРГА
セルプホフスカヤ通り30
ул. Серпуховская, 30
Ⓜテフノロギーチェスキー・インスチトゥート(工科大学)
"Технологический институт"
✆317-8987

サンクト・ペテルブルグ通訳ガイド・ギルド
ГИЛЬДИЯ ПЕРЕВОДЧИКОВ И ГИДОВ САНКТ-ПЕТЕРБУРГА
ネフスキー大通り30
Невский пр., 30
Ⓜネフスキー・プロスペクト
"Технологический институт"
✆449-0365, -907-5059(緊急)

銀行

全ての銀行は、銀行業界が繁栄した20世紀初頭のしゃれた外観をしていて、口座開設、クレジットカードの発行、外貨の両替等、多岐にわたるサービスを行っている。多くの銀行は町の至る所にATMを設置している。

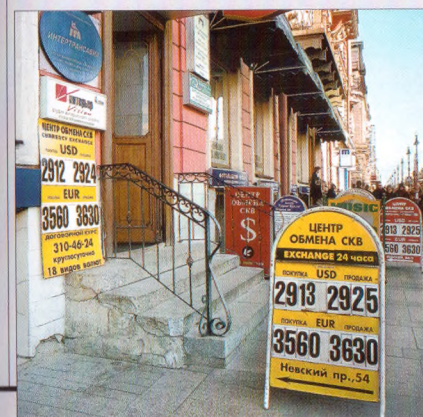
銀行によって規則が異なるので注意が必要。

両替

ロシア連邦の領内では外貨での支払いは禁止されている。外貨は町中にある両替所でルーブルに両替できる。

ロシア連邦の通貨はルーブル(рубль)と補助硬貨コペイカ(копейка)(1/100ルーブル)である。

ホテル、レストラン、大型店ではクレジットカード(Visa、Mastercard、Eurocard)で支払いができる。両替所の営業時間はどこでも一定規則に則って10:00〜20:00である。両替の際には身分証明書(パスポート)の提示が必要だ。

万が一何等かの理由で両替所が閉まっている場合、別の両替所に行くこと。そこにたむろしている人から両替をもちかけられても、了承しないこと。

ネフスキー大通りの両替所のレート

ペテルブルグ旅行ホテル開発委員会のデータによると、ペテルブルグには現在172軒のホテル(31,985室)があり、そのうち143軒は町の中心部に位置している。ホテルの割合は、高級ホテル8.1%、中級ホテル52%、エコノミー22.2%、これに該当しないのが17.7%だ。近年大きな役割を果たすようになったのが100軒以上あるミニ・ホテルで、中心部の閑静な場所にあり、観光名所からも近く、サービスも良い。

ホテル産業は「星」でランク付けされてきた。星の数は国際規格によってホテルに与えられ、いろいろな国でその星は特質をもつ。通常五つ星は最高のサービスを提供し、あらゆる施設・設備の整っている、環境条件を保証し、または(文化的都市の)歴史的中心地にあるホテルに与えられる。四つ星は非常に新しい、あるいは、五つ星に匹敵するサービス・施設が整っているが、それらが完璧ではないということだ。同様なことが三つ星ホテルにも言える。二つ星はその建物がホテルという名に値するだけの最低限のサービス・施設を備えている。

安価なホテルは時に快適かもしれないが、中にレストランがなかったり、食事がお粗末だったり、シーツを毎日取り替えてもらえなかったりする。高級ホテルはクレジット・カードだけ持ってくれば、あとはホテルで何でも調達できる。が、カード内のお金も十分でなければならない。

ほとんどの旅行者は滞在先を決めてから、ペテルブルグに来る。あらかじめホテルを予約しておかなかった場合はインターネット・カフェ(ネフスキー大通りp.307参照)に行き、本頁上に記載のサイトからペテルブルグのホテル情報(料金含む)を入手するか、あるいは鉄道駅か空港内の旅行ビューローかビジネス・センターへ行くと、必要な情報を教えてくれ、ホテル予約もでき、そこまでの行き方も教えてくれる。予約の際は必ずホテルの詳細を聞いておくこと(安価なホテルの場合)。個人的に部屋を貸すという人の誘いにはのらないこと。最も予期しないことが待ち受けている可能性がある。

ホテル ★★★★★

アストリア АСТОРИЯ
ホテル, 436室
バリシャヤ・マルスカーヤ39
Большая Морская ул., 39
✆313-5757

バルチースカヤ БАЛТИЙСКАЯ
ホテル, 106室
サンクト・ペテルブルグ,ストレーリナ,
ベリョーザヴァヤ・アレーヤ3
Санкт-Петербург, Стрельна,
Березовая аллея, 3
✆438-5745,

グランド・ホテル・ヨーロッパ ГРАНД ОТЕЛЬ ЕВРОПА
ホテル, 300室
ミハイロフスカヤ通り1/7
Михайловская ул., 1/7
✆329-6000, 329-6888,
329-6001

コリンティア・ネフスキー・パラス (パレス) КОРИНТИЯ НЕВСКИЙ ПАЛАС
ホテル, 282室
ネフスキー大通り57
Невский пр., 57
✆380-2001, 380-2001,
380-1937

ラディソンSASロイヤル РЭДИССОН САС РОЙАЛ
ホテル, 164室
ネフスキー大通り49/2
Невский пр., 49/2
✆322-5000, 322-5002

エメラルド ЭМЕРАЛЬД (Гранд-отель)
ホテル, 90室
スヴォーロフスキー大通り18
Суворовский пр., 18
✆740-5000

ホテル ★★★★

アナベーリ・リュクス (デラックス) АНАБЕЛЬ ЛЮКС
ミニ・ホテル, 7室
ネフスキー大通り88
Невский пр., 88 ✆279-8211

アングレテーレ АНГЛЕТЕР
ホテル, 193室
バリシャヤ・マルスカーヤ通り39
Большая Морская ул., 39
✆313-5666

ヘルヴェーツィヤ (ヘルヴェチア) ГЕЛЬВЕЦИЯ
ホテル, 40室 マラート通り11
Ул. Марата, 11 ✆710-6546

コロミャージュスキー・ビジット КОЛОМЯЖСКИЙ ВИЗИТ
ホテル, 100室
チスチャコフスカヤ通り4-6
Чистяковская ул., 4-6
✆304-6598

コローナ (王冠) КОРОНА
ミニ・ホテル, 8室
マーラヤ・カニューシェンナヤ通り7
Малая Конюшенная ул., 7
✆311-0086

ネプチューン НЕПТУН
ホテル, 150室
オブヴォードヌィ運河93a
Наб. Обводного канала, 93a
✆324-4610

ホテル「アストリア」

グランド・ホテル「ヨーロッパ」

ホテル「プリバルチースカヤ」

ノヴォテル・サンクトペテルブルグ・センター НОВОТЕЛЬ САНКТ-ПЕТЕРБУРГ ЦЕНТР
ホテル, 233室 マヤコフスキー通り3a
Ул. Маяковского, 3a
✆335-1188

プリバルチースカヤ ПРИБАЛТИЙСКАЯ
ホテル, 1200 室
カラブレストライーチェリ通り14
Ул. Кораблестроителей, 14
✆356-3001

プールコフスカヤ ПУЛКОВСКАЯ
ホテル, 840室 勝利広場1
Пл. Победы, 1 ✆740-3900

ピャーティ・ウーゴル (5番目の角) ПЯТЫЙ УГОЛ
ホテル, 27室 ザーゴロドヌィ大通り13
Загородный пр., 13
✆380-8181

ルネッサンス・サンクト・ペテルブルグ・バルティック РЕНЕССАНС САНКТ-ПЕТЕРБУРГ БАЛТИК
ホテル, 102室
ポチタムスカヤ(中央郵便局)通り4
Почтамтская ул., 4
✆380-4000

ロイヤル・アンタレス РОЯЛ АНТАРЕС
ミニ・ホテル, 9室
ネフスキー大通り147-36
Невский пр., 147-36
✆277-1835

インターネット・ホテル検索予約サービスは以下のサイトをご利用ください。
http://all-hotels.ru/spb　http://www.peterout.ru　http://sevpalmira.spb.ru
http://hotels.avelonbeta.ru/piter.php

トアズ ТОАЗ
ミニ・ホテル, 20室 サペルヌィ横丁20
Саперный пер., 20
✆329-5304

高級ミニ・ホテル

エリセーエフ・パラス ЕЛИСЕЕВ ПАЛАС
(エクストラ・クラス) 29室
モイカ川岸通り59
Наб.реки Мойки, 59
✆324-9911

ザラトイ・サード (黄金の庭) ЗОЛОТОЙ САД
(エクストラ・クラス) 18室
ウラジーミルスキー大通り9
Владимирский пр., 9
✆572-2233

ネフスキー150 НЕВСКИЙ 150
(ファースト・クラス) 8 室
ネフスキー大通り150
Неский пр., 150 ✆277-1219

プレスティージュ ПРЕСТИЖ
(ハイ・クラス) 10 室
ヴァシーリー島,3番線(リーニヤ)52
3-я линия Васильевского
острова, 52 ✆328-5011

フォンタンカ99 ФОНТАНКА 99
(ファースト・クラス) ミニ・ホテル 4 室
フォンタンカ川岸通り99
Наб. реки Фонтанки, 99
✆310-4731

ホテル ★★★

アムレット・ナ・マーライ・マルスコイ АМУЛЕТ НА МАЛОЙ МОРСКОЙ
ミニ・ホテル, 7 室
マーラヤ・マルスカーヤ通り7, 5
Малая Морская ул., 7, пом. 5
✆315-4764

アナベーリ АНАБЕЛЬ
ミニ・ホテル, 5 室
ネフスキー大通り147-33
Невский пр., 147-33
✆277-4416

アルカディア АРКАДИЯ
ミニ・ホテル, 15 室 モイカ川岸通り58a
Наб. реки Мойки, 58a, лит. Г
✆314-1900

アート・ホテル АРТ-ОТЕЛЬ
ミニ・ホテル, 14 室
マハヴァーヤ通り27/29
Моховая ул., 27/29
✆740-7585

ベスト・コーネ БЭСТ КОНЕ
ミニ・ホテル, 7 室
ザーゴロドヌィ大通り11
Загородный пр., 11
✆380-0100, 713-1392

ヴェスタ ВЕСТА
ホテル, 12 室 ネフスキー大通り90-92
Невский пр., 90-92
✆272-1322

ドストエフスキー ДОСТОЕВСКИЙ
ホテル, 207 室
ウラジーミルスキー大通り19
Владимирский пр., 19
✆331-3200, 331-3203,
331-3201

ユーラシア ЕВРАЗИЯ
ミニ・ホテル, 18 室
ガッチンスカヤ通り5
Гатчинская ул., 5
✆230-4432, 238-0800,
230-4432

イスクラ ИСКРА
ミニ・ホテル, 7 室
マーラヤ・パサーツカヤ通り
Малая Посадская ул., 10
✆230-6027, 233-6578

コンフォルト КОМФОРТ
ミニ・ホテル, 14 室
バリシャヤ・マルスカーヤ通り25
Большая Морская ул., 25
✆314-6523

コッテージ・ナ・ブハレスツカイ КОТТЕДЖИ НА БУХАРЕСТСКОЙ
ミニ・ホテル, 16 室 ブハレツカヤ通り59
Бухарестская ул., 59
✆718-2307, 718-2308,
718-2370, 718-2285

クリストフ КРИСТОФФ
ミニ・ホテル, 15 室
ザーゴロドヌィ大通り9
Загородный пр., 9
✆+7(901)302-1242, 713-3822

クロンヴェルク КРОНВЕРК
アパート・ホテル, 26 室
ブローヒン通り9 Ул. Блохина, 9
✆703-3663, 703-3602,
703-3663

マラータ30 МАРАТА 30
ミニ・ホテル, 9室 マラート通り30
Ул. Марата, 30 ✆703-5381

マルシャル МАРШАЛ
ミニ・ホテル, 17室 シュパレールナヤ通り
Шпалерная ул., 41
✆279-9955

マチソフ・ドーミク МАТИСОВ ДОМИК
ホテル, 45室 プリャシュカ川岸通り3/1
Наб. реки Пряжки, 3/1
✆318-7051

メルクーリー (マーキュリー) МЕРКУРИЙ
ホテル, 16室 タヴリーチェスカヤ通り39
Таврическая ул., 39
✆325-6444

ナ・コンノイ НА КОННОЙ
ペンション, 5室コンナヤ通り5
Конная ул., 5 ✆274-9378

ナウチルス・イン НАУТИЛУС ИНН
ホテル, 35室 リージュスカヤ通り3
Рижская ул., 3 ✆ 449-9000

ネヴァ НЕВА
ホテル, 110室 チャイコフスキー通り17
ул. Чайковского, 17
✆ 278-0504

ネフスキー23 НЕВСКИЙ 23
ミニ・ホテル, 5室
ネフスキー大通り23
Невский пр., 23 ✆319-4328

ネフスキー90 НЕВСКИЙ 90
ミニ・ホテル, 18室
ネフスキー大通り90
Невский пр., 90 ✆703-3860

ネフスキー91 НЕВСКИЙ 91
ミニ・ホテル, 14 室 ネフスキー大通り91
Невский пр., 91 ✆703-3860

ネフスキー・イン НЕВСКИЙ ИНН
ミニ・ホテル, 7 室
ネフスキー大通り11 Невский пр., 11 (入口はキルピーチヌィ横丁
Кирпичный переулок
✆319-4462

ネメツキー・クルブ (ドイツクラブ) НЕМЕЦКИЙ КЛУБ
ミニ・ホテル, 16 室 ガステッロ通り20
Ул. Гастелло, 20 ✆371-5104

オクタヴィアーナ ОКТАВИАНА
ミニ・ホテル, 17 室 ネフスキー大通り76
Невский пр., 76 ✆ 319-4462

プリマ・ヴェーラ ПРИМА ВЕРА
ミニ・ホテル, 16 室 ネフスキー大通り92
Невский пр., 92 ✆272-9530

プリン・インターナショナル ПРИН ИНТЕРНЕШНЛ
ホテル, 46 室
ヴォズロジュデーニエ通り4
ул. Возрождения, 4
✆324-4949

レーピン РЕПИН
ミニ・ホテル, 13 室
ネフスキー大通り136
Невский пр., 136 ✆319-4328

レスペクターリ РЕСПЕКТАЛЬ
ミニ・ホテル, 9 室
マヤコフスキー通り36/38
ул. Маяковского, 36/38
✆319-4328

ロシア РОССИЯ
ホテル, 419室
チェルヌィシェフスキー通り11
Пл. Чернышевского , 11
✆329-3994

スカンジナヴィア СКАНДИНАВИЯ
ホテル, 61室 サンクト・ペテルブルグ,
セストロレツク, パルコーヴァヤ通り18
СПб, Сестрорецк,
Парковая ул., 18
✆437-0644

ソヴェツカヤ СОВЕТСКАЯ
ホテル, 1000室
レールモントフスキー大通り43/1
Лермонтовский пр., 43/1
✆740-2640

シュゾール СЮЗОР
ミニ・ホテル, 7 室
ウラジーミルスキー大通り10
Владимирский пр., 10
✆703-5381

タヴリーチェスキー ТАВРИЧЕСКИЙ
ミニ・ホテル, 3 室
チャイコフスキー通り81
Ул. Чайковского, 81
✆347-3930

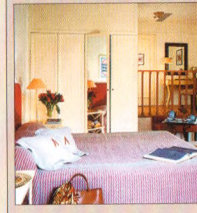
ウ・フォンターナ У ФОНТАНА
ホテル, 98室 セヴァスチヤノフ通り14
Ул. Севастьянова, 14
✆388-1278, 766-3897

ツェントラル (センター) ・イン ЦЕНТРАЛ ИНН
ミニ・ホテル, 4室 ヤクーボヴィチ通り2
Ул. Якубовича, 2, ап. 14
✆ 971-7536

シェルホルト ШЕЛФОРТ
ミニ・ホテル15室
ヴァシーリー島第3番線(リーニヤ)26
3-я линия
Васильевского острова, 26
✆328-0555

エルミタージュ (プリユット・オトシェリニカ) ЭРМИТАЖ (ПРИЮТ ОТШЕЛЬНИКА)
ミニ・ホテル, 4 室 ミリオンナヤ通り11
Миллионная ул., 11
✆312-9628

2005年4月時点のサンクト・ペテルブルグホテル、ミニ・ホテル参考価格

(ツイン一人分の料金。
ツインの部屋を一人で
利用する場合、
40–50%高くなる)

ミニ・ホテル

「アナベーリ」($ 70〜)
「ユーラシア」($ 80〜)
「イスクラ」($ 28〜)
「コンフォルト」($ 115〜)
「ラビリント」($ 40〜)
「マチソフ・ドーミク」($ 70〜)
「ナウチルス・イン」($ 85〜)
「ネフスキー91」「ネフスキー90」($ 49〜)
「ピョートラ(ピョートルの)」($ 140〜)
「プーシキン・イン」($ 100〜)

ホテル★★★

「ドストエフスキー」($ 175〜)
「プリン」"ПРИН" ($ 120〜)

ホテル★★★★

「アンタレス」(ロイヤル・アンタレス)($ 85〜)
「プリバルチースカヤ」($ 195〜)

ホテル★★★★★

「アストリア」($ 395〜)
「バルチースカヤ・ズヴェズダー」($ 260〜)
「ネフスキー・パラス」($ 410〜)

ホテルタイプ・アパート

1部屋 $ 40〜
2部屋 $ 50〜
3部屋 $ 80〜

販売システム

　ペテルブルグでは店によって営業時間が異なる。
通常は11:00～20:00だが、
食料品店は9:00～21:00、
百貨店は9:00～22:00
（「ガスチーヌィ・ドヴォール」、「パッサージュ」等）、
大型書店
（「ドム・クニーギ」、「ブクバイェード（Буквоед）」）は9:00～20:00だ。例外もあるが、大型店は通常年中無休となっている。
　ペテルブルグでは、店の商品は値段が定められており、値引き交渉はできない。

20世紀初頭の
食料品店の看板

ウニヴェルマグ（百貨店）

　百貨店（ウニヴェルマグ　"универмаг"）はご存知のとおり、「universal（何でもある店）」だ。実際デパートでは化粧品、キャビアから高価な書籍、骨董品までほとんど何でも買うことができる。が、百貨店の価格は他の専門店より高く、質は悪いときが多い。百貨店の原型は古いロシアのガスチーヌィ・ドヴォールだ（ゴスチ"гость"「商人」）。ネフスキー大通りにあるガスチーヌィ・ドヴォールはペテルブルグで最大だが、最古の百貨店というわけではない。最初のガスチーヌィ・ドヴォールはペテルブルグ創立早期、トロイツキー（三位一体）広場にあった。もう一つの有名な百貨店パッサージュは 19世紀に新しく英国風に建てられた最初のデパートである。
　現在次々にヨーロッパ方式の大型スーパーマーケットが開店し、非常に便利になった。価格も安く、快適だ。正真正銘のスーパーマーケットは町外れに多い。
中心部の自称スーパーマーケットはこのタイプではない（地価が高いため）。

百貨店「パッサージュ」の回廊

ウニヴェルサム（高級食料品店）

　ウニヴェルサムは「ウニヴェルマグ（百貨店）」と同類物と解釈されるが、その中でも特に食料品専門店のことだ。大型で有名なウニヴェルサム（高級食料品店）はエリセーエフ店（ネフスキー大通り57 Невский, 56; 1902-1903年, 建築家G.バラノフスキー）だ。建物は商人一家エリセーエフ家のために建てられた。彼らはペテルブルグで19世紀から有名だ。ヤロスラーヴリ県出身のピョートル・エリセーエフ（1775-1825）はシェレメーチェフ伯爵の農奴庭師だったが、1813年都で果物とワインの販売を始めた（ネフスキー大通り18）。彼の息子グリゴーリーとステパンは1857年商館を建て（建築費用約8万ルーブル）、ペテルブルグ、モスクワ、キエフに巨大な食料品店（チェーン店）を作った。エリセーエフ兄弟はヨーロッパの良い会社の商品を供給し、ヨーロッパに巨大な倉庫があった。1874年世界的に有名になっていたエリセーエフ商館は商品に国家シンボルの商標をつける権利を与えられ、宮廷専用納入業者になった。1910年エリセーエフ兄弟の一人（グリゴーリー・グリゴーリエヴィチ）は貴族の称号を得る。が、1914年事態は急変する。商館（食料品店）のオーナーがフランスに行ってしまい、その息子達が家業を継ぐのを拒否したからだ。息子達は革命後もロシアにとどまったが、1930年代の弾圧（スターリン粛清）で亡くなった。

エリセーエフ食料品店の店内

24時間の店

　24時間営業の店がペテルブルグにできたのは約10年前で、すぐに普及した。初期の24時間の店は食料品店、飲料しか販売していなかったが、最近一部の薬局、書店も24時間営業するようになった。24時間の店は、大きな看板「24」が出ているのですぐにわかる。

お土産市場

　ペテルブルグ最大のお土産市場はスパース・ナ・クラヴィー教会の裏の広場にある。

絵画販売

　ペテルブルグに偉大な伝統の二つの画派が（芸術アカデミーと旧シュティーグリツ芸術学校）があり、ロシア全土から学生が集まり、芸術の発達に貢献している。
　それほど名が知られてなく、自分の芸術を路上で売っている人の作品はペテルブルグの多くの画廊や古い店「芸術家の店」"Лавка художника" ネフスキー大通り8（Невский пр., 8）で買うことができる。こういった場所では画家の名前の入った版画、水彩画、ロシア民芸品が売られている。

新聞雑誌キオスク

　主に定期刊行物、文房具（ペン等）、手帳、公衆テレホンカード、インターネット・カード等を販売している。

市場

　ペテルブルグには10の市場がある。中心部で最大のものは「クズニェーチヌィ（鍛冶）市場」（Ⓜドストエフスカヤ Достоевскаяあるいは

Ⓜウラジーミルスカヤ　Владимирская）だ。ネフスキー大通りから徒歩10分のところにネクラーソフ市場（Ⓜチェルヌィシェフスカヤ　Чернышевская）がある。市場は普通の店よりはるかに品数豊富で、値段も安い。また、店と違って値引き交渉もできる。

劇場チケット売場

　ペテルブルグの劇場のチケットはその劇場内だけでなく、市内各地に設置されているテアトラーリナヤ・カッサ（Театральная касса）と呼ばれる劇場チケット売場で購入することができる。ここでは劇場のチケットだけでなく、ペテルブルグ市内の施設の催し、コンサートホール、演劇、サーカスのチケットも販売している。日付と上演目録は売場に貼られてある。

チェーン「宝石商」

　かつて宝石商品は独占販売が行われていた。今でも宝石は高い品質を保ち、本物と質を保証している。値段もそれほど高くない。

路上販売

　路上販売の歴史は、行商人がロシア各地の通りで自家製ピロシキや小物を売り歩いたことに端を発する。現在ペテルブルグの通りには多くの露店が立ち並び、アイスクリームや飲み物、ハンバーガー等を売っている。

! もし不良品を購入した場合

　店で購入の際は必ず価格、品質、賞味期限を確かめること。もし後になって不良品だということがわかった場合（例えばホテルに帰った後等）、遠慮なくそれを返品するように。返品には購入した商品のレシートが必要である。ちゃんとした店では自分の店の商品を認識しており（高額商品でない限り）レシート無しでも交換するはずだ。交換、返金を断られた場合は、オーナーを呼ぶこと。高額商品の購入の際は返品、交換が可能かどうか確認の上、購入すること（例えば、薬、宝飾品などの場合は、鑑定が必要だ）。市場や路上では高額な物を買わないように。

国家　売買・商品品質・消費者保護管理局
✆713-1406

骨董品（アンティーク）

ペテルブルグは常にアンティークショップで有名で、そこでは現在でも美しい骨董品が購入できる。骨董品の海外持ち出しの際は「文化財移動法」(p. 287)に目を通すこと。

「貴婦人」
（20世紀初頭; 陶器; K.ソモフのモデルによる）

琥珀・宝石細工製品

ペテルブルグの職人達が数多くの貴族の屋敷内装作業に携わっていた。18-19世紀ペテルブルグの膨大な量の宝石細工は流派をもたらした。伝統的な手法は独自の修復工によって保存され、ペテルブルグを世界的な宝石細工の中心にした。材料として使われているのは、ロシアでしか見ることのできない品種のばら輝石、孔雀石、軟石、多様な碧玉、縞瑪瑙（オニックス）、同様にカリーニングラード産の多種多様の色調のバルト海の琥珀だ。

天然石の宝石製品は専門店か博物館・美術館内の土産屋で購入すること。

ツァールスコエ・セロー
琥珀工房
☽476-9918

チェスセット
「氷上の戦い」の駒の一つ
（2002年; 琥珀,
金属; B. カルナウホフ,
帝室琥珀工房）

イコン画「聖ボリスと聖グレーブ」
（1990年代; 琥珀, 金箔; 帝室琥珀工房）

「果物を運ぶ黒人の子供」
（2002年; 黒曜石, 碧玉,
金属; R.シャフェーエフ,
帝室琥珀工房）

「サモワールとおじいさん」
（2001年; 碧玉, 金属;
R.シャフェーエフ, 帝室琥珀工房）

「イースターエッグの木」
（国立サンクト・ペテルブルグ歴史博物館・土産物屋）

イースターエッグ

キリスト教国で人気のある復活祭の卵。昔も今も木、ガラス、陶器、金属、骨、石等あらゆる材料から造られる。とりわけ有名なイースター・エッグはカール・ファベルジェ工房の金、銀、宝石が施された名品だ。現在ペテルブルグの宝石店ではどこでも「ファベルジェ製品を模した」イースターエッグを購入することができる（直径1cmから巨大なものまで）。二つともよく似ているが、偽者は掘り込みの後がみられる。

フェドスキノ

1798年モスクワ郊外のフェドスキノ村にロシア初の張子の小箱、入れ物製品の工房が創立された。製作技術はドイツからもたらされ、早期は工房ではドイツ職人が働いていた。伝統に従い、フェドスキノ・ミニアチュール（細密画）は絵画の模写、センチメンタルな風景画や戦いのシーンを描いていた。銅粉またはアルミ粉で下塗りされた（時おり貝の中にもかかれた）表面に油絵具で絵付けされた。絵付け後、漆を塗り、つやだしが行われた。

ロモノーソフ陶器

1744年エリザヴェータ女帝はペテルブルグに後に帝室陶磁器工房として有名になる磁器工房（現在のロモノーソフ）を創立した。工房は1750年代に化学者ドミートリー・ヴィノグラードフの製法により早期の作品を製造した。ペテルブルグの工房は急速に発展し、同世紀末には既にロシアの主要な陶器製造工場となり、ロシア市場から有名な競争相手であったフランス（セーヴル）、ドイツ（マイセン）陶器を駆逐した。

マトリョーシカ

最も有名なロシアのお土産で、中から次々に小さい人形が出てくるこけし人形だ。日本の箱根の入れ子人形から発案されたとされる。ロシア国内におけるマトリョーシカの発祥の地はトロイツェ＝セルギエフ修道院の郊外だとされている。伝統的なマトリョーシカは色鮮やかな農民プラトーク（ショール）を頭に巻いた女性の姿をしている。名前は、ヴォルガ川沿岸で人気のある庶民的な女性名「マトリョーナ」の愛称形「マトリョーシカ」に由来する。

白樺細工製品

白樺細工は石器時代から有名で、北ヨーロッパとシベリアに広まった。今日北の職人達はこの家内工業の伝統を続け、古代の装飾模様からモデルをとり、現代の製品に再現している。

パレフ，ムスチョーラ，ホールイ

ウラジーミルとイヴァノフ州に隣接する3つの町、パレフ、ムスチョール、ホールイは有名なイコン（聖像画）の中心地だったが、1920年代から1930年代初頭、イコン画を禁止されたことをきっかけに、その技術でつくられた張子のテンペラ画製品の製作を始める。15世紀ヴェネチア絵画に起源を持つ17世紀ロシアイコン派の手法で描かれる。

ホフロマ

木製食器製作の昔ながらの家内工芸品だ。黒色または金色を基調に絵付けが施され、漆が塗られる。ホフロマの特徴的なモチーフは大粒の赤い苺と金色の秋の葉だ。

ボリス・クストージエフ 「お茶を飲む商人の妻」1918年
国立ロシア美術館所蔵

ロシア料理

ロシア料理は北の(寒い場所)条件から積み重なった。食事において一番大事なことは、高カロリーで、摂取しやすく、調理が簡単であることだった。何より重視していたのが食材の新鮮さ、調味料を使わない天然素材の味付けだ。これは今日のロシア料理の重要な長所となっている。ロシアの国境が南と東に広がるにつれて、伝統的なロシア料理にヴォルガ、シベリア、カザフの民族料理が含まれるようになった。

お茶

飲み物としてのお茶に関する最初の記述は紀元前2700年とされる。が、お茶の木を(中国で)栽培するようになったのは4世紀になってからのことだ。ロシアにお茶が入ってきたのは1638年、モンゴルのハンが当時のロシア皇帝ミハイル・フョードロヴィチに贈り物として4プード(65.52kg)のお茶を送った時だ。約半世紀後の1679年、中国とお茶を常にロシアに供給するという取り決めが結ばれ、18世紀に膨大な量に達したお茶は、たちまち伝統的な薬草汁や果物飲料に取って代わった。ロシア初のサモワール(湯沸し器)の出現もこの時期にあたる。1906年ロシアのお茶輸入量は約10万トンだった(1897年の国勢調査によると、当時のロシア帝国の人口は約1億2600万人)。お茶受けには様々な焼き菓子が出される。ほしぶどう入りパウンドケーキ、ブーブリクやバランキ(共に輪形の乾パン)、野菜、きのこ、木苺、果物入りのピローグ(ロシア式パイ)やピロシキなど、その種類は豊富だ。

ロシアのサモワール

イクラ

ロシアのキャビア(チョウザメの卵)は昔から栄養価と味で名声を博していたが、古代ルーシ国家では高級な珍味とはみなされていなかった。

キャビアは大粒で新鮮なほど良いとされている。ロシアでキャビアは「黒いイクラ」と呼ばれているが、ヨーロッパでは「灰色」または「ロシアのイクラ」と呼ばれている。中でも高級とされているのがベルーガ、スチェルリャジ、セヴリューガ、オショートル(チョウザメの名称)のもので、それらはカスピ海や黒海流域、ウラルやシベリアの川(オビ川、イルトゥィシ川、エニセイ川、レナ川、アムール川他)で漁獲される。上記4種類のキャビアの中で最も商品価値が高いとされるのがベルーガ、それに次ぐのがオショートル、3位がセヴリューガだ。製法によりプレス加工、プレス未加工、未処理のものに選別される。プレス未加工の製品のためには、熟成した卵だけが使われる。それに数分塩をふり、瓶に詰められる。瓶詰めキャビアは塩分が少ないため、保存期間が短く、2ヶ月から2ヵ月半しか保存できない。瓶を開けると、キャビアの表面は鏡のようで、瓶の蓋にキャビアの粒はついていない。キャビア自体軽く輝いていて、特ににおいもなく、同じサイズの粒で、粒同士がくっついていることもない。役に立たない卵の「プレス未加工」のためにプレス加工のイクラ使われる。もしイクラに脂肪が多かったり、熟成していなかったり、熟成しすぎていた場合、未処理卵は細かく切り刻まれ、塩が振られる。このようなキャビアを「未処理」キャビアという。

ブリヌィ ～ロシアのクレープ～

インド・ヨーロッパ圏の古代の宗教儀式用料理の一つ。この調理は冬の終わりを意味していた(ケルト語方言でblyn, bleinは「終わり」、同一語根を持つインド・ヨーロッパ語は「何かやわらかいもの」を意味する)。ブリン(1枚のブリヌィ)は太陽を象徴している。ブリヌィはマースレニッツア(大斉前週:冬を送り、春を迎える祭り)に欠かせない料理である。

古代、数多くのブリヌィの調理法やその具があった。特に広まったのは「焼き色のついた」ブリヌィだ。今日使われているのは次のレシピだ。牛乳に1個から数個の卵、小麦粉、ベーキング・パウダーまたはイースト菌を入れてかき混ぜ、生地を作る。お好みで塩・砂糖をふる。とろりとするまで混ぜ合わせ、油をひき、よく温められたフライパンで焼く。表が焼けたら(通常1分未満)裏返す。焼きあがったブリンヌィは薄くて黄金の色をしている。ブリヌィはバターを塗って、蜂蜜またはスメタナと食卓に出される。美食家はイクラ(黒または赤)入りブリヌィを好む。ブリヌィのために特別な具が作られる。トボローグ(カッテージチーズ)、りんご、肉等をブリヌィで包んで食べる。上手にできたブリヌィはおいしく、栄養も高い。

塩、からし、わさび、ねぎ、しょうが、黒胡椒—これらは伝統的なロシアの調味料で、これ無しにロシア料理を語ることはできない(これのないロシア料理はありえない)。春と夏にはこれにウクロープ(ウイキョウ)、セロリ、パセリが加わる。これらはルーシで好まれた香草だ。

ペリメニ ～ロシア風水餃子～

ペリメニ(「пельペリ」は耳、「няньメニ」はパンという意)の作り方はユーラシア大陸のステップ(騎馬)民族から伝わったものだ。そこには数多くのバラエティに富んだペリメニがある。現在これはロシア料理の中でも人気のメニューだ。

最も広く伝わっている調理法はきわめて簡単だ。小麦粉、卵、水に少し塩を加えて丸くこねる。それとは別に、ひき肉(合いびき肉:牛肉または子牛の肉を豚の胸肉か羊の肉とまぜたもの)、玉ねぎ、香辛料をまぜ、ペリメニの具を作っておく。生地は餃子の皮を作るように薄くのばし、直径約5cmの円形を作る。具を入れて包んだものを沸騰したお湯にいれ、15-20分茹でる。茹で上がったらお湯から出し、バター、スメタナ、マヨネーズ、ケチャップあるいはお好みのソースをかけて食べる。

シャシュリーク ～バーベキュー～

野外で肉を焼くというのは、人が食器を発明する前に覚えた太古の料理法の一つだ。シャシュリークというのは伝統的な焼く技術の一つである。いつ、どうやってカフカスに現れたのかを断定するのは難しいが、これをロシアにもたらしたのは遊牧民(スキタイ?アーリア人?)だとされている。彼らの住居跡に考古学者たちは古代の脚付きコンロ、マンガール(火鉢、現在のバーベキューコンロ)を発見した。

シャシュリークは羊(本場)か豚肉から作る。肉は直径5cmに切り、輪切りの玉ねぎをおき、塩コショウをふる。それからワイン酢に浸し、蓋をして冷蔵庫に入れる。数時間後にはもう焼いても良い。肉は細い金串に刺し、真っ赤に焼けた木炭のグリルで焼く。時々裏返し、新酒(ワイン)をかける。アゼルバイジャンでは肉のシャシュリークにトマト、肉厚の甘いピーマン、なすを加える。トマトとピーマンは金串に刺して焼くだけだが、ナスは下ごしらえが必要だ。へたを切り、2センチ幅の切り込みを6ー7箇所入れる。この切り込みに細かく切った塩漬けのラード(羊または豚肉)をつめる。それから野菜(それぞれ別の金串に刺す)を外側に焦げ目がつくまでマンガールで焼く。その後お皿に盛り、表面のこげを削り、肉に添えて出す。これはえもいえぬ美味しさだ。

コーリュシカ

この小さい魚は白夜の始まりに欠かせないペテルブルグの「料理の象徴」になった。

コーリュシカ(Osmerus eperlanus)はサケ・マス科の魚で、6属(約10種)、全長30cmで、北ヨーロッパの川岸に広く棲息している。産卵のためにロシア、ネヴァ川に戻ってくる。ネヴァ川にコーリュシカが入ってきて、漁が盛んになる5月はちょうど白夜の始まる時期でもある。それでペテルブルグの市場、レストラン、オープンカフェでコーリュシカを見ると、夏の到来を感じるのだ。この魚は驚くほど美味で、下ごしらえをする(魚をおろしたりさばいたりという手間がない)必要がない。生魚は微かに新鮮なキュウリのようなにおいがする。ペテルブルグでこれは季節の珍味だ。コーリュシカは普通、グリルか油を敷いたフライパンで焼かれる。

ボルシチ(ボルシ)

最も日常的な料理だ。スラヴに起源を持ち、ポーランド、ウクライナ、ロシアに広く伝わった。ボルシチは肉のブイヨンをベースに、ボルシチ特有の赤紫の色を出すスヴョークラ(赤カブ)を加えたキャベツのスープだ。

最も美味しいボルシチの作り方は次のとおり。まず鍋で豚肉(子牛の肉でも可)の肩甲骨、髄入りの肉あるいは骨からブイヨンを作る。ブイヨンができたら(約40分後)、塩で味付けし、刻んだキャベツ、輪切りのニンジンを入れる。同時に赤カブの下準備もしておく。1センチの角切りにし、油をひいたフライパンで5分ほど焼く(こうすることによってボルシチに豊かな赤紫色と特別な風味が加わり、赤カブも茹でても色が抜けなくなる)。赤カブは油ごと沸騰したブイヨン(具入り)の中に入れる。お好みで大粒の黒胡椒、香辛料を加えても良い。全部一緒にとろ火で30分ほど煮る。できあがったボルシチは一皿ごとによそい、ウクロープ(ウイキョウ)や香草をちらして食卓に出す。

ロシア人はウォッカ好きだという噂は誇張されてはいるが、実際ロシア人はワインよりウォッカを好む。ワインはユーラシア大陸の北部では生産されなかった（ロシアで葡萄は栽培されていない）。
古代北国の人々は似たような方法でアルコール飲料を製造し、穀物をベースにある民族はビールを造り、他の民族は他の飲料を作った。しかしブドウ販売の発達とロシア帝国の成長と共に南で製造されたブドウ酒がしだいに人気を博すようになっていった。

ビール

うっとりさせる芳香と苦味のある風味の飲み物だ。主にビール麦、ホップ、水を使って醸造される。ビールを初めて作ったのは古代農耕シュメール文明だ。世界中に農業が広まるにつれ、それぞれの民族は自国のビールを作るようになった。儀式用や栄養飲料だったビールは「アルコール度が少ない」ビールになった。

ソヴィエトのシャンパン（スパークリング・ワイン）

ロシアのシャンパンの起こりはゴリツィン公が自分のクリミア領地「ノーヴィー・スヴェート（新世界）」で作ったものから始まった。それは1900年パリ万国博覧会でグランプリに輝いた。ソ連のシャンパンの創立者はアントン・ミハイロヴィチ・フーロフ＝バグレーエフだ。化学者によって、皇帝の領地アブラウ・デュルソーに招聘された彼はゴリツィンと共同でシャンパンを作り上げる。革命後、彼はシャンパン製造コストを下げるために、（シャンパンは従来1本ずつワイン瓶の中で醸造されていた）たるの中で醸造することを思いつき、その質を下げることなく、原価を下げることに成功する。新しい飲み物は1940年代末には既に、ソ連の各家庭の祝日のテーブルには欠かせないものになっていた。

コニャック

17世紀からフランスのCognac（コニャック）町だけで製造されていた（銘柄は Curviosier, Hennessy, Remy Martin, Martell）ブランデーの一種だ。しかしソ連の時代からソ連のブランデーを伝統的にコニャックと呼ぶようになった。ソ連のコニャックは3グループに分けられる。1）アルメニア、アゼルバイジャン、ダゲスタン（強い芳香と高まるエキスが特徴）、2）グルジア、クラスノダール（軽く、新鮮で、花の色に似ている）、3）ウクライナ、モルダヴィア（まろやかで、調和のとれたかすかな上品なバニラの香り）

モルダヴィア・ワイン

モルダヴィア・ワインが最初に文献に登場するのは紀元前6世紀だ。モルダヴィアには15世紀までに地元種、ギリシャやローマ品種、後に有名なフェチャスカ、フランクシャ、ブスエク、グラス、プラヴァイ、ガルベヌのブドウ畑地帯が形成された。19世紀モルダヴィアでハンガリー、ドイツ、フランス品種のブドウが栽培されるようになったが、それらはまろやかさと芳醇さではモルダヴィア種に今も昔も敵わない。

グルジア・ワイン

グルジアは古代のブドウの発祥地でブドウ酒造地の一つである。（恐らく紀元前5000年前から）ブドウ作りに適した自然環境で、ここで500品種以上のグルジア・ブドウが形成された。これは世界のブドウ種の4分の1をしめる。グルジアの気品のあるワインはエネルギッシュで多くの組成、独特の芳香が特徴だ。
その特性を挙げると、まず赤いテーブルワイン。上位を占めるのは「ムクザニ」（オークの樽で3年以上寝かされた、濃いルビー色で、上質の芳香と複雑な風味）、「サペラヴィ」（「染色工」、天然やや甘口、渋みのある風味とばら色の色合い）、「フヴァンチカラ」（天然やや甘口、極上の風味と調和のとれた味わい、やや甘口ワインの至宝である）、その下にくるのが「キンズマラウリ」（強い上質の風味と香り、なめらかな味わい）だ。

ウォッカの歴史

ロシアにおけるウォッカは不思議なことだが、外国から持ち込まれた品だった。伝承によるとウォッカに似た「aqua vitae（命の水）」を15世紀モスクワにもたらしたのはジェノアの商人だとされる。ドミートリー・ドンスコイ公に謁見がかない、その手厚いもてなしに感激した商人達は「命の水」入り容器、つまり「ブドウ酒」を贈った。しかし当時はロシアに定着しなかった。1429年万能薬として「命の水」が再び外国人によってモスクワにもたらされた。そこから15世紀ロシアの修道士が初めてウォッカを醸造することを覚えた。同世紀末にイヴァン3世はウォッカの製造と販売を国家専売とした。エカチェリーナ2世の命令で1765年3月31日から貴族にもウォッカ醸造が許された。その後ウォッカの質は上がり、世界的名声を得るようになった。製造者は醸造の際牛乳と卵白を使い、それぞれの領地の自分のオリジナルウォッカが製造されるようになった。

ロシアウォッカ

ロシアウォッカ史の新しい段階は偉大な化学者ドミートリー・イヴァーノヴィチ・メンデレーエフに関係がある。
彼の長年の研究の結論はウォッカ醸造に用いられ、成功した。1894-1896年ウォッカの国家基準が設けられ、専売が導入された。1992年専売は中止され、その後国内に安くて「濁った（闇）」製品が出回るようになった。ウォッカは値段が高ければ高いほど、質が良いということを頭に留めていただきたい。質の良いウォッカの価格は0.5Lあたり平均USD10だ。良質のスーパーマーケットか専門店での購入をお勧めする。

i レストラン

812 サンクト・ペテルブルグの市外局番

サンクトペテルブルグには他の観光地同様、一流レストランから軽食喫茶店、ファーストフード店まで多くの様々な飲食店がある。一例を挙げると、喫茶店、洋菓子店（デザート付コーヒー、紅茶の愛好家にお勧め）の中でペテルブルグで評価が高いのは、「チャイナヤ・ローシュカ（Чайная ложка）」（ここではお茶受けにブリヌィがお勧めだ）や「スラトカイェーシュカ（Сладкоежка）」で、ファースト・フードなら、みんなが知っている「ピザ・ハット」や「マクドナルド」があり、他にもグルメ用の様々な種類のレストランがある。

ペテルブルグ初期のレストラン経営者はフランス人、スウェーデン人、イギリス人といったヨーロッパ人だったため、町の一般的なレストランはヨーロッパスタイルだった。しかしエキゾチックな飲食店もしだいに増えていっている。

約4000店の飲食店があるペテルブルグで、代表的なカフェ・レストランが集中しているのは、疑いなく、ネフスキー大通りとその周辺だ。他の場所にも飲食店はあるが、旅行者が町の奥深くまで出入りしたりすることは稀なので、大部分の人にとって、コーヒーやお茶を飲んだり、昼食や夕食をとったりするのは、やはり中心部ということになる。とはいえ、今日どの地区でも、どこへ行っても食事の問題はないだろう。

本書はその中でも、お勧めできる、サービスの豊富なレストランだけを提供する。本書で紹介するレストランは決して低価格の店ではなく（一人20€以上）、またどの店でもクレジットカードで支払いができるわけではないことは注意頂きたい。

「ロシアウォッカ博物館」 “МУЗЕЙ РУССКОЙ ВОДКИ”

博物館, ビアホール, レストラン
ⓘ2-d6
コノグヴァルデイスキー並木通り5
（Конногвардейский бульвар,5）
Ⓜネフスキー・プロスペクト（Невский проспект）駅下車、イサーク広場近く。
🕓11:00～22:00
✆312-3416
◆博物館のホールにはウォッカの歴史が展示されている（ウォッカ製造・販売規定資料、初期のサマゴン（自家製・密造酒）製造装置、初期のウォッカ瓶等）。博物館奥のロシア風居酒屋で伝統料理を味わうことができる。

「さまよえるオランダ人」 “ЛЕТУЧИЙ ГОЛЛАНДЕЦ”

船上レストラン
住所：取引所橋そば、ムィトニンスカヤ川岸通り5の建物の向かい
（Мытнинская наб., напротив дома 5 （у Биржевого моста）
Ⓜネフスキー・プロスペクト（Невский проспект）駅下車、ヴァシーリー島岬近く。
✆336-3737
◆ペテルブルグで最も良い船上レストランの一つ。「2004年度料理」コンクール入賞。レストランにはグリルがあり、金串で肉、魚、野鳥、野菜を調理している。37€で肉野菜グリル、サラダバー、すしバーが利用できる。宮殿川岸通りが一望できるオープンデッキがある。
🕓10:00～（下の階のグランドカフェ「ゼブラ」“Зебра”）
🕓12:00～（レストラン「テラス」“Терраса”）最後のお客まで

ホテル「ヨーロッパ」内レストラン

住所：ミハイロフスカヤ通り1/7
（Михайловская ул., 1/7）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）
✆329-6000
◆ホテル内にはレストラン及びバーが7店あるが、中でも有名なものを紹介する。

「ヨーロッパ」 “ЕВРОПА”

レストラン
◆ヨーロッパ・ロシア料理。19世紀末のインテリア。古いロシア料理（チョウザメの切り身、イクラ、フォアグラ、ブリヌィ等）を提供している。平均予算50€～。
毎日19:00～23:00 ライブ演奏（ジャズ）。日曜12:00～16:00 ブランチ（バイキング）。
🕓07:00～23:00

「イクラ・バー」 “ИКОРНЫЙ БАР”

レストラン
◆ロシア料理（魚入りピローグと最高品質のベルーガ（大型チョウザメ）、セヴリューガ（小型チョウザメ）、オショートル（中型チョウザメ）、紅鮭のイクラ）＋ガルニール（付け合わせ）で約50€。
🕓17:30～23:00ライブ演奏。
🕓18:00～23:00

「サトコ」 “САДКО”

レストラン・バー
◆多国籍料理。現代的なインテリア, 大型テレビスクリーン, ビリヤード。
月～金 ビジネスランチ(12€)
🕓18:00～23:00

「Chopsticks」 “ЧОПСТИКС”

レストラン
◆中華料理（中国外の中華料理で最高の一つにみなされる）。中国の新年を迎えたり、北京ダックを堪能することができる素晴らしい場所。レストランの内装は明時代の彫刻や壷で装飾が施されている。
金・土20:00～23:00ライブ演奏
🕓12:00～23:00

「ロッシ」 “РОССИ”

レストラン
◆地中海・イタリア料理。インテリアの中に生きたロブスターと魚がいる巨大な水槽がある。
20:00～23:00ライブ演奏（ピアノ）
🕓12:00～23:00

ホテル「ネフスキー・パラス」内レストラン

ネフスキー大通り57
（Невский пр., 57）
Ⓜマヤコフスカヤ駅（Маяковская）
✆275-20-01（内線）780

「ビルシュトゥーベ」 “БИРШТУБЕ”

ビアホール・レストラン
◆多国籍料理（ステーキ「マダガスカル」、ラザニア、豚足グリル、牛肉入りグヤーシュ、子牛のウィンナ・シュニッツェル） 🕓18:00～23:00

「アドミラルテイストヴァ（海軍省）」 “АДМИРАЛТЕЙСТВО”

レストラン
◆ロシア料理。イクラ・バー。（鮭、セヴリューガ、オショートル、ベルーガのイクラ） 海をモチーフにしたインテリア。🕓18:00～23:00

＊本書記載の料金は、参考のためユーロで表示してありますが、支払いはルーブルで行います。レストランの料金はルーブル表示のところもありますが、その店のレートによるY.E.表示の店もあります。＊＊本書記載の情報は変わることがあります。レストランの営業時間、メニュー等は電話確認をお願いします。

ペテルブルグのレストランの無料相談・ご予約は
✆325-6500, 703-5500(10:00～22:00)まで。
次のサイトからも可能です。http://inout.ru http://spb.menu.ru http://www.peterout.ru

「インペリアル」 “ИМПЕРИАЛ”

レストラン
◆ヨーロッパ, 日本, インド, メキシコ料理。🕓18:00～23:00

「ランドスクローナ」 “ЛАНДСКРОНА”

レストラン
◆「2002年度ペテルブルグ・ベストレストラン」コンクール、「デラックス」部門1位受賞。
ユニークな料理（子牛肉入り赤かぶのコンソメスープ、熊肉と牡蠣のペリメニ＋ガルニール付け合せ）レストランはオフタ地区にあるスウェーデン要塞の名前を冠している。1300年に建設された要塞は、1301年にはノヴゴロド人によって占領され、徹底的に破壊された。
🕓18:00～23:00

「アドミラルテイストヴァ（海軍省）」 “АДМИРАЛТЕЙСТВО”

レストラン
プーシキン, エカテリーナ公園
✆465-3549
◆ヨーロッパ・ロシア料理。
レストランはエカテリーナ公園敷地内のパヴィリオン「アドミラルテイストヴァ」“Адмиралтейство”の中にある。海をモチーフにした内装。プログラム（料金）にロシアトロイカ（冬はそり、夏は馬車）遊び, お祭り花火大会, 大池の島のピクニックが含まれている（特別メニュー）。🕓12:00～23:00

「アウステリヤ」 “АУСТЕРИЯ”

レストラン
ペトロパヴロフスカヤ要塞, イオアン半月堡 “Иоанновский равелин”
Ⓜゴーリカフスカヤ駅（Горьковская）
✆230-0369, 238-4262
◆ツァーリのお気に入りの料理を含む、昔のロシア料理。ピョートル時代の内装が施されている。ライブ演奏。夏にはレストラン前に同じメニューのオープン・カフェが設置される。
🕓12:00～23:00

「ヴィエナーレ」 “БИЕННАЛЕ”

レストラン
ペトログラーツカヤ・ストラナー、バリショイ大通り35、映画館「ミラージュ・シネマ」内（Большой пр. Петроградской стороны,35 （в кинотеатре “Мираж-Синема”） Ⓜペトラグラーツカヤ駅（Петроградская）
✆232-7412, 005
イタリア・日本料理。VIPルーム, 水煙管 🕓14:00～02:00

「ビストロ・ギャルソン」 “БИСТРО ГАРСОН ”

レストラン
ネフスキー大通り95
（Невский пр.,95）
Ⓜ蜂起広場駅（пл. Восстания）
✆277-2467
◆フランス料理。古いパリのビストロの雰囲気。訪問客の評価によると「あたたかく、洗練された家具」、「ロマンチックなランチ、ディナーに最適の場所」。バーのスタンド、19世紀末のワイン棚はフランスから運ばれたもの。壁画はフランス生活の光景を描写している（画家フランソワ・パジュ、店内で彼の絵の展示販売も行っている）。レストランの18番料理はオニオンスープ、かに添えアーティチョーク、スペイン風卵焼きーココット、赤オランダピーマン添え、ショリゾー、バジリコまたはロブスター、えびソースのオムレツ。アルコール無しの二人用料金は700ルーブル～。🕓12:00～2:00

「ハリウッド・ナイト（ハリウッドの夜）」 “ГОЛЛИВУДСКИЕ НОЧИ”

レストラン, クラブ・カジノ
ネフスキー大通り46
（Невский пр.,46）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）
ガスチーヌィ・ドヴォール向かい。
サンクトペテルブルグの最も良いナイト・クラブの一つ。✆325-7273
◆レストランはロシア・日本・ヨーロッパ料理とほとんど制限のないアルコール飲料を提供する。
◆スタイリッシュでエレガントなカジノ。（3ホール、5台のカードテーブル、3台のルーレット、ビリヤード室）
クラブ 🕓22:00～6:00, カジノ, レストラン24時間

「ダ・ヴィンチ」 “ДА ВИНЧИ”

レストラン―クラブ
マーラヤ・マルスカヤ通り15
（Малая Морская ул.,15）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）
✆312-6032
◆多種多様な料理。
インテリアはレオナルド・ダ・ヴィンチのアトリエのように作られた（画家としてではなく、技師として）。「ダ・ヴィンチ」はエロティック・ショー、モードなディスコのある現代的なナイトクラブだ。ここではペテルブルグの画家の作品の展示販売も行っている。（絵の値段は100～1500$）
🕓12:00～6:00 ショー 23:00～

「貴族の巣」 “ДВОРЯНСКОЕ ГНЕЗДО”

レストラン
デカブリスト通り21
（Ул. Декабристов,21）
Ⓜセンナヤ広場駅(Сенная пл.)
✆312-3205, 312-0911
◆ロシア・フランス料理。
レストランはユスーポフ宮殿(p.158)庭園の旧ティー・ハウス内にある。最近修復されたパヴィリオンは1751年ヴァレン＝デラモートの設計によって屋敷の初代領主シュヴァーロフ伯爵のために建てられた。
🕓12:00～24:00

「デミドフ」 “ДЕМИДОВЪ”

レストラン
フォンタンカ川岸通り14
（Наб. реки Фонтанки,14）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）
✆272-9181
◆ロシア料理、ロシア民謡音楽。
昔の商人スタイルのインテリア（一種のロシアのBiedermayer）。ここでは伝統的な正教会の祝日（大斉前週…マースレニッツァ、復活大祭…パスハ等）を祝う。料理は非常に評判が良い。
🕓12.00–24.00

「ジャズ・フィルハーモニック・ホール」 “ДЖАЗ-ФИЛАРМОНИК-ХОЛЛ”

ジャズ・クラブ, レストラン
ザーゴロドヌイ大通り27
（Загородный пр., 27）
Ⓜウラジーミルスカヤ駅（Владимирская）または Ⓜドストエフスカヤ駅（Достоевская）
✆764-8565, 999-3125
◆ヨーロッパ・ロシア料理。お子様メニューもある。レストランは2つのホールがあり、ジャズの生演奏が聴ける。大ホールのコンサートは毎日行われる。もう一つのホール（50人収容）はエリングトンホールと呼ばれ（公爵エリングトンとデヴィッド・ゴロシェキンに計を評して名づけられた）、シカゴのクラブ・スタイルをイメージした内装。ジャズ愛好家達は毎週火、金、土曜日に集まる。
🕓18:30～23:00, 休日：月

「ジェームズ・クック」 “ДЖЕЙМС КУК”

喫茶店, パブ, レストラン, バー
シュヴェーツキー横町2
（Шведский пер., 2）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）から徒歩10分。マーラヤ・カニューシェンナヤ通り（Малая Конюшенная ул.）突き当り。
✆312-3200, 717-1151
◆パブは50種類のウィスキーとビール（その半分は現在入手困難）と数種類のステーキを提供している。植民地様式のインテリアと籐製家具の喫茶店は、紅茶、コーヒー、アップルパイ、チーズケーキを提供している。祝祭日には入口でお客にシャンパンを注ぎ、喫茶店ではアイスクリームをご馳走し、予約客全員にワイン1本サービスする。様々な音楽家の出演プログラム（ジャズ、カントリー等）Face control入場有料（約5€）。
🕓喫茶店：月～木9:00～2:00, 金9:00～4:00, 土10:00～4:00, 日10:00～2:00。
バー：月～木12:00～2:00, 金12:00～4:00, 土12:00～4:00, 日12:00～2:00

「ザラトイ・オスタプ」 “ЗОЛОТОЙ ОСТАП”

レストラン
イタリヤンスカヤ通り4
（Итальянская ул., 4）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский пр.） ✆303-8822
◆メニューはロシア料理を含む、8種類のナショナル料理をもとにしている。🕓19:00～23:00ライブ演奏。モダニズム様式のインテリア（オデッサヴァージョン）
🕓11:00～3:00

「…あるいは…」 “…ИЛИ…”

レストラン, バー
ネフスキー大通り52
（Невский пр., 52）
Ⓜガスチーヌィ・ドヴォール駅（Гостиный двор）
✆331-9090
◆ヨーロッパ・ロシア・タイ・地中海料理。若者にとても人気があり、「ニンジン色のビストロ」と呼ばれている。アヴァンギャルド（前衛的）スタイル（何となくハイテクに近い）のインテリア。ピーク時に空席はない。店内（入口）右の壁に、全メニューのカロリー表示がある。上の階にインターネット接続可能なコンピューターがある。メニューは寿司、鶏肉フィレのマリネ、鮭のざくろソースがけ他。
レストラン 🕓12:00～02:00, ビストロ・バー 24時間

「キャメロット」
“КАМЕЛОТ”
レストラン
バリシャヤ・カニューシェンナヤ通り14
（Большая
Конюшенная ул., 14）
（ネフスキー大通り22の建物の角）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
（Невский проспект）
✆325-9906
◆ロシア・ヨーロッパ料理だが、歴史的な「言外の意味」（アーサー王の伝説的な城と同じ店名と関係のある）を持つこの店の看板料理は「ランスロットの鮭」「グイネーヴィアの誘惑」（詰め物入り豚肉）、「騎士パーシヴァルの狩」（鹿肉の燻製）だ。ゴシック様式の内装。（ケルトアーサー王の時代とは関係がないが、ある種の雰囲気を作っている）
Face control ◷10:00～24:00

「ラ・クカラッチャ」
“ЛА КУКАРАЧА”
レストラン，バー
フォンタンカ川岸通り39
（Наб. Фонтанки, 39）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
（Невский пр.）✆710-4006
◆ペテルブルグ初のメキシコ料理レストラン。豊富なアルコール飲料、ノン・アルコールカクテル。メキシコスタイルのインテリア。壁にはソンブレロ、タペストリー、ポンチョがかかっている。
日、金、土、日20:00～ラテンアメリカ音楽のライブ演奏。「フィエスタ」3人用セットメニュー1000ルーブル。
ビジネス・ランチ
（13:00～17:00　5€）、
「ハッピーディナー」◷（13:00～19:00 25%OFF）◷12:00～1:00；
金・土：◷12:00～5:00

「コンチ」**“КОНТИ”**
カジノ，レストラン
コンドラチエフ大通り44
（Кондратьевский пр., 44）
Ⓜ レーニン広場駅（Площадь Ленина）（フィンランド駅）
✆321-6565
◆町で最も古い巨大な賭博施設。この建物の中にかつて有名な映画館「ギガント」があった。お洒落で、食べ物飲み物の品数豊富なレストラン「コンチ」にはバイキング（約6€）もある。カジノには「ポーカー・クラブ」があり、毎週火、木、土曜日にスタッド・ポーカーのトーナメント戦が繰り広げられる。要身分証明書。24時間。

「ルクソール」
“ЛУКСОР”
レストラン
ネフスキー大通り90/92
（Невский пр., 90/92）
Ⓜマヤコフスカヤ駅
（Маяковская）
✆279-4352
◆レバノン・ヨーロッパ料理。
エジプト風インテリア。人気メニューは牛肉と鶏肉フィレとご飯の「レバノン風」、きのこと野菜の詰め物入り茄子「シェイフ・メフシ」。
◷12:00～23:00

「**METRO CLUB**」
ディスコ・バー
リーゴフスキー大通り174
（Лиговский пр., 174）
Ⓜリーゴフスキー・プロスペクト駅
（Лиговский проспект）
からオブヴォードヌィ運河方向へ徒歩約10分。
✆766-0211
◆ペテルブルグの最上のダンスクラブの一つとして認められている。
3階。Fablicスタイルの非常に現代的なデザイン、豊富なメタル構造の中に原寸大の鉄道橋の橋脚がある。二つの新しいバーはメトロのトンネルを思わせる（バーのスタンドの長さは30m以上）。2階のバーの一つにカラオケがある。ビール（60ルーブル～）のおつまみにチップス、スハリキ、えび、ナッツやチョコレートを提供。
◷12:00～23:00

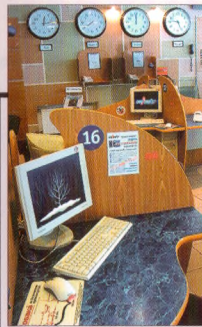
「マーシャとくま」
“МАША И МЕДВЕДЬ”
カフェ・バー
マーラヤ・サドーヴァヤ通り1
（Малая Садовая ул.,1 ）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
（Невский проспект）
✆310-4631
◆ロシア料理。ネフスキー大通りのエリセーエフ兄弟の店から出ている短いマーラヤ・サドーヴァヤ通りの歩行者専用道にある半地下の居酒屋。昔の村の旅行宿の中庭の内装。入口には熊とマーシャの人形（このレストランの名前の、民話の絵）がある。夕方ライブ演奏。アルコール飲料無しの二人用の予算は約1000ルーブル。
◷11:00～23:00

「オネーギン」
“ОНЕГИН”
レストラン・クラブ
サドーヴァヤ通り11
（Садовая ул., 11）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
（Невский проспект）
✆571-8384
◆恐らくペテルブルグで最も高級クラブ設計（デザイン）のインテリア。フランス料理（最高級）・ロシア料理。ヴェジタリアンと断食用メニュー有。4ホール。バーのある緑の客間、バーのあるディスコホール、レストラン、VIPルーム。正装着用。
◷月～木、日17:00～2:00
◷金・土17:00～5:00

「К.Р.パーキン」
“К.П. ПАЛКИНЪ”
レストラン
ネフスキー大通り47
（Невский пр., 47）
Ⓜマヤコフスカヤ駅
（Маяковская）
✆703-5371
◆商人K.P.パルキンの貸し家にある。建物の中心部にはプーニン、クプリーン、ドストエフスキーも食事をとったことのある豪華なレストランがある。革命後レストランの建物は映画館「タイタン」として使われたが、現在ここは有名なカジノ「プレミエール」“Премьер”になっている。主（あるじ）の書斎だったところに現代的なレストランが置かれている。古いロシア料理。
メニューは子羊の肉、スチェルリャジ（小型のチョウザメ）、ソーセージ、ルーレット（詰め物料理）、自家製漬物とジャム。品数豊富なワイン。料金は80€以上で、主なお客はロシア・外国人のビジネスマンだ。レストランでは常時画家と彫刻家の作品の展示販売を行っている。

「**Le Paris**」
“ПАРИЖ”
レストラン、Gourmet（グルメ）
バリシャヤ・マルスカーヤ通り63
（Большая Морская ул., 63）
Ⓜネフスキー・プロスペクト
（Невский проспект）駅下車。
イサーク広場まで徒歩。
✆717-9545, 312-4772,
312-2592
◆レストランのシェフはフランス料理の大家アンリ・シャルヴェー。特製料理は「フォアグラ」と鴨料理。ワイン倉でのティスティング。火が燃えている暖炉のエレガントな内装。毎晩フランス音楽の生演奏。ペテルブルグ中心部のフランスだ。食材のほとんどはフランスから直輸入。
◷12:00～最後のお客まで
（厨房～23:00）

「ピーヴナヤ・ビルジャ（ビール取引所）」
“ПИВНАЯ БИРЖА”
レストラン
グリボエードフ運河川岸通り25/3
（Наб. канала
Грибоедова, 25/3）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
（Невский проспект）
✆717-5659

インターネットカフェ **“QUO VADIS?”**（*“Кво Вадис”* ラテン語. –「どこへ行くの？」）
ネフスキー大通り24（Невский проспект,24）Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）下車、グリボエードフ運河側出口から海軍省方向徒歩約3分（24時間）✆571-8011

◆ドイツ料理のビールレストラン。2ホール。常時サッカーや他スポーツの試合を放送。お手頃価格のビジネス・ランチ
（11:00～16:00　2.5€）
◷11:00～1:00

「修道僧の穴蔵（酒蔵）」
“ПОГРЕБА МОНАХА”
レストラン，バー
ミリオンナヤ通り22
（Милионная ул., 22）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
（Невский проспект）下車、マルス広場方向に歩く。
✆314-1353
◆ヨーロッパ・ロシア料理。
修道院の穴蔵のような内装。ここに陶器の修道僧像と力づくで開けられたお墓の複製がある。良いワイン、強いお酒、自家製食事の愛好家達が集う。
Face control ◷12:00～3:00

「ロシアン・クラブ」
“РУССКИЙ КЛУБ”
レストラン
カニューシェンナヤ広場2
（Конюшенная пл., 2）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
（Невский проспект）
✆740-3080, 740-3081
◆ペテルブルグで最もロシアらしいロシアレストラン。農民の食事と皇帝料理。通の人の評価によると、ペテルブルグで最も良いロシア料理レストラン。24時間

「スラーヴァ」
“СЛАВА”
カジノ，レストラン

ブハレスツカヤ通り47
（Бухарестская ул., 47）
Ⓜモスコフスカヤ駅
（Московская）
✆260-7112, 260-3003
◆中華・ヨーロッパ・ロシア・東洋料理。レストランの内装はジャングルの廃墟を模している（石の洞窟、噴水、イースター島の彫像（モアイ）折衷主義だが、美しい）。金、土曜、祝祭日は音楽（エロティック含）ショー。
カジノでは「アメリカン・ルーレット」「ブラック・ジャック」ポーカー、バー、最新のスロットマシン。入店の際、金属探知機ゲートを通過する必要がある。

「**STARS ONLY**」
レストラン，バー，クラブ，展示広場
ネフスキー大通り86
（Невский пр., 86）
Ⓜマヤコフスカヤ駅
（Маяковская）
✆275-1223
◆クラブは2004年12月、ネフスキー大通りとリチェイヌィ大通りが交差しているところにオープン。多目的施設として考案された（レストラン、ダンスクラブのDJバー、展覧会用パヴィリオン、記者会見、ファッションショー、プレゼンテーション用施設）。クラブには全部で3つ比較的小さいホールがある。昼間ははレストラン、夜間はDJバー。金・土は招待されたスター達のイベントが行われている。
Face control ◷24時間。

「タリオン」
“ТАЛИОН”
（Taleon Club）
レストラン，カジノ，フィットネスセンター
モイカ川岸通り59
（Наб. реки Мойки, 59）
Ⓜネフスキー・プロスペクト
（Невский проспект）駅下車、旧海軍省方向へ歩く。
✆324-9911，324-9944,
324-9957
◆店名は19世紀、ここにあったチチェリン邸から借用。本物の古典主義インテリア（ルイ16世とアンピール様式）が保存されている。レストランではヨーロッパ・ロシア料理。夕方からライブ演奏（アンサンブル「Taleon band」）。カジノには数室（大ホール，VIPルーム，ポーカークラブ用2室）フィットネスクラブには日光浴室、ミニプール付サウナ、トレーニング・ルームがある。
レストラン：19:00～最後の客まで
（日 12:00～16:00バイキング）
カジノ：24時間。
フィットネスセンター：予約制24時間。

「ティンコフ」
“ТИНЬКОФФ”
バー・レストラン
カザンスカヤ通り7
（Казанская ул., 7）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
（Невский проспект）
✆718-5566，314-8485,
332-1212
◆ビール工場（付属）レストランは長いベンチと灰色の丸天井のある巨大な利き酒ホールとして装飾。ヨーロッパ料理と寿司バーがある。お子様用メニュー有。ビール愛好家達は「ティンコフ」はペテルブルグのビールレストランで一番良いと思っている。
◷レストラン：12:00～2:00
寿司バー：14:00～1:00

「フラッグマン」
“ФЛАГМАН”
船上レストラン
ピョートル川岸通り2の建物の向かい
（Петровская наб.）
Ⓜゴーリカフスカヤ駅
（Горьковская）
✆327-2508, 327-2507
◆ピョートル1世の小屋近く、トロイツキー（三位一体）橋の北の橋脚のそば。フリゲート艦「フラッグマン」船上レストラン。ヨーロッパ・ロシア料理。2ホール。1室は木で装飾され、ピアノの生演奏が行われている。もう1室は海をイメージした内装で、夏の庭園が見えるVIP席がある。
◷12:00～6:00

「シャトー」
“ШАТО”
カフェ・クラブ
住所：マーラヤ・マルスカーヤ8
（Малая Морская ул., 8）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
（Невский проспект）
✆312-6097，312-2046,
312-3257
◆フランス風創作料理。
2ホール。フランスワイン販売所とグラン・カフェの2室から成る。メニューは海の幸（海産物）、肉、魚の珍味、チーズが豊富に取り揃えてある。市内で唯一ワイン他の飲料がサロンと違う値段で売られているレストラン。通の評価は非常に高い。
◷12:00～2:00

「シュワーベンの家」
“ШВАБСКИЙ ДОМИК”
パブ，レストラン
ノヴォチェルカースク大通28/19
（Новочеркасский пр., 28/19）
Ⓜノヴォチェルカースカヤ駅
（Новочеркасская）
✆528-2211
◆ドイツの田舎（村）スタイルの レストラン。バヴェリア（現在のミュンヘン）、シュワーベンのドイツ料理。特製料理は豚足、シュワーベンのソーセージ。ベジタリアン用メニュー有。
お子様用特別メニュー「ハリー・ポッター焼」シュトットガルト出身のシェフ、窓にかかるレースのカーテン、明るい色の木製家具、豊富なデザートメニュー。このレストランは決してグルメのための店ではなく、おいしい食事をおなか一杯召し上がりたい人のための店だ。
◷レストラン – 11:00～01:00,
◷ビールバー– 12:00～23:00,
◷ビストロ – 09:00～20:00

「焼き鳥屋」
“ЯКИТОРИЯ”
レストラン
オストロフ広場5/7
（Пл. Островского, 5/7）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
（Невский проспект）からアレクサンドリンスキー（アレクサンドル）劇場方向徒歩約7分。
✆315-8343
◆日本食レストラン。メニュー寿司（「海の幸」“дары моря”1€～）、野菜巻き（～8€）、メインディッシュ（～50€）、霜降り肉（50€）、日本製自家製ビール・瓶ビール）
ペテルブルグ初の日本的サービスと「正しい」料理の店。古典的日本スタイルの内装。寿司はサーモン、うなぎ、アボガド、イクラ（軍艦巻）、まぐろ、たこ、カワスズキ、えび、かに等、特製スープ、「のり衣揚げチキン」、「カニかつ」、「野菜インゲン」「シーフード炒飯」、焼き鳥、鉄板焼き（貝、えび、子羊）。
洗練されたデザート。
◷10:00～06:00

ネヴァ川

町の主要な水上交通路。水源があるネヴァ湖から名づけられた。長さ74km（市内32km）、川幅300m～1.2km、最深部24m。川の面積は町の面積の9分の1だ。ネヴァ川の他にペテルブルグ史上、重要なのは、フォンタンカ、グリボエードフ運河とモイカ川だ。同様に有名なのは古いクリューコフ運河、冬の小運河、白鳥運河だ。

橋

ネヴァ川に船の航行を妨げない常時橋をかける試みは、18世紀に着手された。最も有名なプロジェクトだったのは、イヴァン・クリービンのアーチ橋（1870年代）で、この橋のモデルはポチョムキン邸（タヴリーダ宮殿）にある。しかし、19世紀半ばまで町は舟橋で何とかやっていた。初めてネヴァ川にかかった常時橋はニコライ橋（1850年代、現在のシュミット中尉橋）、次にアレクサンドル橋（1878年、現在のリチェイヌイ橋）、続いてトロイツキー橋（1903年）、ピョートル大帝橋（1911年）、フィンランド鉄橋（1913年）、宮殿橋（1916年）だ。市内には308の橋があり、そのうち22本は跳ね橋だ。最も長い橋はネヴァ川にかかるアレクサンドル・ネフスキー橋（909m）で、最も短い橋はモイカ川にかかる青い橋（99.5m）だ。

橋の開閉時刻橋の名称

橋の名称	第一開閉（時刻）	第二開閉（時刻）
宮殿橋	1:35～2:55	3:15～4:50
シュミット中尉橋	1:40～4:55	
リチェイヌィ橋	1:50～4:40	
トロイツキー（三位一体）橋	1:50～4:40	
大オフチンスキー橋	2:00～5:00	
ヴォロダルスキー橋	2:00～3:45	4:15～5:45
取引所橋	2:10～4:50	
サムプソニエフスキー橋	2:10～2:45	3:20～4:25
トゥーチコフ橋	2:10～3:05	3:20～4:25
アレクサンドル・ネフスキー橋	2:20～5:05	
フィンランド橋	2:30～5:10	
グレナデルスキー橋	2:45～3:45	4:20～4:50
カンテミール橋	2:45～3:45	4:20～4:50

エクスカーション

現在、18－19世紀のペテルブルグの河川と運河の役割を彷彿させるのは数多くの船着場で、そこには航行シーズン中、多くの遊覧船が陣取っている。宮殿川岸通り（エルミタージュ船着場）にはサンクトペテルブルグ～ペテルゴフ間を定期的に就航する高速船がある。

伝統的な水上ツアープログラム

「橋の開閉」
所要時間2時間。
船着場（出発地）：フォンタンカ36（アーニチコフ橋）
コース：フォンタンカ川→グリボエードフ運河→モイカ川→冬の小運河→大ネヴァ川→宮殿橋→トロイツキー（三位一体）橋→巡洋艦「オーロラ」→フォンタンカ川

「ペテルブルグの見所」
所要時間1時間。
コース：アーニチコフ橋,モイカ川→冬の小運河→大ネヴァ川→宮殿橋→トロイツキー（三位一体）橋→巡洋艦「オーロラ」→フォンタンカ川（アーニチコフ橋まで）→モイカ川

「大運河巡り」
所要時間1時間20分。
船着場（出発地）：フォンタンカ36（アーニチコフ橋）
コース：フォンタンカ川→グリボエードフ運河→モイカ川→冬の小運河→大ネヴァ川→フォンタンカ川

「運河巡り」
所要時間1時間。
船着場（出発地）：フォンタンカ36（アーニチコフ橋）
コース：フォンタンカ川→グリボエードフ運河→モイカ川→フォンタンカ川

「個人クルーズ」
最近になり船（乗組員付）をレンタルし、希望のコースでの就航が可能になった。料金は1時間約100ユーロ。事前にオーガナイザーとコース要相談（就航日の（土日含まない）2日前までに）。小型船・ディーゼル船（22人用）。レンタル最低1時間から可能。

正月

数々の祭りの中で最も楽しく、最も愛され、皆が待ちわびる。新年の1日目（正月元旦）は昔から世界の人々によって祝われる（実際は異なる時間に新年を迎えるが）。昔の農耕文化ではこれは普通春分か秋分の日で、北では冬至の日だった。キリスト暦（西暦）導入と共にヨーロッパでは1年の始まりは1月1日になった。

ヨーロッパ（スラヴ含む）の村では新年を迎えるための複雑な儀式のほとんどは銅の世紀までに成立したとされる。ルーシのキリスト教教会はこの祝日を歓迎しなかったが、民衆の儀式はしだいにクリスマス前夜に移った。ロシアでは1月1日から新年が始まるというのはピョートル1世によって定められた（1699年）。今日ロシアの正月はクリスマスツリーやマローズ（厳寒）おじいさんやスネグーラチカ（雪娘）がいて、花火が上がる。

広く祝われる教会の祝日

正教クリスマス（1月6日の夜～1月7日）

キリストの生誕日。正教会は新しい暦（グリゴリウス暦）を認めなかったため、従来通り、宗規のユリウス暦を堅持している。西側諸国のキリスト教（カトリック、プロテスタント）は新年までにクリスマスを祝う（24日の夜から25日にかけて）が、正教では正月後。ロシアではクリスマスを2回とも祝う奇妙な習慣ができた。

洗礼祭（または神現祭）（1月19日）

キリストがヨルダン川で洗礼を受け、神の子として公に現れたことを記念する日。この祝日のもう一つの名である「神現祭」は洗礼の時、聖なる三位一体（父なる神、神の子イエス、精霊）が現れたことに関係がある。この日に行われる儀式は、聖水式と「ヨルダン川の水の大聖水式」だ。この儀式は通常天然貯水池で行われるが、ロシアではこの日が真冬にあたるため、氷がはった川や湖に同じく「ヨルダン」という特別な穴を開ける。冬宮の有名なヨルダン階段はここから名づけられた名前だ。19世紀皇帝一家がその階段を下りるのは洗礼式の時だけで、ヨルダン玄関口を通ってネヴァ川へ聖水式の儀式に行った。神現式の日に清められた水は、聖水だとみなされた（ギリシア語でアキアスマ～聖水式）。ヨーロッパの大部分の国民の洗礼祭の日は冬至の多神教の祭の終わりと一致する（サトゥルヌス祭、クリスマス週間）。そのため多くのキリスト教以前の習慣、民衆の遊び、占い等は今でも洗礼式の儀式の中にある。

大斉前週（マースレニッツァ）

バター祭り（チーズ）週間はキリスト教受容前の多神教に関係があり、昔は冬を送り春を迎える意味があった。伝統的な民衆の儀式はブリヌィ（太陽の象徴）を焼くことと散歩（ロマンス系ヨーロッパでは、謝肉祭）だ。正教教会はマースレニッツァを祝日の数に入れた（マースレニッツァは大斉期間（断食）前に行われる）。

パスハ（キリストの復活大祭）

伝承によると受難週間の苦しみと磔の後、キリストの体は十字架から降ろされ、洞窟に葬られた。（「この日は金曜日だった」ルカ 23:54）1日後の日曜日、「キリストと共にガリアから来た」三人の女性は彼の体に香油を塗るために（ここから携香女という言葉が派生した）洞窟へ来たが、石が動かされているのを発見した。墓は空であった。彼らの前に天使が現れ、（ルカ伝によると素晴らしい服を着た「二人の男性」、イオアン（ヨハネ）伝によると「二人の天使」、マルカ伝によると「白い服を着た若者」）キリストの復活を告げた。このことは今日でもキリスト教世界で最も大きい祭りだとみなされている。ロシアではソ連時代でもパスハの時は国中が（共産党や異教徒、洗礼を受けていない人も）クリーチ（復活大祭に食べる円形型のケーキ）を焼き、イースターエッグに色をつけた。

「18世紀の洗礼祭パレード」
19世紀後半

戦勝記念日（5月9日）

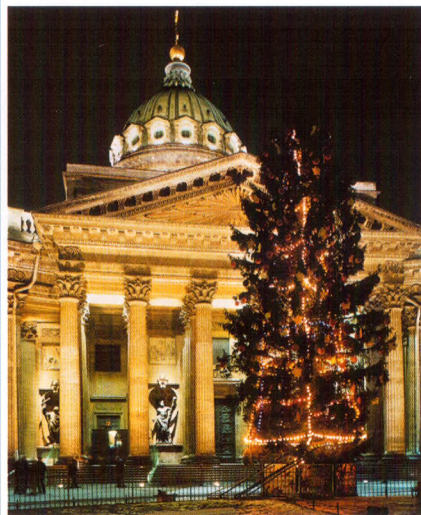
1945年から公の祝日になり、国の式典の中で最も大衆的だ。ペテルブルグ－長きにわたる封鎖に耐え、ファシズムに対する勝利に大きく貢献した旧レニングラード市－にとって、これは単なるお祭りではなく、犠牲となった人々を追悼する日でもある。

ペテルブルグ市創立記念日

ピョートル1世がペトロパヴロフスカヤ要塞建設に着工した5月16日を祝う。この日ネフスキー大通りでオーケストラのパレード、コンサートが行われる。観光客、ペテルブルグ内外の人、皆が集まってくる明るくてにぎやかな祝日だ。

白夜

太陽が地平線に9°以上沈まない5月25日－26日に始まる。最も日が長い日（夏至）は6月21日－22日（18時間53分）で、白夜が終わるのは7月16日－17日。この1ヶ月間ペテルブルグでは短い夏を祝って、同名のフェスティバルが繰り広げられる。「白夜祭」はお祭りというよりむしろ町の嵐のような文化生活の時期だ。このとき、何百万もの旅行者がここに集まる。コンサート会場、舞台、市内の広場で、素晴らしいコンサートや世界的スターが参加する公演が行われる。

p.314 リムスキー＝コルサコフのオペラ「サトコ」の1シーン ➡

ペテルブルグの劇場はピョートル時代から存在していたが、ペテルブルグがロシアの劇場の都になったのは、恐らく19世紀になってからのことだ。ペテルブルグの数多くの劇場の中で、今日世界的名声を博しているのは、マリインスキー劇場（オペラ・バレエ）だ。また、若きアーティストを育成しているワガノワ記念バレエ学校とペテルブルグ音楽院がある。演劇劇場の中で、有名なものはゲオルギー・トフストノゴフ記念ボリショイ・アカデミー劇場（BDT）とマールィ劇場（ヨーロッパ劇場）だ。

夏シーズンは、ペテルブルグの多くの劇場や演奏会場に世界中のアーティストが集まり、公演が催される。上演演目については、市内の劇場チケット売場（театральная касса）か市内興行物チケット予約サービスセンターで知ることができる。✆380−8050

1990年代になって市内に最新サウンド・映像システムを搭載した映画館が現れた（「ミラージュ・シネマ」他）。今日映画館はカフェやレストラン、ゲームセンターを付属した娯楽施設になっている。

劇場

国立アカデミー マリインスキー劇場
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ АКАДЕМИЧЕСКИЙ МАРИИНСКИЙ ТЕАТР"
ⓘ *2-d9, p.156*
劇場広場1 (Театральная пл., 1)
✆326-4141

トフストノゴフ記念ボリショイ・アカデミー・ドラマ劇場
"БОЛЬШОЙ АКАДЕМИЧЕСКИЙ ДРАМАТИЧЕСКИЙ ТЕАТР ИМ. Г.А. ТОВСТОНОГОВА"
ⓘ *2-j9*
フォンタンカ川岸通り65
(Наб. реки Фонтанки, 65)
✆310-0401

アカデミー・マールィ・ドラマ劇場（ヨーロッパ劇場）
"АКАДЕМИЧЕСКИЙ МАЛЫЙ ДРАМАТИЧЕСКИЙ ТЕАТР – ТЕАТР ЕВРОПЫ"
ⓘ *3-a7*
ルビンシュテイン通り18
(Ул. Рубинштейна, 18)
✆713-2028

「バルチースキー・ドム」フェスティバル劇場
""БАЛТИЙСКИЙ ДОМ" ТЕАТР-ФЕСТИВАЛЬ"
ⓘ *1-e6*
アレクサンドル公園4
(Александровский парк, 4)
✆232-6244

国立劇場「ベネフィス」
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ ТЕАТР "БЕНЕФИС""
ⓘ *2-h4*
モイカ川岸通り24 (Наб. реки Мойки, 24) ✆717-7921

ボリショイ人形劇場
"БОЛЬШОЙ ТЕАТР КУКОЛ"
ⓘ *3-b3*
ネクラーソフ通り10
(Ул. Некрасова, 10) ✆272-8215

ブッフ劇場 "ТЕАТР-БУФФ"
ナドーロナヤ通り1
(Народная ул., 1) ✆446-6767

国立氷上バレエ
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ БАЛЕТ НА ЛЬДУ"
ⓘ *3-h3*
宮殿川岸通り20/2
(Дворцовая наб., 20/2)
✆315-2075

国立プーシキン劇場センター
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ ПУШКИНСКИЙ ТЕАТРАЛЬНЫЙ ЦЕНТР"
ⓘ *3-k8*
フォンタンカ川岸通り41
(Наб. реки Фонтанки, 41)
✆710-4707

国立児童音楽劇場「ザゼルカリエ」
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ ДЕТСКИЙ МУЗЫКАЛЬНЫЙ ТЕАТР "ЗАЗЕРКАЛЬЕ""
ⓘ *3-a7*
ルビンシュテイン通り13
(Ул. Рубинштейна, 13)
✆712-5000

国立児童音楽劇場「カラムボル」
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ ДЕТСКИЙ МУЗЫКАЛЬНЫЙ ТЕАТР "КАРАМБОЛЬ""
リムスキー＝コルサコフ大通り11, オフィス13
(Пр. Римского-Корсакова, 11, оф. 13) ✆713-4071

クローン・ミム・シアター「リツェジェイ」
"КЛОУН-МИМ-ТЕАТР "ЛИЦЕДЕИ""
ⓘ *3-d1*
チェルヌィシェフスキー大通り14/59
(Пр. Чернышевского, 14/59)
✆272-8879

ミュージック・ホール
"МЮЗИК-ХОЛЛ"
ⓘ *1-e6*
アレクサンドル公園4
(Александровский парк, 4)
✆233-0924

「ナ・マハヴォイ」教育劇場
""НА МОХОВОЙ" УЧЕБНЫЙ ТЕАТР"
ⓘ *3-a3*
マハヴァーヤ通り35
(Моховая ул., 35) ✆273-1592

「アソブニャク」 "ОСОБНЯК"
石島大通り55
(Каменноостровский пр., 55)
✆234-2531

「島」 "ОСТРОВ"
ⓘ *1-f4*
石島大通り26/28
(Каменноостровский пр., 26/28)
✆ 346-3810

国立ドラマ劇場「コメディアン達の隠れ家」
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ ДРАМАТИЧЕСКИЙ ТЕАТР "ПРИЮТ КОМЕДИАНТА""
ⓘ *2-h8*
サドーヴァヤ通り27
(Садовая ул., 27) 310-1074

A.S.プーシキン記念ロシア国立アカデミー劇場（アレクサンドリンスキー劇場）
"РОССИЙСКИЙ ГОСУДАРСТВЕННЫЙ АКАДЕМИЧЕСКИЙ ТЕАТР ДРАМЫ ИМ. А.С. ПУШКИНА (АЛЕКСАНДРИНСКИЙ)"
ⓘ *2-k7, p.132*
オストロフスキー広場2
(Пл. Островского, 2)
✆710-4103

アンドレイ・ミロノフ記念「ロシアのアントレプリーザ」
""РУССКАЯ АНТРЕПРИЗА" ИМ. АНДРЕЯ МИРОНОВА"
ⓘ *1-f3*
ペトログラーツカヤ・ストラナーバリショイ大通り75/35 (Большой пр. Петроградской стороны, 75/35)
✆346-1675

ヴァレーリー・ミハイロフスキーサンクト・ペテルブルグ男性バレエ団
"САНКТ-ПЕТЕРБУРГСКИЙ МУЖСКОЙ БАЛЕТ ВАЛЕРИЯ МИХАЙЛОВСКОГО"
ガローハヴァヤ通り71
(Гороховая ул., 71) ✆320-0627

国立室内音楽劇場「サンクト・ペテルブルグ・オペラ」
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ КАМЕРНЫЙ МУЗЫКАЛЬНЫЙ ТЕАТР "САНКТЪ-ПЕТЕРБУРГЪ ОПЕРА""
ⓘ *2-b6*
ガレールナヤ通り33
(Галерная ул., 33) ✆312-3982

フォンタンカ川岸通り
サーカス

V.F.コミサルジェフスカヤ記念アカデミー・ドラマ劇場
"АКАДЕМИЧЕСКИЙ ДРАМАТИЧЕСКИЙ ТЕАТР ИМ. В.Ф. КОМИССАРЖЕВСКОЙ"
ⓘ *2-k6*
イタリア通り19
(Итальянская ул., 19)
✆315-5355

国立アカデミー・バレエ劇場
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ АКАДЕМИЧЕСКИЙ ТЕАТР БАЛЕТА"
ⓘ *3-c4*
マヤコフスキー通り15
(Ул. Маяковского, 15)
✆273-1997

ボリス・エイフマン国立アカデミー・バレエ劇場
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ АКАДЕМИЧЕСКИЙ ТЕАТР БАЛЕТА ПОД РУКОВОДСТВОМ БОРИСА ЭЙФМАНА"
リーザ・チャイキナ通り2
(Ул. Лизы Чайкиной, 2)
✆232-0235

レンソヴィエト記念国立アカデミー劇場
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ АКАДЕМИЧЕСКИЙ ТЕАТР ИМ. ЛЕНСОВЕТА"
ⓘ *3-b7*
ウラジーミル大通り12
(Ул. Владимирский пр., 12)
✆713-2207

N.P.アキーモフ記念国立アカデミー・コメディ劇場
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ АКАДЕМИЧЕСКИЙ ТЕАТР КОМЕДИИ ИМ. Н.П. АКИМОВА"
ⓘ *2-j6*
ネフスキー大通り56
(Невский пр., 56) ✆314-2610

M. P.ムソルグスキー記念国立アカデミー・バレエ・オペラ劇場（ミハイル劇場）
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ АКАДЕМИЧЕСКИЙ ТЕАТР ОПЕРЫ И БАЛЕТА ИМ. М.П. МУСОРГСКОГО (МИХАЙЛОВСКИЙ ТЕАТР) "
ⓘ *2-i5, p.115*
芸術広場1 (Пл. Искусств, 1)
✆595-4284, 595-4307

国立民話人形劇場
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ КУКОЛЬНЫЙ ТЕАТР СКАЗКИ"
モスクワ大通り121
(Московский пр., 121)
✆388-0031

フォンタンカ国立青年劇場
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МОЛОДЕЖНЫЙ ТЕАТР НА ФОНТАНКЕ"
フォンタンカ川岸通り114
(Наб. реки Фонтанки, 114)
✆316-6870

E.S.デメーナ記念国立マリオネット劇場
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ ТЕАТР МАРИОНЕТОК ИМ. Е.С. ДЕММЕНИ "
ⓘ *2-k6*
ネフスキー大通り52
(Невский пр., 52) ✆717-1900

国立音楽コメディ劇場
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ ТЕАТР МУЗЫКАЛЬНОЙ КОМЕДИИ"
ⓘ *2-j6*
イタリア通り13
(Итальянская ул., 13) ✆313-4868

A.A.ブリャンツェフ記念国立青年観客劇場
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ ТЕАТР ЮНЫХ ЗРИТЕЛЕЙ ИМ. А.А. БРЯНЦЕВА"
ピオネール広場1
(Пионерская пл., 1)
✆712-4102

アルカージー・ライキン記念エストラーダ劇場
"ТЕАТР ЭСТРАДЫ ИМ. АРКАДИЯ РАЙКИНА"
ⓘ *2-h5*
バリシャヤ・カニューシェンナヤ（大厩舎）通り27
(Большая Конюшенная ул., 27)
✆314-6961

ユスーポフ宮殿内啓蒙活動家文化会館劇場ホール
"ТЕАТРАЛЬНЫЙ ЗАЛ ДВОРЦА КУЛЬТУРЫ РАБОТНИКОВ ПРОСВЕЩЕНИЯ В ЮСУПОВСКОМ ДВОРЦЕ"
ⓘ *2-d8, p.158*
モイカ川岸通り94 (Наб. реки Мойки, 94) ✆314-9883

エルミタージュ劇場
"ЭРМИТАЖНЫЙ ТЕАТР"
ⓘ *2-h3, p.55*
宮殿川岸通り34 (Дворцовая наб., 34) ✆717-9025

フォークロア劇場「エトノ」
"ФОЛЬКЛОРНЫЙ ТЕАТР "ЭТНО""
マハヴァーヤ通り3
(Моховая ул., 3) ✆315-8240

コンサートホール

D.ショスタコーヴィチ記念アカデミー・フィルハーモニー
"АКАДЕМИЧЕСКАЯ ФИЛАРМОНИЯ ИМ. ДМИТРИЯ ШОСТАКОВИЧА "
ⓘ *2-i5*
大ホール:ミハイル通り2
(Михайловская ул., 2,)
小ホール:ネフスキー大通り30
(Невский пр., 30) ✆710-4257

国立アカデミー合唱団
"ГОСУДАРСТВЕННАЯ АКАДЕМИЧЕСКАЯ КАПЕЛЛА"
ⓘ *2-h4*
モイカ川岸通り20
(Наб. реки Мойки, 20)
✆312-7600, 314-0678

青年創造会館コンサートホール「カーニバル」
"КОНЦЕРТНЫЙ ЗАЛ ГОРОДСКОГО ДВОРЦА ТВОРЧЕСТВА ЮНЫХ "КАРНАВАЛ""
ⓘ *2-m7*
ネフスキー大通り39
(Невский пр., 39) ✆310-4822

コンサートホール「オクチャブリスキー」
"КОНЦЕРТНЫЙ ЗАЛ "ОКТЯБРЬСКИЙ""
ⓘ *3-d5*
リーゴフスキー大通り6
(Лиговский пр., 6) ✆275-1300

映画館

「アヴローラ」 "АВРОРА"
ネフスキー大通り60
(Невский пр., 60) ✆315-5254

「バリカーダ」 "БАРРИКАДА"
ネフスキー大通り15
Невский пр., 15 ✆312-5386

「ドム・キノー」 "ДОМ КИНО"
カラヴァンナヤ通り12
(Караванная ул., 12)
✆314-5614

「カリゼイ」 "КОЛИЗЕЙ"
ネフスキー大通り100
(Невский пр., 100) ✆272-8775

「クリスタル・パラス」
"КРИСТАЛЛ ПАЛАС"
ネフスキー大通り72
(Невский пр., 72) ✆272-2382

「ミラージュ・シネマ」
"МИРАЖ СИНЕМА"
ペトログラーツカヤ・ストラナーバリショイ大通り35
(Большой пр. Петроградской стороны, 35) ✆235-4911

「パリジアーナ」 "ПАРИЗИАНА"
ネフスキー大通り80
(Невский пр., 80) ✆ 273-4813

"JAM HALL"
石島通り42
(Каменноостровский пр., 42)
✆346-4082

"UNION"
ネフスキー大通り88
(Невский пр., 88) ✆272-2729

サーカス

ロシア・サンクト・ペテルブルグ国民サーカス
"САНКТ-ПЕТЕРБУРГСКИЙ ПЕРВЫЙ НАЦИОНАЛЬНЫЙ ЦИРК РОССИИ"
ⓘ *2-m5*
フォンタンカ川岸通り3
(Наб. реки Фонтанки, 3)
Ⓜ ネフスキー・プロスペクト駅
(Невский проспект)
◷チケット窓口11:00〜19:00
✆314-8478, 313-4411

「フィラテニ」 "ФИЛАТЕНИ"
ユーリー・ガガーリン大通り8
(Пр. Юрия Гагарина, 8)
Ⓜ 勝利の公園 (Парк Победы)
✆595-9460

「アフタヴァ・サーカス」
"ЦИРК В АВТОВО"
アフタフスカヤ通り1a
(Автовская ул., 1a)
Ⓜアフタヴァ駅 (Автово)
◷チケット窓口10:00〜19:00
✆784-9742

スポーツ施設

ウィンター・スタジアム
"ЗИМНИЙ СТАДИОН"
2000人収容屋内スタジアム
ⓘ *2-k6*
マネージュナヤ広場
(Манежная пл., 2)
Ⓜ ネフスキー・プロスペクト駅
(Невский пр.) ✆313-4671

「氷の宮殿」 "ЛЕДОВЫЙ ДВОРЕЦ"
50年大通り1 (Пр. Пятилеток, 1)
プロスペクト・ボリシェヴィコフ駅
(Пр. Большевиков)
✆718-6620,718-6622

「ロコモチーフ（機関車）」
"ЛОКОМОТИВ"
屋外スタジアムピョートル大通り16
(Петровский пр., 16)
Ⓜ スポルチーヴナヤ駅
(Спортивная) ✆ 235-5164

ネフスキー・スタジアム
"НЕВСКИЙ СТАДИОН"
サッカー場、テニスコート
オブーホフスカヤ・オボローナ大通り49
(Пр. Обуховской Обороны, 49)
Ⓜ エリザーロフスカヤ駅
(Елизаровская) ✆ 567-6771

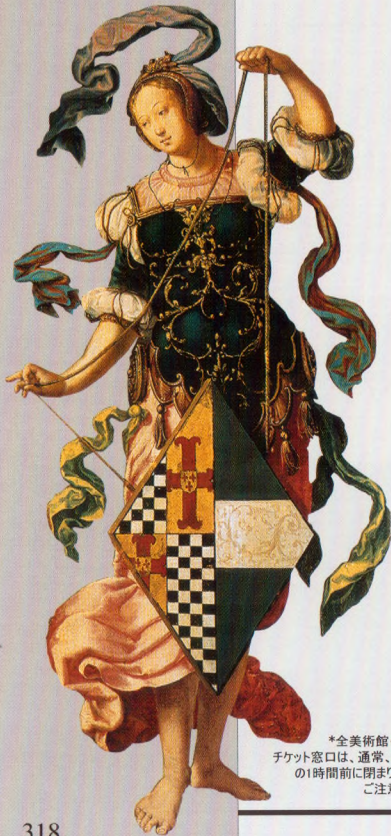
ペテルブルグ スポーツ・コンサートコンプレックス
"СПОРТИВНО-КОНЦЕРТНЫЙ КОМПЛЕКС"
ユーリー・ガガーリン大通り8
(Пр. Юрия Гагарина, 8)
Ⓜ 勝利の公園駅（Парк Победы）
◷チケット窓口10:00〜18:00
✆388-1211, 378-1710

ペトロフスキー（ピョートル）スタジアム
"ПЕТРОВСКИЙ СТАДИОН"
ⓘ*1-a7*
ピョートル島2 (Петровский остров, 2)
Ⓜ スポルチーヴナヤ駅
(Спортивная) ✆328-8935

「ユビレイヌィ」 "ЮБИЛЕЙНЫЙ"
ⓘ *1-b8*
ドブロリューボフ大通り18
(Пр. Добролюбова, 18)
Ⓜ スポルチーヴナヤ駅 (Спортивная)
◷チケット窓口12:00〜19:00
✆323-9322, 323-9315

造形芸術・装飾美術工芸・建築

ルーカス・ファン・レイデン（ライデン）三部作「エリコの盲人の回復」の一部 1531年（国立エルミタージュ所蔵）

エルミタージュのオランダ絵画部門に展示されている三部作はルイ・アントワーヌ・クローズ男爵ド・ティエールのコレクションで、ドミートリー・ゴリツィンとデニー・ディドロの進言によって1770年エカチェリーナ2世が購入した。ヨーロッパ中に有名で、17世紀末に設立されたクローズの絵画ギャラリーは世界的な傑作の数において、この前後にエルミタージュに入ったコレクションを凌駕する。エルミタージュにラファエロの「聖家族」、ヨルダーンスの「ユディット」、ルーベンスの「酒神バッカス」、レンブラントの「ダナエ」と「聖家族」、同様にティントレット、プッサン、スネイデルスの絵画があるのは、彼のコレクションのおかげだ。

*全美術館・博物館のチケット窓口は、通常、閉館時刻の1時間前に閉まりますので、ご注意ください。

国立エルミタージュ
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ ЭРМИТАЖ"
ⓘ *2-g4, p.54*
宮殿川岸広場34
(Дворцовая наб., 34)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)または
Ⓜガスチーヌィ・ドヴォール駅(Гостиный Двор)下車、グリボエードフ運河方向宮殿広場まで ◷10:30～17:00*,
休館日：月 ✆311-3465

メンシコフ宮殿（国立エルミタージュ分館）
"МЕНШИКОВСКИЙ ДВОРЕЦ"
ⓘ *2-c4, p.44*
大学川岸通り15
(Университетская наб., 15)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)または
Ⓜガスチーヌィ・ドヴォール駅(Гостиный Двор)下車、グリボエードフ運河方向ペテルブルグ国立大学まで移動。
◷13:00～19:00, 休館日: 月
✆323-1112

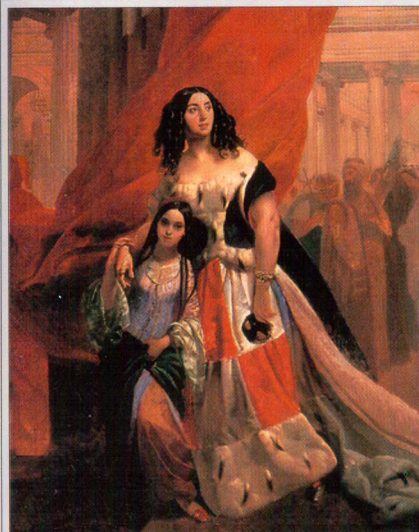
陶磁器博物館（国立エルミタージュ分館）
"МУЗЕЙ ФАРФОРА"
オブーホフスカヤ・オボローナ大通り151
(Оуховской обороны, 151)
Ⓜロモノーソフスカヤ駅
(Ломоносовская)
◷10:00～15:30
(昼休み 13:00～14:00),
休館日：土日 ✆560-8300
◆18世紀中頃から現在に至るロシア陶磁器製史を展示。

国立ロシア美術館
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ РУССКИЙ МУЗЕЙ"
ⓘ *2–j5, p. 116*
インジェニェールナヤ通り4/2
(Инженерная ул., 4/2)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
(Невский проспект)
◷10:00～18:00, 休館日：火
✆314-4153, 318-9264, 314-3448(ガイド予約)

芸術アカデミー美術館
"МУЗЕЙ АКАДЕМИИ ХУДОЖЕСТВ"
ⓘ *2-b5, p.43*
大学川岸通り17
(Университетская наб., 17)
Ⓜヴァシーリー島駅
(Василеостровская)または
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)下車、大学川岸通りへ移動。
◷11:00～17:00,
休館日:月火 ✆323-6496
◆美術館は18世紀中頃に設立され、芸術アカデミーの学生の感性と技術を磨くために用いられている。芸術アカデミーの卒業生の中には、巨匠カール・ブリュロフ、イヴァン・アイヴァゾフスキー、イリヤ・レーピンがいる。

夏の庭園とピョートル1世の夏の宮殿
"ЛЕТНИЙ САД И ЛЕТНИЙ ДВОРЕЦ ПЕТРА I"
ⓘ *2-k2,3, p.130*
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)からサドーヴァヤ通り沿いにネヴァ川方向へ徒歩約10分。
◷10:30～18:00,
休館日：火、毎月最終月曜
✆314-0374

男爵シュティグリーツ博物館（V.I.ムーヒナ記念サンクト・ペテルブルグ国立芸術産業アカデミー内装飾美術工芸博物館）
"МУЗЕЙ БАРОНА ШТИГЛИЦА"
ⓘ *2-m3, p.137*
ソリャルノイ横丁13/15
(Соляной пер., 13/15)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)下車、フォンタンカまで、その先徒歩約20分。◷11:00～17:00,
休館日: 日月 ✆273-3258
◆1800点の展示品。市内で唯一の19世紀半ばの家具コレクション、国内最も多岐にわたる19世紀民俗人形コレクション、西ヨーロッパ磁器、陶器、貴金属製品、18世紀のタイル張り暖炉のコレクション、ゴブラン織、ガラス製品、16～20世紀の衣装。美術館は1878年技術絵画学校に創立され、アレクサンドル・シュティグリーツ男爵の資産で開設された。建物の設計者は初代校長マクシミリアン・メスマヘルだ(1885－1895年, 博物館の建物を建設)。美術館はヨーロッパでも有数の装飾美術工芸品コレクションを所蔵している(初期の展示品数は約3万点で、展示品の大部分は革命後エルミタージュから移譲された)。

国立ペテルブルグ市彫刻博物館（アレクサンドル・ネフスキー修道院内）
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ ГОРОДСКОЙ СКУЛЬПТУРЫ"
ⓘ *3-h10, p.142*
アレクサンドル・ネフスキー広場1
(Пл. Александра Невского, 1)
Ⓜアレクサンドル・ネフスキー広場駅(Площадь Александра Невского)
◷9:30～17:00, 休館日:木
✆274-2655, 277-1716
◆1932年開館。博物館の構成：生神女マリア教会－納骨所(1714－1724年, 建築家D.トレジーニ、T.シュヴェルトフェーゲル)、ラザレフ教会－納骨所(1835－1836年、建築家L. ティブレン)、ラザレフ墓地(1716年設立)－18世紀の大墓地、チーフヴィン墓地(1823年設立)－芸術大家(1200以上の墓碑)の大墓地。博物館は市内全ての銅像や記念板、「ナルヴァの凱旋門」の管理(p.160)も行っている。ここの埋葬者は5526名。修道院にはユニークな彫刻記念碑(I.マルトス、F.ゴルデーエフ、M.コズロフスキー、V.デムート＝マリノフスキー、F.トルストイ、N.レリーフ、A.シューセフ、I.フォーミン作他)が展示されてある。また、ペテルブルグ－旧レニングラードの設計図や歴史的建造物の模型(A.S.プーシキン像、V.G. ベリンスキー像、N.V.ゴーゴリ像、A.N.オストロフスキー像等, コンペ時の資料)や18世紀－20世紀のペテルブルグの景色の版画のコレクションもある。

カール・ブリュロフ 「サマイロヴァと娘の肖像画」 1842年頃（国立ロシア美術館所蔵）

ノン・コンフォルミズム芸術美術館
"МУЗЕЙ НОНКОНФОР-МИСТСКОГО ИСКУССТВА"
プーシキン通り10
(Пушкинская ул., 10)
Ⓜマヤコフスカヤ駅
(Маяковская)
◷15:00～19:00,
休館日: 月火 ✆764-5258
◆美術館はペテルブルグの画家達「芸術家同盟」のイニシアチブで開館した。1980年代初頭にあったプーシキン通りのノン・コンフォルミズム芸術センターがもとになっている。

アート・穴蔵「野良犬」
АРТ-ПОДВАЛ "БРОДЯЧАЯ СОБАКА"
ⓘ *2-j5*
芸術広場5(Пл.Искусств, 5)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
(Невский проспект)
◷12:00～23:00
✆315-7764
◆ペテルブルグのアート・キャバレー「野良犬」、正式名称「私的劇場の芸術協会」は、プーシキンの知人I.A.ヤーコヴレフが所有していた古い邸内に1911年12月31日に開館した。創立者でカフェのオーナーだったのはB.K.プローニンで、内装に携わったのは有名な「ロシア・シーズン」のディアギレフだ。「野良犬」のステージには、マヤコフスキー、バリモント、グミリョーフ、アフマートヴァ、マンデリシュタム、タマーラ・カルサーヴィナが出演した。ここで1912年セルゲイ・ゴロデツキーはアクメイズムとシンボリズム(象徴主義)を語った。カフェの入口には水色の革装の巨大な本(「豚の本」と呼ばれた)が横たわっている。この本には、ここを訪れた有名人がサインやコメントを残している。ミハイル・クズミンや1912年に「野良犬」という賛歌を書いた。「犬」はエリートの創造クラブである。アーティスト、詩人、画家から入場料は徴収されなかったが、そうでない人達の入場料は最高10ルーブルだった。第1次世界大戦時、1915年3月当局は体制に造反的なこの施設を閉鎖した。1990年代からこの施設があった建物は修復され、2001年再び訪問客のためにオープンした(伝統に従ってここでは画家ギャラリー、キャバレーとカフェが一緒になっている)。

展示会場「マネーシュ」
"ВЫСТАВОЧНЫЙ ЗАЛ "МАНЕЖ""
ⓘ *2-e6, p.97*
イサーク広場1
(Исаакиевская пл., 1)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)からイサーク広場まで。
◷11:00～18:00, 休館日: 木
✆314-8253

芸術家同盟の展示センター
"ВЫСТАВОЧНЫЙ ЦЕНТР СОЮЗА ХУДОЖНИКОВ"
バリシャヤ・マルスカーヤ通り38
(Большая Морская ул., 38)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)下車、海軍省方向徒歩約15分。
◷13:00～19:00, 休館日: 月
✆314-4734

ギャラリー "NOTA BENE!"
ストレミャンナヤ通り5
(Стремянная ул., 5)
Ⓜマヤコフスカヤ駅
(Маяковская)
11:00～20:00,
休館日:日 ✆762-5992

芸術アカデミーギャラリー
"ГАЛЕРЕЯ АКАДЕМИИ ХУДОЖНИКОВ"
ナリーチナヤ通り21
(Наличная ул., 21)
Ⓜプリモールスカヤ駅
(Приморская)
◷11:00～19:00, 年中無休
✆355-1274

ギャラリー「巨匠の同業組合（ギルド）」
"ГАЛЕРЕЯ "ГИЛЬДИЯ МАСТЕРОВ""
ネフスキー大通り82
(Невский пр., 82)
Ⓜ蜂起広場駅
(Площадь Восстания)
◷11:00～19:00, 年中無休
✆279-0979

ギャラリー「ネフスキー20」
"ГАЛЕРЕЯ "НЕВСКИЙ, 20""
ネフスキー大通り20
(Невский пр., 20)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
(Невский проспект)
◷12:00～20:00, 年中無休
✆311-0106

ギャラリー「国民文化センター」
"ГАЛЕРЕЯ "ЦЕНТР НАЦИОНАЛЬНЫХ КУЛЬТУР""
ネフスキー大通り166
(Невский пр., 166)
Ⓜアレクサンドル・ネフスキー広場駅(Площадь Александра Невского)
◷11:00～19:00, 休館日：月
✆277-1216

「アムールとプシュケー」夏の庭園

寺院博物館・宮殿

イサーク聖堂
"ИСААКИЕВСКИЙ СОБОР"
ⓘ 2-e6, p.88
イサーク広場
Исаакиевская пл.
◷11:00〜18:00,
休館日: 水 ✆315-9732, 311-6570

キリスト復活教会（スパース・ナ・クラヴィー）
"ХРАМ ВОСКРЕСЕНИЯ ХРИСТА (СПАСА НА КРОВИ)"
ⓘ 2-j4, p.108
グリボエードフ運河川岸通り2a
наб. кан. Грибоедова, 2 а
ネフスキー・プロスペクト駅
（Невский проспект）
◷11:00〜18:00, 休館日: 火
✆315-1636
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）または Ⓜマヤコフスカヤ駅（Маяковская）下車、徒歩約10分。
◷11:00〜19:00
✆315-5236
◆18世紀の画家ヴァン・ロー（フランス）オリジナルの「第二ロココ様式」のインテリアを展示。

エラーギン宮殿
"ЕЛАГИН ДВОРЕЦ"
ⓘ p.153
エラーギン島"Елагин остров"
Ⓜクレストーフスキー島駅（Крестовский остров）
◷10:00〜17:00, 休館日: 月火
✆430-1130, 430-3090, 430-1010, 430-1030

フォンタンカ沿いのシェレメーチェフ宮殿門の シェレメーチェフ家の紋章

シェレメーチェフ宮殿
"ШЕРЕМЕТЕВСКИЙ ДВОРЕЦ"
（フォンタンカ邸、劇場・音楽芸術博物館分館）
ⓘ 3-a5, p.136
フォンタンカ川岸通り34
（Наб. реки Фонтанки, 34）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）または Ⓜマヤコフスカヤ駅（Маяковская）下車、フォンタンカ川まで。◷12:00〜18:00, 休館日: 月火 ✆272-4441
◆館内ではシェレメーチェフ伯爵家のコレクションを展示。17－20世紀の装飾工芸品。ペテルブルグの楽器コレクション（3000点）があり、偉大な巨匠や演奏家達の楽器、歴史的に珍しい品々を展示。白の間では交響曲、室内楽、合唱のコンサートが行われる。

エドゥアルド・ガウ
アーニチコフ宮殿の緑の書斎　1884年

ユスーポフ宮殿
"ЮСУПОВСКИЙ ДВОРЕЦ"
ⓘ 2-d8, p.158
モイカ川岸通り94
（Наб.реки Мойки,94）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）下車、イサーク聖堂まで行き、モイカ川に沿って下流へ徒歩約10分。グループ見学のみの完全予約制。
✆314-9883, 314-8690
◆宮殿内ではユスーポフ家の歴史を幅広く展示。別館の展示室ではグリゴーリー・ラスプーチン殺害の様子を取り上げてある。（資料、写真、オリジナルの品々は1916年にこの宮殿で繰り広げられたドラマの無言の証人である）

フェリックス・ユスーポフ公とその妃
イリーナ・アレクサンドロヴナ
1914年

大理石宮殿
"МРАМОРНЫЙ ДВОРЕЦ"
（国立ロシア美術館分館）
ⓘ 2-j2, p.128
ミリオンナヤ5/1
（Миллионная ул., 5/1）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）からマルス広場方向へ徒歩約20分。
◷月: 10:00〜16:00, 水〜日: 10:00〜17:00, 休館日: 火
✆312-9196, 312-9054
◆常設展ではロシアにおける外国人芸術家（ロシーカ）の作品を展示。

ストロガノフ宮殿
"СТРОГАНОВСКИЙ ДВОРЕЦ"
（国立ロシア美術館分館）
ⓘ 2-h6, p.102
ネフスキー大通り17
（Невский пр., 17）
◷10:00〜18:00, 休館日: 火
✆311-8238, 311-3944（見学予約）
◆バルトロメオ・カルロ・ラストレッリ、アンドレイ・ヴォロニーヒンによって装飾が施されたホールの一部を公開。ストロガノフ一家の歴史を紹介。

アーニチコフ宮殿
"АНИЧКОВ ДВОРЕЦ"
ⓘ 2-m7, p.134
ネフスキー大通り39
（Невский пр., 39）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）下車、フォンタンカ方向へ徒歩5分。
◷9:00〜19:00, 休館日:土日、毎月最終日
✆310-8433
予約制の宮殿の歴史インテリア見学ツアー。
✆310-4395
◆宮殿は1917年までロシア最後の皇帝ニコライ2世の母、マリヤ・フョードロヴナ皇太后の首都の邸宅だった。現在ここは青年創作会館（1937年設立された市立ピオネール会館の後継）で、児童・青年の余暇ヨーロッパ協会の一つになっている。

スモーリヌィ（復活）教会
"СМОЛЬНЫЙ (ВОСКРЕСЕНСКИЙ) СОБОР"
ⓘ 3-j1, p.144
ラストレッリ広場3/1
（Пл. Растрелли, 3/1）
Ⓜチェルヌィシェフスカヤ駅（Чернышевская）または Ⓜ蜂起広場駅（Площадь Восстания）からスヴォーロフ大通り（Суворовский пр.）沿いにスモーリヌィまで。
◷11:00〜17:00, 休館日:木
✆271-9182
◆修道院、スモーリヌィ大学、ロシア正教の歴史を展示。聖堂内ではロシア宗教音楽のコンサートが行われる。

ベロセリスキー＝ベロゼルスキー宮殿
"БЕЛОСЕЛЬСКИХ-БЕЛОЗЕРСКИХ ДВОРЕЦ"
ⓘ 2-m7, p.135
ネフスキー大通り41
（Невский пр., 41）
◆18世紀－20世紀初頭のロシア・西ヨーロッパ芸術品を7000点以上展示。ロシア製家具、ブロンズ細工、貴金属、宝石（時計、照明器具等）や銀細工（「ファベルジェ」社の作品含）等。

インジェニェールヌィ（ミハイル）城塞
"ИНЖЕНЕРНЫЙ (МИХАЙЛОВСКИЙ) ЗАМОК"
（国立ロシア美術館分館）
ⓘ 2-k4, p.126
サドーヴァヤ通り2
（Садовая ул., 2）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）下車、夏の庭園方向へ徒歩約10分。
◷10:00〜18:00, 休館日: 火
✆313-4173
◆18世紀－19世紀初頭の肖像画芸術を展示。

歴史博物館

ペトロパヴロフスカヤ要塞（国立サンクト・ペテルブルグ歴史博物館）
"ПЕТРОПАВЛОВСКАЯ КРЕПОСТЬ"
ⓘ 1-f8, p.28
Ⓜゴーリカフスカヤ駅（Горьковская）
◷11:00〜18:00, 休館日: 水
✆238-4511, 238-4540（見学ツアー予約）
◆要塞の敷地にいくつかの歴史展示室がある。トルベツコイ稜堡の監獄（要塞の監獄史）、要塞司令官の家（サンクト・ペテルブルグ史）、イオアン半月堡（宇宙飛行学とロケット技術博物館）等。

レニングラード英雄防衛モニュメント
"МОНУМЕНТ ГЕРОИЧЕСКИМ ЗАЩИТНИКАМ ЛЕНИНГРАДА"
ⓘ p.161
勝利広場（Пл. Победы）
Ⓜモスコフスカヤ駅（Московская）
◷月、木、土、日: 10:00〜18:00;火、金: 10:00〜17:00, 休館日: 水　毎月最終火曜
✆373-6563（見学予約）
◆博物館展示室は約6m奥（地下）に展開されている。そこには1978年2月23日に開館した、花崗岩と大理石が塗装された壮大な記念ホールがある。地下の展示会場には76－mm砲弾の薬莢で作られた900本（封鎖の日数）の灯がともされている。記念ホール入口上には "О камни! Будьте стойкими, как люди!"（おお、石よ！封鎖を耐えた人のように、頑強であれ！）（封鎖経験者・詩人Y.ヴォローノフの言葉）という碑文がある。ホール内にはモスクワの無線コールサインが響いている。
ビデオコーナーでは、D.D.ショスタコーヴィチ「交響曲第7番」の音楽を使ったドキュメント映画「封鎖の追憶」が上映されている。

大祖国戦争時代のレニングラード
"ЛЕНИНГРАД В ГОДЫ ВЕЛИКОЙ ОТЕЧЕСТВЕННОЙ ВОЙНЫ"
（国立サンクト・ペテルブルグ歴史博物館分館・ルミャンツェフ邸内展示室）
ⓘ 2-b7
英国川岸通り44
（Английская наб., 44）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）下車、労働広場まで行き、そこから英国川岸通り沿いに徒歩。
◷11:00〜18:00;
火－11:00〜17:00,
休館日: 水 311-7544,
✆315-5123
◆かつて有名な政治家でコレクターだったニコライ・ペトローヴィチ・ルミャンツェフ伯爵が所有していた建物。1831年にロシア初の私立博物館となったが、後にモスクワに移された。現在この邸宅には国立サンクト・ペテルブルグ歴史博物館の展示品が置かれている。

国立A.V.スヴォーロフ記念メモリアル博物館
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МЕМОРИАЛЬНЫЙ МУЗЕЙ А.В. СУВОРОВА"
ⓘ 3-f2, p.141
キーロチナヤ通り43
（Кирочная ул., 43）
Ⓜチェルヌィシェフスカヤ駅（Чернышевская）からキーロチナヤ通り沿いにスヴォーロフ大通りまで。
◷10:00〜17:00,
休館日: 火水、最終月曜日
✆279-3914
◆常勝不敗の大元帥、総司令官アレクサンドル・ヴァシーリエヴィチ・スヴォーロフ伯爵（1729または1730－1800年）。博物館のコレクション（10万点以上）はスヴォーロフの戦歴と18世紀－20世紀ロシアの戦争史を絵や図を交えて紹介。

「カール・ベンツ社」の「ベンツ・ヴェロ」
1894－1896年 ドイツ製
（サンクト・ペテルブルグ歴史博物館）

国立宗教史博物館
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ ИСТОРИИ РЕЛИГИИ"
ⓘ 2-d7
中央郵便局通り14
（Почтамтская ул., 14）
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅（Невский проспект）からイサーク広場まで行き、更に歩く。
◷11:00〜17:00,
休館日: 水 ✆311-0495
◆世界の宗教（キリスト教、イスラム教、仏教等）の歴史を展示。

国立ロシア政治史博物館（クシェシンスカヤ邸内展示室）
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ ПОЛИТИЧЕСКОЙ ИСТОРИИ РОССИИ"
ⓘ 1-h7, p.150
クイブィシェフ通り6
（Ул. Куйбышева, 4）
Ⓜゴーリカフスカヤ駅（Горьковская）
◷10:00〜18:00,
休館日: 木 ✆233-7048
◆館内では全ロシア革命の歴史とロシア政治闘争の特性を展示。マチルダ・クシェシンスカヤにまつわる常設展も行っている。

政治的拷問捜査博物館「ガローハヴァヤ２」
"МУЗЕЙ ПОЛИТИЧЕСКОГО СЫСКА "ГОРОХОВАЯ, 2""
ⓘ 2-f6
アドミラルチェイスキー（海軍省）大通り6/2
（Адмиралтейский пр., 6/2）
Ⓜネフスキー大通り駅（Невский проспект）下車、グリボエードフ運河側出口から海軍省方向へ徒歩約10分。
◷11:00〜17:30,
休館日:土日
✆312-2742
◆ロシア帝国と1826－1926年のソ連邦（ベンケンドルフからジェルジンスキーまで）の政治警察の歴史を展示。1990年まで開示されなかったKGB資料コレクションからの写真もある。

ピスカリョフ記念墓地
"ПИСКАРЕВСКОЕ МЕМОРИАЛЬНОЕ КЛАДБИЩЕ"
ピスカリョフスカヤ大通り
（Пр. Непокоренных）
◷10:00〜18:00, 年中無休
◆レニングラード封鎖時に飢餓で亡くなった住人の巨大な墓地に作られた（100万人以上の人が葬られている）。

モザイク画「1799年スヴォーロフのアルプス山越え大行軍」
A.V.スヴォーロフ博物館のファサード上, 1901年 A.ポポフのスケッチによる

自然科学と科学的発見の歴史

ロシア民俗博物館
"РОССИЙСКИЙ ЭТНОГРАФИЧЕСКИЙ МУЗЕЙ"
ⓘ *2-k5, p.115*
インジェニェールナヤ通り4/1
(Инженерная ул., 4/1)
(ミハイル宮殿右の建物)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)
🕓10:00～17:00,
休館日：月,
毎週最終金曜
✆313-4320, 313-4421
(団体ガイドツアー予約)

ピョートル大帝記念人類学・民俗学博物館(クンストカメラ)
"МУЗЕЙ АНТРОПОЛОГИИ И ЭТНОГРАФИИ ИМ. ПЕТРА ВЕЛИКОГО" (КУНСТКАМЕРА)
ⓘ *2-e4, p.42*
大学川岸踊り3
(Университетская наб., 3)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)下車、グリボエードフ運河出口からヴァシーリー島岬まで移動。
🕓11:00～18:00
(チケット窓口16:45まで),
休館日：月、毎週最終火曜日
✆328-0812
◆博物館では初期(ピョートル時代の)クンストカメラの展示品、またロシア民俗学者や人類学者によって集められた両分野の急発展の時代(19-20世紀)の豊富な資料が展示されている。人類学コレクションで特別な位置を占めているのは、人類学者で彫刻家でもあるM.M.ゲラーシモフ(1907－1970)の科学の復興だ。

ベリョーゾヴァ(ロシア共和国チュメニ州の州都)のマンモス 世界唯一のマンモスの剥製。44000歳(動物学博物館)

真珠と螺鈿刺繍装飾のロシア宝冠(乙女の被り物) 18世紀(ロシア民俗博物館)

アカデミー会員F.N.チェルヌィショーフ記念中央科学・地質調査研究博物館
ЦЕНТРАЛЬНЫЙ НАУЧНО-ИСЛЕДОВАТЕЛЬСКИЙ ГЕОЛОГОРАЗВЕДОЧНЫЙ МУЗЕЙ ИМ. АКАДЕМИКА Ф.Н. ЧЕРНЫШЕВА
スレードヌィ(中)大通り74
(Средний пр., 74)
Ⓜヴァシーリー島駅
(Василеостровская)
🕓10:00～17:00,
休館日：土日 ✆328-9248
(ガイドツアー予約)
◆フェオドシー・ニコラエヴィチ・チェルヌィショーフ(1856－1914)は傑出した地質学者で、古生物学者である。ウラルと北ヨーロッパ・ロシアの古生代地層を採掘。博物館では化石、古生物資料(恐竜、マンモス、シーラカンスの骨)を展示。興味深い展示物は、1937年制作の宝石で飾られたソ連時代の地図だ。

V.V.ドクチャエフ記念中央土壌学博物館
"ЦЕНТРАЛЬНЫЙ МУЗЕЙ ПОЧВОВЕДЕНИЯ ИМ. В.В. ДОКУЧАЕВА"
ⓘ *2-d3*
取引所玄関6
(Биржевой проезд, 6)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)下車、グリボエードフ運河出口からヴァシーリー島岬まで移動。
🕓10:00～17:00,
休館日：土日 ✆328-5402
◆ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・ドクチャエフ(1846－1903)は土壌学の一人者で地層説の創始者である。彼の説は自然地理学や科学的土地改良の発展に影響を与えた。博物館の展示品は土壌学と関連科学を視覚的にわかりやすく展示し、ドクチャエフについて説明している。

儀式用男性仮面頭飾り 20世紀 アフリカ(クンストカメラ)

ロシア科学アカデミー動物学大学付属動物学博物館
"ЗООЛОГИЧЕСКИЙ МУЗЕЙ ЗООЛОГИЧЕСКОГО ИНСТИТУТА РОССИЙСКОЙ АКАДЕМИИ НАУК"
ⓘ *2-e3*
大学川岸通り1/3
(Университетская наб., 1/3)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
(Невский проспект)
下車、グリボエードフ運河出口からヴァシーリー島岬まで。
🕓11:00～17:00,
休館日：金 ✆328-0112
◆この分野で世界最大規模の博物館(約5000万点の展示物)。ここでは世界の有名動物の4分の1が展示されている。6000m²にわたる展示室にはピョートル1世の愛馬リゼッタの剥製、世界に一つしかないマンモスの剥製、有名なマンモスの子どもジーマのようなユニークな展示物がある。

ロシア国立北極と南極博物館
"РОССИЙСКИЙ ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ АРКТИКИ И АНТАРКТИКИ"
ⓘ *3-b7*
マラート通り24a
(Ул. Марата, 24а)
Ⓜウラジーミルスカヤ駅(ドストエフスカヤ駅)
"Владимирская"("Достоевская")
または
Ⓜマヤコフスカヤ駅
(Маяковская)
下車、徒歩10分。
🕓10:00～18:00,
休館日：月火 ✆113-1998
◆地球上最も寒い地の開拓史と自然界を展示しているロシアで唯一、世界有数の博物館。ニコライ同一宗教教会の建物(建築家A.メリニコフ、1820－1826年)内にあったが、1930年現在の場所に移された。コレクションの展示数は約7万5千点で、古いものは16世紀のものだ。

ロシア科学アカデミー植物学博物館
"БОТАНИЧЕСКИЙ МУЗЕЙ РОССИЙСКОЙ АКАДЕМИИ НАУК"
ⓘ *1-h1, p.147*
教授ポポフ通り2
(Ул. Профессора Попова, 2)
Ⓜペトログラーツカヤ駅
(Петро-градская)から
バリショイ(大)大通り沿いにカルポフカ川方向徒歩15分
🕓11:00～16:00,
休館日：金，見学は団体ガイドツアーのみ。✆234-1764
(ガイドツアー予約)
◆約7000種の熱帯植物と亜熱帯植物を展示。

国立鉱山大学(付属)鉱山博物館
"ГОРНЫЙ МУЗЕЙ ГОСУДАРСТВЕННОГО ГОРНОГО ИНСТИТУТА"
ⓘ *4-k8*
ヴァシーリー島21番線(リーニヤ)2
(Васильевский остров, 21-я линия, 2)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
(Невский проспект)下車、グリボエードフ運河出口からヴァシーリー島まで、それからバリショイ(大)大通り沿いに21番線まで。
🕓10:00～17:00, 休館日：土日
✆321-4082, 328-8429
(ガイドツアー予約)
◆世界各国のユニークな鉱物や鉱石を展示。

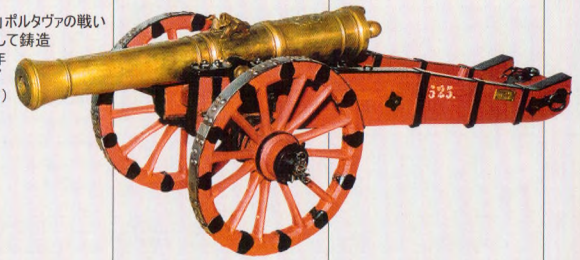
技術とテクノロジー開発の歴史

中央鉄道博物館
"ЦЕНТРАЛЬНЫЙ МУЗЕЙ ЖЕЛЕЗНОДОРОЖНОГО ТРАНСПОРТА"
ⓘ *2-g10*
サドーヴァヤ通り50
(Садовая ул., 50)
Ⓜサドーヴァヤ駅(Садовая)
またはⓂ平和広場駅
(Площадь Мира)
🕓11:00～17:00, 休館日：金土,
毎月最終木曜 ✆315-1476
◆ロシア鉄道の敷設と建設の全歴史を紹介。蒸気機関車の模型、昔の車両を展示している。

「ボルジク」工場 1-2-0型蒸気機関車模型 1870年代(中央鉄道博物館)

砲術工兵隊・通信隊の軍事歴史博物館(兵器博物館)
"ВОЕННО-ИСТОРИЧЕСКИЙ МУЗЕЙ АРТИЛЛЕРИИ, ИНЖЕНЕРНЫХ ВОЙСК И ВОЙСК СВЯЗИ" (АРСЕНАЛ)
ⓘ *1-f7, p.31*
アレクサンドル公園7
(Александровский парк, 7)
Ⓜゴーリカフスカヤ駅
(Горьковская)からクロンヴェルク川岸通り沿いに徒歩約10分。
🕓11:00～-17:00,
休館日：月火 ✆232-0296
◆ピョートル1世によって1703年6月にペトロパヴロフスカヤ要塞(当時はサンクト・ペテルブルグ要塞)内に設立。要塞のツェイフガウズ(兵器庫)(独語 Zeug Haus 武器庫)にロシア全土の歴史的価値の高い武器(記念品、珍品)を届けるように命じられた。コレクションは1756年リチェイヌィ・ドヴォール(「後の旧兵器博物館」)に、1869年クロンヴェルクの新兵器博物館(1850－1860年、建築家P. タマンスキー)に移された。1960年代博物館は中央歴史軍工学博物館と軍事通信博物館所蔵の約10万点をコレクションに加え、砲術工兵隊・通信隊の軍事歴史博物館(兵器博物館)と名づけられた。今日世界有数の軍事歴史博物館である。展示室は総面積17000km²以上の13ホールから成る。

「連隊の大砲」ポルタヴァの戦いの勝利を記念して鋳造 1805年(クロンヴェルグ兵器博物館)

マルタのガレー船古模型(中央海軍博物館)

中央海軍博物館
"ЦЕНТРАЛЬНЫЙ ВОЕННО-МОРСКОЙ МУЗЕЙ"
ⓘ *2-e3, p.41*
取引所広場4
(Биржевая пл., 4)
🕓11:00～18:00, 休館日：
月火, 毎月最終木曜
✆328-5202

巡洋艦「オーロラ」
"КРЕЙСЕР "АВРОРА" "
ⓘ *1-j7, p.149*
ペトログラーツカヤ川岸通り
(Петроградская наб.)
Ⓜゴーリカフスカヤ駅
(Горьковская)下車、トロイツキー(三位一体)橋まで行き右折。ピョートル川岸通りに沿って徒歩約20分。
🕓11:00～17:00,
休館日：月金
✆230-8440, 232-6370

潜水艦D-2「ナロダヴォーレツ」
"ПОДВОДНАЯ ЛОДКА Д-2 "НАРОДОВОЛЕЦ""
ⓘ *4-d7*
シキペルスキー水路10
(Шкиперский проток, w10)
Ⓜプリモールスカヤ駅
(Приморская)
🕓11:00～17:00,
休館日：月火,見学は団体ガイドツアーのみ。
✆356-5266
◆ソ連の初期の潜水艦(1931年)、大祖国戦争に参加。造船史における歴史的建造物。

A.S.ポポフ記念中央通信博物館
"ЦЕНТРАЛЬНЫЙ МУЗЕЙ СВЯЗИ ИМ. А.С. ПОПОВА"
ⓘ *1-h1*
中央郵便局通り7
(Почтамтская ул., 7)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅
(Невский проспект)下車、イサーク広場まで。
🕓10:30～18:00,
休館日：日月毎月最終木曜
✆323-9718
◆宰相ベズボロートコ邸内にある。ロシアの郵便と通信の歴史を称え1872年に設立された博物館は、後にアレクサンドル・ステパーノヴィチ・ポポフ(1859－1905)の名がつけられた。ポポフは優れた物理学者で、無線の発明家(1895年)(グリエリモ・マルコーニは2年後の1897年に自分の発明の特許を取得)である。現在展示室では郵便の歴史だけでなく、無線工学の歴史も展示してある。

812 サンクト・ペテルブルグの市外局番

文学・音楽・劇場史

「演劇評論家長ヴァシーリー・スターソフ(中央に座っている)のペテルブルグサロン」 お客の中にリムスキー＝コルサコフ、アレクサンドル・グラズノフ、キュイ、シャリャーピン、マリーヤ・サヴィーナ他がいる。
1890年代

プーシキンの家
"ПУШКИНСКИЙ ДОМ"
(科学アカデミーロシア文学大学)
ⓘ *2-d2*
マカーロフ川岸通り34
(Наб. Макарова, 34)
Ⓜ ネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)下車, ヴァシーリー島岬まで移動。
🕓11:00～16:00, 休館日: 土日
✆328-0502, 108-4761
◆プーシキンの家文学博物館は最も古く、この分野で国内最大規模を誇る(12万点の基礎コレクション、20万点を超える二次的な所蔵品(絵画、彫刻、版画、美術工芸品))。プーシキン関連のユニークな資料、トルストイ社会、ブロックガウズ出版社、エフロン他の資料を含む。レールモントフ博物館、リツェイ(男子貴族学校)、トルストイ博物館、パリ・プーシキン博物館A.F.オットー・オネーギンの資料やロシア文化・科学活動家の肖像画コレクションもある。

国立劇場・音楽芸術博物館
"ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ ТЕАТРАЛЬНОГО И МУЗЫКАЛЬНОГО ИСКУССТВА"
ⓘ *2-k7*
オストロフスキー広場6
(Пл. Островского, 6)
Ⓜ ガスチーヌィ・ドヴォール駅(Гостиный Двор)
🕓11:00～18:00;
水: 13.00–19.00,
休館日: 火,毎月最終金曜
✆571-2195, 315-5243
◆アレクサンドリンスキー(アレクサンドル)劇場のアンサンブルを形成している建物内にはかつて、帝立劇場幹部と劇場学校があった。後にここに世界最大規模の劇場博物館(展示品40万点)が設立される。ユニークな版画、絵、写真、資料、楽譜、舞台装置のスケッチ、衣装、人形等が展示されている。ビデオ閲覧室有。

楽器博物館
"МУЗЕЙ МУЗЫКАЛЬНЫХ ИНСТРУМЕНТОВ"
(国立サンクト・ペテルブルグ劇場音楽芸術博物館分館)
ⓘ *2-e6*
イサーク広場5
(Исаакиевская пл., 5)
Ⓜ ネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)下車、イサーク広場まで。
🕓12:00～18:00,
休館日: 月火, 毎月最終金曜
✆314-5394, 314-5345
◆世界最大の楽器博物館の一つ。コレクションはヨーロッパ、アフリカ、近東、極東、ロシア、バルト海地方、ウクライナ、中央アジア等の楽器3000点以上。その中に有名な巨匠によって制作され、ここにしか保存されていない貴重な楽器がある。館内ホールでは講義やコンサートが行われる。

「チャイコフスキー肖像画」
19世紀末のロシア音楽の「顔」
1890年代

記念博物館

オレスト・キプリエンスキー
「プーシキン肖像画」 1827年

ピョートル1世の小屋
"ДОМИК ПЕТРА I"
ⓘ *1-j7, p.148*
ピョートル川岸通り6
(Петровская наб., 6)
Ⓜ ゴーリカフスカヤ駅(Горьковская)下車、トロイツキー(三位一体)橋まで行き、ピョートル川岸通り沿い左折。
🕓10:00～17:00,
休館日: 火
✆232-4556, 232-4576
◆1723年ピョートル大帝によって設立。ピョートルの個人的な品々、18世紀初頭の生活用品、版画、武器を展示。

M.B.ロモノーソフ博物館(クンストカメラ)
"МУЗЕЙ М.В. ЛОМОНОСОВА" (Кунсткамера)
ⓘ *2-e4, p.42*
大学川岸通り3
(Университетская наб., 3)
🕓11:00～16:30, 休館日: 月, 毎月最終火曜 ✆328-1412
◆18世紀半ばの科学知識レベルを展示。優れた自然科学者ミハイル・ヴァシーリエヴィチ・ロモノーソフ(1711－1763)の研究室があった建物内に展示室がある。

A.S.プーシキンの家博物館
"КВАРТИРА А.С. ПУШКИНА"
(モスクワの全ロシアA.S.プーシキン博物館の分館)
ⓘ *2-h4*
モイカ川岸通り12
(Наб. реки Мойки, 12)
Ⓜ ネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)グリボエードフ運河出口
🕓11:00～17:00,
休館日: 月,毎月最終月曜
✆314-0007, 311-3531
◆アレクサンドル・セルゲーヴィチ・プーシキン(1799–1837)は偉大なロシアの詩人で、新しいロシア詩(韻文と散文)の創始者である。フランス大使の息子ダンテスとの宿命的な決闘の日まで家族と共にモイカ川沿いの住居に間借りしていた。1837年1月29日(2月10日)決闘で受けた傷がもとで自身の書斎で亡くなった。

アンナ・アフマートヴァ博物館
"МУЗЕЙ АННЫ АХМАТОВОЙ"
(シェレメーチェフ宮殿内)
ⓘ *3-a5*
フォンタンカ川岸通り34
(Наб. реки Фонтанки, 34)
(シェレメーチェフ宮殿)
🕓11:00～18:00,
休館日: 月,毎月最終水曜
✆272-1811, 272-2211
◆アンナ・アフマートヴァ(1889－1966)はロシア叙情文学における伝説的な人物である。シェレメーチェフ宮殿に住んでいたこともある。1990年代館内に彼女にまつわる展示室が開設された。

アレクサンドル・ブロークの家美術館
"МУЗЕЙ-КВАРТИРА А. БЛОКА"
(国立サンクト・ペテルブルグ歴史博物館分館)
ⓘ *2-a10*
デカブリスト通り57, 21と23号室
(ул. Декабристов, 57, кв. 21, 23)
Ⓜ ネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)下車、英国大通りまで移動。
🕓11:00～18:00, 休館日: 水
✆113-8633 (ガイドツアー予約)
◆アレクサンドル・ブローク(1880－1921)偉大な象徴主義の詩人。伝説を効果的に使い、歴史と社会を表す詩を創作する。ペトログラード(現ペテルブルグ)で餓死。

F.M.ドストエフスキー文学記念博物館
"ЛИТЕРАТУРНО-МЕМОРИАЛЬНЫЙ МУЗЕЙ Ф.М. ДОСТОЕВСКОГО"
ⓘ *3-b8*
クズニェーチヌィ横丁5/2
(Кузнечный пер., 5/2)
Ⓜ ウラジーミルスカヤ駅(Владимирская)あるいはⓂドストエフスカヤ駅(Достоевская)
🕓11:00～18:00, 休館日:月
毎月最終水曜 ✆311-4031
◆偉大な作家の生涯を展示。

M.M.ゾーシェンコ文学記念博物館
"ЛИТЕРАТУРНО-МЕМОРИАЛЬНЫЙ МУЗЕЙ М.М. ЗОЩЕНКО"
ⓘ *2-i5*
小厩舎通り4/2, 119号室
(Малая Конюшенная ул., 4/2, кв. 119)
Ⓜ ネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)下車、グリボエードフ運河出口
🕓11:00～18:00, 休館日:月
毎月最終水曜 ✆311-7819
◆ミハイル・ゾーシェンコ(1895–1958)スターリン時代の風刺作家、小ブルジョア的価値を嘲笑した優れた小品の作家。この建物に長年住んでいた。

D.I.メンデレーエフ
1890年代

D.I.メンデレーエフの家博物館
"МУЗЕЙ-КВАРТИРА Д.И. МЕНДЕЛЕЕВА"
ⓘ *2-d4*
メンデレーエフ線(リーニヤ)2
(Менделеевская линия, 2)
Ⓜ ネフスキー・プロスペクト駅(Невский проспект)下車、国立ペテルブルグ総合大学まで。🕓11:00～16:00,
休館日: 土日 ✆328-2982, 328-9744, 328-9737
◆D. I. メンデレーエフ(1834－1907)は、現在世界中の科学者が使っている有名な元素周期律表(1869)を発見した科学者である。アレクサンドル2世時代の1880年、ペテルブルグ科学アカデミー会員に抜擢されるが、世論の怒りをまねき、落選した。長年ペテルブルグ大学に住み、働く。

V.V.ナボコフの家博物館
"ДОМ В.В. НАБОКОВА"
ⓘ *2-e7*
大マルスカーヤ通り47
(Большая Морская ул., 47)
Ⓜネフスキー・プロスペクト駅(Невский Проспект)下車、イサーク広場まで移動。
🕓11:00～18:00,
休館日:月 ✆315-4713
◆博物館はウラジーミル・ナボコフ(1899－1977)が生まれ、1919年まで住んだ家にある。ナボコフはアメリカに帰化した優れたロシア人作家で、「ディフェンス」や「ロリータ」を執筆。家は、第国会の議員で優れた法律家だったナボコフの父の所有物だ。

I.P.パヴロフの家記念博物館
"МЕМОРИАЛЬНЫЙ МУЗЕЙ-КВАРТИРА АКАДЕМИКА И.П. ПАВЛОВА"
(ロシア科学アカデミーI.P.パヴロフ記念生理学単科大学内)
ⓘ *2-a5*
ヴァシーリー島7番線(リーニヤ)11号室(7番線とシュミット中尉川岸通りの角)
7-я линия, 2, кв. 11
Ⓜ ヴァシーリー島駅(Василеостровская)
🕓11:00～17:00,
休館日: 土日
✆323-7234
◆イヴァン・ペトローヴィチ・パヴロフ(1849–1936)は偉大な生理学者である。条件反射説でノーベル賞を受賞(1904年)。

ボリス・クストージエフ 「フョードル・シャリャーピン肖像画」
1921年(国立劇場・音楽芸術博物館所蔵)

リムスキー・コルサコフの家記念博物館
"МЕМОРИАЛЬНЫЙ МУЗЕЙ-КВАРТИРА Н.А. РИМСКОГО-КОРСАКОВА"
ザーゴロドヌィ大通り28(中庭の離れ)3階
(Загородный пр., 28)
Ⓜプーシキンスカヤ駅(Пушкинская)
🕓11:00～18:00,
休館日: 月火,毎月最終金曜
✆113-3208, 315-3975
◆ニコライ・アレクセーヴィチ・リムスキー＝コルサコフ(1844－1908)「サトコ」「雪娘」「皇帝の花嫁」「金鶏」等、15の有名なオペラを作曲。ロシア民謡の旋律学の達人で、自分の作品の中にロシア民謡のメロディを上手く組み入れた。

F.I.シャリャーピンの家記念館
"МЕМОРИАЛЬНАЯ КВАРТИРА Ф.И. ШАЛЯПИНА"
グラフティオ通り2－6
(Ул. Графтио, 2-б)
Ⓜペトログラーツカヤ駅(Петроградская)
🕓12:00～18:00, 休館日: 月火,
毎月最終金曜 ✆234-1056
◆フョードル・シャリャーピン(1873–1938) 比類なきバス・オペラ歌手。得意としたのは、「ボリス・ゴドゥノフ」の皇帝ボリス、「ファウスト」のメフィストファレス、「プスコフ人」のイヴァン雷帝他。1922年から外国に住む。

ヴァシーリー・ペロフ
「ドストエフスキー肖像画」
1872年

ガッチナ “ГАТЧИНА”
p. 210, 交通 – p.164参照

国立自然保護博物館「ガッチナ」
“ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ-ЗАПОВЕДНИК “ГАТЧИНА””
◷10:00〜18:00,
休館日:月 第1週火曜日
✆ 8 (81371) 134-92*

クロンシュタット
“КРОНШТАДТ”
p. 222, 交通 – p. 164参照

クロンシュタット要塞
“КРОНШТАДСКАЯ КРЕПОСТЬ”
住所:クロンシュタット,
ヤコールナヤ広場1
(Кронштадт, Якорная пл., 1)
◷11:00〜18:00, 休館日: 月火
✆ 236-4713

クロンシュタット市歴史郷土博物館
“ИСТОРИКО-КРАЕВЕДЧЕСКИЙ МУЗЕЙ ГОРОДА КРОНШТАДТА”
クロンシュタット, マカーロフ通り3
(マトロスキー・クラブ)
Кронштадт, Макаровская ул., 3, (Матросский клуб)
◷10:00〜18:00,
休館日:土日 ✆236-4450
◆クロンシュタット市と要塞施設の歴史を展示。

オラニエンバウム
“ОРАНИЕНБАУМ”
p. 216, 交通 – p. 164参照

国立自然保護博物館「オラニエンバウム」
“ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ-ЗАПОВЕДНИК “ОРАНИЕНБАУМ””
✆ 現在修復作業中のため、開館日時については電話にて要確認。422-8016

パヴロフスク “ПАВЛОВСК”
p. 200, 交通 – p. 165参照

国立自然保護博物館「パヴロフスク」
“ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ-ЗАПОВЕДНИК “ПАВЛОВСК””
パヴロフスク,
革命通り20
(Павловск, ул. Революции, 20) ◷10:00〜18:00,
休館日: 金 ✆470-2155

「ベリヴェデルスキーのアポロン像」
古代彫刻の複製
19世紀初頭
(パヴロフスク公園)

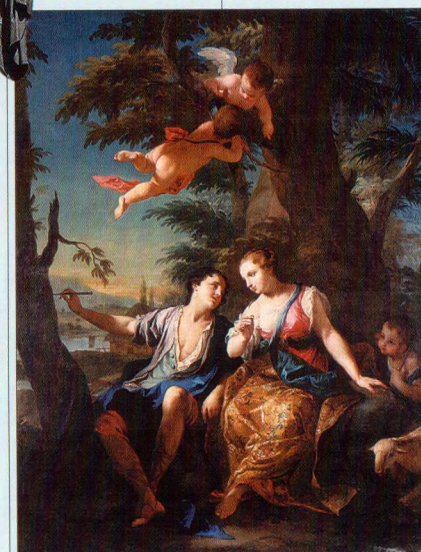
ルドヴィク・カラヴァック
「ピョートル1世の娘、エリザヴェータの子供時代の肖像画」
1710年代末(?) (ツァールスコエ・セロー, エカチェリーナ宮殿)

ペテルゴフ “ПЕТЕРГОФ”
p. 166, 交通– p. 164参照

国立自然保護博物館「ペテルゴフ」
“ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ-ЗАПОВЕДНИК “ПЕТЕРГОФ””
ペテルゴフ(Петергоф)
✆427-7425 ◷噴水:5月から9月中旬まで11:00〜17:00
大宮殿:冬シーズン
11:00〜18:00,
休館日: 月, 毎月最終火曜日
モン・プレジール宮殿、グロート(岩窟)、礼拝堂:冬シーズンは閉館。他博物館は土日のみ開館。夏シーズン
(5月から10月まで)
10:30〜18:00, 休館日: 月
毎月最終火曜
モン・プレジール宮殿:浴場棟は水・毎月最終火曜閉館。
エカチェリーナ棟は木・毎月最終月曜閉館。

ベヌア一家博物館
“МУЗЕЙ СЕМЬИ БЕНУА”
ペテルゴフ, 宮殿広場8
(Петергоф, Дворцовая пл., 8) ◷11:00〜17:00,
休館日:土日 ✆427-9932

ストレリナ “СТРЕЛЬНА”
p. 183, 交通 – p. 164参照

ストレリナ・ピョートル1世宮殿
“ДВОРЕЦ ПЕТРА I В СТРЕЛЬНЕ”
◷10:30〜16:00,
休館日: 月, 毎月最終火曜
✆421-4131
◆ストレリナ宮殿は、ピョートル1世がペテルブルグからクロンシュタットへ移動する際の旅の宿泊所として建てられた。ここにはオリジナルの家具、ユニークな私物、皇帝の日用品が保存されている。

D. チニヤロッリ
「アンジェリカとメドール」
18世紀半ば(オラニエンバウム,中国宮殿の漆喰寝室)

*ペテルブルグ近郊の町(例:ガッチナ等)にペテルブルグ市内から電話をかける場合は、まず市外通話用の「8」を押し、プーという音の後、(市外局番)と電話番号をダイヤルください。

ツァールスコエ・セロー
鉄柵の一部

コンスタンチン宮殿
“КОНСТАНТИНОВСКИЙ ДВОРЕЦ”
(国立コンプレックス「議会宮殿」)
要電話確認(上記参照)
✆438-54-40, 438-5360
(ガイドツアー・展示部)
◆公邸、歴史文化保護区域・事務センターの機能を兼ねる。

「ペナーティ」屋敷のイリヤ・レーピンのアトリエ
レーピン(中央)はトルストイ死亡の新聞記事を読んでいる。
(左に座っているのは作家コルニェイ・チューコフスキー) 1910年

レーピノ “РЕПИНО”
Ⓜスターラヤ・ジェレーヴニャ駅(Старая Деревня)から「ゼレノゴールク」(Зеленогорск)方面バスに乗り「ペナーティ」(Пенаты)下車。

I.E.レーピン屋敷博物館「ペナーティ」
“МУЗЕЙ-УСАДЬБА И.Е. РЕПИНА “ПЕНАТЫ””
(ロシア芸術アカデミー科学研究博物館分館)
住所:レーピノ,プリモールスカエ・シャッセー(沿岸環状線)411
(Репино,
Приморское шоссе, 411)
◷10:00〜18:00, 休館日:月火
✆231-6633, FAX 231-6828
◆偉大な画家イリヤ・エフィーモヴィチ・レーピン(1844―1930)が最後に住んだ家。

ツァールスコエ・セロー
“ЦАРСКОЕ СЕЛО”
p. 184, 交通 – p.165参照

国立自然保護博物館「ツァールスコエ・セロー」
“ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ-ЗАПОВЕДНИК “ЦАРСКОЕ СЕЛО””
プーシキン,サドーヴァヤ通り7
(Пушкин, Садовая ул., 7)
✆466-6669, 465-5308

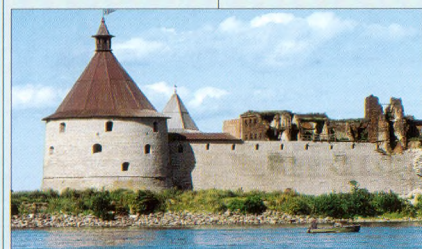
エカチェリーナ宮殿
“Екатерининский дворец”
◷10:00〜17:00,
休館日: 火 毎月最終月曜

アレクサンドル宮殿
“Александровский дворец”
◷10:00〜17:00,
休館日: 火, 毎月最終水曜
「当直厩舎」パヴィリオン
(ツァールスコエ・セローの「宮廷4輪馬車」展示場)は毎週土日のみ開館: ◷11:00〜17:00.
冷浴場と瑪瑙の間は
10:00〜17:00,
休館日: 月火
秋・夏シーズン、エカチェリーナ公園大池に渡し舟がある。
◷11:30〜18:00, 休館日:火
チケット販売所はエカチェリーナ公園入口

リツェイ記念博物館
“МЕМОРИАЛЬНЫЙ МУЗЕЙ-ЛИЦЕЙ”
(全ロシア
A.S.プーシキン博物館分館)
プーシキン, サドーヴァヤ通り2
(Пушкин, Садовая ул., 2)
◷10:30〜16:30, 休館日: 火,
毎月最終金曜 ✆470-7792
◆A.S.プーシキン生誕175周年を記念して1949年にエカチェリーナ宮殿のリツェイ(貴族学校)棟に設立。

ツァールスコエ・セロー歴史博物館
“МУЗЕЙ ИСТОРИИ ЦАРСКОГО СЕЛА”
プーシキン, レオンチエフスカヤ通り28 (Пушкин,
Леонтьевская ул., 28)
◷10:00〜17:00,
休館日: 木金 ✆466-5510

シュリッセルブルグ
“ШЛИССЕЛЬБУРГ”
フィンランド駅(Ⓜレーニン広場駅 Площадь Ленина)から郊外電車で「ペトロクレーパスチ(ピョートル要塞)」(Петрокрепость)まで行き、そこから船で。または
Ⓜディベンコ通り駅
(Улица Дыбенко)からバスでシュリッセルブルグまで行き、船で。

シュリッセルブルグ要塞「オレーシェク」
“ШЛИССЕЛЬБУРГСКАЯ КРЕПОСТЬ “ОРЕШЕК””
(中央海軍博物館・国立サンクト・ペテルブルグ歴史博物館分館) シュリッセルブルグ,
オレーシェク要塞
(Шлиссельбург,
крепость Орешек)
◷10:00〜17:00
(5月1日〜10月31日)
✆238-0679, 238-0511
(ガイドツアー予約)
◆ほとんど三角形の形をした9つの塔のある稜堡要塞は、ネヴァ川の水源ラドガ湖の石の多い小さい島にあり、16世紀ノヴゴロド人によって建設される。
1612年長い包囲の後、スウェーデン人は「オレーシェク」を占領しスウェーデン語の名前「ノーテブルグ」をつけた。
1702年ロシア軍は要塞を取り戻し、その後要塞はピョートル1世によってシュリッセルブルグ(鍵の町)と改名された。
18世紀―20世紀初頭ここには皇帝政治犯監獄があった(囚人の中には退位させられた皇帝イヴァン5世、ノヴィコフ、デカブリスト達がいた)。

シュリッセルブルグ要塞

「二対のホイールロック拳銃」
1760年代 ドレスデン(ガッチナ武器庫)

大コラール・ユダヤ教会
"БОЛЬШАЯ ХОРАЛЬНАЯ СИНАГОГА"
ⓘ *2-c10*
レールモントフ大通り2
(Лермонтовский пр., 2)

イスラム教回教寺院共同体
"СОБОРНАЯ МЕЧЕТЬ ОБЩИНЫ МУСУЛЬМАН"
ⓘ *1-h6, p.150*
クロンヴェルク大通り7
(Кронверкский пр., 7)

ダツァン・グンゼチョイネイ仏教寺院
"БУДДИЙСКИЙ ХРАМ ДАЦАН ГУНЗЭЧОЙНЭЙ"
p.152
プリモールスキー大通り91
(Приморский пр., 91)

使徒聖エカテリーナ・アルメニア教会
"АРМЯНСКАЯ АПОСТОЛЬСКАЯ ЦЕРКОВЬ СВ. ЕКАТЕРИНЫ"
ⓘ *2-j6, p.107*
ネフスキー大通り40－42
(Невский пр., 40–42)

聖エカテリーナ福音ルーテル派共同体
"ЕВАНГЕЛИЧЕСКО-ЛЮТЕРАНСКАЯ ОБЩИНА СВ. ЕКАТЕРИНЫ"
ⓘ *2-b3*
ヴァシーリー島, バリショイ(大)大通り1-a
(Большой пр. Васильевского острова, 1-а)

聖マリア教会福音ルーテル派教区
"ЕВАНГЕЛИЧЕСКО-ЛЮТЕРАНСКИЙ ПРИХОД ЦЕРКВИ СВ. МАРИИ"
ⓘ *2-i5*
バリシャヤ・カニューシェンナヤ通り8-a
(Большая Конюшенная ул., 8-а)

ロシア福音ルーテル派教会大主教管理局
"КАНЦЕЛЯРИЯ АРХИЕПИСКОПА ЕВАНГЕЛИЧЕСКО-ЛЮТЕРАНСКОЙ ЦЕРКВИ В РОССИИ"
✆310-2665
ネフスキー大通り22/24
(Невский пр., 22/24)

処女マリア昇天カトリック主教座教会
"КАТОЛИЧЕСКИЙ КАФЕДРАЛЬНЫЙ СОБОР УСПЕНИЯ ДЕВЫ МАРИИ"
第1赤軍通り11(1-я Красноармейская ул., 11)

新使徒教会
"НОВОАПОСТОЛЬСКАЯ ЦЕРКОВЬ"
レーニン大通り113
(Ленинский пр., 113)

ローマ・カトリック教会聖母マリア教区
"ПРИХОД ЛУРДСКОЙ БОГОМАТЕРИ РИМСКО-КАТОЛИЧЕСКОЙ ЦЕРКВИ"
ⓘ *3-c4*
コヴェンスキー横丁7
(Ковенский пер., 7)

聖エカチェリーナ・アレクサンドリースカヤ(ローマ・カトリック)教区
"ПРИХОД СВ. ЕКАТЕРИНЫ АЛЕКСАНДРИЙСКОЙ (РИМСКО-КАТОЛИЧЕСКАЯ)"
ⓘ *2-i6, p.106*
ネフスキー大通り32－34
(Невский пр., 32-34)

聖イエスの心(ローマ・カトリック)教会
"ЦЕРКОВЬ СВЯТЕЙШЕГО СЕРДЦА ИИСУСА (РИМСКО-КАТОЛИЧЕСКАЯ)"
バーブシキン通り57
(Ул. Бабушкина, 57)

聖スタニスラフ(ローマ・カトリック)教会 "ХРАМ СВ. СТАНИСЛАВА (РИМСКО-КАТОЛИЧЕСКИЙ)"
印刷工同盟通り22
(Ул. Союза Печатников, 22)

聖ミカエル・ロシア福音ルーテル派教区
"РУССКИЙ ЕВАНГЕЛИЧЕСКО-ЛЮТЕРАНСКИЙ ПРИХОД СВ. МИХАИЛА"

聖エカテリーナ教会

スレードヌィ(中)大通り18
(Средний пр., 18)
キリスト・バプテスト福音教会
"ЦЕРКОВЬ ЕВАНГЕЛЬСКИХ ХРИСТИАН-БАПТИСТОВ"
バリシャヤ・アジョールナヤ通り27
(Большая Озерная ул., 27)

聖エカテリーナ・スウェーデン・ルーテル派教会 "ШВЕДСКАЯ ЛЮТЕРАНСКАЯ ЦЕРКОВЬ СВ. ЕКАТЕРИНЫ"
ⓘ *2-i5*
マーラヤ・カニューシェンナヤ通り
(Малая Конюшенная ул., 1–3)

正教会

カザン主教座聖堂 "КАЗАНСКИЙ КАФЕДРАЛЬНЫЙ СОБОР"
ⓘ *2-i6, p. 104*
カザン広場2(Казанская пл., 2)

聖三位一体教会
(「クリーチとパスハ」)
"СВЯТО-ТРОИЦКАЯ ЦЕРКОВЬ
オブーホフスカヤ・オボローナ大通り235 (Пр. Обуховской Обороны, 235)

海の主教ニコライ聖堂
(ニコライ神現者) "МОРСКОЙ СОБОР СВЯТИТЕЛЯ НИКОЛАЯ ЧУДОТВОРЦА (НИКОЛО-БОГОЯВЛЕНСКИЙ)"
ニコライ通り1/3
(Никольская пл., 1/3)

ネフスキー古式分派沿岸共同体・至聖生神女教会
"ЦЕРКОВЬ ЗНАМЕНИЯ ПРЕСВЯТОЙ БОГОРОДИЦЫ НЕВСКОЙ СТАРООБРЯДЧЕСКОЙ ПОМОРСКОЙ ОБЩИНЫ"
カラヴァエフスカヤ通り16
(Караваевская ул., 16)

ニコライ・大オフチンスカヤ教会
"НИКОЛЬСКАЯ БОЛЬШЕОХТИНСКАЯ ЦЕРКОВЬ"
メタリスト大通り5
(Пр. Металлистов, 5)

使徒聖ペテロ・聖パウロ名称帝室記念正教会教区
"ПРАВОСЛАВНЫЙ ПРИХОД ИМПЕРАТОРСКОГО МЕМОРИАЛЬНОГО СОБОРА ВО ИМЯ СВЯТЫХ АПОСТОЛОВ ПЕТРА И ПАВЛА"
ⓘ *1-f8, p. 28*
ペトロパヴロフスカヤ要塞
(Петропавловская крепость)

聖イシドール教会

聖母マリア・ピスカリョフ教会教区
"ПРИХОД БЛАГОВЕЩЕНСКОЙ ПИСКАРЕВСКОЙ ЦЕРКВИ"
ピスカリョフスキー大通り41
(Пискаревский пр., 41)

聖イシドール教会
"СВЯТО-ИСИДОРОВСКАЯ ЦЕРКОВЬ"
リムスキー＝コルサコフ大通り24
(Пр. Римского-Корсакова, 24)

ウラジーミル至聖生神女イコン聖堂
"СОБОР ВЛАДИМИРСКОЙ ИКОНЫ БОГОМАТЕРИ"
ⓘ *3-a7, p. 139*
住所:ウラジーミル大通り20
(Владимирский пр., 20)

使徒アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌィ聖堂 "СОБОР АПОСТОЛА АНДРЕЯ ПЕРВОЗВАННОГО"
ⓘ *2-a4, p. 39*
ヴァシーリー島,6番線11(Васильевский остров, 6-я линия, 11)

聖使徒に準ずるウラジーミル公聖堂 "СОБОР СВЯТОГО РАВНОАПОСТОЛЬНОГО КНЯЗЯ ВЛАДИМИРА"
ⓘ *1-b8, p. 146*
ブローヒン通り26
(Ул. Блохина, 26)

聖三位一体聖堂"СОБОР СВЯТОЙ ЖИВОНАЧАЛЬНОЙ ТРОИЦЫ"
p. 154
イズマイロフ大通り7-a
(Измайловский пр., 7-а)

フョードルの生神女イコン聖堂
"СОБОР ФЕОДОРОВСКОЙ ИКОНЫ БОЖЬЕЙ МАТЕРИ"
タヴァールヌィ横丁1-a
(Товарный пер., 1-а)

スパソ＝プレオブラジェンスキー聖堂 "СПАСО-ПРЕОБРАЖЕНСКИЙ СОБОР"
ⓘ *3-b2, p. 138*
プレオブラジェンスカヤ広場1
(Преображенская пл., 1)

グトゥーエフ島神現祭教会
"ХРАМ БОГОЯВЛЕНИЯ ГОСПОДНЯ НА ГУТУЕВСКОМ ОСТРОВЕ"
ドヴィンスカヤ(ドヴィナ)通り2
(Двинская ул., 2)

主教ヴァシーリー大帝教会
"ХРАМ СВЯТИТЕЛЯ ВАСИЛИЯ ВЕЛИКОГО"
国民義勇軍通り22/2
(Пр. Народного Ополчения, 22/2)

ロメンスカヤのモスクワ府主教聖ペテロ教会
"ХРАМ СВЯТИТЕЛЯ ПЕТРА, МИТРОПОЛИТА МОСКОВСКОГО НА РОМЕНСКОЙ"
ロメンスカヤ通り12
(Роменская ул., 12)

神学者イオアン教会
"ХРАМ ИОАННА БОГОСЛОВА (ЛЕУШИНСКОЕ ПОДВОРЬЕ)"
ネクラーソフ通り31
(Ул. Некрасова, 31)

仏教寺院の仏像

仏教寺院

聖イオアン・クロンシュタット教会
"ХРАМ СВ. ПРАВЕДНОГО ИОАННА КРОНШТАДТСКОГО"
レスノイ大通り59,
(Лесной пр., 59)

預言者イリヤ教会
"ХРАМ ПРОРОКА ИЛИИ"
革命環状線75
(Шоссе Революции, 75)

A.I.ゲルツェン記念ロシア国立教育大学付属使徒ペテロ・パウロ教会
"ХРАМ АПОСТОЛОВ ПЕТРА И ПАВЛА (ДОМОВАЯ) ПРИ РОССИЙСКОМ ГОСУДАРСТВЕННОМ ПЕДАГОГИЧЕСКОМ УНИВЕРСИТЕТЕ ИМ. А.И. ГЕРЦЕНА"
ガローハヴァヤ通り18
(Гороховая ул., 18)

聖シメオンとアンナ教会 "ХРАМ СВ. ПРАВЕДНЫХ СИМЕОНА БОГОПРИИМЦА И АННЫ ПРОРОЧИЦЫ"
3–a4
マハヴァーヤ通り48
(Моховая ул., 48)

神の御業救世主教会 "ХРАМ СПАСА НЕРУКОТВОРНОГО ОБРАЗА"
カニューシェンナヤ(厩舎)広場1
(Конюшенная пл., 1)

大天使ミカエル教会(宮殿付属)
"ЦЕРКОВЬ АРХАНГЕЛА МИХАИЛА (ДОМОВАЯ)"
インジェニェールナヤ通り
(Инженерная ул., 4)

至聖生神女教会
"ЦЕРКОВЬ БЛАГОВЕЩЕНИЯ ПРЕСВЯТОЙ БОГОРОДИЦЫ"
プリモールスキー大通り79
(Приморский пр., 79)

至聖生神女マリア教会
"ЦЕРКОВЬ БЛАГОВЕЩЕНИЯ ПРЕСВЯТОЙ БОГОРОДИЦЫ"
4-k3
ヴァシーリー島,8番線67
(Васильевский остров, 8-я линия, 67)

深い悲しみを負った人の奇跡のイコン生神女教会 "ЦЕРКОВЬ БОЖИЕЙ МАТЕРИ – ЧУДОТВОРНОЙ ИКОНЫ ВСЕХ СКОРБЯЩИХ РАДОСТЬ ("С ГРОШИКАМИ")"
オブーホフスカヤ・オボローナ大通り24
(Пр. Обуховской Обороны, 24)

至聖生神女イコン教会
"ЦЕРКОВЬ ИКОНЫ БОГОМАТЕРИ ДЕРЖАВНОЙ"
ヴェチェラーノフ大通り105,2棟
(Пр. Ветеранов, 105, корп. 2)

聖十字架祭(コサック)教会
"ЦЕРКОВЬ ВОЗДВИЖЕНИЯ ЧЕСТНАГО И ЖИВОТВОРЯЩЕГО КРЕСТА ГОСПОДНЯ (КАЗАЧЬЯ)"
リーゴフスキー大通り128
(Лиговский пр., 128)

キリスト復活教会 "ЦЕРКОВЬ ВОСКРЕСЕНИЯ ХРИСТОВА"
オブヴォードヌィ運河川岸通り116
(Наб. Обводного канала, 116)

偉大な至聖生神女イコン教会
"ЦЕРКОВЬ ДЕРЖАВНОЙ ИКОНЫ БОГОМАТЕРИ"
文化大通り4-a(Пр. Культуры, 4-а)

モスク

至聖生神女イコン教会
"ЦЕРКОВЬ ИКОНЫ БОГОМАТЕРИ ВСЕХ СКОРБЯЩИХ РАДОСТЬ"
シュパレールナヤ通り35-a
(Шпалерная ул., 35-а)
至聖生神女庇護祭教会
"ЦЕРКОВЬ ПОКРОВА ПРЕСВЯТОЙ БОГОРОДИЦЫ (БЕЛОКРИННИЦКОГО СОГЛАСИЯ)"
アレクサンドル農場大通り20
(Пр. Александровской Фермы, 20)

国立音楽院付属至聖生神女誕生祭教会
"ЦЕРКОВЬ РОЖДЕСТВА ПРЕСВЯТОЙ БОГОРОДИЦЫ (ДОМОВАЯ) ПРИ ГОСУДАРСТВЕННОЙ КОНСЕРВАТОРИИ"
劇場広場3(Театральная пл., 3)

聖イオアン預言者誕生教会
"ЦЕРКОВЬ РОЖДЕСТВА СВ. ИОАННА ПРЕДТЕЧИ (ЧЕСМЕНСКАЯ)"
p. 161

整形大学の至生神女像 *(p.150)*

レンソヴィエト通り12
(Ул. Ленсовета, 12)

石島の聖イオアン預言者誕生教会
"ЦЕРКОВЬ РОЖДЕСТВА СВ. ИОАННА ПРЕДТЕЧИ НА КАМЕННОМ ОСТРОВЕ"
p. 152
石島大通り83
(Каменноостровский пр., 83)

全ロシア奇跡者モスクワ府主教聖ペテロ教会 "ЦЕРКОВЬ СВЯТИТЕЛЯ ПЕТРА, МИТРОПОЛИТА МОСКОВСКОГО, ВСЕЯ РОССИИ ЧУДОТВОРЦА"
スターチカ(ストライキ)大通り208
(Пр. Стачек, 208)

使徒ペトロ教会
"ЦЕРКОВЬ АПОСТОЛА ПЕТРА"
ラフチンスキー大通り94
(Лахтинский пр., 94)

シュヴァーロフ墓地聖アレクサンドル・ネフスキー大公教会
"ЦЕРКОВЬ СВ. БЛАГОВЕРНОГО ВЕЛИКОГО КНЯЗЯ АЛЕКСАНДРА НЕВСКОГО НА ШУВАЛОВСКОМ КЛАДБИЩЕ"
ヴィーボルグ環状線106
(Выборгское шоссе, 106)

聖大殉教者ゲオルギウス教会
"ЦЕРКОВЬ СВ. ВЕЛИКОМУЧЕНИКА ГЕОРГИЯ ПОБЕДОНОСЦА"

大コラール・ユダヤ教会

モスクワ環状線3
(Московское шоссе, 3)

聖大殉教者ゲオルギウス教会(クプチノ)"ЦЕРКОВЬ СВ. ВЕЛИКОМУЧЕНИКА ГЕОРГИЯ ПОБЕДОНОСЦА В КУПЧИНЕ"
名誉大通り45
(Пр. Славы, 45)

聖大殉教者ドミートリー・ソルンスキー教会 "ЦЕРКОВЬ СВ. ВЕЛИКОМУЧЕНИКА ДИМИТРИЯ СОЛУНСКОГО"
ウシンスキー通り5,1棟
(Ул. Ушинского, 5, корп. 1)

聖大殉教者ドミートリー・ソルンスキー教会(コロミャーギ)
"ЦЕРКОВЬ СВ. ВЕЛИКОМУЧЕНИКА ДИМИТРИЯ СОЛУНСКОГО В КОЛОМЯГАХ"
第1ニキーチン通り1
(1-я Никитинская ул., 1)

聖大殉教者・治癒者パンテレイモン教会
"ЦЕРКОВЬ СВ. ВЕЛИКОМУЧЕНИКА И ЦЕЛИТЕЛЯ ПАНТЕЛЕИМОНА"
フェルムスコエ環状線38
(Фермское шоссе, 38)

聖大殉教者・治癒者パンテレイモン教会
"ЦЕРКОВЬ СВ. ВЕЛИКОМУЧЕНИКА И ЦЕЛИТЕЛЯ ПАНТЕЛЕИМОНА"
ⓘ *2-m3, p.137*
ペステリ通り2-a
(Ул. Пестеля, 2-а)

セラフィム墓地の聖セラフィム・サロフ教会
"ЦЕРКОВЬ СВ. ПРЕПОДОБНОГО СЕРАФИМА САРОВСКОГО НА СЕРАФИМОВСКОМ КЛАДБИЩЕ"
セレブリャコフ横丁1
(Серебряков пер., 1)

修道院

ノヴォジェーヴィチー女子修道院
"ВОСКРЕСЕНСКИЙ НОВОДЕВИЧИЙ ЖЕНСКИЙ"
モスクワ大通り100
(Московский пр., 100)

イオアン宗務院直属女子修道院
"ИОАННОВСКИЙ СТАВРОПИГИАЛЬНЫЙ ЖЕНСКИЙ"
ⓘ *1-d1*
カルポフカ川岸通り45
(Наб. реки Карповки, 45)

聖三位一体アレクサンドル・ネフスキー大修道院
"СВЯТО-ТРОИЦКАЯ АЛЕКСАНДРО-НЕВСКАЯ ЛАВРА"
ⓘ *3-h10, p. 142*
修道院川岸通り1
(Наб. реки Монастырки, 1)

オプチナ・プスティナ・ウスペンスコエ(昇天)寮付教会
"УСПЕНСКОЕ ПОДВОРЬЕ ОПТИНОЙ ПУСТЫНИ"
ⓘ *4-m7*
シュミット中尉川岸通り27/2
(Наб. Лейтенанта Шмидта, 27/2)

歴史情報

全宗教の都

18世紀までロシアは純粋な正教国であり、全国民は(自発的であれ、強制的であれ)正教儀礼に従い、洗礼を受けなければならなかった。信教の自由に関する法(1702年)はピョートル1世によるヨーロッパから専門家のロシアへの招聘と関連がある。ピョートルは彼らにまず信教の自由を保障した。

ペテルブルグで最初に合法化されたのはルーテル派教会であり、ペトロパヴロフスカヤ要塞内に小さな木造教会「聖アンナ教会」が建立された(1704年)。ペテルブルグのカトリック教区に関する最初の記述はほぼ時を同じくしている(1710年にピョートル1世はカトリック教徒である、建築家ドメニコ・トレツィーニの息子の洗礼父となった。これに関しては聖エカテリーナ教区に関する本の中で書かれている)。同年1710年に宮廷庭師ペーター・ファン・デル・ガルはギリシャ人村(ミリオンナヤ通り)の地角を教区に譲り、直ちにこの地にペテルブルク初のカトリック寺院が建立された。

1763年7月にエカチェリーナ2世は「ロシアに住み着いた全民族に対する教会儀礼の自由」に関する勅令を発布した。2つの首都では様々な宗派の教会建立のため、場所があてがわれ、ネフスキー大通りには石造のカトリック教会、アルメニア教会が建立された。

19世紀の帝国の拡大、領土拡大により、首都に他宗教の代表部設立が急務になった。アレクサンドル3世は最初のシナゴーグの建立を許可した。ニコライ2世の治世にモスク、仏教寺院が建立された。このようにして、ペテルブルクは20世紀初頭までに世界最大宗教であるキリスト教、ユダヤ教、イスラム教、仏教の代表部、寺院を有する首都へと変貌を遂げたのである。

最初の古プロテスタント墓地であるスモレンスコエ・ルーテル墓地は18世紀半ばに建立された(ヴァシーリー島、スモレンカ川岸通り、27)。この墓には学者であるB.ヤコビ、V.バルトールト、F.ブラント、P.P.スーシュキン、V.ドクチャエフ、中央アジアの研究者P.コズロフ、建築家V.シュレーター、オデッサの建設者H.ド・リバス将官、政治家K.ネッセリローデ、E.エンゲリガルト、A.ベタンクール等が眠っている。最初の(ヴィーボルグ)カトリック墓地(アルセナーリナヤ通り、8)建立は1839年のニコライ1世の娘とロイヒテンベルグ公爵の結婚と関係がある。1850年代に作られた墓にはカトリック寺院、病院、養老院が含まれている。ここにはベヌア家とポトツキー伯爵家の墓地があった。この墓地にはペテルブルクの出版者A.プリュシャル、芸術家ヨセフ・イヴァーノヴィッチ・シャルルマーニュ他が葬られた(革命後、全ての墓が喪失した)。1939年5月にこの墓地は解体され、高名な芸術家F.ブルーニ、K.ダンザス(プーシキンの付添い人)、水彩画家L.プレマッツィを含む4つの墓碑はアレクサンドル・ネフスキー修道院の芸術大家墓地に移された。

i 地図1-4　通り名

あ

アーニチコフ橋 **2-m7**
青い橋 **2-f7**
赤い橋 **2-g7**
アジョールヌィ横丁 **3-d4**
アストラハンスカヤ通り **1-k5**
アプチェーカルスカヤ川岸通り **1-i1**
アプチェーカルスキー大通り **1-g1**
アプチェーカルスキー横丁 **2-i3**
アプチェーカルスキー橋 **1-i2**
アプラクシン横丁 **2-i9**
アルチレリースカヤ通り **3-b3**
アレクサンドル公園 **1-f1**
アレクサンドル庭園 **2-f5**
アレクサンドル・ネフスキー橋 **3-j8**
アレクサンドル・ネフスキー広場 **3-h9**
アレクサンドル・ネフスキー通り **3-h8**
アンタネンコ横丁 **2-f8**

い

イェフパトーリスキー横丁 **1-k4**
イオアン橋 **1-g8**
石島大通り **1-g7**
石橋 **2-h8**
イサーク広場 **2-f7**
イスポルコーモフスカヤ通り **3-g8**
イタリア(イタリヤンスカヤ)通り **2-m6**
印刷工同盟通り **2-b10**
インジェニェールナヤ通り **2-k7**

う

「ヴァシーリー島」庭園 **4-i7**
ヴァスターニヤ(蜂起)通り **3-c5**
ヴァスターニヤ(蜂起)広場 **3-d6**
ヴィーボルスカヤ通り **1-m3**
ヴィレエンスキー横丁 **3-e3**
ヴヴェジェンスカヤ通り **1-d6**
ヴェセーリナヤ通り **4-f8**
上の白鳥橋 **2-j2**
ヴォスコフ通り **1-e5**
ヴォズネセンスキー橋 **2-f9**
ヴォズネセンスキー大通り **2-f10**
ヴォルホフ横丁 **2-b2**
海の名誉大通り **4-e9**
ウラジーミル大通り **3-a6**
ウラジーミル広場 **3-a7**
ウラリスカヤ通り **4-j1**
ウラル橋 **4-k2**

え

英国大通り **2-a9**
英国川岸通り **2-c6**
エフィーモフ通り **2-h10**

お

オーストリア広場 **1-g5**
オストロウモフ通り **4-f6**
オストロフスキー広場 **2-k7**
オドエフスキー通り **4-e2**
オフィツェールスキー横丁 **1-a6**
オポチーニン庭園 **4-e9**
オポチーニン通り **4-e6**
オラニエンバウムスカヤ
(オラニエンバウム)通り **1-c4**
オルジナールナヤ通り **1-e3**
オレンブルスカヤ通り **1-k5**

か

ガーザヴァヤ通り **1-b2**
カーシン橋 **2-c10**
カーメンナオストロフスキー
(石島)大通り **1-g7**
カーメンヌィ(石)橋 **2-h8**
カールポフカ川 **1-g2**
カールポフスキー(カルポフ)橋 **1-d1**
海軍省運河 **2-b8**
海軍省大通り **2-e6**
海軍省川岸通り **2-e5**
カヴァレルガーツルカヤ通り **3-h2**
ガヴァンスカヤ通り **4-e7**
ガガーリン通り **2-m1**
カザールメンヌィ横丁 **1-i3**
カザンスカヤ通り **2-h7**
カザンスキー橋 **2-i6**
ガッチンスカヤ(ガッチナ)通り **1-c4**
カトフスキー通り **1-i4**
カナレーチナヤ通り **4-g8**
カニューシェンヌィ(厩舎)橋 **2-i4**
カニューシェンナヤ(厩舎)広場 **2-i4**
カムスカヤ通り **4-h2**
カラヴァンナヤ通り **2-m6**
カラコーリナヤ通り **3-b7**
カラブレストライーチェリ
(造船工)通り **4-b3**
カラブレストライーチェリ
(造船工)橋 **4-b1**
カルタシヒン通り **4-f7**
ガレールナヤ通り **2-b7**
ガレールヌィ横丁 **4-c6**
ガローハヴァヤ通り **2-g7**
カローメンスカヤ通り **3-b8**
ガングツカヤ橋 **2-m3**

き

キーロチナヤ通り **3-b2**
キム大通り **4-g2**
キリーロフスカヤ通り **3-g5**
キルピーチヌィ横丁 **2-g6**
厩舎橋 **2-i4**
厩舎広場 **2-i4**
宮殿川岸通り **2-h3**
宮殿橋 **2-f4**
宮殿広場 **2-g4**
教授イヴァーシェンツォフ通り **3-f9**
銀行橋 **2-i7**
銀行横丁 **2-i8**

く

クーイブィシェフ通り **1-i6**
クズニェーチヌィ横丁 **3-b8**
クトゥーゾフ川岸通り **2-m1**
クラースヌィ・テクスチーリシク通り **3-i4**
グラジュダンスカヤ通り **2-f9**
クラスナセーリスカヤ通り **1-c5**
クラスヌィ・クルサント通り **1-a6**
クラピヴヌィ横丁 **1-k1**
クリニーチェスカヤ通り **1-m6**
グリフツォーフ横丁 **2-g8**
グリボエードフ運河 **2-i7**
クリューコフ運河 **2-c9**
グリンカ通り **2-d10**
グレーチェスキー大通り **3-d5**
グレナデルスカヤ通り **1-k2**
グレナデルスキー橋 **1-j2**
クレノーヴァヤ通り **2-m5**
クレメンチューグスカヤ通り **3-f10**
グロードネンスキー横丁 **3-d3**
クロポトキン通り **1-e5**
クロンヴェルク海峡 **1-f8**
クロンヴェルク川岸通り **1-e8**
クロンヴェルスカヤ通り **1-f5**
クロンヴェルスキー大通り **1-d7**
クロンヴェルスキー橋 **1-e9**

け

芸術広場 **2-j5**
劇場広場 **2-d9**
建築家ロッシ通り **2-k8**
ゲスレロフスキー(ゲスレロフ)橋 **1-d1**

こ

コーヴェンスキー横丁 **3-c4**
コクーシュキン橋 **2-g9**
コサヤ・リーニヤ(線) **4-i8**
コジェヴェンナヤ・リーニヤ **4-f10**
コノグヴァルデイスキー並木通り **2-c7**
コノグヴァルデイスキー横丁 **2-c7**
コミッサル・スミルノフ通り **1-m4**
コルピンスカヤ(コルピナ)通り **1-c5**
コルプスナヤ通り **1-a4**
コロレンコ通り **3-b3**
コンスタンチン・ザスローノフ通り **3-b10**
ゴンチャールナヤ通り **3-e7**
コンナヤ通り **3-f7**

さ

ザーゴロドヌィ大通り **2-k10**
サーハルヌィ横丁 **1-k5**
サーブリンスカヤ通り **1-e6**
サドーヴァヤ通り **2-j7**
ザネフスキー大通り **3-k8**
サピョールヌィ横丁 **3-c3**
ザミャーチン横丁 **2-c6**
ザヤチー(兎)横丁 **3-g3**
サラートフスカヤ通り **1-k5**
サンプソニエフスキー
(サンプソン)庭園 **1-m2**
サンプソニエフスキー
(サンプソン)橋 **1-j6**

し

ジーヴェンスカヤ通り **1-g5**
シーリン橋 **1-e1**
ジェーツカヤ通り **4-h9**
ジェグチャールナヤ通り **3-f5**
ジェグチャールヌィ横丁 **3-h4**
シエズジンスカヤ通り **1-c7**
シェフチェンコ通り **4-f6**
シェルバコフ横丁 **2-m8**
ジェレズナヴォーツカヤ通り **4-f1**
シキペルスキー水路 **4-c6**
シキペルスキー庭園 **4-e9**
シキペルナヤ運河 **4-c7**
獅子橋 **2-d9**
ジダーノフ通り **1-a7**
下の白鳥橋 **2-k4**
シノープスカヤ川岸通り **3-h8**
シャムシェフ通り **1-c4**
ジャンブール横丁 **2-k10**
ジューコフ通り **3-c5**
シュパレールナヤ通り **3-h1**
シュミット中尉橋 **2-b6**
小オフチンスキー大通り **3-k7**
シュミット中尉川岸通り **4-k8**
小カニューシェンヌィ(厩舎)橋 **2-j4**
小グレベツカーヤ通り **1-b6**
小ネヴァ川 **2-b1**
小ネフカ川 **1-a9**
小パサーツカヤ通り **1-i6**
小プシカールスカヤ通り **1-e5**
小マネートナヤ通り **1-h5**
植物園 **1-h1**
新海軍省運河 **2-a7**
新スモレンスカヤ川岸通り **4-c1**

す

スィートニンスカヤ通り **1-e6**
スヴェチノイ横丁 **3-b9**
ズヴェリンスカヤ通り **1-c7**
スヴォーロフ大通り **3-e6**
スヴォーロフ広場 **2-j2**
スタハノフツィ通り **3-m8**
スタラルースカヤ通り **3-g6**
ストレミャンナヤ通り **3-b6**
スパースキー横丁 **2-g8**
スモーリヌィ大通り **3-j2**
スモリャチコフ通り **1-k1**
スモレンカ川 **4-c2**
スモレンスカヤ川岸通り **3-k1**
スモレンスキー橋 **4-i2**
スレードヌィ(中)大通り **4-j5**

せ

セミョーノフスキー
(セミョーノフ)橋 **2-i10**
センナヤ広場 **2-g9**
センノイ橋 **2-g9**

そ

ゾーロギーチェスキー横丁 **1-d9**
第2ソヴェツカヤ通り **3-d6**
第3ソヴェツカヤ通り **3-e6**
第4ソヴェツカヤ通り **3-f6**
第5ソヴェツカヤ通り **3-f6**
第6ソヴェツカヤ通り **3-f5**
第7ソヴェツカヤ通り **3-f5**
第8ソヴェツカヤ通り **3-f4**
第9ソヴェツカヤ通り **3-f4**
第10ソヴェツカヤ通り **3-g4**

た

ダーリ通り **1-b1**
大オフチンスキー橋
(ピョートル大帝橋) **3-k3**
大学川岸通り **2-c5**
大厩舎通り **2-h5**
大厩舎橋 **2-h3**
大サンプソニエフスキー
(サンプソン)大通り **1-k3**
大ゼレーニナ通り **1-a3**
大ネヴァ川 **2-d5, 4-k9**
大ネフカ川 **1-j3**
大パサーツカヤ通り **1-h5**
大プシカールスカヤ通り **1-c6**
大ボジヤチェスカヤ通り **2-e10**
大マネートナヤ通り **1-h4**
大モスクワ通り **3-a8**
大ラズナチンナヤ通り **1-a4**
タヴリーダ庭園 **3-f1**
タヴリーチェスカヤ
(タヴリーダ)通り **3-g2**
タタールスキー横丁 **1-d7**
タルゴーヴィ橋 **2-c10**
タルゴーヴィ横丁 **2-j9**

ち

チェーホフ通り **3-b4**
チェルヌィシェフスキー大通り **3-c1**
チェルヌィシェフスキー庭園 **3-f6**
チェルヌィホーフスキー通り **3-c10**
チェルノレツキー横丁 **3-g9**
チカーロフスキー
(チカーロフ)大通り **1-b4**
チャイコフスキー通り **3-b1, 2-m2**
チャパーエフ通り **1-i5**
中書記官通り **2-e9**
中ガヴァンスキー大通り **4-f8**

て

デカブリスト通り **2-d9**
デカブリスト橋 **2-c9**
デカブリスト(元老院)広場 **2-e6**
デミードフ橋 **2-g8**
テレージュナヤ通り **3-g9**

と

トゥーチコフ横丁 **2-b2**
トゥーチコフ橋 **2-a1, 1-a9**
ドゥームスカヤ通り **2-i7**
トゥーリスカヤ通り **3-i2**
トヴェールスカヤ通り **3-h1**
ドストエフスキー通り **3-a9**
ドブロリューボフ大通り **2-e1**
トランスポルトヌィ横丁 **3-c10**
取引所橋 **2-e2**
取引所広場 **2-2**
取引所線(リーニヤ) **2-c2**
トロイツキー(三位一体)橋 **1-h9**
トロイツカヤ(三位一体)広場 **1-h8**

な

夏の庭園 **2-k3**
ナヒーモフ通り **4-c4**
ナリーチナヤ通り **4-d3**
ナリーチヌィ横丁 **4-d5**
ナリーチヌィ橋 **4-d2**

ね

ネイシュロツキー横丁 **1-m2**
ネクラーソフ通り **3-c4**
ネステロフ横丁 **1-c7**
ネフスキー大通り **2-g5, 3-e7**

の

ノヴォチェルカスキー大通り **3-m5**
ノヴゴロツカヤ通り **3-h5**

は

ハーリコフスカヤ通り **3-e8**
バーロチナヤ通り **1-a1**
バーロチヌィ橋 **1-a1**
バクーニン大通り **3-f7**
白鳥運河川岸通り **2-k3**
バスコフ横丁 **3-c3**
パラードナヤ通り **3-e3**
バラヴァーヤ通り **3-a10**
バリシャヤ・カニューシェンナヤ
(大厩舎)通り **2-h5**
バリシャヤ・マルスカーヤ
(大海)通り **2-g6**
バリショイ(大)大通り,
ヴァシーリー島 **2-b4, 4-i7, 2-b4**
バリショイ(大)大通り,
ペトログラツカヤ・ストラナー **1-b7**
バリショイ・カニューシェンヌィ
(大厩舎)橋 **2-h3**
バルマレーエフ通り **1-d3**
ハルラーモフ橋 **2-e10**
パンテレイモン橋 **2-k4**

ひ

ピーサレフ通り **2-a9**
ピオネールスカヤ(ピオネール)通り **1-b6**
ピョートル川岸通り **1-i18**
ピラゴフスカヤ川岸通り **1-k7**
ピロゴフ横丁 **2-e8**
ピンスキー横丁 **1-i5**

ふ

ファナールナヤ通り **3-e4**
ファナールヌィ橋 **2-e8**
フィンリャンツキー
(フィンランド)大通り **1-k6**
プーシキン通り **3-c7**
プードジュスカヤ通り **1-b3**
フォーキン通り **1-k3**
フォンタンカ川 **2-m4**
フォンタンナヤ通り **3-e4**
フォンタンヌィ横丁 **2-e8**
武器工フョードロフ通り **2-m2**
プシカールスキー横丁 **1-e5**
プラーチェチヌィ橋 **2-k1**
プラーチェチヌィ横丁 **2-d8**
プラヴダ通り **2-m10**
フラポヴィツキー橋 **2-a8**
プリバルチースカヤ広場 **4-b4**
プルータロフ通り **1-e3**
フルシュタッツカヤ通り **3-b1**
「プルトゥキー」庭園 **3-e4**
プロヴィアンツカヤ通り **1-d8**
ブローヒン通り **1-b7**
冬の小運河 **2-h4**
文学家通り **1-f1**

へ

ベーリング通り **4-a3**
ベーリンスキー通り **3-a4**
ベーリンスキー橋 **2-m5**
平和通り **1-f5**
ペステリ通り **3-a2, 2-m4**
ペトログラーツカヤ川岸通り **1-j4**
ペトロザヴォーツカヤ通り **1-b3**
ペトロパヴロフスキー橋 **1-f2**
ペニコヴァヤ通り **1-i7**
ペフチェスキー橋 **2-h4**
ペフチェスキー横丁 **1-h5**
ヘルソンスカヤ通り **3-g7**
ヘルソンスキー横丁 **3-h7**
ペレクープノイ横丁 **3-g7**
ペレヴォズノイ横丁 **3-m7**

ほ

ポヴァールスコイ横丁 **3-b7**
蜂起通り **3-c5**
蜂起広場 **3-d6**
ポーロゾフ通り **1-d3**
ポジヤチェスキー橋 **2-e9**
ポチェルーエフ橋 **2-c8**
ポチタムツカヤ
(中央郵便局)通り **2-d7**
ポチタムツキー横丁 **2-d7**
ポチョムキン通り **3-e1**
ボトキンスカヤ通り **1-m5**
ポドコヴィーロフ通り **1-d3**
ポドレーゾフ通り **1-d3**
ホフリャコフ通り **3-f10**
ポポフ教授通り **1-e1**
ポルターフスカヤ通り **3-e8**
ボロジンスカヤ通り **2-j10**

ま

マーラヤ・カニューシェナヤ
(小厩舎)通り **2-i5**
マーラヤ・マルスカーヤ(小海)通り **2-f6**
マールィ(小)大通り,
ヴァシーリー島 **4-i4**
マールィ(小)大通り,
ペトログラツカヤ・ストラナー **1-b5**
マカーロフ川岸通り **2-c2**
マステルスカヤ通り **2-b10**
マスリャンヌィ運河 **4-j9**
マトヴェーエフ横丁 **2-c9**
マネージュナヤ広場 **2-m6**
マネージュヌィ横丁 **3-c2**
マハヴァーヤ通り **3-a2**
マヤコフスキー通り **3-c5**
マラート通り **3-b8**
マルキン通り **1-e6**
マルスカーヤ川岸通り **4-f4**
マンチェゴールスカヤ通り **1-b6**

み

ミチマンスカヤ通り **4-a2**
ミチューリンスカヤ(ミチューリン)通り **1-p6**
緑の橋 **2-h6**
ミトロポリーチ(布主教)庭園 **3-g10**
ミリオンナヤ通り **2-h3**
ミルゴローツカヤ通り **3-f9**

む

ムィーチンスカヤ通り **3-f6**
ムィートニンスキー横丁 **1-d8**
ムチノイ横丁 **2-h8**

め

メージキ大通り **1-f1**
メンデレーエフ線(リーニヤ) **2-d3**

も

モイカ川 **2-i3, 2-b8**
モイセーンコ通り **3-i4**
モスクワ大通り **2-g10**
モナスティルカ(修道院)川 **3-g10**

や

ヤーブラチコフ通り **1-c8**

ゆ

ユスーポフ庭園　**2-g10**

ら

ラヴィースキー横丁 **1-k1**
ラジーシェフ通り **3-d4**
ラジェイナ・ポーリスカヤ通り **1-a3**
ラジエージャヤ通り **3-a9**
ラストレッリ広場 **3-i1**
ラフチンスカヤ通り **1-c3**

り

リーゴフスキー大通り **3-d5**
リーザ・チャイキナ通り **1-d6**
1番線(リーニヤ)**2-c4**
2—3番線(リーニヤ) **2-d4**
4—5番線(リーニヤ) **2-d4**
6-7番線(リーニヤ) **2-a5**
8-9番線(リーニヤ) **2-a5**
10-11番線(リーニヤ) **4-m5**
12-13番線(リーニヤ) **4-k5**
14-15番線(リーニヤ) **4-k5**
16-17番線(リーニヤ) **4-j5**
18-19番線(リーニヤ) **4-j6**
20-21番線(リーニヤ) **4-j6**
22-23番線(リーニヤ) **4-i6**
24-25番線(リーニヤ) **4-i7**
26-27番線(リーニヤ) **4-h7**
28-29番線(リーニヤ) **4-h7**
リチェイヌィ大通り **3-a3, 1-m10**
リチェイヌィ橋 **1-m8**
リムスキー＝コルサコフ大通り **2-d10**

る

ルィーバツカヤ通り **1-c5**
ルィレーエフ通り **3-c2**
ルビンシュテイン通り **2-m9, 3-a6**
ルミャンツェフ庭園 **2-c5**

れ

レヴァショフスキー
(レヴァショフ)大通り **1-d2**
レーニン通り **1-d4**
レーピン通り **2-b3**
レールモントフ大通り **2-b10**
レシュトゥホフ橋 **2-j9**
レスノイ大通り **1-m1**
レスプブリカンスカヤ通り **3-k6**
レフ・トルストイ広場 **1-f3**
レフ・トルストイ通り **1-f3**
レントゲン通り **1-g3**

ろ

労働広場 **2-c7**
ロプシンスカヤ通り **1-b5**
ロモノーソフ橋 **2-k9**
ロモノーソフ通り **2-j8**
ロモノーソフ広場 **2-k8**

*五十音順

各地図の掲載範囲
(p.232-239)

市内地図掲載範囲(p.352)

市内地図(p.352)

島

アプチェーカルスキー島
ヴァシーリー島
エラーギン島
海軍省島
グトゥエフスキー島
クレストーフスキー島
ザヤチー島
白島
スパースキー島
デカブリスト島
ペトログラーツキー島
ペトロフスキー島
マチーソフ島

橋

アレクサンドル・ネフスキー橋
石島橋
カンテミロフスキー橋
宮殿橋
グレナデルスキー橋
サンプソニエフスキー橋
シュミット中尉橋
大オフチンスキー橋
トゥーチコフ橋
取引所橋
トロイツキー橋
フィンランド橋
リチェイヌィ橋

川岸通り

英国川岸通り
アプチェーカルスカヤ川岸通り
アルセナーリナヤ川岸通り
ヴィーボルスカヤ川岸通り
宮殿川岸通り
クトゥーゾフ川岸通り
ペトログラーツカヤ川岸通り
ピラゴフスカヤ川岸通り
ロベスピエール川岸通り
スヴェルドロフスカヤ川岸通り
シノプスカヤ川岸通り
スモーリナヤ川岸通り

大通り

石島大通り
ヴォズネセンスキー大通り
ウシャコフスカヤ大通り
コンドラチエフスキー大通り
ザーゴロドヌィ大通り
ザネフスキー大通り
サンプソニエフスキー大通り
小オフチンスキー大通り
スレードヌィ(中)大通り
ドブロリューボフ大通り
ネフスキー大通り
プリモルスキー大通り
マルスコイ大通り
メージコフ大通り
モスクワ大通り
リージュスキー大通り
リチェイヌィ大通り
レスノイ大通り

庭園・公園

アレクサンドル公園
沿海の勝利の公園
植物園
タヴリーダ庭園
夏の庭園
文化と憩いの中央公園

3
ホテル「ネヴァ」
ГОСТИНИЦА "НЕВА"
チャイコフスキー通り
ул. Чайковского
フルシュタッツカヤ通り
Фурштатская ул.
聖アンナ教会
ЦЕРКОВЬ СВ. АННЫ
コンスタンチン・タチキンバレエ劇場
ТЕАТР БАЛЕТА КОНСТАНТИНА ТАЧКИНА
劇場「リツェジェイ」
ТЕАТР "ЛИЦЕДЕИ"
チェルヌィシェフスカヤ
ЧЕРНЫШЕВСКАЯ
タヴリーダ宮殿
ТАВРИЧЕСКИЙ ДВОРЕЦ
タヴリーダ庭園
ТАВРИЧЕСКИЙ САД
S.A.エセーニン像
ПАМЯТНИК С.А. ЕСЕНИНУ
キーロチナヤ通り
Кирочная ул.
A.V.スヴォーロフ博物館
МУЗЕЙ А.В. СУВОРОВА
シュパレールナヤ
Шпалерная ул.
ホテル「スモリニンスカヤ」
ГОСТИНИЦА "СМОЛЬНИНСКАЯ"
ホテル「メルクーリー」
ГОСТИНИЦА "МЕРКУРИЙ"
トヴェールスカヤ通り
Тверская ул.
ラストレッリ広場
ПЛ.РАСТРЕЛЛИ
スモーリヌイのアンサンブル
АНСАМБЛЬ СМОЛЬНОГО
スモーリヌイ単科大学
СМОЛЬНЫЙ ИНСТИТУТ
歴史博物館「スモーリヌイ」
ИСТОРИЧЕСКИЙ МУЗЕЙ "СМОЛЬНЫЙ"
P.K.コズロフの家博物館
МУЗЕЙ-КВАРТИРА П.К. КОЗЛОВА
スモーリヌイ大通り
Смольный пр.
トゥーリスカヤ通り
Тульская ул.
大オフチンスキー橋（ピョートル大帝橋）
БОЛЬШЕОХТИНСКИЙ МОСТ
スパソ-プレオブラジェンスキー聖堂
Спасо-Преображенский Собор
ペステリ通り
ул. Пестеля
マネージュヌイ横丁
Манежный пер.
ルイレーエフ通り
ул. Рылеева
グロードネンスキー横丁
Гродненский пер.
サピョールヌイ横丁
Саперный пер.
バスコフ横丁
Басков пер.
ホテル「ルーシ」
ГОСТИНИЦА "РУСЬ"
ボリショイ人形劇場
БОЛЬШОЙ ТЕАТР КУКОЛ
聖シメオンと聖アンナ教会
Церковь Симеона и Анны
ベーリンスキー通り
ул. Белинского
音楽博物館
МУЗЕЙ МУЗЫКИ
劇場「ナ・リチェイナム」
ТЕАТР "НА ЛИТЕЙНОМ"
シェレメーチェフ宮殿
ШЕРЕМЕТЕВСКИЙ ДВОРЕЦ
A.A.アフマートヴァ博物館
МУЗЕЙ А.А. АХМАТОВОЙ
N.A.ネクラーソフの家博物館
МУЗЕЙ-КВАРТИРА Н.А. НЕКРАСОВА
ул. Некрасова
アスコリド・マカーロフバレエ劇場
ТЕАТР БАЛЕТА АСКОЛЬДА МАКАРОВА
コーヴェンスキー横丁
Ковенский пер.
ルールドの生神女教会
Костел Божией Матери Лурдской
ジューコフ通り
ул. Жуковского
ЛИТЕЙНЫЙ ПРОСПЕКТ
ул. ВОССТАНИЯ
ЛИГОВСКИЙ ПР.
ヴィレンスキー横丁
Виленский пер.
ネクラーソフ通り
アジョールヌイ横丁
Озерный пер.
庭園「プルドゥキー」
САД "ПРУДКИ"
N.A.ネクラーソフ像
ПАМЯТНИК Н.А. НЕКРАСОВУ
大コンサートホール「オクチャブリスキー」
БОЛЬШОЙ КОНЦЕРТНЫЙ ЗАЛ "ОКТЯБРЬСКИЙ"
ГРЕЧЕСКИЙ ПР.
9-я Советская ул.
8-я Советская ул.
7-я Советская ул.
6-я Советская ул.
5-я Советская ул.
4-я Советская ул.
3-я Советская ул.
2-я Советская ул.
СУВОРОВСКИЙ ПРОСПЕКТ
Кирочная ул.
Дегтярный пер.
モイセーエンコ通り
ул. Моисеенко
10-я Советская ул.
アリルーエフの家博物館
МУЗЕЙ-КВАРТИРА АЛЛИЛУЕВЫХ
グルジア教会
ГРУЗИНСКАЯ ЦЕРКОВЬ
スタラルースカヤ通り
Старорусская ул.
N.G.チェルヌィシェフスキー記念庭園
САД ИМ. Н.Г. ЧЕРНЫШЕВСКОГО
バクーニン大通り
пр. Бакунина
ネヴァ川
НЕВА
СИНОПСКАЯ НАБ.
レスプブリカンスカヤ通り
Республиканская ул.
聖生神女昇天（ウスペーニエ）教会
ХРАМ УСПЕНИЯ ПРОСВЯТОЙ БОГОРОДИЦЫ
ペレヴォズノイ横丁
Перевозной пер.
ノヴォチェルカースカヤ
НОВОЧЕРКАССКАЯ
Новочеркасский проспект
Малоохтинский проспект
ネフスキー大通り
ラディソンSASロイヤルホテル
РЭДИССОН САС РОЙЯЛ ОТЕЛЬ
シェラトン・ネフスキー・パラス・ホテル
ШЕРАТОН НЕВСКИЙ ПАЛАС ОТЕЛЬ
ヴァスターニヤ広場
ПЛ. ВОССТАНИЯ
НЕВСКИЙ ПР.
マヤコフスカヤ
МАЯКОВСКАЯ
ヴァスターニヤ（蜂起広場）
ПЛ. ВОССТАНИЯ
ホテル「オクチャブリスカヤ」
ГОСТИНИЦА "ОКТЯБРЬСКАЯ"
モスクワ駅
МОСКОВСКИЙ ВОКЗАЛ
スレミャンナヤ通り
Стремянная ул.
ул. Рубинштейна
Владимирский пр.
マールイ・ドラマ劇場
МАЛЫЙ ДРАМАТИЧЕСКИЙ ТЕАТР
レンソヴィエト記念劇場
ТЕАТР ИМ. ЛЕНСОВЕТА
ドストエフスカヤ
ДОСТОЕВСКАЯ
ウラジーミル広場
ВЛАДИМИРСКАЯ ПЛ.
ウラジーミル教会
Владимирская церковь
ウラジーミルスカヤ
ВЛАДИМИРСКАЯ
北極と南極博物館
МУЗЕЙ АРКТИКИ И АНТАРКТИКИ
Кузнечный пер.
F.M.ドストエフスキー博物館
МУЗЕЙ Ф.М. ДОСТОЕВСКОГО
Колокольная ул.
Поварской пер.
Пушкинская ул.
ЛИГОВСКИЙ ПР.
劇場「コメディアン」
ТЕАТР "КОМЕДИАНТЫ"
パン博物館
МУЗЕЙ ХЛЕБА
Коломенская ул.
УЛИЦА МАРАТА
Свечной пер.
Разъезжая ул.
ул. Достоевского
Боровая ул.
ул. Конст. Заслонова
Транспортный пер.
ул. Черняховского
Гончарная ул.
Полтавская ул.
Харьковская ул.
警察史博物館
МУЗЕЙ ИСТОРИИ МИЛИЦИИ
Миргородская ул.
Тележная ул.
S.P.ボトキン像
ПАМЯТНИК С.П. БОТКИНУ
Кременчугская ул.
ул. Хохрякова
ヘルソンスキー横丁
Херсонский проезд
Херсонская ул.
ул. Профессора Ивашенцова
ул. Алекс. Невского
アレクサンドル・ネフスキー広場
ПЛ.АЛЕКСАНДРА НЕВСКОГО
ホテル「モスクワ」
ГОСТИНИЦА "МОСКВА"
大墓地
НИКРОПОЛИ
アレクサンドル・ネフスキー橋
МОСТ АЛЕКСАНДРАНЕВСКОГО
ザネフスキー大通り
Заневский проспект
ペテルブルグ市彫刻博物館
МУЗЕЙ ГОРОДСКОЙ СКУЛЬПТУРЫ
РЕКА МОНАСТЫРКА
トロイツキー（三位一体）聖堂
ТРОИЦКИЙ СОБОР
アレクサンドル・ネフスキー大修道院
АЛЕКСАНДРО-НЕВСКАЯ ЛАВРА
ニコライ墓地
НИКОЛЬСКОЕ КЛАДБИЩЕ
ул. Стахановцев

4
a b c d e f g h i j k l m
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
新スモレンスカヤ川岸通り НОВОСМОЛЕНСКАЯ НАБЕРЕЖНАЯ
スモレンカ川 РЕКА СМОЛЕНКА
カラブリストロイーチェリ橋 МОСТ КОРАБЛЕСТРОИТЕЛЕЙ
プリモールスカヤ ПРИМОРСКАЯ
ジェレズナヴォーツカヤ通り Железноводская ул.
オドエフスキー通り ул. Одоевского
ナリーチナヤ橋 НАЛИЧНЫЙ МОСТ
ミチマンスカヤ通り Мичманская ул.
ул. Кораблестроителей
ул. Нахимова
ナヒーモフ通り
ナリーチナヤ通り
НАЛИЧНАЯ УЛ.
ベーリング通り
ул. Беринга
マルスカヤ川岸通り Морская набережная
プリバルチースカヤ広場 ПРИБАЛТИЙСКАЯ ПЛ.
ホテル「プリバルチースカヤ」 ГОСТИНИЦА "ПРИБАЛТИЙСКАЯ"
ナリーチヌイ横丁 Наличный пер.
マールイ(小)大通り МАЛЫЙ ПР.
ガレールヌイ横丁 Галерный проезд
ガレールナヤ港湾(グレブノイ運河) Галерная гавань (Гребной канал)
シキペルスキー水路 ШКИПЕРСКИЙ ПРОТОК
シキペルスキー水路 Шкиперский проток
シキペルスキー運河 ШКИПЕРСКИЙ КАНАЛ
メモリアル・コンプレックス潜水艦「ナロダヴォーレツ」
МЕМОРИАЛЬНЫЙ КОМПЛЕКС ПОДВОДНАЯ ЛОДКА "НАРОДОВОЛЕЦ"
展示コンプレックス「レンエクスポ」
ВЫСТАВОЧНЫЙ КОМПЛЕКС "ЛЕНЭКСПО"
ナリーチナヤ通り Наличная ул.
オポチーニン通り Опочинина ул.
ガヴァンスカヤ通り Гаванская ул.
カルターシヒン通り Карташихина ул.
シェフチェンコ通り ул. Шевченко
ヴェセーリナヤ通り
中ガヴァンスキー大通り СРЕДНЕГАВАНСКИЙ ПР.
オポチーニン庭園 ОПОЧИНИНСКИЙ САД
シキペルスキー庭園 ШКИПЕРСКИЙ САД
フェリー・ターミナル「海の駅」 МОРСКОЙ ВОКЗАЛ
海の名誉大通り ПЛ. МОРСКОЙ СЛАВЫ
ホテル「マルスカーヤ」 ГОСТИНИЦА "МОРСКАЯ"
フィンランド湾
ФИНСКИЙ ЗАЛИВ
コジェヴェンナヤ・リーニヤ Кожевенная линия
スモーレンスコエ墓地(ルーテル派) СМОЛЕНСКОЕ КЛАДБИЩЕ (лютеранское)
キム大通り проспект Кима
キリスト復活教会(アルメニア) ЦЕРКОВЬ ВОСКРЕСЕНИЯ ХРИСТОВА (АРМЯНСКАЯ)
「デカブリスト島」墓地 КЛАДБИЩЕ "ОСТРОВ ДЕКАБРИСТОВ"
アルメニア墓地 АРМЯНСКОЕ КЛАДБИЩЕ
復活教会 ВОСКРЕСЕНСКАЯ ЦЕРКОВЬ
ペテルブルグ人形博物館 ПЕТЕРБУРГСКИЙ МУЗЕЙ КУКОЛ
スモレンスキー橋 СМОЛЕНСКИЙ МОСТ
カムスカヤ通り Камская ул.
スモレンスカヤ聖生神女教会 ЦЕРКОВЬ БОЖИЕЙ МАТЕРИ СМОЛЕНСКОЙ
クセーニエ礼拝堂 ЧАСОВНЯ БЛАЖЕННОЙ КСЕНИИ
スモーレンスコエ墓地(ルーテル派) СМОЛЕНСКОЕ КЛАДБИЩЕ (лютеранское)
ウラリスカヤ通り Уральская ул.
ウラル橋 УРАЛЬСКИЙ МОСТ
ブラガヴェーシェンスカヤ教会 БЛАГОВЕЩЕНСКАЯ ЦЕРКОВЬ
ヴァシリエオストロフスカヤ(ヴァシーリー島) ВАСИЛЕОСТРОВСКАЯ
サチーラ劇場 ТЕАТР САТИРЫ
マールイ(小)大通り МАЛЫЙ ПР.
スレードヌイ(中)大通り СРЕДНИЙ ПР.
ボリショイ(大)大通り БОЛЬШОЙ ПР.
S.M.キーロフ文化会館 ДВОРЕЦ КУЛЬТУРЫ ИМ. С.М. КИРОВА
庭園「ヴァシーリー島」 САД "ВАСИЛЕОСТРОВЕЦ"
聖生神女昇天(ウスペーニエ)教会 ХРАМ УСПЕНИЯ ПРОСВЯТОЙ БОГОРОДИЦЫ
シュミット中尉川岸通り НАБ. ЛЕЙТЕНАНТА ШМИДТА
鉱山大学 ГОРНЫЙ УНИВЕРСИТЕТ
大ネヴァ川 БОЛЬШАЯ НЕВА
ジェーツカヤ通り Детская ул.
カナレーチナヤ通り Канареечная ул.
コサーヤ・リーニヤ(線) Косая линия
マスリャヌイ運河 Масляный канал
4-5番線(リーニヤ) 4–5-я линии
6-7番線(リーニヤ) 6–7-я линии
8-9番線(リーニヤ) 8–9-я линии
10-11番線(リーニヤ) 10–11-я линии
12-13番線(リーニヤ) 12–13-я линии
14-15番線(リーニヤ) 14–15-я линии
16-17番線(リーニヤ) 16–17-я линии
18-19番線(リーニヤ) 18–19-я линии
20-21番線(リーニヤ) 20–21-я линии
22-23番線(リーニヤ) 22–23-я линии
24-25番線(リーニヤ) 24–25-я линии
26-27番線(リーニヤ) 26–27-я линии
28-29番線(リーニヤ) 28–29-я линии

エラーギン島
ЕЛАГИН ОСТРОВ
大ネフカ川
БОЛЬШАЯ НЕВКА
カーメンヌイ島
КАМЕННЫЙ ОСТРОВ
S.M.キーロフ記念スタジアム
Стадион им. С.М. Кирова
クレストーフスキー島
КРЕСТОВСКИЙ ОСТРОВ
小ネフカ川
МАЛАЯ НЕВКА
中ネフカ
СРЕДНЯЯ НЕВКА
アプテーカルスキー島
АПТЕКАРСКИЙ ОСТРОВ
ペトローフスキー（ピョートル）島
ПЕТРОВСКИЙ ОСТРОВ
ヴィーボルスカヤ・ストラナー
ВЫБОРГСКАЯ СТОРОНА
ヴィーボルスカヤ
ВЫБОРГСКАЯ
ペトログラーツカヤ
ПЕТРОГРАДСКАЯ
ペトログラーツカヤ・ストラナー
ПЕТРОГРАДСКАЯ СТОРОНА
チカーロフスカヤ
ЧКАЛОВСКАЯ
デカブリスト島
ОСТРОВ ДЕКАБРИСТОВ
ゴーリカフスカヤ
ГОРЬКОВСКАЯ
レーニン広場
ПЛ. ЛЕНИНА
フィンランド駅
ФИНЛЯНДСКИЙ ВОКЗАЛ
ペトログラーツキー島
ПЕТРОГРАДСКИЙ ОСТРОВ
小ネヴァ川
МАЛАЯ НЕВА
プリモールスカヤ
ПРИМОРСКАЯ
スポルチーヴナヤ
СПОРТИВНАЯ
ペトロパヴロフスク要塞
ПЕТРОПАВЛОВСКАЯ КРЕПОСТЬ
ザヤーチー（兎）島
ЗАЯЧИЙ ОСТРОВ
スヴェルドロフスカヤ河岸通り
СВЕРДЛОВСКАЯ НАБ.
アルセナーリナヤ河岸通り
АРСЕНАЛЬНАЯ НАБ.
スモーリヌイ
СМОЛЬНЫЙ
ネヴァ川
НЕВА
タヴリーダ宮殿
Таврический дворец
チェルヌィシェフスカヤ
ЧЕРНЫШЕВСКАЯ
夏の庭園
Летний сад
エルミタージュ
ヴァシリエオストロフスカヤ
ВАСИЛЕОСТРОВСКАЯ
マールイ（小）大通り
МАЛЫЙ ПРОСПЕКТ
スレードニー（中）大通り
СРЕДНИЙ ПРОСПЕКТ
ボリショイ（大）大通り
БОЛЬШОЙ ПРОСПЕКТ
芸術アカデミー
Академия художеств
メンシコフ宮殿
Меншиковский дворец
スパース・ナ・クラヴィー教会
Храм Спаса на Крови
参謀本部
Главный штаб
カザン聖堂
Казанский собор
ガスチーヌィ・ドヴォール
ГОСТИНЫЙ ДВОР
ネフスキー・プロスペクト
ネフスキー大通り
НЕВСКИЙ ПР.
ヴァスターニヤ広場
ПЛ. ВОССТАНИЯ
イサーク聖堂
Исаакиевский собор
アドミラルチェイスキー（海軍省）島
АДМИРАЛТЕЙСКИЙ ОСТРОВ
鉱山大学
Горный университет
展示コンプレックス「レンエクスポ」
Выставочный комплекс "Ленэкспо"
「新オランダ島」アンサンブル
Ансамбль "Новая Голландия"
ユスーポフ宮殿
Юсуповский дворец
マリインスキー劇場
Мариинский театр
マリヤ宮殿
Мариинский дворец
アレクサンドリンスキー劇場
Александринский театр
スパースキー島
СПАССКИЙ ОСТРОВ
マヤコフスカヤ
МАЯКОВСКАЯ
ドストエフスカヤ
ДОСТОЕВСКАЯ
ウラジーミルスカヤ
ВЛАДИМИРСКАЯ
モスクワ駅
МОСКОВСКИЙ ВОКЗАЛ
フェリーターミナル「海の駅」
МОРСКОЙ ВОКЗАЛ
ヴァシーリー島
ВАСИЛЬЕВСКИЙ ОСТРОВ
マチソフ島
МАТИСОВ ОСТРОВ
ニコライ聖堂
Никольский собор
サドーヴァヤ
САДОВАЯ
センナヤ広場
СЕННАЯ ПЛОЩАДЬ
アレクサンドル・ネフスキー広場
ПЛ. АЛЕКСАНДРА-НЕВСКОГО
アレクサンドル・ネフスキー大修道院
АЛЕКСАНДРО-НЕВСКАЯ ЛАВРА
フィンランド湾
ФИНСКИЙ ЗАЛИВ
ベーリィ（白）島
БЕЛЫЙ ОСТРОВ
グトゥエフスキー島
ГУТУЕВСКИЙ ОСТРОВ
プーシキンスカヤ
ПУШКИНСКАЯ
ヴィチェプスク駅
ВИТЕБСКИЙ ВОКЗАЛ
工科大学
ТЕХНОЛОГИЧЕСКИЙ ИНСТИТУТ
リーゴフスキー・プロスペクト
ЛИГОВСКИЙ ПР.
バスターミナル
АВТОВОКЗАЛ
オブヴォードヌイ運河
ОБВОДНЫЙ КАНАЛ
バルチースカヤ
БАЛТИЙСКАЯ
バルト駅
БАЛТИЙСКИЙ ВОКЗАЛ
フルンゼンスカヤ
ФРУНЗЕНСКАЯ
ЛИТЕЙНЫЙ ПРОСПЕКТ
СУВОРОВСКИЙ ПР.

METRO

ПЕТЕРБУРГСКИЙ МЕТРОПОЛИТЕН

ПР. ПРОСВЕЩЕНИЯ PR. PROSVESHCHENIYA
ОЗЕРКИ OZERKI
УДЕЛЬНАЯ UDELNAYA
ПИОНЕРСКАЯ PIONERSKAYA
ЧЕРНАЯ РЕЧКА CHERNAYA RECHKA
ПЕТРОГРАДСКАЯ PETROGRADSKAYA
ГОРЬКОВСКАЯ GORKOVSKAYA

ДЕВЯТКИНО DEVYATKINO
ГРАЖДАНСКИЙ ПР. GRAZHDANSKIY PR.
АКАДЕМИЧЕСКАЯ AKADEMICHESKAYA
ПОЛИТЕХНИЧЕСКАЯ POLITEKHNICHESKAY
ПЛ. МУЖЕСТВА PL. MUZHESTVA
ЛЕСНАЯ LESNAYA
ВЫБОРГСКАЯ VYBORGSKAYA
ПЛ. ЛЕНИНА PL. LENINA
ЧЕРНЫШЕВСКАЯ CHERNYSHEVSKAYA

КОМЕНДАНТСКИЙ ПР. KOMENDANTSKIY PR.
СТАРАЯ ДЕРЕВНЯ STARAYA DEREVNYA
КРЕСТОВСКИЙ ОСТРОВ KRESTOVSKY OSTROV
ЧКАЛОВСКАЯ CHKALOVSKAYA
СПОРТИВНАЯ SPORTIVNAYA

ネフスキー・プロスペクト/ガスチーヌィ・ドヴォール
НЕВСКИЙ ПР. NEVSKY PR.
ГОСТИННЫЙ ДВОР GOSTINY DVOR
ПЛ. ВОССТАНИЯ PL. VOSSTANIA
МАЯКОВСКАЯ MAYAKOVSKAYA
ПРИМОРСКАЯ PRIMORSKAYA
ВАСИЛЕОСТРОВСКАЯ VASILEOSTROVSKAYA
СЕННАЯ ПЛ. SENNAYA PL.
САДОВАЯ SADOVAYA
ДОСТОЕВСКАЯ DOSTOEVSKAYA
ВЛАДИМИРСКАЯ VLADIMIRSKAYA
ПЛ. АЛЕКСАНДРА НЕВСКОГО I PL. ALEXANDRA NEVSKOGO I
ПЛ. АЛЕКСАНДРА НЕВСКОГО II PL. ALEXANDRA NEVSKOGO II
ТЕХНОЛОГИЧЕСКИЙ ИНСТ. TEKHNOLOGICHESKIY INST.
ЛИГОВСКИЙ ПР. LIGOVSKIY PR.
БАЛТИЙСКАЯ BALTIYSKAYA
ПУШКИНСКАЯ PUSHKINSKAYA
НОВОЧЕРКАССКАЯ NOVOCHERKASSKAYA

НАРВСКАЯ NARVSKAYA
КИРОВСКИЙ ЗАВОД KIROVSKIY ZAVOD
АВТОВО AVTOVO
ЛЕНИНСКИЙ ПР. LENINSKIY PR.
ПР. ВЕТЕРАНОВ PR. VETERANOV

ФРУНЗЕНСКАЯ FRUNZENSKAYA
МОСКОВСКИЕ ВОРОТА MOSKOVSKIE VOROTA
ЭЛЕКТРОСИЛА ELEKTROSILA
ПАРК ПОБЕДЫ PARK POBEDY
МОСКОВСКАЯ MOSKOVSKAYA
ЗВЕЗДНАЯ ZVEZDNAYA
КУПЧИНО KUPCHINO

ЕЛИЗАРОВСКАЯ ELIZAROVSKAYA
ЛОМОНОСОВСКАЯ LOMONOSOVSKAYA
ПРОЛЕТАРСКАЯ PROLETARSKAYA
ОБУХОВО OBUKHOVO
РЫБАЦКОЕ RYBATSKOE

ЛАДОЖСКАЯ LADOZHSKAYA
ПР. БОЛЬШЕВИКОВ PR. BOLSHEVIKOV
УЛ. ДЫБЕНКО UL. DYBENKO

地図記号

 建築記念碑

 博物館

  教会

 地下鉄

 鉄道駅

 バス・ターミナル

 フェリー・ターミナル

 港

 ホテル

  劇場

 スポーツ競技場

ユニークな
アクソノメトリック図
市内地図と建築物

劇場

エルミタージュ
ロシア美術館
（館内地図付）

お土産

ロシアの古都散策

ISBN 5-9663-0031-3

ロシア料理
飲み物